有島武郎全集　第五卷

札幌を去るに際して

明治三十四年六月

第五巻目次

一九〇五年

ブランド

一

北歐の一孤客イブセン、ある夜羅馬を逍遙してサン・ピエトロ寺院の前を過り、その大伽藍の居然雲霄を摩して聳ゆるを見、アリッキヤの窟居に歸るや、マセドニヤ王フィリップの后が、龍化せるジュピターを抱くと夢みて歴山大王を孕みし如く、この大劇曲「ブランド」を産み出したりと世は傳ふ。時は千八百六十五年、處は南歐の一古國。節は盛夏、居は逆旅。試みにこの一卷を繙き行き、マートル、蘆薈の花香むせぶばかりなる烈日の下、無花果、橄欖の潤葉層々の紫影を投ぐる窓邊に、鐵筆を呵して、フォードの暗翳、雪山の頽嵐を描き、現代の文明に向つて峻絶烈絶なる疑惧と批判とを投じたる著者の風貌を想見し來れば、意味深き一幅の畫圖を展き見るの感なきにあらずや。我等は一層精邃なる凝視の力を有せざる可らず。我等が稱して平板單調他の奇なしと云ふ現代の散文的生活の中にも、若し透徹の眼だにあらば、我等の生活は忽如として色彩豐かなる一場の畫圖たるべし。

二

中庸――この謬られ易き贅語の生れたるが故に、人は思はざるに幾度か蹉跌しけん。ノルウェーの北方なる一角

に一小市あり。その誇りとする所は所謂中庸の德の奉戴と傳播とにして、これを以て社會生活の凡ての機關は油(あぶら)せられたり。世界同胞主義は國家の隆興を毀損せざるの範圍に於て唱道せらるべし。人道主義の眞理は國家主義と牴觸せざるの範圍に於て主張せらるべし。信仰は價値にあらずして報酬なり。道義は條件にあらずして手段なり。人は少しく泣かざる可らず、而して適度に笑はざる可らず。人は又能ふだけ多く獲得す可し。仁慈は美德なり。身を殺し財を竭さゞる圈内に於てこれを爲すべし。利己は科學の認むる眞理なり。されど社會の指彈を受くるに至らざるを以て限界とすべし。半殺しにせる良心と、衣着せたる野性とを以て、美名の下に事々に當れ。何事も巧みに讓歩せよ。我等は先づ愛を解せざる可らず。愛の故に汝の意志暗まば許さる可し。愛の故に汝の良知暗まば許さる可し。此の如くしてこの一小市は上辷りしつゝ歩を進む。肉を切つて骨に入る事なく、骨を割つて髓に徹する事なし。

　この市をその平和なる墮落の深淵に投ぜんとする三箇の大なる舂石(うすいし)あり。愛なり。人情なり。讓歩なり。十の中七を得て、一面には滿足し、他面には不平を感ずる心なり。人の疵(きず)を輕く癒やし、その然らざる時に安し〳〵といふ態度なり。互に己れが非を掩はんが爲めに人の非を免し、己れの名を擴めんが爲めに人の名を宣ぶる交際法なり。輕く舊來の習慣に粘着して、又輕く現代の新思想に接觸する處世術なり。努力なき生活にして、充實せる生命は地を拂ひたり。

　この市に饑饉起りぬ。市長は牧師と共に救濟に忙(せは)しく、市民蹣跚(まんさん)として四方より蝟集し來り、餓狼のはしたなさもて食を爭ふ。

三

ブランドと云へる僧あり。その鞏固なる意力は、「内的の事物に集りて、何者もこれを遊樂に誘ふ由なく」、幼稚より彼を孤獨となしぬ。夙に父を亡ひ、金錢を貪り蓄ふるをこれ事とするその母とは相乖きぬ。彼に殘されたるは唯一つの熱烈なる信仰のみ。「凡てか無か」、これなり。

フョードの岸頭に饑ゑたる市民が救濟を叫べる時、ブランドは市の背後なる絕壁の上にありき。

四

ブランドの行ける道に一人の農夫とその子と從ひぬ。彼等は元ブランドの東道たりしが、雪野の中に道を失し、共に今斷崖を跨ぎて懸れる一大薄氷の上にあり。耳を傾くれば脚下遠き所に嘈々として大瀑のたぎり落つる音を聽く可し。農夫は死に瀕せるその愛娘をフョードの邊なる市に見んが爲めに來れるなれども、身の薄氷の上にあるを知るに及びて、その脚は復た動かず。

ブランドは敢往二人に跟隨せよと麾く。農夫戰慄して應ふらく「この氷上を横ぎらんとするは奇蹟を行はんとするなり」。ブランド云ふ、「堅く信ぜよ、奇蹟も亦行はれん」。農夫步を囘らさんとして更に曰く、「さなり嘗ては日常の茶飯事として奇蹟の行はれし時もありき。されど今の時は則ち然らざるなり」と。ブランド遂に農夫を捨てゝ去る。以爲らく一己がなし得る以上を欲求せざるものに助力を提供するは遂に無益なり」と。

五

さなり農夫は獨り往く能はざるものなり。彼が少しく離れて步むは、孤獨を好むが故にあらず、莊嚴なる自然の寂寥と親しむに堪へざればなり。彼は傳說に執着す。何の故ぞ。そは傳說は幾多の手より手に渡されて垢光り

したればなり。こゝに人臭の紛々たるものあればなり。その內容の如何は固より問ふ所にあらず。彼は信仰を尊信する事を知つて豫言を恐郤す。畢竟豫言は多數に逆ひたる一人の聲にして、信仰は群集に共通せる一箇の假定なればなり。彼は必ず指導者を要す。その眼は指導者を見る事を得れども、遂に眼前に橫へられたる坦々たる大道を見るに由なきなり。

農夫は又、指導者を要するが如く隨件者を要す。その意志は指導者に屈從して、全體として活動せんには一味の驕慢を殘せるが故に、他人者の意志を屈服して、酬ゆべからざる損失を酬いんと試むるなり。これこの農夫が一面卑屈の性を示して、一面惡劣なる壓制者なる所以なり。ゲーテの所謂、「全く支配する事も、又全く服從する事もなし得ざる不用の人物」なり。

フォードの彼方にはその愛娘病みて死に垂んとし、死前必ずその父を見んと庶幾へり。彼は隨件者としてその一子を拉し、ブランドに從つて嶮路を冒したりしが、危害の將に己れに及ばんとするに及びては、その隨件者を保護するの美名の下に、神聖なる義務を無視して、指導者なるブランドより脫逸し、日來の迷信には似もやらず、恬然として奇蹟の存在をすら疑ひたり。

ブランドはこの農夫を敵と呼べり。

六

北國の習ひとして盛夏にも山上には氷原あり。しかも風陣一轉すれば、和煦たる春日の觀をなす。ブランドが濃霧を排し、薄氷を踏みてなほ猛進する彼方に、陽を浴びたる草野ありて、和煦たる日光さやかにこれを照らせり。脚下を見やるに計らざりき戀の歌を唄ひつゝ舞ひもつれたる若き一對の男女あり。知らずしてブランドが過

り來れる氷渠の上に分け入らんとす。ブランド警めてその急を報じ、更に眼を定めて看れば、アグネスてふ少女を伴へる青年アイナアはこれ彼が竹馬の友なりき。

さなり竹馬の友なりき。されど今、この二人の間には架すべからざる鴻溝あり。アイナアは畫人として、世を酒に溶きて、これを杯の中に眺むる藝術の人なり。世は又彼を容るゝにやぶさかならざりき。鄕黨は彼を迎へて贈るに祝杯と花環とを以てし、妙齡可憐のアグネスは彼が華かなる心を喜びぬ。かくて婚約新たに成れるこの二人の果報者は、己が心の暖さをしるべとして、船に乘じて南歐花深きの地に旅せんとするなり。ブランド彼等に告げて曰く、我も亦同舟の客たらんとするものなり。アイナア驚喜して、何の故に安く行くかを問ふ。ブランド爲めにアイナアが稱する神死せるが故に、これを葬らんが爲めに船に上らんとするものなるを告ぐ。アイナアは藝術家なり。彼が住める世の、常に華麗快適なるを要するの外、他に一の求むべきものあらず。縱令今の世に神死したりとするも、徒らにこれを發きて鞭撻を加ふる亦何の益する所ぞ。死したりともこれを神とするに何の害ぞ。ブランドその心を知り、これに應じて曰く、「試みに君の描かんとする神を云はんか。鬚髯白銀の絲の如く白く、愛憐濃やかなれども、偶々夜半兒童を脅かすに足るのいかめしさは備ふるなる可し。……舊教の徒は救世主をマリヤの胸に倚る嬰兒となしたるに、君は神を本卦歸りせんとする老朽の夢想家と做し了せんとす。されども我が神は異れり。

「わが神は異れる神なり。

わが神は嵐なり。君の神は休息なり。

わが神は妬む神なり。君の神は土塊なり。

わが神は凡てを愛するに、君の神の心は鈍りたり。

わが神はハーキュリースの如く若くして、
生命の殘滓を喜び啜る頽齡にはあらず。
ホレブの頂にてモーゼの傍に、
侏儒の生める侏儒の傍に立てる如く、
燃ゆる荊の中に神そゝり立ちし時、
その聲は光くらめく夜に鳴りはためけり。
ギベオンの谿に彼は目を止めぬ。
數知れぬ奇蹟を彼は爲して、
君の如く――この世病みほうけずば、
更に數知らぬ奇蹟を爲さんとするなり。」

アイナアのこれに對する答は簡單なり。「例へばブランド地獄をも覆さば覆せ。わが神は昔のまゝのわが神たるべきのみ」。かくて兩者は相異れる道を擇んで、フョードに急ぐべく相別れぬ。アグネスはブランドの去れる後、物思はしげになりて遂にアイナアに曰ふ。「君は見たりしや」、アイナア「何を」、「物言へる時、巍然としてそゝり立てるブランドの姿を」。

七

アイナアはアグネスを伴ひたり。

己れに跪拜するものは崇拜者を得ざれば生く能はざればなり。彼が崇拜者を失へる時は無情冷酷なる道德家と

なるの時なり。自我主義者の存在には二途あり。一つは獻身的なる崇拜者を得るにあり。而して悲慘なる逆說よ、最も優良なる性格を有するものが、屢々この主我的性格の前に盲目となるなり。かくてオフィリヤはハムレットの前に、マーガレットはファウストの前に、頽然として盲目となり了んぬ。一は彼が全く崇拜者を失へる時、冷酷無情なる道德家となるにあり。これ主我主義者がその威力の高潮に達するの時なり。彼はその唾棄しつべき非情と不干涉とを以て、拒むべからざる暴力と變ずるなり。マクベス夫人はかくの如くなりき。ヘダ・ガブラーはかくの如くなりき。

その何れなるにせよ、自我主義者アイナアの欲求する所は唯一つなり。自己の滿足(自己の向上にはあらず)これなり。彼と社會との調和は、社會が彼を謳歌する間にのみ存す。社會にして謳歌せんか。彼はその社會が驀地に地獄の關門を目がけて猪突しつゝあるとも、手を拱いてこれを傍觀して平然たるを得るなり。

可憐なるアグネスはその犧牲たりき。ブランドは獻身者アグネスをこの主我主義者の掌握の中より救ひ出さゞる可らず。

かくてブランドはアイナアを敵と呼べり。

八

ブランドはなほ嶮難を排して道を進め、崖角より下瞰すればフョードに瀕して建てられたる一連の市、指呼の間にあり。これ彼が故鄕にして、一葉の舟も、一棟の家も、共に彼が二十年の夢を喚起せざるものなし。殊にかしこ海に近き隴圃の間に立てる赤壁の農屋こそは、寡婦となれる貪慾の母が今も住める忌むべくもなつかしき故屋ならずや。衢路に群りつゝ蠢爾として動き行くは、かの古色蒼然たる寺院に詣づる今も昔も變らぬ人々にして、

主の祈禱の中「我等に日々の糧を今日も與へ給へ」といへる一節をのみ聲高く誦する群集なり。
微風だに動かじと見ゆるばかり沈滯せる彼處の生活、遂に居るに堪へんや。ブランドはかく思ひて踵を回さんとする時、端なく一顆の石塊、ブランドをかすめて飛び來るに遇ふ。見上ぐればゲルドの爲せる業なり。
ブランドはゲルドを唯十五ばかりなる野鳥の如き少女と見たるのみ。されど彼女はブランドと全く緣なき少女にはあらざりき。ブランドの母猶ほ處女たりし時、一人の青年ありてこれに戀せしが應ぜざりしに、飄然としてその市より姿を消し、往く所を知らざるもの數年。一日忽如として地より湧ける如く再びその市に現はれたりし時は、乞食せるジブシーを妻とせる浮浪の徒なりき。ゲルドは卽ちこの二人の子にして、やがてその父母の再びその市より韜晦し去りし後、この少女は人寰と相離れ、獨りこの山中にさまよひ、朔風の去來するが如き生を營めるなり。
ゲルドの石を投じたるはブランドを目してにはあらず。一羽の大隼を目がけたるなり。ブランドは大隼の飛び去る姿を認め得ざりしが、ゲルドは黝黑の眸に黃色の輪を描ける眼烱々たる鷙鳥なりと語る。隼はゲルドを搏たんとし、ゲルドは隼を殺さんとするなり。
ブランド問ふにゲルドの至らんとする所を以てす。ゲルドは寺院に赴かんとするを云ふ。ブランドの志す所も亦寺院なり。されどゲルドが意味する寺院は、フョードに瀕せるそれにはあらず。この懸崖の更に〳〵高き所、衆人の呼びて「氷の寺」と稱するものにして、巨巖呀然として自然の祠をなし、垂氷四時絕えず、時に岩石轉び落ちてその危險容易に近づくべからずと。ブランドその行の無謀を警むるや、ゲルド言下に答ふらく、「市の寺院には腐敗あり、恐れざる可らず」と。既にして鷙鳥再び襲ひ來れるが如し。ゲルド「隼の力勢侮り難し。これを避け得る所唯氷の寺あるのみ」とブランドに告げ呼ばはりつゝ、飄然として風の如く走り去りぬ。

九

ゲルド、隼と共にあり。

農夫のその子に於ける、アイナアのアグネスに於ける關係は、直ちに引いてゲルドと隼との關係となす可らざるに似たり。上二者にありては、その主と從とは相親めるに反し、ゲルドと隼とにありては相敵視すればなり。これされど單に皮相の觀のみ。その子を害ふ事最も甚しきは實に農夫にして、アグネスの靈性を暗まさんとするものは、遂にアイナアなるを思はゞ、ゲルドはその從と葛藤するの點に於て對者を害ふの罪却つて前二者よりも輕きものあるを看取せざる可らず。

彼女は父母を失ひ去りたる孤兒なり。宛ら地より湧き出でたるが如く生じ來りて、孑然として人寰と相距りて住めり。彼女は農夫の如く不即不離の陋劣なる態度に居らず。又アイナアの如く內部的に人と交渉なき放恣の世界に住まず。彼女には不拔なる企圖あり。即ち「氷の寺」に參して天啓の讃美と說教とを聞かん事なり。唯その心情の無思慮と亂雜とを奈何すべき。

ブランドはゲルドと語りてこれを詰責する事農夫アイナアに於けるが如き事能はざりき。ゲルドの所言、時にブランドの口をつぐましむる事なきにあらず。しかもゲルドの爲す所悉く偶發、その背後に何等の統一なく何等の目途ある事なし。彼女は何の故に隼を殺し、何の故に氷の寺に詣でんとするや。氷の寺の建立と、隼の死と、現實の世界との間には何の脈絡あり、何の交渉ありや。此に於てか彼女は一個渾沌たる存在の盲動に過ぎざらんとす。

ブランドはゲルドを敵と呼べり。

一〇

喪心(faint heart)・輕心(light heart)・荒心(wild heart)の三大勁敵は、今現然としてブランドの前に現はれぬ。前後に戰。上下に戰。是等の凶靈を滅盡して世は甫めて眞の健康に還るべし。彼は事業を感ぜり。この三角同盟をなせる敵に對して、彼は敢然として立たざる可らず。

「心よ、立ちて身づくろひし、腰より劍を拔け、天を嗣ぐものゝ爲めに戰はるべき戰ぞ」

一一

喪心。輕心。荒心。

智。情。意。

過去。現在。未來。

道德。藝術。自然。

ヘブライズム。ヘレニズム。ニヒリズム。

歷史。生活。革命。

愚なり、この如き揣摩！　ブランド自らこの愚を犯せり。何故に農夫を喪心と呼び、アイナアを輕心と呼び、ゲルドを荒心と呼ぶの愚をなせしや。一人の圃上に立てるものを捕へ來りてブランドの傍に置き、これを農夫と呼び、一人の少女に好愛せらるゝものを捕へ來り、更に一人の放浪度なきものを捕へ來て、彼にアイナアと命じ、これにゲルドと命ず。その名何ぞよき。

農夫。アイナア。ゲルド。廣漠無際なる名よ。幽遠神妙なる象徴よ。名に勝りてよきもの復（また）ありや。人をしてその名に屬性を附する事勿らしめよ。人をして名の領域を狹めしむる事勿らしめよ。

二

悲劇「ブランド」はその主人公がこの三大敵と苦闘して遂に斃れたる哀史なり。我をして暫くその結末に一瞥を與へしめよ。

その悲劇たる所以は、ブランドが全然この三大敵に壓服せられたるが故にあらず。反對にブランドはこの三者に向つてその目的を達成せり。卽ち彼は農夫よりその子を救ひ、アイナアよりアグネスを放ち、ゲルドが追へる不逞の隼をも、遂にその强硬なる意志の下に置きぬ。フォードに臨める市の住民等は、市長と牧師とを捨てゝブランドの崇拜者となり、アグネスはアイナアを去つてブランドの妻となり、隼は最後にブランドを誘惑して却つてブランドの爲めに破れぬ。三大敵は共にブランドにその從を奪ひ去られたるなり。

三大敵はかくて遂にブランドの軍門に來つて降を乞ひしや。あらず。ハーキュリーズと戰へるヒドラの如く、斬られたる首は直ちに首を生じて、再びその毒威を逞うし來るなり。ブランド渾身の力を籠めてこの三大敵を撲（う）てば、彼等悉く斃れたるが如し。しかもその骸は再び生きて惡笑しつゝブランドに襲ひかゝるなり。

ブランド、悉く敵の武器を奪ひ去れる時、敵は異（あや）しむ可し、最も强し。

これ悲劇なり。これ我等が目睹してしかも屢ゝ悟らざるの悲劇なり。これ永遠に人生に暗翳を投ずる悲劇の骨髓なり。これ徹入すべからざる凡ての悲劇の樂屋なり。

イブセンはブランドに於てこの鍵を握りたるなり。

一三

饑餓に瀕せる一群の市民の間に立ちて、市長と書記とは餉糧の分配に忙殺せられ、アイナアとアグネスと亦あつて、その財嚢を傾け盡し、更に旅程を續けんには、僅かに典質すべき一箇の時計あるのみ。人は咸な協力同心して相濟ふの道を講ぜり。

この時ブランド、山を下りて來り會す。市長は勸進に慣れし巧みなる口辯の力を振ひ、ブランドに說くに喜捨を以てし、アイナア亦自己の義務を果し了れる滿心を携げて義捐を勸む。ブランド峻拒して云ふ、「若し飢餓を救ひ得べくんば、渾身の血肉を披瀝するも復た惜まじ。されどこの群衆に布施するは罪を犯すなり。艱難もて自らを強くする能はざるものは、遂に救濟に値せざるものなり」と。餓死に瀕したるの民誰かこれを聞いて憤らざらん。彼等はブランドを搏つべく石をすら拾へり。

この時一女あり。狂氣の如く髮振り亂して急坂を奔馳し來り、氣息奄々として云ふ所に依れば、フョードの彼方に彼女はその良人と三子と共に住めりしが、飢餓の爲めに食餌窮乏し、已れが乳枯れ果てたれば、嬰兒の苦悶遣る所なかりしを見るに忍びず、父は刺してこれを殺し、罪の呵責に堪へずして自裁せしが、肉體は生くるの望なく、靈魂は恐愧の爲めに未だ死せず。「僧侶、僧侶は在し給はずや。彼の死する前、行きて罪の許されたるべきを宣明し給ふ僧侶は在さずや」。これ彼女が悲喚哀號なり。

鬣の露打ち拂ひて立てる獅子の如く、ブランドは立ちてこゝに事業を感ぜり。彼が唾手してなすべきの事は目前にあり。折しも頽嵐フョードを橫ぎつて到り、波浪遽かに洶湧して見る眼もすさまじく、萬死を賭するにあらざ

れば、船を水上に行るべからず。しかもブランドは意を決して舟に上り一人の助手たるべきものを麾けども、絶えて應ぜんとするものなし。依りてかの哀願度なき女を呼びて彼に從ひ來らしめんとす。彼女亦逡巡して曰く、「我若し死せば生殘れる二兒を如何すべきや」と。義憤せる僧侶は舌打ならして云ふ、「砂の上に築かんとするものよ」と。

アグネスは默してブランドが爲す樣を見守りつゝ感激の情に堪へず。決然としてアイナアを指して云ふ、「玆に一人の勇氣あり誠意ある男子あり。願くは彼を伴へ」。そを聞きたるアイナアは顏色を變じつゝ、「アグネスを得てよりわが生は新しく甘し。我は彼女の爲めを思ふ時生死を賭するに堪へず」と、美しき遁辭もてその怯懦を裹み、人間一生の中、二度とは來るまじき大事の機會を塵の如く擲ち去らんとす。

アグネスの眼は開けたり。二人の間の脆き縁は、宛ら傷める葦の如くちぎれ果てぬ。卽ち滿眼の涙もてアイナアに向つて云ふ、「世界の廣きが如く廣く、世界の遠きが如く遠く、逆潮漲り、大濤打しぶく海原今君と我との間に横はる」と。この最後の宣言を投じ了るや否や、自らかの小舟に投じ、ブランドと共に奔風に向つて必死の纜を解きぬ。

忽如として舟は既に怒濤の中にあり。膽を消して一群の民は固唾を飲めり。

稍ゝありて一人纔かに口を開きて云ふ、「これこそは我等が求むる善知識なれ」と。衆口忽ちにこれに應じて云ふ、「さなり、我等が求めて得ざりし善知識は洵に彼なりき」と。

一四

ブランドは波濤を犯して萬死に一生を幸し、フョードの對岸に渡り得て、自責の爲めに敢て死し得ざる薄倖の

父を慰藉し、晏然として死途に就くの懽びを得せしめぬ。過嵐の跡荒凉たる海添ひのあばら屋の中より彼は瞑想に沈みつゝ首を垂れて出で來れり。

この時一群の人來り近づきて彼に乞ふ「願くは留りてこの地の民を牧せよ。今に至るまで君の說き給へる所を說けるものは少からざりしかど、君のみはそを行ひたり」と。

廣野四圍に人を招く時、誰か窩中に潛むものあらんや。ブランドの目前に橫れる磽确の地は、斷崖に遮られて日を仰ぐ事稀れに、冬には潤寒、夏には濕霧、加ふるに住民稀疎にして鈍劣蠢遲、彼が世界の大耳に訴へ、人生てふ大オルガンを通じて傳へんとする大鵬の志を伸ぶるの地たるに適はず。卽ち聲を勵まして彼等に告げて曰く「汝等自ら我が指導なくんば爲すなきを云ふ。さらば晏然として往け。力なきものは義務ある事なし。若し汝等にしてあるべき道に進む事能はずば、心を盡して唯あるがまゝの者たれば足れり。身魂を擧げて土の人たれ」と。

彼等これを聞きて望を失ひ、悄然として元來し道に歸り去れり。

一五

不圖打ち見やれば、湖岸の舟上に坐してアグネス一人あり。物に聞き惚れたる人の如く、眼を定めて何物をか見すゑたり。ブランド近づきてその故を問へば、眸をも動かす事なく神託を蒙りたる巫女の如く語る。

「大なる地彼處に輝けり。

ありありと空に描かれて、

潮漲り、波浪溢れ、

霧の裡に赫燿たる陽の光を見る。
唐紅の光ある焰、
雲かゝる山の巓にあり。
と見れば果てなき荒野の上、
吹きすさぶ嵐の中に、
椰子の幹ゆがみたわみつゝ、
淋しき影を地に落す所、
新たに成れる世の如く、
生けるものとては更にあらず。
奇しき響その中にどよめき、
一つの聲その心を傳ふ。
『選べ無劫の失か得か。
汝の事業をなしてその痛苦に堪へよ――
汝生命もてこの新世を滿さゞる可らず』と。
わが心の中に、
我は新たなる力の湧き起るを感ず。
我は春の日の臨むを知る。
我は寄せ返す潮を覺ゆ。

我が心は廣く放たれて
世界をもその中に抱く。
一つの聲更に云ふ、
『汝斯世（このよ）に生命を滿たさゞる可らず』と。
凡そ人の遂ぐる凡ての事業、
醒め、さゝやき、振ひ、語りつゝ、
宛ら直下に生れ出づとぞ見ゆる。
我又高く王の座に
『彼』いますと見る――いますと感ず。
『彼』慈悲光に滿ちて我を見る。
晨朝（あした）の氣息（いき）の如くなよめかしき輝きに加へて、
死程に深き哀憐の顔もて。
奇しき聲又も聞こゆ。
『今こそ汝に形あれ。
選べ無劫の得か失か。
汝の事業をなしてその痛苦に堪へよ』と。」

一六

知らずやこれ第二十世紀を生まんとする産褥の聲なるを。我等心耳を澄し手をおき添へて深く聽く時、この聲の密やかに我等にも達し來るを見ざらんや。椰子のみまばらに生ひたる荒野に、新たなる生命を起さんは、時代が我等の衷にありて叫ぶ所なり。荒野とや。荒野は我等の衷にあり。我等の衷に若き地あり、斧鉞、鎌鋤共に未だ入らず。こゝに神聖なる生命の誕生は企てられざる可らず。アダムは新たに生れざる可らず。我等はエリサベスを訪づれ行かんとする處女マリヤの如き畏懼と期待とを以て、新しき生命の出現を待たざる可らず。
我等が希望の何ぞ爾く若くして輝ける。
ブランドはアグネスに於てこの希望の權化を見、新しき決意もて叫べり。

「完全に自己を充實せん事、
これ人間の正しき權威なり。
この他何の庶幾する所ぞ。
(やゝ沈默せる後)
自己を充實するとや。しかも父母傳來の負債をば如何にすべき」。

一七

傳來の負債を如何すべき。ブランドがかく獨語ちつゝ見やる彼方に、老いさらぼへし一人の老婆現はれぬ。その近づけるを見れば豈に計らんやこれ彼が血肉の母ならんとは。この老女なりブランドの雙肩に拂拭すべからざる負債を擔はしめしものは。
ブランドの未だ幼かりし頃なりき。秋の一夜、父死し母は病床にありき。夜に紛れてブランドは父の死床に至

り、物蔭に潜みて、聖書を抱きつゝ、蠟燭の黄なる光の下に横はれる父の眠り何ぞ長きやといぶかれる折りしも、輕き跫音を立てゝ一人の女忍びやかに入り來り、ブランドのあるには心附かずして、死者の衣を探り、更に床中を探り、室内を彼處此處索め盡して、あらん限りの貨幣を奪ひ去れるを見き。これ彼の母なりき。

老いてかくまで墮落し果てたる母にも、その妙齡なる時には又華やかなる夢なきにあらざりき。彼女は一人の若き農夫を愛しぬ。然るにその父彼女に諭して云ふ「若き農夫を捨てゝ他に嫁げ。彼は白頭なれども世故には慣れたり。必ず我が家の財を倍加すべし」と。彼女は美しけれども、愚かしく見ゆる胸中の夢を容易に捨て去りて、唯々として父の意に從ひぬ。

然るに事望みと違ひ、家財は些かも殖えざるに、彼女はその青春を老齡の夫の爲めに犧牲にせざる可らざるの悲境を閲しぬ。彼女の爲すべき唯一事は、徐ろにその夫の死を待ちて、遺產の凡てを奪ふにありき。

かくの如くしてこの母はその靈性を塵に委しぬ。而してその子ブランドの靈性に醫す可らざる傷を與へぬ。今やこの母ブランドに來り會して云ふ「故なくその生命を輕ずる勿れ。そは汝の生命はこの母が付與せしものにして、一族の中生殘せるは纔に汝のみ。更に我が汝に遺すの財を愛護せよ。汝は我が財貨を汝に遺すに酬いて、わが爲めにわが死床に最後の祈禱をなさゞる可らず。我は自ら破棄したる靈魂の爲めに祈るべき善知識を得ん事を期して汝に僧職を選びたるなり」と。

一八

ブランド、フォードの對岸に瀕死の人の床邊に侍して後、俯首してその家を出で來りしは何故ぞ。彼は彼處に殘されたる二孤兒の上を思ひたればなり。二孤兒にパンを與ふる父の亡きに至りしを思へるにはあらず。かの二

孤兒が恐怖の眼を張つて、その父が乳兒を殺し、尋で自ら殺せるを目擊しつゝありしを思ひ、自己幼時の回想より、痛慘の念に驅られたるが故なり。

この素帛の如き二個の靈魂の上に、醜き汚點は深く染められたり。例へばその二兒長じて且つ老い、佝僂して歩むに至るとも、かの汚點は永久に消えず。嗚呼相傳の罪過何處にかその尤めを歸すべき。「我生けり」てふ隻句の中には、山積せる罪の餘蘖あるなり。然るに人は輕き心もて平然として生活の舞臺に跳躍し、永劫に亙りて地球の表面を暗からしむべき行爲を犯し、その子孫に重々の負擔を殘して、恬然として知らざるが如きは何ぞや。

内觀の力鋭敏なるブランドは、この畏懼すべき世相に對して、鐵の如きその頭首を垂れて苦思するを禁ずる能はざりしなり。

一九

然るに何事ぞ。こは又ブランド自身にも免る可らざる運命ならんとは。母は彼の靈魂を四裂せり。しかもなほ强ひるに、謹みてその財貨を護り、死床に侍してその靈を天上に送るの祈をなさん事を以てす。

父母はその脫ぎ捨てたる衣を處理すべき執事を以てその子に擬せんとするや。これ猶且つ忍ぶべし。ブランドは自ら任じて母が殘せる負債を雙肩に擔ふべし。彼女は神によつて附託せられたる靈性を蹂躙し、人々が出生と共に胸中に抱ける神の面影を塵と黴とに委し、嘗ては天に翔けるの翼を有せし靈魂を拉して卑陋の地に陷れしは、皆これその母が神に負へる借債なれども、ブランドは敢て進んでこれを己れが肩上に負ふべし。母の胸中にありて汚され躙られたる神は、彼の意志によりて洗はれて淨く立つべし。そはブランドが爲し得る所なり。されども全く靈魂を失ひ去れるは、これ負債にあらず罪にして、失へるもの先づ悔悛してその復歸を企つるにあらざれば、

救はるべき道はあらず、親子の愛も亦無益なり。

　そを聞きたる母は驚愕していふ、「さらばその悔悛の道は如何にすべき」。ブランド答へていふ「母上の世を去り給ふ時、愛で給ふものは凡てこれを捨て、ヨブの如く灰を被りて墓に入り給へ」。母「かの財貨もか」。ブランド「最後の一厘に至るまで」

　然り、苟も償はんと欲せば最後の一厘に至るまで償はざるべからず。凡てか無か。躊躇するものは立ちどころに滅びん。ブランドは最も酷烈なる言辭もて、最も誠意ある愛着を語れるなり。されど母はこれに耐へざりき。すご／＼と歸り行く姿を目送しつゝ、悵然としてブランドは歎ずらく、

「然り、子は母の近くにあらん。
呼びおこし給はゞ彼必ず聞き漏らさじ。
その手を伸べ給はゞ、その手冷たく朽ち果てたる後なりとも、
なほその子の胸そを抱きしむべし」

二〇

　ブランドの覺醒はその母に遇へる事によりて更に新しき衝動を受けたり。今に至るまで彼は大なる世界に於てのみ大なる事業は行はるべしと思惟せしが、その母に於て渾身の全力を振ふに値する事業あるを知りて、已れに適ひたりと見ゆる舞臺をノルウェー北邊の堆雪の中にも見出し得べきを悟るに至りぬ。世よりは遠く懸隔し、日光幽かに雲を泌み出でゝ、その現はるゝや遲く、その隱るゝや早き谷間の确土(かくど)の中に、彼が家は設けらるべし。劍を拔いて地を斫(き)るてふ壯士の態度は救世の聖業に何の與(あづか)る所かあらん。誠に洵(まこと)に謹みて鍬を握り得るの手は、

これ直ちに贖罪の業に任じ得るの手なり。要は一つの意志あるのみ。意志を將て牌札となし、神の手をしてその上に文字を書かしむるにあり。

想一度びこゝに至るや、ブランドはかの失望して彼より去り行きし一群の村民の懇請に應じ、永くその地に逗りて牧民の事業に膺るの決心を成しぬ。而してアグネス亦ブランドと志を共にせり。アイナア彼女を逐うて來り、甘言喃言具さに誘引の情を致し、そのブランドと共にあるの不幸を主張し、己れに從ひ來るの多福を説きて已まず。

ブランド亦彼女の決意が艱難を經來つて或は渝らん事を恐れ、その生活は晩秋の漸く老いて冬ならんとする寂寞たるものなるを告ぐるや、彼女は毅然として徐ろに立ち上りながら云ふ、「死を經て進まん、死の中に進まん。薔薇の色なせる曙光彼處に見ゆ」と。

二

「ブランド」は最上の瞬間に於ける我なりとイブセンはその友に書けり。彼のこの戲曲を草するや、机上にある玻璃瓶中に一尾の蝎を養ひき。而してこの死毒を裹める小蟲、時に毒液の分泌度を超えんとするに遇ひて悶ゆるを見るや、不平骯髒の詩人は卽ち果實の一片を取つてこれを授與すれば、蝎は驀地にこれに躍りかゝり、毒汁を放射し終りて再び安きものゝ如し。アリッキヤの夏、綠葉層々の影を投ずる空邊、伊太利に特殊なる明瑩火の如き太陽の光の下に筆を呵しつゝ、時々首を囘らしてこの激しき不平兒に果實の小片を與へ、默してその爲す樣を見守りたる彼が風貌想見すべからずや。果然彼は蝎に教へられて曰へり、

「『ブランド』は我が實驗したる(單に觀察したるにはあらず)或る者の結果として現はれたるなり。我が衷心にあ

りて經驗し終りしその者に詩形を賦與して放捨せん事は、我に取りては必要事たり。一たび放捨す、『ブランド』は復た我に興味ある事なし。」

然り蝎はその毒を放射して又關知せざるものゝ如くなりしが、イブセンは遂に家言の放膽を實にする能はざりき。實にイブセンは『死者の復活せる時』を世に出せし晩年に於ても尙一個のブランドに外ならざりしが故なり。

ブランドに於て表徵せられたるイブセンは、或はイブセンが放射したりてふブランドは、自ら知らざる一の使命を帶びて世に臨めり。彼は南方の文明が死に瀕せるを見、南方文明の支配せる民衆が解體せんとするを知れり。世は板を裏返すが如く反轉せざる可らず、彼は少くともこれを感覺せり。而してその宣傳の爲めに一生を賭して立てり。その容(かたち)は日月、その聲は雷霆(らいてい)、その目的の遂行の爲めにはその眼淚を絕ち、その心夢を知らず。動(やゝ)もすれば憤激し、その憤激は夢死の徒を慴伏するに足れり。しかもその世を覆へし人を改めたるの後、何事をなすべきかに至つては自らも茫として知る所なし。偶々彼は民衆を率ゐて神に歸らしむるを說けども、その神の何者なるかは自ら知る所なきなり。この時に當りて彼に理想の閃影を示せる者はかの可憐の處女アグネスなりき。

二三

アグネスが湖畔に獨坐し、眸をも動かさずして獨語せる時、(一五參照)ブランドは始めて幻覺より覺めたる如く自己の立脚地を物色し得たるを感じたり。而してこのアグネスこそイブセンが輕侮已むなき南方文明の中より獲來れる一典型なるに至つては、自然の配合も亦皮肉なりと謂ふべし。南歐の地に着想せられて、更に南歐の臭味を傳へずと稱せらるゝ「ブランド」に、諦視すれば南方の分子明らさまに含蓄せらるゝを了知すべし。農夫然り、アイアナ然り、而してアグネスに至つてはその最たるものなり。

イブセンがその戲曲の構成に必ず相對峙せる二人の女性を用ひ、一は不覊奔放なる現代的女性にして、他は柔順貞眞なる舊世的女性なるは世既に定評あり。而して「ブランド」の女性も亦この二種の性格によつて代表せらる。アグネスとゲルド是れなり。而して謂ふまでもなくゲルドは近代的代表者にして、アグネスは舊文明に屬するものなり。唯この戲曲に於ては近代文明を代表するものは最も原始的に蕪雜粗野の典型に選び、舊文明を代表するものは最も精練せられたる優秀の典型に選びたるの點に於て、イブセンが後來社會劇に用ひたる選擇法の概ね反對なると好箇の對照をなすものとす。

アグネスはオーソドックスの貞操を知り、自己を滅却して美しく活くる舊き女性の處世法に據り、信仰を最上無限の心靈的到達地となして、信仰の上に更に懷疑を加へんとするゲルドの如くならず。一たび享受したる感激の鞏固にして、終世渝る事なき執着は、近世的女性の點々飛躍、層々階を經上つて飽くを知らざるに比すれば隔世の感あり。家庭を神の宮の如くし、その子を神の子の如くする彼女がブランドの師表となりしを思へ。

イブセンのみならんや。ブランドのみならんや。新しき文明は常に此の如き舊文明との混淆錯綜を以て、その幕を開き行くなり。而してその幕は必ず矛盾の悲劇に閉され、第二幕に於て稍〻調ひたる情景を點出し來るなり。請ふ我をして更に筆を進めしめよ。

二三

嘗てボストンの一老學者、道に伊太利の勞働者が襤衣を纏うて勞役せるを見、黯然として一詩を賦せり。その詩意に曰く、「噫嘻滅亡し去りたる古代大帝國の民、遠く海を越えて不知の異鄕に彽ひ、日に勞役す。見よ、彼處に惡罵せるものはシセロの額を有し、彼處に困憊せるものはケトーの眼を有し、彼處に土壤を擢けるものはシーザ

ーの鼻を有す。而してシセロを出し、ケトーを産み、シーザーを育てたる大帝國の跡今安くにありや。噫嘻蒼茫として時は往く。「この悵みを如何」と。この老學者は羅馬大帝國を以て、地を拂つて空しきに歸せる者なりと信じき。焉んぞ知らん、この大帝國の暗影は儼然として今も我等の上に臨み、我等が自ら誇りて新らしき基礎の上に立てりといふ時、歴史てふ老爺は遽然としてその乳臭の自負を且つ笑ひ且つ哂へるを。

さらば羅馬大帝國の暗影とは何ぞや、余は故らに暗影といへる語を用ひて、その內容の朧ろなる暗示をなせるに過ぎずと雖も、その事たる全く捕捉すべからざる架空事にもあらざるなり。試みに新文明の下に住めりと自任する我等が、一事に就て或は思考し或は行爲する時、不知不識の間に我等を掣肘せんとするものはこの暗影なり。

その暗影の一は我等の有する國家觀念なり。羅馬人は國家なる觀念に關して强烈無比なる一つの系統を與へたり。彼等に取りては國家は絕對的とも稱すべき一の存在にして、その存在の保障の爲めの故には、殆んど爲さゞる所なかりき。自由を極端に疾呼したる時も、壓抑を容捨なく强行したる時も、そは共に國家の存立隆興に資せんが爲めなりしを知らざる可らず。その主義そのものが一の價値を以て働きたるにはあらずして、主義の背後には常に國家てふ最後目的が潛在しつゝありしなり。國家は實にかゝる主義てふ一時的方策の上に超越して、その威力を振ふの特權を有するものと思考されたり。この大帝國が生み出したる幾多の風雲兒は、その經綸を行ひ、野心を滿足するに於て、敢て爲さゞるなきの擧に出でしが如きも、國家てふ一の力の前には彼等は母の膝に倚る一箇の赤兒たるの觀ありき。而してその弊の極まる所、奴隸と、奸商と、貧しき農夫と、驕奢窮りなき貴族と、暴戾なる兵士と、節操なき學者とは生じ來れり。而して獨り羅馬大帝國はクリートの島のミノトールの如く、凡ての青春を喰ひ盡して毬の如く肥えたり。而して我等は暗々裡にこの暗影の下にあり。

二四

その暗影の二は勝者と敗者との確別なり。羅馬の人民はイスラエルの民の如く聖別せられたる民なりと思惟したり。彼等は征服者を以て任じ、勝者を以て居り、苟も地上に住める他の民は一に皆夷狄又は奴隷を以てこれを視たり。かくて一方には良心の詰責なき專横、他方には中心よりの努力なき勞役ありて、Micheleの稱するMachinismは社會生活の首尾に徹せり。かく自己の獨立を把持主張すると同時に、他者の獨立に對して同等の尊敬を拂ふ複雜なる崇貴なる人々間の態度は彼等の夢想だもする能はざる所なりき。即ち人格の尊威は全然地を拂つて無く、驕慢なる個人慾の强張と、卑陋なる個性退縮の現象とは、渾沌として社會の上下を通じて渦卷き流れ、單純强烈なる色彩はありながら、社會は雜然として諧調なき不快なる沙漠となり果てぬ。若し所謂「健全なる中流」の絕無なる世ありとすれば、羅馬帝國末代の濁世は、實にその最なるものなりしと云はざる可らず。而してかくの如き暗影は今も我等の間にその殘蘗を絕たざるなり。

二五

その暗影の三は眞實の意味に於ける自由精神の滅却なり。羅馬史を繙くものは、羅馬人が自由を慕ひ、暴戾を憤れるの跡を見出さゞるにあらず。されども前述せるが如く、羅馬人が主張せる自由なるものは、その目的の終局に於て、羅馬帝國の消長と關聯せるものにして、人のその自由を渴仰せる所以は、羅馬帝國の忠實なる奴隷たらんが爲めに外ならず。各個の人格が内部的に要求する自由の如きは、到底これを彼等の間に見る事を得ず。「個性的獨立の感情、即ちその結果如何を顧慮する事なき純眞の自由に對する憧憬、而してその自由の獲得に滿足せ

んとする心」は、ギゾーの云へるが如く、羅馬末代史の二要素たる羅馬人も、基督敎徒も共に有せざりし所のものにして、彼等は嘗て此の如く放膽自由なる人間性情の振動に瞥視を與へんとだにせざりしなり。スパルタカスが縲絏の中にある奴隷の一大群を率ゐてヴェスビヤスの山中に立籠り、奴隷解放の爲めに萬丈の氣焰を擧げしは、その羅馬人にあらずしてスラシアの出なりしが故なり。自由はダニューブの河上、ゴールの森林より來れるも、嘗て七丘の上には宿らざりき。

この自己に立ち歸り得ざる昏迷せる心情は、羅馬帝國が我等に遺したる暗影の第三なり。

二六

その暗影の四は眞理に對する不忠實なる態度なり。

ピラトが基督に對し、傲然として「眞理とや、眞理とは何ぞや」と反問して以來、眞理は彼等に取りて、永久の謎となりぬ。國家の存亡以上に關心すべきもの此の世になしと斷定せる時、眞正なる自由そのものゝ追求が全く無視せられたる時、理性の活動が人の存在に何等の重きを爲さゞるに至るは自然の數なり。羅馬人も嘗ては眞理に對して全くの盲目にはあらざりき。彼等は嘗て忠實に徹視し、事物の眞相に逢着せざれば已まざるの意氣なきにはあらざりき。基督紀元前後より三百年に亙れる羅馬人の彫刻を見よ。その物の本質を捕捉せんとする熱情眞摯にして、苟もその眞に徹せざれば已まざらんとするの態度は、到る處にこれを窺ふ事を得べし。嚴密正確なる肖像の彫刻は、近代より見るも亦珍襲すべきものなり。然るに第四第五世紀に至つては、眞理討究の精神頽然として跡を絕ち、偶々鑿刀を加へたるものを見れば單に模倣の模倣に過ぎず。その自然に不忠實なる、自ら體達せんとする勞を厭ふ事の甚しき、大膽なる想像力の萎靡し盡せる、史を讀むものをして人間趣味性の墮落實に斯

の如きもののあるかを洪歎せしむに堪へたり。

事物の眞を正視し能はざるの結果は、頽廢的風潮の蔓延となれり。極端なる現世的物慾主義の發生を促し、地上の生を貪り味ひながら、常に中心の安定を贏ち得ざる煩悶の素地を作り出せるものは實にこの眞理を侮蔑せる羅馬帝國末路の悲境が生み出せる所なりしなり。

二七

羅馬大帝國は上に列擧せるが如き自己體內の排泄物によつて困憊し、周圍より侵入し來れる野蠻人なるものゝ壓迫に堪へ兼ねて、頽然として沒落の悲運にひた走りしぬ。而してその跡に起り來れるものは、實に中世紀の自由都市なりとす。

單に自由都市と云はゞ、宛ら一個の新規模を有する團體制度の發生を意味せるが如きも、實は然らず。羅馬自身その當初は一個の自由都市たりしのみならず、羅馬が征服したる近在の地亦皆自由都市の集合に外ならざりき。唯羅馬市がその武力に於て他を凌駕し、四方の志を達成するに至るや幾多の都市を合併して、雜然たる統治の下におくの到底不可能なるを知り、宛ら豆を嚢中に盛りて嚢の豆と云ふが如く、凡ての都市を一傘の下に集めて、これを羅馬大帝國とは稱したるなり。

而してその豆の袋は破れたり。豆は再び舊の豆たらざる可らず。かくの如く羅馬大帝國は亡びたり。而して各都市はその本來の姿を恢復し、自由都市としてその首を擡げ始めたるなり。

二八

Michele 羅馬は、大帝國を運動せしめたる槓杆を稱して Machinism と云へるに對し、自由都市を回轉せしめたる中軸を稱して Love と云へり。クロポトキンが進化論の立脚地より Mutual Aid と呼びたるは更に肯綮を得たるに庶幾からんか。羅馬帝國はその滅亡と共に野蠻人の間にのみ見らるべき凡ての制度を伴ひて滅びたりと Sismondi が云へるは適當と云ふべしとするも、自由都市の勃興と共に、羅馬及び羅馬以前の未開人が知らざりし新精神が顯著に發揮せらるゝに至りしは掩ふ可らざる事實なり。

羅馬大帝國と共に破れざるを得ざりしものは國家至上主義なり。その必然的果系として起るものは勝者敗者の融合（Fusion）なり。帝國主義の殘糵は尙殘りて、フランク人に屬せるゴールの如く、ヴヰシゴス人に屬せるスペインの如く、サクソン及びノルマンに屬せる英國の如く、王權の設立を馴致して、近代歐洲に於ける君主國の遠因を作りたれども、羅馬末代帝國主義の慘禍に戰慄せる伊太利に於ては、幾個かの小共和國に分れ、各共和國は自己に屬するの外他に屬せず。國家の爲めに人民あるにあらずして、人民の爲めに國家あるを宣揚し、多數者を奴隸として治者の福祉を計るべしてふ羅馬帝國の傳說を弊履の如く放擲せり。Machinism はかくの如くしてその根柢より覆れり。此に於てか彼等は是れに代ふべき統治機關を摸索し、行き〳〵て遂に人てふ單位に逢着せり。彼等は初めて羅馬帝國が人を人として認めず、一箇の機械として用ゐたるを驚き覺れり。かくて人は認められたり、而して自由は認められたり。

自由精神の勃興と共に盛大となりしは眞理に對する眞摯なる硏究的態度なり。見よ、歐洲の大部分が君主專制の下に遲々たる文化の步を進め、產業の進步によるよりは專ら討伐によりて、王侯は僅かにその驕奢の財源を得、上下相擧りて憐れむべきカルチュアに滿足しつゝありし間に、幾度も戰禍の爲めに一度は灰燼の如かりし伊太利の全土より崛起せる自由都市は、忽如としてその智的生活に於て、富に於て、生活の樣式に於て、拔群の進步を

示し、庬然たる北方諸國の傍に介して、宛ら粗雜なる貝殼の中に置かれたる眞珠の如くに輝くに至れり。

若し自由都市にして正當なる發達をなしたらんには、第二十世紀の歷史は今日の如き狀況を呈する事なかりしならん。されど自由都市が駸々として殷盛に赴き、宛ら猫額に等しき地域に位置して尙よく富を積み、美を裝ふ事比類なきに至れる間に、歐洲北方の諸王國は他の方面に發達せり。その主權者は始めは單に一部落の主權者に過ぎざりしが、侵略により、相續により、結婚により、僧侶との結合によりて漸くその版圖を擴大し、遂にはその兵威によりて優に自由都市を壓するに至れり。かくてこの諸王國の主權者は自己の民人百萬の膏血を搾り盡すともなほ得難かるべき鉅富を、「自由都市の蹂躪によりて獲得すべきを知るや、餓鷹の餌を漁るが如く、アルプスの高嶺を越えて伊太利の沃野に飛下し來り、掠奪又掠奪、幾多所在に散布せる自由都市が、恥しめを蒙りし處女の如く、面を伏せてまた仰ぎ見ざるに至りて、甫めてその暴逆なる振舞ひをやめぬ。

かくの如くして中世史は近世史に繫がれたるなり。かゝる徑路を經來りし近世が如何に中世自由都市の新精神を無視せしか。而して如何に北方の文明がイブセンの「ブランド」を通じてこれに抗議の聲を擧げしかは、請ふ更に筆を改めて說かん。

二九

我等は所謂近世史の舞臺上に棲息す。その我等が棲息する近世史中に於て如何なる戲曲が演ぜられつゝあるかは、我等の眼親しくこれを覩、我等の耳親しくこれを聞く。人々各ゝ眼あり耳あるが故に敢て縷說を要せざる可しと雖も、前說の連絡上特に注意すべきは、近世は直系的に中世と連續せるものにあらずして、却つて中世を超躍して古代殊に羅馬帝政時代と密接なる交涉を有せる事これなり。

何人も疑を挾む能はざる事實は、現歐洲に於ける所謂列强なるものゝ起原は、實に中世紀に於てバアバリヤンに依りて建設せられたるものにして、かの自由都市とは何等有機的の連絡なきものなる事これなり。卽ち歐洲列强の目途とする所は、而して延いてその富强を致し得る方法と信ずる所は、帝國主義の立場の上にその發展を計るにあり。各國はその存在と隆盛とを保障せんが爲めに、國家を以て凡ての權威の主座を占めしめ、民人の生存は一偏に國家繁榮の爲めに資するが故にのみ許さるゝの實狀を呈するに至れり。ルヰ第十四世統治下の佛國の如き、ピーター大帝によりて建設せられたる大露帝國の如き、實にその好典型たるべきものなり。

羅馬帝國に現はれたる第二の暗影として我が指摘したる勝者敗者の確別は、近代に於て經濟的生活の中に現はれ來れり。生活の緊迫と機械工藝とは自ら資本の偏榮を促がし、延いて資本家勞働者の二階級を助成し、所謂社會問題なる近世の難問題を惹起すべき素因となれり。佛國革命直前に於ける同國農民の狀態を檢せば、又農奴解放前に於ける露國農民の狀態を檢せば、羅馬帝國時代のそれとはその形を變へつゝ、しかもその度に於ては却つて彼に過ぎんとする、勝者敗者の二階級を現出するに至りし事は智者を待たずして知るを得可し。

既に帝國主義の建設あり、勝者敗者の確別ありとすれば、趨勢は自ら個人的自由の退縮と理性的滿足の放擲とを結果するに至るは、固より覩易き理のみ。羅馬帝政は既にこの結果を暴露せり。その後繼者なる近世にして獨りこの事なきの理なし。果然近代の初期より中期に亙りて最も著しかりし現象は、民人大多數に對する高壓と及び彼等の智的生活の退縮なりしなり。かの中世紀に見たるが如く、各個人が有せし光榮ある權威は、全く或る少數の特權階級の專有に歸し、智的生活の餘裕に至りては、國民大多數の夢想だにする能はざる所となりにき。

此の如きは羅馬帝國の暗影が近代に及ぼせる影響の一斑にして、全歐洲は第十九世紀に於て羅馬卽ち南方文明の節度の下に唵々として雌伏したるを知るべし。ブランドがアグネスを師表となしたるが如く、如何に最近の文

明が古代に倣ひしかを見よ。

三〇

文明は西漸すると共に北漸すとは、史家の屢ゝ云ふ所なり。但し文明北漸の意義を解して、南方の文明が勝ち誇りたる征服者の如く、その固有の文化にて北方の民を馴化するものとせば、そは由々しき誤謬なりと謂はざる可らず。蓋し文明北漸とはその文字が明示する如く、文明が北漸するの謂ひにして、南方の文明が漸次北方に移るの意にはあらざるなり。文明はその北漸すると西漸するとを問はず、常に必ず手痛き抵抗に遇はざれば已まざるなり。南方の文明が何等の變化を見る事なく易々として北方に移るといふが如きは、我等の首肯する能はざる所、文明の中心北漸するや、少くとも幾干か最初の特色を失ひて、他の屬性を附帶するに至るを以てその法則とす。これ文明南漸と大にその趣きを異にする點なり。

現代歐洲文明の中心が年を逐うて北漸するの傾向あるは、人の汎く知る所なりと雖も、多くはこれを解して、單に南方の文明がそのまゝ次第に北方に根蔕を占むるに至るものとなすに至つては、未だ正鵠を得たるの見となす可らず。北方は南方文明を爾く容易に攝受せざるのみならず、殆んど敵意を含める反抗の態度を以て、これを觀察し、解剖し、商量し、批判し、その襲來を防止せんとしつゝあるなり。此の如きは然しながら實に巧妙なる自然の配劑と云はざる可らず。この衝突のあるあつて、文明は卽ちその衣冠を改め、容姿を變じ、倦怠せる人心の奥底に、再び覺醒と猛進との衝動を投與し得るに至ればなり。これ文明北漸の特色にして、文明南漸が常に行はるゝのみならずその地域の廣狹よりこれを云へば、文明は北によりも南に傳播せるもの多きに係らず、南漸せる文明は同一なる文明の單に南方に移動したるに止まり、世界文明史を質的に論究する場合にありては、牛顧に

だに値せざる所以なり。

三一

歐洲の北端は露西亞及び那威瑞典に連なれり。

かの羅馬大帝國の後繼者なる近代文明が、中部歐洲にあつてその權威を擅まゝにし、ナポレオンの帝政を生み、獨逸聯邦を成就し、墺太利の匈牙利合邦を促成し、露西亞をしてポーランドを併合せしめ、伊太利諸市をして一王家の下に屈伏せしめ、貧富の差を激增し、多數者の智的渇望を杜絕し、旋風の枯葉を捲く勢を以て、更に北方にその猛威を振はんとするに臨み、この文明の核心に向つて、痛烈深刻なる批評を加へしものが、相次いで歐洲の北端なる露西亞、那威より輩出せしは、洵に偶然にあらざるなり。而してその中にあつて、特に頭角を現はし、批評の銳利を以て知られたるものにヘンリック・イブセンあり、而してイブセンの「ブランド」は、我の信ずる所によれば、彼の著作中南方文明批判の急先鋒をなせるものと謂はざる可らず。

さらばブランドの南方文明に對する批判はよく徹底し、よく普遍し、南方をして敢てその矢面に立つ能はざらしめたるか。徹底は或はこれあり。されど普遍に至りては、未だしきもの極めて多きを思はしむるのみならず、南方文明の潮風感化はブランドが想像せざる邊より潜入し來り、ブランドをその警戒せざる方面より襲ひたり。ジュリアン大帝が反敎者として西漸し來る基督敎に對し强烈無比なる抵抗を試み（イブセン作「皇帝とガラリヤ人」參照）、遂に戰場の露と消えんとせる時、大呼せる「ガラリヤ人よ汝戰ひ勝てり」の一語は、また移してブランドが南方文明に對して叫ぶの聲たらしむべし。

此の如くしてブランドが苦闘の果ては敵の勝利に終れりと雖も、彼は無益に苦闘したるにはあらざるなり。ブ

ランド指摘して、侃々諤々として詰責せる所は、確かに現代文明の病弊に中れり。現代文明はブランドに於て畏懼する彈正官を見出したるものにして、縱令ブランドは反正の犧牲となりしと雖も、その遺音は生きて死せず、殘りて亡びず。現代文明がその病弊を矯正せざる限り、常に黑影の如くこれに纏綿して、その良心を脅す事を休めざる可し。而して此の如くして南方文明が遂に北方の要求に讓歩する時、その北漸は始めて完全に成就せらるべきなり。

三二

我は讀者を將て端なく岐路を辿らしめたるか。さらば更に本路に還り來るべし。

フォードの奥、懸崖相逼りて上に氷を連ね、日天に冲して甫めて殘光をその底に漏らすのみ。寒濕の氣四邊を閉ざし、瘴氣骨に徹す。ブランドはかゝる寂寥の地を選び、その愛妻アグネスと共棲する事若干年の間には今やアルフと云へる可憐の嬰兒ありて、稍ゝこの無人の寂寞を慰むるものありき。ブランドはこゝにありて、かの「凡或無」の主義を絶えず體達しぬ。その母の病更に革まりて救ふべからざるに至るや、醫師と牧師と交ゝ來りて、ブランドにその死床を護らん事を乞へりしも、彼は母が最後の一錢を擲たざるを知りて、頑としてその請を退け、アグネスに教へて曰く「我が行路に成功の伴ひ來るはこれわが精神力の足らざるを暗示するものたり。神の子が苦き杯を我より放ち給へと祈れる時、神はよくこれに耳を傾け給ひしや。神の子は失敗蹉跌の人として逝けり。神は萬人に唯一つの要求をなし給ふなり。そは讓歩を苟もせざるにあり。半熟不成の事業は神に呪はる。我等は口にそを說かず、行ひもてそを傳へざる可らず。愛てふ語に增して雜多なる誤解と曲解とに葬られし語果してありや。人は困憊の上を面紗の如く愛もて被ひ、以て己が弱點を晦まさんとするなり。行路嶮難なるか、彼をして

愛せしめよ。罪の中にありてしかも晏如たるを欲せんか、彼をして愛せしめよ。神を求めてしかもその努力を惜まんとするか、彼をして愛せしめよ。愛の故に義行はれざらば、則ち人これを許せばなり。その墮落せる愛を將て再び眞生命を帶ばしむるの道奈何。愛するの前意念すべきのみ。眼を張り、臂を擧げ、滿身の意氣を傾け、渾身の精力を振ひ、挫けて屈せず、斃いて倒れず、自己の全力を盡して先づ意念すべきのみ。これ實に人をして眞愛の光に浴せしむる唯一無二の道なり。若しこの苦悶にありて、汝の意志捷を奏さば、卽ち愛は、生命の橄欖の葉を含める白鳩の如くに、來つて汝の上に憩はん。世未だこの境地に達せざる間は、我等愛するの前先づ憎まざる可らずと。

病母の急使一度來り、二度來るに及んでも、ブランドは更に前言を改めず。しかもその衷心には實に鎔鉛を飮むの苦心を經驗せるなり、しかもこの苦心は彼が最愛の嬰兒アルフが陰濕の峽底に生れて遂に病魔の犯す所となるに至つて更に悲慘を加へ來りぬ。

三

恰もこの時、彼の熱しもせず冷やかにもあらざる市長來り訪づれ、自己の市に對する抱負なるものを語り、仄かにブランドの所信所行と相反せるものあるを諷して、ブランドに請ふにこの地を退き以て民人に不安動搖の念を起さゞらしめん事を以てす。而して云ふ、「ブランド君よ、君の爲す所は旋渦の如し、生活と信仰とを合一し、神の義の爲めの戰ひと、馬鈴薯の施肥とを混同せんとす。我その可なるを知らざるなり」と。ブランド敢然として これに答へて曰く、「然り。しかも焉んぞ可ならざらん。我は敢てこゝに孤立し、此處を去らずして最後にまで戰はんのみ。我は孤獨にして戰ふものにあらず。至上者我と共に在し給ふを知らざるや」と。市長乾笑していふ、「さ

もあらん。されど最大多數者は我と僧侶とに屬せるを忘れ給ふべからず」と。

市長の去れる後ブランド顧みて喟然として云ふ「これ所謂多數者の戰士なるもの。公平寬大なる手腕を有し、心情皓潔にして常識豐かなるもの。しかも彼等が歳々なす所の害毒はそれ何に比すべき。洪水も如かず、惡霧も如かず。世の凡ての殘害も遂に敵せざるなり。彼あるが爲めの故に、高邁なる思想は夭折し、熱烈なる意志は屛息し、敢爲なる歌聲は杜絕し去るなり、遂にこの人民の愛護者なきに如かんや」と。

更に又醫師がブランドの母の急を告げ來り、必ずブランドに母をその死前に省すべきを以てし、逡巡これに應ぜざるは人道の常に反くものなりと云ふや、ブランドの聲は再び雷霆を呼び起しぬ。「人道？　この惰慢の贅語こそ今代の標語とする所なる。この語を以てかの卑劣の輩は、爲すべきを敢てせざるの罪を被ひ、かの弱志の徒は、よく平然としてその約を二にして恥ぢず。而して汝はかの『人の子』をも變じて、一箇の人道主義者たらしめんとす。强ふるの罪も亦酷し。基督が死の杯を味ひし時神はよく人道的なりしや」と。

ブランドの熱情はブランドを呑みて、彼は理想そのものゝ化身となりき。彼の前には唯神の義あるのみ。所謂愛なるもの、所謂人道なるもの、所謂共同生活なるものゝ如きは、現はるべからざる時に現はれたるものとして、一々彼の熱烈なる鞭打を被りき。彼の意志は火を出でし鐵の鋼となれる如く堅くなりぬ。人の情は早や彼を動かし得べしとは見えざりき。

しかも人は遂に人なるを奈何すべき。ブランドが醫師に對し侃々の語をなせりし時、その愛兒アルフは正に搖籃にありて生死の間を彷徨しつゝありしなり。アグネスの急告に應じ、醫師これを診して、速かに居を移して赤子の命を救ふの策を講ずべきを云ふや、ブランドの心は端なくも軟化せり。彼は醫師とアグネスとを顧みてその夜の中にこの谿谷を去りて溫暖の地に移るべきを云ひ、倉皇として心玆にあらざるものゝ如し。

三四

この時醫師徐ろに彼に近づき、その肩を撫して云ふ「君が市民に臨みし所、母に告げし所、共に嚴粛を極めて宛ら天上の聲の如かりき。しかも一旦その兒の病篤きを知るや、忽ち心機を轉じて温情玉の如く掬すべきものあるは何ぞや。我君にこれを云ふは君の食言を責めんとするが爲めにあらず、君の父としての自覺がよく君をして人の情に返らしめしを喜ばんとするのみ。幸に過去を省みて迷ふ所なきにあらざりしを悟れ」と。

ブランドこの語を聞くと共に、劃然としてその内心の二分兩裂せるを覺りぬ。今の情よきか、疇昔の想謬れるか。さらばかの人を罵り母を苦しませしの責を奈何。今の情惡しきか、疇昔の想正しきか。さらばアルフの壽を延べ難きを奈何。

半生硬骨を聳かして宣言せし所のもの畢竟一片の囈語に過ぎざりしか。神意炳として日の如し。曲ぐべからず。しかも恩愛の絆は牢として鐵鎖の如し。絕ち易からず。この時アグネス、その兒を擁して來る。されどブランドは既に愛兒の病報を聞きし時のブランドにはあらず。躊躇逡巡の色は慘としてその面に漲れり。

突如としてかの野生の兒ゲルド亦墻外に現はれ、大笑して云ふ「わが牧師は向上飛躍せり。この地上の寺院は古りて且つ荒れたり。今は唯かの山上の氷寺あるのみ。そこにわが牧師は白衣白襟、大千世界を動かす獅子吼をなして、敎へを四海の外に宣べん」と。ブランド彼女を慰めて答ふらく、「ゲルド、汝の云ふ所誤れり。汝の牧師は汝が見るが如くこゝに立てり。汝何ぞ偶像の歌をなして我を誘惑せんとはする」と。ゲルド卽ち曰く「玆に立てるは一箇、人の父のみ。わが敎師にはあらず。我が偶像の歌をなせりと云ふは却つて偶々我を强ふるのみ。偶像、偶像のある所を知らんとや。見よ、かしこ、君が妻の立てる所に、その胸に抱かれたる孩兒こそは、君に由

出しき偶像のみ。聞け、鐘聲を。人も靈も共に山上に向つて急ぐ。わが牧師は鷹の翅に乘じて去りぬ」と。忽ちにして往く所を知らず。

三五

アグネス徐ろにブランドに近づき囁きていふ。「おそくなりぬ。立ち出で給はずや」
ブランド「この道をか（始めに庭の木戸を指してかく云ひ更に家の戸を指しつゝ）或はこの道をか」
アグネス（驚きしざりつゝ）「ブランドこの兒の爲め……この兒の爲め」
ブランド「寧ろ問はん、我人の父たりし前僧侶たらざりしか」
アグネス「たとへばその聲雷霆と響かば響け、我は口をつぐみて應へせじ」
ブランド「さ云ふは汝が人の母たる故なるべし」
アグネス「人の妻なり。君の心の欲する事我必ず成し遂ぐ可し」
ブランド「母か妻か何れを擇ぶや」
アグネス「さらば母とはなるまじきぞ」
ブランド「神の裁斷今こそこゝに臨め」
アグネス「君は何れに從ひ給ふべきか」
ブランド「神の定め給ふがまゝに」
アグネス「さらば神の御召に任せ給ふや」
ブランド「さなり（アグネスの手を握りつゝ）最後の宣言をなせ、生か死か」

アグネス「何方なりと神が君を導き給ふ方へ」
ブランド「おそくなりぬ。いざ行かん」
アグネス「何方の道へ」
ブランド答へず。
アグネス（庭の木戸を指し）「此方へか」
ブランド（家の木戸を指し）「否、此方へ」
アグネス（我が兒を高く腕に擧げ）「神よ汝の求め給ふものを我今汝の目前に致す。殉教の火もて我を導き給ひね」（家に入る）
ブランドは妻のすご〳〵として再び舊屋に入り行けるを見て涙に破れ、身を階段に投げて叫び云ふ、「基督、基督、我に光を與へ給へ」と。
試練は遂に長く待ち望みしブランドの上にひし〳〵と押し寄せたり。

三六

試練は來りぬ。その愛兒アルフは氣候の壓迫に堪へかねて、遂に一抔の土中に眠るべき淋しき運命の末に走りぬ。遲々たる日月且つ來り且つ往きて、寂寞たるブランドの孤屋にも神子降誕の記念日は來れり。されどそこに笑語と歡聲とは共にあらず。霏々たる白雪地籟を壓して頻りに下り、戶外なるアルフのさゝやかなる墓亦訪ぬるに由なからんとす。喪心病めるが如き若き母アグネスの眼底涙滂沱として沾襟を代ふるの暇だになし。僅に回顧の中に生き、愛子の在世を假想して、愛子の爲めに夏より心して蓄へおきたる飾木を立て、以て喪家にも強ひて一

抹の春風を誘ひ來らんとす。昨夜彼女、夢に愛子を夢みぬ。紅頰短褐、雙手を展き、辛く蹣歩して、彼女が獨り横はれる床邊に近づき「母よ」と呼びながら、晒然として笑みぬ。意は「我を暖め給へ」と云へるなり。彼女實にこれを夢みぬ。寒からざらんや朔風吹きすさむ北國の冬。その北國の土中に彼女が最愛なる寵兒は横はれり。アグネスに取りては、雪中に眠れるアルフこそ、天にありとブランドが云ふアルフよりも、更に眞なるものなりしなれ。

アグネスは甲斐々々しく降誕祭の設備をなし、盛んに燭火を點し牕被を開きて窓外を望み、アルフの墓に面して獨語していふ、

「アルフよ、我汝の爲めに牕被を開きぬ。室内の輕暖と明光と願はくは汝の墓の上に至れ」

と。ブランドこれを聞くや、忽ちアグネスに命じて牕被を閉ぢしめ、勵語して曰く、

「何等の痴態ぞや。休めよ、神意に對して絕對の服從を爲すべきの我等にして、服從する所誤つて絕對ならざらんには、我等の爲せし所は全く徒勞とならんのみ。君は既に甘んじてアルフを神の祭壇に捧げぬ。しかも今もなほ彼を捧げたるを惜しみ悲しむの心あらば、犧牲は遂に犧牲たる能はず。我等が淚を吞んで恩愛の絆を斷ちし苦衷は空しく水泡に歸せんなり。速かに牕被を閉ぢよ」

と。アグネスは悄然として牕被を閉ざすと共に、恩愛と感情との扉を閉ざしぬ。

ブランドがその愛妻に要求する所は尙こゝに留まらざりき。アグネスがアルフの遺し行きし衣類を取り出し、アルフの汗と已が淚との跡を留めたる記念品を胸に懷き、悲しき回想の杯に醉へる時、偶〻飛雪を伴し、戸を開きて突入し來れるものあり。打ち見やれば襤褸を身にまとひて、寒氣の爲めに戰慄せる嬰兒を抱ける乞食の老女なりき。彼女室内に來るや、直ちにアグネスに就いてアルフの服を求む。アグネス固より逡巡の色あり。ブランド再

び色を作してアグネスの惰弱を罵り、凡てを擧げてこれを乞食の老女に贈らしむ。アグネスが胸中に潛めて珍襲措かざりしアルフの頭巾も亦免るゝ能はず。アグネス憤泣して遂に凡てを抛ちぬ。嗚呼これされど彼女に生命を求むるに等しかりき。彼女は忽然として他の世界の人となりぬ。「エホバを眼のあたり見るものは死す」、アルフの墓と云へる語も今は彼女の耳に悲しからず。アルフは實に天に神と共にありき。嗚呼されど「エホバを眼のあたり見るものは死す」。アグネスの復活はアグネスの死なりき。

悲しくも苦しくも畏るべき人生のディレンマを見よ。

三七

若し犠牲獻身の典型を見んと欲せばアグネスに來れ。甘く香ばしき心の歌なる戀愛と訣別して、神の名に於て生きんが爲めに、ブランドに從ひてフョードの奧深く隱れ住み、凡ての欲念を放擲してブランドが精進の犠牲となし、その甚しきに至つては、最愛最寵、世の何者にも代へがたきアルフの夭折をも看過せざるべからず。その回想をだに罪として卻けざるべからず。その肉につけると靈につけるとを問はず、一にこれを擧げてエホバの祭壇に供したるものは彼女なりき。犠牲若し人生の最高最大なる靈的活動ならば、アグネスこそは月桂の冠を以て酬いらるべき第一人者にあらずや。而してアグネスがその短生涯の報酬として贏ち得たるものは何なりしや。死のみ。唯一介の死のみ。

犠牲と實生活とのこの調和すべからざる矛盾を如何すべき。

ブランドはその最愛の妻アグネスをして犠牲を捧げしめぬ。自己の意志——自ら神意なりと信ぜる——の下に一人の可憐なる女性を粉碎しぬ。而してブランドは平然として食ひ且つ笑ひしや。あらず、あらず。彼はやがて

その愛兒を追ひ、その愛妻を追ひ、その老母を追ひて、自らも最後の犧牲の道を選び求めざる可らざるなり。宛ら鐵槌もて粉碎されし如きアグネスが、「今は唯感謝のみ。よき夜を過し給へ。我は休息を欲す」とて退き去るや、獨り殘されしブランドは雙拳もて胸を撲ちつゝ、肝膽を搾つて叫んで曰く、

「我が靈魂よ痛みに堪へよ、勝利は苦き價を要す。凡てを失ふは凡てを得るなり。亡失に倚らずして何物をか獲得し得べき」

と。果然彼は大なる試煉に堪へぬ。彼の「凡或無」主義は、舌頭に上せて人の耳にのみ說くべき空虛なる浮說にはあらざりき。彼は刻々已みがたき精神の眼を閃かして已が會堂を見ぬ。小なるものゝ何ぞ醜き。ゲルドの所謂「小なるもの何ぞ醜き」。彼は奮勵して更に一大伽藍の建立を發念しぬ。時に四近の民衆ブランドの戒行を傳聞し、翕然として來りてその下風に就くに至り、嘗て民衆を恃みて、ブランドに對抗せる市長は銳敏なる俗才を動かし忽ちその態度を豹變し、鞠躬如としてブランドを訪ひ來り、ブランドを起して貧民救濟所建立の急を說く。しかもブランド昂然としてこれに應ずる事なく、告ぐるに已が事業ありて、その爲めに凡ての力と金とを捧ぐべきを以てし、一年有半拮据經營の後、その愛兒と愛妻とを人身御供となせる一大寺院は巍然として幽谷の間に聳立するに至れり。

三八

一大寺院の設立せらるゝと共に、忽ちブランドの前に現はれて、その寺院を自己の用に充てんとするものは市長と長老となりき。ブランドは自己の開基にかゝる寺院を、自己の事業に供せんとせしが、市長と長老とはその寺院が先づ市の福祉と在來宗教の保護の故に用ゐらるべきを主張して已まず。ブランドは事々に纒綿して他の事

業を利用せんとする彼等の態度に義憤を發せざらんとするも得ざるに至れり。

この時突如として一人の外國傳道者現はれ出でぬ。ブランドこれを諦視すれば實にこれアグネスが最初の愛人たるアイナアなりき。驚愕せるブランドに對しアイナアは云ふ、「我はアグネスと相別れてより無恥無賴の生を送りぬ。而してその極、我が贏ち得たるものは殘害せられたる健康なりき。神は我をその膝に招き給はんが爲めの故に、故らに我に唱歌の才と華やかなる性情とを賜ひぬ。而して其等を無にまで害ひ給ひぬ。是れ我が今日ある所以なり。今は世の凡ての羈絆我に於て宛ら浮雲の如し。我は是れより基督の教を說かんが爲めに異教徒の群れに投ずるもの、懽語の寸暇も亦惜まざる可らず」と、飄然としてその往く所を知らず。

何等の矛盾ぞや。アイナアこそは嘗てアグネスを誘惑して、人生を夢死せしめんとしたる醉生享樂の酒徒にあらざりしや。而してブランドはこの兇手よりアグネスの純潔と靈魂とを救ひ出せしにあらざりしや。その救主たるブランドはアグネスを強ひて己が事業の爲めに身を殺すに至らしめ、而してなほ煩悶と苦痛とに滿ち滿ちたる惡戰を續けつゝある間に、アイナアは忽如として復活の大歡喜を味ひ、惑はず躊はず、平然として自己の天職を樂しむの色あり。此の如くんばアグネスの死は果して何の用ぞ。人の手によりて成れる一個の寺院に執着して、理想の成就を樂しまんとするブランドの懷憶は何んの陋ぞ。ブランドは望洋の歎をなして自己の血塗れなる心中を凝視しぬ。

而して遂に彼は更に飛躍せり。民衆雲の如く蝟集し來れるを麾き、聲を勵まして彼等に告げて曰く、

「讓步こそ惡魔なれ。今汝等を誘引する寺院とは果して何ぞ。單に一個の見世物のみ。汝等はその壯年の最上時期を淫樂と耽溺との中に送り、功名と富貴とに齷齪し、齡進み病膏肓に入るに及んで、甫めて神を求む。汝等は人世の春を浪費し盡し、癈人となるに及んで則ち神の懷に隱る。此の如きは天の惡む所なり。汝等の中紅顏壯齡

なるもの來りて我と共に神の國を嗣がんとはせずや。來れ。神は遠きにあり、人寰遂にその聖座たらず。その國土は自由にして美なり」

かくてブランドは、アグネスとアルフを人身御供となし、一年有半の歳月を費して建立したる寺院を一度だに開く事なく、その鍵を深淵の中に投じ、宛らシーザーがルビコン河を渡り、基督がゲッセマネを出でしの意氣を以て、民衆を將ゐて山頂を目指しぬ。民衆は恰も醉へるが如くブランドの熱意に呑み盡されて家を捨て骨肉を捨て糾然としてブランドの後を逐ひぬ。この間にありて失神せるが如く驚倒せるは長老なり。彼が多年の間愛牧したる羊群は、悉くその牧者を離れてあらぬ方に彷ひ出でたり。頽齡の彼は何んぞ失望せざるを得ん。しかも市長は長老を慰め勵まして曰く、「民衆も亦我等と等しき人なり。彼等の逡巡する所には我等も亦逡巡すべきなり。暫く彼等に隨ひ行きて時機を窺ふべきのみ」と。

民衆の心を測るに巧妙なる市長よ。汝は實にブランドの急所を捕へ得たり。長老も亦云へり「神は人を失望せしめんが爲に獨創力を與ふ」と。長老よ、汝も亦人生の機微に觸れたる老猾漢なり。

民衆は果して中道にして狐疑し始めたり。

夜近づき、肢體疲勞し、食の乏しきに及んで、民衆は漸く自己を省み始めたり。彼等の寺院は何處にあるなるや。彼等は如何に永く戰ふべきなるや。その戰の勝敗は如何。勝ち得て獲る所は果して何ぞ。彼等はブランドに信賴する前、先づ普遍なる理解を要求したり。ブランド卽ち彼等に敎へて曰く、

「さらば知らしめん。聞け。この戰は生命のあらん限り續けらるべし。神の前に汝等先づ『凡てか無』の覺悟をなせよ。汝等が失ふものはマムモンの神が與へ得るものと逸樂の高枕、汝等の獲得するものは強烈なる意志、向上する信念、純一なる精神力、獻身の美德、荊棘の冠卽ちこれなり」

と。此に於てか民衆は愕然として相呼應していふ、「汝の我等に約せるは勝利者の榮冠なりき。而して實は犧牲の强請をなさんとするに過ぎざるか」と。かくて混亂は忽ち群衆の中に生じ、甲論乙駁更に窮極する所を知らず。
この時市長と長老急馳山を攀ぢ來りて曰く、「若し汝等卽ち今山を下らば、フォードに於て稀有のもの汝等を待てり。鰊魚の大群岸邊に寄せたり」と。群衆等しくこれを聞いて踵を回し、ブランドに酬ゆるに石と罵詈とを以てし、倉皇山を下り去りぬ。
知らずや一群の鰊はよく眞理を呑むに足るを。

三九

市長と長老と、かの民衆を率ゐて山を下るや、民衆を將て再び舊態に返らしめしを誇り、相慶喜して語るらく、
長老「神の恩惠によりて我等の間に反動の精神の絕えざるを謝す」
市長「反亂の漸く甚しからざるにそを防遏せしは我が力なり」
長老「奇蹟によらずんば遂にこの效果を收め得じ」
市長「奇蹟とは」
長老「魚群の市近く來れる一事なり」
市長「そはわが方便の虛構のみ」
長老「虛構とや!!」
卽ち互に口に手して相顧みて竊笑しぬ。

ブランドは遂に孤獨となりぬ。打ち見やれば遙かなる彼方、孤筇を便りて孑然として山頂を指して歩を運ぶものは彼なり。唯一人ブランドの踵を追ふものあり。是れかの山野の兒ゲルドなりき。長老遙かにこれを望み見て曰く、

「彼尙ほその夢想を休むる事なくんば、彼が墓に刻まるべき記銘は『ブランドの墓、彼の一生は悲しき一生なりき。彼は唯一箇の靈を救へるのみなり。而してその靈とはゲルドと云へる狂亂の兒のみ』ならんなり」と。群衆亦長老に和して口々に罵りて曰く、「見よ、不孝の子、不愛の夫、不慈の父、詐僞者、夢遊病者、石もて打ち、打ちて死に至らしむべきの輩」と。

ブランドは既に彼等の聲を聞かざるまでに彼等と懸絕せり。彼は、氷結んで永劫の春を閉ざし、頹嵐かゝつて不斷の冬を叫ぶ山頂に向つて進み、群衆はフョードの一端、黑く雨にさらされたる一群の陋屋と若干の田圃、若干の牛馬、若干の漁魚とを有する已が祖先傳來の村閭を目がけて退き行きぬ。ブランドは蟻群の如く眼下遙かに蠢動する群衆を見やりながら浩歎して曰く、

「彼等遂に甦生の好機を逸し去りぬ。嗚呼誰か彼等の生活を見て且つ悲しみ且つ歎くを禁じ得んや。彼等の眼界は塞がれ、彼等の熱意は冷され、彼等の希望は閉さる。天に就くべきの靈を享けて生れたる彼等は、重荷の爲めに地を匍うて死す。彼等の悲慘なる運命を思ひ、幾度か彼等の爲めに憐憫の淚を拭ひしとするぞ。消えなんとする傳説を固守し、反撥の力なく一日を偷安し、生くべき眞の道を失ひ去りたる彼等は眞に憫れむべきにあらずや。夜、暗き夜、而して更に夜。誰か炬火を執つて彼等を夢死より救はんものぞ。好矣。彼等我に聞かざらば、それは

兎まれ、我彼等の爲めに最後まで生きん。百千の彼等の中奮勵已まざるもの我一人あらば、神も亦彼等の罪を少しく輕くし給はんか」

この時空中に聲あり、嵐の間に響きていふ、

「蟲よ、夢みるものよ。汝救世の大業を成さんとするの無謀を覺れ。汝の天授は克く救世主たり得べきそれならず。天を嗣ぎ得るものは汝にあらず。地に生れたる蟲よ、地の爲めに生きよ」

と。ブランドこの聲を聞き疑惑裏に萠す。この時又空中に影あり、婦人の姿にして暗雲を劈きて現はる。自ら云ふ、「我はアグネスなり。君を幸福に導くの道は唯一つ。一度その道を失せば君の前途には死、我とアルフとの前途には苦悶あらん。一事を捨てよ、然らば君は生き且つ安からん」と。ブランド即ちその一事の何なるかを問へば卽ち曰く、『凡てか無か』これなりと。ブランド敢然として曰く「焉ぞ再び劍を鞘にするを得んや」。幻影曰く「拔劍も遂に何の爲す所なきを知らば、寧ろ之を鞘にするを擇ばざる可らず」。ブランド曰く「若し我が努力何んの効果を齎し得ずとするも、少くとも憧憬てふ大氣魄を後昆の爲めに遺すを得べし」と。幻影此に於てか大呼して曰く「死せよ地上に於ける無用の長物よ」と。殘るものは唯鷲鳥の羽音のみ。これブランドを最後に誘惑せんとせし「讓步の靈」なりき。

忽ちにしてゲルド、銃を乗つて現はる。鶩きの羽音を殘して飛翔し去りしものこそ彼女が追踪して已まざりし敵手なれ。ゲルド、ブランドの完膚なきまでに傷つき痛めるを見、その前に跪きて云ふ、「これぞ我が救主基督の再來ならずや。我今に至るまで君を一箇の僧侶となしき。焉ぞ知らん君は彼、世界の第一人者ならんとは。見給へ、君が在る此處こそは我が常に云ふ所の氷の寺なるを」と。ブランド首を回らして四邊を見れば、實に爾かなりき。嗚呼ゲルドも亦彼を解せず。ゲルドが最高最崇なりとの氷の寺もブランドには何者にてもあらず。彼の往か

んとする所は更に千里の彼方のみ。ブランドが神に禱念して得んと悶えたるものは遂に得るに由なきか。「何故に神は一度だに我をその胸には抱き給はざる」、これブランドがその十字架上に發せる最後の叫びなりき。

この時轟然として銃聲四邊に響き、ゲルドは謬たず彼の敵手を屠りぬ。「謙步の靈は死しぬ」、「凡てか無かは最上の玉座を占めぬ」。人の遂に成し能はざる所は將に成就せられんとせり。

四一

この時突如として大雪崩は山頂より起りぬ。巖を劈き樹を根こぎにし、百雷を驅り千電を集め、天を震ひ地を動かして、唯見る漫々たる大雪野は山背の傾斜を河漢の如く流れ下りぬ。あなやと云ふ間もなくブランドの姿はその下に葬られたり。

唯聞ゆるは頹雪の怒號のみ。そのすさまじき怒號の中に、更に莊嚴を極めて聞え來るの聲あり。

「神は愛なり」

これ何等の謎語ぞや。

四二

「神は愛なり」

嗚呼是れ何等の謎語ぞや。

四三

「ブランド」一度び文壇に投ぜらるゝや、イブセンの名聲は一躍して世界的となれり。イブセンは甫めて歐洲の注目する自己を見出せり。ク・スチャニア及び露國の劇場はこれを登場して熱狂せる觀客を牽引せり。歐洲の北部が南部に對して發したる彈正の聲は、默殺に遇うて亡ぶべく餘りに大なりき。

餘光漸くかすかならんとする信仰の焰、曖昧に衣するに模稜を以てせんとする道義の光、生に對する倦怠の餘り極端なる刺戟を追ひ求むる頽壞の氣勢、內在能力の分裂、外來感化の不統一、個性の破壞、社會生活の不均衡、摸索的盲動、詭辯的無爲、一代の趨勢は常にその最後の幕をかくの如くして閉づ。第十九世紀後期に於ける歐洲の狀態は亦かくの如きものなかりしとせず。劍と火とを以て現はるゝ革命なかりし故を以て、我等は時代の推移を等閑視するの愚をなすべけんや。かの文藝復興の淵源を爲し華々しく近世の幕を開きし歐洲の南部は、匆々駟馬の馳するが如き文明の進步に對して、過去を回顧して後昆に誇示する老爺の痴態に陷れり。

南方の衰ふるや、歐洲の文明の重心は自ら北方に移らざる可らず。而して北方はハーキュリーズの精力と敢爲とを以てこの北來の文明に對して深刻なる解剖的批判を加へ始めたり。

若き者の意氣何んぞ軒昂たる。その眼力は透徹し、その判斷は果敢なり。見よ、かの「凡或無」の宣傳者ブランドは純然たる北方の權化にあらずや。彼明確何者をも蔽はざる自己の態度を提げて、南より來れる鬚白き珍客を迎へぬ。而してその威儀堂々たる老者の面影の中に、經驗てふ小皺もて波打てる表情の後ろに傳說と歷史とを衣したる醜き「死」の冷笑を見たり。ブランドは猛然としてこの「死」を一擊の下に斃さんとせり。これ然しブランドの誤算なりき。「死」は千軍萬馬の間を馳せ潛りて、機に臨み變に應ずる術數を體得せるしたゝか者なれば、ブランドが唯一擊と打ち下ろす刄を易々とかはして幾度か空を打たしめたり。此に於てかブランドは年少氣銳氣を負うて惡戰苦鬪の已むなきをも敢て擇ぶに至れり。その母とその子とその妻とを犧牲となし、係累羈絆を身邊よ

り絶ちて、孤身單劍、萬事をこの一事に賭して戰へり。ブランドはその全努力をその目途する所に傾注し、遂に農夫よりはその若き子を救ひ、アイナアよりはアグネスを救ひ、市長僧侶よりは群集を救ひ、鷲鳥よりはゲルドを救ひぬ。餘す所は自己の理想の建設あるのみ。ブランドは渾身の力を振ひこの一事の成就に沒頭せり。このクライマックスなくんば今に迫るの努力は畢竟煙の如く徒爾なればなり。

しかもブランドはこの最後の一簣に蹉跌せり。これその悲劇なり。凡そ新しき者の努力が陷る悲劇の第五幕目なり。

四四

かの農夫の若き子は再びその父に從ひて去りぬ。アイナアはブランドが苦悶して使命の成就に腐心せる間に、超然として一圖に傳道に傾注する神の使徒となりぬ。群集は市長の口辯に詐られてブランドに背きて去りぬ。常にブランドに向上の一路を暗示せしゲルドも最後の危機に臨みては、依然として擔板の窠臼に陷りぬ。かくてブランドが企てたる折伏的事業の凡ては宛ら砂上の家の如く、頽然として失敗の悲境にひた走りしぬ。

詮方なくブランドは唯獨りその積極的事業なる自己理想の建立に向つて驀進せんとせり。しかもブランドがこの事業に對して歩を運ぶ事數歩ならざるに、頽雪は山を壓して襲ひ來れり。ブランドは莊嚴無比なる「神は愛なり」の聲を耳にしつゝ、失敗絶望、暗黑の谷底遠く冷かなる白雪に包まれて墜落し去りぬ。

さなり、我等が期待する樂園は遠し。ブランドの短き然しながら強き一生を悲劇に終らしめたるイブセンの天才と衷情とを我等は崇め且つ悲しまざる可らず。我等はこの劇に於て、歐洲文明の極致も亦奈何ともすべからざる悲しき謎の人類に投ぜられたるを覺るべきなり。「神は愛なり」、この語何ぞ我等の耳に甘き。しかも我等が有し

たる文明、有せんとする文明はこの語に的確なる具體的の證明を與へ得べしや。イブセンは新しき文明の舊き文明を嗣がざるに先だち、斷乎として我等の失望に終るべきを宣明せり。かくて新たに生れ來らんとする北方文明は、イブセンによりて既に業に悲しき豫想を與へられたり。而して我等は衷心イブセンのこの傲語に對して唯々たるの外を知らざらんとす。

されど文明は遂に南方に停滯せしむ可らず。文明は必ず北漸すべし。何故ぞや。憧憬の熱情、現在に對する執着、新たにして日に又新たならんとする衝動は、これ北方のみが有する新しき力なればなり。人類は最後の理想に達し得ずとするも、一轉歩をこゝに成就し得べし。その行爲によりて地上樂園の切實なる追慕を大呼するを得べし。

成就し得ずんば少くとも意志すべし。意志せざるを得ず。こゝに我等の力はあり、本能はあり。この新しき力を力說せる「ブランド」が嵐の如く歐洲の思潮を震ひたるは洵に宜ならずや。筆致を以て生くるの書あり。情理を以て生るの書あり、思想を以て生くるの書あり。「ブランド」はその何れにも與る事なし。そは力を以て生くるの書なればなり。

四五

「ブランド」はイブセンがそれに次いで世に問ひし「ピール・ギント」と併せ讀みて始めてその意義の完きを見るを得可し。「ブランド」は北方が南方文明に與へたる深刻なる批評にして、「ピール・ギント」は南方文明が北方に對して投げたる骨を刺す諷刺なればなり。後來イブセンは、「人民の敵」を著したる後自己の態度を容赦なく觀照して「野鴨」を世に示しぬ。「ピール・ギント」が「ブランド」に於ける關係も亦かくの如きものあり。

四六

イブセン、ブランデスに致せる書中に曰く、「我は『ブランド』の主人公に如何なる人をも當て嵌め得可しと信ず。敢て僧侶たるを要せず。地動說を主張せるガリレオ可なり。デンマークに於ける保守反動派の輩に對する君を以てするも亦可なり」と。

然らば「神は愛なり」の最後の天啓も我等言語に沒せらるゝ者に取りては往々にして躓きの石たるべし。文字のまゝにこれを讀みてイブセンの心を忖度せんとするものは違へり。文字よ。そは我等には拙く貧しき象徵なり。我等は屢〻この象徵を撤して帷の彼方に潜める一物あるを見る事を忘る。平板なる文字そのものに何の意義かあらん。文字の後ろに葡萄の房の如く垂れ下れる甘き智慧の實を我等は求め摘む可し。法樂の大味はそこにこそ潜むべきなり。

四七

夜の光を仰げ。マーテルリンク、ストリンドベルヒ、ブランデス、トルストイ、ケイ・クロポトキン等の諸星は、極光のみ淋しく輝き慣れし北歐の空高く輝き始めぬ。

亂宴の夜闌はに、杯を枕して敗殘の歡樂を追ひつゝ覺むるともなき南人の醉眼よ。……夜の光を仰げ。

（一九〇五―一九〇六年「文武會報」所載）
（一九一九年四月「白樺」所載）

一九〇六年

イブセン雜感

惡女明鏡を惡み、これを毀ちて則ち其の醜容を忘れんとす。世にイブセンの死をきゝ明鏡を毀ちたる惡女の懼を爲すもの如何に多かるべきぞ。死は此の戰鬪的詩人が現世に加へたる最後の鞭撻なり。現世若し此の詩人の死を悲まずば現世は詩人を其の墓に悲ましむ可し。人習癖あり、愛するの法固より一なる事能はず。イブセン嘗てノルウェーの特愛の詩人ビョルンソンに送れる書の中に曰く、

「親愛なる友よ、君は善良緩和なる心をもてり。君が我の爲めに頒ちしものは宏且つ善、何者もそが償となすに足らず。唯一事君が性情の中凡てに勝りて呪詛すべきものあり。何ぞや、容易に成功の人たり得るこれなり」

（ローマ府より。一八六七年十二月九日）

と。彼は成功の人――容易に多數の稱讃と人氣とを博しうる――たるを以て墮落の第一步となせり。彼が畢生の事業は多數を牽きて向上の一轉步を爲さしむるにあり。容易なる成功とは、彼に取りては自己を多數者の水準に下らしむるを意味す。これ彼が一瞬時も堪ふる所にあらず。矛盾を意味すればなり、破滅を意味すれば主義の放拋を意味すればなり、人格の縮退を意味すればなり。

其の消極的なると積極的なるとを問はず、眞理の二事は彼の腦裡に極印せられたる所なり。希臘人が裸體なる

美容を愛したるが如く、彼は裸體なる眞理を愛しき。彼、衣着たる眞理てふものゝ存在を認むる所以を知らず、衣着たる者にあへば被を裂き裳を斷ち狂者の熱意もてこれを赤裸々となし、其の眞理なるか眞理ならざるかを窮むる迄は彼の見開きたる眼凝然として閉づる事なし。彼がエドマンド・ゴスに與へて、その戲曲「社會の柱石」の批評に答へし書に曰く、

「見よ、我一事の君と異論すべきものあり。そは君がわが戲曲の韻文なるべかりしを云へるそれなり。知り給ふ如くこの戲曲は徹頭徹尾現實的なれば描寫する所は眞理其の者にして、讀者に與ふべき印象は讀者が目前其の讀む所のものを見なん事なり……我等は既にシェクスピヤの世に住まず——舊思潮を逐ふものゝ語意に從へば、此の著に悲劇の名を下し難かるべし。しかもわが描かんと試みたるは人なり。我等をして『神の語』を語らしむる所以を知らず」

と。彼が詩の內容と外形とに對する此の動かす可らざる自覺は、一八六九年「青年同盟」を出せるの時に創れる物にして、爾後彼が創作の生命とする所は讀者の前に讀者自身とその時世とを赤裸々にして示すにあり。此の目的の遂行の爲めに彼が示したる確信と勇氣と眞率とは凛乎として殉教者の風ありき。彼は南部歐洲が産して育てたる文明の北漸するを見て、其の核心に徹底の眼光を與へ、金光十字の中に毒蛇を見、玉座王笏の蔭に蛆蟲を見、輿論の後ろに利己無恥の反響を聞き、社會の裡に僞善沈滯の暗示を見たり。彼はそを叫ばざるべからず。さらずば石叫ぶべし。卽ち敢て鞭撻を秉れり。彼は愛せるが如くに鞭てるなり。彼のブランドは此の如くして「凡或無」主義を叫びたり。彼のピール・ギントは此の如くして因習脫却の爲めに戰ひたり。試みに彼が作の一を取りてそを繙き見よ。咄々として直ちに汝に逼り來る者は、讓歩を知らざる戰士の齒がみして拳固めたる面影なり。彼の前後と左右とには黑き影の如きもの陸梁せり、而して光は何處にもあらず、唯戰士の衷に幽かなる光潛めり。

彼は此の光と照應すべき他の光を求む。かくして彼は滿身の力もて進む。彼勢に乘じて一歩を進むれば再び黑き影の如きものあり。搏ちて更に一歩を進むれば更に再び黑き影の如きものあり。彼は搏てども黑き影の如きものは搏たず。黑き影の如きものは搏たれず敗れず、彼は卽ち搏ち搏ちて遂に斃る。（「ピール・ギント」第二幕第七齣參照）これイブセンの創作せる人物の多くが必至的に到達する運命の終局なり。

さらばイブセンが號叫は何の益ぞ。彼が一八八一年戲曲「幽靈」を出すや、歐洲の文壇は囂然として此の疑問の聲もて滿されたり。「悲觀」「無意義」「沒道義」「不道德」「汚穢」「瀆神」等の惡語より、甚しきに至りては「惡魔の口吻」といふが如き痛罵に至るまで、待ち設けたる如く自由に批評家の筆を通じて叫ばれたり。バイロン逝きて後評壇神聖の蹂躙せられたる此の如く甚しきは聞かざる所なるべし。英國の小なるイブセンの摸擬者ジョーンスの如きすら其の禿筆を呵して罵つて曰く、「汚穢なる大人物出でゝ汚穢なる戲曲を草するや小人簇出して汚穢なる小話を綴り得々としてこれを戲曲と名づく」と。

されど誰かイブセンが我等に提供する事實の正確を拒み得るや。覺醒せざるベルニック（「社會の柱石」）とノラ（「人形の家」）とは我等が日常目睹するに慣れて怪訝の念を挿むをすら忘れたる典型にあらざるや。ハルバルト・ソルネス（「頭領」）とヨハネス・ロスマー（「ロスマー・ホルム」）とに於て時代の殿將と時代の先驅とが、如何に明白に且つ深刻に描かれたるぞ。ヘダ・ガブラー（「ヘダ・ガブラー」）とジュリアン大帝（「帝王とガリレヤ人」）とが極端なる個性發展の犧牲として如何に痛慘なる悲劇を歷史と人情との上に極印せるかを見よ。其の同情の廣汎と普遍とに於て彼をシェクスピヤに比せんは不倫なり。其の藝術的良心の純淸と均等とを以てこれをゲーテに比せんは不倫なり。然れども或る部分に關する人生の觀察の深刻と忠實とを以てせば、シェクスピヤ、ゲーテと雖も亦將に讓る所なき能はざるものあり。沙翁が羅馬とエジプトに拾ひ來りたるブルータスとクレオパトラと、イブセンの北方

に拾ひ得たるクールドとインカーとに比し、イヤゴとヘダとを比し、マクベスとヨールディスとを比し、誰か後者に多くの遜色を認むる者ぞ。ゲーテの「ファウスト」が若し實世界的聖書ならば、イブセンの「ブランド」は聖書的實世界なり。彼は敎へんとし、此は示さんとし、彼は抱擁せんとし、此は解剖せんとするの差あるのみ。ファウストは第十九世紀が發したる最後の祈にして、ブランドは來るべき世紀に備へられたる呱々の聲なり。ファウストの聲はファウスト以上に莊嚴なる事能はず、ブランドの叫びはブランド以下に渾沌たる事能はず。既成の文明が未來の文明と接觸する所其の批判の深刻と純烈なるに於てイブセンは實に既に生れたる詩人の大なる者よりも大なりき。

バーナード・ショウは其の「イブセンの心髓」に於てイブセンの藝術的位置を斷定して、奇矯深刻なる諷刺家となせり。されど我が見る所を以てすれば彼は純然たる悲劇の作者なり。彼を目して近世のハムレットと云ふの最も適切なるを思ふ。ハムレットは觀察と批評と諷刺との人なり。彼の猜疑的傾向をすら猜疑して、一度は實行的能力ある男なりと思ひ做したる事すらありき。彼が有名なる六大獨語は、皆これ人生と自己とに對する銳利なる批評と諷刺とにあらざるはなし。しかも彼の死と生とが一片の諷刺として終らず、痛切なる悲劇として殘れるは何ぞや。自己をすら批評諷刺する透徹の眼あるものは、悲劇の主人公たり得べき最大の資格を有する者なればなり。

イブセンは亦觀察諷刺の人なり。彼は羅馬が產み、第十六第十七世紀が育て、第十八世紀が支配せられたる文明には慣れざるスカンヂナビヤ半島の一隅に人となれり。彼が第一の經驗は涙に濕ひたるパンを食ふことなりき。第二の經驗は輸入的政黨の陋劣なる行動を目擊したる事なりき。第三の經驗は自國がプロシヤの强勢に恐れてデンマークの危急を救はざりしを見聞したる事なり。かくて彼は踵の塵を拂ひ、故國を辭して古羅馬の地に好んで流離の客となりぬ。彼は自國民の中に「人間たり得るよりも英國紳士然」たるを以て光榮となす風潮あるを見、「國家滅亡といふに增りたる悲哀を知らざる」人間の集團を見、舊來の信仰に纒綿しつゝしかも新進の知識に

伴はんとする不熱不冷の宗教家を見、國家と社會的習俗に束縛せられ、個性を沒却したる土偶の如き市民を見たり。彼の鋭利鷲鳥の如き眼光は、如何にして此の明白なる大事實を雲烟過眼視し去るべけんや、彼は視察せり、批評せり。「嬉戲戀愛」に於て其の曙光を示したる彼が諷刺的技能は倒然として其のブランドとピール・ギントに注がれたり。ブランドは實に新しき文明を産む可き北方の一强頑兒が澎湃として逼り來る舊文明を罵倒せるの聲なり。ピール・ギントは舊文明が其の据ゑたる陷穽に罹れる北人の弱點を指して呵々として哄笑するの聲なり。爾後彼が出したる凡ての戲曲にして、此の諷刺的意義を有せざる者は殆どある事なし。

されど彼の諷刺は、ハムレットの一生の如く悲劇的境域に達せざれば已まざるなり。彼は人生の缺陷を搮捫して强ひてこれを笑はしめ、以て自ら快とせしスキフトの如き能はず。彼亦眞理の現成のために物毀たざる者なきに至りて、自己の卓絕なる智見に甘じ超然として獨り飽笑を漏したるボルテールの如き事能はず。彼は常に時代の反響に彼自身を見、彼自身の反響に時代を見たりき。されば彼の叫喚は屢〻現實を夢に見たる藝術家のそれに非ずして、現實によりて夢より覺めたる豫言者のそれなりき。其の「國家は亡びざる可らず」、「社會は革命に遇はざる可らず」、「精神的結合のみが人類合同の唯一策なり」、「我は勞働者と婦人との友なり」、「我若し人として正しく考ふる事を得しめば我事成る」、等の熟語は思想家クロポトキンの口吻なり。革命者マッチニーの叫喚なり。豫言者トルストイの主張なり。志士オーウエンの主義なり。科學者フムボルトの抱懷なり。約言すれば新しい時代の新しき精神がやがて高むべき哄聲の凡てなり。此に於てか斯の鋭利靈犀なる諷刺家イブセンは一層深刻熱摯なる悲劇の作者と化し去るなり。疑ふ者は試に其のヘダ・ガブラーを讀め。讀みて讀者の感ずる所は矛盾と敬意と幽欝の氣とに滿されたる一場の惡夢なり。再讀して讀者の感ずる所は現社會の暗黑面と運命の惡戲とを描き盡したる明晰なる諷刺なり。三讀して讀者の感ずる所は個性發展てふ新しき精神の犧牲となりし一女性が其の缺陷と弱點

とを以て尙苦悶し奮激し遂に起たざりし痛慘なる悲劇なり。我等がマクベス夫人の心機と行動とに憐憫の淚を與ふるが如く、來るべき世紀の讀者はヘダの僻性と其の自盡とに同情の淚を垂るゝなる可し。

されどイブセンは豫言者・科學者・志士・革命家にはあらずして依然として詩人なり。試みに其の製作の外容自身をしてそを說明せしめよ。彼は其の思想を歌劇と素劇とに歛入せり。而して其の戲曲の形式は純然たる獨創のものにして作劇の方式は彼に於て新たなる發展の源頭を得たり。ショウの如き或る意味に於けるイブセンの徒弟は措て問はず、ズーデルマン、ハウプトマン、トルストイ若しくはゴルキー等が其の作劇に用ゐたる形式を見よ。或者は其の外容に於て舊套を襲へる者なきにあらずと雖も、其の形式を生みたるイブセンの精神を採取せざる者ある事なし。啻に形式のみならんや、イブセンは其の用語操縱の自在に於て亦詩人の本能を發揮せり。彼の國語に通曉したるブランデス、ゴス、ヘヤフオード等が所說に從へば、彼は古人の轍跡を越え、後人の摸擬を許さざる特殊の成就を爲せる者あり。殊に其の詩律の簡潔遒勁にして印象の力饒かなると、其の劇白の適確切實にして穎脫の概あるとは彼が獨擅の長技なり。啻に用語のみならんや、イブセンは自然との交渉に於て深邃なる詩人的本能の機微を示せり。唯彼が自然を闡明するの機會甚だ少かりしを憾むのみ。しかも「ブランド」に於て、「ピール・ギント」に於て、「海の夫人」に於て、「死者の復活せん時」に於て彼が描出したる自然を見よ。自然は等しく皆詩人を得て新たなる呼吸を爲しつゝあるを見るべく、自然と人生との緊密交涉を描きて前人の足跡なき領土を開拓せるの一事は少しく彼の書を讀む者の認識せざる能はざる所なり。彼が象徵の傾向も亦彼の詩人たる本能を說明するものなり。「野鴨」の鴨、「海の夫人」の海、「ロスマースホルム」の白馬、「幽靈」の幽靈の如きは亦これ彼が開拓せる一路の逕にして、他の侵踏を許さゞる神祕の天堂に連れり。

此の如く己を持し、此の如く人を觀じ、此の如く思想を表顯したる詩人は逝けり。彼が、狹けれども高く聳え

たる額、「老いて益〻輝きたる眼、嚙むが如く結ばれたる大なる口、廣くして厚き胸、踵に及ばんとする黑上衣、雪を欺く髪鬚、共に復た見るべからずなりぬ。彼は偏僻の人なりき。交遊する所最も少く――交遊は不經濟なりと自ら云へり――己を領解せざる者には絶交を斷行し――半成の領解に居らんよりは母と絶つを選めりと彼はビョルンソンに書けり――排他の力甚だ强し――彼はソルネス其の人なりき――見る事多くして語る事少く、ビョルンソンがノルウェー特愛の詩人なりしに反して彼は常に畏懼の的（まと）なりき。世は彼を極端なる猪進家（アイコノクラスト）の一人に數へ、危險なる時代潮流の權化の一人に數へたり。しかも世は同時に彼を以てトルストイに於てのみ好配を見出し得る詩人と爲すを否む能はざるなり。

新しき時代は如何なる迫害と誤解との中に置かるゝも、早晩必ず生れざれば已まざるなり。イブセンの眞價を評定すべき時機は未だ至らず、彼をして誤解と迫害の中に眠らしめよ。軈て來るべき復活の喇叭は迫害せらるゝ人の畏るべき韻にはあらず、誤解せられたる人の懼るゝ譜にもあらざるなり。

（一九〇六年四月作）

（一九〇八年三月「文武會報」第五十三號所載）

一九〇八年

米國の田園生活

其一

今わが在るは、峭壁の麓にして蒼海に瀕せる一孤屋なり。孤獨は過去の交遊を想起せしむ。試みに其の一を記して見んか。

余がこれより語らんとする農家も、亦孤立して立てる一小屋なりき。去れど其の周圍には沃野連なり、家畜遊び、怡樂の氣滿ちて、余が今の境遇とは異れり。

米國に遊べる初年、余は故らに擇びて、本邦人のあらざる地に赴きたり。不完全なる英語と、他に親しみ難き性情とは、同窓の近づき來らんとする好意をも反撥して、餘り永く隱退せる啞者の如き日を送りたり。

好意ある同窓中、一人殊に好意あるものありき。入塾後二日目の夜、彼は「牡牛」と綽名されたる、肥大なる學生を伴ひて、余の室を訪れ來れり。余は其の時の懽喜を忘るゝ能はず。

暖き握手の後、彼——彼は名を Arthur Crowell と呼べり——は心置きなき質朴なる態度もて、余が遠來の勞をねぎらひたり。余は直ちに、彼が秀才にもあらず俊哲にもあらざるを看取したると共に、少くとも表裏を挿む事なき青年なるをも看過する能はざりき。而して余の城府は、平常よりも速かに撤却せられ、三人鼎坐、話頭の

何なりしかは記憶に値せざれど、余が稟け得たる慰藉は、身其の境にありしものならずば知る事を得ざる可し。

爾後、彼は屢〻余を訪れ、余も亦時に彼の室を訪ひたり。彼は小話の主人公たるべき人物なれば、少しく其の爲人を描き試みざる可らず。彼の身長は六尺に及びて竹の如くに瘦せたり。廣き高き前額を有したれども、鍛錬せられたる跡は見難し。其の眼眸は灰綠色を爲して、一文字なる瞼の下に輝けども、活動と敏捷との氣は缺けて、稍〻沈鬱なる誠實の色を示し、鼻と口とは、農人に通有なりと見ゆる堅忍と遲鈍との相を現はし、語は遲く低く且つ稍〻吃して、其の爲人に適へり。粗雜なる衣服の縞の田舍めきたるは、新來の余が眼にも明らさまにて、余は此の如き學生と親交して、自家の威權を損するなきやと、唯瞬時なりしかど思ひたる事すらありき。余はかくばかり卑劣なる時あり。アーサーは其の生家を以て最美最善なる處とせり。後年彼が測量技師たるの位置を得て處々を奔走せる間に、余に書したる事あり、「余は米國の西部と南部とに足跡を普くし、あらゆる階級の人に接するの機會を得たり。されど武郎よ、今も尙ほ全地上最も祝福されたる地點は、我が生家なるを聲言し得るを感謝せざる能はず」と。されば彼が余を訪れ來る每に、說く處は其の家庭の樣なりき。去れど彼は說きて飽く事を知らず。其の父に乞うて、何時か余をも伴ひ歸らんとするなり。

感謝祭の休暇は來りぬ。アーサーは躊躇せる余を拉して、休暇の第一日其の弟なるトムとフィラデルフィヤ府より夜汽車に搭ぜり。余は其の時の樣を明かに記憶す。客車は、田園に歸り行く勞働者・會社員・敎師・農夫・學生等もて充滿し、我等は僅に車隅に佇立の地を得て、棒の如く立てるのみ。アーサーは忽ちにして喧騷の中に一際聲を高めて滿面の笑みを傾けぬ。打ち見やれば客車の他隅に、二人の靑年に一人の少女ありて、又高く歡喜の聲を擧げたり。アーサー余を顧みて曰く、「彼處なるは余が兄と甥姪なり、招かれて余が家の客となるもの」と。

乘客少き汽車の淋しさは、宛ら死屍を棺槨の中に搖る如きが常なるを、其の夜の客車は賑しさを積み入れたる計

りなりき。玉蜀黍は剝皮せられて穀倉に入り、バムブキンは紅に熟して霜白き廢畑の此處彼處に横はり、牧草堆は圓滿豐饒の趣をなして、畜舍の傍らに小丘の如し。秋は暮れ去らんとして寂しさ增せども、農人閑を得て爐火の紅ならんとするはこれよりなり。彼等冬籠りの調度かれくれ、感謝祭に食卓を飾るべき七面鳥・ラスプベリー・親しき間の贈答品など買入れたるを、赤き白き青き包紙に包み膝も重げに打ち乘せて、其の眼は識れるにも識らざるにも等しなみに好意もて輝き、其の輝きたる眼は、必ず一度黃面矮少なる羈旅の客を好意もて打ち守りたり。豐饒は人の心をも豐かならしむ。

物の墜つる如く暮るゝ秋の日は、山野を暗に投じて、窓外を窺はむも難く、余は華やかなる群集に交りて、不知の地に赴く人の如く、不安の行末もて、しかも現在の懽樂には和し居たり。行き過ぐる停車場の燈は、漸く數少く朧になりて、汽車の人口稀疎なる境に近づきつゝあるは明らさまなり。乘客は入るものよりも謝するもの多く、我等も遂に座席を得てアーサーの兄及び甥姪亦我等が近くに座を占めぬ。

七時三十分なりと覺ゆる頃、汽車はとある停車場に着きぬ。豫め、外套を被り帽子を藏き、荷包など取卸し居たりしアーサー共の他は、余を促して客車を降れり。此の小驛には我等六人の外に下車せるものなかりき。停車場は塗れるが如く暗らみ渡りて反射鏡附したる二三のランプありて滯やかに光を放てるのみ。我等が汽車を降れる時、一群の黑き影ありて近づき來ると見えしが、懽呼はアーサー等よりなりしか、彼等よりなりしか、忽ち二群は一團となりて」ヽ此の時汽車は轟然として進行を起し忽ち暗中に走り入りて、すさまじき響のみ遠き木魂とはなりぬ。

汽車の去りしと共に、都會との線全く破られて、今は田園に人となりぬと余は思ひ入りぬ。アーサーは彼の一群の人々に余を紹介したれども、其の心は今中有に懸れるにや、余も自ら誘はれて、誰が誰なりとも別たずに握手したるのみ。商店は米國の習ひとして既に閉ぢたれば、僅に牕袱を通じて、燈影の漏るゝ家續きの街路を行く

事稍ゝ三丁程にして、右に折るれば、家並み漸く疎らに、木柵など多くなりて、遂には打ち開きたる平野を貫ける街道に出でぬ。幼き妹等の脚は宛ら跳れる小鹿の如く、手を連ね肩を抱きて、懽語しつゝ澄みたる夜の空を家路に向ふ。アーサーにすら忘れられんとせる余は、默して彼等の後ろに從へり。他の喜悦に醉ひたる余は、そを物憂き事とは思はざりき。

道の彼方に幽かなりし窓の燈、漸く近くなりて、我等の足街道よりアーサーの家に通ずる逕路に向はんとせし時、忽ち暗中より躍り出でたる小犬あり。一群に近づくや狂へる計り躍りて、悲しげにさへ聞ゆる叫びを爲しつつ一人々々の靴を嘗めて、余に來りしが、忽ち數歩を飛びのきて、其の心安げなる態度を變じぬ。こも亦一同には歡笑の種なりき。

「階なし危し」と心添へられて、それを昇れば廣縁なり。最も小さき少女は逸早く馳せ上りて戸を排しぬ。内よりは、琥珀を解けるが如き灯の光、寒き夜の暗に溢れ出でたる樣、群鴉の中に鳩の翼を伸べたるが如し。一同は今夜第一の賓客たるべき余を殘し置きたる儘、競うて屋内に侵入せり。一人、終りまで余あるを忘れず、自ら最後に殘りて余を招じ入れたる少女あり。余は直ちに其の少女を酷愛しぬ。而して後に其の誤りたらざるを知りき。

内には老父母と長女と我等を待てり、輝ける燈火あり、燃熾りたる煖爐あり、室隅には大なるピアノあり、壁際には充塡せる書架あり。日本に於ける農家の内部を想像しつゝありし余には是れ實に思ひ設けざる體なりしぞかし。

其　二

余は今頹濤打ち寄する巖頭に坐して筆取りつゝあり、潮當さに滿たんとす。滿を持して未だ放たざるの氣象雄なるかな。余はかく思ひつゝ余が足踏み入れたる農家の樣に較べ見たり。見ずや、彼處にも若き時代は生れぬ。

五人の强健なる男兒は、發展の戸口に立てり。彼等の手には鍵あり、開かるべき戸は何處ぞや。かの家にも潮は滿たんとするなり。

父なるクローウェル氏は、小軀巨頭なる半白の人なり。粗き頭髪は櫛らざるまゝに亂れたるを、黑繻子の小頭巾に抑へ、鷲嘴の如き鼻には古風の眼鏡ありて、其の奥より小なる慧智ある人好げなる眼軟かに人を見る。鬚髯は濃く伸ばして、其處にのみ酋父の面影はなきにあらねど、彼は酋父の寛容を有せんには餘りに神經的なるが如し。母なる人は丈けも高く、肉も豐かにして、其の顏殊に眼には、家事に辛勞する麗しき疲れの色あるものから、夫なる人に比しては齡若く、權衡正しく品位ある容貌を有し、其の微笑は母らしき慈愛の相を漲らしむ。長女は名をマーガレットと云ひて、此の家に神祕的色彩を添ふるものは其の人なり。釣合ひは美しく調ひながら纖小痛ましきまでの體格を有し、表情更になき蒼白の顏面の中、黑漆の眸のみは異樣の光を放てり。人を見る時、見返さるゝとも其の異樣なる眸は凝然としてまじろかず。彼女の眼は外を見ずして、其の衷心なる何者をか探り見んとするものゝ如し。余がかの室に入れる時、黑裝して大なるマホガニーのピヤノの傍に靜に立ちたれば、アーサー等さへ彼女のあるを知らず。「マギー」はと母に問ひて、母の「彼處によ」と云へるに、彼女は始めて淋しく手をさし伸べて、微笑を含みつゝ、無言のまゝに新來の人々と握手しぬ。

長男は彫刻家にして、既に家ある身なれば感謝祭には來らずとなり。次男はウヰリヤムとて、ペンシルヴェニア大學機械工學科の學生なり。丈けは父に似て低く皮膚は淺黑く、眉間には一種痛慘なる悲愁の色あり。語る事甚だ罕に、しかも其の語るや、更にかの悲愁の色を加へ來るなり。余は彼を見る每に、「フラウ・ゾルゲ」のポールを想起するを禁ずる能はず。三男はわがアーサーなり。四男はトーマスとて余等と校を同じうす。アーサーに似たる體格を有し、しかも筋肉逞しく、血色雙頰に漲り、饒舌ならざれども語れば必ず人を笑はしむ。此の家のハーキ

コリスは彼なり。五男はジェームスとて父の寵兒なり、中學校にあり。體格と容貌との麗しきは、遙に他の同胞を凌駕し、女裝せば美しき少女たるを得可しと思はしむ。乳白の精やかなる皮膚、潤澤なる黃金の髮、靑く澄みたる眸、希臘式なる鼻梁、滑らかなる口辯、張りある笑聲、人なつこき性情を以て、彼は此に神鄕のアポロたるべし。彼の下に二人の女兒あり、姉はフランセスとて十三、妹はカロラインとて九つ位にや、二人は黑が白と異なる如く相異なれり。フアニー（フランセスの略稱）の性情は、珠玉を霞もて裹みたるが如し。眼の表情にも、微笑にも、語るにも默せるにも、彼女の周圍には、彼女に深度を與ふべき一種の氣ありて靉けり。されば語るよりも聞ける時美はしく、働けるよりも考へたる時美はしく、考へたるよりも無想の時更に美はしきは彼女なり。彼女は美はしけれども、其の相貌には美はしき何者もあらず。濃けれども短き黑髮、際立ちて黑き皮膚、大なる手、長きに過ぎたる脚、不規則なる鼻と唇とを見たるアーサーの一友は、「彼女はジプシーの如し」と云ひたる事あり。されど余が酷愛するを禁ずる能はざりしもの。最後まで戶外に立ち居りて、余を招じ入れたるは彼女なりし。ベビー（末兒なれば何處も同じ、カロラインは尙かく呼ばるゝなり）は黃髮紅顏、人形の如き小兒なり。人をおぢず、憚らず。語り、笑ひ、泣き、命令し、驅役す。長髯の老父も、彼女の前には何者にてもあらず。余は小兒なるが故に、彼女を愛し得たり。されど彼女は時に衷心よりの親切を盡す事あり。

アーサーの甥ジョセフと云ふは、齡ジム程なる長大の少年なり。敢爲の氣象に富みて、快濶丈夫の資あり。其の妹なるメリーは溫良可憐なる少女なり。

クローウェル氏夫婦と余とは、立ちながら簡單なる會話をなせりしが、長くして發音し難き余の名は、明瞭に記憶せられ、家にある凡ての日本的裝飾品は、悉く四壁を飾れり。余は先づ其の周到の用意を心に謝しぬ。須臾にして今迄あらざりしフアニー入り來り、食卓の用意は成れりと云ふ。

ピヤノとオルガンとの間を抜けて戸を排すれば、居間を兼ねたる食堂あり。客室と同じく、低き天井は薄暗く煤け、壁紙は汚れて、粗雑なる額縁に入れたる油繪數多く懸け連ねられ、楕圓なる食卓に雪白の目立ちて見ゆる卓被をかけて、種々なる形の椅子は並べられたり。余は正客の座に招ぜらる。左にはクローウェル夫人、右にはマーガレット。クローウェル氏が得意の絶巓は其の兒輩を膝下に集むる時なるべし。かゝる時に其の辯は流暢となるなり。小頭巾を屢ゝ後顱に押しやりながら、むづかしげに寄せたる眉の皺の間に、隱しおふせぬ喜悦の色あり。今宵はアーサーが食卓主なり。大なる七面鳥を自在にあつかひ兼ねて椅子より立ち上り、割烹刀をむづかしげに動かすを、蜜の如く笑み傾けたるクローウェル夫人は珈琲を注ぎながら注意を與ふ。メリーはフアニーと睦じやかに相語り、ウォリーは默してパンを喰ひ、マギーは伏視して猫を撫で、ジョーとジムとは隔たりて座を占めたれば、大聲擧げて手まねさへしつゝ何處かにて鬪はれしフートボールの事語るを、トム折々口さし入れて、かくなりし、さにはあらざりしなど云ふ。ベビーは彼と一語、これと一語、手は匙や皿やを忙しく此處彼處に分配す。主賓なる余は默して微笑めり。一種の醉を覺えたるなり。

食事果てゝ後、少女等は狼藉たる卓上のものを厨に運び去りて、彼處に懽語と笑聲とを湧かしめ、我等は再び客間に歸りて、賑はしき座談に夜を過ごさんとす。ジョーとジムとは卓上の話題尙ほ盡きざるにや、口角沫を飛ばして打ち語らひつゝ、客室に入り來れる時、クローウェル氏は當さに余を招きて、日本の事共聞かんと身構へたる時なれば、「ジョーもジムも茲に來よ。フートボールなど口にするも國辱ぞ。陋劣なる蠻戲を喋々して、已れを卑うするを思はざるや」と威丈高なり。ジムは「又例のが始まれり」と、氣にする氣色もなし。されど余は問はるゝまゝに、我國の事情を拙き英語にて何くれと語り出でしが、聽者の熱心に耳欹つるを見るまゝに、漸く氣勢を得て、遂には英語の拙きことも忘れ果てぬ。大は立憲君主政體の得失より、小は下駄の鼻緒のすげ方まで、

矢つぎ早なる質問を、兎(と)受け、かう流す間に時移れば、ク夫人は二少女を顧みて、就寢の時は既に遠く過ぎたりと云ふ。今宵のみは尙ほ寢ねであらんと云ふ。兎角の爭ひありしが、二兒は遂に母の膝に頭を埋めて、寢前の祈りを捧げぬ。母は雙手を二兒の頭に措き、首を垂れて默禱せり。

談興十一時を過ぐる迄猶絕えざりしが、ク氏は「客人は疲れ給ひしなるべし、寢ね給へ」と云ふ。余の神經は昂奮して、尙ほ寢ぬるに堪へざりしかば一曲ピヤノの彈奏を請へり。ク夫人、マギーを顧みて「何か彈じ給はずや」と云ふ。マギーは躊(ため)ふ色なく、熱したる面持もなく、ピヤノに對してシューマンのメロデーを彈じぬ。

かくてアーサー、トム、ジムと余との四人は、階上なる寢室に入りぬ。「君の寢臺は、有名なる震鳴床(クリーキングベツト)と云へるものなるぞ。驚くな」とアーサー云ひぬ。更衣して横はらんとすれば、實に古型にて木造なるが、材々相摩して聲を爲すなり。寢藁も貧しく堅けれども、余は尙ほ醉へるが如く、凡てををかしと見ぬ。

アーサー等は久濶なる故家の枕に頭を横へて、幾ばくもなく幽かなる鼾聲となりぬ。余は何時までも眼冴えたれば、頭を抱きたるまゝ窓外の寂寥に耳を傾けたり。寂寥てふ無聲の聲に耳をかたむけたり。今は秋の蟲も早や死に絕えたるにや、自然も亦深く眠れるが如し。

忽ちにして階下に輕くピヤノの聲起りぬ。半睡なりし余は愕然として耳を欹てたり。嫋々(でう／＼)たる哀音は四圍に滿てる無數の聲と相爭ひて、晝には聞き難きをのゝきを爲す。翌朝、余は昨夜の彈者がマギーにして、曲はショパンのファンタジー。彼女に取りて明暗の他に、晝と夜との區別なきを知り得たりき。

余はかくまでに回想を辿り來りて稍ゝ疲勞を覺えたり。次日更に筆を新たにすべし。

巖頭より見やれば潮は正に退き去りつゝあり、眞晝はやがて來らんとするなるべし。

（一九〇八年四月「文武會報」第五十四號所載）

日記より

This moment yearning thoughtful, sifting alone,
It seems to me there are other men in other lands, yearning and thoughtful;

*　　*　　*　　*

O I know we should be brothers and lovers,
I know I should be happy with them.

——*W. Whitman.*

一

美しき秋の日和打ち續きぬ。晴れたる秋の日ばかり心ゆくものはあらじ。一歳が間に經來りたる事や想やを、靜かに回顧して、微笑まんにも、嘆かんにも、ふさひたる秋なり。物の亂れたるが、整へらるべき時なり。少女だに靜かなる夜頃を針箱に亂れたる絲ほどき分けんとの心萌す可し。大空を漂ふ雲も、何處より來り、何處に行くかは知り顏なり。我も亦寂寞の中に立ちて心に觀ずれば萬縷の想直々たる一道の絲となりて、美醜の明らさまなる、宛ら明鏡の前に立つが如し。秋の寂しきはこれあるが故なり。

二

我は磯邊の礫を羨む。小さく醜く黑けれども、永遠はそが導者、そが鞭撻なり。風に逐はれて起る大波小波、思ふが儘に岸を嚙みて、そを弄び得可し。されど風死まば波は無からん、風死むとも其處に一粒の礫は殘れり。

三

……我が日毎にさまよひし芝生の彼方なる小さき森に分入りて、椈の老幹に 'T.A. '04, Japan と、我が名彫り付けぬ。をかしきは人の心なるかな、凡ては逝きて停まる事なき此の世に生を得ながら、何物かの記憶を殘さんとは斗るなり。我が名を彫りし古木のほとりは畑となりて、其の幹の切り倒さるゝ時ある可し。樹益ゝ老いて葛蘿そを蔽ひ盡すの時ある可し。一夜の風雨に脆く摧くるの時ある可し。若しくは雷火瞬轉の間に、そを割り裂きぬ可し。我よくこれを知る。かくても尙ほわが名を其處に彫らんとするの念を禁ずる能はざるなり。ナポレオンの爲せる所アレキサンダーの爲せる所、亦唯此の如きのみ。彼等は野心欲望の爲めに驅られて、億兆の血を徒費し骨を摧けりと人は云ふ。されど欲望なるものは何ぞや。野心欲望の下底に藏めるものは何ぞや。不朽の追慕なり、永遠の告白なり。彼等の持てる所のものは、我等の持てる所のもの。我等の持てる所のものは、彼等の持てる所のもの。彼等と我等との持てる所のものは、實は歷世の尊者聖師が總てに勝りて珍重擁護せる其の物なり。尊者聖師は其の眞諦第一義を護り、彼等は終世其の摸索に煩ひ、我は其の摸索に悶ゆるの苦痛をだに避けんとす。思へば彼等に勝りて憐れむ可きもの、わが上なるに似たり。

四

此の朝患者と共に芝生に出でゝ、E氏より贈り來れる Journal of George Fox を讀む。嘗て日本にありし時、

其の譯文を讀みたる事ありしが、感興の異なれる霄壤も啻ならず。其の文字は一々活力をもて動き、エマーソンがモンテーヌの文を評せる語ならねども、試みにこれを切れば生血の淋漓たるを見んとす。彼は幼少にして既に純潔と經驗の何者なるかを解し、弱冠商家に傭はれては"Verily"の語を套用し、人をして「フオックス一度此の語を用ゐば安んじて凡てを任じて可なり」と云はしむるに至り、十九歳にして神の聲愈々其の衷心に逼るや、彼の眼忽ち開けて世界の虚僞と惡德とを見、其の痛みを忍ぶに堪へずして絕望に沈まんとし、遂に意を決して大なる豫言者の生涯に入りしまでの辛酸瞻望に堪へたり。彼の人格は驚くべきかな。彼の自任は如何に高きかな。彼は宛ら鏘々として鳴りやまぬ銅鐵の古鈴の如し。これを鞭うつ事愈々激しければ其の鳴愈々高くして愈々強し。神にある人正に此の如くならざる可らず。此の齷齪措く所を知らざる人生に處して、恐怖を知らざる人は尊む可きかな。幾度か卷を掩ひて同情と感激とに滿たされしぞや。されども我は云はん。我は彼の跡を踏む事を得ず、彼は自己の罪惡に關しては極めて容易なる解脫を得たればなり。其の書を見るに、彼は一個宗教家的天才なり、彼は尊く惠まれし人なり、尊く惠まるゝ人にはあらず。さるに我は幼くして純潔と敬虔とを感得し、そを愛護せしが如き經驗なきのみならず、幼くして我は色慾を知り、盜みを爲し虛言を吐き、姑息に住み蔭言を避けざりき。而して此の惡性は今に至りて尙拔く事能はず。何故に我はかくばかり卑陋なるぞと、自らを憐れむの外なき事あり。余はかくてフオックスと同情の人たり得ず、我は彼の道を歩むにふさはず。神は步む可く他の道を與へ給ひぬ。われは其の道を步む可し。不遜の性をもて自らを憐れむわれは憐れむに堪へたるかな。

五

汝の智慧を信仰にまで鍛ひ上げよ。汝の道理に火を點ぜよ。犠牲を持てども、祭壇に薪を燃やさゞるものは禍

なるかな。

六

先途週N市にありて過ごせり。大なる都會の喘ぎ苦しむ樣は人の心を穩かならざらしむ。都會は晝叫びて夜悶ゆ。田園にありては人は自然の隷屬者なり、都會にありては人は歷史の隷屬者なり。自然との交渉にありては、人各〻與る所あり。歷史との交渉にありては、代表的若干數の頭顱を除くの外は唯飛塵破沫の如くにして去る。此の如き多數群集の喧々囂々の中に沒入して、一個の秩序を案出せんとするは不可能なるに似たり。目前にして都會に接すれば、宛ら一個苦悶せる巨人を見るの想あり。何の苦悶ぞ。何の故の苦悶ぞ、其の苦悶を匿し得るは何なるべきぞ、絕えて知るに由なし。ミケランジェロが沈痛なる畫圖に對するの感あらずや。

されど見よ、彼處に大なる渴仰あり、熱慕あり。聞け、その大なる叫喚に耳欹てよ、徒らに汝の耳を閉ぢて、田園の神聖を云々するを休めよ。汝の耳を閉ぢ、眼を塞ぎたるによりて、都會は亡せず、此の世に都會は存せり。人彼處に住めり、彼處に父母あり、彼處に子あり、彼處に若き男あり、彼處に若き女あり、彼處に大なる資本主あり、彼處に多くの勞働者あり、彼處に大なる神の鎔爐あり。金と鐵屑とはまがふ方なくふき分けらるゝなり。忘るゝ事勿れ、彼處にも汗あり、涙あり、而して血あり。「神田園を創り、惡魔都會を創れり」と云ひし人の冷刻なる心をわれは惡む。

七

夜ほの〴〵と白み初むる頃、列車はロードアイランドを過りて、コンネッカットの丘岡に並び立てる若き林の間

を過ぎつゝありき。うと〳〵と夢多き眠より覺めて窓外を望めば、月依稀として稍ゝ低く西の空にあり。空は透藍、黄を湛へて、春淺き草野の雨に見るが如き軟き綠となり、片々鱗の如き白雲は、濁りなき桃色に染みて、半天被衣着たるが如き朧の光に榮えたり。地には日の目猶ほ裕かならねば、薄暗萬象を籠めて、物の影は藍色勝ちたる紫なり。過ぎ行く林の若き梢、厚き下草、七分は秋と口づけしぬ。殊に美しきは樺の若木なり。白幹纖枝なよやかなる事處女の如き木振なるが、心臟の形せる細き葉一々異なる黄や紅やに染みて、朝風にほゝゑみ交せる。われは今朝より、白樺を此の世旅路のなつかしき伴侶に加ふべしと心決めぬ。

さるにても、花の色の移ふにも增して、短きは自然の美はしき瞬時の移ひなり。人は多く思ふ、自然は、眼を放つ何處にも展べられたり。自然を見んとすれば、眼を開けば足る。五十星霜長しとは云ふ可らねども、自然を見盡さんには、餘りて猶ほ裕りありと。されど自然はつゝましき深窓の乙女なり。彼女の被衣は深く、其の胸はかき合はされたり。

然り。平凡なる自然も、世の凡てのものよりは美しかり。されども自然が——笑へるなるか泣けるなるか——色と形と聲とに於て、破る可らざる調和に入りし瞬時は、其の容何物よりも美に、其の生何物よりも短し。

今朝我が見たりし自然の姿は、殆んど哀れなる人を戰き畏れしむる程美しかりしが、つれ〳〵と見る間もあらず、西北に濁れる雲起り、間然すべからざる調和は忽ち破れて、自然は平凡なる自然に歸りぬ。

八

生とは何ぞや。知らず。さらば何が故に生くるや。知らず。さらば何が故に死せざるや。死せざるは、死をだに知らざるが故なり。

生と死とは、我知らず。されど我一個の事實あるを知る。我生を呪ひ、死を思ふ時、一の力わが裏にありてわが意志に抗するなり。其の力には暖かみありて濕ひあり、而して光あり。其の力は幻象を現はし、聲音を爲し、其の黨するものを愛するや酷しく、其の敵する者を惡むや甚し。其の力は常に我が意志を屈曲して、わが知る事なき他の意志に合一せしめんとす。我れ時に藻掻きて其の力より脫せんとすれば、其の者聲を爲して曰く、「我汝を創り汝我の內に生く。汝の我より脫出せんと勉むるは、波の水より脫せんと勉むるが如し」と。其の力我に悲しましめ、瘦せしめ、眠らしむ。然して此の力のみ我を活かしむ。實に、我は其の力が弄ぶ傀儡なるに似たり。殘忍なる其の力よ。

九

昨日古きスクリブナー誌を繙き、ロゼッチの亡せし頃、其の親しき友によりて記されたる回想錄を見出でたり。其の一節に曰く、「彼は其の經歷に於て年齡に於て、ラファエル前派の建設者たらんには、適しからざりき。されども彼は凡てに勝りて骨頭を有せりき。是れ彼が事實に於て頭領たりし所以なり。彼は虛僞と、明晰を缺ける想像とを惡めり。花一ひらを描くにも、一道の光線を描くにも、其の花其の光線の肖像を作るの意氣を以てこれに臨めり。これ此の派の作をして動もすれば生硬の氣を帶ばしめし所以なれども、同時に此の精神を注ぎて此の派の特色は討ぬ可らず」と。さなり、彼は此の屈ぐ可らざる忠實眞率の意志と感情とを以て、其の畫と其の詩とに施せり。彼の感化力の如何に强甚なりしかは、ミレーが彼の生存中に成せる畫と、死後に出したる作とを見れば明かなる可し。彼の生前にありては、ミレーは恰も嚴父の前にある小兒の如く、其の死後に至りては其の作風頽然として亂れ、復た收拾すべからざるものありき。

若し、ロゼッチ自身、大なる風潮を作る能はざりしとするも、彼の畫と詩とは、世紀の畫と詩とをして、大なる屈折を爲さしめ、新たに生るゝ藝術の源頭となりしは否む可らじ。

一〇

此の美しき小春日和を、エマーソンの故地に探らんと決したり。

秋に入りてより、黄葉の黄なるに對して、煉瓦の色殊に赤き法科講堂の角より電車に乘る。自然を賞せんとてか、教會に列せんとてか、車は人の山を築きたり。車の外にも、衣香傘影共に華かなるを載せたる自動車、輕車の類、轂を摩して落葉の中を走る。

街樹の梢漸く疎らとなりて骨を碧空に衝き、滑かなる道には黄なる樺なる落葉、堆き迄に積りたり。色紅きショール肩に卷きたる老女の髮白きが手籠かき抱きつゝ、とぼ／＼と紫の影黄なる光の間を行く。華かなる色のリボン、花、羽等を幅廣き帽子になよ／＼と裝ひて、裳輕く十二三の少女の、手つなぎて歩める。黑に裝ひし背長き老紳士の、手を後ろにして緩かに歩を運べる。大學生の緋なる校帽阿彌陀に被りて、戞々たる靴音高く行き過ぐる。それ等の群を秋の日は靜かに暖かく照らしたり。

家の漸く疎らになれる頃、窓より窺へば、道より延びて林に入れる野の草の、際立ちて綠に映えたるが先づ眼を喜ばしめぬ。

レキシングトンと云へるは、聞きしにまさる小さき町なり。三叉せる道に狹まれて、こゝも落葉深き芝生の一端に、獨立戰爭第一の先驅者大尉パーカーの銅像立てり。自然石の礎の下には、年若き男二人安坐して、長閑に煙管くゆらしたり。當時七十餘人の壯丁が流したる尊き血は、乾き果てゝ年往きぬ。平和は彼等の骨の上に槃り

たり。一度修羅の衢なりし此のわたりにも、秋の村の靜けさは見らるゝなり。草刈られたる牧場には、牛羊日の光を浴びて立てり、取りめぐらしたる柵には、數人の勞働者相倚れり。ごしき色に塗りたてられたる逆旅の看板にも、雜貨賣る小店の玻璃窓にも、晝の光は輝き渡れり。樹の下蔭に、小兒の頰の如き林檎、うづたかく積まれたるは、やがて林檎酒に釀さるゝなる可し。

電車は稻妻の如く、此の平和の村を閃き過ぐ。我は今迄登り降りせし乘客に眸は凝らさゞりしが、思ひ出でゝ室內を見廻せば、車を代へしか、疑ふ計り異なれる人の乘れるを見出でぬ。わが前には三人の婦人あり。始めより同乘せるものにて、案內記取り攜げたるに、遊覽の客たるを知るべし。左には老いたる人坐せり。鍔廣き帽子の灰色なるを目深かに被りて、雙手は黑く光りたる杖の上に重ねられたり。皺多き衣にも靴にも、此の邊りに住む農人なるが明らさまなり。隣りには若き婦人あり。頰赤くして肉豐かに、十指は最も太し。眼は羊のそれの如く、柔和と空虛とを示せり。黑の上衣鮮綠の裳、色の配合のこちたきに、此の人やがて樵夫の妻たるべしなど思ひぬ。最も眼を牽きたるは、左斜に坐せる人なり、誠の齡は尙ほ四十計りなるべけれども、白髮斑々たれば老いて見ゆべし。すら〳〵と瘦せて丈高き樣は蟷螂を思ひ起さしむ。髮延ばしたる下顎を、打ちふるはせつゝ眼鋭くあたりを見廻して、何とはなき驕慢の態度に腕組したり。ソローの亞流か、ホーソーンの輩か、我はコンコードにかくの如き人ありて住めるを怪しまず。わが後方には二人の老いたる農婦あり。黑に裝ひて黑の小さき帽子戴き、一人は林檎盛りし籃、一人は雪白の衣着せたる少女を膝に据ゑたる樣、宛ら黑ビロウドの上にルビーとダイヤモンドとを置きたる如し。

コンコードに入りて電車の停れる處に廣場あり。これより三道輻出す。煉瓦に圍まれしが、昔忍ばしく踏み滅らされて、家並みは三階なるは稀なるに、痛く低きも交りたれば、宛ら老いし人の齒並みの如し。主街の一端に立

ちて彼方を見やるに、家の赤き青き、看板の四角なる圓らかなる、參差として相交れるが、やがては秋の杯に醉ひ飽きたる街樹の黄と紅とに泥じ去るなり……

二

人に遠ざかるの時を作るを忘るゝ事勿れ。種子播く者は風なき日を擇びて畑に出づるに非ずや。種子風に誘はれず、播く者の定めたる處に落ちなば……風雨頽嵐何事をかなし得んや。また〳〵其の發芽を催すの媒たらんのみ。

人なき寂寞の境を求むるを忘るゝ勿れ。種子播く者は風ある日を擇びて、畑に出づるの愚を爲さんや。

三

雪降り積みたる橋の袖に、形ばかりなる屋臺店あり。煮たるは何ならん、異臭地を這ひて、寒空に散りもやらず。

黄なる齒の眇なる嫗、紺色あせたる暖簾の蔭に坐してこれを賣れり。

暖簾の中に包みたる頭をさし入れたる者あり。酒氣を帶びたる若き勞働者なり。湯氣頻りなる鍋の中より、一串拔きて脣を燒かじと白き齒あらはに貪り喰ひしが、やがて銅貨一つなげて彼は去れり

夜は落ちて空は雪となりぬ。人の往來は絕え果てたり。

嫗のおぼつかなげなる眸は、とろ〳〵と風に搖ぐ灯の下に、鍋より立ち上る湯氣を見据ゑたれども、何を見据ゑたりとも、自らは知らぬなる可し。古き鍋の傍には先きに抛げられたる銅貨一つ横はれり。

一三

窓より望めばインハルテル停車場の黄なる煉瓦、冬の雨に濡れて、道行く人、馬車、電車の聲唯囂し。自然如何に狂ふとも、其の聲には常に破る可らざる諧調あるものを。人自然の一分子と生れて、何故に爾く諧調を破るに巧みなるや。

一四

例の家にて中食す。M氏もあり。見るに悲しき面ばせかな、生氣全くある事なし。かくても世に生くる、世に生きんとする。あらず、世に生きざる可らずと信ぜんとする、其の不可思議なる力の源は何處にあるなりや。此の同じき力、亦我をも拉して世に活かしむ。我等が此の世に活くるを見るに、其の生くる所以を明日は解し得可しとの希望にあらず、希望を得んだに希はず。

愚かなる者よ、我かく記して、而して明朝再び床上に眼を開くなる可し。

一五

今朝隣室に住める新聞記者なりと云ふ人、家人と意合はずとかにて、他に移りぬ。打ち聞くに、言ひ罵りつゝ荷を造る音、何とはなく人の心を牽く。窓の外には雨しと〳〵と降り居たり。ラスキンを讀みながら、彼の人の移り行ける家に、濕りたる荷の着く樣抔想像して、幼き折石板に徒ら書きせし時の如く……（羅馬にて）

一六

フォリーノに汽車を代へて、アッシシに達せしは、秋の日のやゝ傾ける頃なりき。旅宿の乘合馬車には我等二人なり。馬車は葡萄畑を過り、橄欖園を經、左にサン・フランシスコの巨刹、城の如く山背を壓せるを眺めつゝ、ホテル・レオーネに入りぬ。

直ちに導者に伴はれて、サンタ・クララの尼院に至る。死せるが如く靜まりし街は、淸淨なる鋪石に冷えて、西の空には澄みたる月の光あり、寺は荒削りの大理石もて建てたる初代ゴシックなり。戸を排して內に入れば、白壁に映ずる夕陽の色の美しさ云ふべからず。左方なる一龕にクララが教友の遺骨あるを見すると云ふに、重き心もて待てる間、白障の彼方忽ち火影にかゞやきて、人の影靜かに二度三度動きたる後、白障は開かれぬ。打ち見れば、暗き一室の中、白蠟の火、滋々として燃えかすれたる下、黑衣して首垂れたる尼、金襴に裹まれて色ざれたる髑髏、地はアッシシ、節は秋、時は夕暮、われも亦あながちに捨て果つべき心のみにてはあらざりけりと、つら〳〵思ひぬ。

一七

戸を敲かれて眼を覺まし、燭に灯すれば五時半、曉の鐘ウムブリヤの平野を籠め盡したる霧の中に、渦卷き鳴りぬ。面白きはかしまだちする旅の心なり。夜ならぬに灯して、面洗はんに瓶の水は冷えたり。朧明りを食堂に入れば、昨日相知となりし英人あり。「新しきは胃によからずこれを」とて、一昨日燒きしと覺ゆるパンを頒けられて、香ある蜜に朝餉を終る……(アッシシにて)

一八

フロレンスは物乞の多き市なり。

世に捨てられて世を捨てず、人の憐みを受けて人を呪ふ。親ありしならんも既に路傍の人、子もなしたらんを今は相知ることとなし。夜々に物思ふ事多くして、晝は働くべき腕を空しく垂れたり。我が欲する所は他が欲する所ならず、他が愛する所は偶ゝわが厭ふ所、友は仇敵にして仇敵は友、歴史なき過去を作りて、希望定かならぬ未來を逐ふ。要なき暖かき心を彼も稟けたれば、たまさかには想の花も咲き出でけんと、摘む人も見る日もなくて、枯れ凋みぬ。訴へを聞んかと云ふ耳なければ其の口は默す。其の眼には日の光も月の色も唯一つなり。憫笑を買ふべきむさき衣を着けて、平然として知らざる如き其の心悲しからずや。物乞に似たる人の世を見ずや。

一九

此の夜家より『太陽』を送り來る。――氏の文あり。余はこれを讀みて涙を零せり。――にありし時の彼の面影は余の眼には漸く薄らぎ行くを覺ゆ。余は猶ほ彼の主張を疑ふ事をせじ。そは一人の信じたる者を失ふは、余に取りては無上の苦痛なればなり。されども余の胸は靜かなる事能はず、寒氣を冒して外出し、何處ともなくさまよひ歩きぬ。人は遂に其の窮極に於て孤立せざる可らず。而して余はそれを爲すの勇氣なし、恥ぢざる可けんや。

二〇

人は何者にも敵する能はず。人は人の前にすら奴隷なり、唯惡に於て彼は最も適はしき敵を見出し、これと健

闘するによりて、彼は世の何物よりも强し。

二

處を異にし時を隔てゝ藝術が人文の高潮に達したるもの三、一を希臘藝術とし、二をゴシック藝術とし、三を復興期の藝術とす。凡そ藝術と目稱すべきものが發達の高潮をなす時代を見るに、必ず智的方面が綜合的傾向を示せるときにあるものゝ如し。ペリクレースが外敵を制し、所在の都市を服し、人心の傾向一途に歸して、適所を確立するの必要を感じ、辨證の哲學が人事に直觸せる宗敎的本能に陶冶せられたる時、フィデヤス、ソフォクレース、アリストファネス等の天才は儕出せり。驚異すべき事體の一致は亦、ゴシック藝術の上に見る事を得可し。久しく東漸せる移民の動搖に惱まされ、無法の權威をむさぼりし法王廳の壓制の下にありし北方の人民が、自由市のギルトとの組成によりて、獨立自治の覺醒を爲し、常に外來の刺戟に應ずるに維れ急なりし人心が、内向の餘裕を得て、一個の團體(一國にせよ一市にせよ)が注意する所、其の團體内部全體の事に渉るものあるに至つて、蔚然(うつぜん)としてゴシック藝術の名花はほころび初めたり。復興期に於ける美意識の發展も亦然らざるはなし。若し綜合的傾向を喜びたる希臘盛代の文化が、フロレンスに住みたる巨頭を覺醒する事なかりせば、かく華麗なる人心の覺醒は我等が歴史を飾らざりしならむ。此の光榮ある三大時期を軒輊(けんち)して何れを優秀となすべきかは讀者も亦惑ふ所なるべけれども、一事の誰が眼にも否むべからざるは、此の三大時期が發揮したる特色の相異なり。希臘とゴシックとは創造的なり、復興期は大成的なり。されば前二者にて時に單調未完の悲しみありて、後一者には誇大不整の嫌ひあり。我はわが前に聳え立ちたるドーモ Domo を仰ぎ、これは復興期の建築に比して、直ちに其の明晰なる例證に逢ひたるを思はざる能はず。故に頭裡にゴシック寺院を思ひ浮べ見よ。尖頭の長柱矗々(ちくちく)

として空を仰ぎ、雜然、紛然、糾然、一種厭惡の念を禁ずる能はざらしむ。眼前これに接する者も亦此の感を免るゝ能はざる可し。されども一度其の堂に入り屋に上り、細部を觀視して、顧みてかの復興期が產みたる建築を思へば其の雜殆んど堪へ難からんとす。我等は再び裸にして花を冠りたるアルカデヤの昔に住まず。心漸く複糾して自ら華麗と彩潤に親しむ。ゴシックも復興期も、等しく此の思潮の要求に應じたるものながら、一は自ら創り他は假りたるの跡遂に否む可らず。暫くゴシックが走りし極端なる傾向を恕して、大體の趨勢を學べ。何ぞ其の自創的にして發展の餘地裕かにして、而して美的直覺の花の如きや。不幸にしてゴシック藝術を產みたる精神は、其の餘りに高かりしが故に、花とならずして早く萎み落ちぬ。急湍の勢もて走る時代は、其の萎花の上に回古の文化を樹立し、倒天の力もて馳せて現代の文化を生みなせり。知らず僅かに蕾みて空しく摧かれしゴシックの文化は、其の種子を後代に見出ださずして已むべきか。或は繼承せる文明組織に漸く倦まんとする現代の人心は、洄潮を溯つてゴシック文化に新なる活泉を求め出づべきか。來るべき藝術（敢へて藝術のみと云はんや）の發展に關して、不斷の興趣もて觀察すべきは此の點にありとわれは思ふ。

人は漸く部分に厭き始めたり。科學は漸く各分科の綜合する所が、歷史の事實となす角度に就きて學び始めたり。社會科學は形而上學と交涉せる諸點に注視し始めたり。人心の傾向は暗々裡に、過去が知らざりし世界的思想の表現を求めつゝあり。淸新なる藝術が生るべき舞臺には背景帷幕の備へ漸く成らんとするにあらずや。開場の夕、袖を連ねて伎を遊ばすの優人は、復興期の人の心もて舞はんとするや、將たゴシックの世の意もて歌はんとするや。

（ミラン客舍にて）

インガーソールを讀む。會心の句、

「他を奴隷視するものは自由なる事能はず。權利を無視するものは、己れを侵害する者なり」

「意志の恐怖を退くる時、心臓の頭腦を贊翼する時、義務の運命に拮抗する時、名譽の死の脅迫を叱咤する時、

——共の時にヒロイズムはあり」

二三

若し憐み得る廣き心あるものあらば、暗にある反逆の人を憐めよ。

二四

午前は岩鼻にて瞑想す。余は生れてより今に至るまで嘗て中心の要求の爲めに動きたる事なかりき。余は世間體の爲めに動きたり、卽ち人よりよく思はれんが爲めに動きたり。余はかくして、或點に於て、人に譽められたり。されども彼等は余を譽むる事に於て、余は輕蔑せり、此の如き尊重を贏ち得たる人は呪はるべきにあらずやなど。

二五

甲蟲の飛ぶを見よ、勇ましき姿ならずや。共の勇ましさは、大鷲の羽を伸したるまゝ、圓圈を畫きて空を翔け行くにも增したり。

風によりて、名もなき草葉が作りなす美しき曲線を見よ。風のすさびの强弱に應じて、共の曲線の深く淺くなる樣を見守れば、日も亦足らざるを覺ゆべし。

二六

アーチ街にて不圖顏知れる汚き乞食に遇ひぬ。遇ひし瞬間に余は忽ち彼の何人なるかを知れり。余が降誕祭の休暇を利用して、P府に滯在し、商業會議所の圖書館に通ひつゝ讀書せる時、常に彼處にて遇へる一人の男ありき。髯むさく生じて、衣は皺多きを着たり。余は讀書を妨げられん事を恐れて、彼の頻りに語を交へんとするを避けたりしが、一日彼は遂に余を捕へて濁りたる聲に抑揚なく、種々なる事語りたり。「我も亦君の如く挾書の人として、敎室の椅子に坐したることもありしが、中道にして校を去り、諸處に放浪して今日に至れり。思ふに學究の用は實務の急に如かず。新進君の國の如きにありて讀書を事とするが如きは固より本來を謬れり、わが親戚に毛氈の製造に從事せるものあり、厭ふ事なくば我請ふ君を率て其の規模を示さん」と。されどもわれこれを固辭して館を出づれば彼も亦從ひ來れり。かくて誰彼時の街は人の往來忙はしき頃、彼は余を見返り勝ちに、余は彼を見返り勝ちに相別れぬ。余の心は此の偶邂の人の上に繫がれて、此の圖書館には明日より來らざれば彼と相見るはこれを以て最後とすべしなど思ひぬ。

而して見よ、余は再び彼に遇へるなり。人の運命の轉變何ぞ爾く量り難き。僅かに八箇月にして彼は殆んど別人の如き容貌となりぬ。其の力なき眼は愈〻鈍りて梅雨時の空の如く、口は半ば開かれて唇は厚みを加へぬ。蹣跚として脚許もさだかならぬ歩度に、勞働を厭ひし手は宛ら棒の如く兩脇に垂れ下れり。彼は其の後酒に親しめるが如し。余の眼は彼を見分けつれども、彼の眼は既に余を忘れ果てたり。余は三度び振返り見て觀念の眼を閉ぢたり。畏懼すべき實有の世よ。彼はかくの如くして、彼の道の末遠く走り去るなるべし。彼の地に踏み付くる歩みは愈〻鈍りて愈〻定かならねど、眼に見えぬ彼の歩みは、宛ら疾風の如く疾く鋭くして、遂に大なる顚倒に

至るまでは、休む時なく時限と方處とを横ぎり去るべし。畏懼すべき實有の世よ。

二七

此の夜は寒き雨となりたれば外出せずして案内記取り出して、明日見るべきもの、調べなどす。やがてはそれも厭きて、不圖窓より望めば、道を隔てゝ立てる一人の男あり。七歳には足らじと見ゆる小兒を肩に負ひて歌謠へり。其の歌何の意なるやを知るに由なけれども、打ち聞くに悲しき音あり。我は冷えたるガラスに顔をあてたる儘これを見る。行くさ來るさの人、これも憐れとや見るらん、錢を與へて去るもの多し。其の錢を與ふる人一人一人の心を、冷えたるガラスに額をあてたる儘、夢の如く思ふ。　（ヘーグにて）

二八

過ぎし世の煉り成せる圓らかなる珠、日照らせば喜びの色、月させば憂ひの姿。
人の心てふものを、かくと思ひ做しても見るなり。

二九

二つの道あり、凡ての人は其の岐點に迷へり。此の二つの道の何なるかを明瞭に云ひ得たるものは少し。されど其の必在を感ぜざるものはあらず。アダムは嘗て其の岐點に迷へり、われも亦同じき所に立ちて迷へり。
われの迷へるを見て笑ふものよ、汝もわれと同じき所に立ちて迷へるを知らざるか。
汝は既に業に迷へるを感ぜり、而して未だそを知らざるなり。

われはわが迷へるを憐れみ、而して自己を鞭撻すべし。
汝も汝自らを憐れみ、わが己れを鞭撻しつゝあるを指して笑ふの愚を爲し給ふべからず。

三〇

日仄く頃、我等が客車の隣室に一隊の兵士入り來り、我等の室には四人の勞働者入り來りぬ。而して我等の目前にゴルキーが小說の實景は開かれたり。

白耳義製の粗造なる列車は、夕暮に促されたる如く疾く走り出でたれば、其の動搖と音響とは人を病ましむるに足れり。頭上には揮發性少き油燈一つ煙りて、沈みたる空氣を通じて、丸寢したる如き若干の旅心を照らすなり。

かの一隊の兵士と勞働者の一群とは、かゝる光景の中に、突然暗黑より突入し來りぬ。齡五十七なりと云ふ、油じみたる大黑帽頂き、縞もさだかならぬ上衣に、太きズボン着けたるが、わが左斜めの向座を占めて、他の三人の勞働者は其の右と前方とに坐したり。

老いたる勞働者は、其の向ひなる稍ゝ物識りらしき若き男に其の鋒鋩を指し向けたり。われは佛語を解せざれば意通ぜざれども、片言隻語の耳に解されたるより推せば、政治、社會、宗教など論じ居りしは明らさまなり。彼は其の巖の如き拳を、聞かんとする男の鼻端につきつけて、引く手も見せずはついしと他の掌打合せ、其の瞬間に唇頭は潑剌として轉ぶが如き佛語の罵言を漏らし來るなり。一度出でし罵聲は再び腕と拳との力を借りて、更に强張し騰奔し、罵り終つて一座を見渡したる其の眼は輝くなり。一座の一人これに答へんとして僅かに唇を動かせば、彼の拳は待ち設けたる如く其の鼻端をかすめて鳴り、彼の罵聲は囂々として車聲を沒し、隣にて歌へる兵士の歌を沒す、我は快笑もて此の健氣なる一老勞働者の雄辯に聞き惚れたり。彼は過たず、ダントンの再生な

り。彼は自信の上に論理を構成し、以て他の信仰の權威に絶對的否定を加ふるデマゴークの絶好のタイプなり。されど彼の自信には自信あり、其の性格に純一なる所あり。かくて彼は他を動かし得るなり。見よ其の裂きて破りたるが如き顏面の蔭に、何等强靭なる吸引の力を蓄ふるぞ。

かくの如くして過ごす事一時間の後、三人の勞働者は辭し去りて、彼一人殘りぬ。事隅に孤坐して煙草を嚙みつゝ、時に犀の如き齒を現はして、黑く汚れたる唾を處選ばず吐きつゝありしが、不圖隣室の歌聲に耳傾けて、彼は笑ひつゝ立ち上りぬ。何事をかすらんとする程もなく、其の巖の如き拳は破れん計り板壁を敲きて、其の無遠慮なる君は佛國々歌を謠ひ初めたり、隣室は暫く靜まりて、やがて一同の笑聲聞えぬ。老いたる勞働者はこれに耳をも假すことなく其の歌をつゞけたり。彼は驚くべき美聲を有したり。須臾にして隣室に於て、彼の音調に和して、佛國々歌囂然として起りぬ。打ち振り向きたる彼はわれを見て舌を吐く事三寸、再び其の巖の如き拳を擧げて、ハメ板を三度敲きて大口開きて笑ひたり。　（白耳義より佛國への途上）

三一

彫刻に於てはミケランジェロ、繪畫に於てはジャン・フランソア・ミレー、詩に於てはワルト・ホヰットマン、文章に於てはレオ・トルストイ、傾向に於てはヘンリック・イブセン、人に於てはわが祖母。

三二

ミレー巴里に遊びてデラロックの門に入るや、徒弟彼に綽名して「森の人」と云ひぬ。羨む可きかな此の綽名。我は人の中に生れて、人の中に育ち、人の習慣を衣して活きつゝあり。かゝる强く美しく善き綽名は、死に至

ゝるまで、我の上には與へられざる可し。

三三

……思へば同じき人生を享けて、人の履みたる跡をだに討ね難し。

（一九〇八年「文武會報」五十四及び五十五號所載）

札幌獨立基督教會沿革

本年我が札幌獨立基督教會は創立以來二十五年を經ちましたので、それを記念して聊か祝賀の意を表はします。序に當教會が誕生以來受けました困苦や試煉や感謝や祝福を忌憚なく述べまして、當教會に同情を寄せて下さる諸君と懽喜を頒ちますと共に、當教會が此の世に尙存在を續けて居ります理由を御贊成下さる諸君に對しましては、如何に神が此の弱き團體をも愛護し給ひて、其の使命を果さしめる爲めには特別の恩惠を垂れ給ひしかをお知らせしたいと思ふのであります。

當教會が天父の擁護の下に今日まで存在を續ける事を得ましたのは、全く爲し果す可き一の使命が有るからでありますが、それは都合上後段に述べる事にして、先づどう云ふ事情の下に當教會が成り立つたかをお話して見ませう。

輦轂の下では廟堂の議論が沸騰して、西南戰爭が起らうと云ふ暫く前、卽ち明治八九年の頃でありました。時の開拓使長官黑田淸隆氏は北海道に大いに拓地植民の效を擧げようとの心から、先づ高等の農學校を起して有爲人物を養成するの必要を感ぜられ、種々計畫された際、米國マサチュセット州アマスト市州立農學校長ウヰリヤム・クラーク先生が非凡の教育家で有ることを聞き及ばれて、同氏を擧げて農學校設立の事を託する事になりました。クラーク先生は僅に一年間の契約で明治九年の夏東京に着し、黑田長官と玄武丸に搭乘して北海道に向ひました。其の船上で此の武人政治家と武人教育家との間に教育の方針に就いて種々談話が交換されましたが、其の中話頭が德育問題になりますと、クラーク先生は基督教が最も鞏固なる德育教育の基礎をなすものなる事を主張し、長官

は激烈に反對を試み、互に相下らなかつたのでありますが、此の時クラーク先生のトランクの中には既に學生に配付すべき聖書が何十冊か有つたと云ふことであります。それで黑田長官も遂にクラーク先生の熱誠に敵しかねて、陽には許されなかつたが、實際には德育の權を全然先生の手中に委ねたのであります。クラーク先生は一千八百二十六年米國マサチュセット州で生れた新英國人で、學者になり得る敎育を自國と獨逸國とで受け、南北戰爭の時には出征して黑人解放の爲めに花々しい義戰をして到る所に功名を博した人で、此の戰爭が終ると、感ずる所があつてか退いて敎育家となつて農業敎育に力を致したのでありますが、先生は學者たるに勝り、軍人たるに勝り、敎育家たるに勝つて、立派な人間であつたのです。先生が札幌農學校に來られてからの敎育の方法も餘程普通一般のやり方とはちがつて居りました。殊に每朝學生全體を集めて試みた聖書の講義は當時の學生に取つては實に天啓であつたのであります。勿論學生の殆んど全部は基督敎に關して何等の知識も無いものでありましたが、クラーク先生の人物其の者が說き出す基督敎は、學生に强い印象を與へずには居りませんでした。かくて學生の中には先生から配付せられた聖書を繙くものが段々增加しまして、先生が歸國の頃には、黑岩四方之進、伊藤一隆、佐藤昌介、內田瀞、田內捨六、大島正健、渡瀨寅次郞、柳本通義、小野琢磨氏等十六名は、熱心な信者となつてクラーク先生が自ら草した誓約書に署名しました。其の誓約書の譯文は次の如くであります。

イエスを信ずる者の契約

茲に署名する札幌農學校の學生は、基督の命に從うて基督を信ずる事を告白し、且つ基督信徒の義務を忠實に盡して、祝す可き救主、卽ち十字架の死を以て我儕の罪を贖ひ給ひし者に我儕の愛と感謝の情を表し、且つ基督の王國擴がり榮光顯はれ其の贖ひ給へる人々の救はれん事を切望す。故に我儕は今後基督の忠實なる弟子

となりて共の教を缺なく守らんことを嚴かに神に誓ひ、且つ互に誓ふ。我儕は適當なる機會來る時は試驗を受けて受洗し福音主義の教會に加はらん事を約す。

我儕は信ず、聖書は唯一直接天啓の書なる事を。又信ず聖書は人類を導きて榮光ある來世に至らしむる唯一の完全なる嚮導者なる事を。

我儕は信ず、至仁なる創造者、正義なる主權者、最後の審判者たる絕對無限の神を。

我儕は信ず、凡て信實に悔改めて神の子を信じ罪の救を受くる者は身を終るまで聖靈の佑導を受け、天父の眷顧を蒙りて終に贖はれたる聖徒となり、其の喜を受け其の業を勤むるに適ひたる者とせらる可し。されど凡て福音を聞きて信ぜざる者は必ず罪に亡びて神の前より長へに退けらるべき事を。

次に記する誡は我儕如何なる辛酸を嘗むるとも終身これを服膺履行せんことを約す。

爾精神を盡し力を盡し意を盡し主なる爾の神を愛す可し。又己の如く爾の隣を愛す可し。

生命あると生命なきとに係らず凡て神の造り給へるものに象りて彫みたる像、若しくは作りたる形を拜すべからず。

爾の神エホバの名を妄りに云ふべからず。

安息日を覺えてこれを聖日とせよ。此の日には凡て緊要ならざる業務を休み、勉めて聖書を研究し、己の德を建つる爲めに用ふ可し。

爾の父母と有司に從ひ、且つこれを敬ふべし。

詐欺窃盜兇殺姦淫若しくは他の不潔なる行爲をなすべからず。

爾の隣を害すべからず。

斷えず祈るべし。

我等は互に相助け相勵まさん爲め此の誓約によりて一箇の團體を組織し、これを「イエスの信徒」と稱し而して我儕處を同じうする間は毎週一回以上共に集りて聖書若しくは宗教に關する他の書籍雜誌を讀み、若しくは宗敎上の談話を爲し、また相共に祈禱會を開く事を誓約す。希くは聖靈我儕の心に臨みて我儕の愛を勵まし、我等の信を堅くし我儕を眞理に導きて救を得るに至らしめんことを。

一千八百七十七年三月五日　於札幌

ダブリュー・エス・クラーク

かくてニューイングランドの偉大なる教育家は明治十年四月一群の誠實な學生等に名殘を惜まれて、遠く太平洋を横ぎつて歸國の途に就きましたが、先生が播かれた一粒の辛子種やがて當敎會の最も大なる親石となつたのであります。先生が晩年に色々な悲運を嘗められて憂慮の中に殘年を送られた間にも、常に其の念頭を往來して先生に無上の慰藉を齎したものは一は實に先生が短日月間小なる日本の北の端で田舍臭い少數の學生に神の道を傳へたそれであつたと云ふ事であります。兎角悲痛の多い現世に咲き出でた美しい花の中、最も美しい一の花は實に此の溫かい師弟の同情殊に天に一人の父を戴いて其の愛に繫がれた師弟の同情でありませう。私共は此の敎會が今日まで其の存在を續けて、神の攝理をしみ〲と感じます毎に考へずに居られないのは、楡の林と樺の木立の連なつたニューイングランドに立つて居る先生の墓であります。其の墓には雜草が茂つて居るか、倒れかゝつて居るかそれは分りませんが、其の墓の下には昨日も今日も明日も私共に對する同情の火が輝いて居るのであります。

クラーク先生去られた年、即ち明治十年八月函館美以敎會宣敎師エム・シー・ハリス氏が先生の請求に應じて來札せられ、伊藤一隆氏を除き十五名の靑年が同氏から受洗しました。但し伊藤氏は既に明治九年に受洗して英國

基督教會員であつたのであります。當時基督教徒となることの困難は非常なもので、學友の迫害、學校の威嚇に加へて下宿屋までが家の中で洗禮をするのを拒んだので、往來で儀式を擧げようとして亦巡査の干渉を受け、クラーク先生の家で漸やく其の儀式を擧げたと云ふ樣な話も殘つて居ます。九月には第二期の入學生が參りましたが、これも第一期の學生と同じく外國文明、殊に宗教には殆んど接觸したことのない人々で、上級生の傳道に對して始めは手痛き反抗の態度を示しましたが、彼等の衷心には眞面目な忠實な精神が有るのですから、眞理の光は割合に容易く其の心を貫いたのであります。果して一人降り二人降り十三名漸次に誓約書に名を署して、明治十一年六月ハリス氏が來札された時に、足立元太郎、藤田九三郎、廣井勇、宮部金吾、太田(新渡戸)稻造、高木玉太郎、内村鑑三の七氏は遂に受洗しました。

かく札幌農學校の第一期生と第二期生とは全校の中心となつて基督の弟子となり、困難の間に其の信仰を練り、毎週集會を開いて聖書の研究を致して居りましたが、明治十三年七月第一期生は卒業する事になりますので、大島正健、黒岩四方之進、内田瀞氏等九名の信徒は第二期生の信徒と會食などして離別を惜んだ。序に近き未來に於て禮拜堂を設立し我等の信仰を隣人にも分たうではないかと云ふ相談も纏まつたのであります。

其の當時監督教會の宣教師デンニング氏が講義所を北四條東一丁目に開いて居ましたから美以派の青年信徒もこれに出席して自個の集會を廢しました。これ然し乍ら美以教會に取つては信徒が其の信仰を失つたに勝る大事件でありました。所に是等の信徒一同が一の會堂を建設しようとして委員を選びなどして計畫に熱中して居ると云ふのを聞き込んで、米國美以教會は直ちに金七百圓を寄贈して來ました。單純直截なる青年信徒等は固より其の金が裏面に如何なる意味を有つて居るかを考へて見る事を知りません。故に寄贈は拒みましたけれども、喜んでそれを借りる事にし、出來得る丈け速かに返濟する約束で、土地を購ひ、會堂の建築に取懸らうとしましたが

諸種の事情の爲めに其の擧は一時中止の姿となりました。

彼是れして居る中に二三の青年の頭に一つの感想が浮かんで參りました。それは基督敎が何故なれば澤山の宗派を要するかと云ふ事であります。「主一つ信仰一つ洗禮一つ」なる基督敎の信者は何故なれば異なつた信仰箇條儀式習慣の下に互に隔意をして互に壘を守つて居らねばならぬかと云ふ事でありまます。少くとも當時札幌の樣な小さな町で殊に過去から傳はつた宗敎上の傳説もない處で、しかも周圍の壓迫はさらぬだに嚴しいのに、何故なれば二派に分れて互に割據せねばならぬかと云ふことであります。二三の青年等に起りました此の感想は當敎會が起つた理由の基礎をなしますものでありますが故に、聊か茲に申し續けます。深厚なる煩鎖哲學を有する宗敎、例へば佛敎の如きは多くの宗派を有す可き筈であります。また嚴密なる儀式習慣を有する宗敎、例へば神道の如きは多くの宗派を有すべき筈であります。然し基督敎は其の根柢に於てかゝる宗敎とは趣を異にして居ります。基督敎の哲學的分子は單純直截なものでありまして、傳説に束縛されず聖書を解釋して見ますると誰でも一致せねばならぬ二三の動かすべからざる要點があります。これが基督敎の信仰箇條であり哲學であり儀式であり傳説であらねばなりません。若し其の外に種々な信仰箇條哲學儀式傳説があるとしますれば、それは基督敎のものではなく、基督敎の名の下に造られた各宗派のもので有りますので、直接に基督の弟子とならんとするものに取つては全然不用の物であります。考へる迄もなくこれは至つて明瞭な事實でありますにも係はらず、歐米諸國で其の實の擧りませんのは、それは歷史的傳説に縛られて居る結果であります。然るに日本の如き新たに神の默示に浴した國で此の事を廢すのは、僅かな心掛けさへあれば、直ぐに出來得可き筈でありまして、我等は基督敎を奉ずると共に此の天職を全うすべき責任を有して居るのであります。然らば此の天職を全うするには如何にすればいゝかと云ふに、舊來の習慣を脫して直ちに基督に至ると云ふことが最大の捷徑であると信じます。直ちに基督

に至ることは我々が思想の自由を維持することによつて達せられ、思想の自由を維持する事は我々が先づ金錢上に獨立することによつて達せられると確信するのであります。玆に誤解を來たさぬ樣にせねばならないのは、獨立と云ふのは敢て他の好意を無にして我意を張り通す意味ではなく、また國粹保存とか偏狹な愛國心とか云ふものから割り出した考へでもないのであります。切實に申しますれば、凡ての點に於て獨立したものゝみが他に對して眞正に公平な寛大な態度を取り得るのであらうかと思ひます。甲に依賴して居るものは甲に對してのみは公平過ぎる程公平でも、如何にして乙や丙に對して同じく公平なる事が出來ませうか。かく基督教徒が思想に於て金錢に於て獨立し得なかつた結果が、歐米に於て神の名の下に人の子の血を流した原因であります。日本に生れた我々は此の大矛盾を打ち破らねばならぬ、これを打ち破る迄は此の教會は倒れてはならぬ。凡ての基督教徒が一つの體となる迄は此の教會は存在を續けねばならぬのであります。これが實に當札幌獨立基督教會が擔つて居ります責任で、其の爲めに當教會が如何なる苦境に陷り、如何なる天佑に浴したかはこれより語るべき順序となるのであります。

偖て話が前に戻りまして、青年信徒等は會堂建設の企圖は破れましたけれども、貳百餘圓を以て南二條西六丁目(今の白官邸であります)に適當の家屋及び地所を買入れまして、第一第二期の青年は交代して日曜日及び水曜日の禮拜を司り、會員も漸次增加致しますし、監督教會員の信徒も合併して呉れるのみならず、オルガン書籍をも寄附して下され、又横濱神學校卒業生角谷省吾氏は自給傳道の志を起して來札し忠實に教會を補助されました爲めに教勢頓かに盛んになり、從つて教會獨立の問題も熟しまして遂に下の理由の下に獨立を宣言することになりました。

一、同窓の學生其の宗教上の意見の殆ど相同じきに係らず分離するの不可なる事。

二、札幌の如き狹隘なる市街に二派の集會所を設けて競爭するの愚策なる事。
三、嚴酷なる信仰箇條と煩雜なる禮拜儀式の束縛を厭ひたる事。
四、外國人の扶助を借らずして我國に福音を傳播するは我が國人の義務なりと知りたる事。
然し乍ら世の中には情實と申す不思議なものがありまして、如何に明白な正當な理由の下に企てられた事柄でも、此の情實の爲めに無殘の障碍を被る事の少からぬものと見えます。明治十四年も雪の中に暮れまして同十五年の正月元旦兩派の信徒は漸く購ひ得た假會堂に集まり、種々の過去の事や將來の希望やを語り合ひながら、獨立的基督教が遂に此の地に成就した事を祝し合つて居ります。其の夕突然一封の書狀が函館美以教會から屆きました。披いて見ますと意外な事には、彼等が要求した退會の許可ではなくて、前に寄贈して來た七百餘圓を即座に電報爲替で返却せよとの催促であつたのです。

今の有樣で申しますと、基督の信徒となります事と、一宗一派の教會員となります事とは、全然意義を異にして居るのであります。迫害は必ず教會員となる前に基督の信者となつた者の上に落ちて參ります。それ故迫害は新年早々から此の憐れなる一團の青年の上に落ちて參りました。七百圓と申せば或る人にとりましては僅かの金で一日豪遊の費にも足らぬ程でありませうが、貧乏書生の寄合ひに取りましては容易ならざる巨額であります。美以教會は札幌信徒が少數で微力なるを知つて居りますが故に、此の催促をしたならば其の意志を枉げ、主義主張を捨てゝ、迷へる羊は再び美以教會と云ふ牧者に集まると信じたのであります。然し乍ら此の一群の迷へる羊は不幸にして尙ほ此の牧者の心を疑はずには居られませんでした。金錢で人の良心を彼是れしようとするのは、俗人の中の俗人が慣用する手段であります。迷へる羊は決心致しました。七百圓の金を斷じて返濟しよう、返濟する迄は我等の獨立は全く出來たとは云へない。然し乍ら憐む可き彼等は如何にして此の纏まつた七百圓の金を得させ

うや。彼等は殆ど途方に暮れましたが遂に躊躇する事なく、斷じて如何なる方法でも講じて、悉皆其の金を返さうと決心致しました。丁度前年十一月十五日一封の書が卒然太平洋を越えてクラーク先生の許から參りました。先生は自分の弟子等が寄合つて一つ獨立した教會を建てると云ふ企圖を非常に賛成奬勵した。書面と共に參百圓を送つて吳れたのが殘つて居りましたので、種々なる工夫算段の結果、貧乏書生が有つてる限りの財嚢をしぼつて貳百圓を調達し、一先づそれを電信で返濟しました。而して其の後も各會員は凡ての勞苦を共に頒ちあつて漸次返濟し、十二月二十八日遂に全部を償却しましたので、美以教會の十二月二十八日の大會で遂に札幌信徒の退會を認めましたから、彼等は天下晴れて何處からも束縛を受けない獨立獨步の一團となりました。事業の量から申しますれば、小なる事には相違ありませんが、其の種類から申しますれば、彼等が獨立の旗幟を鮮明に致しましたのは決して小なる事ではないと思ひます。歷史を繰り返して見ますると、歐洲や米國に行はれた宗教上の論爭暗鬪は其の中心に於ては必ず此の問題、卽ち基督の教訓を宗派的束縛から脫せしめようと云ふ事に歸着して居るのであります。而して彼の國に於ては永く傳說や習慣の爲めに成就し兼ねた事を彼等微弱なる一團の青年は成就したのであります。神の事業は屢々稅吏や娼婦や漁夫や農民やによつて成就せられるのであります。斯く當教會の基礎の全體は實に明治十五年十二月二十八日に定められました。當教會は此の天職を神から授けられて今日まで其の存在を續けて居るので、若し當教會が此の天職を曠しくしなかつたならば如何なる迫害にも打ち勝ち得可き筈であります。私共の力は至つて微弱で、今日迄に成し遂げた所は決して大ではありませんが、當教會外にも尙ほかゝる天職を認めて居らるゝ諸君の同情者となり、一臂の力となり、又諸君からも同情を得て此の主義を貫徹せんとして、今も感謝して懽んで此の教會を愛護して居るのであります。

斯樣な譯で兎に角教會の設立は成就しましたが、依然として牧會者は御座いませず、舊來の共同主義に基きま

して會員互に分擔し、敎務から庶務會計までを處理し、一人でも手を空しうして居る者はなく、日曜日の朝夕並に水曜日の禮拜は青年信徒が交代して、司の講壇に立つ人と煖爐に薪を運ぶ人とは同じ尊敬を受け同じ權威を有した次第であります。

これより先き明治十四年の頃、札幌市中を別つて四箇の傳道區と致し、各區に集會所を置き、信徒等は交代して熱心な傳道を致しましたが、明治十五年九月辻元全二氏が來られて傳道師となられてからは、敎勢頓かに振ひまして、其の後明治二十年の末迄に入會した者の數は六十餘名に達しましたが、其の中青年書生は僅かに七八名で大部分は質實勤勉な商人の人々でありました。此の人々の中には生活と最も密接した信仰を有たれた人々が多く、眞率忠實なる會員として敎會を重からしめ、今に至る迄渝らざる誠意を示されまする事は、今日此の盛典に臨みまして殊に一言せねばならぬ所であります。又明治十六年七月に起りました婦人會は、毎月二回會員の宅に會し、編物裁縫などをして實質的に敎會を補助せられた事も容易なことではありませんでした。

かく當敎會の事業は年を逐うて益々有望となり、忙はしくなり行きます間に、敎會の設立に盡力し、又其の事務に密接の關係ある人々は段々札幌を去つたり、又は業務繁忙の爲めに十分の盡力をする事が出來なくなる樣な事情から、牧會傳道の事務は大島正健、辻元全二二氏に御依賴する事になりました。殊に大島氏は其の同窓等が或は事業を企て、或は洋行を圖り、その本懷を伸ばさんと試みた間にも、尙ほ此の幼稚羸弱なる當敎會を見捨てるに忍びず、獨り踏み止つて明治二十五年まで牧會の任に膺られた事は私共敎會員の深く感謝する所でありまして、當敎會が其の基礎並に制度に於て今日あるを見ますするのも同氏の同情と盡力とに負ふ所多大なる事であります。

以上申上げました通り、當敎會の足並みは割合に滑かに漸次歩を進めまして明治十七年になりましたが、段々會員の數も增加するに從ひまして、會堂も手狹になりました故、寄附金を募集し、藤田九三郎氏の設計の下に明

治十八年五月工を起し、七月に亙つて新築の會堂を建築致しました。それは今私共の用ゐつゝある此の會堂であります。建築萬般に千參百八拾五圓を要しました。嘗ては貳百餘圓を支出して長屋の一棟を購ひ、神の殿堂が出來たと喜んだ會員に取りましては、此の建築は實に莊嚴無比なるソロモンの殿堂にも比ぶ可きものでありましたのです。これは歡喜の音信でありますが、美しく建てられた會堂の中には又悲哀の音信も傳へられねばなりません。それは次の様な次第で御座ります。

今でも左様でありますが、其の頃は殊に基督教界に不問の眞理として認められて居りました事の中に、按手禮と云ふものを受けない牧會者は洗禮と晩餐の禮を施行する事が出來ないと云ふ事であります、然るに我が教會は明治十九年臨時總會を開きまして按手禮を受けて居らぬ大島氏に洗禮晩餐の式を司らせると云ふ事を議決致しました所が、秩序と儀式とを重んずる基督教界の紳士は盛んに非難の聲を擧げ、越權の處置であると責める者もあり洗禮の無效を叫ぶものもあり甚だしきに至つては私共を目して異端邪教の輩だと罵るものもあるに至りました。一應御尤の事ではありますが、人を異端邪教視致しますには相當に精密な顧慮を要する事で御座ります。それで同年七月農學校の出身者某が肺患に罹りまして入院し、基督教に接して洗禮を大島氏に請ひましたから、大島氏は其の式を司りました。所が折しも當時札幌に滯在中であつた外國宣教師から手痛い抗議があり、同じく滯札中の新島襄氏も頻りに按手禮を受けんことを大島氏に勸められましたので、當教會は明治二十年十月二十五日を以て左の如き書面を東京諸教會の牧師並に宣教師の中某々の人に送りました。其の文面は次の如くであります。

益々御清福奉賀候陳ば當札幌及び其近郡に於て福音の勢力日々熾に相成候に付き此際弊會は愈々獨立の體裁と基礎とを鞏固にして益々傳道に從事可仕所存に候處弊會には未だ一般他教會の公認を受けて洗禮と晩餐との式を司る者無之爲めに大に不便を感じ候に付き從來弊會の主任者なる大島正健氏に今回其權を御公認被下度念願

に付き一應御依賴申上候尤も御承知の如く弊會は他教會とは其起源を異にせる教會に候得者何卒札幌獨立教會會員の一人として同氏に按手禮御授け被下度候又御賛成被下候諸教師には可成御立會被下候樣御周旋を仰ぎ候

草々頓首

明治二十年十月二十五日

札幌獨立基督教會書記

さう致しますると、植村正久、井深梶之助、小崎弘道、本多庸一等の諸氏から承諾の返事が來ましたので、明治二十一年一月十二日東京一番町一致教會堂に於て東京諸教會の牧師から試驗を受けられました。然しながら此の按手禮の式場で持ち上つた提議の結果、大島氏は札幌獨立基督教會員としてゞはなく、組合教會の一牧師として按手禮を受けさせられたのであります。斯樣にして私共は洗禮晩餐の二大禮を司り得る牧師を得ました――茲に申添へますが私共は大島氏は始めから此の二大禮を司り得たのだと思ひます――が私共に取りましては、私共の中に組合教會の牧師なる大島先生を戴きまするよりも、獨立教會の平民なる大島君を有する方が遙かに嬉しい事であつたのであります。私共は謙讓を學むで讓歩を致した結果として、否神の命ずる所よりも儀式の命ずる所を重むじました結果としてかゝる主の義鞫に遇はねばならなくなつたのであります。これは偏に私共自身を責むる意を表はす爲めにかく委しく申上げたのであります。

辻元全二氏は明治十五年以來大島氏を助けて熱心に當教會の爲めに盡力せられましたので、當教會が今日あるを得まするのは固より天佑に依る事でありますが、又實に忠實なる會員の熱き祈禱と強き實行とがこれを翼成したのは云はずとも明かなる事で、私共は是等の方々に對して特別の感謝を表はさずには居られません。幸に同年十月馬場種太郎氏(後竹内と改姓されました)が來て辻元氏の跡を引受けて下されたので教會の受けた大打擊は大

に醫されました。

明治二十年頃よりは歐化主義と申します一種の風潮が日本全國を風靡致しましたが、其の結果として基督教も一種の流行の樣になりまして、明治二十一、二十二年は會員の增加に於ては過去十年間に於ける教會の全盛時代とも申すべき時期でありました。日曜日の禮拜に臨むものは必ず百四五十名、青年會も婦人會も活氣を呈し、市內傳道の外に市來知、月形、當別等にも傳道の範圍を廣め、明治二十三年一月に行つた連夜祈禱會の如きは、會衆實に二百數十名に及び、老婦人會も起れば空知監獄內にも求道者が現はれ、此の爲めに一人の傳道師を要しましたので、中江汪氏を聘してこれに當つて頂き、市來知教會は當教會に合併し、娼妓の中にも會堂に列席して道を聽くものが起ります樣な次第で、救は實に稅吏や娼婦から始まるかと思はれました。

然しかゝる風潮は長く續きませんで、明治二十三年頃から國粹主義と云ふ反動的風潮か勢力を逞うして參りましたので、今迄火の如く熱したと見えました基督教熱は脆くも灰の樣に冷え去りまして信者の數は見る〳〵減退し、かてゝ加へて三月には中江氏は公務の繁忙に妨げられて其の職を退き、九月には竹內氏も修學の爲めに辭表を提出されましたので、當教會は牧者を失つた群羊の樣な有樣で御座いました。かく教會內に種々の困苦が起りまして會員の希望が搖ぎました際、明治二十三年當教會に出席して居つた信徒中一致派の人々は當教會より分離して市中に自己の講義所を造る事になり、二十四年には美以(メソジスト)教會と聖公會とが新に起りましたので、遂に札幌の天地には四個の教會が竝び立つ事になりまして、當教會創立者の苦心は容易ならぬ手痛き打擊を受けました、其の結果として禮拜出席者の數は頓に減退し、苗穗傳道は三四月頃に全廢し、市中講義所も五月の大火以來再興致しませず、盛大を誇りました婦人會の影もなく、老婦人會のみ纔に氣息を保ち、地方傳道の如きは全く顧みる暇のない事になりました。若し物の盛になりましたのを神に對して感謝致しますのが基督信徒の光榮でありますなら、

其の衰へたのを見て、其の衰へた原因を考へて心を取り直しますのも大切な義務であります。「基督の苦み我等に多くあるが如く我等の安慰も基督によりて多し」と云ふ言葉は私共が謹むで服膺すべきものだと思ひます。

心を取り直した當時の會員は振つて當教會設立者の意志を貫徹する爲めに諸教派合同の責に任じようと決心致しまして種々苦心を致して居ります際、明治二十五年海老名彈正氏が來道されましたので、當教會は此の事を同氏に相談致しました所熱心に賛成の意を表せられ、日本基督教會の押川氏、美以教會の本多氏等と協議の上北海道に於ける傳道局の事業を停止し、其の地の布教は一團に合同した獨立の教會に一任する方針にしようと云はれて其の歸途仙臺に立寄つて押川氏に相談された相でありましたが、押川氏は此の議に對して全然反對の意を漏らされたので、折角北海道に實現さるべかりし當教會の希望は殘念ながら水泡に歸しました。尙ほ海老名氏は好意を以て當教會と組合教會との合同を勸告せられましたけれども、これには當教會は應ずる譯に參りませなんだ。と云ふ譯は、別段此にくど〳〵しく申す必要はない樣でありますが、偶には此の邊に誤解もある樣でありますから一言申述べる次第でありますが、當教會の願ひは諸宗派を合同して勢力の扶植を謀らうと言ふのではありません。却つて反對に諸宗派を無くなして凡ての基督信徒が一體になる事に盡力しようと云ふのであります。札幌獨立教會があるのは取りも直さず一つの新宗派を樹立する事で、當教會其の者の主義天職と稱するものと全然反對矛盾した現象だとの非難もある樣でありますが、それはさう非難する人の誤解で、當教會は凡ての宗派が合同すると同時に消滅すべき運命にあるものなる事を御承知ないのに依る事と信じます。暗夜を照す爲めの細き燈は日の出づると共に光を失ふのは當然であります。それ故當教會は組合教會と合同して他派に對峙すると云ふ態度に出るのを拒んだ次第であります。明治二十六年七月我等は竹内氏の盡力によつて四方素氏を牧師として招聘する事になり、明治二十七年四月八日當教會は臨時總會を開き、信仰條例竝に會員の心得及び約束を修訂致しました。舊來は萬國

福音同盟會の信條を用ゐ來つて居りましたが、其の字句が繁雜で拘泥する所が多く、當教會で用ゐるには不適當と信じましたが故に左の如く「會員の約束」なるものを定めました。

札幌基督教會會員の約束

我等は皆新舊兩約聖書の教示に從ひて唯一の天父及び救主イエス・キリストを信じ罪を悔改め身を獻げて事へ奉らんことを願ひ信仰の同じきによりて共に札幌基督教會の會員たり。

我が教會は我等會員一同の組織する所なれば各自の得る所に從ひ、應分の金を出してこれを維持すべし。我が教會の盛んなるも衰ふるも榮ゆるも枯るゝも皆我等が忠實なると否ざるとによるが故に、我等は各自の義務を怠らず責任を盡す事を勉むべし。

我等は我が教會の典禮を重んじ規則を恪守しキリストの教訓に從ひ世の光となり地の鹽とならん事を期す。

會堂に於て會員共に神を禮拜し又神の道を學ぶ事と日曜を聖く守る事は我等の靈魂の爲めに甚だ有益なりと信ず。

神の道の世に弘まり衆人の救はれん爲めに我等は力を致すべし。

願くは神即ち我等の天父は我等を惠み我等をして相愛し相助けて神の子たるの榮を揚げしめ給はん事を。

私共の信じて行はんとする所は唯これだけであります。此の約束は其の後字句の上に多少の修正を致しましたが、大體に於ては其の儘今日まで用ゐて居ります。私共はこれを以て十分滿足致して居ります。

明治二十九年此の年まで講義所であつた組合教會には教會の組織が出來上りまして、札幌には五個の教會がある事になりました。

其の後當教會は明治三十三年に至ります迄さしたる波瀾もなく起伏もなく過しました。所謂沈滯の時代でありまして、日淸戰爭以後人民一般の傾向が功利的現世的になつたのに起因する所が多いと存じます。「進む事なきは退くにも劣れり」との諺を深く感じました時であります。此の年當敎會は出席者の少い爲めに祈禱會は廢し、明治三十二年の如きは日曜日の禮拜に當つて會堂に集つた者は日曜學校の敎師のみであつた樣な事もありました。

是より先き明治三十一年には四方牧師職を辭され當敎會は再び中江氏を招く事が出來、山北孜氏も傳道師として暫く敎務を補助せられました、明治三十三年に入りましてから當敎會は頓に沈滯の氣を一掃して靑年から老人に至るまで一樣に活動の氣に滿ちました。其の二月十八日臨時總會を開き規則に改正を加へました。卽ち、

一、我が敎會を獨立札幌基督敎會と稱すること（舊規則「本會を札幌基督敎會と稱す」）。

二、「牧師は會衆を牧し禮拜及び傳道の事を掌る」と云へる節を「牧師は會衆を牧し禮拜傳道及び典禮を掌る」と訂正する事。

三、「牧師は常議員其候補者を推薦し總會の決議を經て之を確立する者とす」なる節を加ふる事。

の三件であります。卽ち當敎會がこれまで他を憚つて稱へなかつた獨立の二字を公然稱する事になつたのと、當敎會の會員全部は自己を牧してくれる牧師を定むる權利と責任とを有し、牧師は又人が授くる按手禮と云ふが如きものを受けずとも凡ての典禮を司り得るものとなつたのであります、此の議案通過の討議は、午後の二時から八時に及び其の結果として中江氏は職を辭する事になりましたが、田島進氏は日本基督敎會を去り、我が獨立主義を贊成して牧會の任に膺らるゝ事になりましたので、當敎會の前途には更に一道の光明を認むることになりました。其の間に靑年の活動は益ゝ其の步武を進めまして、入會の方式を確定すべき場合に立ち至りまして、會員の熱心なる熟議の結果、明治三十四年三月七日の總會で洗禮晩餐停止の議が決せられ「會員の約束」中左の修正

を致しました。即ち、

「我等は我が教會の典禮を重んじ規則を恪守しキリストの教訓に從ひ世の光となり地の鹽とならん事を期す」と云ふ項を、

「我等はキリストの教訓に從ひて身を神の意に適ふ聖き活ける祭物として神にさゝげ以て世の光となり地の鹽とならんことを期す」

と云ふのであります。洗禮と晩餐とに對する當教會の態度は此の二大禮を行はねば基督教徒となる事が出來ぬと云ふ觀念を絕對的に否定するのであります。これを行ひたければ行うても障りはないが、基督信者となり得る資格はその無によりて何の障りにもならぬ事を確信するにあるのであります。

此の年八月田島氏は米國遊學の爲め教職を辭する事になりましたので、暫時は他教會の教役者諸君にお願ひして日曜の禮拜を司つて頂きましたが、後には會員が交代して感話を爲し、初期に於ける當教會の有樣を復活して居りました。然るに明治三十五年三月宮川巳作氏が當教會を牧せらるゝ事になりました。宮川氏は田島氏と同じく明治學院の出身で教會の獨立と申します事に非常に同情を有たれ、氏にこれ最も賴んで居つた內地の或る教會に名殘を告げて當教會を助けらるゝ事になり、又設立以來當教會に深き同情を寄せて居らるゝ內村鑑三氏も其の繁忙を極むる暇を我等の爲めに割かれて明治三十四年と三十五年とにわざ〳〵此の地まで參られ、殆ど凡ての時間を當教會の爲めに割かれて强き宗教的印象を與へられた事は特に此處に申し上げて置かねばなりません。

明治三十七八年はかの有名な日露戰爭の戰はれました年で、基督教のこれに對する態度は實に全國民の注目を牽いた次第でありましたが、其の中極少數の基督信徒のみが基督の無抵抗主義を叫んで居りました。中に當教會の宮川氏も其の一人で、氏は恐れ憚る所なく平和の福音を說かれましたのは目覺ましい事でありました。

明治四十年に至りまして宮川氏は長い間の忠實なる牧會の後、已むを得ざる事情の爲めに遂に札幌を去るゝ事になりました。其の後私共は其の年の七月から九月にかけて自給的に應援に來て下された高橋卯三郎氏の忠實なる補助の外には牧會者を有せず、會員各自が奮勵して求道を心懸けました事は、其の以前屢ゝ起りました時の通りでありましたが、幸なる事には其の十一月殆ど偶然の事から竹崎八十雄氏を當教會の牧師として招聘致す樣になりました。氏は嘗て札幌農學校に學ばれたのですが、哲學研究の志を起して渡米され、漸次基督教に對して深い研究を重ねられた末、昨年歸朝されたのでありまして、嘗て札幌農學校に居られた事でありますから當教會の歷史には深い趣味と關係とを有して居られ、當教會の主義に對しても强き同情を分たれますので、私共が同氏を得ました事は實に攝理とも申すべきものであります。

斯樣な次第で當教會は設立以來二十五年の歲月を經て今日に至りました。當教會の歷史は大體右樣な次第であります。顧みて當教會が攝理に負ふ所の大なるを思ひ、其の成し遂げた事業を見ますれば、其の小なる事九牛の一毛にも及ばぬ事でありますが、幸にして未だ其の確信を失はぬ以上、當教會は何處までも神の命じ給ふ所を果す決心で居ります。近年に至つて本邦の此處彼處に漸く教會獨立の聲を聞きますこと、又諸外國にあつても教會合同の實績が所々に起りましたことは、當教會に取りましては實に感謝に餘る慰藉であります。何卒一日も早く基督の信徒が一の大なる團體となつて手を携へて一齊に神の榮光を讃美し得る時の一日も早く來らんことを祈つてやまぬ次第であります。尙ほ終りに臨みまして、是非一言致しませねばならぬのは、當教會設立者の一人なる宮部金吾氏が二十五年間渝る事なく當教會の爲めに容易ならぬ御助力をお與へ下さいました事で、氏は今日に至るまで實に當教會の柱石として逆境にあり勝ちな當教會を指導されました事は、此の教會の存在する限り記憶さるべき大なる功績で御座います。

死亡者名表

嘗ては我等と共にありて懽喜を分ち苦痛を頒ち、我が教會を其の雙肩に負ひて立ちし會員の中神の國に召されて既に業に我等と共にあらざる者七十人に垂んとす。彼等は所謂世の功名富貴の前には塵よりも拙きものなりき。歷史は遂に一度だも其の名を唇頭にする事なかるべし。されど彼等は我が教會に取りては決して忘れらるべきにあらず。其の最小なる者も教會が據つて立つ基礎の最大なる堆石なればなり。我が教會の說かるゝ所には、彼等は必ず語られざるべからず、我等は美しく彼等を記憶すべし。我等ならずして誰か其の隱れたる尊き功績を傳ふるものぞ。憾むらくは紙面限りありて凡ての芳名を網羅する能はざるを。

(一九〇八年十二月「獨立教會」第三十七號附錄)

(氏名以下略)

一九一〇年

二つの道

一

二つの道がある。一つは赤く、一つは青い。凡ての人が色々の仕方で其の上を歩いて居る。或る者は赤い方をまつしぐらに走つて居るし、或る者は青い方を徐ろに進んで行くし、又或る者は二つの道に兩股をかけて慾張つた歩き方をして居るし、更に或る者は一つの道の分れ目に立つて、凝然として行手を見守つて居る。搖籃の前で道は二つに分れ、それが松葉つなぎの樣に入れ違つて、仕舞に墓場で絶えて居る。

二

人の世の凡ての迷ひは此の二つの道がさせる業である、人は一生の中に何時か此の事に氣が付いて、驚いて其の道を一つにすべき術を考へた。哲學者と云ふな、凡ての人が其の事を考へたのだ。自ら得たとして他を笑つた喜劇も、己れの非を見出でゝ人の危きに泣く悲劇も、思へば世のあらゆる顯はれは、人が此の一事を考へつめた結果に過ぎまい。

三

松葉つなぎの松葉は、一つなぎづゝに大きなものになつて行く。最初の分岐點から最初の交叉點までの二つの道は離れ合ひかたも近く、程も短い。其の次のは稍ゝ長い。それが段々と先きに行くに從つて道と道とは相失ふ程の間隔となり、分岐點に立つて見渡すとも、交叉點のありやなしやが危まれる遠さとなる。初めの中は青い道を行つても直ぐ赤い道に衝當るし、赤い道を辿つても青い道に出遇ふし、慾張つて踏み跨がつて二つの道を行く事も出來る。然しながら行けども〳〵他の道に出遇ひ兼ねる淋しさや、己れの道の何れであるべきかを定めあぐむ悲しさが、追々と增して來て、軌道の發見せられて居ない彗星の行方の樣な己れの行路に慟哭する迷ひの深みに落ちて行くのである。

四

二つの道は人の歩むに任せてある。右を行くも左を行くも共に人の心のまゝである。まゝであるならば人は右のみを歩いて滿足しては居ない。叉左のみを辿つて平然として居る事は出來ない。此の二つの道を行き盡してこそ充實した人生は味はれるのではないか。所が此の二つの道に踏み跨がつて、其の終る處まで行き盡した人が果してあるだらうか。

五

人は相對界に彷徨する動物である。絕對の境界は失はれた樂園である。

人が一事を思ふ其の瞬時にアンチセシスが起る。

それでどうして二つの道を一條に歩んで行く事が出來ようぞ。

或る者は中庸と云ふ事を云つた。多くの人はこれを以て二つの道を一つの道に爲し得た努力だと思つて居る。御目出度い事であるが、誠はさうではない。中庸と云ふものは二つの道以下のものであるかも知れないが、少くとも二つの道以上のものではない。詭辯である、虚僞である、夢想である。世を濟ふ術數である。人を救ふ道ではない。

中庸の德が說かれる所には、其の背後に必ず一つの低級な目的が隱されて居る。それは群集の平和と云ふ事である。二つの道を如何にすべきかを究めあぐんだ時、人はたまりねかて解決以外の解決に走る。何んでもいゝから氣の落ち付く方法を作りたい。人と人とが互に不安の眼を張つて顏を合せたくない。長閑な日和だと祝し合ひたい。そこで一つの迷信に滿足せねばならなくなる。それは、人生には確かに二つの道はあるが、仕樣によつては其の二つをこね合せて一つにする事が出來ると云ふ迷信である。

凡ての迷信は信仰以上に執着性を有するものである通り、此の迷信も群集心理の機微に觸れて居る。凡ての時代を通じて、人は此の迷信によつて纔に二つの道と云ふディレンマを忘れる事が出來た。而して人の世は無事泰平で今日までも續き來たつた。

然し迷信は何處までも迷信の暗黑面を腰にさげて居る。中庸と云ふものが群集の全部に行き渡るや否や、人の努力は影を潛めて、行手に輝く希望の光は鈍つて來る。而して鉛色の野の果てからは、腐肥をあさる卑しい鳥の羽音が聞こえて來る。此の時人が精力を搾つて忘れようと勉めた二つの道は、まざ〳〵と眼前に現はれて、救ひの道は唯此の二つぞと、惡夢の如く強く重く人の胸を壓するのである。

六

人は色々な名によつて此の二つの道を呼んで居る。アポロ、ディオニソスと呼んだ人もある。ヘレニズム、ヘブライズムと呼んだ人もある Hard-headed, Tender-hearted と呼んだ人もある。靈、肉と呼んだ人もある。趣味、主義と呼んだ人もある。理想、現實と呼んだ人もある。空、色と呼んだ人もある。此の如きを數へ上げる事の愚かさは、針頭に立ち得る天使の數を數へんとした愚さにも勝つた愚さであらう。如何なるよき名を用ゐるとも、此の二つの道の內容を言ひ盡す事は出來まい。二つの道は二つの道である。人が思考する瞬間、行爲する瞬間に、立ち現はれた明確な現象で、人力を以てしては到底無視する事の出來ない、深奧な殘酷な實在である。

七

我等は屢ゝ悲壯な努力に眼を張つて驚嘆する。それは二つの道の中一つだけを選み取つて、傍目もふらず進み行く人の努力である。かの赤き道を胸張りひろげて走る人、又かの靑き道をたじろぎもせず步む人。それを眺めて居る人の心は、勇しい者に障られた時の如く、堅く嚴しく引きしめられて、感激の淚が淚堂に溢れて來る。
所謂中庸と云ふ迷信に附隨して居る樣な沈滯は、此の如き人の行手には更に起らない。其の人が死んで倒れるまで、其の前には炎々として焰が燃えて居る。心の奧底には一つの聲が歌となるまでに漲り流れて居る。凡ての疲れたる者は其の人を見て再び其の弱い足の上に立ち上る。

八

さりながら其の人が一寸でも他の道を顧みる時、其の人はロトの妻の如く鹽の柱となつて仕舞ふ。さりながら又其の人が何處までも一つの道を進む時、其の人は人でなくなる。釋迦は如來になられた。淸姬は蛇になつた。

九

一〇

一つの道を行く人が他の道に出遇ふ事がある。無數にある交叉點の一つにぶつかる事がある。其の時其處に安住の地を求めて、前にも後ろにも動くまいと身構へる向きもある樣だ。其の向きの人は自分の努力に何の價値をも認めて居ぬ人と云はねばならぬ。餘力があつてそれを用ゐぬのは努力ではないからである。其の人の過去は其の人が足を停めた時に消えて無くなる。

一一

此のディレンマを破らんが爲めに、野に叫ぶ人の聲が現はれた。一つの聲は道のみを殘して人は滅びよと云つた。餘りに意地惡き二つの道に對する面當てゞある。一つの聲は二つの道を踏み破つて更に他の知らざる道に入れと云つた。一種の夢想である。一つの聲は一つの道を行くも、他の道を行くも、其の到達點にして同一であらばかまはぬではないかと云つた。短い一生の中にも凡てを知り、凡てたらんとする人間の慾念を、全然無視した叫びである。一つの聲は二つの道の中一つの道は惡であつて、人の踏むべき道ではない、惡魔の踏むべき道だと

云つた。これは力ある聲である。が一つの道のみを歩む人が遂に人でなくなる事は前にも云つた通りである。

一二

今でもハムレットが深厚な同情を以て讀まれるのは、ハムレットが此のディレンマの上に立つて迷ひぬいたからである。人生に對して最も聰明な誠實な態度を取つたからである。雲の如き智者と賢者と聖者と神人とを產み出した歷史の眞唯中(まつたゞなか)に、從容として動く事なきハムレットを仰ぐ時、人生の崇高と悲壯とは、深く胸に沁み渡るではないか。昔キリストは姦淫を犯せる少女を石にて搏(う)たんとしたパリサイ人に對し、汝等の中罪なき者先づ彼女を石にて搏つべしと云つた事がある。汝等の中、心尤(とが)められぬ者先づハムレットを石にて搏つべしと云つたらば果して誰が石を取つて手を擧げ得るであらう。一つの道を踏みかけては他の道に立ち歸り、他の道に足を踏み入れて尙ほ初めの道を顧み、心の中に悶え苦しむ人は固よりの事、一つの道をのみ追うて走る人でも、思ひ設けざる此時彼時、眉目(びもく)の涼しい、額の靑白い、夜の如き喪服を着たデンマークの公子と面を會せて、空恐ろしいなつかしさを感ずるではないか。

如何なる人が如何に云ふとも、悲劇が人の同情を牽く限り、二つの道は解決を見出だされずに殘つて居ると云はねばならぬ。

其の思想と技倆の最も圓熟した時、後代に捧ぐべき代表的傑作として、ハムレットを捕へたシエクスピヤは、人の心の裏表(うらおもて)を見知る詩人としての資格を立派に成就した人である。

一三

ハムレットには理智を通じて二つの道に對する迷ひが現はれて居る。未だ人全體卽ちテムペラメント共の者が動いては居ない。此の點に於てヘダ・ガブラーは確かに非常な興味を以て迎へられるべき者であらう。

一四

ハムレットである中はいゝ。ヘダになるのは實に厭だ。厭でも仕方がない。智慧の實を味ひ終つた人であつて見れば、人として最上の到達はヘダの外にはない樣だ。

一五

長々とこんな事を云ふのもをかしな者だ。自分も相對界の飯を喰つて居る人間であるから、此の議論には直ぐアンチセシスが起つて來る事であらう。

（一九一〇年五月、「白樺」所載）

も一度「二つの道」に就て

此の前「二つの道」を書いた時、人間は相對界に彷徨するものであつて、絶對と云ふが如きは永久に窺ひ知る事の出來ぬ境界である、と云つて置いたが、自分はこれを出發點として更に所信を進めて見たいと思つて居る。

畢竟人間の思考の狀態は、これを假りに圖示すれば、環狀を爲すもので、直線狀を爲すものではない。卽ち我々の思考が如何なる點から始まるにせよ、それが結論に達するや否や、直ぐ其の先きに其の結論を前提とした他の理路を追ふ事が出來る。而してそれを幾干か繰り返す中に再び最初の出發點に歸着して來る。卽ち人間の內在的生活は、或る環內に限られて居て、其の生活が如何に豐富になつて、遠心的に擴大した場合でも、環周に沿うて出來得るだけ廣い活動をする分で、環外に脫逸する事は到底不可能である。凡そ循環して已まない內在的生活の現象に、强ひて一つの結論を與へようとする事は、かの無終の環中から、一部の弧を切り放す樣なものである。環の全體は決して切り放した弧だけで盡す事は出來ない。これを補ふ爲めには又他の部分の弧を切り放す必要がある。而して此の過程(プロセス)を續けて行くと、仕舞には故(もと)の弧に歸つて來るの已むなきに至るのである。更に換言すれば、人間は人生と云ふ複雜な問題に對して、論理を結着(クローズ)する程の能力を持つては居ないと思ふ。相對的の能力を以て、絶對的の事實とか觀念とかを捕捉する事が出來ぬと云ふ事は、何人も拒む餘地がない事で、隨つて少しく複雜した問題に對して、人間が結着した論理を求めようと云ふのは、木に緣(よ)つて魚を求むるの類だと思ふ。若し假りに結着(クローズ)した論理があつたとすれば、それは技巧的な作爲に出たものか、若しくは偶然に、絶對的事實若しくは觀念が、相對的な人間の頭腦を通過した結果である。世に哲學の到達し得べき範疇は、此の二つを指すものと

見て差支へあるまい。

此の如く考へて來ると、自分は哲學に立脚して、此の生を託する事の危險であるのみならず、虚僞である事を思はざるを得ないのである。古來幾多の哲學は、各〻其の結着(クローズ)した理論を提げて我々の前に現はれ、其の斷案を提供して、これこそ眞理である、これこそ人生終局の到達であると宣言した。我々の祖先の多數は其の前に面を俯せてそれを受け入れて眞なりとした。しかも彼等の子孫なる我々は哲學史なるものを作つて、過去の哲學なるものを一々批判解剖して居るではないか。批判解剖して不條理と矛盾とを指摘して居るではないか。自分は自分の目前に、かゝる事の繰り返されるのを、幾度も見聞して居る。此の上何等の權威を哲學に認める事が出來ようぞ。更に一歩を讓つて、哲學は今其の發達の途上にあるとする。即ち哲學が指摘剔抉(てきけつ)した缺點は、他日補充せらるゝ時があるものとする。而して恐らくは其の事は實際あり得るであらう。人間の知識は更に知識を生んで、哲學の內容が整頓せられ、修飾せらるゝに至る事は自分も亦疑ひを挿(はさ)まないのである。然しながら前にも述べた樣に、人間能力の發揮は、如何に擴充せられた場合にも、到底相對的である以上、哲學の內容が如何に整頓修飾せられても、それが絕對觀念の成就を成し得ると云ふ事は、到底考へられぬ所である。かく最後の到達が、既に否定せられた上は、哲學なるものゝ內容が、完璧(くわんぺき)に進めば進む程、危險の度を加へて、虚僞に充ちて來ると云はねばならぬ。例へば橫濱行の汽車が、京都行と云ふ札を揭げて、安價な切符と、立派な客車とを供して居る樣なものである。

更に第二の哲學的到達なるものを考へて見る。これは前にも云つた如く、哲學なるものゝ中には、人間の相對的頭腦を絕對的事實若しくは觀念が通過した結果として、起るものもあり得る譯だ。例へば我々が二と二とを加へれば四であると論ずる、其の論ずる所の二と二との和は四と云ふ事が或は絕對的の事實であるかも知れない。偶然に我々の思考した所が、絕對事相の肯綮(こうけい)に中(あた)つて居るかも知れない。これは決して不可能であるとは斷言が

出來ない事である。然しながら此の場合に於て最も困難なる事は、其の果して絕對的事相であるや否やを識別すべき標準が全く缺けて居ると云ふ事である。例へば玆に人があつて、或る論理的過程を經て、一つの確信に達したとする。而してそれが絕對的事相と符合して居るかも知れぬ、符合して居ぬかも知れぬと云ふ時、我々は果して如何して動かす事の出來ない批判に到達する事が出來るであらう。かく論じて來ると、哲學と云ふものは、自分がこれから考へて見ようとする信仰なるものに比して、一層曖昧な立場に立つて居ると思ふ。當然の事だが哲學は理を推して物の眞を覩ずる方法である。然るに哲學が或る結論に達した場合、如何に理を推しても、其の眞僞を知る事が出來ぬとあれば、それは推理法の根本的誤謬を暴露したものだと云はねばならぬと思ふ。

然らば直覺が齎らすと稱する所の信仰なるものは、果して物の眞に徹入して居るであらうか。これも物の眞に徹入し得ぬとは斷言する事が出來ぬと思ふ。然しながら同時にそれが、絕對事相を掌握し得るとも云へぬ筈だ。加之信仰の事は絕對的に個人的の事である。哲學にあつては、理を推して最後の結論に到達するのであるから、若し其の論理に悅服する人さへあれば、其の哲學は人から人へと傳へて行く事が出來る譯であるが、信仰に至つては全く個人的經驗であつて、各個人が自ら其の經驗を體達しなければ、信仰の傳播は全く出來ぬのである。それ故信仰は全然主觀的にのみ價値を有するもので、客觀的には、それが實世間に現はす功過を除いて、何等の價値を生ずべきものでない。甲某が有する信仰なるものは、乙某丙某に取つては無價値なものである。又信仰其の者の內容に立ち入つて考へて見て人間の信仰の中に絕對事相が如實に現はれ得るかと云ふに、決してさうではないと思ふ。人間の直覺と云ふものゝ成り立ちに神祕的な意味を附するか、一宗の信仰を創立した人の性格に、人間以外の力の存在を許容する上は知らず、苟くも我々の理性の確實に承認する範疇で考へて見る時は、信仰は遂に相對事相の特殊な變態と見るの外はないと思ふ。絕對なる信仰と云ふが如きは、哲學が其の所論の絕對的肯定をなさんとす

ると等しく過分な申分である。一宗の開基が權威を以て己れの信仰を人に强ふるのは、其の傳道者の鞏固なる人格を顯彰して如何にも潔い事ではあるが、冷靜に其の眞理に對する態度を觀察すれば、寧ろ其の憍慢に驚かざるを得ぬのである。我々各個人は大小上下はあれ、兎に角一個他と混淆する事の出來ぬ個性を稟けて生れて來て居る。其の我々に向つて我が信ずる所を信ぜよ、信ぜずば汝の靈滅せらるべしとの要求をするのは、我々の忍ぶべからざる所である。解放せられた我々の理性は、或る哲學系統の中に封入せられる事が出來ぬと共に、或る信仰個條の下に縛せられるに堪へなくなつた。

此の如くして、嘗ては自分と同じな人間すら神とあがめて、人力を超絕した大威力と見たのが段々と進步して、相對界の人である事を誇りとする樣になつた。然し相對界には相對界の悲哀がある。それは一筋の道を行くと云ふ事の不可能な事である。我々は現在此の地上の生活に安住する樣になると共に、此の現在の生活に對して充實と飽和とを要求せずには居られなくなる。而して此の要求を滿足しようとする時、我々の前には必ず少くとも二つの道が現はれて來る。自分は未だ如何なる言葉を以て、此の二つの道を最も適切に言ひ顯はし得るかを知らない。然しながら讀者の內的生活の經驗は、此の二つの道なるものを髣髴し得る事と思ふ。少くとも自分の僅少な經驗は常に自分に內的生活の分離を自覺せしめる。自分が思ひ切つて一方を取れば、是非捨てゝ仕舞はねばならぬ他の一方がある。自分が一方を愛すれば、是非他を憎むべく餘儀なくされる。ジェーナスの顏の樣に、二面は必ず相反して居る。一つの事を思ふ時、又は一つの事を行ふ時、それに直ぐ附隨して起つて來るものは、其の思想若しくは行爲に反對の思想行爲である。

これは自分一個の經驗のみでない事は、自分が此の事を語つた友も、自分の意見を承認して吳れるし、又昔からの思想の中にも、此の現象はまざ〳〵と現はれて居るのでも分ると思ふ。單に個人的經驗に於てばかりでなく、民

族の歷史にも歷々其の跡を尋ねる事が出來る。希臘神話にあるディオニソスとアポロは、反對せる二思想の代表神である。又ヘブライズムとヘレニズムは、歐洲歷史を支配した二潮流の代名詞である。色と空とは佛陀の大手腕を假りても、容易に調和する事の出來ない二現象である。唯心・唯物と云ふが如きも、永く解き難い謎語である。倫理上の個人主義・社會主義と云ふ樣な事も其の一例である。凡そ世にある名詞にして單獨に存在して、對を爲さぬ名詞が果してあるだらうか。アダムの初めより我々の末に至るまで、此のディレンマの爲めに、人間はどの位惱まされたか解らない。

さらば全然一方を捨てゝ一方のみを擇み取らうか。これも亦人が努力して成就せんとした所である。人の思索力が漸く成熟した文明の中世紀に於て、此の種の努力は殊に目覺しかつたと思ふ。彼等は一の理想を建立し其の理想の命ずる型の中に、心身を挺して自己を入れ込んだ。中世紀の歷史上に名だゝる人は槪ね此の種類の人である。此の時に於て輩出したものは、人間でなくして、聖僧であり、忠臣であり、孝子であり、抒情詩人であり、烈婦であり、暴王であり、惡漢であり、奴隸であつた。彼等は彼等の哲學に敎へられ、信仰に導かれて、かくの如きResignationの生活に入る事を以て、最も尊い態度だとなした。而して此の樣な態度に成功したものを崇めて、最も豪い人物とした。然らば彼等は果して此の如き態度の中に大安心をして居たかと云ふに、決して左樣ではない。其の心の最も奧まつた處には、或は不安の念となり、或は僞善の形を爲し、或は自己滅却の態を取り、或は自尊卑他の狀を作つて、人が人全體として擧ぐる反抗の聲が潛んで居たのである。

自分は人生の解決の爲めに、かくの如き苦痛多き努力を爲した人の誠實を疑はうともしないし、又其の愚をも嗤はない。然しながら世は何時までも、彼等の間違つた態度を認容して居る程に、進化の鈍いものでもないと云ふ事を附け加へねばならぬ。時は過ぎた、而してセルヴンテスがドン・キ・ホーテで、騎士的思想の捕虜となつた片輪

者を嘲笑したと同時に、シエクスピヤはハムレットに於て理想の桎梏を脱逸した一人の人を描き始めた。卽ち理性の解放は必然的に如何なる影響を人心に及ぼすかを、的示したものは、歐洲近世史の初期より現はれ始めた人の變化である。此の前にも云つた如く、ハムレットは孝子たるよりも、哲學者たるよりも、愛人たるよりも、實行家たるよりも、より人である。ハムレットに當て嵌むべき型と云ふものは、ハムレット自身の外には一つもない。彼は藻掻き、迷ひ、苦しんだ。中世紀のローマンスにある Hero の面影は、ハムレットには更に認める事が出來ぬ。オデッセーとイリヤッドとはハムレットに至つて、鋭角を爲して方向を轉じた。二つの道の何れかを擇ぶべく餘儀なくされた人は、ハムレットに至つて自由に兩者の間を迷ひ拔いた。自分は此の樣な現象を無意義な事と看過する事が出來ない。何故なれば如上の現象は、自分自身の内部にも行はれた事を的確に感ずるからである。

ハムレットは相對界に定住しようとした人の絶好の典型である。然しながら相對界の悲哀は、尙ほ彼を見捨てなかつた。彼は二つの道に迷ふと云ふ事は敢てしたが、習慣は彼を責めて、其の不見識を耻ぢしめた。ハムレットは迷へる己れを且つ憐み且つ卑しんだ。其の理性に於て前人の迷蒙を打破した彼は、其の習慣に於て依然捕はれの身であつたが故に、彼は常に己れの正當なる行爲を運命に假託して、僅かに所謂良心の詰責を免れようとした。自分は心からハムレットの苦衷を憐れまざるを得ない。何故なれば現在我々の大部分は、大抵此の程度にあつて煩悶して居るからである。

然しながら能く考へて見ると、此の悲哀は畢竟謂はれのない悲哀だと思ふ。今まで我々の上にあつて我々を支配して居たものは、絶對に對する觀念である事は前にも言つた。此の觀念は種々な形を取つて我々の前に、威脅的に現はれた。或る時は信仰となつた。或る時は理想となつた。我々は其の理想なり信仰なりに自分自身をへし曲げて、曲り兼ねる部分は抛げ捨てゝ、換言すれば己れを其の理想なり信仰なりの鑄型の中で改造して此の世を渡

らねばならぬと思つて居たのが、今突然相對界の人となつて見ると、嚮に曲り兼ねると思つて捨てた部分も、再び自己の一部分になつてこれに統一した思考行動がさまたげられる事になる。玆がハムレットの煩悶した所以である。然し一度かゝる態度に出た以上、我々の思考行動に昔日の樣な統一があり得ないのは當然の事で、聊かも怪しむ要はない筈だ。矛盾の起るのは知れた話である。我々の生活に矛盾のない樣な事が、全體間違つた事實なので、結着した論理が作爲である如く、矛盾のない人生と云ふものがあつたらば自分は其の人生の根柢を疑はざるを得ないのである。我々は今まで此の矛盾を苦痛だと思ひ、恥づべき事だと思ひ、統一した一筋道を歩まねば、內的生活は立ちどころに消滅すると思つて居たが、絕對的實在とか眞理とか云ふものは、全然人間の思度以外にあるものと感じては、此の矛盾こそ人間本來の立場だと云ふ事を覺つて、其の中に安住し得るを誇るべきだと思ふ。

卽ち矛盾を抱擁した人間全體としての活動、自己の建設と確立、これが我々の勉むべき目前の事業ではないか。其の事業が出來上つた上で如何すると云ふ樣な問題の解決は、明日此の世の中に生れて來る人に讓つて置けばいゝ。自分は此の點に暗示を與へる爲めに此の前ヘダ・ガブラーを引き合ひに出したのである。ヘダは實に此の程度に於ける代表的人物だと思ふ。彼女は決して自己內部の矛盾に就て悲歎した事はない。彼女に取つては驚くに堪へた其の內部の矛盾は當然な事なのである。唯彼女が恐れに畏れて悶えたのは、ヘダと云ふ一個の人が外界の壓迫によつて破碎されん事であつた。此の爲めにヘダは肉を殺してまで戰ひ拔いた。彼女は立派な殉教者である。ハムレットはヘダに至つて更に急激な回轉をしたと云はねばならぬ。

我々に取つてヘダとなるのは苦痛である。然しながら其の苦痛なるにも係はらず、我々はヘダたるの要求を心の奧底に感じはしないか。先づ我々は先祖傳來の絕對觀念に暇乞をして、自己に立ち歸らねばならぬ。而して我我が皆立ち歸る事に於て成功したならば、其の上の要求は其處に我々を待つて居るであらう。

これは少しく餘論に亙るが、自分は如上の立場から、藝術界の主義なるものに對して、心からの厭惡と輕侮とを感ずる旨を一言して置きたい。人生を如實に觀じてこれを具象すべき藝術を、主義の名の下に狹めゆがめるのは果して何の意であらう。かの評者と云ふ命名（ノーメンクレーチユア）を以て能事となす人々が、勝手に名を命ずるのなら、其の爲すが儘に委せるのも妨げないが、作者自らが臂を張つて、自分は何主義で御座ると云ふに至つては、自ら識らざるの責を免れる事は出來まい。文學とは兄弟の關係ある繪畫彫刻に於ては、主義や宗家を以て、其の作品の規矩とする馬鹿は、急激な勢を以て破壞されつゝあるではないか。自己の勢力、自己の確立、自己の發揮と云ふ事が、藝術の第一義として承認され體得されて居る間に、文學は主義の名の下に人生の見方、見るべき人生の範圍を限つて、得々として居るのは何んたる事であらう。自分は主義の爭ひの爲めに作家が用ゐた努力を、再び作物の方に收めん事を切望する者である。

（一九一〇年八月、「白樺」所載）

叛逆者

（ロダンに關する考察）

一

Stationary Period とか Dark Ages とか云ふ名で知られた歐洲史上の一時期は、新しい意義を提げて、現代文明の核心に萠芽を出し始めたと私は信ずる。暗黑から暗黑に送つてやつた父無し子の記憶が、肉情の衰へかけた母の胸底を薄氣味惡くかき亂すやうに、現代の文明はともすると暗黑と名づけられた過去の一時期の爲めに脅かされて居る。脅かされてゐると云ふだけでは未だ足りない。其の時期の精神の復活と勃興とに對して、悶えながら彌縫に忙はしいと私は思ふ。

一體歐洲史は何故「暗黑」とか「停滯」とか云ふ名の下に、今まで中世紀を顧みずに居たのであらう。或は研究材料とか言語とかいふ物質的の色々な困難が、其の研究を妨げたのかも知れない。又實際歷史家が、中世紀には、瑣末な事件の外に、特別な研鑽に値する題目がなかつたと信じて居たのかも知れない。若し原因が前者だとすれば、それは據ない事でもあらう。これに反して後者が原因だとすれば、歷史家の讀史眼は、花簪の美醜を見分け得る少女の眼識にも劣つたものだと云はなければならぬ。中世紀の間に建てられた典型的な寺院一つを眼の前に置いて考へれば、此の時期のゆるがせに出來ない事は直ぐ判る筈である。歷史家の凡てがそれに氣附かない程非常識ではあるまい。自分は此の時期の研究が等閑にせられた原因を他に求めて見たい。それは歷史家が中世紀と現代文明との間には何等有機的の連絡がなく、却つて遠く中世紀を遡り盡した羅馬文明が、密接の交渉を現代

に繋いで居るのを認めたので、其の研究が勢ひ古代に偏して、中世に疎くなつたのだと見るのである。此の見方ならば一通りの理由があらうと思ふ。實際近世史上に現はれた諸現象を過去の事實に照らし合せて見ると、中世を飛び越して、一躍古代殊に羅馬帝政の盛時に遡る場合が確かに多い。中央集權的の傾向がさうである。軍國主義的がさうである。奴隷階級(其の形式は一見その如く見えぬにもせよ)の設立がさうである。國家の興亡を討ねて、現在に於ける國家存在の基礎に合理的な論理を與へるのが歴史研究の本義と心得た當世の歴史家は、かゝる現象を見て、中世と現代とを結び附くべき緊要な連絡を見出すのに苦しんだ結果、中世は過去の忘却の中に葬り去られた者だとして、これに「暗黒」とか「停滯」とか云ふ諡をした。而して、不幸な此の一時期は、其の正當な發達から云ふと、僅かに少年期を過ぎた許りで、無殘にも挫折したまゝ、かゝる忌はしい諡の下に葬られて仕舞つたのである。

　然し實際中世はそんな暗黒な時代でもなく、又そんな停滯した時代でもないのである。中世紀の有した固有の特色から論ずるならば、表面の暗黒停滯に似もやらぬ獨創的な有機的な現象が其の底に流れて居て、諸方面に向つて華々しい發達をなさんとしてゐたのである。所謂ゴシック文化と概稱せられる歴史的現象はそれであつた。然し不幸にも此の時期の發達は途中で杜絶して仕舞つて、其の後に文藝復興期と云ふ近世の基礎が据ゑられたのである。自由都市は片つぱしから倒れて近代の國家組織に代り、コムミューンの制度はすたれて資本制度に變じ、超然として凡ての現世的桎梏からかけ離れた僧庵は滅びて、國家政體と密接な關係のある信仰が起り(人は中世紀の羅馬法王朝を云々するが、これは羅馬末世の一現象の接續である事を忘れてはならぬ)、自由藝術・公衆藝術は跡を絶つて貴族的客間的藝術が榮え、自由な獨創的な人心の活動は屏息して世は復古的精神の虜となつた。これは一面には今世紀の病所ばかりを指摘して、一面には中世紀に於ける發展を光明的方面ばかりから數へ立て

た一面觀ではあらうけれども、一面觀にせよ、上述の現象は確かに起つたのである。かくの如くにして中世の精神は事實に於て斃れて近代の歴史が始まつた。而して歴史家は安堵して此の時代を度外視しようとした。然るに死んだと思はれた中世紀的精神の閃光が、近世史の此所彼所に現はれ出した。始めの中は此の現象は、過去と何等の關係もない偶發的なものとして取り扱はれたが、日を經るに從つて其の顯はれは頻繁に且つ顯著になつて來た。而してそれが現代文明の根本的要件と牴觸さへするやうに嵩じて行つた。アダビチズムの法則に從つて、遠く古代の特質を繼承してゐた現代は、見も知りもせぬ直親の面影を自己の中に發見して、而して其の出現が自己本來の面目と矛盾する場合さへある事を覺つて、驚いて悶え始めたのである。

二

佛國革命がルヰ第十四世によつて完成された羅馬帝政型の帝國主義に對する中世紀自由都市的精神の反抗であつた如く、社會主義の勃興が古代の奴隷主義型の資本制度に對する中世紀コムミューン的精神の反抗である如く、科學の發展が、希臘羅馬の系統を引いた、權威を立して鑄型に嵌め込む瞑想的哲學の傾向に對して、中世紀の事實討究の精神の反抗である如く、近世藝術の勃興は文藝復興期――延いては羅馬風の藝術家の個性と自然とを無視した模倣藝術に對する獨創的ゴシック藝術の反抗と稱していゝ。

かの文藝復興期がクラシシズムの復興を謀つて、その爲めに模倣の醜態に陷つた事は、圓柱若しくは角柱の上に意味もなくエンタブレチュアの斷片を置いたあの遣り方一つを見たゞけで大體を窺ふ事が出來る。又ピラスターと云ふやうな、形骸のみを殘した、裝飾としては拙い裝飾を案出したのを見ても、如何にクラシック趣味の復興が單に模倣に終つて、眞精神の傳承を誤つてゐたかの證據になる。此の事實は建築ばかりではない。繪畫の上に

も現はれて居る。かのラファエル前派の畫家をして、ラファエル以後の畫家に學ぶのを卑しい事と思はせた一事を見ても、如何に當時の畫界が形式の末に泥んで、自ら見るの眼を失つて居たかの例證とならう。こんな狀態にあつて獨り彫刻が除外例で居る筈はない。復興期以來大彫刻家も出てゐないではない。傑作と云はれるものも生れてゐないではない。然し確かにそこには傳習的な模倣から出發して或る程度の効果を收め得たに過ぎない恨みが明かに見出される。最も獨創力を要する藝術界にあつて模倣と傳習程恐ろしい獅子身中の蟲はない。果然第十七十八世紀に及んで彫刻は痛ましい程の退化墮落をなした。第十八世紀の中葉からは殊に古代藝術の殘滓を嘗める傾向が生じ、ナポレオン第一世が佛國を統一するに至つては、古羅馬帝國を夢みて、文物制度は一向に其の昔に則つたので、彫刻も自ら其の影響を蒙らざるを得なかつた。ナポレオン第三世に至つて其の弊は更に甚しかつた。かの全く内部生命を閑却した權威なき製作は、大多數の匠人によつて臆面もなく試みられ、嘗てアミアンの基督、サン・デニスの浮彫に全然新しい藝術的精神の發露を示したゴシック藝術家の子孫は、見る影もなく墮落に陷つたのである。

然しかゝる墮落の風潮は、美的直覺の極めて鋭敏な佛國民の長く堪へ得る所ではない。彼等はクラシシズムに對して反抗の聲を擧げ始めた。文學界にあつてフローベル、ゴンクールの斃したメヂュサはこれであつた。繪畫にあつてクルベー、ドラクロアの屠つたスフィンクスはこれであつた。ゴシック精神の復活は、多大の反抗と非難との間に、藝術界にも行はれつゝあつたのだ。獨り彫刻界だけは他の藝術的活動からは非常におくれて長く惰眠から覺め兼ねてゐたのであるが、オーギュスト・ロダンが現はれて、絶大な甦生の風潮を捲き起してから、俄然として一時に一大飛躍を試み、藝術界の先頭に立つて一代の傾向を指導する程の權威を振ふに至つたのである。

三

Tympanum の尖頭で大空を楔形に立ち割つて聳え立つ灰色のパンテオンの前に立つて、一わたり極めて嚴肅與整なクラシックの建築を見渡した後、鐵柵を横ぎつて portico の石段に足をかけて上を仰ぐと、看る者の前に直線をなして水平に横はるのは、幾層の階段によつて作らるゝ併行線である、エンタブレチュアから驀地に切り込む様に落ちて來るのは、二十一本のコリンシャン柱の垂直線である。此の嚴肅な垂直線と水平線とが交つて直角を爲す所にロダンの「考ふる人」は置かれてあるのだ。彫像を作る時に、其の彫像の置かるべき位置から周圍から廣さからを綿密に商量しての上で、始めて鑿を取ると聞いてゐたロダンのかゝる作物がかゝる處に置かれて在るのは、自分に取つては謎としか思へなかつた。あの不規則な vigorous な、而して極めて brutal な一個の moderne は、かのコリンシャンの柱頭、David d'Angers の tympanum、かすかに中高な階段の併行線と何の關はりがあらうぞ。自分は巴里の中央で茫然として、此の二つの大きな矛盾に眼を見張つた。この奇怪な對照を皮肉を極めた惡戯と見るべきであるか、それとも深刻な痛烈な寓意と解すべきであらうか。自分は此の鑄像を彼處に据ゑて得意でゐる佛人の心の程を危まずには居られなかつたと共に、平氣でそれをさせてゐる巨匠の大膽と自任とを驚異せずにはゐられなかつた。フロレンスのサン・ロレンツォにあるミケランジェロの「考ふる人」でも持つて來て茲に建てたら、建築物に對してやゝふさはしい調和を見せる事も出來ようが、ロダンの「考ふる人」ではアテナとタイタンとを夫婦にした程の矛盾である。佛國人は嘗てルーソーを生かして置いた爲めに、佛蘭西王國を失つたやうに、ロダンの「考ふる人」をパンテオンの前に立てゝ、最も强烈な革命の到來を馴致してゐるのである。ゴシック精神は此のむくつけき男に於て正しく復活した。紐を束ねてしごいたやうな其の筋肉は、アルカヂヤの野に見る筋

肉ではない。顎の下に堅く押しまげた太く鈍い指は、竪琴を奏づべき指ではない。それは正しく鐵槌を握るべき指である。而して其の顔——其の表情——如何してかくまで傳說を小氣味よく蹂躙する事が出來たらう。一片の顏面筋でも一線の皺でも、クラシシズムと背中合せをなしてゐないものはない。背部を滑り落ちる猛烈な線の表顯する力の感じは、雪なだれがアルプスの峻坂をこそいで落下したやうな心地がする。クラシシズムの理想が肅整典雅を以て立つてゐるのに反して、これはまた最も破格で最も露骨である。バランスと云ふ樣な事は、自然が一個の人間を腰かけさせるに必要とする程度以上には濫用してない。彼は斯の如く從來の傳說を超絕して、巴里の眞中で、つくねんとして夜も晝も考へてゐるのである。彼が思案を捨てゝ、顎をさゝへた腕を伸ばして、徐ろに顏を擧げる時が來たら、今の巴里は如何なる變化に出遇はなければならぬ事だらう。其の時考へ續けて居た彼の思想は如何なる形態を取つて顯はれて來るであらう。彼の後ろに置かれてゐる Maindron の聖ジュネビエブとクロビスとは其の時も依然として彼の後ろで其の存在を續けて居るだらうか。

白晝に、世界の最大都會巴里の中央に、大衆注目の中に、明らさまな興廢が行はれんとしつゝある。スフローのパンテオンが倒れるか、ロダンの「考ふる人」が斃れるか。歐洲史の二大潮流は此の二つのシンボルによつて代表されてゐる。其のシンボルの底意を明かに見て取つた人こそは、やがて來るべき思想上の要求を滿足し得る人であらねばならぬ。

四

ゴシック藝術の一特色は醜の美化である。寧ろ醜と美とに對する標準の改造である。古代藝術は到底自己所作の標準以外に立つて、更に新たな眼を開いて美を認めると云ふ、複雜な精神活動に立ち歸る事が出來ないで居

る。整正、典雅、均衡、肅靜、高遠、莊嚴と云ふ樣な言葉のみが、古代藝術批判の標準語となり得るのである。自然に現はれた一方小さい眼、乾からびた腹、萎えた足、無心なナイーヴな醜いポーズの如きが、美の對象となり得ると云ふ事は、紛糾した頭腦を抱いて、恐れず諂はずに　自然の內懷ろに手を入れた人でなければ、理解する事の出來ない境地である。我々は餘りに長く類型の捕虜となつて居た。文藝復興が古代藝術の復古を計つて、美の標準とか美その者の範疇とかを立てゝ以來、我々は自然の中に住む代りに其の概念の裡に住み暮した。同じ人間の設けた係蹄にかゝつてゐながら、藻掻く事すら忘れて、喜んで謳歌して居た。此の意味から云へば、其の技巧は例へば一代に冠絕して居たにせよ、カノーバもトールヴァルドセンもジャン・グーゾンも到底過去の人であつて、重き權威を新しい藝術的良心の上に要求し得るものではない。頭腦から頭腦に、手から手に傳へ傳へて來た結果、美と云ふものは其の本來の光澤を滅却して垢光りに光つて居る。幽かなりとも自然に對して端的に眼を開いた現代は、復興期系統の彫刻に對してあざむかれて居たと云ふ感じを起さずには居られない。新しく見る眼、新しく感ずる心を持つた人が出て、新しい生々しい美をつかめよかしと云ふ要求が、思潮の底流を容捨なく鞭つた。

その時俄然としてロダンの「鼻のかけた人」が出た。取り返しのつかない大事が持ち上つてしまつた。かの小さな醜い一つの首は、其の濁つた眼を光らかして遠慮げもなくあたりを見廻した。新しい美を要求してやまなかつた現代人は、此の作品に對して、珍寶を期待して妖怪に襲はれた舌切り婆さんの痴態を演じた。新しい醜を要求しはしなかつたのだ。新しい美を要求したのだ。自分等の要求したのは新しい醜ではない、新しい美であるのだと泣き聲になつて叫んだのであるが、かの小さい醜い一つの首は、當惑げに「己れが其の新しい美なんだよ」と云つて眼をまじ〳〵させたのであつた。

かうして見ると現代も天才の出現に遇ふまでは、過去の夢を見つゞけて居たと云ふ事が知れる。現代は復活の要求を心の底に感じては居たが、新しい存在が如何なる者であるかに就ては、朧げな用意すら持つて居なかつたのだ。革新の要求と共に、彼等は美の標準を依然として過去の世界に置いてゐたことに氣附かなかつたのだ。卽ちその要求した新しい美と云ふのは、クラシシズムの名をかたつた詐欺師に、最一つ詐欺を働かせると云ふ位の意味に過ぎなかつた。然るにロダンは天才の本能から、新しい美の要求に對して、全然的に新しい美を提供したのだ。丁度ゴシック盛時の彫刻が希臘の轍蹤から絕對に獨立して、其の若々しい潤みのある發展をなしたやうに、ロダンもタイタンに等しい力を振つて、長い束縛の繩目を斷ち切つたのである。かくの如くして現代が自己所作の思はざる結果に戰慄して居る間に、醜の美は續發せられた。「鎧切り」も出た。バルザックも出た。世界は驚いて仕舞つた。

一體世に完全なものはない。空想されるやうな完全な美は勿論ない。希臘藝術、從つて其の模倣者なる復興期系の藝術は、人力を以て此の自然の不完全を補はうとしたものである事は云ふまでもない。然るにゴシック藝術は此の完全と不完全との間に漂ふ言說し難い charm の存在を發見したのである。換言すれば不完全から完全に向つて放射する一種の力を自然の中に見出して小躍りしたのである。始終動搖して進化しつゝある人間生活にあつて、一番人間の心を引きつけ、一番人間に强く深く訴へるものは、この變化から變化に移り進む道程の外にないのである。その道程が生み出す美こそは、人に殉情的な滿足こそ與へはしないが、正しい根柢の深い落ち着いた享樂を惠むのだ。それ故にゴシック藝術は一層不完全に固着して、不完全を精細に徹視する事を以て第一義と心得た。更に換言すれば堅く realist の立場に立つたのである。卽ち不完全の存在を怖れぬ許りでなく、それを恰しむ程の徹底的態度と若々しさとに到達したのである。ロダンがゴシック傾向を代表してゐる事は此の點から

も云はれると私は思ふ。

社會主義の論理に惡意がない如く、醜の美を主張するロダンの努力にも惡意がない。ロダンに取つてはかの理解し易い「接吻」を刻んだ時にも、腹の皮の垂れ下つた老衰者を彫つた時にも、自然が祕藏する新しい美を敬虔に感實に發見しようとする一心の外には何者もなかつたのだ。然し彼が本當に民衆によつて理解され鑑賞せられるまでには、現代は汗水垂らして走らねばなるまい。幾年かの後に漸く追ひ附いて、人々が「鼻のかけた男」とミロのヴィーナスと竝べて眺める程になつた時、ロダンの大さは初めて定評に上る事が出來るのであらう。

五

しよぼ〳〵と霙の樣な雨の午後、リュクサンブルグ畫堂の濡れて冷たさうな階段の許に來て左を見ると、「銅の時代」の靑年が右の手を握つたまゝ額の上に加へて、上向き加減にしと〳〵と雨に打たれて立つてゐた。その細つそりと淸く瘦せた顏に、雨雲の灰色が映つてすさまじい。若い婦人もくすんだ色の外套を着る時節で、來る人も來る人も此の像には眼もくれず、衣物の襟をひき立てゝ小刻みにかけ込んで行く。自分もそれ等の群れにつゞいて畫堂に這入つた。いきなり暖く人いきれがして、外套を脫いだ華やかな婦人達の晴衣の色が、射るやうに眼にあざやかである。其の衣ずれや、私語や、驕奢な香料の香の中で自分はロダンの「ダビイド」と「聖ジョン」とを見た。

劃然と火の筆で境界線を引いた樣に、此の二つの作物は他の作物からかけ離れてゐた。成程技巧は非常に勝れて居るし、違つても居る。然し技巧のみがこれ程に是等の作物をして他と異ならしむる要求を成すであらうか。一絲も着けぬ「聖ジョン」の裸體、疲勞の極點に達した「ダビイド」の筋肉のゆるみ、一つの骨の位置、一つの

筋肉の動作をも隱し得ぬ製作を敢てして、少しも惡びれて見えない其の技巧に對する確信は、先づ見る人の膽を奪ふに足るが、それが果して是等の作物を他と異ならしめる全體であらうか。

私はかくて藝術家の個性と云ふ事に思ひ及んだのであつた。個性が藝術的製作の中心なると云ふ事は、事實に於て否み難い所であらう。然し藝術家が已れの個性を取り扱ふ態度に於ては、おしなべて一樣であると見る事は勿論出來ない。從つて自然と製作物との間に立つ個性が、其の stamp を作物の上に極大に現はすか、極小に現はすか、と云ふ問題が考へられねばならぬ。換言すれば個性を本位とすべきか、概念を本位とすべきかと云ふ問題になる。此の點から見て私はゴシック藝術は前者の代表者で、クラシック藝術は後者を代表する者であると云へると思ふ。

前にも云つた如くクラシック藝術には、美の內容に對して一定の制限があつた。卽ち美と云ふものに對する固定した概念が出來てゐて、藝術家は其の概念の前には一個の盲目なる奴僕であるべく要求された。幸に古代にあつては其の所謂美の概念なるものは、美を見るに鋭敏なる國民性の發露として、崇高端整を極めたものであつた爲めに、藝術家は樂しんで自己の個性を其の概念中に沒却したのである。然るにゴシック藝術が其の發展の高潮に達した時を見ると、自由都市內に於ける人民の生活は、最も自由な平等な生活であつて、各自が自己の面目を發揮すべき自由を得た事は、當時の一建築物內の柱冠が、匠人每に其の形を異にして居るのを見ても明かである。又復興文化の發源地が伊太利にあるに反して、ゴシック文化の源頭は未だ傳說習慣を有せぬ佛蘭西にあつたが爲め、自ら已れを律すると云ふ態度が盛に發揮せられたのである。成程一見するとゴシック時代の彫刻は何れも同じ典型の中に籠められて區別を認め難く、私の主張を否定するやうにも思はれようが、仔細に觀察すると其の多數は建築物の附屬品として製作されたもので、形にもポーズにも越え難い建築上のテクニックスの制限があ

つた事を同時に考へて見ねばならぬ。若し希臘や羅馬に行はれた樣な、彫刻の獨立が可能である場合を想像したら、ゴシック造形美術の華やかな發展がどれ程であつたかは、にはかに揣摩する事が出來なからうと思ふ。アミアン、ノートルダム、コローン、ニューンベルヒ等の寺院に參して自分の驚異したのは、前述の理由で非常な製作上の制限を受けながら、其の製作品の中には自由な確實な個性の浮動を見得た事であつた。此の傾向は繪畫の方で、ビザンチュームの平板單一な類型的な描寫が、チマブエ、ヂオット、アンジェリコ等によつて、俄然個性の反影を見るに至つた事實によつても窺ひ知る事が出來る筈である、

而して自分は此のゴシック特有な傾向の復活をロダンに於て認め得ると思ふのである。ロダンの製作品には斷じて他の踏襲を許さぬ境地がある。ロダンでなければ見る事の出來ない嚴乎たる見方がある。凡ての自然は一度ロダンの個性を經て、其の關門の印章を受けて作物の上に現はれてゐる。それ故にロダンの作品を見てから他の一般の作品に眼を移すと、色調の涸渇した畫の前に立つ思ひがする。出た所が出て居ない。引込んだ所が引込んで居ない。意味のない美しい線と美しい平面とが雜然として積み重ねられてゐるばかりで、有機的の組織を持つて居ない。云はゞ影と日向との無意味な結合である。

それならロダンは全然狹窄した主觀にのみ立つて。空想の使役する所となつたのであらうか。全く反對である。彼は嘗て後進に告げて、一本の手でも一本の足でもかまはないから、征服する積りで研究をしろ。其の手なり足なりに就て一つの知識も取り殘してない迄に綿密な執着をしろ。執着をしろ。一度手を着けたものは征服する迄放すなと云つたと聞いて居る。これは彼の放言でないに違ひない。彼は事物の認識は到底主觀の外にない事を悟つた。所謂美の標準と云ふやうなものも、畢竟幾多の古人の主觀の consummation に過ぎないと觀じた。自然に對する純客觀的態度と云ふやうな事は、理論によつて割り出された空想に過ぎないと知つた。然らば自己の個性

にして擴大して、權威を以て美の傳說的標準をさく〳〵と批判する事が出來るやうにさへなれば、苦しんで他人の歩いた道を追ふ必要はない。獨立した米國は英國に準つて王政を布く必要はない。米國は大威張りで其の善しとする共和制を行ふのが當然の筋道であるし、それが最善の處置である。要は强大な個性を建立して、其の努力によつて萎えたる人民の爲めに新たな世界を開拓するにある。かゝる態度を以てロダンは新たな要求に應じたのだ。卽ち彼は新たな眼を開いて世界を新たに見渡したのである。彼の製作品は自然を無みした彼の夢ではなくて、新たな眼によつて見られた昔のまゝの自然である。彼の作品は自然と彼の個性とが取り結ぶ婚禮の聖牀である。製作品を通じて彼は自然を抱擁して靈と肉との交りをなすのである。

かくて自分は最一度「聖ジョン」の像を熟視した。「神の國は近づけり、悔い改めよ」とをたけぶヨハネは、畫にも詩にも彫像にも飽き足る程接したが、「我は爾よりバプテスマを受くべき者なるに爾反て我に來る乎」と云ふヨハネはロダンに於て始めて意義あり權威ある表現を得たと思ふ。(これは固より自分一個のかの彫像に對する interpretation である。ロダンが如何云ふ積りであるか、他の人々が如何に考へて居るかは些かも知らないのだ)。これ實にヨハネが生涯の絕頂である、ヨハネが使命の最終である。野蜜と蝗とで瘦せに瘦せて、義憤と慷慨とで劍の如く險しくなつた其の顏が、神の子に遇へる歡喜と、永遠の resignation とを以て、幽かなる微笑の薄衣したその sudlimitp と pathos とよ。ヨハネの生涯を尋ねてかくまで緊迫した一瞬を捕へ得たロダンの心は難有くも尊いではないか。既にヨハネの心裡に投入する事に於てかくまでに深切な眼識を示した彼は、其の場合の聖者を體現すべき神の如き手腕を持つてゐた。傳說を超脫したヨハネは傳說を超脫した技巧によつて現はれねばならぬ。果して一つの肉も一つの筋も悉く彼自身の新たなる眼で研究し盡した筋であり肉であつて、かゝる創作を世に供せん爲めには、斷じて古人の糟粕を嘗めまいと云ふ覺悟が、見る人を威壓する程である。殊に小さな「ダビ

イド」の痩せてあらはな仙胛骨の邊り、腰部のあたり、人の全く注意を怠る所にまで、勢力を搾り盡した努力の跡のあるのを認めては、眞率敬虔な天才の態度の崇高に打たれて、こんな尊い活き方をせめて半日でもして見たいと思ひ入つた。

畫堂の表戸を押した時は既にたそがれて居た。街燈の光が燐の樣に青黄色い光を、雨に濡れた鋪石になげて、人の往來がせはしく見える。「銅の時代」は依然として深い神祕を藏しながら、絶大絶偉な技巧によつて創造せられた全身を、夕暗に包ませて立つてゐる。

六

「銅の時代」以上の神祕は「アダム」から溢れてゐる。骨太な、肉の逞しい體格は、一縷の活氣の通じた爲めに、からく地上に立ち上つてゐる。左肩を稍〻聳やかして、兩手を力無げに垂れてゐる。その指先きにはまだ活力が行き渡つてゐないらしい。左の肩の上に深々と垂れた首は未だ眠つてゐる。しかも存在の意義がほの〴〵と曙のやうに顏全體に染め出されてゐる。殊に驚くべきはその顏である。額と、鼻から眼にかけてと、兩方の頰と、口より顎にかけてと、此の五つの部分が、あるとも云へぬ調和の中に堅められて、精妙な、强靱な、素厚な相貌を成してゐる。而してその凡てを深く包んでゐるのは、晝のやうな明かな神祕（若しこんな造語が許されるならば）である。

嘗てロダンは天才に特有な深甚なる徹視の力によつて、神祕的崇美の權化と見らるゝミロのヴィーナスを評して、其の彫像の古今に冠絶するのは、それが何處迄も一個の女であるからであると云つた。ロダンに取つては此の地上の生活その者がさながらにして神祕であつたのだ。新しい生活に神祕のないと云ふ人はロダンの製作に眼を

曝すがいゝと思ふ。クリンゲルやスツックの神秘を謎の如き神秘だとすれば、ロダンの神秘は、神秘その者である。我々が唯の人間を眺める場合、如何かした拍子に、その人が一つの神秘として現はれる事がある。其の人は平々凡々な一人の人である。明白に一個の普通な人である。何の謎をも秘密をも持ち合してはをらぬ。しかも平凡尋常なその人の全體が、宇宙大な神秘として我々の全靈を慄はすのである。陸の極まる處は海に連なるやうに、凡てものゝ突き當りには神秘がある。この神秘は昔と同じ大さを以て新しい生活に附きまつはつて居る。又うるさいやうではあるが、自分はこの種類の神秘をゴシック藝術の中に見出し得ると思ふ。切言すればクラシック藝術には神秘なるものはない。若し强ひてありとすれば、それは謎であるか、比喩であるか、若しくは寓意である。此の點に於てクラシック藝術は sensual な藝術である。然るにゴシック藝術となるともつと切羽つまつてゐるとでも云はうか、當時の人間の生活と密接してゐたとでも云はうか、一種人間と絶縁する事の出來ない、それ故に極めて神秘的な奥妙な力が其の製作品に籠められて居る。それを最もよく體現したものは、恐らくは、ゴシック文化の最大遺物の一つなる寺院であらう。固より寺院が神秘的傾向を現はすと云ふ事は、基督教殊に中世紀基督その物の固有性による事も多からうが、一面に又ゴシック藝術は其の神秘的傾向を最も切實に現はし得たとも云へるのだ。ロダンが大抵日曜日毎に行つて瞑想を凝らすと云ふノートルダムの如きも實にその一つである。ノートルダムなればこそクヮシモドが現はれてもエスメラルダが捕はれの身となつても、一つのまとまつたローマンスとなるのである。巴里雜沓の中心にありながら、宛ら太古の大森林を思はせるのは、この大伽藍の奥で、ステインド・グラスにあたる日が、蔭つたり明るくなつたりする度に、百の色千の綾は石疊の上に現はれたり隱れたりする。アプスの壁際にある厚彫りの樫の椅子に腰を下ろして聖龕を見ると、眞暗な隅に星の如く寡婦のともし殘した蠟燭が一つ燃えて居る。賽錢を集めに來た僧侶の足音は、宛ら大風の如く百呎にも餘る天井の隅々まで響いて、そ

れがまた遙かな地上に降りて來る頃には、かの足音の主の姿はもう見えなくなつてゐる。時限と方處とは此の寺院の壁で切斷されて、玆には我々が得知らずにゐた新たな世界が開けてゐる事を感ぜずにはゐられない。ロダンの作物にも、明かにかういつた一種の感じが漂うてゐるではないか。

ロダンの「アダム」を見た人はすぐフロレンスなるミケランジェロの「捕虜」を思ひ起さずにはゐられまい。ロダンは恐らくは「捕虜」に眺め入つた事があるであらう。而して――自分の勝手な推察が此の上許さるゝならば――そのポーズを取つて「アダム」を創出したのであらう。ミケランジェロとロダンと何れが大なる天才であるかは自分は知らない。然し彼は「捕虜」として餘りに extravagant なミケランジェロのデザインが「アダム」として最も大なる成功を收め得べきを見て取つた。而して我々の面前には今、我々の覺醒第一瞬を體現した永久の記念碑が生れたのである。「捕虜」の中に眠りつゝあつた神祕は、「アダム」に於て我々の前に曝されたのである。

七

我等の前には二つの態度が提供せられ始めた。文藝復興期の心を以て舞ふべきか、ゴシック盛時の心を以て歌ふべきか。凡ての人はその二つの間に選ぶの必要に迫られてゐる。一方を選ぶのは時代の寵兒たる事である。他を選ぶは敢て叛逆者たる事である。而して自分の信ずる所によれば、かの柔和で謙讓なロダンは、イブセン、トルストイ、マネー、セザンヌ、ホヰットマン等近代の巨人と共に、居然たる叛逆者の頭目であらねばならぬ。

（一九一〇年十一月、「白樺ロダン記念號」所載）

一九一一年

泡鳴氏への返事

小生の「も一度二つの道に就て」と云へる感想文に對し、去年早稻田文學十一月號に御掲載なされ候御批評は既に一讀致し早速御答申すべきかと存候得共、兎角議論と申すものは十中の九までは文字の末に泥みて事の本源を閑却し、結局字句の爲めにいらぬ奉公を致す馬鹿らしきはめになり勝ちに候へば、御返事は致すまじと差控へ居候得共、先頃白樺社に對し特に御申越しの次第も有之、十中九までは無益なりとも十中一との便りもある事なれば、かた〲御返事致す事に思ひかへし申候。六菖十菊の嫌ひは不悪御諒察下され度候。

御教示によれば貴下の定義せられたる藝術上の主義とは、

「藝術上に人生を如實に觀ずる……(には)必ず見識と修練とが必要だ。且つ修練と見識とが藝術家の獨創的人格と一致した時に於て最も多く意義あるものとなるのである。僕等の主義と云ふのはそれである。」

と申されたると、

「主義は藝術家の人格と生命とである」

と申されたる御言葉に盡きたりと存じ候。これはさりながら餘りに平凡なる御申條に無之候や。苟も藝術に係り合はんものにて、此の覺悟なきが果して有之候べきや。藝術家たらんとする以上、他と混同せざる獨創的人格を發揮するに勉むべきは固よりにて、これと一致したる見識を養ひ修練を遂げんと心懸くべきは、赤子が母を便

り、少女が裝ひすると等しく、更に他の奇なき家常茶飯事と存ぜられ申候。餘計な推量かは存ぜず候得共、假りに貴下が第二流第三流に墮したりと罵り給ふ藝術家に對し、貴下の提唱されたる藝術上の主義なる者を披露致し候はんに、其の人々は直ちに答へて、左様の事は云ふまでもなき沙汰なりと申し候べし。尤も內容が普通尋常なりとて主義になり兼ね候理由なき義は、萬々承知致居候得共、さりとてそれ程の事を主義呼ばはりして、徒らに世の中を小面倒に致候必要は、乍殘念小生には認め難く候。肉菜兩樣の食物に活くるが常例なる我等の生活に、菜食のみにて押し通さんと企つるものあればこそ、菜食と申す主義も聞こえ候に、常例の食事をなせる人、我こそは肉菜兩食主義なりと名乘りを揭げんも異なものには候はずや。

將又藝術家の人格と生命とが主義なりと仰せられ候御主張も如何にも潔く且つは高遠にて、かの古の豫言者の獅子吼などさへ思ひ起され候次第ながら、これ亦文字の儘に解し候はゞ、主義と云はんは業々しとも業々しき限りと存じ申候。藝術と云はず、眞面目なる生活的態度にありては、人格と生命とが根柢を爲すべき義は、餘りに明白なる事實に候。斯くの如きを主義など申して喋々致し候事、實生活に對する一種の侮辱なりと小生には愚考致され候。

要之貴下の仰せられ候藝術上の主義なるものは、餘りに普遍的にして他を convince するの要なきものなれば、主義として存在するの餘地全くなきものと斷じ候。

さりながら貴下の主張せられ候藝術的態度の實行程度如何と申候事に至りては、云ふべき事は極めて潤澤なるべく候。竊に思ふに貴下御所論の歸結する所も此の邊に候なるべし。卽ち低徊趣味とか『あそび』主義とか其の他貴下が第二流第三流に數へられ候べき藝術的態度は、貴下の仰せられ候主義の實行足らざるものなりと單に御考慮なされ候義と存申候。さらば伺上候が、貴下は果して御提唱相成居候主義の體現を全うせられ候や。小生は

貴下が誇大妄想狂にあらざる限り、又努力と進步と申す事に信仰を有せられ候限り、以上の問に對して否と答へらるべきを信ずる者に候。獨創的人格と見識と修練とが三拍子揃うて調和に入り候曉は、其の人の飛躍が終結を告げたる瞬時に候のみならず、第一そんな事が人間と名のつく社會にあり得べき事には無御座候。結局貴下の所謂藝術的生活の三要素が互に相尅し相爭ひ、交る〲上になり下になる所に、人間世界の實相も成就し、進步努力の影も認めらるゝには候はずや。即ち藝術的生活三要素の體現と云ふは、捕ふると共に消え失する Fata morgana にて、强ひてその捕捉を主張候ひしとて、それは畢竟程度の問題に過ぎず。貴下の藝術が一等なり他の藝術が二等三等なりと痛呼せられ候意氣は愛すべきに似たれども、五十步を以て百步を嗤ふ誇りは免れ給はざるべく候。

且つ人格とか生命とか修練とか見識とか仰せられ候得共、小生は其の內容を一層明瞭に承知致度候。社會が公に知り得たる貴下の御生涯竝に貴下の御作品に現はれたる人格・修練・見識を標準として其の內容と定め候て差支無御座候や。貴下の藝術的主義の定義より推せば左樣致さず候ては却て理に悖る次第と相成申候。果して然らば小生は、貴下の人格作品が貴下の稱せらるゝ第二第三流藝術的人格作品に比して、一頭地を抽んずる所以を知るに苦む者に御座候。貴下は此の如き人格と此の如き修練と此の如き見識とが一致したりとて、眞正なる意義に於ける藝術的主義が成り立ちたりと思召され候や。獨創的人格を或る程度或る範圍に制限し終つて、これにふさはしき修練と見識とを造り出すは出來難き儀に候はねど、小生一個より申候へば聊かも望ましとは存不申候。小生は寧ろ其の大なる矛盾に驚異せん方を擇び申候。

最後に申添へ候が主義の主張も批評家が致す沙汰ならば、小生はそれまでを拒むものには無御座候。或る時代の思潮を統一し若しくは歷史的に取扱ふ場合に、批評家が同じ傾向のものを採り集めてそれに或る主義の名を附するは勝手なれども、藝術家が何故自己の主義なるものを人の前にて喋々する必要有之候や。人生を如實に摑す

ると申し候は自己獨得の人格を通じて人生を觀ると云ふ義にて、左樣致候事を主義と仰せられ候ならば主義にて差支無之候へども、藝術家は其の見たる所を忠實に作物の上に現はせば足る事にて、これにむづかしく命名（例へば心物、內外の燃燒合致的刹那の悲痛）して、人に强ふるに至つては、藝術家は其の本領を忘失したるものなる事を御注意申上置候。小生が「も一度二つの道に就いて」に申候藝術家と批評家と主義との關係更に御復讀を煩はし度候。

又御高說の最後の節に於て小生感想文の本文に對する御批評有之「氏は『人間は相對界に彷徨するものであつて、絕對と云ふが如きは永久に窺ひ知る事の出來ぬ境界である』と云ひながらまだ絕對其の者の觀念を消してしまふことは出來ないらしい」と「らしい」より論を起して、嚴しき鞭撻を加へ下され候へども、「らしい」の上に論據を定められ候儀は以來斷然御免を蒙り申し候。

書きつゞり候まゝに筆端禮を失したる個所も候はゞ御高免下され度、文意の存する所御推讀の程願上候。草々。

（一九一一年、「白樺」所載）

「お目出たき人」を讀みて

無車兄

老成めいた事を云ふのを許して下さるなら、僕は兄の作品は凡て未成品だと思ひます。兄の文學的行程の彼岸は隨分近からぬ彼方にあると思ひます。

批評家めいた事を云ふのを許して下るなら、僕は兄の作品は他人の嘗て手を付けなかつた所に土臺が据ゑられてあると思ひます。

此の二つの事は兄に非常な努力を要求し、兄の將來の文學的生活に苦悶と惡戰とを齎すに違ひないと思ひます。而して僕はそれを羨ましい事だと思はないでは居られません。人の難行を羨むと云ふ事はをかしい様ですが、兄はそれを諒として下さる事と信じます。僕は兄の「お目出たき人」を始めて原稿で讀んだ時、不思議に眞面目な心地になりました。而して美裝された其の作を最一度讀んだ時も全く前と同じ様な感じに打たれました。而して其の結果として僕は何だかトルストイの"What is Art?"を讀み直して見たい氣になりました。兄の作物を見てトルストイを讀みたくなつた感情の經路は自分でも判然しませんが兎に角讀みたくなつたのです。而して一氣呵成に藝術論の最初の字から最後の字まで讀み通して、可なり委しい摘要を作りました。しかもそれだけでも滿足が出來なくなつて、文藝會と云ふ青年の團體の前で其の趣旨を話しました。三時間たて續けにしやべつたのは、僕自身が惘れた事で、こんな事は死ぬまで無いかも知れないと思つて居ります。Baumgarten から中興された美の定義を簡潔明斷に批評して來て、其の凡てを否定して立てたトルストイ自身の藝術觀が、美學者の間にどれ程重き

を爲して居るか、僕はそれまでを研究する餘裕と博識を持つて居りませんでしたが、端的に僕の心に受け入れられたトルストイの意見は、强いはつきりしたものでした。藝術とは遊戯ではない、享樂でもない。理想の體現でもない。人が自己の經驗した所を自己の感情に於てまざ／＼と經驗し返し得た時、其の感じを種々な方法で他人に傳へて、同じ感じを味はせるのを言ふのだと論じたのは、僕には價値の高い强い聲だと響きました。これから考へると藝術家の資格は直ぐ決定せられます。それは何よりも先に藝術家は鋭敏な感受の力を必要とします。それから廣汎な同情を必要とします。それから表顯の技能を必要とします。それから徹底的の誠實を必要とします。それだけです。

僕は兄の作品を讀んで、何時でも鋭敏な感受の力を感ぜずには居られません。兄が兄自身の經驗に對する感受力は痛ましい程尖つたものと僕は思ひます。僕は兄の作品を讀んで居ると、兄が僕の手を捕へて、どん／＼兄の胸の中に其の手を押し込んで、赤いぬら／＼した心臟のある所まで持つて行つて、觸れ觸れと言はれるので、此方の心がおくれを取つて、思はずたじろく樣な思ひをする事がよくあります。何んだか「新生」にあるダンテが心臟を喰はされた夢の事を考へ出して、僕は此の經驗を兄の作品に感謝して居ます。兄の作品は他人の嘗て手を付けなかつた所に土臺が据ゑられて居ると僕は書き出しに云つたのは、少し違つて居るかも知れません。寧ろ他人の据ゑた地表より深く土を掘つて、兄は土臺を据ゑようとして居られると云ふべきでせうか。然し何れにしても困難は一つです。其の困難な事業に兄が臆せずぶつかつて、力のある限り働かれるのを、僕は羨ましく心憎く思ふのです。表顯された兄の思想に特別新しいものがあるとは僕は思ひません、又それは博いものだとも思ひませんが、其の思想を取りあつかふのに、兄には兄自身の經路があつて、僕は成程斯う云ふ考へ方もあるなと驚いたり、こんなに突きつめられもするかと驚いたりします。感受力が强くつて執着が深くなければこんな獨創は出て

來ないと思ひます。
又第四の徹底的の誠實と云ふ事は、口にし筆にするには餘りにデリケートな問題だと思ひます。誠實の判決者は、若し神なるものがあれば其の神に任せ奉るのが最上の事と思ひます。畢竟各自の內心の奧底の問題です。僕は兄が誠實であると云ふ樣な事を云つて、自己を僞善者としますまいし、又兄の個性の尊嚴を犯したくないと思ひます。

それから表題の技能と云ふ事から兄の作を見ると、又驚かされる事があります。兄に知識があつても使はないのか、無いから使はないのか、それは知りませんが、兎に角兄程所謂通語を使はない作者は無い樣です。殆んど平易に書いた論文の樣な筆致で、兄は易々と纏綿した情緒の葛藤を精寫して居られるのは不思議な程です。兄は一刀流の達人です。而して其の技巧と思想との調和は申分がないと思ひます。但し兄よ、自惚れてはいけません。兄の思想がこれから精練せられて發展する以上、技巧も亦これに伴つて行く必要があるからであります。而してその努力が成就するや否やは、僕が次に云はうとする一事で定まると思ひます。

それは第二の廣汎な同情と云ふ事であります。無遠慮を許して下さい。兄の同情は廣汎だとは如何しても云へないと思ひます。兄の作が未成品だなぞと云つたのも、僕は主に此の點から思ひ付いた事であります。僕は近頃暇々にトルストイの「戰爭と平和」を讀んで居ますが、其の同情の廣汎なのには惘れて仕舞ひました。廣汎な同情といふものは、そんなら如何すれば養はれるかと云ふに、感受の力の强い人は非常な advantage を持つて居て、感じを鋭敏に働かしたゞけで、それに達する事が出來ませうが、それと同時に、廣く見、廣く接すると云ふ事が、已むを得ざる必要ではないかと思ふのです。(玆まで書いて來たらランプの油が盡きて仕舞ひました。明日書くより仕方がありません。締切までに間に合へば宜う御座んすが）人の事業は限りなく擴大するもので又せしむべきもの

である以上、藝術家の事業も其の法則に漏れる事は出來ない筈です。兄は今自己の建立した堅固な高い城郭の中に閉ぢ籠つて居られます。シヤロット姫の樣に其處で美しい錦を織つて居られます。それでもシヤロット姫は自分の前に鏡を置いて、それに寫る窓の外の自然や人物をも模樣に加へるのを拒まなかつたが、兄の織機の前に立てられた鏡には兄の姿が大きく濃く寫る許りで、窓の外の景色は幽かな弱い光で兄の姿の後方に見やられる許りです。ハンス・トーマに見る樣な感じが兄の作品の凡てを浸して居る樣にも見えます。それを僕は惡い事だと云ふのではありません。然し同時に兄が其の境界に滿足して居られない事も僕は感ぜずには居られません。兄が忙はしく自己の創造に腐心して側目もふらずに居られるのを僕は承知して居ます。而してそれを最も確實な眞正な藝術的良心の發露だと思つて居ます。然し兄は何處までも其の境界に安住する積りではないのでせう。先日僕の心を強く動かした一つの偶然な出來事が起りました。それは白樺社から送つて來た二月號にある兄の「桃色の家」を讀んで居ると、或る頁にべつたりと血をなすくつた跡のあるのに出逢ひました。僕は汚いものがあるな、多分職工でも、製本する時に指を切つたか、鼻血でも出したんだらうと思ひながら、成る可く其の頁を早く讀んで次の頁に移りましたが、其處にも指の先でなすくつた血が黑くなつて染まつて居ました。それで僕は變な氣になつて考へ込みました。桃色の女は灰色の女と男とを相手にあくまで拒ぎ戰つたが、その灰色の男の中に若し此の頁を汚す樣な血を持つた男が居たら如何するだらう。さう云ふ男の居る事が分つたら如何するだらう。桃色の女の夫と灰色の男とは何んだか永久の敵の樣にも見えるが、若し偶然に二人の手が握り合はされた事があつたら、兩方から思ひも設けぬ暖みが通ふのではないだらうか。トルストイが將來の藝術家は第一藝術を職業としてそれで生計を立てる事は無くなるし、第二に彼等は多數者と同じ方法によつて活計を立てる爲めに額から汗を流すであらうと云つて居る隨分極端な言説をも、其の時の僕は極めて嚴重に想ひ起さゞるを得ませんでした。又普通人の生

活からかけ離れた生活をしながら藝術的作品を提供しようと云ふのは不可能の事だ。何故と云へばかゝる藝術家の感得する所は特殊な境遇が生み出したもので、普通人には理解の出來ない感じだからであると云つて居る事なども僕の心を強く刺戟しました。文藝雜誌の上に塗られた職工の血。僕は如何してもそれを只事と看過する譯には行かないのです。そんな事を思ふと僕は兄が其の同情の範圍を擴げても差支のない時が早く來ればいゝなと祈るのです。さうなつたら最も自然に affectation なしに兄の技巧も延びて行くでせう。兄の同情の爐火を通じて兄のみが現はれる許りでなく、僕の樣な奴も現はれるでせう。頁で血を拭つた職工も現はれるでせう。其の時に兄の鋭い感受の力はどんなに齒切れよく活動するでせう。兄の作品を讀んで眞面目になる僕は、此の事を兄に願ふ以上に忠實な進言をする事は出來ないと思ふのです。

兄が自己を完成し得た時こそは兄が文學的行程の彼岸に達する時であります。而して其の時に兄の据ゑた土臺は他人とは全く異つて、他人より更に深く据ゑられたものとなるのでせう。然しひよつとすると斯う云ふのは、僕が兄に惡魔のさゝやきを傳へて居るのかも知れないのです。僕自身の滿足や普通人の滿足やを買ふ爲めに、兄の向つた鏡に强ひて色々な物を寫さうとするのは考へものでした。僕はぢつとして兄の心の中の metamorphosis を待つて居なければならなかつたのかも知れません。兄の心を外界に誘ひ出さうとするのは惡い事でした。然し僕の心も察して下さい。

「お目出たき人」が出た時に、日本の人は大體から云つて振り向いても見なかつたと云つて好いでせう。僕はそれを痛快な事に思ひます。「お目出たき人」は日本人を默殺してやつたのです。器用な技巧や、山のある plot や、荒んだ生活と云ふ樣なものさへあればやんやと讃めそやす今の批評界に、兄の作品が認められないで、默々の中に葬られようとするのは、實に小氣味のいゝアイロニーです。「知られざる神に」と殿堂のシリーズに書き連ねて置き

ながらポーロに對して其の信ずる所の神なるものを嘲つた希臘の學者以上の、自己所作のアイロニーです。何故彼等は作品を通して見る事の出來る作者の個性を、も少しはつきり認める事が出來ないだらうと怪しむのは、怪しむ人が親切過ぎるのかも知れません。坪内博士が戲作者氣質の排斥をやられてから何十年かになるのでせうが、世の中は依然として藝術家を戲作者として取り扱つて居るのです。日本人が輕佻浮薄な朝三暮四の國民だなぞと云ふのは勿體ない事共です。

兄の前途の遼遠なのをお目出たくお祝ひします。兄が笑つて城郭の窓から廣い世界を取り入れる時の來るのを待遠しく待つて居ます。終りに兄の作品が僕を眞面目にした事を感謝します。

（一九一一年四月、「白樺」所載）

同級生

又廻覧手紙を出すと云ふ事に定まつたのが此の正月で、小生が札幌に居る餓鬼共の事を十把一からげに書く役目を仰せ付かつた。但し小生とは誰の事だか此處に披露する必要は絶對にない。餓鬼共が赤い燕尾服を着たりホワイト・シャツを後ろ前にかぶつたり、高襟で火傷見たいな擦傷をこしらへたり、有りもせぬ鬚を延ばして見たり、牧草の樣な頭の毛に臭い油を施肥したりして、おたまじやくし然と校門を泳ぎ出してから十年になる、丁度一昔になる。十年と云へば日清戰爭が濟んでから日露戰爭が始まる迄の長さだ。「十年一日の如し」と何處かで頌德表か何か讀まれる連中が出て來る長さだ。ダーウヰンが進化論の種取りを始めてから纏まつた意見が頭の中で出來上つた長さだ。當年ちやき／＼の新進農學士が襟垢の光る銘仙か何かで、小便臭い御曹子を膝の上に抱きながら、右手で頭の素天邊の禿げかゝつたのをぼんやり撫でゝ見る程の長さだ……それだから人間は正直にしなくつちやいけません。

で、話替つて此の大學に五人居る事は知らない人は知らないだらう。誰から槍玉に擧げるかな……兎に角此の五人の事を「ぬるま湯黨」と云ふ因緣を知つて居る人があるかい。知らずば云つて聞かさうが、ぬるま湯と云ふものは上ると寒いものた。五人の餓鬼も御扶持が上れば上る程寒いさうだ——そんな湯にならない方がいゝなどゝまぜ返してはいけないさうだ。まぜつ返すと尚ほ寒くなるからな——其處で文福（新渡戸氏によれば分福、小生は新渡戸氏の說を取らぬ！）は茶釜をやめて鼻の下だけにプロフェツソォール・バールドと云ふ奴を生やして居る。舊は特別の器械か何かで特別にひねり上げて居たから、盜難除けの利目があつたが此の頃はさうでもない。

但しバールドのプロフェソォールと云ふ譯ではなく、本職は園藝だ。講義が馬鹿にまづい。これは特別に御通知をして置く。其のまづい譯は凡そ人間には舌の下に、舌を下顎につり付けて置く膜狀のものがある事を諸君は小寺ペンタによつて知悉されたであらう。あれは何んと云ひますか、小生は忘れちやつたが、其奴が文福にあつては舌の尖端までに及んで居るから勢ひよい〳〵に聞く如き發音をするのである。文福はそれを非常に殘念なものに思つて、子供が生れる度毎舌の裏をめくつて見るさうだ。親と云ふものゝ難有さはどうだい。我々餓鬼共の中からも斯う云ふ親が出たと思ふと過去が賴もしい譯だ。此の親に二人の御曹子と一人の息女がある。爭はれぬもので、どれもこれも頭がでつかい。札幌に來てひどい巾着頭が見付かつたら、文福の御落胤ときめて間違がない。文福は大學に大きな果樹園と立派なグラス・ハウスとを持つて居て、飛んでもない時にトマトを出したり、チサを出したりする。又メンデリズムスのオーソリチーである。軈て博士論文が出るから鶴首して居たまへ。但し博士號は漱石見た樣にもらつてから慌てゝ返上する樣なブマはしないさうだ。文福は又北海道の園藝會長だし、旭川公園の設計者だ。ワイマールにイルム河を挾んでゲーテが造つたあの有名な公園も皆旭川公園の前に顏色がないのは云はでもの事である――と當人はやに下つて居ると云ふ事を聞いた事がある。それはさうであらうと思ふ。それは偖て置き此に又半澤の坊ちやんは大分齡を取つた。木村狐のちやん〳〵が去んぬる四十二年に洋行歸りで札幌に來た時、坊ちやん鞠躬如として狐のちやん〳〵の前に進んで、久濶を序した所が、さすがは狐のちやん〳〵だ、いやに澄し返つて「君は誰方でしたかナ」とやつたんだとよ。然しこれは強ち狐のちやん〳〵の罪ばかりではない。坊ちやんには既に三人のスポアがある。或る皮肉家が坊ちやんの細君のお腹が小さくなつたら、構はないから「おい君今度のは何時だい」とやつて見ろ、さうすると坊ちやんはにやり〳〵やりながら「此の十月だよ」とか、「此の十三月だよ」とか答へるから面白いと云つて聞かせて吳れた事がある。まあそんな次第だ。是非もない次第だ。

で、坊ちやんは相變らずおとなしくつて何かこちよ〳〵やつて居る。シクロオヤーガニズムをいぢくつて居るとあゝなる者と見える。小兒科の御醫者樣が、いやにた〳〵するのと同じ原則に從ふものだらう。一寸例へて見れば同級會があつた晩でも唯は歸らぬ。サイダーの栓の裏を引つぱがして、コルクが黑くなつて居るのを見るとやたらに幾個でもポッケットの中に押し込んで行く。而して其の翌々日位先生の教室の黑板には、シクロコックス、サイダリイとか何んとか書いてあつて、生徒が手ぐすね引いてそれをノートダウンすると云ふ話だ(話だよ)。何しろ坊ちやんの教室はかび臭いもんだ。其の中に端然と構へてアニリン色素か何かをいぢくり廻して居る所は、天晴れ植物學者の謀叛人だ。從つて化學の殉教者だ。そら見給へ、物には何時でも二面がある。スヰフトのアカデミー・オヴ・ラガドーと云ふものをやらされたつけなあ。坊ちやんのやつて居る事は、あすこいらから來たものではないかとも思はれる。いまに胡瓜(きうり)から日光が取れないとも限らないよ。諸君は坊ちやんの雜草學と云ふ本を讀んだ事があるか、讀まなかつたら讀み給へ、買はなかつたら買ひ給へ。あれは坊ちやんが植物學に永遠の訣別をする記念の出版で、マダム・ローランが首を切られる前に慨然として、「あゝ自由よ、汝の名によりて如何なる惡事かなされざりしぞ」と獅子吼したのと同じ調子の本ださうだ。悲壯な本ではないか。

森本バンド・マスターは相變らず頭と目玉とが大きいが、近頃お腹までせり出して來た。純正經濟學助教授を以て教務主任を兼ね、と何んだか大層に聞えるが、實際大層なんだから仕方がない。此の間官舍の隣の大工小屋から火が出て燒け出された。藤田環氏のリヅム說によると、森本のリヅムは大日本帝國竝に東北帝國大學農科大學のリヅムと規を一にして居るさうだ。で東北で大水害があつた年、大學で大工小屋が燒けた年に、夫子の官舍も燒けた次第であるさうだ。これを反對にして考へると、森本が免職になる年は大日本帝國が滅亡する年で、同時に東北帝國大學農科大學が廢止される年になる。父國を愛し母校に忠なる小餓鬼諸君、諸君は其の主義に忠實な

らんが爲めには何處迄も彼を免職せしむべきでないのであります。先生には文子孃と云ふお孃さんが居る、當年取つて花の二歲、中々怜悧な兒で、幼にして新聞を弄ぶ事が好きだ。そこで細君一日お孃さんに新聞をあてがつて置いて、臺所の仕事に從事したのださうだ。所がお孃さん「當世學生氣質」をならつて、ノートを鵜呑みにする積りであつたか如何だか知らないが、翌日になつて見ると黃金變じて經世の文字となると云ふ稀有な現象が——話が下つて失禮だがとか何んとか斷るべき所だ——雪隱で持ち上つたのださうだ。これが昔であつたら「南無大日如來」と云ふ文字をにぎつたまゝ生れたとある弘法と一所にされる所であるのだが、惜哉文子孃時非にして今だに森本バンド・マスターの一令孃として目をぱちくりさせて居る。

次にひかへましたるは、東海の林カスベの君である。御心配なさるな鼻の形は故のまゝであります。所が姿は花むこになつてから一段と上つて、後ろ姿でも見せたら何處の貴公子かと思ふ程だよ。尤も本人は始めから貴公子の積りで居るのかも知れないが——でカスベ早速一子を設けた。鼻の點は小生未だ點検に及ばないから何とも保證が出來ぬが、矢張り蕎麥はうはゞみの樣に喰ふ事であらうと思ふ。媒介人なる學長閣下がおなじみの禿頭を撫で廻して三つ名を選んでやつた。カスベこれを携へて紀元節の祝賀式に教官の寄り合つた中に持ち出して各々の意見を求めた、其の三つの名と云ふのが元、德藏、勤と斯うだ。毒舌家の高岡先生は、普通作物の先生には德藏が相當だ、李兵衞なら尙ほいゝと云ふ。結局德藏には木村狐のちやん／＼が居るから紛はしいと云ふので、勤が選に這入つた。元はカスベと音相通ずと云ふ譯で否定されたのではない。これは勤君の名譽の爲めに辯じて置く。カスベが早川頑鐵と兄弟分になつたのは些か振つて居る。大いに超然とやる事だらう。坊ちやんもカスベももう洋行していゝ時分だが、世の中が馬鹿に複雜になつて——分るだらう——未だ何等の消息がない。小生聊か齒の根がぎり／＼云つてる次第だが……下らない熱はやめよう、追々暑氣になるからな。

一番後から大學に這入つて來たのが有島のミユルだ、大學の豫科に英語の教師をやつてくすぶつて居る。例の如く要領を得ない男だが、當人は其の要領を得ないのが、何か一かどの功名でゞもある樣に思つて居るから濟度し難い。此の大學で先年滿洲から來た驢馬をポニーにかけて日本で始めてミユルが出來た。其奴が韓太子が見えた時に大面で拜謁仰せ付かつた。本家本元のミユルは學長付主事とか云ふので、驥尾に附しててく〳〵やつて居る。其處を不見識とも何んとも思はないらしいのが一寸えらい、神經でも過鈍なのだらう。近來は「白樺」と云ふ文藝雜誌に、小說なんぞを書きはじめた。札幌農學校から色々な種類の人間が出たが、未だ小說家は出ないと云ふのに見込みを付けたものらしい。こいつは少し要領を得過ぎて居るやうだ。ミユルにも兒が出來た。其の名を敎へようか、驚くなよ――行光――源平時代がシルクハットを被つて足駄をはいた夢から思ひついて付けた名ださうだ。

今度は銳眼を道廳に向けると、其處には名物男ネンカン和尙と勘平とが居る、ネンカンは北海道に缺くべからざる巡回講師だ。「二階から目藥」主義だとか、「橋の下の力持ち」主義だとか云ふ農業敎授法を發明して盛に吹き立てゝ居る。吹き立てゝ居るが惡ければ鼓吹して居る。長男に稻雄と云ふのがある。其の名の稻は稻造の稻だが雄の方の故事來歷は、小生も穿鑿がしてなかつた。非戰主義なるネンカンは、玩具にでも鐵砲とか劍とかはあてがはない。世界同胞主義なるネンカンは萬歲と云ふべき所に宇宙と云はせて居る。所が稻公恐ろしい武斷主義の愛國者だ。客の卷煙草なんどを火にくべる位は朝飯前で、乃父を世界第一のものと思つて居るんだからな。然るに本年稻雄は二人の妹を同時に設けた。卽ちネンカン和尙雙生兒を生んだ事になる。我等餓鬼共は其の中の一人だけは是非官費で育てようと云ひ合つて居たら二人共前後して死んで仕舞つた。其の葬式について行きながらミユルが生後十日や二十日で餓鬼がくたばつても、そんな悲しいものぢやないと思ふなと、こんな鬼の樣な事を云ふと

カスベとバンド・マスターが躍起となつて、そんな馬鹿を云ふもんぢやない。ネンカン和尚愁然として、千と百の差は一と〇との差より小だ、一でも何んでも此の世に出たものが〇となる悲しみはたまらない、と云つて居ると敎へて聞かせて居た。ミユルの奴自分で餓鬼を持ちながら、不相變不得要領を云つて居る。此の事だけは小生もあまり毒舌を弄する氣がしない。人の死ぬと云ふ事は實際變なもんだな。勘平さんは大しよげにしよげて居ると云ふのは外でもないが、此の謙信、ガンべと云ふ信玄を失つたのだ。さすがのガンべも勘平の前に出るとちよい〳〵勘平を橫目に睨んで、おづ〳〵杯を擧げたものだが、此の人今や亡し。噫悲夫である。ガンべが旭川アルコール會社に這入つた時、勘平はお輕が緣側で讀みさうな長い手紙を送つて友情的警告をしたと云ふ話は、ブルータスが私情を忍んでシーザーを刺した大悲劇と共に、古今歷史の雙美である。勘平嗣なし羊を養ふ。(勘平嗣なしは可哀相だつた、勘平未だ嗣なしと訂正して置かう。)

次に在野黨中の餓鬼共を追ひめくつて御覽に入れよう。餓鬼共と云ふが二人しか居ない。井口天神は肥るに從つて益々天神然となる。拓植の重役室の內ではどれ程頭を上げたり下げたりしたか知れぬが、闥を排して悠然と事務室に出て來る所は千兩だ。股ずれでもした樣な步き振りでのそり〳〵と丁稚や長松の間をおねりになる所は君等に見せたいよ。狸小路の西の方にちんとした邸宅を構へて、人が行くとやうかんの三圓分も菓子皿に載せて出すよ。うそぢやないよ本當だよ。令息令孃の數は一寸記憶が出來ない位澤山居る。其の學校の成績が優秀だと云ふに至つては賢夫人の面影が忍ばれるだらう。賢夫人は眼鏡をかけていらつしやるんだ。それに續いては先般歸朝の森靑瓢簞、其の顏益々靑く、其の鬚愈々薄いが、そんな事は棚の上に抛り上げて、片脚を飛ばして活動する有樣は、すさまじなんど云ふ許りなしだ。東京には米國のナントカ會社、カントカ會社の直取引の支店があつて、札幌に本店がある筈だが其の所在は小生一寸お知せに困る。大店になると看板なんぞは懸けてないからなア。但

し種物農具塗料店は確にある。舊先生の牛がのそ〳〵して居た所に立てゝある。あれを見るとアメリカの場末にあるイタリヤンか何かの小店を思ひ出して、そゞろ曾遊の昔を忍ぶんだと云つたら、小生のお里が暴露する様に思ふだらうが其の位の事を聞きかじつて覺えて居られない小生と思ふと大分お門が違ふぞ。それより大に披露に及ばなければならないのは先生のpalaceだ。木立のこんもりした中に、ケントあたりにでもありさうな城壁造りの木造が屹立して四方を睥睨して居る。内にはマホガニーとまで行かないが、オークづくめの裝飾が施してある。其處で洋服の細君が瀏喨たるピアノの音を響かすのだ。どうだ諸君、諸君どうだ。懸値があると思ふなら買はなくともいゝよ。何も僕は諸君に是非買へと云つて、此の大道に立つて押し賣りをして居るのではないから……どうだ諸君、買ひたい人は買つて行き給へと緣日で壯士が流行歌を賣つて居つた。

札幌の中心點から少し外れるが、筆序に犬公の事も毒づいて置かう。今は月寒の大旦那だ。實際あすこの大旦那は惡くない、島松街道の右手のなだらかな斜面をうんと廣く占領して、一寸日本では見られない色々な畜舍が立つて居る。これを犬公が始めから設計したんだとあつては「不可能」を字書に入れるなと云つた奈翁が馬鹿に出來なくなる。但し斷つて置くがNe me dites jamais ce bête de mot! と始めて云つたのは、憚りながら奈翁ではないんだ。奈翁の巾着切り奴、ミラボーの言葉を斷りもなく拜借に及んで居たのだ。それだから奈翁は矢張り馬鹿にしてもいゝんだ。いゝ事になるんだ。餓鬼共には解らんだらうな、何しろ犬公は羨ましい、出づるに馬車あり肥馬あり、入るに官舍あり閨室あり、丁度いゝ加減に子供もある。東京にも出張する。犬公大に彼處でふんばると面白いよ。

あゝ馬鹿もこれ程愚に返ると後光がさすだらう。これだけ書くのに半日かゝつた。耶蘇は小生の様な人の事を感心な奴だ、そんな奴は天國に入るべければなりと云つて下さつてる。これをせめてもの慰藉として餓鬼共が何

を云はうと空耳を走らすからさう心得給へ。今札幌には春が來た。柳花春色を散ずと云ふ程の淺い春ではあるが中々いゝ。クロッカスは盛りを過ぎて、ナーシサスが咲き出した。ヲダマキの葉は廣がり始めた。野にはキバナノアマナが黃金の杯を天に開いて居る。楓の芽が大きくなつた。シキザクラの芽は破れた。馬の糞が飛ぶ。澤庵が酸ぱくなる。いまに見たまへ、春が過ぎると夏が來るから、夏が過ぎたら秋が來る。秋が過ぎたら冬になる筈だ。草々。

當番　小　生

四十四年四月二十三日　日曜日

一九一三年

ワルト・ホヰットマンの一斷面

「月曜講習」と云ふ册子で、内村氏の筆を通して、始めて此の人の名が日本の活字で紹介された時、日本の土は毛程も彼を受け入れる用意をして居なかつた。私は其の評傳を讀んでも、それと一緒に論じてあつたカーライルやブライヤントやホヰッテヤーから彼を分離して見る術を知らなかつた。「大空の蓐とせんには適はしき中米のPrairie」と歌つたと云ふ事や、米國西部の發展を豫言した其の豫言が恐ろしい程正確に實現されたと云ふやうな事が、其の本に書かれた彼の評論に聯關して幽かに今でも私の記憶に殘つて居る位のものだ。私はあの“Leaves of Grass”を藏書の中に加へたい望みも起さずに札幌を去つた。高山氏が前後して「太陽」で發表した評論も、私の輕い好奇心をそつと誘つたばかりだつた。

かくて私は在來の傳習と形式と信仰とを球のやうに抱いて米國と云ふ所に渡つた。それは丁度日露戰爭が起る前の年だつた。如何云ふ方針で三年を住み暮さうと云ふ事も考へずに、夢遊病者のやうに船路を急いだその時の事を思つて見ると、私は恐ろしいと云ふ事を知らぬ白痴であつたに違ひない。米國の第一年は日本での夢が其のまゝに——と云ふより寧ろ引き締つて——續いた。然し其の當時私は日露戰爭と云ふものを遠くで眺めながら時時トルストイに氣を取られて居た事を告白しなければならないと思ふ。それは私の心の奥の領土には容易ならぬ變革で、私は默つて恐れ戰いた。私は其の夏思ひ切つて自分のいやがるやうな所に自分を連れて行つた。一箇月。

私はダンテとジョージ・フオックスの日記とだけ持つて、他界に住むやうな人々の間に居たのであつたが、二箇月の終りには私の所謂信仰なるものから離れて居た。(つい先頃私はスクタリ衛戍病院に居る或る土耳古の高級看護婦が、バルカン戰爭の悲慘を描いた一文を英國の雜誌に寄せたのを讀んだ。その中に「若し基督教と云ふ名が人道と云ふ名で替へられてあつたなら、十字軍と銘を打つこの戰爭はかくまでの悲慘を盡しはしなかつたらうに」と云ふ風に書き現はされた文句を見た。私は感動した。私はそれだけの事を茲に書き添へる。)

二年目に私は北の方に漂つて行つたが、その時から私は生れる前の渾沌に生れ返つた。私は明かに自己の分離を自覺せねばならぬはめに這入つた。今まで内外からすかしたりなだめたりして居た假睡の私は私相當の自覺を自分に強ひた。その頃にホヰットマンは突然その大きな無遠慮な手で、悪戯者らしく私の肩を驚くほど敲いたのだつた。

私は紐育市生れの一人の放埒な然し美しい靈魂を持つた辯護士と共同生活を營んで居たが、學校の講堂から夕暮に送られて歸る私は、ボストンから塵をかぶつて戻るその人と夕食後ランプを隔てゝ坐るのを樂しんだ。彼は必ず書架から草色の一冊を拔き出して、男らしく張りのある同時に感傷的な聲をわざと抑へて、此の詩かの詩と――エマーソンがカーライルに nondescript monster と云ひ送つた――ホヰットマンの作物を誦讀した。私は今思ひ出しても一種の小氣味いゝ戰慄を感ずる。

Out of the rolling ocean, the crowd, came a drop gently to me,
　Whispering, *I love you, before long I die,*……

と云ふあの寶玉のやうな小歌や、

Out of the cradle endlessly rocking,……

で何を起す海鳥の悲劇や、リンカーンの死を追慕して歌つた死の讃歌や、自分を歌つた太陽のやうな大きい輝いた"Walt Whitman"や、私は何時でも涙を溜めてゞなくては聞く事が出來なかつた。彼も涙を頬に傳はらせながら恥かしげもなく讀み續けた。涕をかむ時のみ歌が途切れる。何時でも彼が此の魔杖のやうな本を閉ぢる時には、彼と私とは同じ人になつて居た。ホヰットマンになつて居た。

私の心の領土は今でも混亂の限りを盡して居る。私の內部では正しく二つの力が對峙して居る。外部にも內部にも矛盾を極めたこの自分を見ると、我ながら沙汰の限りと云はねばならぬ。然し私は慰藉なしではない。私は若い心と一緒に生活して居る事を知つて居るからである。私は今でも僞善者である。僞善者であるけれども少しづゝ自分に歸りつゝある事を知つて居るからである。私は段々最後の climax の方に進みつゝある事を知つて居るからである。健全であれ不健全であれ、私の脈は地球の脈と同じ打ち方をし始めた事を知つて居るからである。如何かしなければならないと云ふ事をより強く感じ始めたからである。こんな衝動と慰藉を感じさせてくれた事を私はホヰットマンに感謝しなければならない。

私はボストンの町を"Leaves of Grass"を尋ねて歩いた時の事を思ひ出す。本屋の番頭はホヰットマンの名を聞くと、パリサイ人のやうな顏をして、そんな本は持ち合さないと云つた――さう云ふ事が本屋としての誇りでゞもあるやうに――私の尋ねた二三の本屋は皆んな同じ態度で黄色の顧客をはねつけた。

私は友達の注意で三月の或る日社會主義の書物などを賣る薄汚い店を訪れた。其處に、今私の傍に垢づいて横はつて居る此の離れがたい書物は私を待つて居た。私に買はるべき運命を擔つて私を待つて居てくれた。今でも思ひ出す、その日はその店のやうに薄汚く曇つた寒い日であつたが、店の爺さんは私を隅の方に引つぱつて行つて、その時マサチュセット州で發賣禁止になつて居ると云ふトルストイの「クロイツァ・ソナタ」を無理に買はせよ

うとした。

ホヰットマンとその詩集は今でもその故國の義人の間にかゝる待遇を受けて居る事を記憶せねばならない。その義人達もそんな待遇をした事をしつかりと後日の爲めに覺えて置くのが肝要だ。

＊　　＊　　＊

若い中から白くなつた頭の毛と鬚とを不作法に亂して、さすがに詩人らしく稍ゝ青みを帶びた顏に、灰色がかつた眸を光らして、特有な鈍色のだぶ〳〵した衣物と鍔の廣い帽子を裝つてブルークリンの町を御者や工人に挨拶しながら歩いて行く此の人を見ると、人々は好意をこめて good old gray poet と呼んださうだ。私は然し此の稱呼の中に、遍らない大きな調子のあるそれだけは取れるけれども、此の人は全體から呼びかくべき人ではないと思ふ。彼を考へる事は、强さと若さと輝かしさとを考へる事だ。

紐育市の對岸に魚の形をして横はるロング・アイランドは彼の生れ故鄕だつた。東に面した一帶は荒れ果てた砂岸で、波の强さに沖から寄せ集められた砂は積んで細長い洲嘴を連ねて居た。難破船も珍しくはなかつた。小さいワルトはメキシコやエリサベスと云ふやうな船(マーガレット・フラーはエリサベスと共に沈んだ人だ)の悲劇を覺えて居る。彼は惡戲仲間と鰻を突いたり海岸で氷辷りをしたり海鳥の卵を集めたりして、海風に頭の毛をなぶらせながら跣足で飛び廻つた。文明と云ふ者を知らぬげな原始的な粗暴な船子と、細農の爲めに羊を集めてこの痩土で放牧しながら今日々々を暮す、乞食よりも貧しい牧者は、島の精のやうにまだ其の邊を彷徨ふ頃だつた。彼はこの島の砂原に生える saltgrass の葉の一つのやうに土に喰ひ込んで身丈を延ばした。此島を銅色人は Paumanock と呼んだ。彼はその名を戀人の如く愛した。其の詩の中にこの名が出て來る。名を組み立てる字の一つ一つが懷舊の紘に乘つて戰へながらすゝり泣いて居る (ea-shore Memories)。四十になつてから彼は此の當時を見返つて、

自恃。それに生地ブルークリン、紐育、南北戰爭以後の經驗だ」と云つて居る。母方の近親には殊に強烈な性格があつた。男のやうな性質と氣象を備へて、馬上から農業の監督をした伯母が居たり、更に深厚た識見と意志とを持ちながらクエカーの典型らしく家を守つた賢婦人もある。けれども彼が最も強く吸收し(彼の言葉を借りて云へば)、彼を最も強く吸收したものは自然だつた。

彼は一八一九年五月三十日に世の光を見た。その同じ年に、英國ではラスキンが生れ、米國ではロウエルが生れて居る。ウヰリヤム・ロゼッチが彼の詩を英國で出版したからラスキンは屹度讀んで居るに違ひないが、讀んで何んと思つたか知らない。ロウエルにはてんで解らなかつた。いくら讀んで見ても何處が好いんだか薩張り見當が付かないと皮肉を含んで云つて居る。皮肉を含む、さう云ふ喜悲劇が詩と云ふものにあらねばならぬのだ。

私は日附けを竝べる事はもう止める。此の人は靈の發達と日附けとを結び着けてもらう必要は感じて居らないと思ふ。で、ワルトは間もなくブルークリンに移つた。彼はそこに居る間に色んなものを見た。ジャクソン、ウェブスター、コッスート、ブライアント、英國皇儲、ディケンス。日本の大使(最初の)、ジェームス・クーパー、ポーと云ふやうな歴史的人物もその記憶に殘つた。ラファエットが二度目に來た時、この米國獨立の大恩主は歡迎式を見ようと集つた人垣の中から小さな五歳のワルトを抱き上げて高い所に置いてくれた、そんな事もあつた。彼は夏には休日毎に生地に行つて眞裸で岸をかけずり廻りながら、ホーマー、シエクスピヤの名句を海鳥を相手に大聲で朗讀したり、印刷工場で眞黒になつて働く間に、ワシントンを目前に見たと云ふ革命的な boss と懇意になつて、圖書館に通ふ便宜を得て、スコットを始め小説と云ふ小説を手當り次第に讀み耽つたり劇場に行つて夢中になつたりした。彼の音樂や劇曲の評は超越的なものだ。藝術の中心に分け入つて其の眞價を吸收し、少しも他人の

是非好惡に煩はされない有樣は彼の創意の氣分の異常なのを遺憾なく現はして居る。だがそれにも增して彼の心を捕へたものは都市の自然だつた。渡船、乘合馬車、ブロードウェーの見渡し、彼は其の中に融け込んでしまふ事を心の燃料とした。乘合馬車の騷がしい音にまぎれ込んで彼はよくシーザーやリッチャードから火のやうな文句を拾つて高誦したり、御者と近付きになつて晩年まで名を覺えて居た。Balky Bill, Old Elephant その弟の Young Elephant と云ふやうな名前は、リンカーンやワシントンと同樣の權威を提げて、彼の書物のページの上に跳つて居る。("A Broadway Pageant," "Crossing Brooklyn Ferry," "Starting from Paumanok," etc.)

彼は萬人のやる事を皆んなやつた。法律家、醫師の書生にも、活字職工にも、大工にも、小學校の教師にも、書記にも、新聞記者にも、請負業者にもなつた。寢坊だつた。數日の間何處を徨(さまよ)つて居るのか分らないと思ふと、どうかして精々と働く事もある。その外面では如何なる勞働者よりよい勞働者と云ふ事は出來なかつたが、其の内部に目まぐるしく働いて居るものゝある事は、その兄でも知らなかつた。この三十男の心の奧には simmer する何者かゞあつたのだ。それを彼と雖もどうすればいゝのか判らなかつた。

彼は何時もの通りポッケットの中に本を一册入れて仕事に出た。晝食時に何時もの通り、片手に母が作つたサンドウヰッチを握つて嚙りながら、もう一つの手で本を讀んだ。それは偶然にもエマーソンの作だつた。彼は仕舞に食ふものを忘れて讀んで讀んだ。此の時亞米利加の上天は降り大地は上つて大きな抱擁をしたのを歷史も人も知らずにしまつたのだ。「靈の法則」「自然論」「自矜論」などを彼は每日持つて出て讀んだ結果 simmer しつゝあつたものが、とう〳〵 boil over したと彼は云つて居る。

マッチが爆裂したのではない。爆彈の口火に火を導いたのだ。エマーソンが彼を詩人としたのではない。彼の詩人がエマーソンを緣にして眼を覺ましたのだ。彼は boil over した其の瞬間からエマーソンとは全く違つた道

を歩いて居る。四十一になつた時、彼が "Leaves of Grass" の三版を發行する爲めにボストンに行つたら、五十六の分別盛りなエマーソンは、理を盡して彼に詩の改訂を求めた。二人はボストンの大道を二月の眞晝二時間と云ふもの往つたり來たりして論じ合つた。主となつて論じたのはエマーソンだつたが、其の理論の透徹と同情の深切なのには彼も返す言葉を知らなかつた。二時間經つてからエマーソンは彼に向つて「で、君はどう思ふ」と云つた。彼は「私は一言も答へられませんが、私は益々自分の說を固執してこれを模範とする事に決める外はありません」と云ひ放つた。而して二人は睦まじく食事を共にして別れた。

彼の詩の初版が出たのは三十六の時だ。彼は自分で字を組んで自分で印刷した。薄い冊子が弱い者のやうに影も薄くこの世に生れた。これから "Leaves of Grass" は其の著者の生長と共に生長して行くのである。三版にはあの大膽不羈な "Children of Adam" と "Calamus" が附け加へられ、更に其の後に "Drum-Taps" と云ふ戰陣の詩が這入つて、彼を不朽にすべき記念碑は成り立つた。彼の詩は誤解と迫害との十字火を喰つた。發行が妨げられたばかりでない、彼はこれが爲めにワシントンに於ける專賣特許局から免官させられた。エマーソンのやうな無私な人でも、人前をかねて心にもない事を云つた形跡がある。一冊をカーライルに送つた時添へた手紙の如きは、明かに米國の野蠻人と見下されるのを恐れるかのやうに、自分が英國人でゞもある風な物の言ひ方をして彼を見下して居る。

ホヰットマンがかゝる默殺と罵詈との間に立つて取つた態度は涼しい大きなものだつた。彼は未來の勝利を明かに見得る超人の如くに價値ある者の何時かは世を征服すべきを信じて疑はぬ樂天家の如くに、平氣で最後まで初一念を飜へす事をしなかつた。

I know I am deathless;

I know this orbit of mine cannot be swept by the carpenters compass;
I know I shall not pass like a child's carlacue cut with a burnt stick at night.
I know I am august;
I do not trouble my spirit to vindicate itself or be understood;
I see that the elementary laws never apologize;
(I reckon I behave not prouder than the level I plant my house by, after all.)
I exist as I am — that is enough;
If no other in the world be aware, I sit content;
And if each and all be aware, I sit content.
One world is aware, and by far the largest to me, and that is myself;
And whether I come to my own to-day, or in ten thousand or ten million years,
I can cheerfully take it now, or with equal cheerfulness I can wait.

"Walt Whitman."

彼が北や南で新聞の編輯に從事して居る頃、米國は一つの大きな試みに會つて呻いて居た。米國の第二次獨立戰爭と云はるゝ南北戰爭は其の徵候を到る所に現はして居た。彼は其の生れ故鄕の關係から云つても本來の性情から云つても純血種の奴隷廢止論であつたが、愈ゝ戰が起つて其の兄弟の一人が戰地で負傷すると、彼は何もかも偖て置いて其の看護の爲めにワシントンに走つた。"Leaves of Grass" の第一及び第二版は、此の國民的大混亂の渦中に埋もれて世から忘れられたのを彼は忘れて居た。物々しい南人の振舞だ、多寡が一揆の類に何んの準

備がいるものかと云ふ氣構へで、北方の兵士は南人を引つ捕へて縛り上げるべき繩を用意して、鼻歌まじりで南に向つた。然しそれは恐ろしい打算の誤りだつた。Bull Run の一戰に脆くも微塵に敗られた北軍は、雨のしよぼ〳〵と降りしきる中を意氣沮喪してワシントンに逃げ歸つた。これからのワシントンは中央政府の座位であると共に混亂と悲慘を極めた一大病院に化してしまつた。凡ての大きな建物と云ふ建物には負傷者が溢れて呻いて居た。專賣特許局の見事な標本の間からも運命を呪ふ患者の聲が漏れた。彼は兄の病氣が癒えても此處を去る事が出來なくなつた。それから滿三年と云ふもの、この熊のやうな男は鳩のやうな心に鞭たれて看護夫となつた。"Specimen Days in America" の中に描かれた此の三年間の Outline sketch はトルストイの「戰爭と平和」にも比敵すべき深刻な epic だと私は思ふ。彼は單に病に侍したばかりではない、その若干もない金嚢をひつくりかへして、ありつたけ美味いものや文房具のやうなものを買つて、萬遍なく患者に分けた。病人の傍について快活な好意ある話相手ともなつた。又文字のない者の爲めに手紙も書いた（母や戀人に送る手紙は入念に優しく書いてやつたと彼は云つて居る）。斯うして彼は生きた亞米利加、生きた人道と、血を見るやうな接觸をした。敗戰の混亂に人々が氣を上づらして居る時黑衣を纏つて、毅然たる面持に日頃の人柄も忍ばれる老貴婦人が、雨にぬれながら兵士の間に食物を分つ光景、若い兵士の傍に附添ふ母のやうな老看護婦、傷の癒えた兵士と共に患者の間に立つて、天使のやうに讚美歌を謠ふ若い看護婦、米國全國民の喜憂を重さうに肩間に擔つて、人道の奧底から湧く悲哀と、確信の聖壇から漏れる法悅とを顏一面に漲らしながら、一隊の兵士に護衞せられて馬車を驅る大統領リンカーン、その側に小さく蟠るその愛兒、肩章はいかめしく飾りながら、おめ〳〵と逃げ歸つてワシントン第一の旅館にしたり顏する一群の將校、雨に濡れそぼつて居る尻尾から水を滴らして立ち盡す一列の軍馬、月光に見た大統領官舍、生に還る驚喜、死に赴く苦悶、憤怒、涕泣、大笑、切齒……、彼は凡てそれ等の中に、その宏

大な同情を以て溶け込んでしまつた。

彼は何時しかリンカーンと挨拶し合ふ程の知り合ひとなつて居た。ある時彼が其の長大な體を聳やかして往來を歩いて居るのを見た大統領は、側に居合はせた人を顧みて「あそこに一人の男が歩いて居る」と云つたさうだ。兎にも角にも其の當時のワシントン市はよく壞れもせずにこの大きな二人の男を抱きかゝへて居たものだ。

戰爭は遂に終つた。而してリンカーンは殺されてしまつた。ワルトは戰爭中の功勞によつて特許局に書記の位置を得たが"Leaves of Grass"の著者たるかどで免職になつて他の役所に移つた。其の中に戰爭中の疲勞が出て中風になつた。而してフィラデルフィヤの郊外のキャムデンで、始めは兄の家に、後では電車の車掌夫婦を同居人に置いて靜かに餘生を送つて此の世を去つた。

彼が南北戰爭で、人と、人の事業と云ふものを知つたやうに、キャムデンの幽棲で自然と云ふものと默會した。それは彼の詩の凡てが證明を與へて居る、彼は草の語るを聞き、木の歩むを見た。而して自然と人類と自己と云ふものを全く融合した。彼の指す所に人類は歩む。彼の叫ぶ所に自然は呼ぶ。見給へ、念々刻々向上し發展してやまぬ人の群れの勇ましい歩み。永世を暗示して、人の耳には餘りに高き歌を奏でながら、私等を圍む無際の自然それがホヰットマンその人だ。

I will effuse egotism, and show it underlying all —— and I will be the bard of personality;
And I will show of male and female that either is but the equal of the other;
And sexual organs and acts! do you concentrate in me —— for I am determin'd to tell you with courageous clear voice, to prove you illustrious;
And I will show that there is no imperfection in the present —— and can be none in the future;

And I will show that whatever happens to anybody, it may be turn'd to beautiful results —
and I will show that nothing can happen more beautiful than death;
And I will thread a thread through my poems that time and events are compact,
And that all the things of the universe are perfect miracles, each as profound as any.

(Starting from Paumanock.)

私は明かに玆に豫言する事が出來る。私の內部の聲が——習俗によつて養ひ成された私から退いてベルグソンの所謂純粹持續の中に投入した私の聲が——私に告げる所によれば、ホヰットマンは來るべき時代を生み出す野の聲である。ホヰットマンの思想に避くべき何者もない。生活の充實した部分で彼に觸れて見給へ、彼位生きた膚觸りを與へるものは復たとあるまい。

私は彼の慰藉と鞭撻とを愛する。慰藉と鞭撻、そんな言葉は彼に適はない。彼の撫愛(Caress)と呪詛(Curse)。それを私は愛する。

（一九一三年六月二十日、「文武會報」所載）
（一九一九年一月、「大觀」所載）

草の葉

（ホヰットマンに關する考察）

「……おゝ優しい草の葉。冬枯れもお前を凍え死にさせる事はしまい。
毎年お前は萠え出て來る——隱れ退いたその所からお前はまた芽をふくだらう。
行きずりにどれだけの人がお前を見つけ出して、そのかすかな匂ひを嗅ぎわけるか、心細い——けれども全くないとは云へまい。
おゝたわやかな草の葉よ。私の血の華よ。お前の胸にをさめた思ひどほりを、お前なりに云つて見ろ……」

"Scented Herbage of My Breast."

凡てのものは分ちさいなまれる。羊は獅子から、子は親から、女は男から、人は生活から、過去は未來から、而して惡魔は神から。この痛ましい分裂は容赦なく私の内部にも漲つてゐる。考へるといふ事を始めた瞬間からこの分裂の種子は播かれた。一方の磁極に近づいて、その極の力に飽和された鐵片が、急にその極を反撥して他の磁極に移り、又他の極から同じ過程を踏んで前の極に歸るやうに、私の魂は中有を電光形に照らしながら進んで行く。「Ecce Homo」の卷頭に、ニイチェがした僞らざる告白は、いみじくも私の魂の傾向を云ひ盡したものである。

何故人は二重の生活を訝らないのだらう。一つの魂に奉事しなければならないのに、人は何故二つの主に事へてゐるのを、あるべき事と思つてゐるのだらう。假りに純一の生活を心がけてゐる人があつても、それは要する

に程度に於てだ。印度の峻烈な婆羅門の徒も、榮養攝取の機能を全く捨てる事が出來ない。希臘の極端なアナクレオンの徒も、何かの機會に起る靈の要求から自由である事は出來ない。この情けない生活分裂の桎梏に虐げられながら、人はそれが與へられた運命の不可抗な絶對命令と思ひこんでゐる。而してこの奇怪な事實を見凝める事なしに、その事實から出發して、曲りなりにも自分達の生活を調節しようと試みてゐる。人の生活はこの點で既に果敢ない。人は睨み合ふ。人は爭ひ合ふ。人は傷け合ふ。而してその後味として救ひ難い悲哀と怨恨と絶望とを舌の上に殘す。

人は何時までもかうして居ればいゝのか。居なければならないのか。これが人生のあるべき姿なのか。地球は夜の陰影の外に、更にこの陰影の爲めに暗くされてゐなければならないのか。それを私は敎へて貰ひたい。それを私は徹底したい。

私は恐怖と期待とを以て、この内部の分裂の始末の出來ないやうに段々と大きくなり複雜して來るのを見守つてゐる。何故かゝる悲慘な内部の傾向を見守るかならば、私はそれによつて、私の生活が今の人々の生活と益々堅く結び附けられてゐるのを體達するからだと云はう。何故今に生きる事が私を喜ばすかならば、生命は今の外にはない、今が生命であるからだと云はう。謂はゞ糜爛した魂――私はそれを經驗する。私は力を缺いてはゐない、力の力を缺いてゐる。私はかのボードレールのやうに酒を被つて路頭に倒れ呻きはしない。又路頭に倒れ呻きながら、暗い寺院の戸口に這ひよつて、人間にはあり得ない程痛烈な懺悔の言葉を吐瀉物と共に吐き出す事はしない。外面に擴がる力を授からなかつた私は、形に現はして自己内部の矛盾を人々に物語つて聞かせた事はない。然しながら憐れむべき魂は、健全な肉の中に閉ぢこめられながら、屢々――あまりに屢々――その事を繰り返してゐる。嗚呼私は何んにも知らない。然し何んでも知つてゐる。私も亦今の人々と共に苦しんでゐる、藻掻いて

ゐる。私はこの苦痛と焦慮とを謹んで今に生きる凡ての人々に捧げたいと思ふ。貴方だけが苦しんでゐるのではない。私だけが苦しんでゐるのではない。貴方と私とは生活の何處かで手をつなぎ合はしてゐるのだ。お互に程度と云ふ皮相な見斷を撥無して考へよう。而して互が同一の悲しい運命によつて堅く結び附けられてゐる事を實感しよう。而して靜かにお互の魂に耳を傾けようではないか。

私は永い、眞に永い間あるべからぬ生活にこの身を任せて來た。私は自分を見凝める代りに私の周圍ばかり見凝めてゐた。今にして私は、私の魂に對して暴逆の王になり切つてゐなかつた事を感謝する。私は危くも、凡ての物事に對しては寛大の德を認めながら、魂に對してだけは、容赦も情けもない振舞ひを死ぬまで續ける所だつた。私は大きな眼を開けて、外部の莊嚴と絢爛とに氣を奪はれ、本當の私の主人なる魂が氣息も絶え〴〵に私に呼びかけるその聲を聞き落す所だつた。私はよくこそそこに氣がついた。よくこそ魂の蟲の息に親切な耳を傾ける眞純と本性とを失はないで濟んだ。かの驕慢と虛飾とを以て、魂の周圍をとりかこみ、これをさいなみ苦しめる事を以て、最上の德行と自分決めをし、安からざる時に安し安しと高く聲を放つ人に私は告げたい。かゝる態度は悲しい誤謬だ。不純な模倣だ。どうぞ凡ての物事に對しては、縱令猛虎の殘忍さを以て振舞はうとも、虐げられてゐた魂の私語に對しては、耳に手を置き添へてまで、靜かに――注意深く聞けと。

「私は魂の變通を認める――劣弱と淺薄とは私について廻つてゐる。
私の云つたり爲たりすることにはそれがついて廻るし、
胸の中であがいてゐる思想の中にもそれがあがいてゐる」

"Walt Whitman." 1077—1080.

い丶事であらうが、惡い事であらうが、あるがまゝを痛感する事が、私の生活を徹底する唯一不二の道だ。私は私を痛感する事によつて、人が今痛感しつゝあるものゝ何者であるかを知ることが出來る。ごまかしてはいけない。ひねくらしてはいけない。ためらはず、僞らず、あるがまゝを嚴しく感ずるのだ。底から底を打ちぬいて、打ちぬけないところまで、自分の力が能ふ限りにまで進んで行くのだ。そこに私の魂がある。而して人の魂がある。これは高慢な言ひ草ではない。高慢でも謙遜でもない、當然な、そのまゝな言ひ草だ。私は嘗て自分の魂の道行きを確める爲めに、おづ／＼他人の魂に觸れて見た。聖人を探り神に觸れようとした。これこそ間違ひであつた。高慢なことであつた。私は聖人になつたかも知れない。神にさへなつたかも知れない。然し、少くとも私にはなれなかつたのだ。私でない私が一體何んの役に立たう。危いところだつたのだ。私は今、人の魂の道行きを確める爲めにも、容赦なく私自身の魂に觸れて見る。これが本當に正しい當然な道であることを私は知るやうになつた。

かくて私は凡ての魂の號泣の何故であるかを知つた。それは外部が内部の承認を待たずに、高慢な先走りをしてゐるのである。傳道者は内部と外部との併行一致を以て、人の生活の極致だと敎へてゐる。さう敎へてゐながら、彼等の大多數は、外部をして内部の先驅をさせてゐる。内輪に善をなすといふ事、控へ目に德を行ふといふ事は顧みられない。彼等は善事の手枷と德行の足枷で魂を縛り上げ、魂に猿轡を喰まして、したり顏をしようとする。この不條理な不自然な罪惡から、人を裏切らせまいとする彼等の武器は、社會的の賞讃と迫害だ。（こゝで私は社會的といふ言葉を最も廣い意味で使つてゐる。即ち自己以外から來る賞讃と迫害だ。それが周圍から來ようと、天國地獄から來ようと差別はない。）舜の衣を着、舜の食を食し、舜の行を行はゞ即ち舜のみといふあの言

葉は、凡ての魂に投げつけられた極惡の雜言だ。人々は餘りに思ひあがつてゐる。柄にもない飛び上りをする。而して魂の烙印を受けないものを擅に世の中にさらけ出す。それが何になる。それは瓦礫だ。それはつまづきの石だ。外部が內部の支配者となる時、內部は唯悲慘な分裂を結果するのみだ。痛ましい魂の分裂はこゝから始まるのだ。彼等の行爲はその魂の裏書きしたものではない。魂は彼等の行爲の餘りに氣高く、餘りに神に近いのを恥ぢてゐる。外部は內部の聲をしたゝか蹂躙して、信條と綱領とに握手した。信條と綱領とは人の外部が造り出した唯一つの事業で、神靈の宿らぬ宮居のやうなものだ。魂――それは何んだ。信條と綱領――それは何んだ。前者を失ふのは死ぬる事だ。後者を失ふのは生れる事だ。嘗て羅馬の士卒が十字架にかけられようとする基督の面に唾を吐きかけた。その瞬間から人の世は亂れてしまつたのだ。外部も同じやうに內部の面に唾を吐きかけた。內部の分裂とは、魂の糜爛とは、實にこの痛ましい凌辱の果てゞあるを知らないのか。

私はまだ云はなければ氣が濟まない。何故魂だけを後ろに殘して、物皆は嗓いだ走り競べをしようとするのか。何故僞る事のない、人の思惑を氣にしない、魂のしつかりした步度を振りかへつて見ようとはしないのか。物皆は影だ、泡だ、人の顏を吹く風だ、波の藍色を染めるしぶきの白だ。魂のみが眞だ。規矩だ、進化する實在だ、神そのものだ。神は急がないのに、人だけは何を苦しんであせり急ぐのだ。物皆は魂だけを後に殘して、一體何處に行き着かうとしてゐるのだらう。

魂がせかし急がすのだと彼等は思つてゐる。さうだ、確かに魂は急ぐ。魂は急ぎはするが、あわてはしない。その足跡を一つ〳〵堅く地の上に印さなければ、前には進まないのだ。それを彼等は見落してゐる魂の計畫するのは、よき計畫者のするやうに偉大で堅實だ。魂はたゝき大工ではない。又下駄の齒入れではない。魂のみが創造する力だ。物皆は魂の目的を悟らないで、あり來りの材料を縱にしたり橫にしたりして、魂の云ひ現はしがた

い苦痛をなだめようとしてゐる。私の魂はそれを默つて見てゐるに堪へない。私の魂は――基督の美しい比喩の一つを假りて云へば――牝鷄のその雛を翼の下に集めようとするやうに、內部の分裂の統一されん事を待ちこがれてゐる。

私の魂は而して涙をこぼす。

“Tears”

「涙！　涙！　涙！
夜寂寥の中……涙よ。
白い汀に流れては、吸ひ込まれて、行く涙！――一つの星も出てゐない――眞暗な物淋しさ。
頭を包んだ彼の眼から流れる濕つた涙――おゝその亡靈は何者だ――暗闇の中で涙を流すその異形は何者だ。
瀧なす涙――すゝり泣く涙――息も絶え〴〵に泣き叫ぶその苦痛。
おゝ嵐、形相（ぎやうさう）すさまじく、海沿ひを吹きまくおゝ物すごい夜の嵐――風！　おゝそのはげしさ、ゆゝしさ！
おゝ影よ――晝の間は、沈神な顔付をして、規則正しい歩調（あしなみ）で、威儀の正しい影よ。
夜になつて、人を離れて孤獨に返ると、おゝその時の涙の海。
涙の！　涙の！　涙の！」

思へば大鷲の行く空の道の知りがたい程に、內部の分裂は極めがたいものになつた。アダムの時から亂れに亂れた心の聲は紛雜に紛雜を極めて、私は何んといつてそれを云ひ現はしていゝかを知らない。然しながら、かす

かにでも魂の姿に觸れて見た私には、その分裂を朧げに具象し得ない事はない。こゝに一つの例を擧げて見よう。私達は科學の破産といふ事を耳にする。それは科學が到底私達を救ひ得ないと訴へる斷定的な叫び聲だ。而してこの事實の根柢を形造つてゐるものゝ一つ――而して唯一とも云ふべきほど大なる一つは――科學者が魂と仕事とを全く引き離して出發したその點にあると云はねばならぬ。彼等は科學に對する貢獻といふ美しげな幻影に釣られて、自己の仕事に對する魂の滿足といふ事を無視した。それは嘆美すべき獻身的態度のやうに思ひ做されたた。而してそれに附隨した斷片的の消極德――熱心とか、忍耐とか、忘我とか、公平とか、精緻とか――と眩しいやうな、魂からは孤立した發見とが dilettante と philistine とを有頂天にさした。而して彼等は向不見に――言葉を換へていへば科學に對する貢獻の爲めに――たゞひた走りに走つた。私達の生活――表面的な意味に於けるーーはそのお蔭で、どれ程色彩を加へ、便利を得たかは測り知る事が出來ない程である。科學者はこの勢に乘じて益々その步を續けて行きつゝあるのだ。而してその前途には過去よりも澤山の寶藏が用意されてあるのを誇りとしてゐる。

この時早計らしくも科學の破產といふ聲が地から湧き出して來たのは如何いふ譯だらう。科學がまだその最後の目的に達し切らない中に私達がその力を疑ひ出さねばならなくなつたのは如何いふ譯だらう。私達は玆に停つて考へて見なければならない。全體科學者がその魂を沒却して貢獻しようといふ科學とは何であるか。若しそれが、成就の曉に、人の魂に何等直接の交涉を要求し得ないものだとするならば、換言すれば、ultimate といふ言葉が科學の辭書の中に見出す事の出來ぬものだとするならば、私共の期待の第一は反古になる譯で、私共が日常生活に附け加へ得た色彩も便利も畢竟は大事の前の小事である。畢竟無駄事である。

實際その昔人の子が魂の祕事を味到しようとして藻掻いてゐた時、科學は彼等の態度を笑殺して起つたのでは

なかつたのか。人と自然、卽ち內部と外部との正しい關係を發見するのは、煩瑣哲學のやうな空漠な、論理の上に論理を疊むやうな方法によつては到底成就されるものではないと呼號したのは科學であつたのだ。科學が――今に至つて何んと取繕ろはうとも――始めその第一步を踏み出した時は實にさうだつたのだ。けれども煩瑣哲學があつたやうに、科學はその第一步に於て、旣に回復の出來ない見落しをしてゐたのだ。それは科學が魂の要求を或る程度まで滿たさうとしてゐたにも係はらず、魂そのものをして魂の要求を滿たさしめずに、魂以外の小弱な力をたよつて旅程に登つた事だつた。科學も亦物皆のやうに魂をおきざりにして驀地にあてもなく唯走つた。科學は自然そのものをして自然を語らしめようとした。その企てはいゝ。然しながら自然の mouthpiece に、魂を備へず、五官を備へた事によつて取り返しの附かない蹉跌をしたのだ。その步みは魂の步みより遙かに早かつたけれども、畢竟非常におそかつた。人類は科學のお蔭で巧妙な工匠とは成り得たが、人類そのものゝ尊嚴に附け加ふべき何物をも見出さなかつた。チンダルは科學者の僞らざる自覺を以て「私達は現象の砂濱に立つて唯一握り砂を摑んだに過ぎない」と歎じた。一握りの砂ですら尊い。私はそれを卑しめようとするものではない。然し問題はそこにはない。如何にその砂を摑んだか。それが問題なのだ。砂の與へる觸感は人間に取つて一番緊要な事ではないのだ。クロポトキンが何故にその初戀なる科學の研究を擲つて、もつと手近い直接な問題――卽ち人間生活の根柢を滿足させるべき生的動向の研究と建設とに一生を託さねばならぬやうになつたか。それは科學を考へるものゝ熟慮せねばならぬ一大事である。

私は餘りな老婆親切に墮したやうだ。私はこゝに私の魂の要求をほのめかす爲めに、假りに科學を例に取つたに過ぎない。哲學についても、道德についても、宗敎についても、藝術についても、それが魂の要求を無視してゐる限り、同じ事を繰り返せと私の魂は云ふ。私の魂はまた私自身について、最も鋭くこの事を以て私を脅かす。

魂に對する全存在の迫害。鈍い斧を振つて王者を誡らうといふ僻事。凡そ長く强く痛ましく續けられた壓制で、物皆が魂に對して取り來つた壓制に比ぶべきものは世にあるまい。人は時々思ひ出したやうに幕の切れ目から一寸魂を覗き見する。然しすぐ幕を引いて自分の魂を自分の生活とを懸け隔たらして了ふ。而して魂の周圍ばかりを死の舞踏を跳りながらはしやいで狂ひ遊んでゐる。魂にやさしい心を見せるものには、これはいつでもまざまざと見らるゝ悲劇だ。悲劇の第三幕目だ。

私はかくまでに內部の分裂を見守り且つ歎いた。私は魂の爲めに歎いた。魂は私の爲めにかく歎いた。然し私はこの慘狀から獨り逃れようとはしない。又逃れる事が出來ない。否、否、私はこの內部の分裂を歎きもし樂しみさへもしなければならない現在であるのだ。現在を度外して私の落ち着き所が何處にあらう。あらゆる缺陷と矛盾と束縛とを以てして、玆に私の眼前にある現在の尊さよ。而して慕はしさよ。私はこの現在に更に何者を附け加へれば、この完全さを更に完全にする事が出來るだらう。

「樂しく快く私は步く。
何處に步いて行くのか自分でも知らないが、步く事のいゝ事なのは分つてゐる。
全宇宙もさうだと敎へてゐる。
過去も現在もさうだと敎へてゐる。

生きとし生けるものゝ美しさ完全さよ！
又地球とその上の微細なものゝ完全さよ！

善と呼ばれるものも完全だが、惡と呼ばれるものも亦等しく完全だ。
植物も鑛物も共に完全だ。又重量のない流體も完全だ。靜かに確かに凡てのものは現在の有樣に進んで來た。
而して靜かに確かに尙遠く進んで行く」

"To think of Time." 105—113.

私の糜爛した魂――私は試みにその似顏繪を描いて見ようか。支離滅裂に摧き亂され、ひしぎ潰されてゐるにも係はらず、その額に億劫の年を經た深い皺を見出すと共に、その腰には處女にのみある、力の溢れた生產の強い徵しを見る。その右の手には永遠を握り、左の手には他の永遠を握る。その奏でる音樂に於てはハーモニーとメロディーとは畢竟同一のものだ。彼は過去でもない、現在でもない、又未來でもない。今も過去も未來もその外凡てのものも飽滿の醍醐味を魂に齎す力は有たない。唯それ自身のみが魂の眞の伴侶である。"The Soul of itself" である。

「男よ女よ見給へ、
それは渾沌でもない、死でもない――形體である、統一である――計畫である――永生である――幸福である」

"Wal Whitman." 1315—1317.

「魂を滿足さすものは遂にそれ自身のみである。
魂はそれ自身の敎訓の外凡ての敎訓に反抗すべき無限の誇りを抱いてゐる」

"Manhattan's Street I saunter'd, pondering." 39—40.

「私は既知の事を抛り棄てる。
而して私と一緒に凡ての男女を不知の境に送り出す。
時間は瞬間を指し示す――永遠は何を指し示すと思ふか。
私達はこれまでに無限の冬と夏とを使ひつくした。
私達の先きには更に無限がある、
甦生は私達に豐滿と多樣とを齎した。
更に他の誕生は豐滿と多樣とを齎すだらう。

私は物に大小の差別は置かぬ。
時と處とを滿たすものは凡て相等しい。

男女よ、人類は君に對して兇惡で嫉妬がましいと云ふか。それはお氣の毒だ――然し彼等は私には兇惡でもなく嫉妬深くもない。
凡てが私には柔順だ。――私はくよくよしながら勘定はしてゐない。
（くよくよする譯なんぞありはしないではないか）
私は成就されたものゝ極致だ。又來るべきものゝ抱藏者だ。
……………………………………

私の爲めの準備は宏大もないものだつた。私をはぐくんだ腕は忠實に且つ好意があつた。
快活な船子のやうに、ひた漕ぎに漕いで、輪廻が私の搖籃を漕ぎ進めた。
私の爲めには星も軌道を曲げて通つた。
而して私を抱くものを世話する爲めに、その力を送つてよこした。
………………………………
私を完成し私を喜ばす爲めには、凡ての力が休む時なく働いた。
而して私は今茲に、私の元氣溢れた魂と共に茲に立つてゐるのだ」

"Walt Whitman." 1132―1166.

私の魂は莊嚴な魂であると共に、醜惡な魂であるといふ事を人は驚くだらうか。然しそれは驚くべき事でも忌むべき事でもない。醜惡といふ字に忌むべき意味を與へ得る場合は、魂の醜惡な部分でよき事をし、莊嚴な部分でよからざる事をなす時である。私の魂を神のやうな完全なものだと思ふ人に私は告げたい。それは誠に洵に神のやうに完全無缺ではあるが、私の思ふ所と、さう思ふ人の思ふ所とには、渡り難い鴻溝がある。私の魂は「今」にあつて、これ以上の完全さに仕上げられる事は出來ない。然し今は未來を胎める如く、私の魂も常に一つの完全から他の完全に飛越する。私は私の魂を無下に卑しみ無みするものに對して執拗な怒りを感ずると共に、あるがまゝ以上にそれを理想化するものに對しても等しい怒りを投げ與へよう。凡て魂と私との間に虛僞の帳を垂れようとするものは呪はるべきである。

「おゝ呵責すべきもの！
私は認める――私は奸發さるべきものだ！
（おゝ嘆美者よ！　私を嘆美するな！　私に會釋するな！　君は私を縮み上らせる。
私は君の見てゐないものを見てゐるのだ。――又君の知らないものを知つてゐるのだ）
この肋骨の中に私は汚れ屛息して横はつてゐる。
又苦痛なげに見えるこの顏の後ろには、地獄の潮が絶えず流れてゐる。
淫欲と邪惡とを私は退けない。
私は犯罪者と共にあつて燃えるやうな愛を覺える。
私もその仲間だと私は感ずる――私自身が罪囚であり漁淫であるからだ。
而してこれから私は彼等を退ける事をしまい――私は如何して私自身を退け得ようぞ」

"You Felons in Trial in Court." 7―16.

魂の醜さを凝視して、その傳習的な醜の概念の後ろに潜む本體の實質を恐れなく見透すべき勇氣の缺乏が、人の子を驅つて永遠の漂浪に赴かせた魔の杖ではないか。「四足動物を以て被はれた」私の魂は、私の弱かつたが爲めに、私の僞善者であつたが爲めに、卽ち私は驕慢であつたが爲めに、淺ましくも肋骨の裡に汚れて屛息した。私は魂を理解する事を知つて以來、かゝる惡虐を行ふ事の恐ろしさに戰く。

魂の風説にばかり耳を傾けて、魂そのものゝ影も見ない人の爲めに、私は如何しても魂の醜さを高調しなければならない。醜いものは肉で、魂は白玉のやうに淸いものだと云はうとするのか。どうかそんな傳説に欺かれて

ゐる事はやめて貰ひたい。それは國利民福とか實用的道德とかいふものを眞向に振りかざして、天下を無事安穩にしようとする人々が揑ね上げて、「神」の香爐に投げこんだ抹香の中でも、一番劣惡な抹香であるのだ。魂と肉とが爭ふのだといふのか。そんな瀆聖を口にしたその口は先づ呪はれねばならぬ。肉――肉が魂の小なる一部分でなくして何んであらう。肉の叫びが魂そのものゝ小さな叫びでなくして何んであらう。魂は肉と對立させて考へねばならぬ程爾かく小さなものではない。魂といふ言葉に附帶した習俗的な屬性を、人は根こそぎ取つて捨てしまはなければならないのだ。

「己れの肉身を壞敗に陷らせるものは自分を蔽ひひしやげるものであると云ふ事。
生を汚すものは死者を汚すのと同じく惡逆だと云ふ事。
又肉は魂と同じ用を爲すものだといふ事が疑ひの中にあると云ふのか。
若し肉が魂でないとしたら、一體何が魂だと思つてゐるんだ」

"I sing the Body electric." 5—8.

「私は不滅である事を知つてゐる。
私の軌道は大工のコンパス位で思ふまゝにされる者ではない事を知つてゐる。
私は又子供がいたづらにする暗中の火の輪のやうにたやすく消える者でない事を知つて居る。
私は自分の莊嚴を知つてゐる。
私は自家辯護をしたり、人の理解を得ようとして苦心する馬鹿はしない。

私は自然の律が決して申譯などした事のないのを心得てゐる。
（かういつたとて、結局私は建築に使ふ水準器以上に驕慢な振舞ひをしてゐるのではない積りだ）
私はありのまゝに存在する――それで澤山だ。
誰も私に頓着しないからといつて――私は平氣だ。又誰も彼も頓着するからといつて――私は平氣だ。
そんなものより遙かに大きな一つの世界が私に注意してゐる――それは私自身だ。
而して私は今日自己を實現しようとも、千萬年を待たねばならぬとも、
私はいづれにも等しく滿足してゐるだらう」

"Walt Whitman." 395―411.

私の魂は莊嚴である。今まで人は言葉を盡し心を傾けて、その莊嚴を說いた。然しその人々の思ひ設けなかつた程魂は莊嚴だ。私の魂は過去と現在との總和であり、未來の凡てゞある。未來に現はるべきあらゆる偉大な思想と偉人とは、私の魂が子孫に殘して行く形見である。私は各瞬間に進化し各瞬間に蓄積する。神といふ字を用ゐよとならば、私は憚る所なく大膽に私の魂を神と呼ばう。如何なる言葉も私の魂を呼ぶには餘りに貧しく卑しい言葉だからである。私は魂によつて凡てのものを肯定する事を覺えた。人間の外部に起る衝動が、神經質にもなるべく細かく物の區劃を立てる時、私は魂と連れ立つて片つぱしからそれを破つて行かう。魂は曠野でなければ走らない、高山でなければ飛躍しない。

これが空疎な表現と聞こえるか。私は魂をいひ現はす爲めにもつと放膽な言葉を假りて來たいと思ふ位だ。何故ならば魂は今まで餘りに慘めな言葉で飜譯されて來た爲めに、人の心の中の魂の置き場が云ひやうなくせゝこ

ましい汚いものになつてしまつてゐるからだ。大きな尊い美しいものは暗示によつてのみ現はされる。この暗示の味を噛みしめ得る程に本能の働く人は幸だ。

「勝利、結合、信仰、一致、時限、
解體すべからざる凝集、豐潤、神祕、
永遠の進歩、宇宙、及び近代の反響、
これこそは生だ。
幾多の苦悶と死痛の後に表面に表はれ來るべきものは茲にある」

"Starting from Paumanock." 15—21.

「この日黎明前、私は丘上に立つて滿天の星斗を見渡した。
而して私の靈に曰つた。私が天體の凡てを抱擁して、その中にある凡ての快樂と知識とを擅にする事を得たら、
その時私は滿ち足る事が出來るだらうかと。
その時私の靈は答へて曰ふ。否。私達はその到達を無視して更にその先きに躍進するのみだと」

"Walt Whitman." 1217—1219.

「足にまかせて心も輕く、私は大道を濶歩する。
健全で、自由で、世界を眼の前に据ゑて。

私の前の黑褐の一路は欲するがまゝに遠く私を導いて行く。

これから私は幸運を求めない――私が幸運そのものだ。
これから私はくよ〳〵しない、躊はない、又何者をも要しない。
剛健に飽滿して私は大道を旅して行く。

(しかも私は快い重荷を擔ひつゞけて行く。
男と女――それを私は運ぶ、何處に行くにもそれを運ぶ。
誓つていふ私には彼等から遁れる術はない。彼は彼等で一杯だ。その代り彼等も私で一杯にしてやる」
"Song of the Open Road" 1―14.

「船を乘り出せ！　深い海原のみを指して舵を引け！
おゝ魂、大膽な探險、私は君と、君は私と、私達の行手は船子の嘗て行く事を敢てしなかつた所だ。
そこに私達は船、私達自身及び萬事を賭して乘り出すのだ。

勇敢なる私の魂よ！
遠く、更に遠く帆走れ！
おゝ不敵なる、然し安全なる歡樂！　彼處も亦神の海原ではないか。

「おゝ遠く、遠く、遠く帆走れ！」

"Passing to India." 249—256.

「見ろ誇りげに眼鋭き科學を！
高い峰からでも見おろすやうに、近代を一眼にかけて、つぎ／＼に絶對の命令を煥發する。

しかも見よ、凡ての科學の上に立つ魂を、
魂の爲めに、地球の周圍に地殼が集まるやうに、歴史が相集まり、
その爲めに、諸の星は大空を流れ歩く。

迂路による螺線形の道の上、
（海上を一杯に開いて走る船のやうに）
魂の爲めに部分は完成に流れ行き、
その爲めに理想は理想に向つて進む。

その爲めに神祕な進化も行はれる。
義のみ義とせられず、私達のいふ不義も亦義とせられるのだ」

"Song of the Universal." 10—21

私はかくして私の魂を通じて人と自然とを眺めて見たい。私は長い間馬鹿な眼に遇つてゐた。私の眼の後ろに私の魂をつれて來るまで、私の見たものは凡て無益だつた。私の耳の後ろに私の魂をつれて來るまで、私の聞いたものは凡て無益だつた。私は惡夢から覺めたものゝやうに、今まで私の眼や耳の後ろに何者が跋扈してゐたかを思つて心が惑ふ。顏を赧くする。歴史といふ桎梏にかけられて、私の心は萎え果てゝゐたと見える。又道德といふ牢獄の裡にゐて、神妙にその莚の上に坐する暇に、心は死にかけてゐた。魂を見出し得なかつた私は何を桎梏にかけ、何を牢獄に投じて、自分の生活を安全だと思つてゐたのだらう。私は汗するよりも更に涙せんとする。高價に購はれた教訓であるよ。然し私は遂に歴史よりも道德よりも大きかつた事を知る。私は糜爛した私の魂を何より愛惜する工夫をし得たからである。

私は私が出來得る限り仔細に私の魂を調べて見た。而して糜爛した魂はそのまゝ健全な極にある事を知つた。去年の枝を切り拂はれて春風に雀躍りする若木のやうに、私の魂も傷々しい疵の中にあつて歡呼の聲を擧げてゐる。私は甫めて生の喜びの如何なるものであるかを知つた。生とは押しなべての人の言ひ草のやうに死の對照ではない。生の大きな海原から遁れ出得る如何なる泡沫があり得よう。死――死も亦生に貢する一つの流れに過ぎないのだ。劫初から劫末に、人の耳には餘りに高い音樂を奏でつゝ、滔々と流れ漂ふ生の海原は、今の私の眼の前にほの〴〵と開け渡る。凡ての魂はこの海原に聳え立つ五百重の波である。その美しさと勇ましさとを見ないか。この晴れやかな光に照らされると、死も亦美しい一人の保護女神だ。死を讃美しよう。

「來い、可憐ななつかしい死よ、

地上の限りを隈もなく、落着いた足どりで近づく、近づく、
晝にも、夜にも、凡ての人に、各ゝの人に、
早かれ遲かれ、華奢な姿の死よ。

測り難い宇宙は讃むべきかな、
その生、その喜び、珍らしい諸(もろもろ)の物象と知識、
又その愛、甘い愛――然しながら更に／＼讃むべきかな、
かの冷靜に凡てを捲きこむ死の確實な抱擁の手は。

靜かな足どりで小息(をや)みなく近づいて來る暗き母よ。
心からあなたの爲めに歡迎の歌を歌つた人はまだ一人もないといふのか。
それなら私が歌はう――私は凡てに勝(まさ)つてあなたを光榮としよう。
あなたが必ず來るべきものなら、間違ひなく來て下さいと歌ひ出でよう。

近づけ、力强い救助者！
それが運命なら――あなたが人々をかき抱いたら、私は喜んでその死者を歌はう。
あなたの愛に滿ちて流れ漂ふ大海原に溶けこんで、
あなたの法樂の洪水に有頂天になつたその死者を歌はう、おゝ死よ。

私からあなたに喜びの夜曲を、
又舞踏を挨拶と共に申し出る——部屋の飾りと饗宴とも亦。
若しくは廣やかな地の景色、若しくは高く擴がる空、
若しくは生活、若しくは圃園、若しくは大きな物思はしい夜は凡てあなたに適はしい。

若しくは星々に守られた靜かな夜、
若しくは海の汀、私の聞き知つたあの皺がれ聲でさゝやく波、
若しくは私の魂はあなたに振り向く、おゝ際涯もなく大きな、面被ひの堅き死よ。
そして肉體は感謝してあなたの膝の上に丸まつて巣喰ふ。

梢の上から私は歌を空に漂はす、
紆り動く浪を越えて、——無數の圃園と荒漠たる大草原とを越えて、
建てこんだ凡ての市街と、群集に埋まる繋船場と道路とを越えて、
私はこの歌を喜んで喜んで空に漂はす、おゝ死よ！

"Pres. Lincoln's Burial Hymn." 136—163.

私は自ら强者と名乘るものを哂ふ。又他の呼んで弱者と云ふものを見て、その何んの故であるかを知るに苦し

む。魂の前に强弱の差別はない——それ自身にして完全だ。魂は魂に對してかう告げる。

「私は降り行く人を捕へる、而して無敵の意志を以て彼を引き上げる。
おゝ失望する者よ、玆に俺の頸があるぞ、
神かけていふ降つて行つてはいけない、構はないから安心して俺の頸につるさがれ」

"Walt Whitman." 1008—1010.

實にこの言葉の「家を建てるに使ふ水準器以上に驕慢」な言葉でない事を私の魂は知つてゐる。若しさうでなかつたら、魂の背景を作る永劫の進化の徑路は水泡だと云はねばならぬ。假相を剝いで剝いで魂にまで行かう。而してそこに普遍圓滿な生の海原に溶け流れよう、——自由に自然に而して力强く。

私は新しい藝術の傾向を魂に行く傾向と云はう。自然が魂を脅かす樣を五官だけを働かして唯見守つた態度や、魂を出し拔いで自然と自然とが交涉した跡を淺く尋ねる態度は、旣に過ぎた。私は殊に新しい傾向の開拓者として後期印象派と概稱される畫家その他に感謝せねばならぬ。畫工は遂に人生に相關はる藝術家にまで飛躍した。彼等は魂に浸滲し始めた。魂にまで行かうとする敬虔な向上——此の目覺ましい活動の外に、彼等の衷には何等の動向もなく又發心もない。況んや何者に對する何等の敵意があり得よう。かくて彼等は私達に魂の眞の要求が何處にあらねばならぬかをおぼろげながら示してくれた。水盤に水を滿たして雙手に捧げる如く、公平透徹な心を持する事なくして、如何して此の宏大なる企圖がなし果され得よう。

Trickle, drops! my blue veins leaving!
O drops of me! trickle, slow drops,
Candid, from me falling,——drop, bleeding drops.
From wounds made to free you whence you were prison'd,
From my face——from my forehead and lips,
From my breast——from within where I was conceal'd——press forth, red drops——confessing drops;
…… …………………………… ….
Let them know your scarlet heat——let them glisten;
Saturate them with yourself, all ashamed and wet;
Glow upon all I have written, or shall write, bleeding drops;
Let it all be seen in your light, blushing drops.

"Trickle Drops."

魂の抱擁。より大なる魂のより大なる抱擁。神の大なる抱擁に至るべき習練と努力。私は靜かにこれを思ふとホキットマンの Comerade と云ふ常用の稱呼を先づ思ひ浮べる。又彼の死に對する自然な愛着を想ひ起さないでは居られない。大きな生の海原に溶け込んだ魂は、物皆の醜い隔てを乘り越えて互にさゝやいて居る。

「今私共は遇ひ、見、而して安全だ、

平和に再び大洋に還れよ、私の愛する者よ、
私も亦その大洋の一部である——私共は思ふ程隔たつた仲ではない、
御覽この大きな輪廻を——凡ての順應、何と云ふ完全さだらう」

"Out of the Rolling Ocean, the Crowd" 6—9.

若し最も自分を信じ得ないものを求めたならば、又最も力を用ふるのを懶がるものを求めたならば、又最も物皆の驅使に唯々たるものを求めたならば、私は先づ私自身を指さねばならぬ事を知つて居る。私は木の葉が梢を、草の葉が黑土を裝ひ始める時から、黃落の惡夢に脅かされるほど、びく〳〵した心構へで居る事を自白せねばならぬ。然しながら私の魂は、それにも係はらず、凡てが大歡喜の中にある事を聲高く宣言する。私は而して神聖なる喜劇が存在の實相である事を明かに體得する。私が魂に觸れ得ると云ふ事がこの事實の裏書である。ホヰットマンすら「見、聞き而して默す」瞬間はある。然しそれは物皆に卽した時の瞬間であらねばならぬ。私はその薄い膜の彼處に絕大な光明世界を見るの外はない。私は私自身の peevishness からこの一大事を此の世から葬り去る程の害心は持ち得ない。物皆に卽した今の私に徹底的な悲觀論は如何に歡迎さるべきものであるよ。所が私の魂は、糜爛した魂は、その奧にあつて胎を立ち出でたる太陽の如くに喜び笑つて居るのだ。

「おゝ私の靈の喜び! 靈は囚はれずして電光のやうに飛ぶ。
此の地球を所有し或る時間を所有するだけでは飽き足らない。
私は千の天體と永遠とを得よう」

"Poem of Joy." 9—10.

私の魂はかくて久遠の光明裡に凡ての魂の行進を見る。「永久に生きて、永久に前方に、或は堂々と、或は嚴肅に、或は愁然と、或は身を避けて、或は辱しめられ、或は狂ひ、或は噪暴に、或は弱く、或は不平がましく、或は絶望的に、或は倨傲に、或は愚に、或は病みて、或は人に容れられ、或は又人に遠ざけられながら、彼等は行き行くのだ。彼等は行く事を知つては居るが何處に行くかを知らないで居る。然し私は彼等が最上の方へ、又何等か偉大なものゝ方へ進みつゝある事を知つて居る」

「魂の流射、
魂の流射は、問題の種をまきながら、木の葉に被はれた門を潜つて、内部から出て來る。
このあこがれ心、それは何故であらう？　又それと定めがたいこの想ひ、それは何故であらう？
何故男女の人達が私の側近く居ると、太陽の光が私の血に漲るのだらう？
何故彼等が私を離れると、私の歡喜の長旒はだらりと細く垂れ下るのだらう？
何故私がその下を歩く毎に、彼處の樹から偉大な音律的な思想が私の上に降るのだらう？
(私思ふに人はあの樹に夏冬をつるして置いて、私が通るとその果を落してよこすのだ)
私が見ず識らずの人と突然取り交すものは何んだ。御者の側に坐つて居る時、その御者と取り交すそのものは何んだ。
私が行きずりに立ち停つて見る、引網を引く漁夫と取り交すその者は何んだ。

女なり男なりの好意に對して、自由にそれを受け入れしむるそのものは何んだ。
又彼等をして私の好意を自由に受け入れしめるそのものは何んだ」

"Song of the Open Road." 99—105.

然し私は餘りに平和に魂の行進を説いたか知らん。それならば私は云ふ、エホバを見るものは死す、魂は實在であるから假相に取つては恐怖であり破壞である事は云ふまでもないと。私は魂が物皆の上に立つ時を想像すると、想像しただけで、眼は眩み、耳は聾するを覺える。その時、今の恃む凡ての堅固なるものは、世に憐れな殘滓として、一つ殘らず塵に歸するだらう。物皆は藻掻き藻掻いて魂の歩みから拔け出ようとするけれども、それ等は一見成功したらしく見えて失敗に終つてしまふ。物皆があわてふためく間に、魂の歩みは一絲亂れない。而して遂に永遠の秩序は基を定めるであらう。

「決然たる行爲の前に論議は如何に卑陋なるよ！
男若しくは女の一視線に、如何に都市の美觀は縮退し了るよ！

强き者が現はれるまで、凡ての物は怠慢なやり方をしながら待つて居る。
强き者は宇宙の人種と材能との證據である。
若し彼又は彼女が現はれゝば物質は慴伏する、
魂に關する論爭は止んでしまふ。

古き習慣古き用語は敵對を受け、退けられ、葬られる。

その時君の金まうけが何の役に立つ？
君の體面が何の役に立つ？
君の神學、教育、社會、傳說、法令全書が何の役に立つ？
存在に對する君の嘲笑は今安くにある？
魂に對する君の妄語は今安くにある？」

"Song of the Broad-axe." 135—145.

「私は誓言する、私は嘗て征服せられないものゝ味方だ。
其の根性を一度も曲げた事のない男女の味方だ。
法律や、學說や、傳習に打ち勝たれない人々の味方だ。

私は誓言する、私は全地球と肩をならべて押し歩くものゝ味方だ。
凡てを開始する爲めに一事より開始する者の味方だ」

"Marches now the War is over." 294—298.

「この次に何が起るかを誰が知るか——恐るべき兆候は日夜に滿つる、

未知の年よ！　私が歩きながら見窮めようとしても見窮められない前方の空間は妖氣で溢れて居る、
生れざる行爲、やがて現はるべき事象は、私の身の圍りに隱見する、
お丶想像も及ばぬこの突進と灼熱――この奇怪な感極まれる夢の熱、お丶年よ！
お丶年よ、お前の夢は存分に私に貫徹する。（私は覺めて居るのか眠つて居るのか）
働きを終へたアメリカとヨーロッパとは、私の後ろの影の奥に退き去つて、
今までより更に絶大なこれから働くべき國々は私の上にどん〳〵進んで來る」

"Years of the Modern."　24—30.

私はおだやかな魂をおだやかに人に語るのだが、魂のおだやかさは颶風と大濤の荒きよりもや丶荒き事を知らねばならぬ。魂の卽位を避ける事は出來ない。それを避けざらんには、老いたるものは滅ぶる覺悟を、用なきものは廢たる丶準備を、倨傲なるものはひれ伏す身構へをして居なければならぬ。頑迷と、姑息と、壓抑と、阿諛とは魂の防禦には最も鈍つた武器である。

「行け、大道は私達の前にある！
そこは安全だ――私は歩いて見たのだ――私のこの足が十分に試みたのだ。
行け、躊躇するな！
書かないま丶で紙なんぞは机の上に措いて置け、書物は本棚に開かずに仕舞ひこめ！

道具は工場に、金は儲けずにほつたらかせ！
學校にも近づくな、教師の云ふ事なんぞには耳を貸さないで！
坊主には勝手に講壇から說教をさせ、狀師には勝手に法廷で論じさせ、法官には勝手に法をひねくらせて置け！

わが子よ！　私はお前に手を與へる！
お前に金よりは少し貴い私の愛を與へる！
說教や法令の代りに私はお前に私自身を與へる！
お前もお前自身を私にくれないか、而して一緒に旅に出ないか。
生きてる限り、お互にしつかり結び附いていつたら如何だらう」

"Song of the Open Road." 220—231.

私の魂はかく私に告げる。而してワルト・ホヰットマンは私の魂の告げる所にかく唱和する。

「私は私の身を塵に委する、而して私の愛する草に現はれよう。
君が私を求めたいとなら、君の靴の下に私を尋ね給へ。
君には私が何んであり何を云ふのか解るまい。
解らなくつてもいゝ、私は君の爲めに健康を齎さう、而して君の血を淨めて力をつけよう。

一度私を捕へ損ねて失望しちやいけない、
玆で尋ねあてなかつたら外を尋ね給へ。
私は君を待つて必ず何處かに居るからね」

"Walt Whitman." 1337—1343.

詩の飜譯は不可能な事ですから原文のまゝに出さうとしましたが、字を植ゑる人の苦勞を思ひやつて、譯しました。譯詩には詩題と行數とを書き添へて置きましたから、原詩を讀んで下さい。原文のまゝ出したのは譯するには餘りに勿體なかつたからです。「船を乗り出せ云々」の詩も原文で掲ぐべき筈のものです。

筆者

（一九一三年七月「白樺」所載）

本學の過去
（東北帝國大學農科大學）

玆に明治教育史を編む者が出て、明治初期に屬する教育界に特殊な色彩を放つた學校を索めたら、勢ひ先づ指を屈するのは、福澤先生の慶應義塾と新島先生の同志社と而して本學の前身なる札幌農學校とであらう。當時は教育事業も亦新舊過渡の潮流に漂はされて居たのであるが、一の學校の方針施設一切が其の統率する人物によつて確定された點は、昔風の私塾の面影を存して居つたと云はねばならぬ。福澤先生は當今に有用な實務家を得ようと云ふのが目的で、新島先生は日本の內部生命を指導する人物を造るのが主義で、兩先生の人格は赤裸々に發露して、他と混同すべからざる特殊の校風を成したのである。わが札幌農學校にも亦一人の統率者が居た。彼は福澤、新島兩先生にも劣らぬ程な高邁な人格を備へた人で、それが煥發して札幌農學校に比類のない一種の色彩を與へる事になつた。

此の統率者は名をウィリヤム・スミス・クラークと云つてマサチューセット州生れの米國人である。アマスト大學を卒業した後、ゲッチンゲン大學にビスマークなどゝ机を列べた事もある。歸米後は母校の教授として科學的研鑽に貢獻した所も尠くないが、殊に其の性格の全豹を發揮したのは南北戰爭の時、北軍の一指揮官として劍を秉つて奴隷廢止運動を實行した其の時であつたらう。後には陸軍少將の榮職を以て擬せられたのを固辭して、戰爭が濟むと一の農業大學校（マサチューセット農業大學校）を起して其の經營を以て畢生の任とした。

然るに明治九年彼は突然日本政府から農學校設立の爲めに招聘された。これは當時北海道開拓使の顧問であつ

た陸軍少將ケプロンの進言した所が、時の開拓使長官黑田清隆によつて納れられた結果である。彼は喜んでこれに應じ、ホィラー、ペンハローの二教師を伴つて日本に渡り、自ら試驗して舊札幌學校の生徒十二名と新たに募集した十一名、併せて二十三名を簡び、札幌に來て茲に本學の前身札幌農學校の基礎を据ゑた。校長は當時の開拓使小判官調所廣丈、クラークは敎頭として訓育の任に膺る事となつた。これが明治九年八月十四日である。

クラークは日本の一隅に一の學校を創立する事を以て、格別興味あり、働き甲斐ある事業と思つた。些事を成すにも渾身の力を籠めると云ふ獅子の如き努力を以て赴任後直に彼は萬般の施設を試み始めた。其の就任宣言書の如きは眞に特色ある堂々たる文字である。「かくの如くして諸君は、眞面目にして理智と精力とに富める者を必要とする重要なる位置に適する人とならなければならぬ。此の如き人は如何なる邦に於いても供給以上に需要せられて居るのである」と生徒を激勵し、一面に又若し長官にして數年間同校の幼年期を保護するならば、同校は北海道のみならず日本全帝國の人民より尊敬と輔助とを稟け、而して稟けた所に酬ゆるだけの事績を擧げ得るに至るだらうと、同校の將來に對して多大の希望を表白して居る。

クラーク敎頭は札幌には滿一年とは居なかつたが、其の人格的感化は實に著大であつて、零碎な言動も今だに殘つて學風鼓舞の種となつて居る。米國北部の特色である淸敎徒的の廉潔方正に加へて、恬爽高邁な男性的の道德を十分に發揮して、若き靑年共の崇拜を集めずには已まなかつたのである。其の事業として瞻望すべき者は、今尙ほ殘存して居る第二農場の家畜房位のものであらうが、形となつて顯はれない內部的の薫化は、中々說き盡す事がむづかしからう。かくて其の翌年の春、松島まで彼を送り來つた一群の靑年に對し、“Boys be ambitious”なる一語を殘して此の偉大なる眞個の敎育家は自國に歸り去つた。

跡に殘つたホィラーと、新たに招聘を受けて來たブルックスとは協力してクラーク敎頭の殘した事業を繼承し、

熱心に札幌農學校の改良發達に苦心した。其の結果事績は教務上にも經營上にも續々として擧り、これにカツター、ピボテー其の他日本人にして教鞭を取るものも次第に增加して力を副へたから、一大農學校としての面目は略〻備はるに至つたのである。

殊に明治十一年に於いては生徒數も第三回の入學生を入れて五十人に達し、札幌に於ける記念的の建築物演武場（現在假郵便局）完成し、「札幌農學校報告集」と云ふ農家に對する通信講義の定期刊行も興り、又北海道に於ける最初の農事品評會も催された。

明治十四年二月調所氏が校長の職を退かれたので、當時開拓使小書記官であつた森源三氏が其の跡を襲うた。此の年以後の北海道の施設は猫の眼の樣な變化を爲した。卽ち拓植の事に任じた開拓使は廢せられて、北海道は三縣に分割される事になり、札幌農學校は勢ひ農商務省の管下に置かれたが、軈て三縣が廢せられて、北海道廳と云ふものが出來る事になり、同校は其の管轄內に入る事になつた。十九年には森氏が校長の職を退き橋口文藏氏がこれに代つた。

札幌農學校設立以來かくして十年は過ぎた。此の間に初期の卒業生の中に學術に身を委ねたものは、立派な學者となつた。第一期出身の佐藤昌介氏は、多年米國に於ける研鑽の餘を提げて歸朝し、氣銳の志を負うて明治二十七年四月校長の椅子を占めた。爾來今日に至るまで幾多の波瀾變遷に處して拮据經營し、現在の本學を見るに至らしめたのには、氏の力與つて實に大なる者がある。

佐藤氏が校長心得をなせる時分から既に改革が校內に行はれた。明治二十二年に新設された工學科は一層の改良發達を爲し、新たに農藝傳習科なるものが生れて農家の子弟に簡易な實用的農學を教授する事になつた。其の他植物園、博物場の設備の如きも氏の赴任以後長大の進步を見、廣大なる農圃も亦北海道廳より移されて同校の

管理する所となつた。

かゝる間に同校には廣井勇、宮部金吾、南鷹次郎、新渡戸稲造等各ゝ斯學の蘊奥を極めたる氣鋭の青年教授を得て、校運は益ゝ發展した。

然るに明治二十九年札幌農學校は時世の要求に應じて規則を改正し工學科及び豫科の全廢を斷行するの已むなきに至つた。これは實に同校の危機であつた。

豫科は年を逐うて下級から消滅して行き、工學科は三十年に跡をも留めず纔かにこれに代つて起つたのが土木工學科なる簡易科である。此の如くして同校は一時縮小の極點に達したのであるが、再び機運が熟し來つて、三十一年五月には元の豫科に代るべき豫修科二學年が制定せられ、其の翌年を以て森林科と云ふ簡易科も設立せられ、更に三十四年に至つては土木工學科も森林科も程度を高めて、入學者は中學校卒業生同等以上のものたらしむるに至つた。

先之明治三十二年二月、五箇年の繼續事業として校舍を本學現在の位置に建築する事となり、工事の進捗と共に新たなる希望は同校の上に輝き初めた。更に此の間に於いて有力新進の教官が續々籍を同校に連ねて、教授法及び設備にも長足の進歩が見ゆるに至つた。元來札幌農學校當初の目的は、北海道の開拓に有用の人物を作り出すと云ふのであつたから、名は農學校であつたけれど敢へて農學に跼蹐しなかつた。然るに時運の推移は專門的知識を要求する事が極めて急であつた爲めに、直接農學に關係のない學科は削り去られて純然たる農學教育機關の眞相を發揮する様になつた。更に社會一般の傾向を考へて見ると、農業に對する國民全般の態度にも著大な變化があつた。農業者をして其の堵に安んぜしめる政略として「農は國の本なり」と喋々した時代は過ぎて眞面目に農業がどれだけ一國の福祉と密接な關係を有するかを熟考せねばならぬ時が來た。日清戰爭は確に此の熟考の時

を促進した。人と土地との離るべからざる關係を痛切に感ぜしめずには置かなくなつた。同時に近世的工業の發達が都會に强固なる勞働的階級を現出した結果、其の階級の反影として地方勞働者が特殊の注意を喚起する樣になつた。日本の農業者は何を爲しつゝあるか、彼等を如何になすべきであるかと云ふ問題は國民全體が意識的に若しくは無意識的に解決せねばならぬと感じて居る所である。かくの如き機運は同校を促して更に發展の步を轉ぜしめた。かくて明治四十年六月に札幌農學校は仙臺に置かれたる東北帝國大學の一分科として農科大學と稱するに至つた。而してこれに附屬して大學豫科、農學實科、土木工學科、林學科、水產學科が併置せられて今日に至つた次第である。

以上は本學と其の前身との歷史の素描である。かの一種他と混同すべからざる特色を有した札幌農學校が北海の一隅に頭を擡げて、クラーク敎頭から多年一日日本全土の保護により、それに應ずるの事業をなすであらうとの豫言を得て以來、實に二十五年の歲月を閱して漸く其の初志を達したのである。本學の發展は固よりこれからである。農學てふ知識は漸く社會の多大なる注目を被るやうになつてきた。日本內地の農制施設は固より、隣邦の中にも開拓すべき餘地は潤澤にあるし、遠く海外に渡航するもさして不思議と思はれぬ世となつた。卽ち農業なるものは眞に實質的に新しき發展の戶口に立つやうになつたのである。幾百年に亙つて社會生產の根元を委ねながら復なき程の輕蔑を以て農民を遇した其の報いとして、國民は今農民に幾百年未拂となし置いた價を拂ふべき時が來たのである。其の賠償の一として現はれ來つたのはこれから詳說せらるべき本學である。

（一九一三年「東北帝國大學」記念集所載）

故田中稔氏に就いて

故田中稔君は福井市の舊家田中ヤソ平及きみ子の次男として明治三年五月常盤木町に生れました。明治十六年十月福井市福井小學校で小學中等科を卒業し十七年二月福井尋常中學校に入學して二年間普通學を修めましたが、明治十九年齢十七歳の時志を決して京都同志社に入學せんことを父上に請ひ遂に許しを受けました。御承知の通り福井は昔から佛法の最も盛んな所ですのに君が十七歳位で基督教主義の同志社を擇んだと云ふ其の原因は判然して居りません。然し兎に角古い生活から躍進して新しい生活に突き入つた此の一擧は君の全生涯を一つの方向に固定して統一を與へる基となつたに違ひありません。而して十九年から二十三年迄同志社に在つて英語英文學の教授及び英語でする講義を受けまして普通學第四年級を卒業しました。これだけが君が世に出る迄の準備時代であります。

それから君は自分の取るべき仕事を色々と考へた末に、日高國浦河郡荻伏村赤心株式會社に入つて其の事業を助けると云ふ決心をしました。赤心社は基督教徒が合同して經營して居る開墾場で、當時の君の若い心には花々しい生活よりも此の素朴な堅實な事業に心を引かれる事が多かつたと見えます。而して色々の空想を胸に收めた二十二歳の一青年は後年にも著るしい其の素朴なる心を同伴として北海道の奥に引込みました。これから七年間君は其の山奧で會社の果樹栽培を擔當し、傍ら元浦河教會の傳道を助け、日曜學校を經營し、基督教青年會を起して其の會長となり、又青年會の機關として夜學校と讀書會を開いて熱心に其の地の若い人々の指導に身を入れましたが、君が設立した青年會は今日まで續いて益々盛んとなり、其の會員で社會の爲めに立派な仕事をして

居る向きも少なくないと云ふ事です。

此の赤心社時代に君は、矢張り赤心社に其の一家と引移つて事業を助けて居た、柴田やす君と結婚して家庭を造りました。これが明治二十九年即ち君が二十七歳の時の事です。其の中に或る人の紹介があつて君は札幌農學校に勤務することゝなり、住みなれた浦河を捨て一旦根を張つた赤心社を離れて明治三十二年久し振りで札幌へ出て來ました。而して一寸郵便電信局に務めましたが、すぐ廢めて當時の札幌農學校に入つて圖書館の勤務をする傍ら農藝科の英語の一部を擔任する事になりました。これが其の第二の屈折點で、札幌農學校が農科大學になつても同じ職務を續け、最後の氣息を引取る迄、君が俗界でして居た仕事は一個ライブラリヤンとしての仕事でした。大體に申せば君の表面の生涯と云ふものはそれだけです。

君は默つた、而して蔭日向のない、而して自己の權利を要求する事の最も下手な質の人でした。心の自由さへ束縛されなければ如何なる所に落しておかれても君は默つた儘で自己權利の要求と云ふ事もせずに、蔭日向なく働いて居ました。それは側で見て居る方がもどかしい位でした。と云つて君は何も物臭さからさうして居るのではありません。君が農學校と農科大學との圖書館の事務を引受けてから君は外の事には頓着せずこつ〳〵と、その整理と圖書館學とに耽つてとう〳〵大學圖書排列法を世界最新式のデシマル・システムに改めることを斷行して非常な便利を與へてくれました。又圖書館取扱に關する著書と定刊物とは細大漏さず眼を通す事に心懸けました。英語の知識だけでは不滿足だと云ふので、獨逸語と佛蘭西語の研究にも熱中して大體に通ずるだけになつて居ました。又今度病氣になつて轉地する時でも彼地で研究すると云つて圖書館に關する書物を行李一杯持つて行つたさうです。例の默りこんだ君の事ですから自分の蘊蓄を發表する樣な事は一度もなかつたのは勿論ですが、仕事に對してこれ程眞劍な態度を持して居たと云ふ事も人は知らなかららうと思ひます。

君は又默つて仕事をする質でしたからよく人から使はれました。隨分人はいゝ氣になつて君に色々なことを强ひたとも思ひます。然し君は其の人を見ずに仕事を見て、仕事がするだけの價値のあるものならば平氣で人に使はれて居ました。而して其の間に尊い仕事を人知れずいくらも仕遂げました。

君が精神界に對してなした貢獻としては中々澤山あります。禁酒會の仕事にも有力な片腕でした。又基督敎青年會殊に其の青年寄宿舍には創設以來盡力して居ます。組合敎會を去つて此の敎會に屬して後は書記として又圖書館係として日曜學校敎師として忙がしい身分にも係はらず十分努力を惜みませんでした。又遠友夜學校の事業にも一臂の助力を貸して居ました。始終蔭を步いて居るやうな君の姿は札幌に於けるよき事業の蔭に見受けられて居ました。

未だ君の功績を數へ上げたら澤山ありませう、然し君の功績は數へ立つべきものでなく、君と一緒に人の眼から葬つてしまふ方が尊く思はれます。こんな現はれた部分よりも隱れた部分の多いと云ふやうな人が社會に居てくれるのは實に心强い事でありますが、其の一人なる君は遂に我々から奪ひ去られたのです。

一體君は見かけによらぬ勝れた健康を持つた人でしたが、どうしたものか去年あたりから少し恙があつたので、養生旁々夏に旅行を思ひ立つて三十何年振りかで鄕里福井に歸つて親戚故舊に遇ひました。筆無精出無精の君に此の事があつたのは不思議です。今年の冬には殊に健康が害はれて、遂に床に親しむ身となつてしまひました。而して三月十三日北海道の寒さを避けて明石町の湊病院に轉療することになりました。一時の便りでは大分順境に向つたらしかつたので知人は窃かに愁眉を開いて居ますと突然七月四日午前三時死去の飛報が札幌に殘つて君の上を氣遣ひつゝあつた家族に達しました。君は最愛の妻と四男一女とを殘し長男と長女との看護の許に名殘り惜しい然しながら安らかな旅に上つたさうです。

家族の方は二男を除いては皆福井に歸つて居られる筈です。御家族の御悲歎を深くお察し致します。

飾氣のない差出がましくない幽鬱な、然し何處かに晏如とした君のなつかしい姿がもう見られないと云ふ事は私共に取つても悲しい事實で御座います。

（一九一三年八月、「獨立新報」所載）

一九一四年

新しい畫派からの暗示

古來、人の心は常に二つの極を往きつ還りつして進んで行つた。ニイチェがいみじくも道ひ破つたアポロとディオニソスの二柱は、相互に或は神と顯はれ或は惡魔と顯はれて、人の心を支配して居た。

昔は人の心が單純であつた。と云ふのは、アポロを納れた心はディオニソスを納れる事が出來ず、ディオニソスを納れた心はアポロを納れる事が出來なかつた。白でなければ黑であつた。アポロ神座とディオニソス神座との隔りがかけはなれて居たから、その間を通ふ心の振子は、勢ひ運動の兩極の間に非常な鈍角を描いた。然し時代がたつに從つて兩神座は近づいて行くので、振子は漸くその往復の距離を縮めて行つた。かゝる現象に伴つて起る結果は又自ら二つに別れて行く。

一つは中庸、姑息、不徹底、沈澱、高踏、遊戲など云ふ言葉で現はされる黑とも白ともつかぬ灰色である。私共の間には最早「惡魔よ、退け」と獅子吼した基督を見る事が出來なくなつた。又オリンプスに居睡りを始めた神々を震駭して、北方の森の中から凱歌もろとも跳り出たパンの群は見るべからずなつた。世の中は生活と云ふリトマス紙に、何等の反應をも起さぬ中和の狀態に移つて行く。大なる信仰の創造者は何故に古代に現はれて近代に姿を見せぬか。疑惑の眼を輝かして屢ゝ人はさう問ひつめる。然しそれは自分の——近代人の——心を振り返つて見ればすぐ判る問題ではないか。私共の心は灰色ではないか。疲れ濁つて居はしないか。眼前の生活に壓

倒されては居ないか。どうでもいゝと思つて居はしないか。その心がどうして信仰の創造者を孕み得よう――石女のやうなその心が――私共は生活の殘滓をすゝりながら、夢のやうな憧憬を不可能的に繋いで居る點に於て一面等しくデカダンの輩と云はねばならぬ。

然るに眼を轉じて見ると、他の一つの結果は東雲の如くに天の一角に現はれ出で居る。それはアポロ、ディオニソスの接近を他人事と見遁さず、その機會を捕へて、二柱の神の一つの心の中に併坐させようと云ふ努力である。かくて近代人の心は古人の知らなかつた複雜な波紋を疊んで行く。アポロを神と崇める時はディオニソスは惡魔、ディオニソスを神と敬ふ時はアポロは惡魔、かくあるべき關係を打破して、新たな意味をこの二神の交渉の間に見出さうとして居る。アポロとディオニソスの神威の剋する所に新たなる神の姿を認めようとして居る。それが近代の力である。近代人の命である。

上に述べた第一の結果は人類の退化的動向であつて、第二の結果はその進化的動向である。第一の波に乘つたものは、人の心の底をそゝるやうな、なつかしく見える過去の記憶を呼びさます、同情と云ふ方面に訴へる、甘い悲しい歌聲を擧げるであらう。而してはかなく滅んで行くであらう。第二の波に乘つたものは、黎明前に天地を領する。夜半のそれにも過ぎた暗黑を打ち破るべく、をめき叫んで乘り出して行く。人はその叫び聲の意味を經驗しないが故に、それを聞いて不安は感ずるとも同情は感じない。彼等はその粗野に見ゆる聲を張り上げて獨り往く。他に和鳴を強ひ得るに至るまで獨り往く。彼等の群れは强ふる者である、同情を求める者ではない。人に話しかけるものではない、神に話しかけるものである。彼等は生き殘つて行くものであるが故に、憐れまれる、賞められる、なつかしがられると云ふやうな事が甘い味となつて、その舌を刺戟する事はない。彼等は勝利を自覺せるものゝ大膽不敵さと傲慢とを持つて居る。彼等は遂に地を嗣ぐべく生き殘るであらう。

私は新しい畫派を見る時に、實にこの第二の種類に屬する人の群れを見る。

嘗てマネの所に一人の青年が自作の畫を見せに來た。その製作は物の見方に於てマネ自身のものと異らなかつた。マネは青年に對して、君は果して自分をいつはらずに斯う云ふ見方をして居るのかと問うた。青年が得意げに然りと答へるや否や、そんなら玆に旣にマネが居る、マネと全く同じ見方をする君が畫家として存在する必要はない、左樣なら、と一言の下に、手痛くも戶口から追ひ返した。私はマネの淋しい孤獨な、しかも昂然として何者にも自らを卑うしない眞劍な態度を思ひやる事が出來る。新しい畫派の人々は先づ自己から深く掘り始めて行つた。而して彼等は其處に何であるよりも先づ人であらねばならぬ事を知つた。而して畫工から畫家になつた。卽ち民衆の爲めに働かずに自己の表現の爲めに勉めた。價値の顚倒が根柢的に成就せられた。

一度石は轉ばされた。それからの彼等の運動は世にも稀な强烈な加速度を以て進行した。マネを蹴飛ばしてセザンヌが進み出た。彼は先づディオニソスのやうに凡ての形式を打破する事から其の事業を始めて行つた事は、一度彼の製作を見るものが直ぐ首肯する所であらう。物の量と云ふ事は彼には何者でもなくなつて居た。火鉢を火鉢の量に於て再現する事は、寫眞と畫工との能くする所である。人の手を待つて甫めて成さるべき事ではない。人の手の成さねばならぬ事はその質である。

さりながら恒久の物の質を獻立する事は、ディオニソスの成し得る所ではない。其處にアポロの堅實整美な力が働かねばならぬ。私はゴッホの製作に通じて深くこの力を感得し得ると思ふ。ゴッホが自己の裡なる恒久の自己を發見せんが爲めに形を破り、更に形を破つて、狂氣の如く突進したその跡を、世に遺して行つた彼の幾枚かの畫布の上に見る時、私の心の一角は强い和鳴を感ぜずに居られない。一見支離滅裂に見えるその技巧の後に、何んと云ふ崇高なクラシカルな感じの漂つて居る事だらう。

斷つて置くが新しい畫派の人々は創造の氣分に生きた人々である。彼等の製作は過去の囘憶ではない。その律呂は私共の耳には始めて響く律呂である。それ故過去の形式を尺度として、これに臨むのは、自分の眼に塵を蓄へて、他の塵を除かんとするやうなものである。然しながら私が始めに言つた、近代の喘ぎ求めつゝあるその動向を心に感じてこれに臨むならば、彼等は忽ち頼み甲斐ある力と變じて、私共の胸の奥に沁み込んで來る。

私は又彼等が事業を成就したとは云はぬ。反對に彼等の凡ては大なる事業の一齣づゝを演じ去つたに過ぎぬ。これは彼等の悲しみであり、又誇りであるだらう。アポロのみに額づくものは或る終結に適し得よう。ディオニソスのみに香をたくものも亦或る解決に至り得よう。然しながらアポロの上にディオニソスを築き、ディオニソスの上にアポロを築かんとするものは、常住の動搖、無終の躍進を覺悟せねばならぬ。マネからセザンヌとゴーガンとゴッホとに、又マチスとピカッソとウヰスビアンスキーとに、又更にカリリとロッソロとボッチオニとに、やむ時もなく變り遷る生命の流れを覺悟せねばならぬ。彼等が邪のない心を以て、アポロ、ディオニソスに神威の相剋する所に神を認むる間は、その神は何處までもいや高き完全に向ひつゝある神である。ブランドの所謂白髮長く垂れて思慮深げに、夜間小兒を脅かすに適ひたる神ではない、無終の道を敢て孤往するその心、私は彼等の心を思ふ時、世にも悲しく勇ましき光景を眼前に描くを禁じ得ぬ。

私は新しい畫派の人々としてマチス以下の最新の運動にも觸れねばならぬ約束の下にある。然しながら私の鈍い心は彼等の意味する所に同情をを持ち得ながら、その事業を理解するだけの準備を持たぬ。私は自分の不敏を恥ぢるの外はない。

（一九一四年二月二十三日、「小樽新聞」所載）

内部生活の現象

私は玆で一般に亙つて内部生活の現象をお話ししようと云ふのではありません。さう云ふむづかしい問題は純粹心理學の範疇に屬する事で、門外漢の私などには及びもつかない企であります。私は唯私の生活の內部に起る現象をその儘いつはる事なく申し上げて見たいと思ふだけであります。それですから本當を云ひますと題の設け方が不適當であるかも知れません。「或る男の內部生活」とでも申すのが寧ろ妥當でありませう。

私のやうな淺薄な凡衆の一人の內部生活を——どれ程いつはらずに申して見ても——大した價値の生じない位は自身で承知致さないではありません。然し私は信仰を持つてお出でになる方のやうに、自分以上の力をインスピレーションとして感ずる、卽ち自分を通して自分以上の力が現はれ働くといふやうな尊い心の狀態にありません。ですから假令どれ程私が大學者大聖人の說を咀嚼して御紹介する事が出來たと致しましても、畢竟私の內部生活でその說を切り取つただけを御紹介するに過ぎぬと云ふ結果になつて、つまる所は私自身の內部生活を申し上げると云ふのと同じはめに陷るのであります。それですから始めから端的に私自身の內部生活を披瀝して見る事に致しました。それのみならず私には今まで一つの惡い癖がありました。それは自分の心がどんなものであるかを知りたい爲めに他人の心に觸れて見た事です。卽ち歷史を硏究するとか文學を味ふとか偉人の傳記を讀むとか生きて居る人の行動を觀察するとか云ふ風に、自分より外部のもの計りに手を觸れてそれを色々とひねりまはしてゐた事です。然しそれは結局全く無益な——無益な計りでなく高慢な企であつた事に氣が付きました。而してそれに氣が付くと私は全く反對の態度に出るやうになりました。今は私は他人の心を探る爲めにも自分の心

に觸れて見ます。自分の心を知る爲めに自分自身の心に觸れて見るのは申すまでもない事であります。固よりこんな覺悟になつた今でも私は歴史にも文學にも傳記にも生きて居る人の生活にも興味は感じて居ります。のみならずパラドックスのやうではありますが、から云ふ態度に變つてこそ是等のものが甫めて活きた意味を私に與へてくれるのだと現在の私は固く信じて居ります。から云ふ心の態度の變化をもう一つ違つた言ひ現はし方で申して見ればから云へます。卽ち私は今まで私の心の內容の充實加減を疑つて居たのです。何んだか私の心だけに依賴して居ては人生の全野を見渡す事が不可能のやうに思つて居たのであります。それ故自分よりもつと內容のゆたかな人の心の働きを借りて來て自分の心に全く缺けて居るものを補はうとして居たのであります。然しそんな無益なことは、永劫續けて居たとても出來る筈のものではありません。それは丁度草木に人の持つやうな感情や知識を持たせようと云ふ無益な企てと同一轍であります。然し今の私、前の態度を悔いた私は私自身の心の內容をそんなにさげすんだり疑つたりはしない私であります。立派な發達こそは遂げて居ないだらうが、如何なる秀れた聖者であれ如何なる惡業の輩であれ、凡ての人の持つてる凡ての心の屬性は一つ殘らず私の心の中に藏められてある事を信ずる私であります。私は私の心を眞面目に忠實に僻見なしに掘り下げて行く事によつて凡ての人の心と抱き合ふ事が出來る事を信じて居ります。此の地表では離れ〳〵な苺の株が、地の下では根によつて有機的につながれてをる樣に、一寸見にはともすると互に見失ふ程かけ隔たつた人の心も、その奧では無差別な親しみの濃かな大きな生命の海に通つて居るのだと感じます。卽ち私の心は——私の今意味した意味で——私に取つては萬人の心を見るべき唯一つの鍵であります。私の心は私の心であると共にあなたの心であります。私が玆で臆面もなく自分の內部生活を申し上げて見ると云ふ事が、私に取つて所以のある事なのはそれで察して頂けると思ひます。

たゞ玆に一つ殘された問題は私がどれ程深く自分の心を掘り下げて居るかと云ふ事です。淺薄な私は私だけに

は相當な力を盡して居るにも係らず、諸君には何等の暗示をも提供する事が出來ないかも知れません。然し私は茲に出席致す事を餘儀なくされたと云つて、前申す理由で私の力以上を語る事も出來ません。又私にそれを强ひられるのは間違ひだと思ひます。で、果して諸君が御滿足なさるかどうかと云ふ事は、物好きにも私を茲に引き出された委員の方の責任にして置いて、私には私の言ひたい事を云はせて頂きます。

尤も「私の云ひたい事」と申したその私と云ふ言葉には語弊がありました。諸君が眼を以て御覽になつて居る私は前通りだけの事を申して引き下ります。これから諸君に申し上げるものは眼に見える私ではなくつて、私の內部であります。諸君は私の聲を通して私の內部と直接に觸れて頂きたいのです。ですからこれまで私は私と申して居たのはこゝに立つ一つの外部でありますが、これから私と申しますものは私の內部であります。個性とか、自己とか、良心とか、靈魂とか、色々に呼ばれて居るやうですが、私はそれ等に附帶した不純な意味があるのを嫌ひますから、假りに私はそれを魂と呼びます。魂は私に告げてから申します。

私は魂だ。私はお前の魂だ。私は肉を離れた一つの概念の幽靈ではない、又靈を離れた一つの肉の働きでもない。お前の外部と內部との互に融け合つた一つの全體の上にお前が存在を有して居るやうに、私も又全體の中できびしく働く力のしめくゝりだ。實を云ふとお前は私のだらけた時の狀態で、私はお前の引きしまつた時の狀態だ。私とお前とは同じものだ。然しながらだらけるのと引きしまるのとが、嚴肅な生活と云ふ物さしで見るとその値打ちに天地のへだゝりがある以上、私とお前とは黑と白とが違ふやうに違つたものだ。更に譬喩をお前に云つて聞かさうならお前は地球の表皮だ。千樣萬態の相に分れて地球の表皮は目まぐるしい程の變化を呈して居るが、畢竟其處に見出されるものは不統一であり、原因でなくして結果であり、死に近づきつゝあるものであ

り、奥行の深くない現はれである。私は地球の內部だ。一寸見た所では其處には渾沌と單一とがあるばかりに思はれようが、その實質は他の星の世界の實質と同じ實質であり、其處の中に潛む力は一瞬の間に表皮を破壞し去る事も出來るし、新たな表皮を生み出す事も出來るのだ。私とお前とは或る意味に於て同じものだ。然し多くの意味に於て較べる事の出來ない程ちがつたものだ。地球の內部は外部からは見られない。外部から見て一番氣のつく所はどうしても表面である。だから人は私には注意せずにお前ばかりを見てお前の全體だと思つて居るし、お前も人を見るのに表面ばかり見て滿足して居る。それではいけない。そんな事ではお前が何處まで苦しんで行かうとも、急な流れを溯らうとする下手な泳手のやうに、手足こそは力限りに藻搔いて居るだらうが、何時までたつても進んで居はしないのだ。更に譬喩を前に戾すが、地球にしても、今ある表皮が跡形なく壞れてしまつて內部だけが殘つたとしても、地球は地球として存在する。然し內部のない表皮ばかりの地球と云ふやうなものは想像することも出來ないだらう。それと同じに私と云ふものゝないお前は想像する事が出來ないのだ。だからお前は私の云ふ事に耳を傾けなければならない、上官の命令を待つ兵士のやうに、基督の傍に侍るマリヤの樣に。

お前に取つて私ほど完全なものはないと云ふ事に十分氣が付いて居なければいけない。又お前の存在の源となり礎となるものは私ばかりだと云ふ事にしつかりと納得がいつて居なければいけない。而してお前は私を畏れ愛しなければいけない。而して最後にお前は私と一つものになるまでの境涯に進んで來なければいけない。

お前に取つて私以上完全なものはないと私は云つたが、そんなら世の中の人が空に考へ出す神や佛のやうに完全であると云ふのかとお前は直ぐ反問するだらう。お前の見る所によると私は倫理學で云ふ良心と云ふものよりももつと不完全に見えるがどうだと云ふだらう。肉の要求にも躊躇せずに頭を突つ込む私はお前に取つてどうすらもあんまり完全なものとは思はれないとお前は詰るであらう。それは一應尤もである。成程私は惡魔の樣に恥知

ちずではないが又天使のやうに清淨でもない。お前の魂なる私は人間のやうに人間的だ。お前の魂なる私の今の此の瞬間の誇りは、何の躊躇もなく、全靈全心の確信を以て人間的であると云ふのにあるのだ。私の所に惡魔だとか天使だとか、人間の頭だけでひねくり出した土像を持つて來るな。ゆら〳〵と搖ぎながら燃えさかる現在の生活にそんなものが何んの價値があるか。

　お前が私卽ちお前の魂の極印のすわつた許可を受けずに、靈から引き離した肉だけにお前の身を賣る事をすると其處に實質のない惡魔と云ふものが、さもいかめしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。又お前が肉から強ひて引き離した靈だけに身賣りをすると其處に、實質のない天使と云ふものが、さもいかめしい實質を備へたらしく立ち現はれるのだ。そんな事をして居る中に、お前は段々私から離れて行つて、實質のない幻の影に捕はれて其處に不思議な空中樓閣を描き出すのだ。而してお前の心の中には苦しい二元が獻立される。靈と肉。極樂と地獄。理想と現實。天使と惡魔。それから何それから何と對立した觀念を持ち出さなければ何んだか安心の出來ない、その癖、觀念が對立して居ては何んだか安心の出來ない、兩天秤にかけられたやうな、どん底のない空虛に浮んでをるやうな不安がお前を襲つて來るのだ。さうなればさうなる程お前は私から遠ざかつて、お前の云ふことなり行ふことなり思ふことなりが、一つ殘らず外部の力によつて支配されるやうになる。お前には及びもつかぬ理想が出來、良心が出來、神が出來、道德が出來る。而してそれは皆んな私がお前に命じたものではなくつて外部から來たものばかりだ。プラトーの理想。ソクラテスの良心。ポーロの神。孔子の道德。さう云ふものを振り廻してお前はお前の寄木細工を造り初めるのだ。而してお前は一面に惡魔でも――實質も何もない惡魔でさへが眼をふさぐやうな、醜いいやしい想(おもひ)を懷いたり行ひをしたりして居ながら、人の眼に付く所ではしら〳〵しさに自分で恥しくなる程立派な行ひをしたり言葉を吐いたりするのだ。しかもお前はそんなさげすむべき事をするのに

相當の理由をつけてやつて居る。聖人君子に眞似るのは——も少し尤もらしく云ふと聖人君子に學ぶのはやがて聖人君子たるの第一步を爲すのだ、我れ堯舜の言を云ひ堯舜の行ひを行はゞ即ち堯舜のみと云ふのがそれである。かくしてお前は中心に容易ならぬ矛盾と不安と情なさを感じながら益〻高くバベルの塔を昇りつめるのだ。

さう云ふお前の態度は社會の習俗から云ふと又誠に都合のいゝ態度だ。實際の社會は進步を要求するのであるけれども習俗的な社會は平和——平和と云つては勿體ない——無事を要求するのだ。兎角天下に事なかれは隨分強い社會の惰性になつて居る。其處で他人模倣でお茶を濁して行かうと云ふお前のやうな奴は尤も調法がられるのだ。お前の內部にどれ程の矛盾が有るか無いかは社會は頓着する所ではない、お前がお前に似合はない善良な行ひさへしてくれゝば、それだけ天下は事なく濟んで行くのだ。「あの人は思つたより感心な人だ」、「人と云ふものは見かけによらんものだ」、さう云つて社會はお前の苦しい內部の分裂を讃めあげてくれるだらう。お前は苦笑ひをしながらその讃辭を頂戴して、更に社會の無事の爲めに犬馬の勞を盡すことになるのだ。お前に云つて聞かすが、さう云ふのを本當に犬馬の勞と云ふのだ。

こんな事をしてお前が外部の壓迫の下に心にもない生活をして居る中に、いつしかお前は私を出し拔いて、飛んでもない聖人君子になり了せてしまふのだ。お前は人ではなくなつて專門家になつてしまふ。專門家と云ふと大變立派に聞こえるが、人と云ふ背景の添はない專門家とは片輪者の別名であり、機械につける諢名である事を知らねばならぬ。專門家は學問にのみ限つた譯ではない。自分の內部とは何等有機的な關係がなくつてもいゝ、當面の社會に善良らしく見える事をすればいゝと云ふやりかたをする人は善行の專門家であつて、言ひかへて見れば善行を刻み出す機械と云ふ事が出來る。

お前に云つて聞かす、お前がさう云ふ事をして居る以上はお前は僞善者だ。ダンテが「聖劇」中に鉛の衣を頭

から引つかぶせて地獄のどん底に陷れたその僞善者だ。お前も僞善者と云ふ名は恥ぢるだらう。恥ぢるならお前はさう輕はずみな先き走りばかりをして居るな。外部ばかり見て居ずに此方を向け、而して茲にお前の魂なる私が居る事を思ひ出せ。

お前が見る通りに私はプラトーの理想のやうに崇高なものではない、又ポーロの神のやうに尊嚴なものではない、ソクラテスの良心、孔子の道德のやうに森嚴なものでもないが、私はお前にだけは十分な崇高と尊嚴とを有して居る。私は肉慾を遂行する事もなければ又靈界を飛び廻る事もない、キャリバンでもなければ、エイリヤルでもない。私の命ずる事は、肉慾の遂行と同じ形を取つても肉慾の遂行ではなく、神聖なる行爲と同じ姿に顯はれても所謂神聖なる行爲ではない。私にあつては靈肉と云ふやうな區別は全く無益である。又善惡と云ふやうな差別は全く不可能である、私は凡ての活動に於て生長する計りである。私の生長はお前が思ふほど急速なものではない。私は人の足跡のない荒地を進むのだ。從つて私の一歩は凡ての考察を經た一歩でなければならない。で、理想家なるお前、理想と云ふ疾病に浮かされて居るお前は、私の歩み方をもどかしがつて、猪口才にも先き走りをしようとするのだ。お前は私よりも早く走るが、畢竟おそく走るのだ。何故と云へばお前が私をだしぬいて外部の刺戟で走りぬいて何處かに行きついたとしても、その時はお前は一個の人でなくなつて居るからだ。お前自身の影はだん〳〵薄くなつて、その薄くなつた所が聖人君子のぼろ切れでつぎはぎになつて居るからだ。で、お前がそれに氣がついたら又すご〳〵と私の處まで逆戻りするより仕方がないのだ。

だからお前は私の全支配の下に居なければならぬ。お前は私に抱擁せられて歩いて行かねばならぬ。だから各瞬間に於ける私はその瞬間に於けるお前の全權を握つて居るものだ、お前は甘んじて私に從はねばならぬ、だから私ほどお前に取つて完全なものはないのだ、又私ほどお前の存在の源となり礎となるものはないのだ。

魂に立ち歸れ。お前の今までの名譽と功績と誇りとを擲つて魂に立ち歸れ。お前は生れるとから外部に接觸した。私を出しぬいて先き走りするのも無理はない。お前の倫理の教師は私に大分近寄つた所にある良心と云ふものを指して、凡ての行爲や思想を良心によつて判斷しろと教へて置きながら、他方には力を極めて、國家に對する義務、社會に對する責任、父母に對する報恩と云ふやうな事を教へたらう。而してお前の教へられた義務や責任やの內容は、永年かゝつて形式的に硏究されたゞけあつて、良心を用ゐる暇のない程に完全で煩瑣なものである事を發見したらう。而してお前は、私に相談もせずに、愛のない處に愛の籠つたやうな行ひをしたり、惡しみを心の中に燃しながら寛大らしい事を云つたりしたらう。そんな事をする爲めに起る一種の不愉快な感じをお前は努力に伴ふべき自らの感じだと思ひなさうとしたらう。そんな風にしてお前は私をだしぬくのを努力だと思つた。お前の感情を訓練するのだと思つた。私はお前の見え透いたおべんちやらを見せつけられて幾度恥かしさに面を蔽うたか知つて居るか。お前がそんな風な、私と無交涉な事をして居る間は山ほどそれをしたとても、お前の魂なる私は一分の生長もする事が出來ずにぢつとして居なければならないのだ。而してお前がそんな態度を續ければ續けるほど、社會は生命のない生活の殘り屑を積み上げられる事になつて、滯つた無事に沈んで行くのだ。

お前も一度は信仰の門を潛つた事があつたらう。人並の事をしなければ人間の仲間入りが出來ぬやうに思つて居たお前は、人のすなる信仰生活と云ふものにも手を出したのだ。お前が知つてる通り私は――お前の魂なる私は渴仰的と云ふ點卽ち生長を望んで居ると云ふ點で宗教的である。然し私はお前のやうなおつちよこちよいではない筈だ。お前は私に相談もせずに――相談せずにと云つたら少し語弊があるかも知れないが――お前は私に一寸いゝ加減な事を云ひ置いて、直ぐに友達と聖書と教會とに走つて行つた。私はひや〳〵しながらお前を見守つて居つたのだ。お前は例の如く努力を始めた――お前の努力の感じと云ふのは何時でも柄にもない飛び上りをし

た共の際に殘る苦い味を云ふのだ。お前は一方に非常な崇高な信仰を告白して居ながら、盜みもし、奸婬もし、人殺しもし、偽りの祈禱をもし、偽りに神をあがめたではないか。お前の行ひが疚しくなると、「人の義とせらるるは信仰によりて律法の行ひに由らず」と云つて、乞食の樣に神なるものになさけを乞うたではないか。又お前の信仰にあやしい處が出來ると、「主よ、主よと云ふもの悉く天國に入るにあらず、我天に在す父の旨に遵ふものゝみなり」と云つて自己を辯護したではないか。お前の神と稱して居たものは畢竟するに、極くかすかな私の幻影ではなかつたか。ボルテールの云つた、「神人を作れるにあらず、人神を創れるなり」との警句は、しつかりとお前の信仰の狀態にあてはまつたものだつたのだ。お前は私をだしぬいて宗教に走つて置きながら、その對象なる神を私の姿になぞらへて作つて居たのだ。卽ちお前は敎師や聖書から敎へられた神と云ふ觀念から、お前の理解の出來るだけを切り取つてそれを神として居たのだ。だからお前が神を信ずると云ふ事を廣言してからでも、お前の生活は實質に於て何等の相異をも來さなかつたのだ。若し相異が出來たとしたら、それは實に表面的な事であつて、神がお前の中に住んで居るのを經驗した事なぞは無かつたらう。お前が神を意識する時は何時でもお前の方からお前の頭を働かして意識して居た――卽ちお前の表面的な頭の働きで神を製造して居たのだ。而してお前は上からの力を受けて、お前がお前自身のではない生命に甦つた經驗なぞは持つて居ないのだ。それだからお前の祈りは空に向つて投げ上げられた石のやうに、冷たく力なく再びお前の上に落ちて來るばかりだつた。それにも係はらずお前は切羽つまるまでお前自身をあざむいて居た。而してお前自身をあざむく事によつて他人をもあざむいて居た。お前は相當の信仰に生きる、又信仰によつて生活を導いて居る一人の信者として取り扱はれた。お前はそれを竊に得意にして居た時すらあつたではないか。お前は實に卑劣な人間だつた。

それでもお前にまだいくらかの誠實が殘つて居たのは何たる幸であつたらう。お前にも空虛な生活の苦々しさ

が感ぜられる時が來たのだ。而してお前は絶えて久しく捨てゝ置いた私の方に顏を向けたのだつた。お前は今お前の道德的行爲の大部分が虛僞であつた事を認め、又お前は眞實の意味での祈禱を一度も爲し得ぬ人間である事を告白した。これからお前は傍目もふらずお前の魂に突貫して行かなければならない。お前の魂の泉から命をくみその礎の上に新しいお前を築かねばならぬ。

お前の魂なる私はこれからお前に、私に卽して行くべき道の如何なるものであるかを說かう。

先づ何より先きに私がお前に要求する事は、お前が凡ての外部の標準から眼を退けて私に還つて來るべき事だ。恐らくはそれがお前には賴りなげに見えるであらう。外部の標準と云ふものは古い人類の歷史――その中には凡ての偉人と凡ての聖人を含み、凡ての哲學と凡ての科學、凡ての文明と凡ての進步とを蓄へた人類の歷史である。それからお前が全く眼を退けて私だけに注意すると云ふ事はたよりなげにも心細くも見える事であらう。然し私はお前に云ふ。躊躇するな、お前が外界に向つて廣げて居た細根を凡て拔き取つて、先きを揃へて私の中に這入りこめと。私卽ちお前の魂は多くの人の魂に比べて見たら、卑しく劣つたものであらうけれども、お前に取つてこの外に完全なものはないのだ、縱令お前が釋迦の魂にお前の根を張つたとて、それは全く無意味な事に終るばかりだ。何よりも先づお前は全心全靈を擧げてお前の魂に歸つて來ねばならぬ。

偖て魂に還つたお前はそれを切りこまざいてはならぬ。お前が外界を考へて居た時のやうに、善惡正邪と云ふやうな二元的の見方で强ひて魂を見ようとしてはならぬ。魂の全要求、魂の全命令に謹んで耳を傾けねばならぬ。お前が魂の全要求に應ずるならその時魂は生長を遂げる。お前が私に從つた爲めに結果した思想なり、行爲なり、言論なりが、假りに外界の傳說、習慣、敎訓と、衝突矛盾を起すやうな事があらうとも、お前は決して心を亂して私を疑ふやうな事をしてはならぬ。急がずためらはずお前はお前の魂の生長を心懸けるがいゝ。然しこゝで私

はくれ〴〵もお前に注意するが、お前が今まで外面的な約束から馴致された下劣な考へ方で、魂の働きを解決したり助成したりしてはならないと云ふ事だ。例へば魂の要求の結果か一見肉に屬する欲念の遂行のやうに思はれる事があつても、それをお前が今まで考へて居たやうに單純に肉慾の遂行としてしまつてはならぬ。同様にその要求が一見靈に屬するものゝ様に思はれる事があつても、それを全然肉から離して考へると云ふ事は、魂の本性に背いた考へ方だ。私共の肉と靈とは或る倫理學者や宗教家が傳習的に考へて居るやうに物の二極端を現はして居るものでないのは勿論、普通の人間が思つて居るよりも更に密接なものである事を私は知つて居るのだ。私卽ちお前の魂の望む所は、お前が私の要求を外部の標準によつて支離滅裂にする事なく、その全體に於て受け入れて、出來得る限りの滿足を與へて與れる事だ。これだけの用意がお前に整つたら、もうお前は何の躊躇をも必要としない。魂の誇りがなる時、誇りがとなり、魂の謙遜なる時、謙遜となり、魂の愛する時愛し、魂の惡む時惡み、魂の欲する所を欲し、魂の厭ふ所を厭へばいゝのである。

かくして始めてお前は自分に立ち還る事が出來たのだ。生れて生着(うぶぎ)を着せられると共に加へられた外部の壓迫から、お前は今甫(はじ)めて自由になり得たのである。今までお前が自分を或る外部の型に嵌(は)める必要から強ひて不用のものと見做して切り捨てたお前の部分は、本當の價値を囘復して、お前に必要なものとなつた。お前の凡ての枝は等しく日光に向つて若芽を吹くべき運命に達し得たのだ。お前はこの時永遠の肯定 Everlasting Yea に這入つたのだ。

お前の實生活にもその影響が全く無しで居る譯はない。これからのお前は必要は感ずるだらうが無理算段は感じない。お前の魂がどん〳〵生長してお前を打ち破つて更に新しいお前を造り出すまで、お前は外部の壓迫に對して無理算段をしてまでも態度をかへる要を見なくなる。例へばお前が外部に卽した生活をして居た時、お前は

控へ目と云ふ道德を實行して居た。お前は心にもなく善をし過ごす事を恐れて控へ目に善行をして居たらう。然るにお前は缺點を隱す事に於ては中々控へ目には隱して居なかつた。寧ろ恐ろしい程大膽にお前は缺點を隱くして居たではないか。お前は人の前では、竊に自信して居るよりも低く自分の德を披露して、控へ目と云ふ德義性を滿足させて居ながら、實際の欲望と云ふやうな缺點は中々一寸は見つからない程大膽にかくしおほせて居たではないか。それを私は無理算段と云ふのだ。然し私に卽した生活ではこんな無理算段はいらない事だ。如何なる欲望も畢竟お前の魂の生長の糧となるべきものであつて見れば、お前は內容に對して統一した取り扱ひが出來るのだ。卽ちお前は私の生長の必要の爲めにのみ變化するので、外部の顏面から延ばしたり縮めたりする必要は絕對的にないのだ。

又お前は前にも云つた專門家になつたゞけでは滿足が出來なくなる。自分は到る處自分の主でなければならぬ、然るに專門家になると云ふ事は自分を實生活の或る一部門に賣り渡す事である、外部の要求の奴隸となる事である。完全な人間、個性と云ふものゝはつきり纏まつた人間となりたいと思はない者が何處にあるだらう。然るにお前はよくこの第一の要求を忘れてしまつて、外聞と云ふやうなくだらない誘惑や、も少し進んだ處で社會一般の進步を促し進めると云ふやうな、柄にもない非望に驅られて、お前は甘んじてあたら一つしかないお前の全生命を片輪にしてしまひたがるのだ。然しながら私の處に還つて來たお前はそんな危險からは遠ざかり得るのだ。お前の手は、お前の頭は、お前の職業は如何に分業的の事柄に亙つて居ようとも、お前は常にそれをお前の魂なる私に繫いで居るからである。お前は大抵の分業には統一性を與へる事が出來る。しかのみならず若しお前のしてゐる仕事が到底お前の魂を滿足し得ない時には、お前はその滿足の爲めに仕事をなげ捨てる事を意としないであらう。お前の斯くする事は、無事をのみ偏へに事とする社會には不都合を來たす事があるかも知れない。

又上面(うはべ)だけの進歩を目あてとして居る社會には不便を起す事があるかも知れない。然しお前はそれを氣にするには及ばない。私は明かに知つて居る、社會の本當の要求は無事でもなく上面だけの進歩でもない事を。その本當の要求は人と同じく生長である事を。だからお前は安んじて確信を以てお前の道を擇べばいゝのだ。精神と物質とをお互に切りはなした文明がどれ程長足の進歩をしようとも、あだなる的(まと)に射つけた矢に過ぎない。それは丁度、戀愛とは最も醜い肉慾の遂行に人を導く美しく見える夢に過ぎないと信ずる人のする戀のやうなものだ。又戀愛とは最も物慾から離れた靈性の交はりであらねばならぬと信ずる人のする戀のやうなものだ。彼等は戀愛の世界に於ける專門家だ。その事業が魂の要求をそれて空しく消えるのは當然の事だ。物の全體を、物の眞髓をあやまたずひつつかむ剛健な氣象を失つた病的な心のはたらきだ。獸と人間とが同じ行爲をすると云ふ簡單な事實に執着してその他を忘れた心、基督が生涯孤獨であつたと云ふ一つの出來事に眼がくらまされて、彼が最初に自己を現はしたのはカナの結婚の席であつたと云ふことを忘れた心、かう云ふ心をお前の魂たる私は何よりも惡むのだ。お前は何故人間の癖に獸臭いまねや天使くさいまねをして喜んで居るのだ。それは最も不眞面目な、自分に本當に觸れて見ない遊戲三昧と云ふものだ。さう云ふ遊戲三昧な社會が表面上どれ程進歩したと見えようとも、亦それにお前がどれ程貢獻したとしても、それは結局社會をその眞正の生長から妨げ而してお前自身の犬死を將來するに終るばかりだ。私に還つて來たお前はかう云ふ物に眼も耳もくれずにお前の道を擇べ、而して專門家となり終せずに必ず自己に主たるべき人間全體となれ。

お前は又私に還り來る前に、お前が全く外部の標準から眼を退けて私を唯一の力と頼む前に、人類に對するお前の立場に就いて迷つたらう。お前がまつしぐらに私と共に進んで行く事が人類に對して非常な迷惑となり、お前を生長させたために他の人の進路を妨げ、從つて社會の秩序を破り制度を破壞するやうな結果を多少なりとも

惹き起しはしまいか、さうお前は迷つたらう。それは一應尤もである。然しお前が段々眞面目になればなる程さう云ふ外部的な問題はお前には考へられなくなつて來るのだ。水に溺れて今死なうとする人が、世界の何處かの隅の方で死んで行く人のある事を想像してそれに同情を寄せると云ふやうな暇はないと同樣に、お前が眞に緊張して私に來る時に、その結果や影響などを如何して考へて居られよう。自分の罪を悔いて棘の中に身をころがして居るフランシス聖者が、同時にその改悛の結果が人類に如何云ふ影響を及ぼすだらうと考へて居たと想像する者は、人の心の尊さを露ほども味つた事のない賤民の一人だ。私はお前に云つて聞かす、さう云ふ問を發し、さう云ふ疑ひになやむ間は、お前はまだ私の處に歸つて來る資格はないのだ。私は前後を顧慮しなければ居られないやうなだらけた歩き方はして居ない。さう云ふお前に對しては私は最も無慈悲な野獸にも勝る無慈悲な支配者である事をお前は承知して居なければならぬ。然しお前を憐れんで私はお前に云つて聞かす、殊にお前を愛する親がお前に望む所は何んだ。社會上の位置でもない。富でもない。安逸でもない。幸福でもない。その望む所はお前が一つの事業を成就せん事だ。卽ちお前が親から受け傳へた凡ての潛んだ力を餘る所なく發揮する事だ。それがお前を最も愛するものゝ望む所であらねばならぬ。それから推し考へれば、お前を取りまく人類卽ち社會がお前に望んで居る所も同じ譯であるべき筈だ。若し人類なり社會なりがお前にそれ以外の事を要求して居るとすれば、それはお前を墮落させようとして居るのだ。お前を機械として、その人類なり社會なりが姑息な無事を一時でも永く樂しむ手段に用ゐようとして居るのだ。お前はそんなものゝ犧牲となるべき責任を持たない計りでなく、甘んじて其の犧牲となると云ふ事はお前に取つては罪惡なのだ。お前は人類の全體に何等かの形に於て生長を與ふべき働きをしなければならない――然しこんな事はお前に云つて聞かすには當らない事だつた。老婆親切などゝ云ふ事は私の柄にはない。私はお前に命ずる、杖をさぐる盲くらの樣に、乳房を求める赤子のやうにお前は私の處に

來いと。

お前は私に還つて來た。今私はお前と手を取つて廣い大路を胸を張つて歩いて行かう。ホヰットマンが、

「樂しく快く私は歩く、

何處に歩いて行くのか自分でも知らないが、歩くことのいゝ事なのは知つて居る、

全宇宙もさうだと敎へて居る、

過去も現在もさうだと敎へて居る。」

と歌つたのは私とお前との境界だ。また彼が、

「足にまかせて心も輕く、私は大道を濶歩する、

健全で自由で世界を眼の前に据ゑて、

私の前の遠い褐色の道は思ふ所に私を導いて行く、

これから私は幸運を求めない――私が幸運その者だ、

これから私はくよ〳〵しない、躊はない、又何者をも要しない、

健かに滿ち足つて私は大道を旅して行く。」

と歌つたのは各瞬間の私とお前との關係が、凡てを始める前に一から始めるべくお前は私に還つて來た。それは何んと云ふいゝ事だらう。私は今まで默つて一つ所に突つ立つて居た、而して放蕩者のやうにせか〳〵した氣分で、彼方に暫く心を寄せ、此方に暫く思ひを託してあてどもなくさまよひながら藻搔いて居る慘めなお前の姿を見やつて溜息をついて居たのだ。お前の還つて來た私は若やいで東明のまぶたを漏れる旭の光のやうである。而して統一された生長の力がうづ〳〵する程身體全體に漲つて居る。

今お前の眼の前には裕かな人類の歴史の活畫が展かれた。お前は何故さう驚いて居るのか。お前は未だ一度もこんな活々として花々しい力の現はれを見た事がないと云ふのか。でもそれにお前が今まで見續けに見慣れて、その中からお前の教訓を引き出して居たその人類の歴史なのだ。あゝ今迄お前は全く統一された歴史と云ふものは見て居なかつたのだらう。今こそ歴史はお前の肉に入り骨に滲み渡つたのだ。茲に又人の生活がある。お前はそれにも驚きとあやしみの眼を見張るのか。今お前が見る生活こそ本當の人の生活だ。何んと云ふ勇しい生活だ。何んと云ふ力の這入つた生活だ。お前の嘗て見つめて居た義務の生活、努力の生活は今影もなくなつたではないか。お前の今見る生活では、人は各〻自分を生きて居る。ソクラテスは嘗て「汝自身を知れ」と云つたが、お前の見る此處の生活は「汝自身であれ」と呼んで居る。お前の嘗て見た生活では、人は基督の如く生き、釋迦の如く生き、孔子の如く生きて居た。お前の今見る生活では、彼等は基督を生き、釋迦を生き、孔子を生きて居る。嘗てお前はお前だけが蓄へて居た小さな力に依賴して、事業をしようとして居た。瘦せて乾いた土に生えた草が、身丈けも碌々延ばさぬ中に、おづ〳〵としなびた葉を出して、形ばかりの花を開いて、力弱い種子をあわてるやうに結ぶのをお前は見た事があるだらう。力の缺けたお前の慘めな努力は側から見るとまるでその草のやうだつた。かつゑた犬が食べられるものなら何一つ殘すまいとするやうに、熱の薄いお前は人の情けを恥も知らずに食つて歩いて居た。お前の身のまはりには生長を妨げる友人と、賣女のやうな戀人と、センチメンタルな涙と、皮肉な笑ひとがうじのやうに横たはつて居たのを思ひ出して見ろ。而してお前はその沈澱した腐つた空氣の中にふやけてうづくまつて居たのだ。若しそこからお前が突つ立ち上るやうな事があると、今度はお前の所謂事業が始まる。お前はたしない力を惜しんで僅に拾ひ集めた材料を後生大事に一つの城郭を築き上げる。若し人が誤ってそれに手でも觸れたが最後、しはんぼなお前は氣狂犬のやうに誰れ彼れの差別なく喰つてかゝつたらう。「火でや

られてまで主張を守り通すと云ふのは馬鹿らしい事だ。どんな主張でもそれ程眞ではないかも知れない。然し主張を造るために、又主張を變ずる爲めに燒かれると云ふのなら私は甘んじて燒かれよう」と云つたニィチエの言葉。その力の有り餘つた言葉などは、その時のお前には馬鹿らしいほらとしか聞こえなかつたらう。而してお前はその言葉の中に論理上の矛盾を發見して、あげ足とりの皮肉な笑ひを漏らす位が關の山だつたらう。而してお前は何んでもこちんと小さいなりにも固まつた一つ結果に到着しなければ、どうも寢ざめがよくなかつたのだ。又その時のお前は隱謀（わるだくみ）とか、嫉妬とか、羨ましがりとか、僻見とか、迫害とか、裏切りとか、憎しみとか、おべつかとか、皮肉とかと云ふ卑しい言葉の意味をしみ／＼と味ふことの出來る心の狀態にありながら、大きな言葉を口にするのを好んで居たらう。慈悲とか、寛大とか、公平とか――お前は恥ぢて自分の顏を被うて居る。私ももうお前の過去を忘れてしまふ。

　お前の還つて來た私は受精を終つた卵のやうに力に滿ちて居る。私はその力をどうしていゝか知らない程だ。私はぐん／＼生長する。お前はこれから道德と交渉を持つか如何（どう）だかは私も知らない。然し持つとすればお前は今の狀態から出發することによつてのみ持つ事が出來るのだ。お前はこれから信仰に至るか至らないか私も知らない。然し信仰に行くとすればお前の信仰に行くべき道は今にして始めて開かれたのだ。お前はこれから社會的の事業をするかしないか私も知らない。然し事業をするとすれば、お前は今にして甫（はじ）めて事業家の資格を得たのである。お前は私によつて凡てそれ等の力を得たのである。

　お前はこれからさもしく情けを求めて歩く事はない。私はお前に滿ち足つて餘りある愛だ。いまによき友人がお前と友情を交換しに來る。又よき戀人がお前の情けにうるほひに來る。お前は思ふ存分與へる喜びと思ふ存分受けるよろこびとの如何なるものであるかを經驗するであらう。それからお前はもう幻影に捕はれる事はないだ

らう。人並すぐれて脚だけ長くした片輪者がお前より高く飛び上つてもお前は驚かないだらう、又髯と皺の多い恐い顔をした老人がお前に呪の様な事を言つて聞かせてもお前はあわてないだらう。お前はゆたかな心を持つた人らしく、さわがずにお前の道を進んで行くだらう。

私はさうなるお前を祝福する。張り出した胸、高く揚げた顔、堅くふみしめた脚、近づくものに堅く握手を與へる暖かい手、眞直に向けられた眼、いつはらぬ愛しみと憎しみ、小兒のやうな汚れぬ心、さう云ふものゝ持主となるべきお前を祝福する。

お前はよくこそ私に歸つて來るだけの眞面目さを持ち續けて居た。人はお前の歸つて來かたがおそいと云ふかも知れない。然しながらやゝともするといつまで經つても歸り得なかつたかも知れない。お前が歸つて來たのは私には凡てにまさるよろこびだ。これからお前は私の痛い然しながら甘い鞭を受けねばならぬ。而してお前は幾度かこぼたれて、建てあげられて、而してその度に緊張して行かねばならぬ。かくてお前が遂に私に融け合つてしまふ時、お前の魂なる私がお前の占領する肉體の全部を占領する時、お前の創造は成就せられるのだ。その時お前は完全なる人となり完全なる社會を完成するのだ。

その時お前の胸に宿る喜びと感謝の情とは、天と地と而して大海原との喜びに調子の合ふ程高い喜びと感謝であるだらう。

（一九一四年七月）

一九一六年

クロポトキンの印象

「新潮」記者足下

先日わざ／＼お尋ね下され候節は失禮致候。その際外遊中遇ふ事を得たる文學者、音樂家、畫家などより受けたる印象を書き連ね候やうお勸め下され候處、私は元來至極の交際嫌ひのみならず、强烈なる性格に接して受くる一種の壓迫は未成品なる私に取りて堪へ難き桎梏に候へば、與へられたる機會をさへ振り捨てたる仕儀にて、唯一度クロポトキンを訪れたる事ありし由申上げ候處、その折の思ひ出を寄せ候やう御申出でにて御承諾致候次第に候。

偖てお歸り後六月號の貴誌披見致候處、拙稿の載せらるべき欄の表題は「親しく會つた海外藝術家の印象」と申すのにて、會見記が明かに藝術家に限られある事に心附き候。かくては私の記事は埒外に逸したるの嫌ひあり直ちに電話にて其旨お斷り致すべきが當然なりしを、勞働を强ひらるゝ程に電話にかゝり候事の嫌ひなる私なれば、思はず姑息に延引して今日に至りし次第にて、今更取返しのつかぬ始末に相成申候。さればこの記事の取捨は一に足下の御意に任せ置き候。

かくは申候ものゝ、飜つて思ふに藝術家なるものゝ意義を詮ずるに可なり抜き差しの餘地あるものとも考へられ候。藝術家が創造者ならば、又生活と思想との一致を條件とするものならば、又習俗に煩はされずして習俗を批

判するの權能を有すべきものならば、又深き意味に於ける自然の理解者であるべきものならば、又愛とでも云ひ現はすべき心的動向の根柢に徹入すべきものならば、クロポトキンはまがふ方なき藝術家なりと信じ候。この意味にて私はこの記事が――卽ちクロポトキンが――「藝術家會見記」中に加へられん事を深く希望するものに候。

無政府主義など申す思想からは對角線的に交涉なき境遇と敎育との中に置かれ居たる私は、かゝる傾向に對しては恥かしながら無頓着と一種の厭惡とを感ずるのみにて三十近くに及びたる次第に候が、明治三十七年の頃頻りにゲオルグ・ブランデスのものを愛讀致し始め候頃朧げに露西亞に於ける現存の社會狀態に慊らざる諸種の主義を想見し、好奇心と申す程の硏究慾を感じ始め候折柄クロポトキンの自叙傳の序をブランデスが書き居るを知り、それが讀み度き許りに始めてこの稀有なる大著書に接し、さして期待も持たずに本文を讀み辿り行き候程に、頭が上らぬ程感心して仕舞ひ申候。

私のクロポトキンに對する敬意は此時に芽ざせしにて、其後氏の著書を被れ是れ漁り居り候中に、敬意は懷しさに變り行き、英國に渡る機會もあらば氏の家屋の下には一度此身を運び行くべしと思ひをり候。

この宿志の遂げられ候は明治四十年の二月にてロンドン府は濃霧と濕寒とに深く鎖されて眞晝にも電燈を點さねばならぬ不愉快なる季節に候ひし。私は國立博物館の近所なるむさぐるしき下宿の三階より、覺束なき英文にて、紹介を煩はすべき人もなきまゝに、うちつけに會見を得たき旨の一書を飛ばし候處、直筆の返事にて次の月曜日に參るべき由申し來り候。私の心のこの返事を受けて怪しく躍り候は固よりにて候。されど困りたる事には月曜日には據なき前約ありて氏の意に應じがたく、さればとて斷念せんも無念なれば、通知も發せず一日繰上げて日曜日に出かける事に致候。偖て當時クロポトキンは何處に住み居りて、私は何停車場より汽車に乘りたるなど申上ぐべき順序ながら、私は頓と其等の事を忘れ居候。何でも水晶宮の見やらるゝ邊りを汽車の走りたる事のみ記憶に

残りて、何處を發し何處の停車場に着きたるかは中絶えたる夢の如くに候。兎まれロンドン市内のさる停車場より二十分餘り汽車にて行く市外の一小驛に降り立ちたる醜き小男のありしは確かに候。ロンドン市外の居住地と申せば世に名だたる贅澤の一區寰を心に描き給ふべけれども、私の降り立ちたるは小工場と勞働者の家屋とロンドンよりは少し生氣ありと思はしき枯並木との立ち連りたる、平らな平板な小市街にて、私はどんよりと曇り果てたる寒空の下を、遇ふ人毎に道を尋ねつゝ、たゞ廣き穢き歩道を我が靴音の高きに心尤めながら七八町彷ひ歩き候ひけん。やがて三軒續の三階建の貸家らしき石造の家の右端の戸口に Villa Viola と記されたる札のあるを見出でて、クロポトキンの返事にそれを眼あてにと記されたるを思ひ出して足を留め候。灰色の砂石にて無雜作に築き上げられたる壁、單純なる白ペンキ塗りの窓框、同じく白く塗られたる戸口――Villa とは事もをかしく候。Viola とは樂器の意にや菫の意にや、灰色の寒空には、又英國の空氣にはよく〳〵ふさはぬ、さりながら何と云ふ美しき言葉よなど思ひつゝ恐る〳〵戸口に近寄り申候。垢染みて垂れ下りたる紐を引き候處、靜まり返りたる家の中に女らしき靴の踵の音聞こえて、クロポトキン夫人自ら取次ぎに出て來られ候。よき程に背高くやゝ小肥りして髮はあらかた白く、何よりも「母」を思はするにこやかなる微笑みを微笑みつゝ、このあたりには珍らしき東洋の一青年を見やられ、私の色々と言譯せんとする暇をも與へず、先づとて招じ入れられ申候。

戸口の右なる往來に面する奥に長き一室が客間に候。樣式の統一もなき家具に飾られたる狹き部屋ながら、私には跳り立つばかりの感激を與へ候。マンテルピースの上にはトルストイとドストイブスキーとの寫眞置かれあり、壁にはプルードン、バクニン、ブランデスなどの寫眞の揭げられあり候が、其等の多くは贈與者が寫眞の主人公その人達にして、しかも所持者に對して深き同情と交誼とを抱けるなりと思へば、そゞろに暖かく緊張したる空氣の漲るを感じたる次第に候。尊き心臟の若干を堅く把持し得る人格の美ましく候かな。

部屋の中を彼れ此れと見廻す程もなく、勢よく食堂に續きたる戶を開きて十八九と覺しきこの家の令孃出で來られ、父は仕かけたる仕事を終るまで、母は庖厨の事に忙がしければ、暫く待たれたしとて臆したる色もなく私の側に座を占められ候。「戰爭と平和」のナタリア――私の最も好む女性の一人――を私はすぐ聯想して、若き女に對する往來のはにかみを忘れ申候。夫人に會ひ令孃に會ひて知りし事に候が、この家にて徒らなる禮儀は先づ以て禁斷と見え候。如何にして父を知り、父の如何なる書物を讀みたるや、米國にありしとならば西部にて發行せらるゝ父の機關雜誌「炬火」を見たる事ありやなど、矢つぎ早に誇り氣もなく、遠慮もなく、問はれ候て、無學なる私は赤面すべき所なりしかど、知らぬ事は知らぬと平氣で答へ得るが自分ながら不思議にも快くも感ぜられ申候。

物の三十分もかく心置きなく語り合ひ居り候にや、再び食堂との通ひの戶開かれ、更に飾り氣なきクロポトキン氏は「長く待たしたね」と氣輕に云ひながら這入り來られ候。豫て寫眞にて見覺えたる通りの容貌に候。驚くべく廣く高き額、白く垂れたる鬚髯、厚みある正しき輪廓の鼻眼鏡の奧にありて輝く灰色の眼、寫眞にて窺ひ得ざりしものは健康と淸潔なる生涯とを裏書きするつや〳〵しき皮膚の色、厚く大きく溫かき男々しき掌、荒海の唯中に立つ巖の如く六十幾年の辛酸艱苦に鍊へ鍊へし廣やかにも厚味ある胸を掩ふ單純、他の奇なき平民の服。挨拶の手を堅く握られて私の眼は端なくも淚にうるほひ申し候。

令孃の庖厨に退きし後二人は差向ひに相成候が、私は何にも勝りて自分が慮外の臆病者にて暗中摸索にうめき居る精神的乞食なる事を知りていたゞき度く、先づその事より申出で候に、氏は好意をこめて微笑みながら、私の傷をやさしく撫で下され申候。是れにて安心の臍を固め話は色々さま〳〵の事に移り行き候。唯氏の申さるゝは自分の主義の外に出づる事なく、日本に於ける社會主義運動の現狀など事細かに尋ねられ候が、かくの如き事

書き連ね候はゞ、本誌の發賣禁止となるべき事眼前に付き、足下の御注意もありし事なれば一切省略に附し申候。この事不本意に思はれ候讀者もあらば、責は○○と申す者に有之候旨御記憶可被下候。

話の込み入り候につれ、又私が讀みたる氏の著書殊に「相互扶助論」に對する質問に答ふる爲め、氏は私を伴ひて二階なるその書齋に登られ候。四壁は天井にとゞくまで書物に蔽はれたる陰氣なる廣間にて、その一端に据ゑられたる長椅子に私を坐らせ自分も近々と座を占めて、さて諄々と說明の勞を取られ候。私は從來の凡ての境遇凡ての傳說より切り放され、英國に居ると云ふ事も忘れ、日本人なる事を忘れ、この書齋の何處如何なる地點にあるやも忘れ果てゝ、老親の膝下にある柔順なる小兒の如くに、その穩かなる慈愛にあふれたる言葉に聽き入り候。「未だ人間の運命につきて深く考へもせず激しく働きもせざるものが、我が說の當否をあげつらはんとや。かゝる人は唯赤面せよ、而して默せよ」と氏が何かに書かれたる事など思ひ出でて、嚴かに心動かされ候。

かゝる間に時は何時の間にか經ち候ひけん、ノックして入り來れる令嬢の、晝餉の用意成りたりと告ぐるに、二人は驚きて立ち上らんと致せしが、氏は思ひ出でたる事ありげに書架を漁りて自著の "Fields, Factories and Workshops" を抜き出し、それに自署して私に與へられ、日本に歸りて後わが著書を飜譯せんとならば余は喜んで君にその勞を託すべしと申添へられ候。

廣からぬ食堂なれども、さすがに快く食事をなさんには事缺かぬ用意ありて、客は私の外に二人の青年紳士を加へ居り候。かゝるもてなしを受けん事思ひもよらざりし私には後ろめたくこそ存ぜられ候ひしに、夫人は今日は日曜日なれば娘も寄宿舍よりもどり居り、これなる親しき友を招きあれば是非居殘れと勸め下され候。食卓につける一家の睦じさは固よりに候。普通ならば露西亞語か佛語の用ゐらるゝ事と思ふに、今日は私の爲めにや一同英語にて會話致され候。寄宿舍のほとりを毎夕飾り立てゝ通る一人の青年あり、眼をあげて少女等に秋波を送る

いまくしさに、昨日は枕の縫目をほどきかの青年の近づくを眼がけて二階の窓よりなげうちしに、過たず鳥の羽の無殘に散り立つ枕その肩に落ちて、積日の胸のつかへ一時に晴れたりと、令孃の語り出でゝ心地よげなる顏付したる時などは食卓の皿小鉢まで笑ひどよめくかと思ふまでに一座は賑ひ申候。かゝる折は老主人も老夫人も唯髮白き小兒に候。幾度か死をもて脅かされし迫害の跡は何處にぞ。世界の〇〇をしてこの人一人あるが爲めに枕高きを得ざらしむるとは思ひもよらず。人類の或る意志を一人して擔へるその雙肩のいかに輕く笑ひに動き候事よ。堅き信仰に築かれ淸き良心に守られたる家の中にも私は未だかくばかりなる自由は見出し得ず候ひし。

食事後露西亞文壇の事など話題に上り候折、トルストイにつきての意見を求め候ひしに、彼とは今も兄弟に劣らぬ親しみあり。されど余は彼の壯年時代の思想に最も共鳴を感ずるものなり。彼は老いたり。彼の信仰に曖昧なる神祕の影の混ぜられたるなどは口惜しき事なり。かくまで進み來れる文化は毀つべきものにあらず善用すべきものなるに、そをおしなべて罪惡視するは心得ずなど申され候。氏は又當時露國よりカナダに移住せるドハボール宗徒の現狀につき深き興味を以て注意し居られ候。彼等の一團は純然たる〇〇主義の下に生活し着々效果を擧げつゝありと申され、尙委しくその內容を語り、更に傍らなるピアノを顧みて「余は音樂に對して熱烈なる愛着心を有せり。せめては一臺のピアノを得んと願ひし事幾年なりしぞ。而してその願ひは漸く近年に至りて酬いられたり。されど見給へ、この樂器はさして上等なる品にあらず、七十ポンド(約七百圓)を値せるのみ。しかも余は二ケ年の年賦にてその價を消却せざる可からず。余の頭腦と知識とは一臺のピアノを得て生を樂しむにさへかくばかりの苦心をなすべき程劣等なりとは自らも思はざるに」と云ひて一笑を漏らされ候。私の背は思はず冷汗にすくみ申候。

餘り長居したりと思ひて二時頃暇を告げて玄關に出で候處、一家の人々打ち連れて私を見送りくれられ候。「こ

の次には君をロンドンに伴ひ余の屬する倶樂部の人々に紹介すべし。君は更に學ぶ所多からん」と主人は申され候。夫人は母らしく私の家の人々の有樣など忙がしき中にも尋ねられ候て、故鄕の人の私を待つらん由などを申添へられ候。家を離れて見かへれば、やゝ暫く立ち去りがてに私を見送れる夫人の白衣あざやかに眼に寫り候。

美しき卷髮持ちたる近侍として皇后の膝に眠りたるも彼に候。貴族の出なる俊才と生ひ立ちながら國家の經營を輔翼せん爲めには、自ら擇んでシベリヤの兵營に身を置きしも彼に候。地質協會の有力なる學者としてフインランドに探檢を試み、茲に始めて思想の廻轉期を得たるも彼に候。舞踏會に夜を更かしてその御者の風雪の中に眠れるを見て心大いに動きたるも彼に候。意を決して貴族の光榮と資産とを拋ち去りチャイコフスキー祕密結社に加はり獄に投ぜられ、小說より奇なる脫獄を試み、西歐の天地に乘り出したるも彼に候。爾來全歐洲の迫害の中に寸分も己れの主張を曲げず、將來に於ける人類の福祉の爲めに三十餘年の長き月日の間、生き、働き、論じ、戰ひ、愛したるものは彼に候。私は汽車の中にて眼に涙を浮べながら、その多事の一生を回顧致候。而して云ふ可からざる心强さを感じ申候。彼の與へられたるは人生に力强き左券の與へられたるにて候。彼の說或は卻くべく或は惡む可く候べし。その愛腸慈心は我等人類一般の寶玉にて候なり。私は本誌の前號に與謝野女史がロダンを訪れ給へる記事を讀み、佛國民が天才を遇する道の到れり盡せるを見て嬉しく思ひ候ひしが、今この記事を書くに當り、二氏の境遇の餘りなる相違に、同じ世同じ時に有り得べき事かと思ひ迷ふばかりに候。されど詮ずる所ロダンの酬いられたるもよき事に候。クロポトキンの酬いられざるも亦よき事に候べし。天才の價値に比しては酬いらるゝも酬いられざるも餘りに些々たる小事件に過ぎず候べし。さはれクロポトキンが青年の頃西歐より樂壇の天才の來る每に必ずその演奏に臨み候て、殆んどその樂聲に熱狂し已が思想に萬斛の燃材を加へたりてふ自敍傳の一節を思ひ出し候每に、私は今でも彼の隱棲に一臺の美しきピアノを加へて上げたしと念ぜぬ事は無之

候。

その後私は故國に向つて旅立ち、復た斯のなつかしき家を訪るゝ機會は摑まずに終り候。日本に歸りなば記念の爲めに氏の著書を譯さんものと存候ひしが、怠りの心にかまけてそれすら成し遂げ居らず候。酬いる事なく受けてのみある私は今もなほ精神的乞食の徒に過ぎず候なり。早々。

（一九一六年七月「新潮」所載）

惠迪寮寮歌集序

惠迪寮諸兄。

嘗て寮に居た事のある因緣から、今年出る寮歌集に序を書けと云ふ御依賴を受けました。それに應ずると云ふ事は、現在大學と直接の交涉を繫いで居ない私に取つて、僭越の事だと思ひます。然し私は、この機會を與へて下さつた諸兄の御厚意を捨て去るに忍びません。僭越と知りつゝ筆を取る我儘を許して下さい。

半年ばかりの短日月ではあつたが、私も寮の飯を食ひ、寮の寢臺に寢たものです。私の部屋は南寮の二階の西の隅で、其處から毎日手稻山の後ろに落ちる夕日を拜む事が出來ました。而して寮生諸兄は私を齡の違つた友達として取扱つて吳れました。一緒に圓山の雪辷りにも行き、一緒に鷄の雛を盜む鼠賊の征伐もし、討論會には議長に祭り上げられて散々油を搾られ、食堂では一茶に舌皷を打つて飯の喰ひ競べもしました。その記憶は今でも眼に見る樣に頭の中に烙き付けられて居ます。然し時は過ぎて消えました。それを思ふと不思議に自分の過去がなつかしまれます。

今寮にある諸兄の上にも軈て私と同樣な經驗が到來する事と思ひます。惠迪寮は幾百幾千の人の若盛りの記念碑です。其處にも毎夜ともされる灯の光は、爲す事もなく徒らに老いた人々にとつて如何に痛烈な鞭撻でありませう。諸兄の今あるやうな美しい强い躍進的な時期が一生の中に幾度現はれ出るでせうか。寮の出口は入口より大きいに違ひありません。然し諸兄が一度その出口から外に步を移すと、その大きな出口さへも再び諸兄を迎へ入るべく餘りに小さな門となるのではありますまいか。私は諸兄の若盛りを祝します。而して諸兄が此の時期の

ために最上最善の滿足を求められん事を祈ります。

マセドンのフィリップ王の所に、或る老婆が行つて訴へました。王は忙しいからそんなくだらぬ訴へを聽く暇がないと拒みました。老婆は怒つて、訴へを聽く暇がない位なら王になつてる暇もない筈だと申したと云ひます。諸兄はフィリップではないけれども、今王者の權威と大望とを懷いて居ます。私は老婆ではないけれども、衷心から此の訴へをします。王者を以て任ずる諸兄は私に耳を貸して下さると思ひます。

（一九一六年四月）

一九一七年

「聖書」の權威

私には口幅つたい云ひ分かも知れませんが、聖書と云ふ外はありません。聖書が私を最も感動せしめたのは矢張り私の青年時代であつたと思ひます。人には、性の要求と生の疑問とに壓倒される荷を負はされる青年と云ふ時期があります。私の心の中では聖書と性慾とが激しい爭鬪をしました。藝術的の衝動は性慾に加擔し、道義的の衝動は聖書に加擔しました。私の熱情はその間をどう調和すべきかを知りませんでした。而して惱みました。その頃の聖書は如何に强烈な權威を以て私を感動しましたらう。聖書を隅から隅にまですがりついて凡ての誘惑に對する唯一の武器とも鞭撻とも賴んだその頃を思ひやると立脚の危さに肉が戰きます。

私の聖書に對する感動はその後薄らいだでせうか。さうだとも云へます。さうでないとも云へます。聖書の內容を生活としつかり結び付けて讀む時に今でも驚異の眼を張り感動せずに居られません。然し今私は性慾生活にかけて童貞者でないやうに、聖書に對してもファナティックではなくなりました。これは惡い事であり又いゝ事でした。樂園を出たアダムは又樂園に歸る事は出來ません。其處には何等かの意味に於て自ら額に汗せねばならぬ生活が待つて居ます。私自身の地上生活及び天上生活が開かれ始めねばなりません。から云ふ所まで來て見ると聖書から嘗て得た感動は波の遠音のやうに絕えず私の心耳を打つて居ます。神學と傳說から切り放された救世の姿がおぼろながら私の心の中に描かれて來るのを覺えます。感動の滲入とでも云へばいゝのですか。

何と云つても私を强く感動させるものは大きな藝術です。然し聖書の内容は畢竟凡ての藝術以上に私を動かします。藝術と宗教とを併說する私の態度が間違つてゐるのか、聖書を一箇の藝術とのみ見得ない私が間違つてゐるのか私は知りません。

（一九一七年一月「新潮」所載）

再びロダン先生に就て

この前の日曜日に現はれた文藝欄中に私の述べた事の筆記が掲載された。その全文は私を驚かし且つ苦しめた。私は自分の不用意を恥づると共に口から耳へ傳へられる事の、如何に心もとないものであるかをしみ〴〵と思ひ知つた。私は本紙の讀者がロダン先生の名譽の爲めにあの記事の全部を記憶からこそぎ取られる事を願ひ望む。

私は自分の力以下のものを或は批評する事が出來よう。それすらが恐ろしい事である。ロダンのやうな巨匠に對し私がなし得る所は單に敬意を籠めた appreciation の外に出る事が出來ない。大膽不敵な批評家等が何んと卑しまうとも私はかうした態度を變へる事が出來ない。

先生は一つの世界である。創造はその胎から生れ出る。外周は嘗てその創造の核心となる事が出來なかつた。「鼻の缺けた男」が出てから「海妖の首」に至るまでの凡てはそれ全體に於て一つの仕事である。こゝに一つの仕事があり、彼處に一つの仕事があるのではない。それほど内部的に統一された創造である。縱令最も外縁的にはアルヌーボーを暗示するやうな技巧（例へば Buste de Madame Moria Vicunha だの Le Poete et la Muse のやうな）を人が見出さうとも、それは作物内部の生命を少しもかき亂す事は出來ない。

私は自分の趣向の上から先生の藝術がゴシック藝術の統流に棹して居るらしいのを非常に嬉しく思ふ。古典的の藝術は希臘に於てその精華を極め盡した。近代歐洲文化の源頭をなす文藝復興期の藝術は人の心を驚かす程の壯麗を以て榮えはしたけれども複雜極まるその分化の水準は畢竟希臘藝術のそれを凌ぐ事は出來ない。これに反

してゴシック文化は狹い方所に行はれ發達の中途に摧かれてしまつた。誰もがその育ち行く末の如何なるものであるかを見極めない中に歴史の表面から姿を隱した。然しながらこの文化の素質は根强く歐洲人殊に佛國人の心の中に宿つて居てしかも古典的文化の所有しない幾多の特色を包藏して居た。それが超凡なロダン先生の天才を緣として再び私共の眼の前に崇高な現はれを見せたのだ。人間とその所作との有機的な一致、徹底した自然の表現、屬性を撥無した端的な美、灼熱した生活が將來する直覺、苦惱にまで迫る無劫の發展、見窮められた現象の直後に嚴存する神祕――それ等はゴシック文化の特色であつた。而してその凡てが色濃くも先生の藝術に染めぬかれて居るのを私は感ずる。而して私は崇敬と感激に滿される。

天才がしつかり摑む窮極の實在は大なる常識であることを私はロダン先生の藝術によつて敎へられる。彼は何と云ふ宏大な接觸面を有して居るだらう。而してその接觸面は內部から充擴する絕大の力によつて太陽の如く張り切つて光つて居る。鋭角は何處にもない。否、鋭角は餘りに無數である、その尖端の竝列が人に滑らかな手觸りを與へるまでに。ピュビス・ド・シャバンヌも宏大な接觸面を有して居た。然し面の彈力はロダン先生のそれに比べると綏んで居たと私には思へる。ユーゴーも宏大な接觸面を有して居た。然しその面には不思議な歪みがあつたと私には思へる、佛國近代の巨匠の中では私のよく知らないバルザックが獨り先生と肩をならべ得るのではなからうか。私はなほ此の事を窮めて見たい。

先生の藝術が將來如何なる製作の發足點となり如何なる製作を生み出すであらうか。不學は私にそれを知る事を許さぬ。私はその委曲を說き得る人の敎へを受けたいと思ふ。唯先生の創造した藝術の後ろに潜む氣稟が如何に未來を導くかについては朧げながら私なりの豫覺を感ぜずには居られない。現代文化の破產を促進するもの而してその破產の跡に新しい文化を樹立するものはこの氣稟でなければならぬ。先生はたしかに王冠と笏とを摑ん

だ。然し彼の君臨すべき領土はその忠實な一味徒黨によつて徐ろに切り拓かれねばならぬだらう。偉大なる反逆者の陰謀の上に祝福あれ。

前の日曜日の記事を讀んだ高村光太郎氏は直ぐ私に親切な手紙を送つて下すつた。ロダン先生の爲めに些かな誤謬をも見逃すまいとする氏の眞摯な態度は殆んど涙にまで私を動かした。「白樺」に訂正文を書かうとして居た私は氏の手紙を見てから思ひかへして本紙の上に短文を掲げる事にする。この文が氏を滿足せしむるか否かを私は知らない。私は唯氏に感謝の意を表するためにこれだけの事を書き添へる。

ロダン先生の危篤が傳へられてから一週間は事なく過ぎた。訛傳であれと蔭ながら私も祈る。

（一九一七年二月十一日「讀賣新聞」日曜附錄所載）

ミレー禮讃

一

ナポレオンがエルバ島に流謫された一八一四年に生れ、佛蘭西共和國の憲法が制定された一八七五年に六十一歳で世を去つた巨匠ジャン・フランソア・ミレーを禮讃する爲めにこの筆は執られる。

二

ノルマンディの海岸線を形作る峭壁から數町も離れぬ程の山峽に巢喰ふ小村グルシーの或る田舍家でミレーは生れた。コッテのよく取扱ふ淋しいながら事缺かぬ素朴な半農半漁の生活の畫面は――ノルマンディとブリターニュとの相違こそあれ――ミレーの搖籃の地を讀者の腦裡に可なり明らかに描くであらう。紡車のおだやかな音と、金砂のやうに日光に踊る室内の埃と、嚴乘な大寢臺に垂れ下る粗雜なだんだら染めの帷とは彼がこの世で受けた外界に對する最初の印象であつた。彼がまだ四つ五つの頃、親の假初な戲談として、大きくなつたら何になると問はれた時、彼は即座に答へて、「人間の姿を描く人になるのだ」と云つた。齡の割合に骨格の逞しかつた彼はその子供に似合はぬ無口と沈着とを以て年嵩の少年にも容易に侮られなかつた。十二の時彼の叡智を愛した或る長老が、その教育を續ける爲めに任地先へ伴れて行かうとすると、彼は酷愛するヴァージルを讀み進み得る樂しみにかへても、父母の家と田園とを見捨てる事をいやがつた。然し彼は伴れて行かれた。而して四五ケ月の後正月をしに家に歸ると、そこには新任の若い長老が居て、この深い色の眼と豐かな黑褐色の髮毛を持つた少年を

非常に愛してくれた。彼はこの長老に心のたけを打ち明けて自然に對する憧憬の深さ烈しさを告げた。默つてその言葉に聞き入つて居た長老は、少年の未來にをのゝきながらから嘆じた。「嗚呼可憐なわが子よ。お前は苦勞人の心を授かつて生れて來た。これから先きどれ程苦しみ惱まねばならぬかをお前は自分で知らないで居る」

十八の時彼が描いた前こゞみになつた老人の素描は、自分の助手としていつまでも彼を引きとめて置く望みを父に抛たしめた。その頃作られた素描は晩年までミレーの畫室にかゝつて居たが、ある時彼はサンシエにから云つたさうだ。「あれはまだ父の家に居た時モデルもなく先生の指導もなくつて描き上げたものだ。私はいまだにあの通りの描き方をしてゐたが、表現の點から云つたら今でもあれ以上のやりやうを知らない」。こゝで「表現を無視して何んの構圖があらう」と云つた彼の晩年の言葉を思ひ合はせる必要がある。兎も角彼はダビデ王があつたやうに、又彼の尊敬するヂオットがあつたやうに、家畜と田園から事業にまで引き裂かれた。而して彼の苦しい然し苦しみ甲斐のある地上巡禮が始まらねばならなかつた。それは浪漫派の頭目なるスコットと近代生活の創始者なるゲーテとが世を去つたその年の事である。

父に伴はれてシェルブールに行つたミレーは二人の師についたが、それは彼が行く道の助けにも邪魔にもならなかつた。二人目の師匠は然しミレーを見る眼を持つて居た。ミレーを市會に推薦して、彼を巴里に遊學させるのは更に一人の偉人を佛國に寄與する事だと云つた。而してミレーは偉人に仕立て上げられる爲めに、不思議な好奇心と嫌惡とを心に抱きながら二十三歲の時に巴里に旅立つ事になつた。巴里に着いたその瞬間から彼は絕對に都市の生活に失望してしまつた。

學術と藝術との淵叢なる都市の女王巴里をミレー程の惡意をこめて眺めたものが外にあるだらうか。そこは亂雜に荒れ果てた大きな墓場に過ぎなかつた。彼は野獸の如く山林に渴き憬れた。彼の師事したドラロッシの門弟

等は彼を「森の男」、「木靴をはいたジュピーター」と呼んで罵つた。何んと云ふいゝ諢名だ。彼は大地の如く頑固で執拗で內氣だつた。ルーブルを探し出すにすら一週間餘を浪費した。ドラロッシは彼を理解し誤解し愛し惡み蔑み且つ畏れた。「お前は十分知つて居る。而して餘り何んにも知らない」と罵つた。巴里はミレーに於て文化を理解する事を知らない馬鹿正直な賤民（prolétariat）の一人を見出すに過ぎなかつたらう。彼の宿つた家の細君は懸想の謎を解く事すら知らない彼の頓馬さから火の出るやうな赤恥をかゝせられて氣違ひじみた腹をたてなければならなかつた。彼はいら〳〵しながらまごついてばかり居た。巴里に住む事はミレーに取つて實に曠野の試練だつた。

唯一つそこにも然しオアシスはあつた。それはルーブル畫堂の原始派とミケランジェロとプッサンとの作品を列ねた部分だつた。彼は恭しく足を爪立てゝそこに近づいた。「思想が正しく力強く表現されたるカンヴスに自分の注意は一番に引きつけられる。自分は力強い凡てのものを好む」と彼は云つて居る。自分の傳統の親をミケランジェロに見出した事は恐らくミレーにとつて一生の慰藉であり鞭撻であつたであらう。千八百三十年派（卽ち新たに勃興した浪漫派）に對してさへ殆んど和鳴を感ぜぬ程に孤獨な彼の事であつたから。

ミレーが巴里に足を踏み入れてからの十二年は、單に彼を都會的生活で苦しめたばかりでなく、一度ならず瀕死の重病を彼に下し、最初の妻を三年の間病氣で苦しめた後に奪ひ去り、次に作つた新家庭に極度の貧困を容赦なく投げ込んだ。金が出來る代りに彼にはつぎ〳〵に子供が出來た。夏には暑さがあつた。冬には薪がなかつた。三十の時彼がサロンに送つた「乘馬演習」に感じ入つたディヤツとトルナウとが この才能ある青年畫家を訪れて行つた時、辛うじて探しあてたむさ苦しい部屋の中には、憐れむべき病身の妻が死んだまゝで貧しい床の上に橫たはり、ミレーの姿は何處にも見當らなかつたと云ふやうな事もあつた。「世の中には惡い人間も多い。然

し善い人間も多い。而して一人の善人は多數の惡人の作る缺陷を補つて餘りがある。それだから俺はつぶやかない」と彼はこの苦境の間に云つて居る。又「苦難は藝術家に明確に自己を表白すべき道を教へる」とも云つて居る。一八四八年の二月に起つた革命はサロンを審査員の手からもぎ取つて公開した。ミレーの「穀を篩ふ人」はドミエ、クルベー等の間にも特異ある光を放つて輝いた。然しその一家は三度の食事にも事缺いた。二三の有志が當時の內務大臣であつたレドルー・ロランから百フランの金額を得てミレーの所に持つて行つてやつた時、ミレーは三月末の寒い夕暮に食物もなく火もなく、箱の上に腰かけたまゝがた／＼と慄へて居た。彼は漸く「今日は」とだけ挨拶したが、軈て金を受取ると落ち着いたいつもの調子で「難有い。いゝ時金が來た。私達は二日間何んにも食はないで居た。唯子供達だけ兎に角今日まで餓ゑないで來たと云ふのがめつけものだつた」と云ひながら妻を呼び、「俺はこれから薪を買ひに行つて來る。何しろ寒い」と云ひすてゝ出て行つた。

　然し何よりも苦しい事は彼が自らを偽らねばならぬ事であつたらう。ミレーは生活の爲めに、又自分の藝術が何時までも埋れて居るのをもどかしがる弱點に刺戟されて、いつの間にか心にもない仕事をする事を習ひ覺えた。彼が巴里に這入るや直ぐ蟲酸を走らした、墮落女の醜態を日の目にさらけ出すやうな畫風を彼自身試みねばならぬやうに餘儀なくされた。彼の筆がワットーのそれと見分けがつかぬまでに慣らされるには彼はどれ程深く己れの心臓に無念の齒を嚙み込んだらう。彼は涙を飲みこみながら產婆の看板板に聖母の像をすら描いた。サロンにも彼は當時の輿論を迎へ得るやうな作品を送らうとさへ勉めた。然しミレーの心はかゝる術合に對して大きな傷口を開いてをめき叫んでやまなかつた。凡て偉大な性格のみが有する心の純一さをミレー自身どうする事も出來なかつた。彼はこの重荷の下に苦しみ呻いた。

　巴里に共和政府が設立され、ミレーの最も惡み避けた政治的暴動の勃發した一八四八年は幸にもミレーの生涯

に取つて一轉期を劃すべき因緣を結んだ。彼の嫌つた革命は畢竟彼に害をなすよりも益をなした。革命政府は彼に幾分の生活を保障を與へ、同時に彼をして都會生活なるものゝ淺薄と矛盾とを覺らしめた。「穀を飾ふ人」によつて彼はこの年に自己の行くべき道を明らかに宣言したと共に、公衆に媚びる作品を出すまいと云ふ決心の臍を堅めた。忠實な賢明な彼の妻は刻々逼り近づく饑寒を尻目にかけて夫の決心を雄々しくも勵ました。ミレーの田園に對するノスタルヂヤは再び彼の心を火のやうに燒き始めた。彼の心の準備は整つた。來るべき運命が何んであるかは知らぬながら、花婿の入來を待つ花嫁のやうな心持は彼の胸の中に出來上つて行つた。運命は畢竟親切である。彼の底力が現はれ出づべき舞臺の幕は彼自身も知らぬ間に、運命の手によつて徐ろに捲り上げられたのだ。

三

最も惡み嫌つた革命の爲めにミレーが銃を執つて市街戰に加はらねばならなかつた苦い經驗は、心の底から彼を怖れさせた。おまけに一八四九年には猛烈なコレラが巴里を席捲した。「乾草造り」を描いて時の政府から千フランの賞與を得たミレーはこの恐怖から一時なりとも逃れようために、その友達のジャックと金を分ち合つて二家族は政爭の衢なる巴里を後に見て、フォンテンブローの或る旅館に避難した。それは六月十三日の革命が破裂する一寸前の事であつた。然しミレーの細君は旅館の滯在が彼等の輕い財布を直ぐ空にするのに氣が附いて、百姓家でも借りたらと云ひ出した。ミレーは固より異存の申し出やうがない。何んとかゾンと、ゾンが語尾につく村が近所にあるのを目あてに一家族は大雨の中を引越した。ミレーは三歲と二歲との子供を背負ひ、細君は赤坊を抱いた上から裳をまくし上げて頭に引つかぶり、下女は大荷物を引きずるやうにぶら下げて後に續いた。村に

這入ると一人のお婆さんが一行を眺めて「御覽、旅役者があすこに行くよ」と云つた。

何んとかゾンと云ふのはバルビゾンの事だつた。ミレーは巴里から程遠からぬこの村に、故郷を思ひ起させるやうな田園のあるのに且つは驚き且つは喜んだ。而して沃土に下された若木の根のやうにこの美しい素朴な小村にこびりついてしまつた。一八七五年に彼がこの世に最後の呼吸を呼吸したまでの大事な二十七年間は實にこの土地が彼を哺み養ひ育て護つたのである。ミレーとジャックとは畫筆を執る事も出來ないまでに興奮して、毎日山野を歩きまはつた。フォンテンブローの莊嚴な森の姿、遠く連なる平蕪の描く幽玄な地平線、土から生えぬけたやうな農夫、羊群と、神祕に包まれたその牧者、田園に特有な音響と匂ひ、さう云ふものに二人は暫く醉ひしれて見えた。ミレーは自分の夢が眠の前に延びて連なるのを見た。彼は自己の世界に觸れた。彼は彼の宗族の血を血管に感じた。彼は再び農夫に還つた。

病苦のやうな熱意はやがて創作の欲求と變つて行つた。朝の中彼は畑に出て本業の百姓よりも上手に畑を作つた。而して午後からは彼が畫室と呼ぶ怪しげな通光の悪い小部屋に這入つた。彼は感激に浸りながらその壁に舊約聖書から題材を取つた畫を描いた。大きな牧草堆の蔭に農人共が食事の準備をして居る。そこにボアツがいたはりながらルツを連れて來る所である。來るべき幸福な生活を半ば豫覺し半ば畏れながら、やがてわが夫たるべき惠み深い農人に憚りを見せて、人々の群に近づくルツの姿は、荒い明暗の筆觸の中に稀有な charm を以て眺められる、まるでその可憐な處女がミレー自身を象徴するものゝ如くに。ミレーは又新鮮な無數の印象に狩り立てられて驚く可き多數のスケッチに彼の周圍を殘りなく表現した。一八五〇年と覺しき頃彼がサンシエに送つた書翰の中に「何んと云つても百姓と云ふ題材は私の傾向に一番適して居る。社會主義者と君は取るかも知れないが、藝術に於て最も私の心を動かすものは人間味 (le côté humain) であるからである。若し心のまゝが出來る

ものなら私は自然から直接に受ける印象の外は何物も描くまいと思ふ——それが人間であれ、風景であれ——。快美の方面は嘗て私の前に現はれない。そんなものもあるのだらう。然し私は嘗てそれを見た事がない。私に取つての最大の快美は、森の中又は畑の上に見出される靜寂と沈默だ——それは人を夢幻の感覺に導き入れるほど甘美ではあるが、その夢は畢竟悲しいものだ」と書いて居る。

バルビゾンにはミレーの來る前から一群の畫家が住んで居た。その中にテオドル・ルーソーを見出した事はミレーに取つて得難い收穫だつた。二人は長い間の凝視の後に甫めて離れがたない友情を結んで終生渝る事がなかつた。ミレーが「接木」を描いた時、それに見入つて心からの同情を以て、「彼は自分の哺むべき者の爲めに働いて、多きに過ぎる花蕾と果實を生ずる樹木のやうに枯れて行かうとして居る。彼は子供を生かす爲めに自分を使ひ耗らさうとして居る。彼は粗々しい幹に收穫の多い嫩芽を接ぐ」と歎じたのは彼だつた。ミレーの財布が空になつた時米國人の名で其の作物を買つたのもルーソーだつた。偏屈なミレーはどうかするとこの厚意ある友に敵意を酬いようとした。然し幸にもそれは一時の狂ひで結局ミレーはルーソーに貴い分配を贈つた。それは素朴純眞な物の見方と、自然の觀察に對する特殊な視角とである。ミレーがバルビゾンで得た痛ましい他の收穫は努力の後に襲ひ來る激烈な頭痛だつた。ミレーの「刺」なるこの頭痛は年と共に募つて彼を脅かした。その壓迫に堪へ切れなくなると彼は幅の廣い帽子を被つて野と云はず林と云はず歩きまはつた。而して草生の上に仰向けにぶつ倒れて大空の光を浴びた。そこにのみ癒しの力が潛んで居た。「わが神、汝の大空の下にあるはいかによきかな」と彼は心を躍らしてつぶやいた。

ミレーが田園に立て籠つてからの第一の創作は「種播く人」となつて現はれた。新たに掘り起された畦の上を、左手に種子の袋を持つた男が大股に旋律を作つて歩いて行く。廣く延ばした右手の先きからは砂金の樣な麥の種

子が消え殘つた夕陽の光に輝きながら落ちる。畑に這入る前に一握りの種子を取つて十字を切るやうに眼の前に投げ、低い聲で呪文を稱へてから、足を用意された土の中に踏み込む程に農人に取つて莊嚴な行事が、始めて眞實に描き出されたのを見た時に巴里の市民は二様に驚倒した。一部のものは——その人達は不幸である——この荒くれて見える表現の中に人類と藝術に對する底意深い呪詛を見た。一部のものは——その人達は幸福である——この中に天才の眞の力を見出した。「激しい身振りと荒くれた誇りとに滿ちたこの人物には崇高な或るものと雄大な様式とが備はつて居る。種播く人が播き附けするその土そのもので描かれたやうだ」とゴーチエは感嘆した。ミレーがつぎ／＼に發表した凡ての製作は殆んど一つの除外例もなくこの無慈悲な無視と熱心な辯護との十字火を浴びた。しかも彼の「木樵と死」、「鍬に倚れる男」、「犢の搬入」、「屠り豚」、「葡萄畑の憩ひ」などが出ると辯護の聲は動もすると呪詛に代らうとした。初期に於て極力彼の味方だつたゴーチエもサン・ビクトルもボードレールも烈しい言葉で彼に楯をついた。準欽定の美術雜誌は聲を揃へてこの畫壇の無政府主義者を藝術の聖壇から追放しろとひしめいた。愼み深い內氣なミレーは「いゝ新しいものを眞先きに認める程の勇氣のある人は尠いものだ」と無干渉な態度に出て居たが、やがて彼は巴里に於て自分の周圍に戰が鬪はれて居るのを餘儀なく認めると力を自覺する者が振ひ立つ如く立つた。「私が自己の思想に確立して居なかつたら、又或る友達を有して居なかつたら(註。ドカム、デュプレ、ドービニー、ディヤツ、ドラクロア、バーイエ、ドミエ、ルーソーなどはその友達だつた。)私は自分が空想の奴隸であり夢想家である事を思つたかも知れない。……私は注意して求めるけれども、批評家の非難中には騷音の外に何物もない、私が採用すべき一つの忠告もない。批評のお役目とはこんなものか——惡罵だけなのか」、「私は固く立つ。彼等が、醜の畫家、わが民族の進歩を妨害するものと私を呼ばうとも、私は斷じて農民のタイプを麗化する馬鹿はしない。私は自分自身を弱々しく表現する位なら表現はしないまでだ」と叫んで居

る。然し彼はクルベーやホヰッスラーのやうな藝術上の鬪士である代りに徹底的な畫家であつた。彼は自己の主張でなくペンで爭ふやうな事は全くしなかつた。彼は砲彈をその畫に裝つた。而してそこに堅い身構へをした。彼の言葉通りに云ふならば、彼は自分の藝術に、「首を賭けた」、「木靴の丈けだけも後には引かなかつた」。どれもこれも不出來なミレーの寫眞の中に一つ彼が壁を後ろにして、帽子を手に、股をひろげて仁王立ちに前を見据ゑて居るのだけは特色のあるものだと思つたサンシエが、「銃殺されようとする農民の頭領のやうだ」と云ふと、さすがのミレーも flatter されて微笑んださうだ。然しその無邪氣な虛誇と微笑の中には純眞な悲壯が包まれて居る。

實際から大きな天力と大きな使命とを授かつた人々が必ずすゝらねばならぬ悲壯な杯をミレーもしたゝかすゝらせられた。自殺の誘惑は屢ゝ彼をして底無しの深淵を覗かせた。

「肉體的にも心靈的にも私は墮落して來たやうだ。君の云ふ通りに人生は悲しい。而して憩ひの場所とてはありはしない。休息と光明と平和の境界に憧れて溜息する人の心持が判るやうになつて來た。ダンテが幽界にある人をして地上生活の回顧を『我が負債の時』と云はした事が判るやうになつて來た。――まあいゝ、お互にやり切る所までやつて見よう」とルーソーに書いた事もある。或る時は思ひ餘つて自分の魂をそつと僞るやうに、「自殺は惡人の仕業だ――それに――妻子供に遺すにしては何と云ふ立派な遺產だ」と云つてぢつとそこに居合せた友の眼を見つめた後、突然の衝動のやうに、「行かう、行つて日の入りを見よう。心が轉ずる事もあらうから」と叫んだ事もあつた。自殺した畫家に取り縋る妻子の有樣を構圖にした畫を作つて、恐ろしい仕業から逃れようと藻搔いた事もあつた。窮迫の極最後の叫びのやうに「さあ何んでも來い」と捨鉢に云ひ放つまでの時もあつた。

貧窮はこの稀有な畫家の genius のやうにさへ見える。バルビゾンの簡素な生活に移つてからも、彼の家の炊

煙は常に細かつた。ルーソー、ディヤツ、サンシエなどの心を籠めた奔走にも係はらず、彼の畫は彼約されて周旋人の手に還る事が多かつた。」また月末――何處にも金の見付け出しやうがない。子供等を食はさずには置けない」、「私の心は眞暗だ」、「未來――近い未來さへがどれ程暗黒であるかを君が知つたら。少くとも私は終結まで働きたい」、「頭痛の連發で仕事が無暗に妨げられる。實にはかどらない。月末までに出來上らなかつたらどうすればいゝんだ」、「パマアジのやうに嵐の中で『助けてくれ』と叫ばねばならぬ瞬間が來た。私も溺れて居る。パマアジと違ふ大切な點は、私の方は乾いた土の上に居ながら溺れると云ふ事だ。私は全く無一文になつてしまつた」――かう云ふ窮迫の文句は數限りもなく見出される。その間に子供は九人まで生れ、二人の弟は畫家になる目的で國から出て來て、さらぬだに多過ぎる口をふやした。ミレーは然し雄々しくもその巖乗な肩に運命の重荷を背負つて忍從した、默つて首木につく耕牛のやうに。一枚の畫布の上にいくつも傑作が塗りつぶされたと云ふ一つの事柄さへ、後人の心を傷つけるには十分な悲劇だ。大抵の才能はミレーに來た試練の中の貧困と云ふこの試練だけで存分に摧かれてしまつたであらう。

然しミレーの天才は病苦、貧困、迫害によつて萎縮させられるには餘りに運命的だつた。彼の天才は枯るべくではなく、生むべく生れた。天才は鬼子を生む。否定の眞唯中にあつて彼は肯定を生んだ。「汝の額の汗によつて生くべし」と云ふ永劫渝る事なき人類の運命、その運命にひたぶるに執着して自然に對し鈍き然し飽く事なき健鬪を續ける農人の生活、――人類全體の苦惱と誇りとを象徴した農人の生活、それを活きたるまゝに我等の眼前に提供したのは實に彼であつた。ミレーの「接木」の畫を見たテオドル・ゴーチエは、「不思議なものは藝術の力だ。注意深く表現された瑰麗な思想も人を氷の如く冷やかなまゝで置くのに、灰色の土地の上で普通な仕事をして居るこの二人は觀者の心を捕へて夢想に導いて行く」と云つた。ミレーも亦確信を以て云つて居る。「どんな題材で

もよろしい。唯藝術家がなすべきは力強く明確にそれを現はす事だ。藝術家は己れの藝術に對して一つの中心觀念を持つて居て雄辯にそれを表現し、自らの中にそれを活かし、烙印を押すやうに的確にこれを他人に傳へなければならない。藝術は遊樂ではない。それは戰だ。物を搗きこなす大臼だ。私は哲學者ではないから、人生の苦痛を癒し得るとも、自分を一個のストイックに仕上げて惡に對して無關心になる形式を編み出すのだとも云はない。苦痛だつて惡い者ぢやない……。」

それればかりではない。如何なる難境の中にも運命の永劫な微笑みを感じ得るのは天才の一つの特權だ。ミレーも亦自然の恩惠と人の心とを痛感して涙にまで微笑む事の出來る祝福された一人だつた。故鄕の思ひ出は彼を嬰兒のやうにさせた。妻と子供との群れは彼を雀躍りさせた。その友と心を觸れ合はす勇氣をも彼は享樂した。母が一八五三年に歿したので翌年遺産の分配の爲めに故鄕に歸つた時、彼の要請したものは先祖から傳へた古い衣裝棚と、壁の這葛を切り去らぬやうにとの事だつた。彼は自分の家の小庭の蔓一つにも手を附けさせなかつた。若し剪らうとすると彼は痛がつた。質素な夕食を家族と友達と一緒にする程ミレーに取つて麗はしい事はなかつた。さう云ふ時には彼の口から驚くべき諧謔や諷刺が溢れて周圍の人を快活にした。彼は又言葉通りに樹々の物言ふのを聞き、夜の意味を知り、沈默を凝視し、天體と交渉し、雜草と氣脈を通じた、私はこゝでも美しい言葉で彼自身に語らせよう。

「あゝ、私は私の作物を見るものに夜の光榮と恐怖とをこれ程に味識させたいものだ。大氣の歌と沈默とつぶやきとを觀者に聞き取らせる事が出來る筈だ。彼等は無限を感得すべきだ。世紀又世紀變る事なく隱見する星々を考へると恐ろしくなるではないか。彼等は人類の喜悅と悲哀とを等しく照らす。而してわが地球が粉碎した時にでも、この生の源なる太陽は平然と宇宙の荒廢を照し續ける事だらう。」

「何たる沈默。沈默を聞き取らうと耳傾ける沈默。沈默よりも更に默した沈默。これこそは私の畫の中に現はしたいと願ふ所の者だ。」

「若し森を描くなら、私は觀者をしてエメラルドやトッパーツやその外の寶石を思ひ出させるやうには描くまい。光に輝く葉や濃い影が人の心を喜ばし靈を動かすその力を表現する爲めに描かう。」

「乾草叉で麥束を高くかゝげるあの人達の姿を見ろ。夕暮の光に對して立つその形は驚くべきものだ。彼等は殘光の中にあつて巨人のやうに見えるではないか。向うの物蔭を這ふやうに歩いて行くあの人々を見ろ。たしかに彼等は平野の靈だ。しかも彼等は乾草の重みにおされて前屈みになつたり、薪の大荷に氣力なくとぼ〳〵と歩む憐れな人類に過ぎないのだ。然しこゝから見ると何んと云ふ素晴らしさだ。夕日の光を浴びて肩の上に重荷の平衡を取つて居る樣の見事さよ。あれは美だ。而して神祕だ。」

「私はどんな事があつても冬を奪取されたくない。あゝ、畑と林との哀愁。それを見ないのは何んたる損失だらう。」

凡衆は驚異の中に浸りながら驚異を要求して齷齪する。天才は自己の周圍に驚異の多過ぎるのに祝福を感じ投れをすら感ずる。ルイ・ナポレオンが野心を遂げてナポレオン第三世となり、共和主義の痕跡をも殘すまいとして凡ての大學敎授の顏から鬚を剃り落させたり、大練兵場の卽位式には、羅馬の古英雄を人民に聯想させる爲めに、兼ねて馴らして置いた大鷲を王宮から放つて自分の頭上に舞ひ遊ぶ仕掛をしたりして、手製の驚異を播き散らして居る間に、ミレーは人の顧みない地の一隅にあつて眞實のどん底にまで自己を掘り下げて行つた。一八三〇年は實に佛國藝術界の一大轉期だつた。歷史畫人物畫に於てはドラクロアの一派、風景畫ではディュプレの一派が今までの古典主義から全く獨立して浪漫派の旌旗を打ち立てた。それは今までの形式の完成のみを覘つて自然を無

視した瀕死の狀態に火を投げ込んだ運動に相違なかつた。けれどもレオンス・ベネティットがいみじく道破したやうに、浪漫派も畢竟古典派と同樣な錯誤をした事を免れない。彼等は神々や王侯や古英雄の代りに中古の武士や殉教者を置きかへ、プルタークやリビーやホーマーの代りにオシヤンやバイロンやスコットを與へたにとゞまつた。然るに一八四八年の政治的革命によつて裏書きされた人心の革命は遂に藝術を人そのもの自然そのものに肉迫させた。クルベー、ドーミエ、バーイエ、ルーソー、コロー等は實にその戰士として現はれたのだ。ミレーは勿論その最も偉大なるものゝ一人だ。ミレーはより多く人の藝術家として出發した。その初期の製作中にあつては人を取り圍む自然は重に人の背景としてのみ役立たれた。然し彼の徹視はこれだけでは彼を滿足させなかつた。彼の人は自然に融け合つて行つた。而して遂に人は自然の中に沒入してしまつた。彼の畫幅に在るものは、人物でもなく風景でもない。唯彼の異常な天稟を通して見極められた自然がある許りとなつた。ドーミエとクルベーとが人物に徹底した間に、又ルーソーとコローとが風景に浸滲した間に、ミレーは人間と自然との有機的な融合を成就した。ミレーの畫は階段的に進歩して行つた。かくして彼の名作は殆んど毎年その實績を示した。一八五〇年の「種播く人」から始まつて、「縫物する女」、「ルッとボアツ」、「刈手」、「バルビゾンの牧羊者」が出、一八五五年には「接木」、一八五七年には「落穗拾ひ」、「アンジェラス」、一八五九年には「木樵と死」、一八六〇年には「トピ」、「毛刈り」、「子等に哺食する婦」、一八六一年には「馬鈴薯播種」、一八六三年には「鍬に倚れる男」、「夕暮羊を伴ひ歸る牧者」、一八六四年には「女牧者」、一八六五年にはトーマス家の壁畫及び「グレビエの村はづれ」、一八六九年には「針仕事」、一八七〇年には「十一月」、「乳酪造り」、「絲績ぎ」、「屠り豚」、一八七四年には「春」、「收穫」などが出で、その死後の畫室には「グルシーの海岸」や「グレビエの寺」が殘つて居た。彼は亦稀有な鉛筆畫の妙手であつたから、寶玉のやうな小さな作品が非常な數を以てこの外に製作されて居る。

かくしてミレーは青年を味方に持つた狹い然し根強い賞讃と、大多數の批評家と欽定畫家によつて放たれる底意地惡い罵詈との間に立つて淋しい自己の道を拓いて進んだ。勝利は遂に徐ろに來た。署名のないミレーの畫を見て賞讃の嘆聲を發したミレーの先師デラロッシはその作者の名を聞くに及んで、「彼は强き人たり」と首肯せざるを得なかつた。一八六七年の萬國博覽會はバルビゾン畫派に取つてのオーターローであつたが、ミレー、ルーソー等は動かすべからざる勝利者となつた。彼等の畫は僻見と嫉妬とに煩はされない萬民の眼に始めて內在の光を放つた。美術局長がレジオン・ド・ノール章を受くべき作者の名を擧げてミレーに來ると參列者の拍手喝采は嵐の如く渦卷き起り、局長は氣を顚倒して後を讀み續ける事が出來ない程だつた。ミレーはこの間にあつてサンシエにかう書き送つた。「私の望む凡ては、私の仕事によつて生活し子供等を養育する事が出來、而して自分が感受した印象の凡てを描いて、それが私の熱愛する民衆の同情を受けて居るのを感ずる、それだけだ、それだけが欲しいものだ。さうすれば私は人生が齎し得る凡てのものを得た事になる。」彼の生活もこの頃からやうやく順境に向つた。「彼の忠實な伴侶で同時にその家庭の守護天使」と呼ばれた妻の大病も回復し、息子のフランソアも畫家となり、二人の娘は若い妻となつた。然し同時にミレーの健康は衰へ始めた。彼は一八五一年と五三年に引き續いて最愛の祖母と母とを失ひ、一八六七年には眞實の友なるルーソーを失はなければならなかつた。その翌々年にはルーソーの氣狂ひの妻がミレーの手厚い介抱にも係はらず良人の後を追つた。その間に普佛の間に（一八七〇年）戰爭が起つた。プロシャの兵は勝ちに乘じて國境に攻め入つた。セダンの塞が陷る數日前ミレー一家はこの忌はしい動亂を避けて暫く故鄕に歸つた。その間に共產主義者の動亂が巴里に起り、ミレーは思ひもかけずクルベーを統領とする藝術家團體の首謀者に推された。ミレーはかゝる暴徒の群れに自分を見出す事を極端に厭つて膠なく斷つた。彼の頭はかゝる亂雜な故國の出來事の爲めに痛み亂れた。然しかゝる苦悶も藝術に對する彼

の愛をもぎ取る事は出來なかつた。而して生涯を強く活きた天才の晩年にのみ見得る嚴かな落着きと深い感情とを以て故鄕の風景を描き續けた。シルベスターはその海岸の畫の一つを見て思はず叫んで云ふ、「ミレーはその生涯の絕頂に達した。而して最も平凡な單純なものゝ中に崇美を見出す事を我々に敎へる。……これは一つの作畫ではない、魂の迸りだ。これは空間だ、光だ、而して靈だ。これは畫かれたる『詩篇』だ」。

一八七一年にミレーは再びバルビゾンに歸つた。七〇年にサロンの審査員にミレーを推薦した政府は七四年にパンテオンの壁畫を命じた。ミレーは喜んでこの承認に報いようとした。而してその習作に取りかゝつたがもう遲かつた。その年の夏に突然喀血して十二月初めから發熱の爲め幾度か昏睡狀態に陷るやうになつた。一八七五年の正月の或る寒い日にミレーは突然耳近くで銃聲を聞いた。驚いてその故を尋ねた彼は、村に近づいた一匹の鹿が彈に中つて隣家の庭に逃げ込んで死んだと云ふ事を聞かされた。「これは凶徵だ」と彼はかすかに云つた。數日の後、二十日の朝早く、彼は靜かに聖者のやうな死を死んだ。畫室に殘された「グレビュの寺」は淺い春色を籠めたまゝ復活の希望のやうに畫架の上に置かれて居た。彼はルーソーの傍に葬られた。

四

ミレー自身の言葉から。

「私は何んでも強いものを好む。」

「ミケランジェロとプッサンに次いで私は最も原始派の畫家を愛する。小兒のやうに單純な主題、無意識な表現、理窟は云はないで生命に充ち溢れた人物、叫ばずつぶやかず強く忍從する人物、敢てその意味を尋ねようともせずに人生の掟を確守する人物、それ等が非常に好きだ。」

「見る事は描く事だ。」

「色彩の調和は或る種類の色の併置よりも明暗の正しい平均によつて成就される。そこには完全な平衡がなくてはならぬ。」

「私の綱領は勞働である。是は人類の自然の條件だ。『汝の汗によつてパンを喰はざる可からず』とは遠い世紀の昔に云はれた言葉だ。人間の運命は不變だ。又變化させる事が出來ない。」

「美は顏の形や色彩で表はされるものではない。美は形體の全體の效果と、その場合々々に剴切な動作とによつて表はれるのだ。君の所謂可愛らしい百姓娘は、粗朶を集める事も、八月の陽の下に落穗を拾ふ事も、井戸から水を汲み上げる事も出來ないだらう。私が一人の母を描くとすれば、その赤兒の上に投げる顏付だけで彼女を美化しようと試みるだらう。美は表現にあるのだ。」

「人は些細のものをして崇高を表現せしめねばならぬ。そこに眞實の力が潜む。」

「彼等は私を强ひて彼等に服從し客間藝術を作らせ得ると思つて居るが、それは間違ひだ。私は百姓に生れた。而して百姓で死ぬのだ。私は自分の感じたものを表現し、私が自分で見たものを描く。木靴の丈けも後ろには引かないで立場を守つて見せる。必要があれば私も亦自分の名譽の爲めにはどれ程戰へるかを御覽に入れよう。」

「寒くつて冬のやうだつた。夜は冷え切つた。昨日の朝は氷が張つて地の上はかん〳〵に堅くなつた。君の庭の樹には花の咲いたのがあつたが可哀さうだつた。」

「(夕陽を見て)あすこに眞理がある。その爲めにお互に戰はう。」

「『水を汲む女』で私が現はさうとしたのは水搬人でもなければ下婢でもない。單に一人の婦人が自分の家庭の爲めに、夫や子等のソップを作る爲めに水を汲むのを表はさうとするのだ。私は彼女が一桶の水より重くも輕くも

ないものを運んで居るのを描かうとした。力を出すために歪めた顏付と、日の光にひそめた眼付で觀者はその顏に素朴な親切さを認むべき筈だ。私は一種の怖れを以てセンチメンタルに近づく凡てのものを避けたどころか、外の臺所仕事と同樣にこの仕事も彼女の日々の行事で生活の習はしに過ぎないと思つて居る事を示さうとした。私は又觀者が活々した古風な井戸の姿によつて彼女が水を汲む前に何代もの人々がこゝに來たかを想はさうとした。」

「私は物象が偶然に取り集められたのでもなく、畫にされる爲めに持ち出されたのでもなく、强い已み難い因緣によつて配列して居るのを觀者に感ぜしめるやうに描きたい。私の表現する人物は恰もその場所に從屬し彼等のある以外のものであるのは思ひもよらぬ事であるやうに描きたい。……私は必要なだけの凡てのものを强く且つ完全に描き出したい……」

「(ルーソーの家に居た畫家ヴァラルヂの自殺に遇つて)この慴懼すべき最後の樣は私の眼を離れない。彼の苦悶の程を想像して見給へ。……その晩も眠れなかつたので彼は自殺の決心をしたのだ。彼は食堂に行つてルーソー夫人の鋏を取つた。而して寢臺の側に突つ立つたまゝ力が阻みきるまで滅多突きに胸を突いて、倒れる拍子に小卓に顏をぶつけ床に膝をついた事は、鼻と膝頭の擦疵で察する事が出來る。その騷ぎで蠟燭が倒れたが幸にも落ちる間に消えた。この不幸な男が眞暗な中をのたうち廻つて、流れ溜つた血に滑つてはまろび滑つてはまろびしながら、漸くの事で寢臺まで辿りついたその苦悶の樣を想像して見給へ。この恐ろしい苦悶が眞暗な中で行はれた事を想像して見給へ。寢臺の上で彼がどれ程藻搔いた事だつたらうかはそこいら中のものに生々しく印せられて居た。若し彼が自殺する前に、夜明と共に現はれ出たこの酷たらしい光景を逆視する事が出來たら、屹度思ひ止つたに相違ない程だ。家が燒けなかつたのは奇蹟のやうだ。蠟燭は始め敷布の上に落ちて床の上を轉がり、やがて

窓掛の下に行つて止つたのだ。若し火事でも出たらルーソーに取つて何たる事が出來したらう。その室の眞上にあつた畫室は固より助かりやうがない。考へて見給へ、ルーソーの油繪と素描習作とが一炬に燒けてしまふ事を。彼が手をつけたもの成就したものがその不在中に全部破壞されて、一握の灰ばかりが殘ると云ふ事を考へて見給へ。私はまだ上の空だ。……私はまだこんな感じを經驗した事がない。自殺の雰圍氣の中に呼吸するのがこんな苦しいものとは知らなかつた。私は惡夢に襲はれ通しだ。」

「人々はカイユ寺院の周圍の墓場を壞(こは)して祭日の舞踏の場所にしようとして居る。それは君も知つてる通り、過ぎし日を思ひ起させる可憐な稀れなる場所の一つだ。……白痴のやうに馬鹿で心から無情なカイユの住民は、己れの血族の骨で自分の土地を肥やさうとして居る。富みさへすればどの方面から來る金でも平氣なのだ。骨肉で成り立つた地を競賣する！　この賤民どもは自分の家族の骨を畑に播いて馬鈴薯でも肥やす積りで居るのだ。何と云ふ罰あたりな畜生つぽい人間の手だらう。施すべき策があるならすぐ何んとかしてくれないか。彼奴等の心の卑陋さと來たら止度(とめど)も辨(わきま)へもない。」

「何しろ大つぴらに表現したい事を表現して見せるのは溜飲の下る事だ。」

「（『鍬に倚れる男』の評に對して）彼は私の發明ではない。この表現——大地の叫喚——は昔から聞こえてゐるのだ。思ふにわが批評家先生達は高等な趣味と智能とを持つた方々だらう。が、私は先生達の皮を被つて濟ます譯には行かない。そして私は生來畑の外には何んにも知らないのだから、そこで働いた時見たり感じたりした事を忠實に申出ようとする外はないのだ。私以上に出來る人々が出たら、私はその人達を眞に幸福な人だと思ふ。」

「（テオドル・ペロッケに申し送つて）藝術は言語だ。そして言語は觀念の表現の爲めに設けられたものだと云ふ事を信ずる極めて少數な評論家の君は一人だ。——何處かで讀んだ覺えがあるが、『藝術以上に才能を示す藝術家は

化して居る』……」

禍ひなるかな』だ。……モンテーヌが見事に云つてのけたやうに『藝術を自然化する代りに、彼等は自然を技巧化して居る』……」

「如何なるものもそれ自身の時と處に置かれて美でないものはない。反對に、正しい處と時とから離れて美しいものは一つもない。本質を弱めるやうな事は斷然してはならない。アポロはアポロ、ソクラテスはソクラテスだ。二者を混合しようとすれば出來上らぬ中に兩者とも無くなつてしまふだらう。眞直な樹と曲つた樹とどつちが美しいのだ。……その處を得た方が美しいのだ。だから私は結論する、美は適合だ。」

「絶對の美と云ふやうな事は最も馬鹿々々しい妄想の一つだ。そんな事を思案する人は恐らくは自然の物象中に美を感受する事が出來ないからに違ひない。彼等は過去の考察に忙殺されてそれ等の要求の凡てを滿たすものは自然だと云ふ事を閑却して居る。氣の毒なものだ。彼等は詩人でない癖に詩的なのだ……」

「天氣は陰氣で雨だ。空は暗く雲は低い。然しかう云ふ天氣の方が私は日光より好きだ。凡てのものが悒鬱な豐富な色彩を取る。而して視力を和げ、腦を鎭める。」

「藝術家が自然から得た印象のみに直接に單純に倚賴しなくなる瞬間に藝術は墮落する。その時巧者な仕上げが自然を追ひのけて頽廢が始まる。アンチウスの比喩譚にアンチウスの足が地から離れると力を失ひ地に着くと力を恢復するやうに、人は自然から眼を背けたが最後、力から離れてしまふ。……」

「人は他人に觸れる事が出來る爲めには己れが觸れられる事を必要とする。」

「馳走が代る度に新しい皿が出て、葡萄酒も何もかも最上等だつた。然し白狀すると私はこんな御馳走には嬉しがるよりもまごつく方だ。この次にはどうすればいゝかと横眼で隣の仕方を盜見しなければならないんだ。」

「私は海を見渡す『村はづれ』の畫を描いて居る。古なじみの楡は風の爲めにくねり出した。私はこの樹が、私

の思想の中に見得るやうに、空間に際立つて現はれるやうにしたいとどれ程願ふだらう。あゝ私の少年の時夢想に滿たされて見えた廣茫たる地平線、お前の力をどうかして人々に感じさす事は出來ないだらうか。……」

「私は鷺鳥の群れを描きかけて居る。直き描き上げなければならないが、私としてはうんと時間をかけて仕上げたいのだ。私は鷺鳥共の啼き聲が空にひゞき渡るやうにして見たい。あゝ、生命、生命、全體の生命！」

「あの美しい天鵞絨(ビロード)のやうな放牧地。牝牛達が畫を描き得ないと云ふのは殘念な事だ。」

「(最後の故郷訪問の時)私が生れ、父母が生き且つ死んだ故屋に一個の旅客として歸つて見ると深い哀しい感情にひたり切る。その哀れな家を見た時私の胸は裂けようとした。何んと云ふ感慨を喚(よ)び起す事よ。嘗て働いた事のある畑にも私は行つて見た。其處で私と一緒に働いた人達は何處に行つてしまつたんだ。私と一緒に渺茫たる海を眺めた眼は何處に行つてしまつたんだ。今日その畑は他人に屬して居る。而してその人は私に對して、貴樣はそこに何をして居るのだと詰問もし得るし、しようと思へば私をそこから追ひ拂ふ事も出來るのだ。」

「藝術家は偉大な崇高な目的を有(も)たねばならぬと云ふ事には君も同意してくれるだらう。それなしには彼はどうして彼自身さへ夢想もし得ない目的に達する道を開く事が出來ようぞ。嗅覺なき犬はどうして獲物の跡を追ふ事が出來ようぞ。だから藝術家を判斷するにはその人の目的の性質とその目的を達する態度によらなければならない。……」

「(病歿の前年)私の肉體は益ゝ衰へても私の心臟は冷たくなつて行くやうな事はない。」

五

生活(ライフ)と文化、この二つの言葉は異語同意(シノニム)である如く現代は云ふ。若しくはさういふ必要のない程に自明な事實

として、詮議を重ねようとしない。經濟學は原則として、牧畜から農業、農業から工藝、工藝から商業といふやうに文化發達の階梯を作り、新しいもの程高度の文化を代表するものゝ如く斷じてゐる。工業と商業とが造り立てた都會は、從つて現代文化の中心であらねばならぬと推論する。人類生活の精華と要素とは悉皆都會と云ふ小地積に集められた觀がある。都會は國の中にあつて一つの國である迄になつた。地方行政から全く獨立したければ成り立つて行けない程特異な生活が都會の中に醱酵した。然し都會的生活と人類大多數の生活との間には何んといふ廣い溝が橫たへられてゐるのだらう。人類の大多數は都會的文化に對して羨望の眼を向けるか、呪詛の聲を放つか、無干涉な態度に出る外を知らないでゐる。カーライルの文章を少し綿密に讀んだ人は誰でも氣付く事であるが彼は (civilization) といふ字を極端に忌み嫌つてゐた。而して世の人が文化といふ字で現はさうとする所には進步(progress) といふ字を用ゐてゐる。偶々彼が文化なる語彙に據る場合は、大方一種の反語又は皮肉としてその字を使つてゐる。カアペンターは文化とは人類が或る場合に犯される疫病の一種で、しかもその疫病に打ち勝ち若しくは完全に癒えた場合は、歷史上皆無だとさへ云つてゐる。普通に考へられてゐる所謂文化の酵母なる都會生活を、我々は單に在るがまゝの望ましい狀態として考ふべきではないのだ。我々はもう一度この種の生活を檢査して見る必要に逼られてゐるのだ。都會的文化の功過を秤量し直したら、我々は案外な恐るべき結果に驚くだらう。何故に文化はかく生活を出し拔いて先き走りをしてしまつたのだらう。

それは人間の中に潛むイヴがアダムを出し拔いたからだ。彼女は好奇心と、移り氣と、的のない向上心（或る時はそれが downward aspiration であり得る）と、煽動力と、美裝した肉性と、健忘性との持主だ。彼女自身の力は皆無だ。然し彼女がアダムとの交涉を繫ぐ時には恐るべき力の多產者となる。アダムを樂園から逐ひ出したのも彼女だ。アゼンスに寡頭政治の濫觴を作つたのも彼女だ。アレキサンダー大王の心をとろかしたのも彼女だ。

ヘロデ王をして洗禮のヨハネを馘らしたのも彼女だ。羅馬からケトーとスパルタカスを放逐してシーザーと情を通じたのも彼女だ。かくて彼女は帝國主義と中央集權とを生んだ。彼女の多産は、中世紀によつて阻まれたゞけに、近代になつてから更に激しさを增した。その頭髮は異國の膏油を要求し、その口は他鄕の珍味を求め、その肉は絹と羊毛とを慕ひ、その眼は絢爛な色彩を、その耳は淫蕩な樂聲を、その頭は廻りくどい理窟を欲した。彼女はこの底止する所を知らない欲求の遂行を、人間の中に潛む主人にして同時に奴隷なるアダムに命じたのだ。醜いなりにも尊い魂の持主であり、力の源でありながら、魯鈍で、偏固で、しぶとい忍耐力によつて慣らされたアダムは「汝の額の汗によつてパンを喰へ」と命じた神の宣告を今も守つて、永久に地から離れる事が出來ないでゐる癖に、悲しむべき彼が運命的の弱點として、氣狂ひになる程イヴに累はされながら、彼女との惡緣を斷ち切る事が出來ないばかりか、イヴなしには地上生活の淋しさを紛らす術を知らないでゐるのだ。いか程イヴに逆用せられて、自分の道を踏み迷ふばかりでなく、イヴをすらあらぬ方に走り行かせながら、二人が互に倚り合つて正しく生きる道を尋ね出しかねてゐるのだ。彼は醜いカリバンのやうに、何を求めていゝかを知らないで、求めてならないものを求めながら呻いてゐる。イヴはアダムを易々と二つの指の間に摘み上げてゐる。而してアダムの頭の上で輕々と千態萬樣の舞踊ををどる。

アダムは水だ。而してイヴは波だ。アダムは幹だ。而してイヴは花だ。生活と文化とはかくして人生の上に矛盾した回旋を彫り付けて行く。

田園は神が造り、都會は惡魔が造つたと誰かゞ云つた。然しさうではない。事實は人間の中に潛むアダムが、卽ち男が田園を造つたのだ。而してイヴが、卽ち女が都會を造つたのだ。

女が都會に對する興味を投げ捨てゝ見ろ。男子はすぐさま都會生活の苦しい不自然から遁れ出てしまふだら

う。雄の孔雀が雌の孔雀の前に、苦しい思ひをして尾羽を擴げて見せるやうに、男は都會で女の機嫌を取らうとしてゐるのだ。

かくて都會的生活は近代文化の具體的表現になつた。

かく移り氣なイヴが生み出した文化の姿はそれ故本質的な何者もない。刻々變化する萬樣の姿態のどれを眞の文化だと指し示すべきであるかと詮議をして見る時、誰がそこに的確な答解を捜出し得よう。又その文化の何れを人間本來の生活の樣式と定め得よう。三代續けて都會人同士が結婚すれば、その血統は絕えるといはれてゐる。人間全體の生活とは全然沒交渉な藝術と道德とが釀されてゐる。何等かの意味で片輪ばかりな人間が寄り集まつてゐる、そんなものを都會的生活の本質と名づけなければならないのか。それは明かに人間全體の生活に對する侮蔑であらねばならぬ。

見よ人間本來の生活は文化を一皮めくつたその下に潜んでゐるのだ。それは永劫に亙つて變る事のない鈍い暗い生命の流れだ。メデュサの顏を思はせる樣な冷やかな酷さがその流れを滿たしてゐる。多くの人はそこに足を踏み入れるのを非常に躊躇せねばならぬ程の氣味惡さが潜んでゐる。然しその生命に喰ひ入る勇氣さへあれば、喰ひ入れば喰ひ入る程人類に對する個性の聯絡は緊迫して、そこに始めて人生の普遍と特性と本質とが見出されるに至るであらう。彼はその生涯の熱意と愛慾とを傾け盡して、これらの言葉に生きた表現を與へる爲めに働いたのだ。ミレーは普遍を typical で、特性を character で、本質を nature といふ言葉で云ひ現はしてゐる。ミレーは農人であつたが故に、農人で終つたのだと云つてしまつたのでは餘りに簡單だ。彼は都會的文化には、耽溺すべき凡てのものはあつても、徹底すべき何物もない事を嚴しく體驗したのだ。醉つた眼には色々なものが見え、覺めた眼には何物も見えない。さうした不思議な迷宮が都會的文化である事を見拔いたのだ。彼は凡ての誠

實な人が求めるやうに、動かない足の踏み立て場を求めた。而してそれを原始的だと稱せられる農民の生活の中に探り得たのだ。彼は決然として唯獨り、寂しい道を田園に、卽ち生活の中核にまで歸つて行つた。そこに彼を待ち設けてゐたものは、勞役と、苦悶と、永劫に亙る「大地の叫喚」とであつた。渝る事なき悲慘な人生の姿が、眞向から彼の心を鞭つた。然しミレーは文化と云ふ色眼鏡で當面の苦痛から逃れようとする卑怯はしなかつた。彼は更にその奧に進み入つた。而して生活といふものゝどん底に、寬大と、勤勞と、平和と、resignation と、愛の根とを見出したのだ。彼の藝術はこの深みから生れ出る。彼がミケランジェロを理解し、ヴァージルと默契し、ダンテに同感し、バーンスを賞讚した理由は明白だ。彼等は等しく地獄を忘れようとはしなかつたからだ。地獄を突きぬけようとしたからだ。彼等は等しくイヴの奴隸であるのに滿足する事なく、その正しき主人たるべき自覺に生きようとした人たちだからである。

ミレーの「種播く人」を見よ。「鍬に倚れる男」を見よ。「葡萄園の中の憩ひ」を見よ。「屠り豚」を見よ。それは見るに慘ましい悲劇的な生活の姿だ。然しそれが僞る事の出來ない眞實であるのを如何しよう。人生にはさういふ礎が据ゑられてゐる。然し同時に彼の「接木」を見よ。「アンジェラス」を見よ、「春」を見よ。そこには淚の滲み出るやうな希望と慰藉と歡喜とがある。然しそれが僞る事の出來ない眞實であるのを如何しよう。人生にはさういふ機能が與へられてゐるのだ。物に徹する眼を開いて、かゝる深さにまで人生を見極めた人は祝福さるべきである。神が祝福する前に、我等人間は心より彼を祝福すべきではないか。

六

「人生とは自己と自然との調節を云ふのだ」とオイケンは云つてゐる。第十八世紀の佛國藝術は自己にも立脚せ

ず、自然にも立脚しないで、兩者の交渉の上に成り立つ假象にばかり立脚してゐた。言葉を換へていへば、生活の殘滓を畫筆にひたして畫布を塗りつぶした。然しかゝる後天的な藝術の對象は人を倦み疲らして、やがて自然がその對象となる時が來た。ジャン・ジャック・ルーソーを促した同じ精神が、又畫壇を動かしたのだ。「如何なる自然の中にも美を認め得ないものは、その人の心に缺陷のあることを示す」とミレーをして叫ばしめたものは、亦實にこの機運の仕業だつた。第十九世紀の藝術は要するにこの叫喚の多樣な反響に過ぎない。印象派の勃興も、ラファエル前派の崛起も、寫實派の運動も皆この機運によつて哺まれ、この機運を助成し若しくは完成せんが爲めの努力だつた。

然しながらこの機運は又變らねばならなかつた。自然を征服する積りでゐながら、却つて自然に征服せられつつ行く人類の悲運を早くも見て取つたスチルネルやニイチエが、自然に沒入して存在を失はうとした自己を引き戻して、その袂の塵を拂つた時、畫壇にも早く自己に目覺めたセザンヌやゴッホがゐた。彼等の努力は一八三〇年に旗擧げして歐洲の美術界を席捲した浪漫派のそれにも讓らない大きな革命だつた。而してその辛勞から生み出された效果は藝壇に特異な色彩を招來した。彼等の畫の前には、自然派の畫はおしなべて云ふと影のやうに厚味なく見える。自然の偉大、多能、變化に比して人間のする單なる摸倣は如何に憐れむべく力なきものであるよ。人間の力は何んといつても人間が人間自身に主となる時にのみ發揮されるのだ。かくて主觀派の藝術は力の福音となつて生活の脈搏を強くした。

然し自己の確立といふ事は古來幾度か企てられて、環境の壓迫に打ち摧かれた。殊に現代を支配する文化なるものは、嚴密な意味で自己の確立とは背馳したものである事を知らねばならぬ。機械的な國家主義と、その奴隷になり終せた宗教、科學、哲學に圍繞された個性がその獨立を恢復するのは非常な難事であらねばならぬ。その結

果として自己が強ひてその環境と渾一するために一種の哲學を生み出し、一種の本地垂跡說を持ち出さなければならぬやうな運命にある。未來派の藝術と稱せられるものゝ如きは、一旦開放された個性が新しい道程に上る代りに、後ろを向いて現代の物質生活に投入しようとする、その根柢に於て妥協的な運動であると見るのが無理だらうか。又傳統主義の藝術といはれるものゝ如きは、獨立した個性の足場が極めて不安定であるのを懸念する結果、過去の傳統一切を攝取し變化して當面の急を救はうとする主知的な努力と考へるのが附會の論であらうか。自己の確立が主張せられて、稍ゝ眼鼻がつき出すと、すぐそこには反動の影を見るのである。自己の高調によつて力の自覺に達した現代人は、環境が偶ゝ中央集權、物質崇拜の氣勢にあるのに投合して、環境の現狀を助長さすやうに自己を振り向けて行かうとしてゐる。この妥協的な氣運は詩を生まないで學說と哲學とを生むに違ひない。何故ならば、生命の充溢は、即ち詩の誕生は、いつでも妥協を忌み惡む衝動を伴つて現はれるもので、妥協の成り立つ所には、もつと靜學的な傳說の構出を結果すべき運命にあるからである。かくて我々の時代にも、自然と自己との交涉の上に成り立つ傳說のみが、藝術の對象となつた第十八世紀の繰り返しが芽を出さうとし始めてゐる。

第一は自然だ。第二は自己だ。第三は二者交涉の結果即ち傳說だ。この三つの各ゝを標準にとつて藝術を測量するのは無益ではない。或る藝術家は自然の前に赤子程の力も有つてをらぬ。又或る藝術家は自己の前に塵の如く無價値だ。又或る藝術家は傳說の前に泡の如く消え失せる。而して生活のどん底に徹して、輕々しく表面に浮び出ぬ藝術家のみが、この三つの試練の中から無疵で躍り上がる。

假りにミレーを立たして見よう。前にも云つたやうに、彼は自然主義勃興の魁をした藝術家だつた。彼の力は自然と觸れる所にのみ湧くと力を極めて主張したのは實に彼だつた。誰も彼の作品が自然に恐ろしく肉迫してゐ

る事を拒むものはない。彼は明らかに自然に捧誓した殉教者であつた。然しそれであるが故に彼は全く自己を沒却してしまつたか。それは明らかに否といふ言葉で答へられねばならぬ。天才は、即ち自己を根本的に知り拔いた人は、自己を表現するのに唯一つの道を有するばかりだ。而してその道は彼のみが有するものだ。彼の自己はクルベーやドーミエなどと共に特異だ。彼は自己の個性に從つて明確に自然を切り取つてゐる。自然には十分の自由を保障しながら、切り取つてゐる。一體をいふと自然をして自然を語らしめるといふ事は、極く明白な內容を持つた命題のやうに見えるかも知れないが、僅かばかりの省察はその意味の極めて空漠なものであるのを知らしめるだらう。自然が自然を人に語り聞かせるには、人を通して語る外はないのだ。自然はどうしても先づ人の言葉に飜譯されなければならないのだ。その昔神の意志が或る特異な人間の口を藉りて神託としてさゝやかれたやうに、自然も亦人に物言はせなければ自分を表現する事が出來ないのだ。自然主義に溺れ切つた第十九世紀の人々は動もすればこの明白な事實を無視してかゝつた。而して自分の魂を淸め擴める代りに、出來得る限り自分を縮小する事を心懸けた。その結果自然は力强くその人に乘り移つたらうか。全く反對である。自然の姿はその人を透して薄れて行つた。而して自然はその立體性を失つて平べつたい奧行のない畫の樣に描き出される仕儀になつた。ミレーは自然以外に藝術の求源を置かなかつたけれども、その天才の力强さを以て、その當時の迷信には陷らなかつたのだ。彼は人間が神でない事を知り拔いてゐた。神でない以上は自然全體の創造を企てる事が無益であるばかりでなく、愚策であるばかりでなく、瀆聖である事を感じた。彼は謙遜に自然を自己の摑み得る範圍にまで切り狹めた。そしてそれだけの部分を見拔くために、自己を堅固に正當に公平に築き上げた。ミレーの表現はだから自然全體ではない。自然の一角に過ぎない。然しながら表現された自然の一角は、正しい人間性の烙印を有つた深い眞實な自然であつて、それから自然全體の規模を髣髴させるだけの底力を蓄へてゐる。換言すれば

ミレーの藝術は的確な表現の外に實質性の豊かな深い暗示によつて隈取られてゐる。ミレーの作品は不思議な合金術だ。どの畫もミレーの肖像だ。而して同時に自然だ。彼の一枚の小スケッチも彼の全生涯を恐ろしい明白さを以て語つてゐる。しかも彼はこの結果によつて自然の一點一畫をもへし曲げてはゐない。

ミレーが傳說の前に立つ時にも、彼には强い自信があり得る。彼の傳說は時代の作り出したそれではなく、人生の作り出したそれだからである。文化を底邊として自分を築き上げようとする人は禍ひである。その人は自然に耳を傾けず、人を正しく見極めず、自然と人との噂話に耳を傾けてばかりゐる人だからである。「日の暮れにアンジェラスを鳴らさないやうな時世が來たら、ミレーのアンジェラスの畫は何等の興味をも引かぬものとなるであらう」と評した人があるさうだ。さうだ、實際傳說といふ背景をその人の作物から除き去つてしまつたら、紙屑と同樣な價値より殘らない作品は澤山あり得る事だ。然しミレーはさういふ運命に遇ふ爲めには少し深過ぎる。アンジェラスの鳴らなくなる時の絕對にないのをどうしよう。寺院はこぼたれる時が來るかも知れない。釣鐘は鎔かされる時が來るかも知れない。然し晩鐘といふ題によつて象徵され暗示された大自然のアンジェラス――若く睦まじく勇ましい夫婦が、一日を顳顬から血の滲み出るまで働きぬいた夕暮に、靜かな空に沈んで行く夕日を感謝と滿足とを以て眺めやる瞬間に、二人の心の中に思はずしも湧き起る祈念と相愛とのアンジェラスは、永久に人の心から鳴りやまぬであらう。ミレーの傳說はいつでも輕い畫面の象徵を透して根柢のペーソスにまで滲み通つてゐるからだ。前にもいつたやうに、彼は文化の陶醉者ではなく、實に生活の捧誓者であつたからだ。而して永續的であり本質的であるものゝ上にのみその哲學を築いてゐたからだ。如何なる時代が來ても、人は彼の畫の中に自己の投影を發見しない譯には行かない。

若しデラロッシの前に自然を立たしたら、若しモネーの前に自己を立たしたら、而してダギッドの前に傳說を立

たしたら……。

大なる藝術家が凡ての時代を通して活きて行く事の出來る譯は、その人が人生の一番眞實な點に立脚してゐるからだ。自分の小さなひねくれた主觀を後生大事に守り立てゝ、それを唯一の懷小刀にして、自然が笑ふ時にもそれを澁い顏だと云ひ張つたり、自然が泣く時にもそれを笑ひ顏だとこぢつけたりする事なく、一番奥深い一番正しい自己の姿を謹んで保護する事によつて、自然と正しい愛によつて抱き合ひ、自然の泣く時に本當に苦しみ、自然の笑ふ時に本當に喜ぶ事が出來るからだ。人は虛僞にばかり住ひ續ける事は出來ない。彼は偶に一度づゝ眞實といふものに歸つて來る。而してその時、動く事なく眞實の上にしつかりと足を踏み立てた天才の姿を瞻仰する。眞實な地點の確立、自然と自己との徹底的な交涉、それは天才のみが成就し享樂し得る境涯だ。ミレーはそれを完成した――彼の誠實と熱愛と忍耐と勤勞とを以て、不遇と、貧窮と、病苦と死との恐ろしい地獄を經めぐつた後に。

七

ミレーの作品が人に與へる印象は音響だ。彼の畫の特色は、色彩よりも寧ろ線畫によつて成り立ちながら、彫刻を聯想させるよりも音樂を聯想させるのは不思議なやうな事實だ。そこには小歌がある、獨唱がある、合唱がある、合奏がある。「最初の一步」や「兒等を養へる婦」などは可憐な小歌の例だ。「種播く人」、「鍬に倚れる男」などは强烈な男性音のソロを聯想さす。「アンジェラス」や「グレビユの寺」は調和に入つた合唱と共に、細き伴奏の聲をさへ聞く事が出來る。「落穗拾ひ」も合唱の目的で作られたものに相違ないけれども、そこには稍ゝ調子の狂ひがあるやうだ。素晴らしいミレー獨得の合奏は「屠り豚」と「春」から溢れ出る。「屠り豚」は或はミ

レー自身が許したやうに戲曲といふ方が當つてゐるかも知れない。「春」では完全な諧調の中に、凡ての色と形とが美しい旋律を取つて震へてゐる。音樂といふ最高藝術の感覺にまで色と線とを積み上げて行くといふ事は、ミレーの藝術上の對象に對する至純な愛と洞察とを裏書きするものであらねばならぬ。彼はよく音響を畫の中に描き現はしたいと焦慮した。それは取りも直さず、彼の心の中に渦卷き起る樂聲を何等かの形に附與したいと焦慮した結果に過ぎない。灼熱は何時でも震動を伴つて起る。ミレーの心が自分の確實に占領し得た環境の中にあつて、美しく震動した事に、卽ち彼獨特の音律を組み立てた事に何んの不思議があらう。「見る事は描く事だ」とミレーは云つた。然し本當を云ふと彼の自然に對する感激は彼をして「見る事は奏でる事だ」と云はしむべきだつたかも知れない。しかもミレーは子供のやうな無邪氣と謙遜から、眼は見るものだとのみ思つて死んだ——彼の殘したエオリヤン・ハープは、今も主なきに美しく高く鳴り續けてゐるのに。

（一九一七年三月「新小說」所載）

惜しみなく愛は奪ふ

概念的に物を考へる事に慣らされた我等は、「愛」と云ふ重大な問題を考察する時にも、極く習俗的な概念に捕へられて、正當な本能からは全く對角線的にかけへだたつた結論を構出してゐる事があるのではないか。「惜しみなく與へ」とポーロの云つた言葉は愛する者の爲す所を的確に云ひ穿つた言葉だ。實際愛する者の行爲の第一の特徵は與へる事だ。放射する事だ。我等はこの現象から出發して、愛の本質を歸納しようとする。而して、直ちに愛とは與へる本能を云ふのであり、放射する勢力を云ふのであるとする。多くの人は、無省察にこの觀念を認めてゐる。世上一般の道德の基礎は、そこに据ゑられてゐる。利他主義の倫理の根據とする所のものはこの觀念に外ならない。從つて人間生活に於ける最も崇高な義務として犧牲獻身の德が高調される。而してこの觀念が利己主義の急所を衝くべき最も銳利な武器として考へられてゐる。

私の小さな愛の經驗は、然し、愛の本質を前のやうに考へる事を許さない。私の經驗する所によれば、愛とは與へる本能である代りに奪ふ本能だ。又放射する勢力である代りに吸引する勢力だ。

愛は心を支配する數多き神祕的な力の中でも一番興味深い神祕的な力である。その作用を不完全な言葉の助けを借りて他に傳へようとする試み程無謀に近い試みはない。私は能ふ限りあからさまな言葉を使つて、私の意味する所を表白しては見るが、そこに暈翳のつきまつはるのを如何する事も出來ないだらう。私は寧ろ言葉の周圍に漂ふ隈取りをも私の言葉と共に攝取して欲しく思ふ。

他の爲めにする行爲を利他主義と云ひ、己の爲めにする行爲を利己主義と云ふのなら、その用語は正當である。

然し倫理學の定義が示すやうに、他の爲めにせんとする衝動又は本能を利他主義と云ひ、己の爲めにせんとする衝動又は本能を利己主義と云ふのなら、その用語は正鵠を失してゐる。それは當然愛他主義、愛己主義と書き改められなければならないのだ。利する——それは結果であり行爲であり、愛する——それのみが原因であり動機であり得るからである。こゝにも旨く用語の上に本質と現象との錯誤の行はれてゐるのを我等は容易に察する事が出來るではないか。この本質と現象との混淆から愛に對する我等の理解は思はざる岐路に迷ひ込んで行くのだ。

私は己を愛してゐるか。私は躊躇なく然りと答へ得る。私は他を愛してゐるか。これに肯定を與へる爲めには私は或る條件と限度とを附する事を必要とする。私は到底己を愛する如くには他を愛してゐないと云はなければならない。それではまだ盡してゐない、切實に云ふと、私は己を愛し得るが故にのみ他を愛するのだ。それでもまだ盡してゐない。更に切實に云ふと他が己の中に攝取された時にのみ私は他を愛するのだ。然し己の中に攝取された他は、實はもう他ではない。己の一部だ、畢竟私は己を愛してゐるのだ。而して己のみをだ。

私はそれほどに己を愛する。それに聊かの虛飾もなく借誇もない。ありのまゝを告白してゐるのに過ぎない。然し私が私自身をどれ程深くどれ程よく愛してゐるかと省察して見ると、問題は自ら新たになる。私の考へる所が誤つて居ないなら、これまで一般に認められてゐた愛己主義なるものは主に功利的の立場からのみ見られてゐたのではないだらうか。卽ち生物學上の自己保存の原則からのみ算出されたものではないだらうか。「生物の發達の狀態を考察して見ると、愛己主義は常に愛他主義以上の力を以て働いて居る、それを認めない譯には行かない」と云つたスペンサーの言葉は何んと云つても愛己主義を主張する上の基調となつてはゐないだらうか。私もそれを認めないと云ふのではない。然しそこで滿足し切る事を私の本能は明らかに拒んでゐる。私の生活動向の中にはもつと深くもつとよく己を愛したい欲求が十二分に潛んでゐる事に氣付くのだ。私は自己の保存が保障された

のみでは飽き足りない。進んで自己を押し擴げ、自己を充實しようとし、而して休む時なくその願望に驅り立てられてゐる。

　アミイバが觸指を出して外物をかゝへこみ、やがてそれを自己の蛋白素中に同化するやうに、私は絶えず外界を愛で同化する事によつてのみ成長し充實する。外界に愛を投げ與へる事によつて成長し充實するのではない。例へば私が一羽の小鳥を愛するとする。私はそれに美しい籠と新鮮な草葉とやむ時なき愛撫とを與へるだらう。人はその現象を見て、私の愛の本質は與へる事によつてのみ成立つと推定しはしないだらうか。然しその推定は根柢的に謬つてゐる。私が小鳥を愛すれば愛するほど、小鳥はより多く私その者である。私にとつて小鳥はもう小鳥ではない。小鳥は私だ。私が小鳥を生きるのだ（Bird is myself, and live a bird）私は美しい籠と新鮮な草葉とやむ時なき愛撫とを外物に恵み與へた覺えはない。私はそれ等を私自身に與へてゐるのだ。私は小鳥とその所有物の凡てを外界から奪ひ取つたのだ。愛は與へる本能ではない。愛は掠奪する烈しい力だ。與へると見えるのは極く外面的な現象に過ぎない。

　かく己を愛する事によつて、私は外物を私の中に同化し、外物に愛せらるゝ事によつて私は外物の中に投入し、私と外物とは卷絹の經緯の如き關係になつて、そこに美しい紋樣がひとりでに織り出されるのだ。私の愛がより深くなりより善くなるに從つて、より善き外物はより深く私と交渉して來る。生活全體の實積は斯の如くして甫めて成就する。そこには犧牲もない、義務もない。飽滿と特權とが存するのみだ。

　他の爲めに自滅を敢てする現象をお前は認めないか。お前の愛己主義はそれを如何解釋する積りなのか。その場合にもお前は絶對愛他の現象のある事を否定しようとするのか。自己を滅してお前は何を自己に奪ひ取らうとするのか。さう或る者は私に問ひ詰めるかも知れない、功利的な立場から愛を解かうとする愛己主義者は、自己

保存の一變態と見るべき種族保存の本能なるものによつてこの難題に當らうとしてゐる。然しそれは愛他主義者を存分に滿足させないやうに、私をも滿足させる答へではない。私はもつと遠つた視角から見ようとしてゐる。

愛がその飽くなき掠奪の手を擴げる時の烈しさは、ありきたりに、なまやさしいものとのみ愛を考へ馴れた人の想像し得る所ではない。假初めの戀にも愛人の頰はこけるではないか。自己はその成長と充實とを促進する爲めに凡ての障碍を乘り越えて掠奪の力を振へと愛に嚴命する。愛は手近い所から事業を始めて、右往左往に戰利品を運び歸る。個性が强烈であればある程愛の活動も亦目ざましい。遂にある世界が――時間と空間をさへ或る程度に撥無する程の擴がりを持つた世界が――自己の中にしつかりと獻立される。其の世界の有つ擴充性が弱いはかない肉體をぶち壞すのだ。破裂させてしまふのだ。そこで難者の云ふ自滅とは畢竟何んだ、それは自己の亡失を謂ふのではない。肉體の破滅を伴ふ永遠な自己の完成をこそ指すのではないか。又功利主義者の云ふ樣に、それが人類なる種族の保存に資する所のあるのは疑を納れない。然しそれは全體の效果から見て何と云ふ小さな因子であるよ。

この事實を思ふにつけて毎でも私に深い感銘を與へるものは基督の短い地上生活とその死である。無學な漁夫と稅吏と娼婦とに圍繞された、人目に遠い、三十三年の生涯にあつて、彼は比類なく深く善い愛の所有者であり使役者であつた。彼が與へて與へてやまなかつた事實は、如何に自己の擴張の廣大なのに滿足し、その自己に與へる事を喜びとしたかを證據立てるものである。やがて彼が肉體的に滅びねばならぬ時が來た。彼は苦しんだ、それに何の不思議があらう。彼は愛の對象を、眼もて見、耳もて聞き、手もて觸れ得なくなるのを苦しんだにちがひない。又肉體の亡失そのものを苦しんだにちがひない。又彼の愛の對象が彼ほどに愛の力を理解し得ないのを苦しく思つたにちがひない。然し最も彼を苦しめたものは、彼の愛がその攝取の事業を完成したか否かを迷つ

た瞬間にあつたであらう。然し遂に最後の安心は來た。而して神々しくその肉體を脚の下に踏みにじつた。

彼の生涯の何處に犧牲があり義務があるのだらう。世の人は云ふ、基督はあらゆるものを犧牲に供し、救世主たるの義務の故に凡ての迫害と窮乏とを敢て堪へ忍んだ。だからお前達は基督の受難によつて罪からあがなはれたのだ。お前達も亦彼にならつて犧牲獻身の生活を送らなければならないと。私は私として彼の我等に遺した生活をかく考へる事はどうしても出來ない。基督は與へる事を苦痛とするやうな愛の貧者では斷じてない。基督は私の耳に囁いて云ふ、「基督の愛は世の凡ての高きもの、清きもの、美しきものを攝取し盡した。眼を開いて基督の所有の如何に豐富であるかを見るがいゝ。基督が與へ、施したと見える凡てのものは、實は凡て基督自身に與へ、施してゐたのだ。基督は何をも失はない。而して凡てのものを得た。この大歡喜をお前も亦味ふがいゝ。基督のお前に要求する所は唯この一事あるのみだ。お前は僞善者を知つてゐるか。自己に施しせず他に施しせるものを僞善者と云ふのだ。自己に同化しない外物に對して浪費するものを僞善者と云ふのだ。浪費の後の苦々しい after-taste を、强ひて笑ひにまぎらすその歪んだ顏付を見ろ。それが僞善の肖像だ」と。

愛が若し與へんとする本能であり放射するヱネルギーであるならば、世の統合は遠の昔に壞れてゐなければならない。放射は遠心力によつて支配され、遠心力は何時でも物々間の距離を遠からしむる事にのみ役立つたからである。これに反し相奪ふ力であるが故に、物々は互に相牽くばかりでなく、互に融合して同時に互に深まり高まるのだ。かゝる生活に於て貧しくされるものは愛せられざる者のみである。愛せずして與へようとするものは僞善者となり、愛せずして受けようとするものは物質に落ちる。

私は嘗て人間を知らうとして周圍を觀察し歷史を讀破した。自己を知らうとする時にさへ傳記と哲學との中を探し廻つた。然しそれが私に齎す結果は空虛な概念に過ぎなかつた。私はやがて態度を改めねばならなかつた。

而して自己を知らうとする時は勿論、人間を知らうとする場合にでも容捨なく自己を檢察して見た。而して、見よ、そこには生味の饒かな新しい世界が開展された。實生活の波瀾に乏しい、孤獨な道を踏んで來た私の中に、思ひもかけなかつた個性の多數を發見した時、私は恐れもし、驚きもした。私が眼を据ゑて憚りなく自己を見詰めれば見詰める程大きな眞實な諸相が明瞭に意識された。何だそれは。私は今にしてそれが何であるかを知る。それは私と私の祖先とが、愛によつて外界から自己の中に連れ込んで來た捕虜の大きな群れなのだ。勿論その中には私と先祖との下劣な愛によつて擒にされたものもある。高貴な愛によつて連れて來られたものもある、然し彼等の凡てが愛によつて捕へられ、愛によつて私の衷に育てられたものである事を誰が拒み得やう。

私は自己を愛する。而して自己を深くよく愛せねばならぬ。自己を愛する事が深く且つ善いのに從つて私は他から何を攝取せねばならぬかを明瞭にし得るだらう。愛する以上は憎まねばならぬ一面がある事を察する事が出來る。私は愛するものを攝取し憎むものを放擲する。然し私の自己はやがて鍛錬されたに違ひない。よく愛するものはよく憎む事を知つてゐると同時に、憎む事の如何に苦しいものであるかを痛感し得るものだ。私の自己が鍛錬されるに從つて憎んで放擲すべきものゝ數は減らされて行くだらう。如何なるものも愛の眼には、適當な視角からは、愛すべきものである事を知るだらう。而して凡てのものがあるべき配列をなして私の中に同化されるだらう。かくて私の中には一つの完き世界が新たに生れ出るだらう。この大歡喜に對して私は何物をも惜みなく投げ與へるだらう。然しそれが如何に高價なものであらうとも、その歡喜に比しては比較にならない程些少なものであるのを知つた時、況してや、投げ與へたと思つたその贈品すらも畢竟自己に還つて來るものであるのを知つた時、第三者の眼に私の生活が犧牲と見え獻身と見えても、私自身に取つてはそれが獲得であり成長であるのを感じた時、私は徹底した人生の肯定者でないでゐられやうか。

更に殘された問題は、私の心の中に烈しく働く愛なる力が大きな神祕な力から分化されたものであるか如何かと云ふ事である。私はまだこの謎を開くべき鍵を確に握つてゐない。神の愛が私の中にも働いてゐるのか。假りにさうだとしても、私は神の愛と私のそれとを異質のものと考へる事は出來ない。神は與へる力ではない奪ふ力だ。神は其の力のある分配を私に投げ與へるのではない、其の力の全體の中に私を攝取しようとするのだ。さう感ずる事が私には遙かに合理的である。私は超自然力を感知してゐる人に此の大膽に近い暗示を提供して私の小さな感想を終る。

（一九一七、五月十五日）
（同　年六月、「新潮」所載）

「平凡人の手紙」に就いて

所で平凡人は、前田氏が時事新報に書かれた批評を言葉通りに覺えてゐなかつたから、(表現はこの通りではないのだよ。然し意味はさうだつた)と斷つて、前田氏が「出て來る人間は、皆それ〴〵に特色づけられてゐましたが、さてどれを見ても價値のありさうな者は一人もありません。少くとも友達にしてつきあへさうな者は一人もありません。薄のろでなければ馬鹿か、でなければ嫌な奴か、どれを見ても何んといふ友達だらう、と嘆息されるやうな人達ばかりでした。併しそれが滔々たる人間の本體でないと誰に言へませう」と泡鳴氏の創作を批評したのを、平凡人は「作物には下劣な醜陋な人間ばかりが活躍してゐて、讀むのも厭になるさうだ。然し人生の實相はこんなもんでないと誰が云ひ得ようと論者は作者に強く同感を表してゐた」と云つてゐます。前田氏に從へば「滔滔たる人間の本體」と云ふ御自身の言葉と、「人生の實相」と云つた平凡人の言葉との間には非常な相異があるらしい。平凡人に代つて私が冷靜に考へて見るのに、「滔々たる人間」と云へば古今東西に亙つて見渡す限りの人間と考へて少しも差支ないと思ひますがどうですか。勿論かう云ふと前田氏は「それだから君は頭がいゝと云ふ評判を貰ふんだ。一寸考へても、釋迦や孔子やソクラテスがゐるぢやないか。滔々たる人間の中にそんな人を入れられるか入れられないか、それだけ考へれば解りさうなものだ」と云はれるだらう。然し前田氏があの句を書いてゐた時にそんな除外例などを頭に置いて居られたらうか。氏は無意識的にしろ一種或る思想に對する反抗的な態度で大まかに人間全體を腦裡に描いてはをられなかつたらうか。さうだとすれば平凡人が氏の考へ方を「人生」と云ふ字で現はした事に何んの不思議もない事だ。「本體」と「實相」とでは同じ意味を有ち得る上に「本體」と云

ふ方が餘程根本的な言葉だと云つていゝ。前田氏がその作物に「興味を覺えました」と云はれたに對して、平凡人が「讀むのもいやになるさうだ」と前田氏が云はれたやうに覺えてゐて、その通り書いたのは、平凡人が前田氏に對して平凡人なりの好意と同情とを持つてゐた事を示す外に何物をも示してゐない。而してそれが平凡人の性格を色濃く現はし得てゐると作者なる私は思ふ。

一歩を讓らう。想像を避けよう。而して前田氏が「滔々たる人間」と云ふ言葉で單に人間の大多數を指してゐるのだとしよう。かく一歩を讓つたその點でも平凡人と前田氏とは思想的に聯絡の緣を絕たれてゐるのだ。あの作全體がよく示すやうに平凡人には滔々たる人間は薄のろでなければ馬鹿か、でなければ嫌ひな奴か、少くとも友達にしてつきあへさうな者は一人もないとは思ひもよらない事なのだ。そんな事は平凡人にとつては「讀み返して見たゞけでも可なり恐ろしい氣がする」のだ。この眞暗な本體の露骨な描寫を興味を以て讀む――前田氏が堅く主張せられるこの事實は謙虛な心で訂正されるにあらずんば、取消す事はもう出來ない。私は今この事實を新聞紙上で書いてゐるが、前田氏は自らそれを堂々たる雜誌で公けにされたからだ。前田氏は自ら缺席裁判を拒んだからだ。前田氏が批評の筆を取る以上は全責任を以て筆を取られた筈だ。又用語の上に於ても私を叱正して下さつたやうに明確な適切な用語をして居られる筈だ。私は氏の言葉をもう一度考へていたゞきたいと思ふ。あの場合の「興味」と云ふ言葉は氏の人生と藝術とに對する態度をどう考へさすか。

滔々たる人間の本體は薄のろでなければ馬鹿か、でなければ嫌なものかに歸着するものと前田氏の說を認めるとする。それに對して高い道義の念は一體どうなるのだらうと平凡人は考へて見たのだ。價値のないのが本體である人間の生活に、道義の念が何んの藥になる。前田氏は「强く脈打つてゐた高い道義の念」と云ひ、平凡人は「熱實な道義的氣魄」と云つた、（どつちが强い表現だかは讀者の判斷に任せる）高い道義の念が如何に强く脈打

つても滔々たる人間の本體をどう變化させ得ようもないのだ。交渉のない大きな暗い力と小さな清い力との對立、それが人生なのか。それは明かに或る人々の蛇蝎の如くに忌み嫌ふ善玉惡玉の對立を肯定した話ではないか。それはそれでいゝ。一面に暗い人間の本體を肯定する人が、一面それと氷炭相容れず、又その本體をどうすることも出來ない道義の念に色眼を使ふ、卽ち出來ない相談を常住腰にぶら下げて歩くと平凡人が云つたのに何んの不思議があるか。而して平凡人の立場からこんな不幸な人間は澤山居ないと思つたのに何んの訝るべき餘地があるか。

（一九一七年八月、「讀賣新聞」所載）

私の母

母が繼母でない事。こんな難有い特權は又とは一寸ないと思ひます。繼母を持たねばならぬ子の、世に多いのを知りながら、こんな幸福を披露するのは心苦しい程の事です。

母が私より多くの悲しみ苦しみを知つてゐる事。幼年時代が華やかだつたゞけ、母の處女時代は苦しかつたでせう。妻となつてからも、母には、自由に自分自身を振舞ひ得る日とては一日も來なかつたのです。私の幼い時小金井きみ子氏が會津落城當時の士族の生活を描いた文章を讀んで、母が非常な名文だと感心して淚を流してゐたのを記憶してゐます。母は凡ての悲境と壓迫とに對する悲しみ苦しみをよく〳〵飮み込んでゐる筈です。それは子にとつてどれ程の力でせう。

母は子に死別れなかつた。凡ての痛苦を知つてゐながら、母は子に死別れる悲しみを經驗してゐません。母は私等七人の子を生みましたが、一人も死んだものはありません。この大きな幸福は、どんな暗さの中にも母の性格を明るいものにして來ました。何物も曇らす事の出來ない母の顏を見るのは子の喜びです。

その外、母の性格や、修養や、信仰について、餘り委しい事を私自身が書くのはいやです。何しろ私の母はいい母です。

（一九一七年十月、「新家庭」所載）

藝術を生む胎

○

藝術を生むものは愛である。その外に藝術を生む胎(はら)はない。眞が藝術を生むと考へる人がある。然し眞が生むものは眞理である。眞理卽ち藝術とはなり得ない。眞が生命を得て動く時、眞は變じて愛となる。その愛の生むものが藝術なのだ。

○

凡てのものは動く。靜止の狀にあるものは絕えてあることがない。凡てのものは變る。不變の狀にあるものは嘗てあつた事がない。若し靜止不變のものがあるとすれば、それは或るものを凝視したい欲望から私等が假りに空中に描く樓閣に過ぎない。

眞といふものも謂はゞ其の樓閣の一つである。私共は絕えず動き絕えず變ずる愛の當體を、强ひて假く假象的に靜止不變の狀に置いて、これに眞といふ名を與へて見るのだ。流れる水が或る岩の間に落ちこんで、絕えずそこに一つの渦紋を描くとする。若し流れる水の量が一定してゐると、そこに描かれる波紋の形は大抵一定してゐるであらう。然しその渦紋の內容は一瞬と雖も同一ではない。それは微細な外界の影響――例へば氣流、その水上を泳ぎわたる小魚、落ちて來た枯葉、渦紋自身のさゝやかな變化が次の瞬間に及ぼす力――に作つて、常住に眼まぐるしい變化を行つてゐる。唯その渦紋を凝視しようとしてゐる人には、さういふ動搖を撥無して、渦紋そ

のものをはつきり腦裡に再現して見ようとする欲求が起つて來る。而してその人の心には、水が或る中心點を求め爭つて、囘旋狀に求心的な運動をする一つの現象が、靜止不變な假象となつて考へられるのだ。

渦紋其の物が愛であるならば、渦紋の假象は眞だ。渦紋は實在する。然し渦紋の假象は人の心の中に再現された幻影に過ぎない。渦紋があつて甫めて渦紋の假象が生れる樣に、愛があつて甫めて眞は生れるのだ。だから私は「眞が生命を得て動く時、眞は變じて愛となる」と云つたのは、實は本末を顚倒したもの丶云ひ方である。本當をいへば眞が動くといふ事はない。眞が動けばその瞬間に眞の本質は失はれてしまふ。愛が、人の心の中で假りに不變と云ふ鑄型にはめこまれてしまつた時に眞となるのだ。

愛は人を動かす力で、眞は人が動かす力だ。

○

さらば何故愛のみが藝術を生む胎だと私は云はうとするのか。

私はそれを斷定する前に更に前提して置かねばならぬもの丶ある事を感ずる。

人の行爲は思索的なると實働的なるとを問はず共に一つの活動だ。その活動に二つの動向がある。一つは自己を對象とする活動であり、一つは環境――自己以外のもの――を對象とする活動である。自己を對象とする活動とは取りも直さず愛の活動である。何故なれば自己とその所有とは愛の別稱であるからである。(自己卽ち愛が働いてその所有を外界から攝取して略奪する――その道行きは私が本誌の六月號に揭載した「惜しみなく愛は奪ふ」と云ふ感想文の中に見出していたゞきたい。私は玆にその事實を繰り返す餘裕を持つてゐないから)、而して自己の對象とする活動のみが、私の考へる所によれば藝術的活動であるのだ。

この前提から出發して私はいふ、自己を對象とする活動が愛の活動であるが故に、愛のみが藝術を生む胎であると。

○

難ずるものはいふであらう。お前の所説は藝術の範疇を甚しく狭小なものにしてしまふ。能動的に社會を對象として活動すべき分野は藝術にも廣く大きく殘されてゐるではないか。藝術は抒情詩と自叙傳とに跼蹐すべきものではないと。

私はその難者に答へていふ。藝術家が愛によつて自己の所有とした環境、言葉を換へていへば、自己の中に取り入れて自己の一部となし終つた環境以外の環境を對象として活動するのは、不遜な事であるばかりでなく、不遜であるよりも何よりも絶對に不可能の事である。自己以外の社會とは自己の所有に屬しない環境の事である。藝術家が如何に非凡であり、天才的であつても、自己のしつかりと把持し盡さない環境を如何にして取扱ふ事が出來ようか。それを試みない瞬間に、藝術家はその無謀に罰せられて斃れる外はない。

藝術家が社會を對象として創造を成就したと外面的に見える例はある。さういふ例は有り餘る程にある。然し綿密に考察するならば、その創造が價値ある創造である以上は、その對象は藝術家の自己と交渉を沒却した對象である場合は絶對にない事を私は斷言する。その藝術家は必ず自己の中に攝取される環境を再現してゐるのだ。即ち自己を明かに表現してゐるのだ。題材が社會の事であれ、自己の事であれ、客觀的であれ、主觀的であれ、眞の藝術品は畢竟藝術家自身の自己表現の外であり得ない。

而して自己の本質は愛だ。だから愛のみが藝術を生む胎なのだ。

一見乾燥に見える如上の推理から私は暫く實際の問題に移つて見よう。

○

藝術は眞から生れねばならぬと主張する人達がある。科學的精神の勃興に刺戟されて起つた自然主義、寫實主義の奉誓者は卽ちそれである。彼等の信ずる所に從へば事或は物の眞相を歪んで見せるものは愛憎に如くはない。人の藝術に要望する所は、如何に擴大されても、群集の大には及びもつかない一個性の愛憎によつて取捨された自然及び生活であつてはならない。反對に、藝術家の愛憎（卽ち自己）を最小限に壓抑して、能ふかぎり拂拭した心鏡に寫つた自然及び生活でなければならぬ。故に藝術家が愛憎取捨を事とするのは無益であり、或は有害であると。

私はそれを信ずる事が出來ない。何となれば前に云つた通り眞は愛の假象に過ぎないからである。眞とは私等の愛憎が假りに設けた約束に過ぎないからである。枯死した無機的な眞が生氣ある有機的な藝術を生み出すとは考へられないからである。

餘談に亙るが私達の心的活動はよく智情意の三要素に分割して論じられる。便宜上さうする事を私は拒まうといふのではない、然し智情意の後ろに愛を置いて考へると、一見全く異つて見える此の三要素は畢竟愛の作用の現はれに過ぎない事を看取し得るだらう。愛が事物を選擇する、其の能力を假りに智と云ひ、選擇したものに働きかける、其の能力を假りに情と云ひ、働きかけた作用を永續する、其の能力を假りに意志と云ふのだ。智情意は畢竟愛に裏書きされて三位一體となるのだ。

眞を識別するのは智力に在る事はいふ迄もない。然るに智力は愛の作用の一面にしか過ぎない。智力が獨り働

く所に自己全體の働くといふ事は考へられない。

眞が藝術を生まねばならぬと主張する人は誤つた歸納に陷つてゐる。藝術は眞でなければならぬが故に、藝術は當然眞から生まるべきだとするものだ。それはさうではない。愛が藝術を生むのだ。而して藝術は、愛から生まれるが故に、眞を生むのだ。

○

藝術を生む力は主觀的でなければならぬ。この主觀のみから眞の客觀は生まれ出る。眞は畢竟一種の概念に過ぎない。概念の內容は隨時隨處に人が變化させる事が出來る。これに反して主觀は、自己は、愛は動かす事の出來ない嚴肅な實在だ。

畢竟自己の問題だ、愛の問題だ。藝術家の愛がどれ程の深さに愛し、どれ程の深さに略奪し、どれ程の高さに向上し、どれ程の熱さに燃燒してゐるか、それが問題だ。個性といふものが人間の生活全體から見て如何に小であるか、如何に不正確な尺度であるかといふ事は問題ではない。何となればよき個性は人間の生活全體よりも大きく、又より完全な尺度であり得た例は、歷史が有り餘る程證明してゐるからである。

愛の生活の向上——これを外にして何處に藝術家の權威があらう。この一事に已みがたき要求を感じないものは藝術家たるの資格を根本的に持たないものだ。藝術家はこゝに苦しみ、こゝに喜び、こゝに勞役し、こゝに創造するのだ。その他一切は第二義以下に墮したあはれな屬性に過ぎない。

○

凡ての活動は結局自己を表現しようとする過程である。私は前に活動に二つの動向があつて、一つは自己を對象とし、一つは自己以外の環境を對象とするといつた。而して自己を對象とする活動が藝術的活動だといつた。それは人の好き〴〵である。或る者は自己以外の環境を對象として自己を表現しようと試みる。彼の個性は其の個性と有機的な交渉を持たない環境と甚だしく亂雜に混淆する。所謂事業家とか、道學者とか politician とか、社交家とか云はれるものゝ生活は卽ちそれだ。彼等は自己を散漫に外物に對して放射する。而して彼等の個性は段々擦りへらされて行き乍ら、其の跡に環境と個性との奇怪な化合物を殘滓として殘す。その個性は已然の個性と將然の個性との連絡となる事なく、雜然として人生の衢に瓦礫の如くころがつてゐる。

○

自己を對象として自己を表現しようとするものは前の樣な生活に對して堪へ切れない不安を感ずる。彼等は純粹に自己を表現しなければ滿足する事が出來ない。彼等と雖も自己表現の要求に驅られて、環境と未熟な妥協を試みる誘惑を蒙る事が屢ゝあるにしても、如何にしても其の境地に安んじてゐる事は出來ない。彼等は自己の放散から愛の攝取に歸つて行く。所謂實世間なるものに引出された彼等は、極端な革命家としてはね飛ばされるか、憐れむべき敗殘者として踏みにじられる外はない。かくて彼等の或る者は實世間に唯一つ殘された彼等の城壘なる藝術にたてこもるのだ。こゝに彼等は始めて自己の純粹な雰圍氣を見出す事が出來る。而して彼等の自己は形を取つて人の眼の前に現はれる。愛は酬いられる。藝術的創造は卽ち成就するのだ。

○

一事をなさずして藝術的な人がある。
なさゞるなくして非藝術的な人がある。
愛に眼ざめると眼ざめざるとがこれを定めるのだ。

○

藝術的衝動とは勢力の過剩がさせる業だといふ藝術遊戲說のいかに淺薄であるよ。
藝術的感興は實感を伴はないのを特色とすべきだといふ藝術享樂說のいかに暢氣であるよ。
私は藝術的衝動とは愛の過剩がさせる業だと考へる。又藝術的感興は實世間の事象からは直接に得られないほどな純粹な實感を伴ふべきものだと考へる。
だから私は興味のみから藝術を感受しようとする態度に對しては深い侮辱と厭惡とを感ずるものである。「面白く讀んだ」「興味深く見た」——さういふ言葉で挨拶される時、藝術家は平然としてゐる事は出來ない筈だ。
こんな所で云ふべき事ではないかも知れないが、近頃私と所思を戰はしてゐる或る論者は、「わたしは『十字架上の基督』に興味をもつて見る。併し、わたしは基督を殺した人達の行爲を是認しようとは思はない」といつてゐる。『十字架上の基督』とは誰の描いた『十字架上の基督』であるのか、こゝには示してない。然しその畫がもし藝術的作品として許さるべきものであるとするならば、而してその論者があるやうに、基督を殺した人達の行爲を否認してゐる人ならば、その人はその畫面から、技巧上の興味とともに銳い實感を感受せねばならぬ筈だと私は思ふのだ。論者はこゝで淺薄な藝術論に謬られてゐるか、生來藝術を感受する能力を有してゐないのかだ。
生活上の出來事と藝術とをかくまで遠く分離して考へ得るまでになつた藝術說の墮落を誰か深く悲しまずにゐら

れよう。

若し私が說くやうに藝術が愛によつて生まれるものだとすれば、藝術はその窮極に於てます〳〵人類的となつて行かねばならぬ運命にある。鄕土、人種、風俗などの桎梏から逃れ出で、人間の心に共通な愛の端的な表現となるべき運命にある。

〇

私はこの考へから傳統主義といふやうなものに藝術上多くの期待と牽引とを感ずる事が出來ぬ。傳統は人の愛を眼ざますのに役立つかも知れない。然し一度眼ざめた愛は傳統を後へにのこして先に急ぐだらう。

〇

私は自分が藝術家たらんとする一人なる事を忘れて、藝術を餘りに重く餘りに尊く描きはしなかつたか。今の私はかくの如き藝術の捧誓者たる事を畏れ憚る。

然しそれは私が至らないから畏れ憚るのだ。藝術そのものは私の言葉より更に重く更に尊き言葉をもて語らるべきものである。たゞ今の私はその重荷に堪へない。

同時に私は謙讓の假面の下に責任を回避しはしない。私の藝術は鋭く私自身の言葉によつて裁かるべきものなる事を私は覺悟してゐる。

あまりに徐々に――然ししぶとい意志なしにではなく、私がこれまで準備して來た自己の生活を顧みる時、私は自分のみが知る一種の强い感情に打たれずにはゐられない。

私の前には艱難の多い道が遠く續いてゐる事を知る。自ら揣れず敢へてその路上に立つた私は今では心からの躊躇を感ずる。

然し幼稚で粗野ではあるが私の愛が私をそこに連れて行つた。

○

私は更にいふ、愛は藝術を生む胎だ。而して愛のみがだ。

（一九一七年十月、「新潮」所載）

言ひたい事二つ

自己の作物を創作するについての感想を述べろとの勸めを受けたのだけれども、私の創作の態度は、いゝにしろ惡いにしろ、私の作物が十分に説明してゐると私は信じてゐるから、多少課題からそれてゐるかも知れないが、この機會をもつて次の事を云はしていたゞきたいと思ふ。

文壇の空氣が沈滯してゐるとは、私の耳が絶えず聞かされる噂である。さうかも知れない。さうだとするなら文藝の價値評量に關係する人はどうすればいゝといふのか。文壇不振の聲を擧げる人は多い。然しそれを救ふべき具體的方策を提供する人を見た事がない。少くとも私の寡聞はこれを聞かない。

私は氣付いたまゝに二つの方策を提供して見たい。

その一つは作物の眞價を評定すべき批評家の態度についてゞある。文壇には今でも流派に對する批評が重きを占めてゐる。彼等は或る作家の一團を或る流派の中に押し込めて批評の對象としようとする。それは文藝史的に考へると興味のない事ではない。然し作物の眞價を決定し、當面の文運を强張させる爲めには非常に拙劣な方法であるといはねばならぬ。

文藝史は要するに過去の整理である。當面及び將來の進展には與かる事が甚だ薄い。云ふまでもなく、近代に於ける藝術の要求する一特質は、個性の明確獨自なる開展である。各自が各自自身流派たらんとする傾向である。例へば後期印象派といつて概括される人々を取つて考へて見ても、セザンヌとゴッホとゴオガンとは、後期印象

派といふ因子を以て括り出されたものに比しては、比べものにならない程強い深い個性を以て裏づけられてゐる。この顯著な傾向は繪畫に於てのみ然るのではない。然るに批評家は往々にしてこの平明な同時に大事な事實を無視しようとしてゐる。かくて彼等は或る流派に當てはめて考へる事の出來ない程の獨自性を持つた作物をあつかひあぐねてゐる。一家即流派、私はこの態度を批評家に要求したい。この視角の變更は、今の文壇にも案外重視すべき作物のある事を認めさせると私は思ふ。

その二つは作物發表機關の態度である。平たくいへば文藝雜誌社とその編輯者の態度である。彼等は既に名を成したものを歡迎するのに決して吝かでない。或は吝かでなさ過ぎる。然しながら未知の作家に對しての冷酷さは言語に絕するといつて差支ない。勿論或る文藝雜誌には同人の私有と稱すべきものがある。例へば私の關係してゐる「白樺」の如きはそれであつて、それは一般の文藝雜誌とはおのづから存在の意味を異にしてゐる。

私の云はんとするのは作者の選擇に自由を有する雜誌の事である。さういふ雜誌が未知の作家に對して持する態度は實にひどい。私の所を訪れた或る雜誌の編輯者は、未知の作者を自分の雜誌に紹介する意志を漏らして、いゝ作物を紹介する爲めには首になつても仕方がないと云つてゐた。パンを失ふ事まで豫め覺悟しなければ、未知の作家を紹介出來ないといふ事は何んといふ悲しい事だらう。雜誌の經營は慈善事業でなく、他の商業同樣に營利事業である位の事は私も心得てゐる。營利事業なら營利事業で宜しい。何故彼等は事業をするには必ず伴ふ所の冒險をしようとはしないのだらう。私の狹い觀察によれば、兎に角文壇に名を成した人々は、何等かの意味に於て自分の私有に屬する作物發表機關によつて、自己を表はす事によつて、始めて一般の雜誌經營者を安心せしめたのだ。或る未知の作家に、若し作物發表機關を私有する餘裕がなく、或る團體に加入すべき經歷若しくは

融和性がなければその作家は殆んど世の中から顧みられないでしまふの。。

私は雜誌社とその編輯者がもつと大量であり、もつと本當の意味で自分の商賣に熱心であつてほしい。さうしたならば、必ず埋れた寶を拾ふ事が出來る。それは文運の貢獻になるばかりでなく彼等自身の利益であるべき筈だ。

私のやうな文壇一般の事情に就いて未經驗なものがこんな事をいふのは僭越かも知れない。然し貴誌の與へて下さつた機會は私にこの二事を云はさずにはおかない。

（一九一七年十一月「中外」所載）

氣分で生きて行く人

志賀君は生馬さんの友達であつたから、小さい時分はよく家に來た。けれども私が志賀君を知つたのは、恰度私が一年志願兵になつて麻布の三聯隊に居た時分であつた。志賀君の家が直ぐ近所にあつたので、よく風呂を使はせて貰ひに行つた。その時が寧ろ初めであつたと思ふ。それは明治三十五年であつた。志賀君はその頃里見さんと仲宜くして居た。私達は多少志賀君の一身上に立ち入つて話した譯でもあつた。何でも志賀君のその頃は、宗教から離れて、スツウルム・ウント・ドラングの時代であつたと思ふ。公にしてゐる作物はまだ一つもなかつたと記憶する。私は志賀君の家に來てゐた「サーザン」といふ外國の芝居の雜誌をよく兵營に持つて歸つては樂しんでゐたものであつた。

志賀君は氣分の人、何處までも氣分で生きて行く人のやうに見える。それでどん／＼押し通して行くところがある。「所謂横に車を押す」といふやうなところがあつた、しかし氣分が純粹で、徹底的だから、志賀君の所謂「横に車を押す」なるものも後から振り返つて見ると、理智的の判斷から離れては居なかつたやうに思はれる。そして、一つことに執着すると、それを何處までも自分で嚙みしめて行く。此の事は志賀君の容貌にも現はれて居ると思ふ。君の容貌は特色のある容貌である。額から眉にかけて湛へられた一種の憂鬱な氣分や、正しい鼻の輪郭のもつてゐる威嚴とでもいふやうな鼻の線などがそれである。それを作品と比べて見ると、志賀君の特色ある性格は、非常によく、しつくり裏書されてゐる。僕のやうに君の性格を知つてゐる者には、世評が餘り面白くないといふ作品でも、非常に感じさせられる場合があります。「鵠沼行」などは世評は左迄でもなかつたけれども、讀

んで見て君の性格の特色が鮮かに出てゐると思ふ。志賀君の背は痩形で高く、大きくて、筋肉質の手は非常に細長い。そしてたるんだ皺、少し毛のむしや〱と生えたその手は、極めて神經質な事を思はせる。

志賀君の潔癖では面白い話がある。君が旅行をする時、蚤や虱が怖くてならないので、屹度袋を持つて行くのださうだ。それに體を突つ込んで、頭のところで締めるやうになつてゐる。けれどもそれだけではまだ〱不完全だといふので、遂には鯉幟のやうに口をこしらへて、それにすつぽり潜ると、天井へ綱をつけてそれを引張り、鯉の瀧上りのやうな具合にやるのだといふことです。それから志賀君が創作を考へてる時には、廊下を歩き乍ら考へるのださうだが、何分體が大きいものだから、夜中など家中の廊下をみし〱歩き廻るので、家の者が寝つかれないで、困るやうなこともあるさうです。

（一九一七年十一月「新潮」所載）

四つの事

作者は自己の作品を自己が解釋し布衍すべきものではない。何處までも讀者の受感と理解とに依賴し、その心持の廣さを限るやうな事があつてはならぬ。何故と云へば——作品は作者が滿足したものであればある程——作者自身より大きなものであると思ふからです。例へば作者は母で作品はその嬰兒です。生まれた子が健全であり面魂の優れたものであればある程、母は默してその生長を大切に愛護する外はない。その子が如何なるものに生まれ育つて行くかは母自身の豫想だもし得ない所だからです。縱し生まれた時、その子が不健全であり、さして優れたものでないやうに見えても誰がその子の本當の未來をたしかにいひ當てる事が出來ませう。作者と作品との關係も同じだといへます。作者は作品を創ります。然し作品が作者の手を離れると同時に、作品は作者から獨立した存在として作者の前に立ちます。而して作者は既にその作品を謬りなく解釋し布衍する權能を失つてゐます。そこに作者の良心があり、作品の權威があります。だから私はこれまで自分の作品が如何なる意味を有し、如何なる目的を有するかを明確に公言した事はありません。

然し、如何なる要求により、如何なる態度で、作品を生むかといふ問題は、答へらるべき問題であると思ひます。

私は第一淋しいから創作をします。私の周圍には習慣と、傳說と、時間と、空間とが十重二十重に墻を築いてゐて、或る時は窒息するかと思ふほどです。その嚴めしい高い墻の間から時々魂をとろかすやうな生活や自然やがふと見えたり隱れたりします。それを見得た時の驚喜、而してそれを見失つた時の寂しさ。而して見失つたも

のが又とは自分に現はれないなとはつきり意識する時の淋しさ。その時見失はれたものを私にしつかり回復してくれるものは、しつかりと純粹に回復してくれるものは、藝術の外にありません。私は小さい時から不知不識この境地に住んでゐました。それが文學といふ形をとつたのです。

私はまた、愛するが故に創作をします。これは或は高慢な言葉のやうにも聞こえませう。しかし人間として愛しないものは一人もない。愛によつて自己の中に取り入れた、若干かの生活を有つてゐないものは一人もない。その生活は常に一箇の人の胸から、出來るだけ多くの人の胸に擴がらうとしてゐます。私はその擴充性に打ち負かされるのです。愛したものは孕まなければならない。孕んだものは生まれなければならない。或る時は生兒を。或る時は死兒を。或る時は雙兒を。或る時は月滿たざる兒を。而して或る時は母體そのものゝ死を。

私は又愛したいが故に創作をします。私の愛は墻の彼方に隱見する生活や自然やを如實に摑みたい衝動に驅られます。だから私は私の旗を出來るだけ高く揭げます。私のハンケチを出來るだけ強く振ります。この合言葉が應ぜられる機會は勿論澤山はない。殊に私のやうな孤獨な性格には澤山はない。然し二度でも一度でも、私の合言葉が誤りのない合言葉で應ぜられるのを見出す事が出來たら、私の生活は幸福の絕頂に達します。その喜びにめぐり遇ひたいが爲めに。

私はまた私自身の生活を鞭たんが爲めに創作をします。何んといふぐうたらな向上性の缺けた私の生活だらう。私はそれを厭ふ。私には脫ぎ捨つべき殼がいくつもある。私の作品は鞭となつてその頑な殼をきびしくひつぱたいてくれるのだ。どうか私の生活が作品によつて改造されるやうに。

（一九一七年十二月、「新潮」所載）

岩野泡鳴氏に

創作に忙殺された結果、去る十一月二十一日に本紙で發表されたあなたの御意見にお答へするのがおくれました。許して下さい。これからお答へします。

あなたの御意見を伺つて私が第一番に不滿に思ふ事は、あなたの鑑賞力が粗笨な事です。藝術に觸れて見る手はがさ〱に毛ばだつた皮の厚い手では駄目だと思ひます。そんな手で觸られる前に藝術品は壞れてしまひます。指の先に眼の着いてある程 delicate な手が觸つてくれるので藝術品は始めてその生命を人に傳へ得るのだと思ひます。餘程以前の事です、私はたしか「太陽」誌上であなたがホヰットマンの『リンカーンを弔ふ歌』を譯されたのを讀んだ記憶があります。その第一行目にあるライラックといふ字をあなたは百合の花と譯して居られました。あなたは主義の上からそんな勝手な事を飜譯者に與へられた自由だと思はれたのか知りませんが、私はあなたの神經の粗笨な事を不愉快に思はずにゐられませんでした。今度の論文中にもあなたは私の創作の一二を並序に批評して居られますが、『凱旋』を評して「老將軍、書記、若しくは御者を中心にして各々別な小說に書いていゝものを如何にも不用意にお粗末な戲曲化をしてしまつた……」と書いて居られます。作者として辯解がましい事をいふのは大嫌ひだが、あの作は題目が示すやうに明かに一匹の老馬が主題になつてゐる位の事は、少し人間的の同情のある敏感な讀者ならばすぐ分る筈です。あなたの鑑賞力が粗笨なばかりに、折角のお言葉も、的を外れた無益な言葉の羅列になつてしまつてゐます。他人の領分に切り込む前には、も少し切實な同情と、緻密に働く神經とを用意しておいていたゞきたいと思ひます。

本論に移つていふと、あなたの私に對する攻擊點は三つに別れてゐます。第一、私は「藝術を生む胎」が愛のみだと主張し乍ら、眞といふものを立して二元的な考へ方に墮してゐる事。第二、藝術專門家たる人間が他のすべての人間よりも高尙だと思ふ僻見に陷つてゐる事。第三、「藝術はその窮極に於て益〻人類的となつて行かねばならぬ」と私のいつたのは「風土、人種、風俗などの桎梏から逃れ出る」事で、人類若しくは人間の端的現實の立脚地を知らない無自覺から起つてゐるといふ事。

第一、あなたは「眞理は人生の他のあらゆる方面と同樣、動的、過程的、刹那的である」といつてをられます。仰しやる通りです。事實はその通りです。然し人間の眞理に對する欲求からいふと、眞理といふものは成るべく靜的な固定的な、存續的な存在でありたいのです。眞理の內容が絕えず變化しては、眞理はその存在の價値をその瞬間に失つてしまひます。眞理といふ言葉をあなたがあなたゞけに通用するやうに解釋なさるのなら論外ですが、或る一定數又は一定量の事象を槪括規定する標準的觀念が眞理といふものである以上、眞理は不變不易な程その價値を增加するのです。然し人間の欲求は思ふやうに行かないで、眞理といふものも實はあなたの仰しやるやうに動的です。そこで眞理を標準として藝術を生み出さうとするとすぐ自己矛盾が生じて來るのです。此の事はここで繰り返して說明するには餘りに明確に私の感想の中に述べてあるから、多言を費しません。唯私が眞の性質を說明して、眞からは藝術は生まれない、愛からのみ生まれると云つたに對して、あなたがそれを二元的な考へ方だと云はれるのは私の腑に落ちない。

私は愛は實在であり眞は假象であるといつた。これが二元ですか。愛から藝術を通して（こゝでは藝術だけを論じてゐるのだから）眞が生まれるのだといつた。これが二元ですか。眞から藝術は生まるべきものだと考へる自然主義の藝術觀は私には納得出來ない、藝術は愛から生まるべき者だと云つた。これが二元論ですか。あなた

は「愛と眞とは果してさうはつきり別存してゐるものであるか」といはれた。私は明かにいふ、果實と、人がそれを噛んだ時の味覺とが別存してゐる如く、それは別存してゐるものだ。果實は味覺を造り出す。然し味覺は果實を造り出しはしない。愛と眞とは正にさうした關係にある。然しかく別存してゐるが故に二元だといつたら、誰が其の考案の粗笨にあきれずにはゐられよう。二つの原因又は二つの結果は二元をなし得よう。然し一つの原因と其の結果は二元に非ずして一元の延長だ位はあなたと雖もお分りなさりさうなものだと思ふ。

第二、藝術專門家たる人間が他のすべての人間よりも高尚だなぞとは私は何時如何なる場合にもいつてはゐません「一事をなさずして藝術的な人がある。なさゞるなくして非藝術的な人がある」とこそいつてゐる。恐らくはあなたは「所謂事業家とか、道學者とか、politician とか、社交家とか」といつた私の言葉の「所謂」を勝手に取り去つて、私を見ようとされたのではないか。自己を對象とする活動、環境を對象とする活動を論じた所は、あなたの頭にはよく這入つてゐないやうです。もう一度氣を落ち付けて讀み直して下さい。「單に用語上の遊戯を獨りでよがつてゐるのに過ぎない」とあなたは豫め用心の釘を打つておかれたが、それにも係はらず私は、藝術家は藝術專門家のみに限らない事を主張します。一事をなさずして藝術的な人があるとさへ私は考へるものです。況んや何んでもいゝが一つの仕事を藝術的にする人は必ずある筈です。あなたはこゝで藝術的な人は必ずしも藝術家とはいへないと云はれるでせう。藝術專門家とはいへません。然し藝術家とはいへます。而して私は藝術家と藝術專門家とを全く同じ高さに認めるものです。若しあなたが藝術は藝術專門家のみの所有物だといひたいなら、藝術といふものゝ内容なり定義なりを明確に提供されて後に、云はれねばならぬ事です。私にいはせれば、いかなる仕事でもいゝ、その仕事の內容が環境を指すのではなく自己を指す場合には、それを取扱ふ人は藝術家です。これに反して環境ばかりを對象として働く人は、その人が藝術專門家であれ、それは濟度すべからざる人生のす

たれ者です。

第三、あなたは人間の向上的欲求を全く無視してゐます。「人間の端的立脚地」の重んずべく又脫却し難いものなる事は私と雖も知つて苦しんでゐます。然し現在の如き人類進化の程度、制度、狀態では、人間がどれ程緊張し燃燒して生活しても滿足を得られないのは自明の事です。現狀を緊張して生活すると同時に、それを突破して、更に一歩を進めたいといふのは人間に拔くべからざる欲求です。緊張した生活は自然にさういふ結果を將來します。傳統が人間を創つたのではなく、人間が傳統を創つたのだ。而して人間の力全體は傳統に化成し切つてはゐない。人間は傳統に固く圍まれながら、それを打ち破つて新しい傳統を創り出す力をまだ蓄へてゐる。それは傳統といふ固定した形を取らない自由自在な、萬人に共通な、根柢的な力だ。それをあなたも承認しない譯には行きますまい。私はその力を愛と名づけるのです。而して愛が藝術を生むのです。だから藝術はその窮極に於て（といふ意味は藝術の未來はといふ事ではない。藝術をつきつめて見ると、卽ち藝術を本質的に考察すると、といふ意味です）、ます〳〵人類的になるべき運命にあるといふんです。明白な事ではありませんか。國家主義者は自覺したもので、社會主義者は無自覺だといふやうな事は、全然考へられない事です。あなたは國家主義から離れた露西亞の現狀を痛罵せられたが、その現はれ方が間違つてゐるにせよゐないにせよ、又無自覺な多數者の迷蒙が紛亂から紛亂を生んでゐるにせよ、大きな露西亞の人間全體の心から自覺的に又無自覺的に迸り出たあの愛の裸形の閃きを誰が驚異と讃嘆の眼を持たずして眺められよう。第二十世紀の歷史を最も莊嚴に彩る思潮はあの面も向けかねる熾烈な熔爐の中から鍛へ出されるにきまつてゐる。あなたは藝術家を以て自任して居られる。あなたにはそれが見えませんか。あなたは人類の運命を最も賢く導き行く哲學者を以て自任して居られる。あなたにはそれが感ぜられませんか。

私はこれで筆を措く。あなたは尙ほ私に云ふべき事があるでせう。然し文字の上の議論は往々岐路に亙つてくだらないものです。あなたが若し更に是等の問題を誠實に討究なさるお心持があるなら私をお尋ね下さい。私は喜んで出來るだけ冷靜にあなたと意見の交換をしませう。

（一九一七年十二月十七日夜）
（「國民新聞」所載）

著作集に就いて

書冊の形でする私の創作感想の發表は、この「著作集」のみに依ることゝします。私の生活を投入するものは、この集の外にありません。

この集では、滿足の出來るだけの斧鉞（ふえつ）を加へて、先づ舊作から發表しますが、二度の勤めをさせず、この集のみによつて私の作物を公けにする時機の來る事を希望してゐます。

私のものを讀んで下さる方が澤山あらうとは思はれません。私はその事を云ひました。新潮社はそれにも係はらず、この集の刊行を繼續する事を約束してくれました。私は嬉しく思つてゐます。

とまれ私は一個の人間でありたい。それを信じて下さい。あなたと私とを結び附けた因緣に對して感謝する。而してあなたに私の最上の祈願を捧げる。この集を顧みて下さる方に私は敢へてから申します。

（一九一七年五月「著作集」第一輯）

自我の考察

今回は突然の事とて、何等の腹案もなく、强ひての御希望により何か申上げる事になりましたが、去る頃雜誌「新潮」に投じた小さな感想がありますので、それを布衍補充して諸君の御批評を仰ぐ事に致します。

人間が生きる以上は考へるし、考へる以上は哲學を作ります。哲學といへばむづかしいが、誰でも多少の哲學者でないものはありません。而してそれが生活を離れて、書齋中で、論理で固められた空疎な哲學ではなく、生活が作り出したものである以上は、確かに考察の價値あるものである事は勿論です。だから私の申し上げる私の哲學も全く無意味ではあり得ないと私は思ひ、從つて諸君の御批評を仰ぎたいと思ふ所以で御座います。

私は青年時代に、色々な周圍からの感化によつて、佛教とか基督教とかの宗教に私なりの沒頭をし、而して基督教に私の信仰の根を下しましたが、その後自己をもつと根柢的に築き上げて見たい欲求から全く信仰生活から離れる事を餘儀なくされました。

かうして外圍から段々自分を切り放して來て見ると畢竟その跡に自己といふものだけが殘りました。私はその自己の本體が何であるかを體驗しようと試みまして、自己を立すると、その外圍に他己といふものが明らかに存立する事を知り得ます。こゝですぐに起つて來る問題は、我等の生活は自己を主とすべきか他己を主とすべきかであります。私は或る期間はこの自他の何れにも偏執する事なく、その間に生活を游がせる事によつて、眞實の人間味を體覺すると考へた事がありました。私が本學に在職中この講堂で述べた「二つの道」といふ講演はその當時の主張を披瀝したものであります。

然しこの考へ方は到底私を滿足させませんでした。生活を一元に還元したいといふのは何といつても人間本來の欲求です。そこで、本氣に、自他の中何れを主として私の生活は導かれなければならぬかを決定するはめになりました。而して只今私は自己を主とすべき道を選んで居ります。何故であるか、その理由を今日は申し上げて見たい。

私は端的に、自分を愛する程他人若しくは他のものを愛してゐるかと反省して見ます。私としては、その解答は極めて明瞭です、私は何者よりも自己を愛してゐます。この自己を愛するといふ事實は何といつても拒むべからざる私の本能であります。この本能を主張したのは決して新しい事でも珍らしい事でもありません。哲學上の利己主義も、科學の自己保存の法則なるものも、ニイチエ一派の超人の主張も、共に等しく愛己といふ本能の爲めの叫びであつたのです。然し私の考へる愛己の本能は是等の言説によつては說き盡くされてゐないと私は感ずるのです。

ヒュームやホッブスの所謂利己主義は自己の表面的な觀察から出發してゐます。己れを利するといふ事を極く物質的に解釋してゐます。自己の完成といふ事よりも利益といふ事に重きを置いて論じてゐます。これでは本當に自己の要求が滿たされる譯がありません。科學の所謂自己保存の法則も消極的な見地であるといふ非難を免れる事が出來ないと思ひます。人間には自己を保存する欲求の外に、或はその以上に自己を完成せんとする欲求があります。この欲求を、科學は單に自己保存の偶然な結果と見ようとしてゐます。私はその見方に滿足してゐる事が出來ません。ニィチエの「力にまでの意志」もたしかに人間内在の動向を喝破したものでありながら、意志の奧に愛の本能の働きつゝあるを見逃してはゐないかと思ひます。

私は假に凡ての生活の根源を爲す本能を愛と名付けます。愛は普通には與へる本能と考へられてゐます。然し

愛は奪ふ本能です。又愛は涙つぽいなまやさしい力だと考へられてゐます。然し愛は嚴肅な激烈な容赦のない力であります。自己完成の欲求に驅り立てられた愛は自己以外のものから奪ふによいだけ奪ひ取るのです。ポーロが「惜しみなく與へ」といつたのは實は愛の働きの表面的な現はれを云つたに過ぎません。私が一つのものを愛するといふのは、その物をより多く自分の中に攝取して自分の生活の一部分としてしまふ事です。例へば私が一匹の小鳥を愛するとします。私はそれに美しい籠と新しい餌と水とを與へその外あらん限りの愛撫を與へるとします。まるで私は外物に對してどん〳〵自己と自己の所有とを與へてゐるやうに見えませう。然しよく考察して見ると、その小鳥を愛すれば愛する程小鳥は私の生活の中に這入つて私自身になつてゐるのです。私は小鳥に於て私自身を生活してゐるのです。だから、私が小鳥に與へてゐると見える愛撫も、籠も食餌も、畢竟私自身に與へてゐるのに過ぎないのです。私は愛は小鳥から小鳥を奪つたのみならずその所有まで奪ひ取つてしまつてゐるのです。かくの如くして私の自己は時々刻々その內容を豐富にして擴充して行くのです。これは科學の所謂自己保存を肯定する生活現象ではありますが、同時にそれ以上の意味を持つてゐる事が容易に看取されると思ひます。

所がこゝに愛己主義に反して主張される愛他主義の主張を裏書きすると思はれる事實が存在してゐます。所謂「身を殺して仁を爲す」といふやうな、自己の存在を滅却する激しい愛の作用のある事です。愛他主義者はこの事實を以て愛己主義者を非難しようとし、科學は種族保存の原則といふ自己保存の原則の一變態としてこの事實を說明しようとしてゐます。然し私は、こゝでも、愛他主義者の論難に承服が出來ませんし、科學の說明の消極的なのを不滿足に思ふものです。

自己の完成といふ事は前述した通りに物質的な意味に於ての完成でない事は前にも申しました。自己全體の完成です。自己全體の完成から考へると、肉體の如きはその極く一小部分の働きしか助けてはゐません。あまりに

激しく自己完成の本能が働いた時、誤つて肉體の破却せられるのは極く見易い理ではありませんか。結果から見ると如何にも自己を無視して他のみを愛したが故にかゝる結果を來したと見えませうが、もつと徹底的に考察すると、それが矢張り自己完成の道程の一變路に過ぎない事を發見し、從つて種族保存の原則を成就しながら、もつとそれ以上の現象である事が看取されます。

かういふ立脚地から實際の生活を觀て見ると、今までの私の見地が顚倒する事が往々あります。例へば愛他主義の本尊と見られてゐる基督の一生の如きも私には在來の見方と反對の見方をせずにはゐられなくなります。基督は凡てのものを犧牲に供して、唯一つ救世主の名をのみ得たと私は考へてゐました。然し今の私には彼はさうは映りません、彼は凡て世に高きもの美しきもの尊きものゝ完全な所有者であつた。彼は過去を所有したのみならず、未來幾千年をも所有し得る事をはつきり意識し得た程に豐富な所有者だつた。彼ほどに强烈な愛慾を以て奪ひつゞけた人はないと思ひます。彼は私にさゝやいていふ「見ろ私の無際限な領土を……お前も私に倣つて大きな領土の持主となれ。凡ての高きもの美しきもの淸きものを自己に吸ひ取れ、又凡てのものを高く美しく淸く見得る愛の視角を求めよ」と。

世の中には苦い顏をしながら與へる事をする人があります。それを僞善者といふのだと思ひます。それは愛を以て自己の中に攝取し切らないもの卽ち自己以外のものに與へるからの結果であります。彼等は何等かの不純な動機から、生意氣にも、自己と何の交渉もない他己に對して働きかけ、自己を放散し浪費するのです。だから、その後では、いやな不滿足、物足りなさを感ぜずにはゐられません。それだけ自己が空費される所に、自己完成の本能の呵責を感ずるから、彼は自ら苦い顏になり、せめては他人がその行爲を肯定し、是認し、賞讃してくれるのを便りにして、自己の生活の失敗を忘れようとするのです。

然し自己の所有に對しての外には何物も與へない人に取つては、そんな苦い顔をする必要は更にありません。彼に與へれば與へる程自分が豐富になる事を感ずるからです。又與へるのに右の手でする事を左の手に知らせないで置く必要もありません。右の手でする事はちやんと左の手が知つてる程全人的な行爲であるからであります。自己は自己で充ち足つてゐます。この立場から考へると善事を內所でするとか人の前でするとかいふのは無意味極まつた事です。大びらに無頓着に彼は彼の所領の中で振舞へばそれでいゝのです。彼が愛するのは攝取であり、與へるのは奪ふ事であり、而してその度每に自己が擴充し完成しつゝ行くのを自覺して、誰が人生の可能を信じ、生命の歡喜を享樂して、生の肯定者でないでゐられませう。

かく自己のみを本位とした生活が、現在の社會生活にどんな形を取つて影響するかは、容易に逆睹しがたい問題ではありますが、私は私として、その影響が必ず社會を正當な進路に導くと信ずるのです。人間の正しい生活――それが第一諦です。人間の正しい生活は正しくして眞なる本能によつて導かせる外はありません。その爲めに既定の制度組織が危地に陷り、破壞を結果しても、大して驚くには當らない事です、我等の人生の街頭には自己と他己との無機的な交涉から生まれ出た生命のない瓦礫が餘りに蕪雜に散亂してゐます。かゝる市街は遂に惡疫を以て人間を蕩盡します。我等の生活は美しい言葉や綱領で律せられるには餘りに緊迫して重大です。自己の溺愛……この一見醜く慾深く思へる言葉が眞に人間の欲求であり本能であるならば、我等は、その言葉に對する習俗的な厭惡を乘り越えて、その上に我等の生活を建て上げねばなりますまい。

これが私の哲學です。

さてかく歸納された哲學から出發して、人間生活の諸部門を觀察批判するのは、私として興味深く且つ大事な事でありますが、まだそれだけの準備も有せず、且つ出過ぎた事ですから、以下單に私の關係してゐる文藝の方

面に對して具體的に一言を費すにとゞめようと思ひます。それは私の藝術が如何にして生まれるかの解釋にもなりますから。

科學の勃興が促した近代藝術界の著明な現象が寫實主義自然主義の發生である事は勿論です。理智派若しくは浪漫派の如き諸傾向によつて率ゐられてゐた十八世紀の文藝は、その外容の典麗、優雅、激越、壯大であつたにも係はらず、我等の地上生活とは或る點で絕緣せられ、近代の生活苦の體驗者から見ると、どうしても物足らない缺陷がありました。卽ち充實した實感を伴つて來ませんでした。その時に科學の見地に立脚して起つたのが、ゾラによつて高調された寫實主義や、ゴンクール、フローベルによつて主張された自然主義です。要するにこれらの主義の成就しようとしたのは自然をして自然を語らしめる事でした。自然の再現でした。併し誰でも考へつくやうに、藝術的に自然そのまゝを再現しようといふ努力ほど馬鹿らしい效果のない努力はありません。自然をそのまゝ再現する積りなら、繪畫によるよりも寫眞による方がより安全で着實です。然し寫眞の發達した今日でも矢張り繪畫の重視される譯は何故でせう。それは繪畫の後には、自然からも寫眞からも窺はれない藝術家の氣禀が窺はれるからではありませんか。

更にいふべき事は、自然主義の根柢を爲す觀念は眞によつて現象を摑まうとする一事です。然し眞といふものをよく考へて見ると、それは流動一瞬も已む事なき現象を假りに固定して一つの概念にまとめたその結果に過ぎない事を知るでせう。現象が本體であるならば、眞とはその假象に過ぎないのです。この眞といふ假象の鏡に映じた自然が自ら活力のない硬ばつた像を鏡面に作るのは自明の理です。

私は眞が藝術を作るのではないと思ふ。藝術家の氣禀が卽ち愛が自然の中から或る對象を切り取つて藝術を創めるのだ。而してその藝術が本當の愛から生まれたものならば、それが眞であるべき筈だ。卽ち實感的で本當の意

味の客觀性を備へたものだと信ずるのであります。だから諸君がすぐ推知されるやうに、眞は動機ではなくして結果であるのです。眞が藝術を生むのではなく、藝術が眞を生むのです。換言すれば、愛が藝術家を支配する力で、眞は藝術家が支配する力なのです。こゝに自然主義の主張は本末顚倒を演じてゐます。有名な話ですが、作家の主觀を絕對に拒絕するのを主張した自然主義の作家フローベルが、その代表作「ボヷリー夫人」を脫稿した時、作家自ら作中の人物に動かされて號哭したといふ事です。これはフローベルが自分の理窟から割り出した主義者以上に如何に藝術家であつたかのよい證據です。ボヷーリ夫人が如何に作家自身であつたかのよい證據です。

實際自然を親切に見極めようとすればする程、人は自然を愛せずにはゐられません。自然を自己の內に取り入れて、その中に生活せずにはゐられません。然るに自然主義の作家はこの大なる事實を强ひて無視して、科學の固定的な靜學的な見方に殉じようとしたのです。

又文藝の一主潮として藝術卽ち藝術の主張があります。この中には二つの考へ方があります。一つは人生が藝術を作るのではなく、藝術が人生を作るのだといふオスカー・ワイルド等の主張であり、一つは藝術は何等の第二次的な目的を有するものでなく、表現そのもの丶中に價値を求むべきものだといふアラン・ポーやモン・パルナッスの詩人等の主張であります。

私は前の方の主張に對しては相當の共鳴を感ぜずにはゐられません。それは畢竟個性の創造といふ事を主張するに等しいからであります。と同時に生活が藝術を生む事も肯定しないではゐられません。少くとも今の世に於て藝術がそれだけの大膽な主張を人生になさんとするのは、その主張の內容を空疎にすると思ひます。藝術にたづさはる程のものはその藝術を以て人生を創造し得るといふ實力ある自信に達したのであるが、それは現狀について見ると滅多にはいへない言葉です。

第二の、藝術は表現のみといふ觀念は、私には如何にしても同意出來ない所です。希臘人はその盛んな生に對する執着と讃美とから、完全な人體の彫刻を成就して人類歴史の絶美な記念碑を創りました。併しその表現ばかりを採り入れたカノーバーやトールヴルドセンの作物はどうでせう。あの端麗な形體の後に潜む空虛は人をして美姬を放ち去つた後宮を思はせます。表現は畢竟主體です。主體なくして表現のあらう筈がありません。表現を高調しようとするのは取りも直さず主體を高調する事です。表現主義といふ名の空虛なのは、その主張者の個性の分散のいたましさを語るに外ならないと思ひます。

近頃やかましく云はれ出した傳統主義と云ふものも價値の薄いものではないかと思ひます。傳統とは要するに過去の生活を整理した結果です。過去が現在の生活に力を及ぼす程度は現在の生活の力強さに反比例します。現在の生活が強ければ強い程、過去の現在に對して有する力は減少します。(この詳しい事はメターリンクの「死後の生活」を讀んで下さい。)だから過去は愛の目ざめを促す力を持つてはゐませうが、愛の擴充には力がありません。否、愛は寧ろ傳統を打ち破つて、獨自性を發揮しようとする傾向を持つたものです。畢竟傳統は愛の食料です。愛を支配する力ではありません。

かく論じて來つて、その跡に殘された一つの問題は、藝術家を背景とする藝術であります。藝術は藝術家の個性が生み出すべきものだといふ主張であります。而して私は愛己といふ自分の哲學からこの主張に同感するものです。藝術的作品は要するに藝術家の愛の過剩がさせる業です。藝術家の自己とその所有とが生み出す結果が作品となるのであります。

唯玆で問題なのは藝術家の愛がどれ程廣く深く高いかといふ事です。卽ち藝術家がどれ程人間の生活を自分の中で、嚙みしめ、同化し、生活してゐるかといふ事であります。藝術の表面に藝術家が顏を出してゐるのが惡い

のでなく、醜い低い狹い藝術家が顏を出してゐるのが惡いのです。人は往々この區別を誤つて作品から藝術家が顏を引つこめるやうにと要求します。寧ろ、顏を美しくして現はれ出ろと要求すべきなのですのに。

以上の言葉は私が自分で自分を鞭つ言葉です。私は、この標準に照して、誇り顏に「我が藝術を見よ」と諸君の前にいひ得ない事を恥ぢます。然し私はこの難澁な標準によつて自己の道を開拓する外を知りません。諸君が私の作物を顧みて下さるやうな事があつた時、忌憚のない敎示を與へて下されば非常に難有く思ふでせう。

（一九一七年十一月十日、札幌北海道帝國大學農科大學辯論部講演會に於て）

ロダン先生の藝術の背景

白樺社が丁度ロダン先生の七十の年を記念して翁に祝詞を送つて、そして先生から三つの作品を好意をもつて贈つて下さつた、その時から既に七年になる。その當時ロダンの名は日本に於て餘りに多く知られて居なかつた。それがこの七年の間に少しく教養のある人は誰も知らないものゝない迄に擴がつたのは、一面に於て確かに先生の偉大さを語つて居るものと思ふ。

自分はパリにごく暫く滯在して居た際にルクサンブール美術館で「黄金時代」、「セント・ヨハネ」、「ダネーデ」の三作品と、それからパンテオンの階段の下に立つてゐる「考へる人」とを見たに過ぎない。それに未だ先生の傳記とか著作等を研究的に讀んだ事がないから、私の說くところは或は獨斷に流れる恐れがあるかも知れない。

さて先生の偉大さが何處にあるか、自分の揣摩したところに依れば先生は第一その性格の根柢に於て純粹の佛蘭西人であつたと思ふ。卽ち中世期に美しい華を開いたゴシック文化を生み出したゴース人の血液を潤澤に享けついだ藝術家だと思ふ。私はそこに先生の藝術の根柢の强味が横はつて居ると思ふ。一體第十六世紀以來十九世紀迄の歐羅巴の持つてゐた文明と云ふものは、つまり文藝復興期の文化の進運に對して、どれだけの價値を要求し得るかを考へて見るのに、文藝復興期の運動は要するにギリシヤ文化の輸入である。ところが一つの文化なるものは、その生み出されたる民衆を俟つて始めて完全なる有機的の發展を遂げ得るのである。從つて或る民族が一つの文化の生み出したその文化を他の全く異つた民衆に移し植ゑて、それに本然の文化の有機的なる發達を庶幾しようと思ふのは不可能のことである。しかして文藝復興の運動は、つまり伊太利、佛蘭西等の種族が、ギリ

シャ種族の生み出した文化を輸入し、再興し、生長させようとした努力なのである。が、今も云ふ如く、ラテン民族と云ふ種族の上に、ギリシヤ民族と云ふ異つた民衆の生み出した文化が、有機的な狀態で接(つ)がれ得る譯はない。だから文藝復興の運動は一時非常な勢で歐洲の全土を席捲したにも拘はらず、十七八世紀に至つては漸く眞生命を失つて、そして一種の型(マンネリズム)に墮落してしまつた。そして徒(いたづ)らに精神のない、形骸のみが傳へられた。

この半世紀の狀態から生き還へらうと云ふ努力が十八世紀の末から社會の諸方面に現はれて來た。ロダンも又この叛逆的運動の頭目と目さるべき人である。そして如何なる點に於て文藝復興期の末世の悲境から遁(のが)れ出たかと云ふと、自分の中に有(も)つて居るところの血液を強く、深く、高く働かせることによつてそれを成就したのである。と云ふのはゴシック藝術が生まれ出たその精神に自分が沈潛(ちんせん)して、そしてそこから藝術を生み出したのである。そしてあのゴシック藝術の特徴である執拗な程に理智的(リアリスチック)であるくせに、又非常に理想的な、そして眞實味のすぐれて勝つたところの藝術が生まれて來た。

しかし、もしこれで止んだならば先生は一個暗黑時代のゴシック文化の復興者と云ふにとゞまつたらうけれども、一度文藝復興期と云ふ時勢の洗禮を受けた先生は、その復興期を生み出したギリシヤ文化の藝術に遡る慧智(ウイズドム)も有して居た。そして先生に於て根強きゴシック藝術は美しいギリシヤの生命慾によつて培(つちか)はれ、衣(ころも)せられ、肉づけられた。そこが先生の藝術の新しい時代に捧げた一番大きな供物(そなへもの)ではないかと思ふ。そしてそこから新しい時代が幾多の餘慶を受けて、新しい藝術を生み出した。かくて先生は來るべき多望な藝術的運動の大きな一つの源頭をなすに至つたのだ。(談話)

(一九一七年十二月)
(「中央美術」所載)

一九一八年

藝術家を造るものは所謂實生活に非ず

生田長江氏が私を批評して、「パンと牛乳ばかり喰つてゐて胃の強さを誇る人だ」と云つたといふ新聞の雜報をわざ〳〵送つてよこしてくれた友達がある。生田氏がこの言葉を吐いたか如何かは知らない。又その記事を送つてよこした友達の心持も分らない。然しその記事の内容は私をぎくりとさせた。何故なら、衣食の問題に絶えず頭を惱ましてゐなければならない社會大多數の人々から見ると、私の踏んで來た實生活は消化され易いパンと牛乳ばかりで育ち上つたやうな生活だからである。私は社會の大多數の人々に向つてこんな偶然な安易な生活を送るのを濟まなく思つてゐる。他人から私のこんな境遇を指摘されると私は何時でもぎくりとする。こんな生活が人の心にぴつたりと密着する藝術を生み出す爲めには非常に損な生活であるといふ否む事の出來ないハンディキャップがあると共に、今日々々に累されずに、しつくり落ち着いて立派なものを創り得る餘裕を與ふべき筈だといふ事實は、私の今までの仕事をあまり慘めなものにしてしまふ、私は私に與へられた生活の餘裕をどれ程亂雜に浪費して來たらうと思ふと苦しくなる。この點になると私は誰に詫びるよりも自分自身に膝をついて詫びなければならない。

然しパンと牛乳ばかり喰つてゐながら私は胃の强さを誇つたか。それは明かに誣言である。容易な生活をさも深刻な生活でもしたやうに思ひこんで、それを安々と通りぬけて來たのを、徹底的に人生のどん底を立派に切り拔けて來たやうに私は誇つたか。それは明かに誣言である。私は今まで私に與へられた生活を出來るだけ深く省察して、その中から吸ひ取られるだけの有らゆるものを吸ひ取らうと及ばずながら努力をした覺えはあるが、その生活を乘り越したが故に、これ見よがしの誇りを感じた覺えは嘗てない。明らさまにいはう。これまでの生活をするのに私はありつたけの力を出す必要を感じなかつた。私は十だけの力があるなら六位の力で生活して來た。若し私が十だけの力を搾り盡した生活をし、而してそれを立派に切り拔けてゐたら、その時、存分誇つて差支へないのを私は知つてゐる。

然し信じて貰ひたい。六だけの力で私が取り入れた實生活を私は有る限りの力で省察したといふ事が出來る。そこからのみ私は藝術を生まうとしてゐる。私よりも深刻な實生活の經驗を持つた藝術家は當然私よりも深刻な藝術を生むべき約束にある。私が安易な實生活の享有者でありながら、敢へて藝術に鬪はうとするのはたゞこの省察が私の實生活の缺陷を補ひ得ると信ずるからだ。

アルプスを旅行して來た人が山中の石塊をカントの所に持つて來た。カントは有名な出嫌ひで、散歩の區域まで自家の小さな地積に限つてゐたといふ程の人だ。カントはその石塊を見ながら、その旅行家にアルプスの景色を想像で語りはじめた。地層の模樣から山の形狀、動植物の分布まで眼に見るやうであつた爲め、その旅行家は驚いたといひ傳へられてゐる。學者が理智によつてなし得た所を藝術家が愛によつてなし得ない筈はない。

本質的にいふと藝術家を造るものはその所謂實生活ではない。その愛の强さ深さ高さだ。この平凡極まる事實は屢ゝ誤解されてゐる。愛が實生活を變化させるものであるのに、實生活が愛を生んだり滅ぼしたりするやうに考へられたり說かれたりする。藝術家は他人眼に深刻な實生活の所有者であるよりも愛の所有者でなければならない。兩者が共存した場合には固より理想的である。然しながら若しその一つのみが與へられる場合には、藝術家はためらはずに愛を要求すべきである。

然し愛は働く。愛は藝術家の實生活にまで働く。而してその生活を愛の尺度によつて變化さして行く。これは愛が必ず成し遂げなければならない結果だ。私が今までの生活を十だけの力でなく六だけで生活してゐたといふ事は恥づべき事實だ。本當に藝術家の內生活が燃燒してゐれば、その實生活も十だけの熱力で生きられねばならぬのだ。私はこの意味からだけでも藝術家たるべき十分の誇りを持つ事が出來ない。

私は又この意味からトルストイの實生活の活き方を尊いものに思はずにゐられない。或は實際に見たら、彼の生活にも慊らない所があるのかも知れない。けれども文獻の報ずる所から見れば、彼は近代の藝術家の中にあつて自分の藝術的良心と實生活とを最も嚴しく結びつけて考へた人と思はれる。彼は人生に對して絕望的な悲觀に陷らうとした瞬間を幾度も經て來てゐる。それでも彼は死ぬ瞬間に絕望しても遲くはないと思ふほど人生を愛してゐた。生きてゐる間に、生活力が用ゐ切れざる間に、人生に絕望するのは大それた假空の上にのみ成り立つ結論であるばかりでなく、そんな事は彼の愛の魂を汚し虐げる事だと彼は感じたに違ひない。そこいらには輕く人生の表面を撫でゝ見た位で、いゝ加減に深味の足りない見切りをつけ、人生を茶かし切つたやうな生活を尊いて、

したり顔をしてゐる藝術家と稱するものが隨分ある。何んといふ恥知らずだ。愛は執着だ。粘り強く、執念深くその對象に噛りつかないものは愛ではない。だから本當の藝術家の生活には人生に對して何等かの形の切ない肯定が裏づけられてゐる。トルストイの生活には甚しい矛盾や撞着があるにも係はらず、此の大事な肯定の經路が力強く表はされてゐると私は思ふ。藝術家としての私の生活も一生かゝつてあれだけの強い愛に動かされたい。

私の知つてゐる或る立派な女の思想家が私に云つた事がある。これからの藝術家はその生活を以て昔からの天才達が犯した罪惡を償はなければならない。と謂ふのは、過去にあつて、天才は普通の人間からは別物あつかひにされてゐた。天才は過剰に鋭敏な感覺の所有者であるが故に、人間としての道を踏み誤つても、踏みにじつても、それは已むを得ない。それを尤めてはいけない。天才もそれをくよ／＼思つてはいけない。天才はたゞ立派な藝術を世に提供すれば足りる。さう思はれてゐた。而して實際幾多の天才は實生活に對して氣まゝな横道を働いた。これは然し間違つてゐる。それは第三者からいへば、天才を崇める積りでゐながら寧ろ片輪あつかひにした事であり、天才自身からいへば、自分の長所を弱點にし終せた忌むべき事である。これからの藝術家はこの代代の負債を立派に償還するだけの覺悟がなければならないといふのだ。この言葉は實際問題として強く私の心を打つた。

私は思ふ。藝術家はその思想生活に於ても實生活に於ても最上の生活をしなければならない。藝術がその理想として最も健やかな人間性の表現でなければならないのは勿論の事である――何事にも例外はある。非常に暗示に富んだ調子の高い藝術が病的な人間性を基礎として生まれた事はある。然し古今を通じて最大な、人間の歴史

に有機的な交渉を持つ、價値が段々と高められて行くやうな藝術は、最も健やかな高い常識が生んだ藝術である事を忘れてはならない——最も健やかな人間性を表現する爲めには、藝術家は最も健やかな生活の所有者でなければならぬ、少くともそこに目標を置いてその全生活を導いて行かなければならぬ。藝術家の生活の創造は決して一朝一夕の事ではない。鋭い實感と嚴肅な反省。奔放な想像と細心な踏路。理想的な藝術家の生活は絶大な鎔鑛爐を思はせる。白熾の熱が要せられると共に、その熱を抱きすくめて放さない力強い障壁が要せられる。そこから甫めて頑固な鐵も飴のやうになつて取り出される。そこから甫めて頑固な人生が藝術にまで鎔かし代へられる。熱力の強いのに任せてそれを浪費する藝術家は災ひである。少くとも彼は生むべかりしもの丶全部を出生し得ずに死なねばならぬからだ。それは自己に忠實であらうとするもの丶してはならぬ事だ。

ロダンの生涯を思へ。

崩れかゝつた障壁の中に燃えかすれた焔を蓄へて、なほ藝術を生まうとする人の生活ほど悲慘なものはまたと世にあるまい。愛の不足からかゝる境遇に陷る不幸を私は想像するだに堪へない。愛か、然らされば死を與へよ。私はさう祈る。

（一九一八年二月「新潮」所載）

想片

讀書に耽つて時を過ごし、夜寒がしん／＼として膚に迫る頃、私はふと手近に犬の遠吠えを聞いた。私は思はず耳を欹てゝ深くそれに聽き入つた。腹から搾り出されるその哀聲には唯渾沌としてこれと定めがたい不思議な訴へが潜んでゐる。一節ごとに有らゆる哀愁を籠めたその聲が稍ゝ長く續いて、消えると共に、犬は何事も無益であると悟つたものか、無聲の夜はもとの寂寞の姿に還つてしまつた。

生まれるとから私は犬の遠吠えを幾度聞いたか分らない。然し今夜のやうな深い恐ろしい暗示を受けながら聞いた事は絶えてなかつた。地球の上に生を稟けたものが、その生存の根柢に觸れる事を餘儀なくされる時、身震ひをしながらぶつからずにはゐられない、あの深淵を覗き込む時のやうな淋しさが、ひし／＼と迫つて來るではないか。それを無事に突きぬける爲めには、一生涯の努力を寄せ集めてもまだ足りないやうな淋しさが。

そこにもある。こゝにもある。さういふ淋しさは私達の周圍の到る處にある。而して私達に無常を思へと云はぬばかりに、それらのものは私達を幾重にも圍んでゐる。

それだのに私は――鈍い神經の持主なる私は、毎日平氣にそれを見逃しながら一日々々の安きを偸んでゐる。何故もつと目覺める事が出來ないのだらう。目覺めて小さなものゝ私語にも慈悲深い耳を傾ける事が出來ないのだらう。

私は筆を執つて紙に臨む事を恥ぢねばならない。

「米は南京おかずはあらめ、何んで絲目が出るものか」
「製絲工女も人間でござる、責めりや泣きます病みや寝ます」
「板になりたや帳場の板に、なりて手紙の中見たや」
「願ひ上げます見番様よ、どうぞ一夜のお情けを」
「今年やうれしや見番様の、お目にとまりて優等工女」

　これらの俗謡は信州の諏訪で製絲工女か歌ふのださうだ。これを大きな聲で讀み上げる資格を私は持つてゐない。誰かその資格を持つてゐる人はないか。而して大きな聲でそれを歌つてくれないか。而して私を始め、世の中の眠つた魂をゆり覺ましてくれる人はないか。

　尊い藝術の材料の如何にあり過ぎる事よ。それを拾ひ上げて自由に形を與へる人の如何に少な過ぎることよ。さういふ人生は餘りに淋しい。苦痛と悲哀とを胸一杯に包みながら、啞のやうに默つて歩いて行く人類を見るのは寂しい。

　優れた藝術家が出て來るやうに。私はその人の前に本當に謙遜な感謝の心を以て跪きたい。

　讀賣新聞で私の「小さき者へ」に對する近松秋江氏の感想を讀んだ。而して自分の力の不足を悲しんだ。秋江氏は私が出産の光景を描いた所を讀んで思はずふき出したと告白して居られる。さうだ、凡ての眞面目な努力の有樣を、その當事者の心になれない第三者が見ると、凡そ滑稽な物であるに違ひない。例へば二人の人が鋭い刄を持つて殺し合ひをしてゐる恐ろしい場合でも、遠くに見てゐる人には刄が見えなかつたら、少くとも刄が棒切れか何んぞのやうに見えたら、見てゐる人は、その場の滑稽に思はず知らず吹き出したに違ひない。火事

を見ずに火事場で働く人だけを見、死者を見ずに臨終の床にすがり附いて泣く人を見たら、誰でも至極の滑稽を感ずるに決まつてゐる。

秋江氏が思はずふき出したのは、私があの小品の中に、讀者を十分に眞面目にするだけの力を持つてゐなかつた證據だといはなければならない。あの出産の場面の描寫が緊張したものになるかならないかは、あの小品全體の與へる心持が深いか淺いかによつて決まるのだ。本當をいふと、讀者の資質如何によつて決まるのではない。勝れた作品は、讀者が如何に馬鹿にしてかゝつても、讀んでゐる中に何時とはなく引き入れられて、批評的な態度を捨てゝ、作者の心持で讀者の心が充ち溢れるまでになるやうなものでなければならない。そこまで行つてゐなければ、本當の藝術品といふ事は斷じて出來ない。藝術家もそれ以下のもので滿足してゐてはならない。

秋江氏の一言を私は深い頂門の一針として頂いて置く。而して足らぬながら、更に努力を重ねて見る。

私が秋江氏に對してかういふ物の云ひ方をするやうになつたのは、皮肉からではない。又秋江氏に對して恨みを持つからでは勿論ない。

私は去年岩野泡鳴氏と新聞紙上で或る事柄について論戰をした。私はその時も隨分激しい言葉遣ひをした。然し途中でそんな言葉爭ひの無益を深く感じた。それ故泡鳴氏に云ひ送つて二人でゆつくり問題を論じ合つて互の理解を得、若し必要ならば、兩人の名前でそれを公表しようとした。

その後私は倉田百三氏が「帝國文學」に書かれた「文壇への非難」を讀んで深く打たれた。實際他人の攻擊に對する今までの私の態度は非常に間違つてゐた。氣が附きかけてゐた所にこの立派な感想を讀んだ事は眞に私の幸だつた。私がいくらかでも私の本性の本當の要求に近づくやうになつた事を倉田氏に向つてお禮する。而して

今まで私が亂暴な言葉で防戰の矢を放つた諸氏に對して陳謝する。

餘りに易々と自分の態度を變へようとする私は、輕薄な淺慮な男であるといふ非難を免れる事が出來ない。これは仕方がない。又僞善的な男であるといふ誹謗を受けないとも限らない。これも仕方がない。

唯信ずる事の出來る人だけには信じていたゞきたい。これからも私はどんな場合にか、思はず我れを忘れて、人を傷けるやうな言葉を出さないとは限らない。恐らくそれは私のしさうな事だ。然し本當は私は何處か心の隅でさうした事に苦痛を感じてゐる――人間の凡てがさうであるやうに。而して私はその過ちを二度としないやうに勉めるだらう。それを信じていたゞきたい。

倉田氏といへば、「文壇に對する非難」を讀んでから急に思ひ立つて氏の「出家とその弟子」を讀み終へた。實は私の若い友達の二三人がそれを讀んで非常に感心して、私にも是非讀めと云つてくれた。而して一人はその書物を貸してくれた。私は纒まつた氣分の時讀みたいと思つたので、一日々々と延ばしてゐた。而して一時はそれを眞宗の或る僧侶に又貸しゝた。(その僧侶は惜しい事にはそれを讀み終へなかつたやうだ。因緣の薄い人といはなければならない)所がこの間から私は急に讀み度くなつて急いでその僧侶からそれを返して貰つた。

二日の間私は全くちがつた氣分に喰ひ込まれてしまつた。これこそ藝術だ。私達が世界に向つて誇つていゝ勝れた藝術だと思つた。白狀するが、私は幾度も涙が出て來て字を拾ふ事が出來なかつた位だ。こんな勝れた人を私達の間に見出した事を何んといつて喜んだらいゝだらう。私は自分の心がこれを勝れた藝術と見分ける事が出來、大きな聲でその所信を公言し得るだけに、自分の藝術上の視覺が正しかつた事を自分に感謝する。倉田氏は病身だと聞いてゐる。氏の肉體にも新しい力が惠まれる事を私は心から祈る。

然し私は倉田氏の足跡に從つて歩いて行く事が出來るか。悲しいけれども私にはまだそれが出來ない。私にはまだ有り餘る不平があり、憤怒があり、憎惡がある。私は大それた未成品だ。苦しみながらも私はそれをどうする事も出來ない。それを毒飯のやうに吐き出してしまふまでは私は淸いものになれない。

私は四十だ。而してまだそんな所に彷徨してゐる。而して自分の生活を本當に改造するだけの勇氣すら持つてゐない。恥づべき事だ。然し實際を曲げる事は如何しても出來ない。それなら何故私は公衆に向つて書くか。私の煩悶を傳へたい爲めにだ。幽かながら私が辿つて行かうとする煩悶から解脱への一路を白狀したいためにだ。多くの讀者にはこれは迷惑なことであるかも知れない。然し或る少數の讀者は私の叫喚の中から、さゝやかながら愛の苦しい眼覺めを見分けてくれてゐることを思ふ。私はそれにすがりつく。

成就の遠い未來は遙か先にある。それを目がけて私は牛のやうにのろい、然ししぶとい歩みを運んで行かう。

（一九一八年四月、「新潮」所載）

林檎の野（米國）

（「花の趣味と各國民性」といふ問に答へて）

米國には、日本の櫻花や菊花のやうに National flower と云ふべき花のあることを聞かないけれども、St.te flower と云つて各州を代表する意味の籠つた花があることは聞いてゐる。

しかし私は米國人と云ふと先づ第一に林檎の花を思ひ、林檎の花を見ると米國人を聯想に浮べる。

林檎の花は健全な若い婦人の頰の色を見るやうな薄紅色をしてゐて、何とも云ひやうのない野趣と、無邪氣な好い感じを持つてゐる。この花は庭園に美觀を添へる目的で用ゐる場合には不適當であるが、廣々とした田園の花として眺めるには實にこの上なく相應はしい。

私はかゝる點から林檎の花が、米國人の伸び〳〵としたリファインメントに捕はれない心持を現はしてゐると思つてゐる。

私は都會の喧騷な刺戟に疲れてしまふと、よく田舍に旅をして行つて、其處此處の果樹園に活々した初夏の光を浴びて美しく咲き誇つてゐる林檎の花をみて讚嘆の聲をあげたものだ。感じ易い旅人の心にこの果樹園の美觀が強い印象を殘した。

林檎の花の次に私の心に浮ぶのはライラックである。この花は紫と白との二種類あつて好い香氣を持つてゐる。日本でも北海道には野生のものがある。

私の住んでゐた東部米國の、殊に北方では、ライラックが到る處の庭園や生垣に植ゑられてあつて、米國人の

非常な愛着を牽いてゐる。

この花は一年中で最も好い氣候の五月中旬から六月へかけて開花期を持つてゐる。綺麗に晴れた碧空から、躍るやうに降りそゝぐ光線にぬれて咲いてゐる紫ライラックの花は實に美しい。新綠の草原に寢轉んで清淨な空氣を呼吸し、田園の靜寂を破る唯一の虻や蜜蜂の翅音を聞き乍ら、この花の茂みを眺めてゐると實に好い氣持になる。よく田園詩にあるやうな靈魂の搖籃のやうな自然のやさしい恩惠を感じる。

路傍に咲いてゐる瑠璃色の多瓣な矢車草、可憐な白いマーガレットも非常に多い花で、そして米國人に好かれてゐる。マーガレットは牧草のためには有害な雜草ではあるが、牧場にはきつとこの野趣ある可憐な白い花が、媚びを知らぬ田舍娘のやうに咲いてゐる。米國人はこれらの草花を折り集めては食卓や机上を飾つて慰んで居る。野の花の野趣や無邪氣な感じに彼等の心が牽きつけられるのだ。

一體、米國人に限らず西洋人は花の趣味が豐富で、愛着も强いやうである。だから米國などでは公園は勿論のこと、個人の庭園にも美しい草花が植ゑてある。殊に繁華な都會の公園地の花壇などは、數學的造園法によつて莫大な費用を惜氣もなくかけて、花卉を綺麗に植ゑつけてゐる。

藝術の分野に取り扱はれた花卉は米國の建國の歷史そのものが新しいだけに非常に少いやうである。

米國建築の白眉とも稱すべきコロニヤル・スタイルと云つて、ひどく太い柱を幾つもつかつた素朴な重々しい感じのする樣式があるが、これなども希臘のコンリト風の柱の裝飾などのやうに花卉が少しも應用されてゐない。

文學の方面では、詩人ホヰットマンが彼の作中にライラックの花を歌つてゐるが、しかしこれは佛蘭西人が「花」に就いて謳つたやうなそんな重い役目を負うてゐるのではない。米國に於て一般的に愛誦されるロングフェローやホヰッテアは、彼等の美しい優しい詩の中で、私が米國人の氣質を象徵してゐるやうだと云つた林檎の花を謳

つてゐる。

米國人が美術品を取り扱ふ態度――それは美術品を美術品として享樂し、珍重し、愛玩することなく、自分を裝飾する物品の一つとして取り扱ひ愛玩する態度を、「花の趣味と米國民性」と云ふ問題の上に移して考へることが出來る。米國人の多數は、美術品を美術品として愛さぬやうに、又花卉をも單に花卉として愛撫することをしない。みな自分を中心として自己の裝飾に使ふのである。利用するのである。こゝに或る種の文化を產み出しつゝある米國國民性の根强い特色があると私は思ふ。

（一九一八年四月「新小說」所載）

ある六月の日記

十七日

昨夜ディヤル・チバを一錠呑んで寢たのだけれども、黎明の微光が雨戸の上のガラスを通してさして來ると、もう瞼が開いてしまつた。夜着の袖で眼を隱して、寢息をまねて見たりするけれども寢つかれない。この春の熱病以來の惡い習慣になつて了つた。今日も五月雨が朝から降つてゐた。何んといふなつかしい潤ひの感じだ。私位雨の好きな人間は珍らしいかも知れない。きら〳〵した日光が梟のやうに嫌ひで、書齋の中を薄暮程に暗くして置く私には、雨もよひの空の光程親しまれるものはない。ミレーも曇つた空の讃美者の一人である。それを發見した時は可なり愉快だつた。ミレーに云はせると曇つた空の下にある物象は、色彩の纎美な特色を發揮するさうだ。雨の音もいゝ。その潤ひもいゝ。第一私のひそみ勝ちな眼がはつきりと大きく開く。熱し易い腦が過度の乾燥から緩和される。

朝の中は隣りから生馬夫婦が來て、一葉女史の全集を返してくれた。今夜母と歌舞伎座に行くので、母に「にごりえ」を讀ませようと思つたのだ。母が讀んでゐるからふと見ると「われから」を幾頁か讀み進んでゐた。そこは違ふといつたら「にごりえ」といふのはその本全體の名で、その一章に「われから」といふのがあるのだと思つてゐたと云ふので大笑ひをした。書齋に行つて「新時代」に寄せる「藝術制作の解放」といふ小さな感想文に筆をつけて見たが氣が乘らなかつた。書けないとなるとどんな下らないものでも書くのがいやになる。而して何時でも期間が逼つてから攻め立てられて苦しい思ひをする。こんな惡い習慣を破らなければ到底大作に手を染

める時期は來ない。大變惡い事だ。原稿紙に向ふのが厭になつたので手近な書物などを繰り擴げて讀む。S夫人が貸してくれたフランスの「シルベストル・ボナールの罪惡」を開くと强烈な香料の匂ひが部屋に溢れるかと思はれる。香料の爲めに弱い心臟を殊更弱くしてゐるやゝ病的なその人の趣味が私にも乘り移るやうだ。香ひは音樂に近い效果を人の感覺に與へてくれる。

歌舞伎座は二時から始まるといふので、母と生馬と私とは丁度その時刻に直營の茶屋に行つた。「廡の葉會」と「一葉會」ともう一つの總見の札がかゝつてゐた。表看板は皆取り入れられて入口正面の所に竝べてあつた。新派劇の看板といふものは世に俗惡なものゝ一つだと思ふ。劇場に這入つてから廣告を見ると開場は三時となつてゐて、見所には撒いた程しか人は來てゐなかつた。私等の席には生馬の招いた畫家の長島氏が、通知通り一時半から來て待つてゐると云つて、孑然としてゐた。

恥かしながら私は覺えてゐない程以前にこの座に來た事はあるが、その後は三四回立見をしたゞけなので少しも案内を知らない。が四人連れ立つて先づ三階に登つて見たが、そこにはこれといふものもないので、この日の狂言の繪葉書を買つて二階に降りると、そこに故春葉、一葉の遺品が陳列してあつた。可なり廣い疊敷きの座敷の中央に椅子テーブルが据ゑてあつて、番人の娘が二三人所在なさゝうに散らばつて講談か何かを讀んでゐた。その床の間には擦筆畫らしい春葉の大きな肖像が安置してあつて、誰からかの造花の大きな花環が供へられてあつた。床に續く違棚といふやうな所には、春葉、一葉の遺作と、春葉の「憂き身」の原稿とが陳列してあつた。その右手にあたる一間位の壁間に一葉の遺品が列べてあつた。

全集で親しみのある、濃くない髮をつゝましく結んで、さつぱりした衣服を着た半身の肖像が少し引き延ばして懸けてあつた。甲州人の一種の覇氣に、江戸兒の切れ味のよさをつきまぜて、その當時に受けてゐた女性のし

がない運命といふ樣なものですつかりそれを包みこんでゐるやうな女史の氣性を、其の肖像は可なり忠實に描き出してゐると云へよう。其の容貌の何處にも悒欝らしく見える所はないけれども、一種の陰影が寫眞全體に漂つてゐる。あんな時代にあんな境遇に生まれて來べき私ではなかつたのだといふ形が。十分の諦めの下からほの見えてゐる。それが彼女の容貌の charm であるらしい。「にごりえ」を讀むと、お力が何か物に飽き足らぬやうな風があるのを結城が不審して――お前は出世を望んでゐるな――といふ所がある。讀んで見ると誰にでも解るやうにあすこの件だけは作者がどうしたのか突然客觀の立場に躓いて露骨にも主觀的な弱點を取り繕ふ暇もなく暴露した跡が著しい。私はあすこを讀んで思はずひやつとした。一葉といふ人にもあんな破綻が見える事があるのだ。修飾されない主觀――それは一葉の裏をかいて面白い。天才が到底人間であるのを裏書きしてゐるのが好もしい。一葉の容貌には、女だけに、流石にそんな隙は見せてゐない。然しながらよく見てゐると、さうした空氣は何處かに漂つてゐる。

肖像の下には馬場孤蝶氏に送つた手簡の一部分と、色紙と短冊が一枚づゝ竝べてあつた。圓味のある美しい手蹟だ。自分でも少し歌の心得のある母は千蔭の直流だと感じ入つてゐた。手簡の文句がまた痛く一葉らしいものだつた。何か古事までを苦もなく引照して少し氣取つた文體で、孤蝶氏に對してからかふやうな、親しみを籠めたやうな一種の淡いコケトリーが現はれてゐた。その前に置かれた分厚な原稿は女史の本當の生活史らしく私の眼に映つた。

東洋軒の出店で紅茶を飲む頃に樂屋からしやぎりの音が聞こえた。長島氏の京都訛りと滑らかな容貌の感じとが私を珍らしがらせた。そこを出て廊下に來ると、女將らしい肥つた婦人が二三人こつちを向いて來たが、瘦せた若い男が附き添つてゐて、どうも餘り新しい文學書類を讀みつけないから、「にごりえ」の筋もはつきりとは判り兼

ゐるといふやうな事を辯解してゐた。

座に就いて暫くすると木が這入つた。右後ろの特等席にはS家の老若奥さん達が來てゐた。左の同席には中戸川氏と山内氏が來てゐた。暫くすると𨻶も來た。その外に一葉會で來たらしい人の顔は見えなかつた。入りは七分といふ所であらう。「にごりえ」の頃になると一杯になつてゐた。

春葉の「憂き身」は長帳場の五幕物である。喜多村でも河合でも私は始めて見たのだ。その人達がこの劇を演ずるのにどれ程自分の技倆を發揮する事が出來てゐるのか、始めての私には少しも判らない。この劇で一番問題となり研究を要するのは勿論日出子といふ河合の持役であらう。彼女は一面に於て自分の過去の罪惡（日出子はさう信じてゐる）を隱し、その罪惡の結果なる一子を捨てゝも、生活の安定と榮譽とを心懸ける物慾の强い女でありながら、その道德觀は全然在來の習俗から脱せず、一子に對しても可なり性格の弱い女の持つ束縛を有してゐるのだ。而してこんな矛盾した性格や習性から胚胎された擧動が悉く無自覺に行はれて行くのだ。だから其の苦悶にも覺悟にも躊躇にも遂行にも何等倫理的な意義はなく、物質的な力の離合が勝手放題に彼女を弄んで最後の悲劇を生むに過ぎない。部分々々には人は締木にかけられたやうに涙を搾らされる。然し凡ての人物の運命が五幕目の終りに來た時、人は涙を無理强ひされた事を思はずにはゐられなくなる。この劇を見終つてから私の感ずる所は苦々しさだ。人間の魂が盲目な物質の力にこづき廻され、虐げられ、踏みにじられて、しかも一度も眼も覺まさず、物質の力の上に其の輝きを與へる事もなくして、おめ〳〵と摧かれて了つた。その苦々しさを感ずるばかりだ。

それでもいゝ。作者が若しそこに氣が附いて、さうした無知な人間の群れを意識的に描かうとしたのならそこに一つの藝術が成り立つ譯だ。然し――それは原作者の仕業か、劇化した人の仕業か知らないが――此の劇の結

末には道徳的結論とか運命的な成り行きとか云ふべきものが明かに示されようとしてゐる。そこに作家の洞察力と倫理觀との間に非常に廣い溝がある。それが大變いけない。河合の日出子が少しも觀客の同情を牽く事が出來ないのはこゝにあるのでないか。如何なる名優でも筋の解釋を全くし直さずには此の劇の女主人公を本當に悲劇的なものにする事は出來まいと思ふ。

四幕目の時母は無理强ひに涙をしぼり出される苦しさに座を外づしたので、私も一緒に座を立つて二階の花月で夕餉をしたゝめた。時間が早かつた爲めに客は四組ほどよりなかつた。食堂の一隅に枯川氏の一團を見出した。食堂を出て廊下を少し歩いて見た。雨は小やみになつてゐた。眼の下には狹い横町があつて、向う側に建ち續いた二階建の長屋の一軒には球突きのらしい看板が出てゐたが、客はなかつた。その隣りの二階の手欄から下には簾が垂らしてあつて、その上に束髮の頭が見えたり隱れたりしてゐた。それが裁縫でもしてゐるらしかつた。人通りのない往來をたつた一人印半纒を着た五十恰好の男が足駄を鳴らして通つて行つた。束髮の頭が一際高く持ち上つてそれを覗いた。と思ふと、すぐ引つ込んでしまつた。

穴の奥とも思ふやうな暗い深みに舞臺が見えて、神社の鳥居の前の所に二人の女が立つてハンケチを眼にあてて何か話し合つてゐた。眼の前の棧敷に後ろ向きになつて坐つてゐる見物の婦人連は、一人殘らず舞臺の人を眞似するやうにハンケチを顔にあてゝゐた。そこにあるいくつもの棧敷の入口には「柳橋樣」といふ札がかゝつてゐた。母が卷煙草二本を吸ひ切る間を待つて私達は風月の出店に行つて、茶を啜らうとした。給仕をする女が泥まみれになつた足駄を仰向けに後生大事に右手の上に載せて下から昇つて來た。而して手も洗はずに私の所にアイスクリームを持つて來てくれた。たしかにそれを見届けながら私は平氣な顔をしてそれを喰べた。私はよくそんな事をする男だ。

座に歸つた時四幕目は終りに近づいてゐた。棧敷にゐる人達は皆んな泣いてゐた。所が中途から舞臺を見る私はどんな悲しい姿が演ぜられたのを見ても、恥かしい程の泣蟲な癖に、泣く氣にはなれなかつた。それを經驗するのは私にとつて不思議な感じだつた。

いよ〳〵「にごりえ」が演ぜられる番になつた。「憂き身」で失望に近い退屈を感じてゐた私は不安なしには開幕を待つ事が出來なかつた。

然し第一幕を見て感激を感じた私は第二幕に來て深く感動してしまつた。原作と比較して見るとこの劇曲にもその改作に苦心の跡は見えながら可なりな無理がある。例へば原作ではお力と結城の關係の進行が三回に亙つて別々に描出されてゐる。お力が結城を泊らせるまでには實に微妙な心理の推移が行はれてゐる。それをこの劇では一場にしてしまつて、お力を身受けしようとする。原作では最初の會見にお力に云はせてある言葉を、その儘使用してゐる。これではお力が本當に働く餘地は無くなつてゐると云はなければならない。

そんな缺點があるにも係はらず、此の劇の戲曲的效果は前のものに比して何んといふ相違だらう。河合でも喜多村でも前の芝居の河合や喜多村とは全く別人の觀がある。殊に喜多村は、所謂儲け役ではあらうけれども、豐醇な人間味を十分に出してゐた。私は一葉と春葉との才能を比較しようとは思はない。第一私は春葉のものを全く讀んでゐない。然し兎まれ一葉が或る種類の生活を見貫く力の天才的であるのを誰が拒み得よう。劇としての「にごりえ」の效果は、實に女史の天才の力が色々な障碍物を潜り抜けて現はれたものだと云つていゝ。それに喜多村や木村や河合の眞面目な努力が戲曲化の不十分さを補つてゐる。

第一幕で喜多村の源七が、三菱の古半纒か何かを着て、菊の井の上框に腰をかけて、酌婦が吸ひつけてくれる長煙管を受け取る仕草を見ると、私の眼からはどうしたものか涙が續けさまに流れ出た。而して思はず嘆賞の聲

を出した。疊に近く手を出して下から煙管をそつと受けて、踞み加減に體の方を其の吸口に持つて行く、あれは源七の心を畫にして描いて見せてゐる。先きの望みをぷつりと斷ち切られた、勝氣でゐて極端に涙つぼろいお力が、運命的に惚れ込まずにはゐられない男の甲斐性なさと、控へ目な實意とが共の儘現はれてゐた。

第二幕で私は木村のお初に感心した。喜多村の脇師としても、あれで十分だと思ふ。若し喜多村が度々延び上つて、近所の菊の井から漏れて來るお力の三味線と歌とに聞き惚れるわざとらしい仕草がなかつたら、源七の役は更に光を增したかも知れない。この幕も原作ではたしかに二回に亙る描寫を、縮めてゐるのだと思ふ。然しこの場合は第一幕の場合よりも遙かに成功して不自然の感がない。先づ心を奪はれ、生活を奪はれ、妻子を奪はれながら、不幸の源であるお力に益〻盲目的な執着を深めて行つて、自分や妻子を救ふ事が出來ないばかりでなく、自分ながら思ひもよらない深刻な執着と、淚もろい女の弱味にしつくりはまり込んで行くやうな、弱味の强味とでもいふべき性格を以て、とう〳〵お力をさへ死に導いて了ふ不幸な源七が、我と我が身をもてあつかひ兼ねて、性根なく起きて見たり轉がつて見たりする苦悶は可なり强く現はれてゐた。

然し第三幕目を見て私は徹底的に失望して了つた。一葉から離れるとその瞬間にあの作は死んでしまふ。天才とは實に不思議な煉金師だ。「誰も人の居ない靜かな寂しい所がないものか」と云ふやうな述懷は本文通り使つてあるけれども、その所を失つてゐるから、それがお力の口から云ひ出されて、ひどくわざとらしいものになつてしまふ。

然し兎に角にも「にごりえ」には、「憂き身」に見られない嚴肅なモーラルが痛感せられる。私のいふモーラルとは物質力に對して精神力の優越が證據立てられた場合を云ふのだ。お力も源七も、大多數の人間があるやうに、缺點だらけな人々だ。而して二人とも社會上の約束と習俗とを滅茶々々に踏み躙つた。意地惡な運命は彼等を思ひ

のまゝに飜弄した。然し彼等はどんな事があつてもその最も眞實な最も深い要求を踏み躙りはしなかつた。彼等はその要求の爲めに潔く凡てを擲つて殉死した。その pathos に私は打たれて泣くのだ。春葉のものにはこのやうな生活の髓がない。

本雨の中で源七が腹に脇指を刺し通してお力の肩にもたれかゝると最後の幕が引かれた。時計は十一時を過ぎてゐた。

又雨がしと〳〵と降り出してゐた。出口の混雜の中で鏡花氏の奥さんに始めて紹介された。三人自動車に乘つてから急に思ひ附いて、近所だから泉の奥さんをお呼びしようと、生馬が帽子も被らずに雨の中を尋ねたけれども無駄だつた。先刻私の前まで來て挨拶をした一葉會の發起人の馬場孤蝶氏が折鞄を左手に持つて人ごみの間を分けながら歸つて行くのが見えた。

三人は車の中ですつかり一葉に感心して了つてゐた。

寢たのは十二時だつたらう。翌日話し合つて見ると母も生馬も久しく寢られなかつたさうだが、寢附きの早い私だけは仕合せにもすぐ眠りに落ちた。

（一九一八年七月、「新潮」所載）

武者小路兄へ

武者小路兄。

あなたや同志の諸君が合理的な生活を深く望まれた結果、あなた方の實際生活を改造しようと企てられたに就いて、世間が色々な評判をし、既にそれに關して意見を公表したものさへあるのを知りました。早計に失するかも知れないが、私にも少し云はせていたゞきたいと思ひます。

昔から人類の生活はその進化、境遇の變化につれて幾度か調節され改造されて來てゐます。過去と云ふ霞を透して眺めてゐるから、その調節作用は緩漫なものゝやうに見えるけれども、而して何んでもない自然な經路のやうに思へるけれども、假りに想像を過去のその時代々々に遡らして考察して見ると、人類生活の樣式は可なり根本的な變化を幾度か經て來てゐるし、新しい樣式が古い樣式に取つて代る時には、出產の時と同樣な、生か死かといふやうな危機を潜つてゐる事を發見します。然しながら人類が眞に更生する爲めには、眞に活動的な生活を持續して行く爲めには、いやでもこの危險を犯して、新たな道を切り開いて行かなければなりません。

而して今の時代はその飛躍の時期である事を思はせます。奴隷使役の時代に代つた封建制度の時代、封建制度の時代に代つた資本制度の時代――卽ち今の時代は既に老いました。オーエンが出、サン・シモンが出てから百年の餘になります。日本が封建制度から資本制度に移つたのは五十年前の事だと云ふけれども、歐洲に十分發達してゐたその制度をその儘輸入したのだから、その凡ての特長と共に弊害も思ふ存分五十年の間に現はれて來てゐます。

如何なる時代の如何なる制度にも弊害の伴つて起るのは知れ切つてゐます。然しながらそれを恐れて現存制度の弊害がつのりつのつて、人の心まで萎まして仕舞はうとするのを看過してゐる譯には行きません。どんな弊害が起つて來るかは知らないが、兎に角今の制度よりも人類の生活をより幸福に導くと思はれる境遇に轉化する必要は日に〳〵逼つてゐます。

あなたも私も割合に安固な衣食住を保障されてゐる家に生まれて來てゐます。それだのに、この人から羨まれるべき生活の中にも、私達は絶えず傷ましい思ひをして、生活してゐなければならないのです。第一私達は都合のいゝ境遇に生ひ立つたといふ點から私達自身の才能をすら割引きして考へなければならないのです。公然とこれは自分が自分の力で造り上げた才能だぞと云ひ切る事が出來ないやうな立場にゐます。私達の持つてゐる品性でも、健康でも、愛心でも、こんな境遇にあればこそと省みねばならぬ弱さを持つてゐます。私達の本性が味はゝうとする幸福にさへこんなハンディキャップを置かねばならないのですから、物質的の幸福に對して傷ましい思ひをし續けなければならないのは勿論の事です。私達はその存在をぎこちなく縛られてゐます。本當の自由はありません。資本制度の恩澤を十分に受けてゐる私達ですらさうなのですから、この制度のまゝ子である人達の悲境は更に思ひやられます。

私の若い友が云つた事があります。今の制度の下にあつては、資産階級の人の中に篤志な人があつて、自責に堪へないで勞働者になつたとしても、その人が餘計に働けば働くだけ、勞働階級の人の働く分野を蠶食して迷惑を及ぼす結果に終るに過ぎない。こんな制度には何處か間違つた所があるに相違ないと云ふのです。これは本當に考へて見なければならない事です。

生産過剩の私有を正當とし、その量の大小を以て人間の沽券を決めるといふ事は餘りに情けない事です。かう

簡單に云へば誰にでも直ぐ判る事のやうに思へますが、實際になつて見るとこの小ぽけな現象が中軸になつて、生活機關が動いてゐるのですから恐ろしいのです。議會は民意を代表せずに金意を代表してゐます。社會は――人が集まつて出來上るべき筈の社會は――金が集まつて出來上つてゐます。戰爭と平和は結局資本家といふ少數者の手によつて勝手に左右されてゐます。而して多數者の生命は無殘々々その犧牲になつてゐます。かゝる現象は長い說明を加へるには餘りに平明な現象です。如何なる權力がそれを被ひ隱さうとしても、被ひ隱す事の出來ない程平明な現象です。私のこの小さな手紙がそれを云ひ現はしたからといつて、若しこの手紙を生き埋めにしようとするなら、この手紙の呼ぶ聲より百倍も千倍も有力な大きな聲が叫び出すに違ひない程平明な現象です。もう凡てのごまかしは無駄な事です。社會を治める人も治められる人も、この一事にしつかりと氣がついて、回避する事なしに、金の洪水から人間を救ひ出す爲めに力を盡さなければならない時が來ました。姑息な彌縫をして、一時を凌いではゐられない回轉期が到來してゐます。

それを無視する者は滅びます。人類の意志はかゝる人類進化の邪魔物を踏みつぶさないでは置きますまい。

それなら次の時代に資本制度に取つて代るべきものは何んでありませう。それは如何なる形式を取るにせよ、廣い意味に於て人間が金に支配されず、金を支配する制度であるべき事だけは明かです。今の制度の下では資本主も勞働者も共に金に支配されてゐる點に變りはありません。資本主は金を集める爲めにその力量の全部を集注し、勞働者は力量の全部を提供して、生活を支へるだけの金を得ようとしてゐます。人類全體が斯ういふ風に金の締め木にかけられて、藻搔き苦しまねばならぬといふ事は悲慘極まる事です。人類の尊嚴が何處に認められませう。人類の本當の自由が何處に發見されませう。

あなたがこの不幸に忍び得られなくなつて、實際生活の改造に着手された事を私は尊い事だと思ひます。その

方法の内容はまだ全部發表されない事であるし、又これから研究を重ねて行かれる事と思ひますから、委しく立ち入る事は避けますが、あなたが思ひ立たずにはゐられなくなつたその心持を私は尊く思ひます。而して何事につけても、他人の新しい企てに對して、一とひねりひねつて皮肉な見方をしないでは氣のすまない或る種類の傍觀者をはしたないと思ひます。他人の企てを批評する權利は、それを企てた人と同等以上の熱意を持つた人にのみ許される事だと私は思ひます。

私は殊に藝術家なるあなたがこの企てに走られた事を愉快に思ふものです。私一個の見解によれば、今の時代にあつては、藝術家は謳歌者であるよりも改革者である事を餘儀なくされると思ふからです。奴隷使役の時代から封建時代に代る時には、宗教が强權に結び付いて人心を收攬してゐました。封建制度から資本制度に代る時には、科學が思潮の根柢を支配してゐました。

然し科學は科學自身が告白する如く到底人間の全存在を滿足させる力ではありません。科學の力を借りて自然を征服しようとした第十九世紀の文化は、その功績と共に存分に弱點を暴露してゐます。この缺點を補ふ力は藝術にあると私は思ふものです。實際藝術の勢力が實生活の中に浸徹して、生活の實質に影響した著しさからいふと、現代に比すべき時代はなかつたと思ひます。イブセンが婦人問題や信仰問題に與へた暗示、トルストイ、ドストヰブスキーが露國の國運に與へた威力、ロダン、セザンヌなどの思想的影響は他の時代に見難い强烈なものであります。それは現代の藝術家が强ち他の時代の藝術家に立ち優れてゐるといふ譯ではなく、現代は藝術以外の精神活動から未來に對する暗示的な指示を受け難いからの事です。殊に未來を嗅ぐに鋭敏な鼻を有する者は藝術家です。彼等は未來を直覺します。現在のやうな時代の囘轉期に當つて、藝術家の見地が重く見られるのは當然です。それだけ藝術家には尋常ならざる覺悟が要求されてゐます。あなたは先づ立つてその要求に應じようとされる

のです。私も藝術にたづさはる一人としてあなたに對して敬意を表します。

然し率直に云はして下さい。私はあなたの企てが如何に綿密に思慮され實行されても失敗に終ると思ふものです。失敗に終るのが當然だと思ふのです。あなたがこの企ての緒にも就いてもをられない時、こんな事を云ふのは幸先の惡い事のやうですが、私は思ふ所を云ふより外はないのです。あなたの社會を周圍から取りかこむ資本主義の社會は何んと云つてもまだ十分死物狂ひの暴威を振ふでせうから、ドハボールの移民達が外界から被つたやうな壓迫を受けられるでせう。あなたの社會の内部の人も、縱令覺悟は出來てゐても、今まで訓練を經てゐない境遇に這入つては色々の蹉跌を惹き起すでせう。

けれども失敗が失敗ではありません。今まで斯かる企ては凡て失敗に終つてゐます。然しそれを普通の意味の失敗とは云へません。若し今の世の中でかゝる企てが成功したやうに見えたら、それは却つて怪しむべき事であらねばなりません。そこに人は屹度妥協の臭味を探し出す事が出來るでせうから。

要するに失敗にせよ、成功にせよ、あなた方の企ては成功です。それが來るべき新しい時代の礎になる事に於ては同じです。日本に始めて行はれようとするこの企てが、目的に外づれた成功をするよりも、何處までも趣意に徹底して失敗せんことを祈ります。

未來を御約束するのは滑稽かも知れませんが、私も或る機會の到來と共に、あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます。而して存分に失敗しようと思つてゐます。草々。

（一九一八年六月二十日稿。一九一八年七月、「中央公論」所載）

私の友達

私の小さい時に住んで居た所は、或る役所の官舍であつた爲めに、そこには六十戸餘りの官吏が、同じ程度の生活をしてゐたので、そこに生まれ出た少年等は、自然一つの交遊團體とでもいふものを形作つて居た。そこには子供乍ら種々な傾向を代表したものがあつて、まるで活社會の小さな縮圖のやうであつた。私は、その社會に於ける父の位置が好かつた爲めであるが、一つの少年の團體を率ゐてゐた。そのうちには、能辯で、才走つて、萬事に世話を燒く事の上手なSといふ目の爛れた、口元に鳥のお灸を据ゑられた少年も居たし、Kといふ色白な坊つちやんらしい柔順な少年も居たし、Mといふ少しせゝつこましい下町肌のお上手な少年も居たし、K・Oといふ身體のがつしりした、腕力の強い、しとぶい性質の少年も居たし、S・Hといふ出つ齒な、頭の横に文久錢程の禿のある、如何にも自然な、素朴な少年も居た。それらが集まつて、幻燈會・演說會・手品・戰爭ごつこ、といふやうな事に日を暮らしてゐた。又この團體と、町つ子の團體との間には、猛烈な權力爭奪の戰が戰はれた。その戰は今の少年達が想像する事の出來ない程激しいものであつた。それから、私の團體の中にどうしても入つて來ない少年の幾人かゞゐた。そのうちにもHといふのは年も幾らか上であつたが、甚く旋曲りな、きかぬ氣の少年で、唯一人で私共の團體に對して楯を突いたものだ。

十三四の頃の私共は、銘々の父の轉業やら、志望やらに因つて、離れ〲になつてしまつた。さうして暫くの間お互に續けて居た音信も、何時となく絶え果てゝ了つた。お互の存在は、お互の間に皆無として考へられた。

しかし、因縁が強いのか、世間が狭いのか、私共はまた偶然に妙な所で、互に顔を合せた。

私が亞米利加に行つて、或る日本人好きの老婦人に招かれた時――それは私共が離れ〳〵になつてから、十二三年も後の事であるが――その客間で突然一人の日本人から、私は私の幼名を呼び掛けられた。呼びかけた者は圖らずも私の敵であつたHその人であつた。Hは艱難の多い世路を切り拔けて、そこの町で工學の實習をして居た。話し合つて見ると、敵は敵ではなかつた。非常にお互の間に親しみが湧いた。私共は、よく生活や思想の問題を、夜遲くまで語り合つたものであつた。

私が日本に歸ると、神戸の埠頭にまづ私を迎へて吳れたのは、坊つちやんのSであつた。彼は或る飮料の製造所の主腦者として、でつぷり肥えた、溫和らしい紳士になつて居た。私共はこの再會を珍らしい事にして、大阪から奈良、京都を一緒に樂しく旅して別れた。

私が札幌の大學に赴任して札幌に着くと、圖らずもそこで又Hと、昔日の爛れてゐたSとに巡り合つた。Hは鐵道院に技師をして居た。Sは醫者になつて、區立病院の婦人科を受持つて居た。それは實に私を驚かせるのに十分だつた。因緣の不思議さを深く思はせるやうな出來事だつた。Hは、二人の子供のある、その辯何處までも昔の腕白と我を通して威張り返つた江戶兒であつた。Sは、これも二人の子供の親で、地味な、常識的な、相變らず非常にこまめな活動家になつてゐた。三人はよく集まつて、昔話に夜を更かした。

しかし、人生の離合は慌だしい。暫くすると、Hは神戶に移つてしまつた。私は東京に歸つて來るやうになつた。が、東京では突然Mに出遇ふやうに運命づけられて居た。Mはあらん限りの生活を潛り拔けて、死ぬやうな目に幾度も遭つた後に、その父であつた人の道樂だつた謠曲を承け繼いで、それを本業にするやうになつてゐた。彼は昔の厭な下町風なところが脫けて、生眞面目な硏究者になつて居た。さうして、その堅實な生活態度は、私を悅ばした。私はこの友達から謠曲の手ほどきをして貰つた。Mの話で聞くと、その遠い親類に當るKは、段

段と落ち目な經路を取つて、今は見る影もなく零落れたさうだ、又一出つ齒の守禿ちよろ」と諢名されたS・Hは、朝鮮で農業を經營してゐる私の同窓のところで、會計の役をしてゐるといふ事を、その友達から聞かされた事があつた。今はどうしてゐるか知らない。Sは其の後、妻を失つて、私と同樣男鰥になつてゐる。

少年の追憶は、何につけても慌だしい。私は竹馬の友の幸福を祈らずには居られない。向上しつゝある者の上にも、落ち目になつた者の上には尙更のこと。

結局人間は孤獨だ。その人がしつかりと自分といふものを建立すればする程、孤獨になつてしまふ。友達といふものも、畢竟赤の他人といふものと、程度の違ひだけだとしか思はれない。電車の中や、往來で出會す見ず知らずの人にも、思はざる親しさを感じたり、親しげに語り合ふ友の間にも、思はざる不快を感ずるのは、人の常だ。矢張り人間は孤獨に、自由に、一人で山の中に入るのが、一番心易いやうだ。

（一九一八年八月、「文章倶樂部」所載）

若き友に

暑い眞夏に强意見をする――これは餘り人情を辨へない事かも知れない。然し私が本誌の若い讀者諸君に告げねばならぬ一番重いものがあるとするならば、これから書き連ねる心持であるのだから、それを諒としていたゞきたい。

去年の暮に私は或る新聞社が募集した短篇小說の選者の一人にさせられた。新聞社の報告する所によれば、應募した作品は六百篇の上に登つたさうだ。その中から社が豫選して私の手許に屆けた作品は三十篇ありました。それが發表される時、選者としての讀後感を書けとの事でしたが、私は大膽にも、「二三の作品を除く外は、作者の藝術的價値を疑はせるやうなものだ」と書いた。これは一個の作者として、私が云ひ得る隨分傍若無人な言葉です。そんな言葉で酬いられた應募者は或は私に對して反感を抱いた事だらうと思ふ。然し私としては、縱令餘事では阿る事をしても、藝術の分野で阿つてはならないと思つたのです。實際三十篇の豫選された、云はゞ選り拔きの作品の中に、私の腹を据ゑかねさせるやうないやな作品が少くとも十篇はあつた。一體何んの目的で、どう云ふ自信があつて、こんな紙屑を作る爲めに時間を潰したのかに驚きました。年少な作者の極めて放埒な、無責任な、無反省な生活が、一寸小手先の利く技巧でだら／＼と締りもなく書き現はされてゐるのです。なまじひ僅かばかりの文筆の器用があるばかりに、それらの若い人達が飛んでもない迷路に這入り込まうとしてゐるのが、まざ／＼と思ひやられるのです。これから考へて見ると、殘りの五百何十篇の中にはどれ程下劣な作品があつたか想像も及びません。

もう一つの出來事を書きませう。それは今年の春になつてからです。東京でも有名な或る大學の學生だといふ人が大部な原稿を持參して私に讀んで見てくれとの事でした。私はその人に讀んで聞かせてくれと云ひました。極めて自己反省の不足らしいゆるんだ顏付をしたその青年は、どつかと腰を据ゑて二時間半ほどに亙つてその原稿を讀み上げました。私はその間牛のやうに忍耐して聞いてゐたが、幾度椅子から跳り上つて、「もう澤山、原稿を仕舞つて歸つて下さい」と云はうとしたか知れなかつた。それ程その小說はたまらないやうなものだつた。私は仕舞まで我慢してからその青年に私の書いたものを何か讀んでくれた事があるのかと尋ねて見た。唯一篇の小品の名が名ざされた。歐洲の大家の中では誰を好むと尋ねて見た。一人も讀んではゐないとの事だつた。僕は惘れずにゐられなかつた。何んの爲にその青年は僕の所にやつて來たのだ。自分の作品を見て貰ふべきその人がどんな作家であるかも知らずに、臆面もなくやつて來るとは、自分自身を全く馬鹿あつかひにしてゐる人でなければ出來ない事だ。又外國の名作を讀むといふ事が決して文學者を作る必要條件ではない。然し籍を大學の文科に置く立派な學生が、文學を以て身を立てようとする學生が、海外の大家の一人にでも好奇心すら持ち得ないと云ふのは、明かに極端な精神上の怠慢を暴露したものだ。私はその青年には文學上の話は何んにもしないのが一番いい事だと思つてそのまゝ別れてしまつた。

私はこの二つの挿話を讀者に語つて何を云ひ現はさうとするのか。私は文學殊に小說と云ふものがどれ程に現代の青年や少年の心を蝕まうとしてゐるかに驚いた。それを云ひ現はしたいのだ。彼等の若々しい心には文學とか藝術とか云ふ言葉は如何にも花々しい仕事のやうに思ひなされるのだ。或る者は、割合に年少の人々がこの分野で容易に名を成すのを見て、功名は手に唾して取る事が出來ると思ひ込んでゐる。或る者は藝術上の成功によつて色々な生活上の安定や榮華が他愛もなく保證されると思つてゐる。而して自分の本當の心の要求とか準備とか

いふやうなものは全く度外視して、輕薄にも藝術の世界に萬一を僥倖しようと企てるのだ、私はこれ程忌むべき、恐るべき、危い人生の試みを他に見出す事が出來ないと思ふ。縱令彼等がその目指す所に成功したとしても失敗したとしても、その結果は共に回復すべからざる失敗になるからだ。

僥倖と云ふ事は藝術界には斷じて許されない。殖利とか、戰爭とか、事業とか云ふ方面では僥倖と云ふ事の成り立つ場合がないではない。而してその僥倖の結果も强ち擯斥すべきものではないかも知れない。然し藝術の世界ではこの僥倖といふものゝ可能性は最小限に縮小する。藝術的制作は萬人の眼の前に明らさまに批判を受けなければならぬ。そこに何等の隱し立てをすべき餘地はない。その點は赤裸々で土俵の上に爭ふ相撲に似てゐる。然し相撲では、隨分澤山僥倖といふものゝ這入りこむ餘地がある。所が藝術では——藝術にも僥倖は皆無だとは云へない。讀者の或る無價値な要求に阿るが爲めに、一時その眞價以上の評價を得る作品は尠いとは云へない。然しかゝる作品の生命は知れてゐる。それはその人の死ぬのも待たずに消えて行く程の短い命脈を持つた幸運だ。その跡にはその作家には無殘な死と嘲罵とが來るばかりだ。

この不幸から超越して作家が本當に自分の仕事を完成に導かうとするなら、そこに作家たらんとするものが根柢的に考へ直さなければならぬ必要が起つて來る。

端的に云はうなら、藝術家となる要求は、その天分の有無を措いて考へれば、自分を最も純眞に生きると云ふ事以外にあつてはならぬ。純眞に生きると云ふのは、自分と云ふものを一番尊いものとし、その尊さに忠實であり、その尊さを力かぎり磨き上げる事だ。その結果が作品として表はれ、自分と云ふものを自分以外にも擴げて行く事になるのだ。尤もこの場合に云つて置かなければならない事は、藝術家的であつても、それを形に表はして他に表現する天分を授からない人がある。さういふ人は藝術家ではあつても作家である事は出來ない。だから

藝術作家になる爲めには上に述べた二つの要素が具備してゐて甫めて完全するのだ。年少の讀者よ、あなたは机に向つて筆を執る時にどういふ考へで紙に臨まれるのですか。それを私は深く考へていたゞきたい。凡ての浪費と墮落の中で、無反省に筆紙の爲めに時間を潰す程の浪費と墮落はない事を十分に理解して下さい。凡ての仕事は如何なる仕事であれ、眞劍で沒頭的でなければ決して價値を生ずる者でない事を痛感して下さい。紙に向つて筆を執るといふ事は餘りに簡單で誰にでも直ぐ出來る仕事です。人々はこの外面的な平易さに欺かれ易いと思ひます。此の一見何んでもなく見える仕事の背後に、どれ程硬い骨が潛んでゐるかを見拔いて下さい。文筆を弄ぶと云ふのは、凡ての遊蕩と同じだけの個性の墮落だといふ事を洞察して下さい。而して此の火いたづらのやうな危い惡戲から逸早くあなた方自身を救ひ出して下さい。而して自分の天分の何であるかを、つまらない冒險心や功名心に累はされずに深く深求して下さい。而して自分がどうしても藝術家として立つべきであるか、藝術の享受者として立つべきであるかを十分に徹底して考へて下さい。それでなければあなたの前途は暗い危い谷間に導かれるのみだ。

かう云つたとて、私は天分ある藝術家の出現を强ひても押へ付けようとする者ではありません。この小さな感想と共に、多分今月號の「新公論」に發表されると思ふ私の「藝術制作の解放」といふ感想を讀んで下されば、私がどれ程藝術界に新分子新機運の將來を大事に見てゐるかを、知つて下さることが出來ると思ふ。他の事業と同樣に、藝術に於ても新しい力が加へられる事は不斷の必要事である。然しその新しい力といふものが不幸にして道樂氣の流入であつては大變です。それはお互が力を合せて藝術界から驅り出さねばならぬ第一のものです。私はそれをこの小さな文に於て强調したいのです。

えらさうな口をきくとあなたは思ふかも知れません。然し私が何んの權利があつてえらさうな口をきゝ得ま

せう。私は碌な仕事は一つも仕出來してはゐません。あなたを鞭たうとするこの文はまた私をも鞭つてゐるのです。

（一九一八年七月九日稿。）
（一九一八年八月「秀才文壇」所載）

藝術製作の解放

繪畫の世界に二科會の出現した事は種々な意味で重要視されなければならない事だが、私の考へでは、この會が設立された爲めに、繪畫が所謂玄人の手から解放されて、素人の手にも取り扱はれるやうになつた。その現象に重大な功績があると思ふ。

二科會が創立される以前――といふよりも二科會出現の機運を促した風潮の捲き起る前には、繪畫は全く專門家の手に壟斷されてゐたといつても過言ではない。勿論その當時にも所謂繪畫好愛者なるものはあつて、已み難い自分の欲求を滿足さす爲めに畫筆を秉ると云ふやうな事はあるにはあつたが、それを公表して他人の鑑賞力に訴へようとする野心などがなかつたのは勿論の事、それ等の人々が養つてゐた、物の見方は、全然專門家達の見方を模倣して、少しでもその埒内に自分をより深く嵌めこむ事を祕訣としてゐたのだ。卽ちアマチュアーもアマチュアーならざる一般世人も、繪畫といへば、職業的畫家の領分に專屬するもので、他人は容易にその門をも覗く事の出來ないものだと堅く思ひ込んでゐたやうに見える。外光派の花々しい運動は舊來の畫家を顏色なからしめたといつても、畢竟專門家が代つたといふまでのものだつた。

然し時勢は段々變つて來て、二科會なるものゝ出現を已むなくしたと同時に、繪畫製作の權能を專門家から公衆にまで擴げるに至つた。二科會が應募製作品を鑑別する標準の一つとして、今までの繪畫上の傳說に煩はされずに、自由に雄辯に自己の看取した自然を表現し得たものを採用したのは、時勢の傾向を促進する上に著しい效果があつたと云はなければならぬ。誰でも氣付くが如く、同會でこれまで二科賞を與へられた製作は、二三の例

外はあるとしても、大抵看る人に未成品といふ感じを與へる種類のものだつた。そこには專門家の製作にはない製作上の物足らなさがあつた。今一息とも二息とも思ふやうな所があつた。從つて世間では、その鑑別の不當を苦々しく思つたり誹つたりする傾向がないではなかつた。然しながらその非難の中にはもつとずつと大切なものが見落されてゐたのだ。それは今までの職業的畫家が、その職業的な習慣から知らず〳〵盲ひてしまつて、見窮める事の出來ない新鮮な獨自な物の見方が表はれてゐるといふ一事だ。これが新しい藝術の發展の爲めには一番重要視せられねばならぬ事だつたのだ。この要求を或る點まで充實した二科會は多大の刺戟を繪畫の世界に與へる事になつた。而して明治以來の繪畫史には類のない新しい進展が美術界に行はれるやうになつた。

今から十年前に起つた白樺同人の文學界に於ける功績も略々同樣の意味を以て認めらるべき者である。それ以前に文學を志望したものは、如何にして現存大家の思想や技巧を體得して、せめてはその壘でも摩する事が出來るやうになれようかと、さう云ふ點にのみ腐心してゐた。然し白樺を生み出した機運は如何にしたならば現存大家の桎梏から解放されて、更に自由な新しい世界を發見することが出來るか、そこに力を籠めて努力し出したのだ。彼等は處女地を汗水たらして掘り起し始めた。そこの土は堅かつた。雜草は茂り放題に茂つてゐた。而して折角下ろした種子は屢々失敗に終つた。だから世間は彼等を目して「世間見ず」と云ひ、「お坊ちやん」といつた。お坊ちやんでもあり世間見ずでもあつたらう。然しながら、一面に於て、開拓者は何時でもお坊ちやんであり世間見ずとならなければ、その仕事を成就し得る者ではない。老成な、用意周到な、純批判的な態度にしかなれない、大家になり切つた人々には開拓の事業は出來はしないのだ。白樺の同人も實は世間が思ふ程「世間見ず」でも「お坊ちやん」でもないのだ。唯彼等の企てた事業が彼等を實際以上にさう見せたゞけなのだ。

是等の諸運動が時勢の機關となつて、それ以來この傾向は加速度を取つて、色々な形となつて現はれ出した。

一般藝術界に新しい作家の名が見出されて來たのは、此の結果である。

藝術製作の解放はかくの如くして、最近十年間位の間に成就されようとしてゐる。

かくして日本の藝術界に迎へ入れられたこの機運を私達は無駄にしてはならない。

第一は固定的な權威といふ觀念から藝術を解放する事だ。所謂大家とか新進作家とかいふ懸け隔てを撥無してしまふ事だ。政治のやうな實際的な仕事にすら人間を本位とする權威を認める傾向の斥けられようとしてゐる今日、藝術界にかゝる弊風を殘して置く法はない。過去の功績に酬ゆべき方法はおのづから別にある。その功績があるからといつて、今は何等の實力もない癖に暗に藝術發展の道を色々に掣肘しようとするのは有るまじき事だ。藝術そのものゝ尊嚴を凡ての力の上位に置かねばならぬ。これが藝術的製作をいつまでも向上的ならしむる唯一の道である。

第二は藝術製作に清新な傾向を始終導き入れ得るその機會を助長させなければならぬ。所謂玄人なるものは、不知不識の間に型といふものを造つて、それから離れて物を見るのが困難になり勝ちなものだ。藝術製作が解放されゝば、そこに全く今までには類のない、物の見方が生まれ出て來る。これが、どれほど、藝術にとつて必要な、而して尊い事であるか分らない。

第三は藝術に對する理解を社會一般に擴大し得る事だ。藝術製作が解放されたと云つて必ずしも凡ての人がその製作に與かる事はしない。又出來ない。然しながらこの自由は一般社會に藝術に對する好愛の情を喚起する原因になる事が出來る。專制政治よりも共和政治の方が民衆をして政治に對する關門を多からしめると同じ關係である。近頃やかましく云はれる藝術の民衆化といふやうな事も、その結果として自然に招來されるに違ひない。

その外綿密に考察したら、色々ないゝ効果が藝術製作の解放といふ事によつて結果されるだらう。

唯一つ誰でも疑はねばならぬ事は、藝術製作の解放が藝術そのものゝ平凡化となりはしないかといふ事だ。一時的の心熱や、野心とも云へない程の名譽欲や、無自覺な自放やにそゝられて、誰でも彼でも藝術といふ分野に足を踏み入れる。その結果として、藝術そのものが下落し、安價となり、遊戲となり、本當の藝術品を、惡貨が良貨を驅逐するやうに、萎靡させて、ディレッタンティズムの跋扈を來たしはしないかといふ事だ。

これは極めて有り得る事だ。この弊害から藝術界を救ふものは批評家であらねばならぬ。批評家とは結局天才的な眼識を以て藝術品の山の中から、各自の歌を歌はうとして待ちこがれて居る金や、銀や、金剛石や、その外たゞの土塊と違つた尊い鑛物を掘り出す坑夫を云ふのだ。

然しながらもつと突きつめて考へて見ると、眞に尊い藝術を見分けるものは民衆そのものでなければならぬ。いかに立派な批評家がゐて、立派な藝術品を指し示しても、民衆の生活が緊張し向上してゐなければ、それは豚に眞珠を指し示した程の効果もないのだ。民衆の要求が眞摯であり、その生活態度が充實してゐれば、彼等は批評家を待たないでも、その愛憎によつて藝術品の善惡を鑑別してしまふ。ディレッタンティズムなぞは自然に存在の餘地を失つてしまふ。

だから私は云ふ、藝術製作の解放は恐るべき事ではない。恐るべきは民衆の生活態度如何である。藝術製作の解放は如何なる民衆に對しても必要だ。若し民衆が低級ならば、その民衆を益ゝ墮落さして自滅に陷らせる爲めに必要だ。若し民衆が向上的ならば、その民衆を益ゝ刺戟して、更に向上の轉歩をさせる爲めに必要だ。

（一九一八年十月、「新公論」所載）

大なる健全性へ

人間の凡ての活動の中で藝術上の活動ほど特殊性に依賴する活動はないと云つてい﹅。藝術上の製作は全然藝術家の特殊な性情と習練とが生み出す者であらねばならぬ。藝術家が自己の性情と習練とに疑惑を生じ、破綻を見出し、缺陷を感ずるが最後、その人の製作はその瞬間から向下して價値を失つて行く。それは信仰を生命とする人が信仰の對象を見失つた時と全く同じ結果に陷る。そこには最早や生命の燃燒がなく、その人も死に、神も亦死ぬる。

如何なる藝術家も如上の一事を念頭から離れさしてはならぬ。又離れさすことが出來ない。彼等は、若し僅かな自覺だにあれば、自分の生命がどんな釘に垂れ下げられねばならぬかを知つてゐる。自分の生命、即ちその製作を、自分の特殊な性情と習練との結合點に見出さねばならぬといふことを知つてゐる。

これは前にも言つた通り、藝術家の覺悟としては最も大事な要素の一つだ。ゴンクール兄弟が或る創作を合作したとか、ミレイ(Millais)とランドシーアとが同じカンヴスの中に、分擔して婦人と馬とを描き込んだと云ふやうな事は――ゴンクールの場合には物を物として、作家の氣稟を最小限に縮小して觀察する自然主義の主張に勵まされた事だとして見ても――藝術界に起つた一つの出來事だとして觀察して見ると、どうしてもあり得べからざる事を、割合に無反省な心でやつて退けたとより考へられぬ。若しそれらの藝術家が眞に自己の特殊性に依賴する人であつたなら――而してか﹅る特殊性が幾人もの人の間に同一量同一質に盛られてある場合は絕對にないのだから――決してこの無謀に近い大膽な試みを敢てするやうな事はなかつたに違ひない。合作とか共同作業と

か云ふやうな事は、一人の藝術家に他の藝術家が甘んじて隷屬した場合にだけ辛うじて可能とせらるべきものである。それ位藝術家の特殊性は重んぜられなければならないのだ。

から云ふ條件によつて約束される結果、藝術家は知らず〳〵自分の特殊性を强調する動向に支配されて來る。ある場合には官能の方面に、ある場合には主張の方面に、ある場合には技巧の方面に。而して自分を他から特殊する爲めには病的と云はるべき境にまで勢ひ込んで這入つて行く。

これは人の眼を欹てさすのに十分だ。人々はさう云ふ藝術製作によつて、平凡な日常生活から極端に引き離されて、一種の陶醉狀態に這入る。その快味を感ずる事が出來る。又異常な興奮によつて、人間の内部に伏在する向下的傾向(downward aspiration)の奇怪な誘惑に溺れる事が出來る――丁度ある高さに引き上げられた石が、支力の除かれる事によつて快げに落下するやうに――。

このやうにして藝術を製作する者も藝術を味ふものも、互に或る點で滿足し合ひ認め合ふ事が出來る。アダムとイヴとが智慧の果についてなしたやうに、互々に十分自分の衝動の誤りを意識しながら、他に喜ばす爲めに互互を勵まし合ふ。而してその結果として本當の意味に於ける墮落した藝術、病的な藝術といふものが表はれ出て來る。

「あれはいやな作品だ。然し何處か人を牽き附ける所がある。人生を無視した惡魔味がある。理窟のない物凄いやうな、醜い美しさがある。」

こんな評語が或る藝術に關して私達の間に取りかはされる事はないか。その時に私達はその藝術に對して深い警戒を加へなければならない。それは屢〻私達を容赦なくもと來た道に引き戻すものである場合が多いからだ。

この藝術の邪道は何處から起るかと云ふに、藝術の特殊性といふ事實を曲解したが故であると云はなければな

らぬ。私は前に藝術はその製作者の性情と習練との特殊な表現であらねばならぬと云つたが、それは決して孤立的な、他人の性情と習練とに全く無關係な表現であらねばならぬと云ふ意味ではない。反對に、よき藝術家は萬人の心の正當な理解者であり、又萬人の心と同様の心の持主であつて、その心が運命に對して造る角度の種々相を、萬人が表現し得ない强さと正確さと纎細さとを以て表現しなければならぬと云はうとするのだ。だから私の云ふ特殊性とは、質の問題ではなく、量の問題となる。

私は、天才とか藝術家とか云はれるものは、民衆から全然違つた質によつて作られた人間だとは信じないものだ。反對に、それらの人は、最も徹底した民衆の心の持主であり、體驗者であると信ずる者だ。即ち民衆の持つ、喜びと、悲しみと、動向と、煩悶とを際立つて多量に持ち合はした人々であると信ずる者だ。

本當を云ふと藝術に於ける貴族主義と民衆主義とはこゝに立脚して論じられねばならぬものだ。（これは少し餘談に亙るけれども）民衆を藝術製作の對象とするから藝術的民衆主義であり、或る限られた少數を藝術的製作の對象とするから藝術的貴族主義だと見るやうな見方は成り立たない。民衆を對象としようが、限られた少數を對象としようが、その見方が質的に特殊であればある程藝術的貴族主義であり、量的に特殊であればある程藝術的民衆主義となる譯なのだ。

だから私はこんな差別觀から見て藝術上の民衆主義者といはれても滿足しなければならないと思ふ。兎にも角にも私の思ふ所に從へば、特殊性が質的に强調されゝばされる程、その藝術家は自己の働きかけて行く對象（即ち藝術を味ふ人）を失つて、その極端な結果は、その藝術家の孤立に終つてしまふ。かゝる人の製作した藝術はそれ自身を人類の生活の基調から切り放す結果になる。而して人類が健全である限り、いくら喰ひ入つて來ようとしても、かゝる藝術は何時か、實質的生活の圏外に抛り出されて一種の遊戲（それはどれ程辛辣な味を持つに

しろ）辛辣なりな遊戲に墮してしまふ。

畢竟人生は常に遊戲に沒頭するには餘りに嚴肅だ。人類全體は自分が本質的に持つてゐるものゝ何んであるかを模索し、把持し、實現し、向上させようとする動向を一刻も捨てないでゐる。この嚴肅な動向は、假初の皮肉や、突飛な思ひ付きや、弱さから來る旋毛の曲げ方位で、ぐらつくものでは決してない。人類を根柢的に動かし、永く人類の生命を培ふものは、その健全性を促進する力であらねばならぬ。藝術家はこの一大事を忘れてはならぬ。

私達の忘れる事の出來ない恩人達の生涯を思つて見るがいゝ。釋迦でも、基督でも、プラトーでもダーウヰンでも、私達が偉大を感じないではゐられない人の生涯は皮肉や、思ひ付きや、一部的な特殊性の强調などで築き上げられてゐる例しはない。部分的でなく全部的だ。病性に向つてゞはなく健全性に向つてだ。又もつと問題を狹くして藝術界の事だけを考へて見ても、長い月日の間人類全體が澤山の人の中から篩ひ分けて、偉大な藝術家と仰ぐ人々を見るがいゝ。一々名前を擧げる迄もなく、彼等は自分を人間の生活の底潮に浸し切つた人々だ。而して人類が共同に所有しながら氣が付かないでゐた運命を强く銳く握つて、的確な表現を與へた人々だ。人類は是等の尊い藝術家によつて、何が自分等の高貴な屬性であるかに目覺め、何が自分等の本當の悲しい運命であるかを痛感し、如何にして、どの道を通つて、この地上巡禮の足を運び行くべきかを暗示されたのだ。

容易な道を選んではならぬ。近道を拔けてはならぬ。鬼面を以て人を脅かしたり、道化役者となつて人の憫笑にすがつたりしてはならぬ。成就しようが成就しまいが、大きな健全性への大道を藝術家は步まねばならぬ。小さい道に立つて、異つた服裝をして、狂ふが如く跳るものは目立つ。侏儒でも或は人の注意を牽くに足るだらう。正しく大きな道の上を步まうとするものは、縱令器量が相當に勝れてゐても、大きくも、珍らしくも人の眼には

映らない。然し藝術家の眞實に心掛けねばならないのは、人の心の大道に立つ事だ。そこに立つて藝術家は自分自身を試みねばならぬ。その外に正しい道はない。而してその外に人類と融合してその生活を向上させて行く經路はない。

生存に絶望したものには凡てが不用である。藝術もまた不用だ。生存の可能を、即ち人類の健全性と、未來に於けるその増進とを感ずるものゝみが凡てのものを必要とする。藝術も亦必要だ。その必要に促がされた藝術が大なる健全性への示唆となり得なかつたら何んの役に立つか。

（一九一八年七月十一日稿）
（一九一八年八月「文章世界」所載）

自己と世界

今度の世界戰爭についての感想を述べて見ないかとの慫慂を受けた。私は新聞紙や雜誌の上に揭げられた世界事情の上を漫步するものだ。科學者のやうな態度でこれに眼を通した事は嘗てないと云つてい丶位だ。私にとつてはこの態度は怠慢からばかりの事ではない。虛構、偏頗、空想、誇大、曲筆等の惡德から正確な事實を選り分ける事は今の場合全く不可能なのを知るからだ。此の度の戰爭に對する明かな批判は或る歲月を經過した後でなければ何人と雖も下す事が出來ないだらう。

で、問題が少し岐路に亙るかも知れないが、私は自己といふものと世界との交涉について自分の思ふ所を申し出て見たい。

一體自己といふものを外にして世界と云ふものが存在するだらうか。世界及び其の上に行はれる凡ての行事は、物理的には自己なくしても存在し得る。どの國でどう政治が變革したとか、どの國とどの國が戰を交へてどういふ決着になつたとか、どの勞働團體は或る經濟狀態の變化の下に如何なる行動に出たとか、如何なる思潮がどの國にどう云ふ風に現はれ出たとか、婦人の社會的地位がどの國ではどう推移したとか、それらの物理的な表はれは每日每時世界の表面に目まぐるしく出沒消長してゐる。然しそれは單に目まぐるしく出沒消長してゐるだけである。それは現はれては隱れて行くべき假象的存在に過ぎない。人はその現象の集成的で規模の宏大なのに眩惑して、其の事象それだけが何かなしに決定的な不變性を持つた存在であるかの如く考へ易い。このやうな立場から出發した世界觀は屢〻私達の眼を過まる。然しそれが結局何者であらう。私はそれを稱して事大主義

の世界觀と稱する。この世界では量的に卽ち物理的に宏大なものが重大事件として取り扱はれる。量的に規模の小さいものは、如何に光つてゐても思惟の圏外に抛擲されてしまふ。屢ゝ一握の土が一摘の金剛石と交換される。
茲で私が云つて置かねばならぬのは、私は決して規模の大きなものが無意義だと云はうとするのではないことだ。規模の大きいと云ふ事には、その大きくあり得べき相當の正しい理由がある。全然無意義なものは規模の大をすらなし得ない。凡て大なるものに對して私達の持つ畏服心はひとりでにその存在の無益でないことを保證する。量的にでも大なるものは、何者かであるのだ、無有ではない。

然しもつと根柢的にいふと、世界をその實在にまで持ち來すものはその質でなければならぬ。世界に起つた或る事件が世界の實在性で確立するのは、その事件が有する內在的價値にあるのだ。世界の實在はその量卽ち數積にあるのではなく、その質卽ち價値にあるのだ。世界に起つた或る事件が、その世界の過去と未來とに有機的に結び附けられてゐるばかりでなく、その事件を單獨に放して見ても、そこに質的な價値が證據立てられねばならぬ。

それなら此の如き內在的價値は如何して發見されるだらう。これを發見する機能を備へたものは人の外にはない。世界の量的數積は禽獸と雖もこれを感知し意識する。然し內在的價値に至つては人を待つて始めて闡明される。世界の實在は人によつて創造され建立される。

人は世界の上に起つた事件卽ち世界史を通じて、こゝに、この地の上に樂園を築からうとしてゐるのだ。例へば人間生活の最終が虛無的なものであれ、悲觀的なものであれ、さう思ふ人達は、さう思ふ彼等の理想にまで世界の動向を導いて行かうとし、又導かれつゝあるものと說明しようとしてゐるのだ。こゝに於て誰でも氣付く如く、世界の實在性は人々各ゝの自己と云ふ尺度に合せて造り上げられてゐるのだ。

世界が一人の人を創る。而してその人は自己を通じて世界を創る。結局歴史といふもの即ち世界の價値判斷なるものは、自己が世界にまで擴張するのに外ならぬ。

歴史家といふものがあるではないか、哲學者といふものがあるではないか。世界の價値判斷はかう云ふ人の公平無私な科學的研究の結果によつて成就するものであつて、歴史に對して何等の造詣もない民衆の自己は結局世界の實在性を左右すべき何等の力にもなる事は出來ぬ。かう或る人は主張するかも知れない。それはその人が世界の事件に對して全く考察を費やさない間は眞だと云へる、然しその人が歴史家なり哲學者なりに頼つて價値的に見た世界を知らうと企てるなら、その企てた瞬間にその人はもう世界の價値判斷を新たに企てゝゐる事を知らねばならぬ。如何に盲從的な人でも、ある歴史家なり哲學者なりの所説を、そのまゝ變易する事なく受け入れようとする事はしないだらう。假りに變易する事なく受け入れようとしても、互々に異なつた氣稟は自然にその企てを不可能なものにしてしまふだらう。だからどれ程素朴な自己であつても、自己がある以上は、世界はその人の手によつて新たに創造されてゐるのだ。

だから私は斷言する。自己のない所には世界はない。民衆の意識に共通して少しの出入もない世界は一つもない。世界を創造するものゝ單位であり同時に總和であるものは自己だ。

だから世界が美しいものとなる爲めには自己が美しくあらねばならぬ。世界が善いものとなる爲めには自己が善いものであらねばならぬ。世界が價値を增進して行く爲めには、自己の價値が增進しつゝあらねばならぬ。この明白な事實は然し餘りに多く忘られてはゐないだらうか。

私達は時に自己と世界との因果的一致を無視して世界に臨まうとしてゐる。自己の喜びを感ずる事なしに世界の喜びを云ひ、自己の痛みを感ずる事なしに世界の痛みを云つてゐる。その時の私達に取つては世界は一つの見

世物にしか過ぎない。世界が成功しようが失敗しようが、それは自己と何んの交渉もない否氣な現象だと私達は思つてゐる。而して勝手氣儘な放言を世界の顏に投げつけてゐる。こんな種類の放言を、私達は社會の各方面に投じて平氣でゐる場合がよくありはしないか。これは然しその無知といふ點に於てまだ恕すべき所がある。最も醜い事は自己の陋劣な磨かれない姿を以て臆面もなく世界觀を作らうとする事だ。私達は世界の行爲や目的やを自分の行爲や目的やに引き下げる。私達の創造する世界は、食言と陰謀とを事とする殺人者の世界だ。又利慾と物質的充慾との外に眼のない大食者の世界だ。偉大な政治家の計畫も私達には譎詐とより映じない。經濟狀態の變化によつて自覺した勞働者の運動も私達には賤民の亂暴とより映じない。凡ての尊い努力は假面に裝はれた偷盜の外ではない。私達の心には無機的な數量の大小のみが問題となりたがる。私達が若し自分から進んで世界の改善を主張するやうな事があれば、それは他の凡ての人がすると私達が思ひ込んでゐるやうに、それを以て世界の耳目を欺瞞せん爲めである。私達は如何に多くこの種の世界觀によつて自己の努力を惜しまうとしてゐるだらう。

しかも私達は良心の呵責なしに(本當は呵責なしにではなく)、かく世界を觀る爲めに、私達として相當だとする理由を持つてゐる。それは人類進化の中道にあつては、譎詐も亦選ばねばならぬ方法だと思つてゐる事だ。而して私達は强ひて醜い自己の窮地に安んじ、その醜い投影を世界の上に投げかけてゐる。

しかも更に惡い事は、自己に對しては精進を怠らない私達さへが、この權謀術數の捧誓者たらんとする事である。私達は世界の進運に資せんが爲めには自己を殺す事をあるべき義務だと思はせられてゐるのだ。私達は自ら進んで——苦しみながら——自己を欺瞞の世界の犧牲としようとしてゐる。

私達はどうしてもかゝる病的な境界から脫して來なければならない。私達は自分の自己がそのまゝ世界である

のを忘れてはならない。自己のあり得る以下に自己を踏みにじるものは、それだけ世界を墮落させてゐるのだ。何故私達はかゝる墮落をしなければならぬ境遇から自己を救ひ出し、從つて世界を救ひ出さうとはしないのか。

　私達はまた自己が陋劣であるが爲めに陋劣な世界觀を創らねばならぬ場合を深く考へて見なければならぬ。自己の陋劣をそのまゝにしておく結果、陋劣な世界觀に到着するより、何故陋劣な自己を反省し改善する事に努めないのだらう。人間は生きる間は生きる、卽ち生きる間はいつでも變る事が出來る。過去の失敗の爲めに、現在に、及び未來の自己に絶望すべき謂れはない。出發點は如何なる瞬間にも捕へらるべく私達の眼の前にある。如何なる過去を持つにもせよ、私達は生きながら亡骸となつてしまつてはならない。起き上る人があつた所に私達は喜んでその人を認めなければならない。その人の發心した瞬間にお互は互に容れ合はなければならない。だから過去はどうであれ、又他の人達は何とでも云へ、私達は暗い過去から拔け出して明るい自己を見出さなければならない。ひがんで物に對するいぢけた心から先づ自己を救ひ出さなければならない。その時に世界は飛躍的に變化するのだ。而してよくなるのだ。

　私は自己と世界とに對するかういふ立場から今世界に荒れすさんでゐる悲慘な戰爭を眺めようとする。この戰爭に對してわが國の當事者が取つてゐる意見方針といふやうな者を考察して見る。そこに何等か世界の未來に對する大きな希望が動いてゐるだらうか。量的の觀察のみで今の世界が創られてゐる事はないだらうか。小兒のやうな解放された暖かい心で未來を夢みるものが餘りに少くはないだらうか。偶ゝ獨逸が日本の敵になれば、獨逸があゝなつて行つた內部的の要求までも度外視してたゞ一圖に敵愾の心に奔り、露西亞の帝政が分散したと云へば、而してその後に行はれつゝある大規模な社會革命の試みがつまづき勝ちだと云へば、すぐ彼等の主張する主義の無價値を嗤はうとし、米國の輿論が世界の人道と平和の爲めに干戈を執るのだと傳へられゝば、それは直ち

に米國が僞善の假面の下に自家の勢力を扶植する爲めだと罵り、而して自分自身はと云へば幾つもの假面を人一倍に用意してゐて、交る〴〵見え透いた被りかたをして、自國民にすら眉を顰めしめる。これが果して世界を改造すべき自己の氣魄といふ事が出來ようか。

先づ自分自らを僞らざる自己に歸れ。これが爲めには一國一家の運命も亦堵すべし。かゝる自己の態度の上にのみ、たゞその上にのみ、世界は力を受けて新たに若々しく生まれ出るだらう。

（一九一八年七月十五日）
（一九一八年八月「新小說」所載）

讀者に

私が中央公論に「武者小路兄へ」と云ふ短い公開狀を書いたについて武者君にその事を一寸お知らせしておいた處が、葉書で返事が來て、厚意は喜ぶが、自分の事業は育つて行くと思つてゐる、今は畑に出て農事の稽古をしてゐるといふやうな事が書いてあつた。私はその葉書に對して聊かの不快をも感じなかつた。のみならず君が自分の仕事の成否に對しても樂觀的な立場にあり得るのを私は氣持よく思つた位だつた。

さうしたら白樺の八月號の六號欄に武者君の私に（私の論文に對すると云ふよりも）對する意見が出てゐた。始めの葉書とその文との調子に非常な相違があると思つたので私は變な氣持がした。「武郎さんに何か云はれて確信が爪のあか程でも動くと、武郎さんが本當に思ひ込んでゐるならば、それは少し自惚れすぎてゐる氣がする云々」と云ふやうな句は、意見の相違は兎に角、厚意を持ち合つてゐる人の間に取り交はさるべき言葉とは私には思へなかつた。で、それを確める爲めに手紙で問ひ合せた。

武者君はすぐ返事をして下さつた。それは葉書だつた。

「御手紙拜見しました。あんなことは書く氣はなかつたのですが、私達の仲間（新しき村）のものが他の人のは何といつても氣にしませんが、あなたの言葉だけは可なり氣にしたものがありましたので、喜んだ人もありましたが、あなたと僕との考へのちがひだけをはつ切りしたく思つたのですが、手元に中央公論がなかつたので、かいてゐる内にあんなになつたのです。かく前にもう一度讀みなほさなかつたことは氣になつてゐました。」

その翌日すぐ手紙が來た。

しました。「昨日ハガキを出しましたが、書き方が少し氣に入りませんから、あらためて手紙を書きます。正直に云ふ事にします。中央公論の君の私にあてたものは期待が多かつたせゐか、僕はよんだ時、すぐ不服だつたのです。ですから僕は君への葉書にも『御厚意はうれしく思ひました』と申したのです。君が厚意をもつてかいて下さつた事は否定出來ませんでしたから。『は』と云ふ文句は少し反語がふくまれてゐたのです。……僕は露骨にかくのがいやだつたのです。しかし僕の友達や仲間は二三の例外を除いて、皆君のかき方に不服を持つてゐました。しかし僕と君との關係をよく知らないものは、君の言葉を過重し、僕が君と同意見で今度のことを始めたやうにとつたらしい人がありました。それさへなければ君が、先輩らしい辯護の仕方をされても、僕に云はなくつてもよさゝうなことを云はれても、僕は默つてゐる積りでした。そして君の僕に對する厚意だけを誇張したく思つてたのです。

しかしそれは許してくれませんでした。

僕の不服は僕と云ふ人間に對して君は一言も信頼を示さず、僕のする仕事をたゞ仕事としてのみ認めて、一般の場合として、文士の仕事として尊敬してくれた事です。僕は文士として今度の事を始めたのではありません。僕は今度の事が出來ないで文士のなかにまぎれこんでゐたと云ふ方が本當の人間です。僕に宗教的素質があることは君も認めてゐて下さつたはずと思つてゐます。

君にとつては意表外のことだつたことをば苦しく思ひます。が僕に取つても意表外でした。同時に矢張り君だと思ひました。僕もわざ〳〵あんな風にものを云はなくつてもよかつたやうに思ひますが、かけばあすこまで云はないと氣がすまなかつたのです。僕は『君に何か云はれて少しは僕が希望を失ふやうに思つた。事實久一時的に失ひかけた。反つて希望が出來たとは云ひましたが、若い仲間に』向つても少し腹が立つたのでした。

それさへなければ書きはしません」(後略)

而してこの手紙の末尾に「私の六號について何か白樺の六號にかいて下さる方がいゝかとも思ひます、僕には勿論よくはわかりませんが」と書き添へてあつた。然しこの手紙の方が白樺に書いた武者君の六號より遙かに内容的であると思ふから、私信であるが私はこゝに大體を轉載したのだ。

私は事業によつてその成就を先づ懸念しなければならない事業と、成否は第二としても必ず起さなければならない事業との二つがあると思ふものだ。而して中央公論で發表したやうに武者君の事業はその第二の範疇に屬する事業だと思ふものだ。所が或る會合で私は武者君の企圖が失敗するにきまつてゐると主張して、それだから武者君は馬鹿な眞似をする人だとその愚を憐れむやうに云ふ人を見た。私はそれに對して反感を感じた。武者君の事業はその成否によつて判斷さるべきものではない。今の世の中でかゝる企圖が一見失敗に終るのは寧ろ當然でその失敗が積み重なつて甫めて最後の收穫が得られるのだと極力主張した。世の中には武者君の事業を成否からのみ判斷する人が多いとその時氣が附いたので、私は君に對する公開狀の形であの感想を發表した次第なのだ。

武者君はその公生涯の始めから今日まで一人の藝術家として立つてゐた。君はそれを恥ぢては居られないと思ふ。然し今のやうな生活の狀態で藝術に從事する事は傷ましい事だといふ念が段々强まつて來て、忍び切れなくなつた結果今日の一轉歩をされたのだと思ふ。さうでなかつたら君は始めからこの事業に沒頭して居られなければならぬ筈だ。私が藝術家の所爲として君の事業を考へた事を今でも誤つてゐるとは思ふ事が出來ない。

武者君といふ人間に對して僕は一言も費やさないと云つて居られるが、僕に取つてはあの感想は武者君といふ人間に對して徹頭徹尾云つてゐる積りだ。僕には武者君と藝術家とを切り離し、武者君と生活の改革者とを切り離す事は出來ない。

武者君は、「武郎さんに何か言はれて確信が爪のあか程でも動くと武郎さんが本當に思ひこんでゐるならばそれは少し自惚れすぎてゐる氣がする」と云つて居られる。意見の相違を明かにされるのは氣持のいゝ事だ。それに不服はない。然し「自惚れ過ぎる」と云ふやうな言葉は、對者の人格を而して氣持を無視した言葉だと私は思つてゐる。武者君が自白されるやうに君が果して私の友情には或る信賴を持つて居られるなら筆にさるべき言葉ではない筈だと思つてゐる。

「先輩らしい辯護」この言葉も武者さんが受け取つて下さるなら御返却したい。私にはそれが不快に響く。思想を交換する饗宴に於ても戰場に於ても先輩後輩はない。强ひて武者君がこんな表現と心持とを保留されるとなら、私は君が私に對して惡意を持つものと信ぜざるを得ない。

武者君の言葉によれば、私の意見と武者君のそれとは同じであると信じた人が二三はあるさうだ。それは武者君に取つて迷惑な事だ。武者君は武者君だし、私は私です。どうかこの事を混同して武者君の意見や仕事を濁す事がないやうにして下さい。私は單にこの一事だけを白樺のみならず、この誌の讀者に注意すればよかつたのかも知れない。然し武者君の態度と私の態度を少し說明して置く方がこの場合更に便利だと思つたからこんなに長く書きました。

（一九一八年九月、「白樺」及「新しき村」所載）

運命と人

○

運命は現象を支配する、丁度物體が影を支配するやうに。現象によつて暗示される運命の目論見(もくろみ)は「死」だ。何となればあらゆる現象の窮極する所は死滅だからである。

我等の世界に於て物と物とは安定を得てゐない。而して安定を得るための道程にあつて物と物とは相剋(さうこく)してゐる。我等がエネルギーと稱するものはその結果として生じて來る。而してエネルギーが働いてゐる間我等の間には生命が嚴存する。然しながら安定を求めて安定の方に進みつゝある現象が遂に最後の安定に達し得た時には、エネルギーは存在するとしても働かなくなる。それは丁度一陣の風によつて惹き起された水の上の波が、互に相剋しつゝ結局鏡のやうな波のない水面を造り出すに至るのと同樣である。そこには石のやうに默した水の塊的(マッス)が凝然として澱んでゐるばかりだ。再びそれを動かす力は何處からも働いては來ない。生氣は全くその水から絶たれてしまふ。

我等の世界の現象も遂にはこゝに落ち付いてしまふだらう。そこには「生」は形をひそめてたゞ一つの「大死」があるばかりだらう。その時運命の目論見は始めて成就されるのだ。

この已むを得ざる結論を我等は如何(どう)しても承認しなければならない。

○

我等「人」は運命のこの目論見を承認する。しかも我等の本能が、我等に強要するものは死ではなくしてその反對の生である。

人生に矛盾は多い。それが或る時は喜劇的であり、或る時は悲劇的である。而して我等が、歩いて行く到達點が死である事を知り抜きながら、なほ力を極めて生きるが上にも生きんとする矛盾ほど奇怪な恐ろしい矛盾はない。私はそれを人生の最も悲劇的な矛盾であると云はう。

○

我等は現在の瞬間々々に於て本當に生きるものだと云つてゐる。一瞬の未來は兎に角、一瞬の現在は少くとも生の領域だ。そこに我等の存在を意識してゐる以上、未來劫の後に來べき運命の所爲を顧慮する要はない。さう或る人々は云ふかも知れない。

然しこれは結局一種のごまかしで一種の觀念論だ。

人間と云はず、生物が地上生活を始めるや否や、一として死に脅迫されないものはない。我等の間に醱酵した凡ての哲學は、それが信仰の形式を取るにせよ、觀念の形式を取るにせよ、實證の形式を取るにせよ、凡て人の心が「死」に對して惹き起した反應に過ぎない。

我等は我等が意識する以上に本能のどん底から死を恐れてゐるのだ。運命の我等を將ゐて行かうとする所に、必死な尻ごみをしてゐるのだ。

○

ある者は肉體の死滅を恐れる。ある者は事業の死滅を恐れる。ある者は個性の死滅を恐れる。而して食料を求め、醫藥を求め、勞役し、奔走し、憎み且つ愛する。

○

人間の生活とは畢竟水に溺れて一片の藁にすがらうとする空しいはかない努力ではないのか。

○

然し同時に我等は玆に不思議な一つの現象を人間生活の中に見出すだらう。それはより多く死を恐れる人を、より賢明な、より洞察の鋭い、より智慧の深い人の間に見出すと云ふ事だ。

これらの人は運命の目論見を常人よりよりよく理解し得る人だと云はなければならぬ。よりよく理解する以上は運命に對してより從順であらねばならぬ筈だ。そこには冷靜なストイカルな諦めが湧いて來ねばならぬ筈だ。而して所謂常人が――諦めるだけの理解を有し得ない常人が、最も強く運命に力強い反抗を企てなければならぬ筈だ。生の絕對權を主張せねばならぬ筈だ。

然るに事實は全く反對の相を呈してゐる。我等の中優れたもの程――運命の企てを知り拔いてゐると思はれる癖に――死に打ち勝たんとする一念に熱中してゐるやうに見える。

○

「主よ、死の杯を我れより放ち給へ」といつた基督の言葉は凡ての優れた人々の魂の號叫を代表する。四苦を見

て永生への道を思ひ立つた釋迦は凡ての思慮ある人々の心の發奮を表象する。運命の目論見に最も明かなるべき彼等のこの態度を我等は痴人の閑葛藤として一笑に附し去る事が出來ないだらう。

○

死への諦めを敎へずして生への精進を敎へた彼等の心を我等はどう考へねばならぬのか。

○

こゝまで來て我等は、假相からも一段深く潛り込んで見ねばならぬ。

私は死への諦めを敎へずして生への精進と云つた。それは然し本當はさうではない。彼等の最後の宣告はその徹底した意味に於て死への諦めを敎へたのではない。生への諦めを敎へたのだ。生への精進を敎へたのではない、死への精進を敎へたのだ。さう私は云はねばならなかつたのだ。

何故だ。

○

それを私の考へなりに云つて見よう、それは或る人々には餘りに明白な事であらうけれども。

彼等は運命の心の徹底的な體驗者であるのだ。運命が物と物との間の安定を最後の目的としたやうに、彼等も亦心と心との安定を最後の目的とする本能に燃えてゐた人達なのだ。彼等の表現がどうであれ、その本能の奥底を支配してゐた力は實に相剋から安定への一路だつたのだ。彼等は畢竟運命と同じ步調もて步み、同じリズムも

て動いたのだ。

○

皮相の混亂から眞相の整正へ、假象の紛雜から實在の統一へ、物質生活の擾動から精神生活の肅約へ、醜から美へ、渾沌から秩序へ、憎みから愛へ、迷ひから悟りへ……卽ち相剋から安定へ。

我等の歷史を見るがいゝ。我等の先覺者を見るがいゝ。又我等自身の心を見るがいゝ。凡てのよき事、よき思ひは常に同一の方向に動いてゐるではないか。卽ち相剋から安定へ……運命の眼睛の見詰めてゐる方へ。

○

だから我等は何を恐れ何を憚らう。運命は畢竟親切だ。

○

だから我等は恐れずに生きよう。我等の住む世界は不安定の世界だ。我等の心は不安定の心だ。世界と我等の心は屢ゝやうやく建立しかけた安定の礎から辷り落ちる。世界と我等とは有らん限りの失態を演ずる。この醜い蹉跌は永く我等の生活を支配するだらう。それでも構はない、我等はその混亂の中に生きよう。我等は恐れるに及ばない。我等にはその混亂の中にも統一を求める已み難い本能が潛んでゐて、決して消える事がないからだ。それで澤山だ。

我等は生きよう。我等の周圍に迫つて來る死の諸相に對して極力戰はう。我等は肉體を健全にして死から救ふ

爲めに有らん限りの衞生を行はう。又社會をより健全な基礎の上に置く爲めに。生活を安全にする爲めに有らゆる改革を案出しよう。我等の魂を永久ならしめんために有らゆる死の刺を滅ぼさう。

我等がかく努力して死に打ち勝つた時、その時は焉んぞ知らん我等が死の來る道を最も夷らにした時なのだ。人はその時に運命と堅く握手するのだ。人はその時運命の片腕となつて、物々の相剋を安定に持ち來す運命の仕事を助けてゐるのだ。

○

運命が冷酷なものなら、運命を壓倒してその先きまはりをする唯一つの道は、人がその本能の生の執着を育てて「大死」を早める事によつて、運命を出し拔く外にはない。運命が親切なものなら運命と握手してその愛撫を受ける唯一つの道は、人がその本能の生の執着を育て、「大死」を早める事によつて、運命を狂喜させる外にはない。何れにしても道は一つだ。

○

だからホヰットマンは歌つて云つた。

「來い、可憐ななつかしい死よ、
地上の限りを隅もなく、落付いた足どりで近づく、近づく、
晝にも、夜にも、凡ての人に、各〻の人に、

早かれ、遲かれ、華車な姿の死よ。
測り難い宇宙は讃むべきかな。
その生、その喜び、珍らしい諸相と知識、
又その愛、甘い愛、然しながら更に〳〵讃むべきかな、
かの冷靜に凡てを捲きこむ死の確實な抱擁な手は。

靜かな足どりで小息みなく近づいて來る暗き母よ、
心からあなたの爲めに歡迎の歌を唄つた人はまだ一人もないと云ふのか、
それなら私が唄はう――私は凡てに勝つてあなたを光榮としよう、
あなたが必ず來るものなら、間違ひなく來て下さいと唄ひ出でよう。

近づけ、力强い救助者、
それが運命なら――あなたが人々をかき抱いたら、私は喜んでその死者を唄はう、
あなたの愛に滿ちて流れ漂ふ大海原に溶けこんで、
あなたの法樂の洪水に有頂天になつたその死者を唄はう、おゝ死よ。

私からあなたに喜びの夜曲を、

又舞踏を挨拶と共に申し出る――部屋の飾りも饗宴も亦、
若しくは廣やかな地の景色、若しくは高く擴がる空、
若しくは生活、若しくは園圃、若しくは大きな物思はしい夜は凡てあなたにふさはしい。

若しくは星々に守られた靜かな夜、
若しくは海の汀、私の聞き知つたあの皺がれ聲でさゝやく波、
若しくは私の魂はあなたに振り向く、おゝ際限もなく大きな、面紗かたき死よ、
そして肉體は感謝してあなたの膝の上に丸まつて巣喰ふ。

梢の上から私は歌を空に漂はす、
紆り動く浪を越えて――無數の園圃と荒涼たる大草原とを越えて、
建てこんだ凡ての市街と、群衆に埋まる繫船場と道路とを越えて、私はこの歌を喜び勇んで突に漂はす。おゝ
死よ」

（一九一八年十月、「中外」所載）

予に對する公開狀の答

九十篇ほど集まつた中から本誌の記者が嚴選した六篇の私に對する公開狀を讀んで、私は可なり色々の暗示を得ました。それについて私は筆者諸君の勞を謝しますと共に、本誌記者の要求により、私は思ふまゝを明白にお答へして見ます。私の誤つた點を更に叱正して下されば嬉しいと思ふでせう。

志賀氏が私の内部には明かに二元が働いてゐるのに早計にもそれに一元的の解決を求めようとあせる所に致命的な破綻があると論ぜられたのは、私の急所に觸れられたものとして容認します。「實驗室」が公けにされた時、私は自作を讀み直して、末尾の描寫の急噪に失するのを氣にしないではゐられませんでした。隻眼の醫師が遂に到達すべき點はあすこに置かれた通りである事は、今も私は疑つてはゐません。然しあゝ手取り早くあの結論に達すると云ふ事はその場合の彼の心としてはあり得ない事であるのを痛切に感じました。それ故私はあれを著作集に移す時に、今一度あの主人公の心になつて考へました。而して結末の方の描寫を全然新たに書きかへました。あなたはそれを見て下さつたのでせうか。而してあなたの主張を提出なさつたのでせうか。若しさうなら私はあなたに同意する事が出來ないものです。

私は實際今でも心の中には苦しい二元的爭鬪を意識してゐます。唯私には二元がいつまでも二元であつてはならぬと云ふ要求と、おぼろげながら一元的境地の何者であらうかと云ふ解決を持つやうになつたのです。それを私は「惜みなく愛は奪ふ」「草の葉」等に於て表現しようと試みてゐます。然し作物の中に私の一元觀を絕對肯定的に表現したものではまだありません。又實際あり得ないのです。ある人は私が煩悶ばかりを描いて解決を與へ

てゐないのを非常にもどかしがつて責めてくれました。然し私は煩悶を描いてかすかな解決の暗示を提供する、その外に出るのは自分を僞るものだと思つてゐます。

Y・K氏の御注意に感謝します。私は愛讀者の或る人達が私を信じてくれてゐる樣に眞劍ではありせん。私は甚しい間に合せ屋です。この年になるまで爲す事もなく默つてゐた事だけを考へても自分で惘れます。さうです、私はもつと自由にならなければいけません。唯信じて下さい。私は今の境界に決して滿足してゐるものでないといふ事を。こんな灰色な明白でない狀態にゐて死んでしまふかも知れませんが。若しさうなら死ぬ間際までも兎に角不滿足を持ち續けるであらう事を信じて下さい。

山路氏に――私は今の所では藝術家たる事を耻ぢません。藝術家といつて大きな顏をする資格については屢々躊躇を感じますけれども、藝術家たる事を得るなら、こんな嬉しい事はないと思つてゐます。私の生活の改造も向上も私の藝術を完全にする爲めにしたいと思つてゐます。藝術に生きる事が今の私に取つては理想的に望ましい事だからです。若しこの自信がなかつたら私は卽刻藝術界から身を退きます。

吉田氏の私が最近發表した感想文に對する非難は心深く拜見しました。それには然しあなたに私の考へに對する多少の誤解があると思ひますからそれを述べて見ます。藝術家として自己中心主義者なる私は社會改良者としても自己中心主義者です。自己の要求を充實する爲めに社會改良の必要も認めるものです。私は自己の藝術を鑑賞して貰ふ爲めに量的價値を思惟するのではありません。自己が大なる健全性に憧れてゐるが故に、それが直ちに亦人類の憧れである事を知り、自己の衷に取り入れて對象を自己として考察するに當つては勢ひ健全性への大道から外れた傍系的心境の考察に道草を喰はずに――人類の中心意志からかけ離れた質の詮議立てをせずに――驀地に健全性への動向を深く鋭く(量的に)摑み出さなければならぬ。民衆的藝術といふ名を與へるならかくの如

き藝術的活動をこそ名づくべきだと云つたゞけなのです。なほお斷りして置く事は、私があの感想文で云つた人類といふ言葉は自己といふ言葉の異語同意であるといふ事です。私の云ふ人類とは勿論自己の中に攝取された人類です。だから藝術家が健全性を憧憬する事は人類が同樣の動向を感じてゐる事です。だからその人の生む藝術は人類の健全性への示唆とならざるを得ません。さうではないでせうか。

あなたが「自己あつての社會、個人あつての環境だと思ひます」からその文の結尾に至るまでのお考へは、私と全く一致するものです。私は八月號の「新小說」に書いた「自己と世界」といふ感想文で全く同樣の事を云つてゐます。あなたが若しそれを承認なさるなら、私があの感想文で書いた自己と人類といふものゝ間の關係ももつと明瞭に把持して下さる事が出來ると思ひます。

私は岡野氏の「藝術の意味」をはつきり伺ふ事が出來ないから、私の作物が「藝術的」でないと云ふ非難に對してもはつきりしたお答は出來ません。然し、餘裕とか氣分とかいふものが薄弱だとの非難に對しては背ふ事が出來ません。私は私だけの餘裕なり氣分なりは必要な程度で出してゐると思つてゐます。その餘裕が restful でないとか、氣分が抒情詩的でないとか云ふ非難なら別ですが。私が仁右衞門のやうな野蠻人を書く時は私なりに仁右衞門になり切る事を勉め、凱旋を書く時には私なりに凱旋になり切る事を勉め、お末を書く時には私なりにお末になり切る事を勉めました。人はあれ等の作に思想的背景がないからと云つて、直ちに純客觀的描寫と銘を打つてくれました。然し私に取つてはあれは私の主觀の描寫に過ぎません。唯さう云ふ主人公には、主人公の本來の性質上、思想的背景が少くつて情緒的背景が多いだけの事です。然るに「迷路」「實驗室」「宣言」等の人物は、その性質上思想的であらねばならぬ筈です。あの主人公等の抱懷する思想が直ちに私の個性全體の思想であると取られては困ります。私は自分に攝取した人間達の中から一人二人を引き拔いて紙の上に活かして見たまでゞす。

思想的生活――それは現代の人類生活の一特色と云はなければなりません。今までは思想的生活が藝術制作の對象となつた事が稀れでした。偶にあるとすれば作者が藝術に事よせてその主張を漏らさうと云ふ偶意的手段でした。しかし今の時は思想的生活が情緒的生活と併行して十分藝術的制作の對象となり內容となるに足るまでになつて來ました。今の教養ある人々の生活から思想的生活を引き去つたなら、その人の生活內容は完全に現はされたとは云はれません。さう私は考へてゐるのです。さう云ふ意味で私の思想的內容の有る作物を讀んでいたゞきたいと思ひます。つまり作物中の人物の持つ思想が現在の生活にどれ程緊迫切實な關係を有つてゐるかゐないかゞ私としては第一の問題です。

私の作物は一見私自身より歪んで見えようとも下つて見えようとも、明かに私自身の投影である事を信じて下さい。私は歪んでゐても下劣であつても、私自身の裏に取り入れたものには同樣に執着を感じます。

私の愛の考へが常識以上の何物でもないと云ふ事は私を嬉しく思はせます――若し常識と云ふその言葉が因襲と云ふ言葉で置き易へられていゝものでなければ――超常識は神の境界であり、非常識は狂者の境界です。一個の人としての私は最も健全な常識に至る事を努力しなければならないと思ひます。唯その常識がどれだけ強く深く創造されるか、藝術制作の試金石はそこにあると思ひます。あなたは私のものを「硬化した愛の常識」と云はれる。さうなると「因襲的な愛の概念」といふ事になります。それなら私は非常に自分を恐れなければなりません。私はなほあなたの見方によつて私自身を檢察して見ませう。

山本氏の讃辭は敢へて膺りません。然し「宣言」が死兒であるといふお說は私には明かに云へば少し殘酷に響きます。私にはAもBもY子も不完全ながら生命は十分に有るやうに思はれてゐます。唯岡野氏が云はれた「動かぬ時計」は私があの老學者と十分同化しもしないで、不遜にも平面描寫的な試みをした爲めに死んでゐるやう

です。私は書物として發表する時思ひ切つて私の主人公に對する態度を改めて見る積りです。

終りに臨んで私は一言書き添へておきます。私が愛の宣傳者の本家本元のやうに思ふ人のあるのは心苦しい事です。私は單に本能としての愛の作用を容赦なくつきつめて見ようと思つて、「惜みなく愛は奪ふ」を書いたまでです。又私に憎惡の觀念がないやうに思はれる方もあるやうです。非常な誤謬です。私は色々な憎惡に苦しみ過ぎるものです。ですから愛の尊さを味はつて見たいと思ふのです。私の作物中に、始終蹤いてばかりゐる、人間的な、强がりな弱者を見出して下さる方は可なり私の心臟に近づいて下さつた方です。

私は改めて諸君の好意ある非難を感謝します。

（一九一八年十月、「新潮」所載）

私の父と母

私の家は代々薩摩の國に住んで居たので、父は他の血を混へない純粋の薩摩人と云つて可い。私の眼から見ると、父の性格は非常に眞正直な、又細心な或る意味の執拗な性質を有つて居た。そして外面的には隨分冷淡に見える場合が無いではなかつたが、内部には恐ろしい熱情を有つた男であつた。此の點は純粋の九州人に獨得な所である。一時に或る事に自分の注意を集中した場合に、殆んど寢食を忘れて了ふ。國事にでも或は自分の仕事にでも熱中すると、人と話をしてゐながら、相手の言ふ事が聞き取れない程他を顧みないので、狂人のやうな狀態に陷つた事は、私の知つて居るだけでも、少くとも三度はあつた。

父の教育から云へば、父の若い時代としては新しい教育を受けた方だが、其の根柢をなしてゐるものは矢張り朱子學派の儒學であつて、其の影響からは終生脫する事が出來なかつた。然し何處か獨自な所が有つて、平生の話の中にも、其の着想の獨創的なのに、我々は手を拍つて驚く事がよくあつた。晩年にはよく父は「自分が哲學を、自分の進むべき路として選んで居つたなら、屹度纏まつた仕事をしてゐたらう」と言つてゐた。健康は小さい時分には大變弱い子で、これで育つだらうかと心配されたさうだが、私が知つてからは强壯で、身體こそ小さかつたが、精力の强い、仕事の能く續けて出來る體格であつた。仕事に表はす精力は、我々子供達を驚かす事が屢ゝあつた位である。藝術に對しては特に沒頭したものが無かつたので、鑑識力も發達してはゐなかつたが、見當違ひの批評などをする時でも、父其の人でなければ言はれないやうな表現や言葉使ひをした。父は私達が藝術に携はる事は極端に嫌つて、殊に輕文學は極端に排斥した。私達は父の目を掠めてそれを味はゝなければならな

かつたのを記憶する。

父の生ひ立ちは非常に不幸であつた。父の父、卽ち私達の祖父に當る人は、薩摩の中の小藩の士で、島津家から見れば陪臣であつたが、其の小藩に起つたお家騷動に捲き込まれて、琉球の或る處へ遠島された。それが父の七歲の時位で、それから十五か十六位までは祖父の薰育に人となつた。從つて小さい時から孤獨で（父は其の上一人子であつた）獨りで立つて行かなければならなかつたのと、父其の人が餘り正直である爲め、屢〻人の欺くところとなつた苦い經驗があるのとで、人に欺かれない爲めに、人に對して寬容でない偏狹な所があつた。これは境遇と性質とから來て居るので、晚年には追〻練れて、廣い襟懷を示すやうになつた。殊に面白がつたり喜んだりする時には、私達が「父の笑ひ」と云つてゐる、非常に無邪氣な善良な笑ひ方をした。性質の純な所が、外面的の修養などが剝がれて現はれたものである。

母の父は南部卽ち盛岡藩の江戶留守居役で、母は九州の血を持つた人であつた。其の間に生れた母であるから、國籍は北にあつても、南方の血が多かつた。維新の際南部藩が朝敵に廻つた爲め、母は十二三から流離の苦を嘗めて、結婚前には東京でお針の賃仕事をしてゐたと云ふ事である。かうして若い時から世の辛酸を嘗め竭した爲めか、母の氣性には濶達な方面と共に、人を呑んでかゝるやうな鋭い所がある。人の妻となつてからは、當時の女庭訓的な思想の爲めに、在來の家庭的な、所謂ハウスワイフと云ふやうな型に入らうと努め、又入りおほせた。然し性質の根柢に有る烈しいものが、間〻現はれた。若い時には極度に苦しんだり悲しんだりすると、往往卒倒して感覺を失ふことがあつた。其の發作は劇しいもので、男が二三人も懸られなければ取扱はれない程であつた。私達はよく母が此の儘死んでしまふのではないかと思つたものである。然し生來の烈しい氣性の爲めか、此の發作がヒステリーに變つて、泣き崩れて理性を失ふといふやうな所は無かつた。父が自分の仕事や家の事な

どで心配したりするやうな場合に、母がそれを勵まし助けた事が屢〻あつた。後に母の母が同棲するやうに成つてからは、其の感化に依つて淨土眞宗に入つて信仰が定まると、外貌が一變して我意の無い思ひ切りのいゝ、平靜な生活を始めるやうになつた。そして癲癇のやうな烈しい發作は現れなくなつた。若し母が昔の女の道德に囚れないで、眞の性質の儘で進んで行つたならば、必ず特異な性格となつて世の中に現れたらうと思ふ。

母の藝術上の趣味は、自分でも短歌を作る位の事はする程で、可也豐かに有つて居る。今でも時々やつて居るが、若い時には殊に好んで腰折れを詠んで自ら娯んでゐた。讀書も好きであるが、これはハウスワイフと云ふ事に制せられて、思ふ儘にやらなかつたやうであるが、然し暇があれば喜んで書物を手にする。私共兄弟が揃つてかういふ方面に向つた事を考へると、母が文藝に一つの愛好心を有つてゐた事が影響してゐるだらうと思ふ。

母に就いても一つ云ふべきは、想像力とも思はれるものが非常に豐かで、奇體に無い事を有るやうに考へる癖がある。例へば人の噂などをする場合にも、實際は無い事を、自分では全く有るとの確信を以て、見るが如く精細に話して、時々は驚くやうな噓を吐く事が母によくある。尤も母自身は噓を吐いてゐるとは思はず、慥かに見たり聞いたりしたと確信してゐるのである。

要するに、根柢に於て父は感情的であり、母は理性的であるやうに想ふ。私達の性格は兩親から承け繼いだ冷靜な北方の血と、割りに濃い南方の血とが混り合つて出來てゐる。其の混り具合に依つて、兄弟の性格が各自異つてゐるのだと思ふ。私自身の性格から云へば、固より南方の血を認めない譯には行かないが、割りに北方の血を濃く承けてゐると思ふ。何方かと云へば、內氣な、鈍重な、感情を表面に表はす事を餘りしない、思想の上でも飛躍的な思想を表はさない性質で、色彩にすれば暗い色彩であると考へて居る。從つて境遇に反應して咄嗟に動く事が出來ない。時々私は思ひもよらないやうな事をするが、それは咄嗟の出來事ではない。私なりに永く考へ、

た後にする事だ。唯それを豫め相談しないだけの事だ。かういふ性質を有つて、私の家のやうな家に長男に生れた私だから、自分の志す道にも飛躍的に入れず、かう遲れたのであらうと思ふ。

父は長男たる私に對しては、殊に峻酷な教育をした。小さい時から父の前で膝を崩す事は許されなかつた。朝は冬でも日の明け〳〵に起されて、庭に出て立木打ちをやらされたり、馬に乘せられたりした。母からは學校から歸ると論語とか孝經とかを讀ませられたのである。一意意味も判らず、素讀するのであるが、よく母から鋭く叱られてめそ〳〵泣いた事を記憶して居る。父は然しこれからの人間は外國人を相手にするのであるから外國語の必要があると云ふので、私は六つ七つの時から外國人と一所に居て、學校も外國人の學校に入つた。それが爲めに小學校に入つた時には、日本の方が遲れてゐるので、速成の學校に通つた。

小さい時には芝居その外の諸興行物に出入する事は殆んど無かつたと云つて可い位で、今の普通の家庭では想像も出來ない程頑固であつた。男が柔りに笑つたり、口を利くものではないと云ふ事が、父の教へた處世道德の一つだつた。尤も父は私の弟以下には餘り烈しい、スパルタ風の教育はしなかつた。

父も若い時はその社交界の習慣に從つて隨分大酒家であつた。然し何時頃からか禁酒同樣になつて、僅かに藥代りの晩酌をする位に止まつた。酒に醉つた時の父は非常に面白く、無邪氣になつて、まるで年寄つた子供のやうであつた。其の無邪氣さ加減には誰でも噴き出さずには居られなかつた。

父の道樂と云へば謠位であつた。謠は隨分長い間やつてゐたが、その割りに一向進歩しないやうであつた。一體私の家は音樂に對する趣味は貧弱で、私なども聽く事は好きであるが、それに十分の理解を持ち得ないのは、一生の大損失だと思つてゐる。

（一九一八年十二月、中央公論所載）

著作集に就いて

この輯から私の著作集の刊行は私の友の足助素一がやつてくれる事になりました。從つて新潮社とは關係が絕たれる事になる譯です。

私の著作集の刊行を企てゝくれたのは新潮社でした。賣れても賣れなくても刊行を續けてもらひたいと云ふ私の要求を快く承諾してくれた代りに、私も書冊の形ではこの著作集の外には作物を發表しない約束をしたのでした。新潮社は私の爲めには十分滿足な働きをしてくれました。それを私は始めから今に至るまで深く喜んでゐるのです。

足助が刊行の事を申し出てくれた時、彼の永年の深厚な友情と好意とがあるにも係はらず、私は彼を一時は不快にするまで諾否を躊躇しました。それは新潮社に對して如何にも義理が立たないと思つたからです。然し足助が私の作物を刊行しようといふ事情は非常に緊迫したものなので、それを熟慮して見ると、どうしても默つてはゐられなくなりました。そこで私は押し切つて新潮社の主人佐藤氏に相談する事になりました。佐藤氏は足助と私との心事と誠實とを諒(りよう)とし、色々の忍び難い事情を喜んで忍んで、今後のこの事業一切を足助の手に委(ゆだ)ねてくれられました。

私は玆にこの事業の授受が凡て商賣氣を離れた友誼的關係を以て行はれた事を深く滿足とするものです。この事を新潮社の名譽の爲めに私は讀者諸君にお告げする義務を感じます。

私の友なる足助が私の爲めに著作集の刊行を企てゝくれた事を私は氣持よく思ひます。足助は少くとも當分に

その全努力を私の著作集の刊行の爲めに費やしてくれる譯なのです。私は彼の友情と奮勵とに深い感謝を持たざるを得ませぬ。

（一九一八年九月　著作集第六輯）

壹冊の形でする私の創作感想等の發表は、この「著作集」のみに依ることゝします。私の生活を投入するものはこの集の外にありません。

とまれ私は一個の人間でありたい。それを信じて下さい。あなたと私とを結び附けた因緣に對して感謝する。而してあなたに私の最上の祈願を捧げる。この集を顧みて下さる方に私は敢てかう申します。

（一九一八年十一月　著作集第七輯）

廣告文

生れ出づる惱み

この輯に集めた「石にひしがれた雜草」は「太陽」に掲載し、「生れ出づる惱み」は大阪毎日新聞に連載中事故の爲めに中絶してゐたのを完成したものだ。前者はその題材を他人の噂話から得た。私はその話を聞かされた時からその主人公に對して深く考へさせられた。而して「宣言」を書いた時の心持をもう一度裏返して自分に迫らなければならない必要を感じた。愛が正當に取扱はれた場合と不正當に取扱はれた場合とから來る恐ろしい隔たりを見窮めて見ようとした。題材の排列から云ふと、この一篇は造作に過ぎると云はれるかも知れない。然し心の過程から云ふなら、私としては眞實を一歩でも離れてはゐないと思つてゐる。私は「生れ出づる惱み」に於て凡て、誕生を待つよき魂に對すゝ謙遜な讃歌を唱へようとした。自然は大きな産褥(さんじょく)だ。私はその産褥の一隅につつましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい。

小さき者へ

この輯には私の小品七種を集めた。ある物には私の經驗が可なり直接に取り扱つてある。文壇の一部では藝術と云ふ事が出來ないと非難されたものだ。ある物には私から思ひ切り飛び離れた生活が、私一箇の批判の對象として寓意の賓主として描かれてゐる。これ亦文壇の一部から生命のない平寫として非難されたものだ。私は然し恐れないで、其等の作品を私の著作集の中に組み入れる。何者私自身は是等の作品を恥ぢないからだ。而してそれは私の生活とはやはり分離する事が出來ないと思ふからだ。

人生の歸趣（獨立と服從）

人は終局に於て、到底曖昧なる地に立つを肯んぜざる本能を有す、吾人の有する結論の語は、唯「然り然り否な否な」なる、然定と否定との何れかに歸せざる可らず、自餘の模稜なる字句、これを反する千萬なるも、吾人の良心は決して滿足せざるなり。

吾人は此に於て一の問題に遭遇すべし、何ぞや、人は獨立すべき者なるや、服從すべき者なるや、是れなり。此の極めて緊要なる問題は、今や全く衆人の足下に蹂躙せられ、或は迂遠虛蒙、半顧の値だになき者とし、或は平凡尋常、問題として攻究するの要なき者とす。何等の近眼ぞ、何等の無謀ぞ、「命令する能はず服從する能はざる者は、無用の長物なり」とは、先人の唱道する所、然り此の問題を解釋せずして、人類の立脚は極めて曖昧たり、極めて模稜なり、かゝる渾沌なる基礎の上には、空想の蜃氣樓だに建設し得可らずと知らずや。

然らば我は服從す可きか、獨立すべきか。

服從とは由來輕蔑の別稱なるが如し、服從に附帶する義務としては、身體の束縛と、意志の制限あり、恥辱と不幸と、飲泣と、乾笑とは、皆服從の結果より來る、而して特權としては、何者も附與せられざるなり、奴隷の生涯は服從の生涯なり、牛馬の生涯は服從の生涯なり、責任を擔ふの勇氣なく、額に汗して自ら食はんとするの忍耐なく、體面を維持せんとする廉恥心なく、圓滑奕梯を是れ事として、彼に阿附し、是に雷同し、一日の餐、

半夜の睡の爲めの故に、己れの品位を失墜して顧みざるは、知らず人類として生まれ天に到達すべき意志を享受せる者の行爲なるか、我は我と同等なる人間に、無限の服從を敢てする能はざるなり、我は牛馬たらんよりは、寧ろ千里渺漠たる沙漠に退き、獨天地を睥睨する獅子王たらん、我は奴隷たらんよりは、寧ろ支配者の手及ばざる絕域に去り、蠻禽野獸と伍して自由を完うせん、我に枉ぐ可きの意志なく、矯む可きの情なく、而して賣る可きの知識なし、我は我の我にして他人の我にあらず、我は獨立す可き者なり。

此の男らしき潔き觀悟は、實に吾人が「獨立と服從なる問題」に接して、必然喚起する所なる可し、然り是れ吾人の父祖が有せし觀悟にして、殊に才能あり知識ある拔群の人によりて、實行せられんとせし所なりき。彼等は衆愚を足下に拜跪せしむるのみならず、山をして頓首せしめ、海をして立拜せしめんとし、河には頌歌を要求し、野には貢獻を嚴命し、地球を脚下に踏みて、指間天上の星を弄せんとせり、苟も獨立と云ふ、些少なる服從の意をも含蓄す可きにあらず、彼等は智により、情により、或は意志によりて實に之を試みしなり。

知識は着々歩を進めつゝあり、金鱗を振ふ胡蝶と、醜土に輾轉する毛蟲との關係を知らざりし昔時の大學者は現今の小學生の知識だに有せざりしなり。人間が粘土より造られたりと稱する神學說は、進化論の打破して餘さゞる所なり。知識は巨萬の富を積ましむ可し、種々なる娛樂を供す可し、交通機關によりて、時間的に地球は縮小せられ、有用地の開發によりて、利用上より地球は增大せられたり、嗚呼、知識は偉大なり、知識の進步は最重ぜざる可らず。

しかも讀者よ、知識の進步のみが重ず可き者にあらざるなり。知識は吾人に獨立を與ふるに於て、最大なる資格を缺けり、吾人の知識は發見し得可し、發明し得可し、しかも創造（create）し得ざるなり、吾人に創造の力なくして絕對の獨立は買ひ得可きにあらず。「渺漠たる眞理の海濱に於て、我は砂礫の二三を拾ひしに過ぎず」とは、

常に謙遜なる智者の啓頭にある可きの語なり。嗚呼、南瓜大に過ぎざる頭腦を振ひ、知識を以て、絶對の獨立を買ふ可しとする傲慢無謀なる智者よ、來つてバイロンの筆を呵して、汝を叱する聲に聞かずや。

'But grief should be the instructor of the wise;

Sorrow is knowledge; they who know the most

Must mourn the deepest o'er the fatal truth.

The Tree of Knowledge is not that of Life."

然らば我情によりて獨立を買ふべきか、我の情は屢ゝ美妙なる樂土に遊ばざるにあらず、屢ゝ幽遠なる泉源に溯らざるにあらず、情は吾人を最も高遠なる處に導き得可し、想像の翼に乘じて神殿の玉座に倚り、宇宙を指呼の間に動かしむるも、或は難事にあらざるが如し、されども吾人は、此の情の九天に至り得ると同時に、黄泉に陷り易きを思はざる可らず、吾人の生涯は劣情との苦鬪にはあらざるなきか。我自ら顧みて一日の行爲を思ふ毎に實に未だ嘗て此の歎なくんばあらざるなり。誘惑の惡魔は多く情中に潛んで來る、我情は我自身の力にて自由に使役せんには、餘りに大に過ぎたり。一劣情を矯むれば一劣情從つて起り、朝來の聖想は變じて夜陰の醜思となる。不潔の涙、不純の笑、睚眦の怨、匹夫の忿、相錯綜して襲ひ來る時、自らこれを制せんとして、「嗚呼我れなやめる人なる哉」の歎聲を發せざる者果して誰ぞ。一時に熱し、一時に冷え、忽ち天上の人となり、忽ち地下の鬼となる、我此の如き情を抱懷して、到底絶對の獨立を買ひ得可きにあらざるなり。

然らば意志を以てか、然り古來意志を以て獨立を買はんとせし人は甚だ多かりき。人の隷屬たるを屑しとせざる人は、意志の人なりしが故に、彼等は意志を激勵して、天にも地にも獨立せんとせり。懸軍萬里、馬をインダス河畔に立て、泣て征服すべき地の盡きたるを洪歎せし人、亞弗利加の征服を終へ、華美なる凱旋をなして羅馬府

に歸るや、元老院に報告して、「余は來れり、余は見たり、余は征服せり」と云へる人は皆是れなり。彼等は所謂衆人の觀て以て獨立の人となす者なり、彼等は靈性を有する人類を見ること糞土の如く、苟も己れの意志を行はんが爲めには、親子も朋友も共に犧牲となして憚らざる者なりき、しかも歷史ありて以來、意志に依りて絕對の獨立を得し人は果してありや。彼等は僅かに惡魔よりも弱き事ある人類の一時代を壓服して、以て得たりとなせしに過ぎざるにあらずや。

「火藥の爆發の如く、枯草の燃燒の如く、一時全世界は焰煙の包圍する所となりたるに似たり。しかもそは僅かに一時のみ。世界は萬古の高山と淸流とを以て、上には宿參、下には沃土、依然として損益するところなきなり。」とはカーライルが、彼等の事業を罵倒せるの語、嗚呼然り。其の劍は渺漠たる大瀛を征服せしや、其の笏は晃々たる北斗を麾き拜せしめしや。

エヂプトを征せんとして奈翁戰艦を馳せて地中海を過ぐ。彼の胸中傲然として天地空しきの槪ありしならん。しかも海上一夜、星斗の闌干として永遠の光に瞬けるを仰ぐや、肅然としてこれを指し、無神論を喋々しつゝありし博士等を制して曰く、「靈妙の論なるかな、諸君、しかも是等の凡ては誰が造りし所ぞ」と、これ「不可能」なる字を、字書中に挿む可らずと云ひし其の人の、同じき口角に發したる驚愕の聲なるなり。

果然意志は永久まで延し得可きにあらず、然り意志は絕對の獨立を買ふに足らざるなり。

噫然らば我何を以て獨立を買ふべきぞ。情を滅して禪僧を學ばんか、智を捨てゝ耕漁に就かんか、抑も意志を抛つて俗塵を嘗むるを事とせんか、天稟の情を放擲して枯木寒巖たるは我の到底なし得ざる所、獲得したる僅少の知識は我をして耜櫓に安ぜしめず。生まれ得て有する頸骨を人の後塵に屈するは我の極めて堪へざる所なり。此に於てか進んで絕對の獨立を爲す能はず、我は我が立脚の模糊定め難きに殆ど悶絕せんとするなり。

勢逼つて此に迨ばゞ、先づ心を鎭めて深く思へ、吾人は遂に絶對的に然りと云ひ、否と云ふ能はざるか、絶對的に獨立を爲す能はざるか、絶對的に服從を爲す能はざるか、吾人の良心は到底滿足の結句を得る能はずして止むべきものなるか。焉ぞ然らん。

驕慢にしてしかも卑屈なる人の心よ、汝は神の心にあらず、惡魔の心にあらずして、人の心なるを忘れしか。汝は神に對して獨立を宣言せんとし併せて惡魔に對して服從を爲さんとせり。正義を正義として尊敬しつゝしかもこれに據るを爲さず、俗慾を俗慾として厭惡しつゝしかもこれを得んとして齷齪せるは何ぞや。汝は神の心を得んとして惡魔の行を爲せり、矛盾の甚しき世寧ろ之れに過ぎたる者あるか。

我ヒマラヤを知らずアルプスを知らず、唯嘗て小なる日本の高山富士を攀ぢたるのみ、しかも此の倒扇の形を爲せる無言の土塊が我に與へたる教戒は尠少ならざりしなり。敢て其の一を語らんか。登山の當日我の脚始めて仰ぎしは曉暗尙四邊に罩りたる時なりき。地には生まれて以來常に見て厭きたる草と木と人と馬と家と畑とあり。人はパンと名と情との爲めに安息の時なる夜をさへ泣き且つ笑ひ、偶ゝ結べる夢亦屢ゝ破れんとはすらん。遠く眼を中天の彼方銀河の傾き落ちんとする邊に擧ぐれば富嶽居然頂上の八峯玲瓏として星宿を冠して立てり。我此に至りて登臨の思勃如として禁ずる能はず、鐵脚の塵を拂ひ、金剛の杖を振ひ、友と共に魚貫して登り、四合を經て五合、五合を經て六合に、足跡全山の半に及ばんとして立ちて顧望するに、何事ぞ雲霧冥合、身を立てし膝下亦白からんとす。先に見し所の莊嚴比なき山巓將た何れの處ぞ、我が脚は疲れたり、我が息逼れり、偶ゝ俯望して白霧の山嵐に散じ、一道の隙を爲せる間より、相豆の諸山碧翠を射映せるを見て、我は思へり、歸らん哉歸らん哉、勞して登る事一萬二千尺、天に近き事僅かに一萬二千尺にして何の益する處ぞ、山下に佳味あり、安居あり、之れに就て地上の山川と再び相見ゆるの易にして快なるに如かんやと。かくて我は峯上一夜、雲海の渺茫として山腰

に漂盪する時、獨り千古の巨巖に坐し、肅然として天心に近く昇れる孤月輪に對し、莊嚴悲壯の致を極めたる天地の大文章に接する快を知らざらんとしたりしなり。

人あり山腰五里霧の裡に立てり。山上の奇を見んと望むも、しかも意を決して登るの勇氣なく、山下の平凡を惡めども、しかも亦俗樂を逐はんとするの念なきにもあらず、能ふべくんば咫尺を辨ぜざる霧中にありて天上の奇と地下の快とを併せ味はんとするあらば、人多くは啞然として其の愚を笑ふべきか。而して焉ぞ笑ふ者の屢〻己れの愚を笑ひつゝあるを知らんや。

人よ偉大なる樓閣を築かんとせば先づ其の地の軟土を深掘して、代ふるに强固なる硬石を以てするにあらずや。乳に渇したる赤兒は再泣きて母の膝下に歸り來るにあらずや、汝の有する地上の能力が汝を絕對の獨立に導く能はざるを知らば、焉ぞ汝の有する凡てを放棄せざる。而して焉ぞ男らしく絕對の服從を捧ぐべき者を探らざる。虛に依る勿れ、影に步む勿れ、汝の「碎けたる靈魂」は、果して汝に何物を齎すぞ、暗黑に等しき光明の間に住むは、汝の最終まで堪へ得る所なるか、吾人は玆に猛省する所なかる可らず。

眞理に絕對に服從を爲し得て我が立脚は鞏固不拔なり、我の智は玆に始めて活動の方向を知り、我の情はインスピレーションによりて向上し、我の意志は唯一の敵惡魔を脚下に蹂躪せんとする勇氣に滿つ、有限を捨てたる我は無限によりて酬はれたり、生命と光明とによりて我玆に立てり。然り神に絕對の服從を爲し得て我に此の歡喜と感謝と勇氣と高情とあり、人として眞正の獨立とはこれを云ふなり。

昔者ピラト傲然として眞理其の者に「眞理とは如何なる者ぞ」と問ひぬ。今や理想に燃ゆべき青年の間にすら眞理とは一種の閑文字となりたり。「彼等目に見、心に悟り、改めて醫さるゝを得ざらんが爲めに、其の目を眩にし、其の心を强硬にせり。」然り彼等は屢〻眞理に逢着してこれを捨て去りぬ。而して衣食の爲めに學術は研究せら

れ、外觀の爲めに宗教は信仰せられ、公開の大演說ありて密室の默想なく、天來の妙筆ありて謹嚴なる實行なく、人の前に恭敬の貌を爲して神の前に不禮の致を極む。此の如き近眼無謀なる青年ありて、一校の前途憂ふ可く、一國の前途悲しむ可く、人類の前途に光明なし。全くある事なし、嗚呼悲慘なる將來を如何。

しかも感謝す可し、世は全く暗黑ならずして光明あり。唾棄しつべき罪惡の中にも、それと鬪ふ高潔の青年あり。嗚呼尊敬す可き諸子よ、願くは我をして諸子に尾して進むを許せ。青春の快山の如きを抛ち去り、隻手罪惡の濁流を排し、勇氣を以て困厄と戰ひ、高情を以て醜惡に對し、擧世が滔々として向上の念を捨て、僞善と虛飾との間に其の俗慾を擅にせんとする時、孜々として山積せる塵芥の中に生命を探る兄弟に接して、我は實に同情感激の涙なき能はざるなり。我は嘗て我が同志と信じ共に社會の惡德と健鬪すべしと期したりし幾多の同輩が社會に立つの時近づくに從ひ、偉大なる希望を夢として排斥し社會交際術の研究に忙はしく偶々我が志を語れば固陋迷信愚見迂濶の徒として一言の下に斥くるを見、人生の悲慘なる失友の涙を垂れしもの幾度なりしぞ。强固不拔なる立脚地なく、例へば浮雲の如き、例へば流水の如き根柢なき基礎の上に立てる人の前途のあはれ光明なきかな。

嗚呼諸子よ、諸子は凡てに勝りて尊き天職を有するなり、諸子の周圍にありて、動もすれば諸子を吞噬せんとする無數の罪惡は益々諸子の發奮を促すにあらずや。我等が益々勉むべきは眞面目に謙遜に人生の歸趣を討ぬるにあり、快樂と苦楚と我に於て浮雲の如からしめよ。

All which pleases is for a moment;
All which troubles is for a moment,
That only is important which is Eternal!

…………………………

Make your mark!
Make it while the arm is strong,
In the golden hours of youth;
Never, never make it wrong,
Make it with the stamp of Truth!

吾人を眞理に導く中道に横はれる五里霧は吾人より全く上天を隱して時に地上の快樂を示す。吾人眞に眞理によりて立たんとせば衷心よりの決心を以て全く俗慾より眼を轉ぜざる可らず。正しく天上を仰がざる可らず。嗚呼絶對の服從を眞理の前に捧げん迄吾人は進まざる可らず、休せざる事星霜の運行の如くならざる可らざるなり。

我敢て「人生の歸趣」を解釋し得たりと云はず。此の黄口焉ぞ之れを爲せりと云はんや。是れ實に人が其の生涯を通じて追求すべき大問題なり、唯我高崇なるエルム樹と、香鼻に甘き牧草と、愛すべき山と、慕はしかる水とを有する札幌に來り學びてより殆ど五星霜、莊嚴偉大なる自然と、愛讀敬誦したる書籍と、一人の師と一人の友とに聞きて此の駑駘亦僅かに眞理の何者なるかを味ひ知りぬ。今や此の校を去るの時遠からざらんとするを思ひて、洵に無限の感慨なき能はざるなり、此に微衷を述ぶる所以、幸にして二三子の捨つる所とならずんば我が望足れり。

"Farewell, my friends; farewell my foes!
My peace with these, my love with these;
The bursting tears my heart declare:
Adieu, my native banks of Ayr!"——*Burns.*

（一九〇〇年「學藝會雜誌」第三十四號）
（一九〇一年「同　　上」第三十五號）

鎌倉幕府初代の農政

例言

一、茲に農政と稱するは廣義に據れるものにして政府が施設する所の農政と民間に設置さるゝ所の農業制度とを含めり、卽ち Agrarwesen und Agrarpolitik なる意義に於て使用せり。

二、鎌倉幕府初代とは源賴朝府を鎌倉に開きてより北條時賴執權の時に及べり。蓋し鎌倉幕府の農政は此間に於て完備せられたりと信ずればなり。

三、科學的農政は農業史の解說なりと云へるマイツェン氏の農政學に對する定義は此論文を艸するに當りて殊に服膺せる所なり。

四、足利時代は知り難きが如くして知り易く北條時代は知り易きが如くして知り難しとは歷史家の共に云ふ所此知り難き北條時代を知らんとす。參考書の蒐集知識の深厚併せ存して始めて爲す可し。而して今二ながら無し。深く効果なからん事を懼る。

五、參考用書の重なるものを揭ぐ。

大日本農史
大日本農政類編
農政座右　小宮山昌秀

讀史餘論　新井白石
農政本論　佐藤信淵
日本財政史　萩野由之
大勢三轉考　伊達千廣
農業本論　新渡戸稲造
古今田制通考　船橋懲信
制度通　伊藤長胤
日本法律沿革略　天野御民
本朝物價表　西村兼文
田租沿革要記　幸田思成
地方落穗集
田制沿革考　平常富
二千五百年史　竹越與三郎
國史眼
田政考　高倉胤明
吾妻鏡
北條九代記
桃元問答　田中元勝

貞永式目抄　續史籍集覽の中

農政論　井上辰九郎

古今制度集

農政汎論　横井時敬

農政祕錄　佐藤信淵

東京經濟雜誌

史學雜誌

史學界

農政學講義

農業經濟學講義

A. P. Higgins; Elements of Agricultural Law.

F. Pollock; The Land Laws.

Kidd; Social Evolution.

H. George; Progress and Poverty.

Hegel's Philosophy of the State & of History. (an exposition by G. S. Morris.)

Laveleye; Primitive Property.

W. Epps; Land System of Australasia.

Systems of Land Tenure in Various Country.

F. G. Heath ; The English Peasantry.

Bliss ; A Hand-book of Socialism.

Jahrbücher für Nationalökonomie u. Statistik.

Fühling's Landwirtschaftliche Zeitung.

目次

第一章　鎌倉幕府初代に於ける農政史研究の必要

本邦有史以來盛衰隆替一にして足らず。頗る錯雜を極め委しく其跡を討ね難きが如きもこれを大體より觀察して肯綮に中り得可きものなきにあらず、

國家と政府とは勿論混同して論ず可きものにあらず。國家とは抽象的意義を有し政府とは具體的意義を有す。牛は其健康　る時も疾病に罹れる時も生活機關の活動を廢止せし時も等しく牛なるが如く國家は其政府の施政が圓滑なる時も缺點ある時も依然國家たるを失はず。故に國家は其政府の存亡盛衰によりて必しも其軌を一にして存亡盛衰するものにあらざるは理の極めて覩易き所なり。然れども政府の組織及び施政如何が其國家の盛衰に與りて大に力あるは少くとも從來の歷史が證明する所にして、一派の學者が想像する如く政府が他年一日其存在の必要を否定せられなば則ち止むも、唯現今に於て若しくは過去に於て政府は得失共に國家の盛衰榮枯に多大の影響を與へしは何人と雖も首肯せざるを得ざる所なる可し。

歷史の分科に於て政治史が儼然として樞要の位置を占め歷史とし云へば人は多く政治史なるかの如く想像する所以のものは洵に前述の理由に依りて然るものなり。要之政府の職責とは國民が大勢の赴く所に隨伴して不知不識の間に其の良心より發露し來る不聲の聲を聽取し其の向ふ所を知らしめ行ふ所を覺らしむるにあり。故に吾人は史を讀むに當り政權の推移施政の變更等に深き注意を拂ふの必要ありと信ず。蓋し是等の事實それ自身が吾人に夥多の感興を齎すにあらずして、其の事實の裏面には洵に無數の趣味ある事實を包含すればなり。

今試みに本邦史中政府が據つて立つ所の規約（法令と云ふ能はざるものあるが故に假に規約と稱せり）用語或

は妥當を缺けるものあらん。)を改定して時代を劃別す可き改革を來せしものを列擧すれば神武以來

一、紀元六〇四年推古天皇の朝に於ける憲法十七條の制定

二、紀元六四六孝德天皇の朝、中大兄皇子、中臣鎌足等によりて成されたる大化の改新

三、紀元七〇〇文武天皇の朝に於ける大寶律令の制定

四、紀元一二三二後堀河天皇の朝、北條泰時等によりて成されたる貞永式目の制定

五、紀元一六一五後水尾天皇の朝、德川家康によりて成されたる公武法制十八條の制定

六、一八八九今上天皇の朝に於ける憲法の制定

は其の最も重きに居るものと謂はざる可らず。

今更に政權推移の方向より觀察せんか、新井白石が其讀史餘論に云へる所、要を得たるに庶幾しとなす。曰く、

第一、淸和天皇幼主にして外祖良房攝政す、是外戚專權の始め。

第二、基經外舅の親によりて陽成天皇を廢し光孝天皇を立てしかば天下の權藤原氏に歸す。

第三、六十三代冷泉より圓融、華山、一條、後朱雀、後冷泉の八代百〇三年間外戚權を專らにす。

第四、後三條、白河は政、天子より出づ。

第五、堀河より安德天皇まで九代九十七年は政、上皇より出づ。

第六、後鳥羽、土御門、順德三十八年鎌倉殿天下兵馬の權を分掌す。

第七、後堀河より光嚴天皇まで十二代九百十二年は北條陪臣にて國命を執る。

第八、後醍醐天皇重祚、天下朝家に歸する事三年。

第九、後ち天下再び武家の世となる。

其他伊達千廣氏の如きも其大勢の變更に於て獨創の見地を示し政權が三種の力に依つて推移せるを說けり。即ち

第一、姓の世。大化以前の世態にして政權は血統によりて繼紹支配せられ、未だ爲政者の能と不能とを稽へざるもの。

第二、職の世。大化以後藤原氏の季世に至るまでの世態にして、施政に干與するものに才幹學識あるものを擧げたり。

第三、名の世。保元平治以後武家の政權を掌握せる時代を稱するものにして名の世と稱するよりも、寧ろ實力の世と稱する方却て理解し易きが如し。即ち實力あるものが爲政者たるの世を指すものにして職の世に於ける政府が實力あるものを擧ぐるとは軒輊せる所あり。

其他伊藤長胤氏は諸制度の變遷の點より本邦史の時代を區別せり。

一、神武天皇より孝德天皇まで。

二、孝德天皇の時、唐風に傚うて制度を作爲せしより鎌倉時代に至る。

三、鎌倉幕府制度より德川氏亡ぶる迄とす。

今是等の意見を綜合して吾人は北條氏時代が特殊なる表示を日本歷史の上になせるを發見す可し。藤原良房外戚を以て政權を左右したるが如きは政權推移の好例なりと雖も、政府の方針が大改革を經たるの時期とは稱す可らず。又德川氏の公武法制は貞永式目より出でて而も出藍の目あるものにして、法制史上確かに一新時機を劃せるものなりと雖も、政權が武門の手にありし點に於ては鎌倉幕府と擇ぶ所なきなり。反之鎌倉時代は政府の方針が大革新をなしたる時期にして又政權推移の大屈折點をなし法制史上の新時期をなす。實に鎌倉幕府時代は大化の革新と共に日本歷史の鴻溝を形成せるものにして、大化の革新に比し政府の方針を着々實行せし點に於て更に

一步を輸せるの觀あり。史家の力を極めて此時代を硏究するの要は則ち玆にあり。

歷史は時間的に繰り返すのみにあらずして又空間的に模倣するものなり。羅馬の希臘文明を咀嚼して立つや、其武力と農業とによりて立國の基礎を定め鞏固なる財源と剛健なる氣風とを養成せり。史家レッキー氏は紀元前後の羅馬が道德地を拂うて空しく奢侈俗を成せし理由の一として農の衰頹を擧げたりと云へり。然り農業は當時にありては國家と分離す可らざる關係を有せしものにして財政の求源となり、强兵の養成所たりし故に、農業一度弛して國家の基礎遂に搖ぎ復收容す可らざるに至りぬ。羅馬の强大なる威權を振へる間は卽ち農業の盛大なりし時期なりき。鎌倉幕府も亦其威權を武力に求め其財源を農業に求めたり。當時に於て工業は漸く其步を進め來り刀劍機織の類大に盛なりしも、此の如きは未だ以て國家の財政に關係を及ぼすに至らず、商業の如きも唯國內寧ろ町村內の商業にして、足利時代に冒險大膽なる商賈が海を渡つて支那朝鮮と貿易せるの比にあらず。國家は依然重農主義に立たざる能はざりき。故に當時に於ける農政を硏鑽攻究せば、日本歷史に於て最も顯著の時期なる鎌倉幕府時代施政運轉の根元を知り得可きのみならず、之れを現今の農政施設に照して闡明する所尠少ならざる可きを信ずるなり。

第二章　鎌倉幕府以前に於ける農政史の概要

第一節　第一期（神武より孝德まで）

神武天皇の九州に起り其宗族を率ゐて東征するや、沿道の諸族を下し遂に大和に入り橿原に卽位す。思ふに當時北陸道の東部より畿內一帶の地は文化旣に若干か開け、天下の紀綱を制せんと欲せば、先づ此に其基礎を肇め

以て四方に號令せざる可らず。神武の九州にありて長く其部族を撫育し遂に立ちて遙かに征旅せしは之れが爲めなり。其卽位するや諸族の功を論じ天種子命、天富命、道臣命、大來目命、可美眞手命等各職に補せられ、地方にも亦地方官を封ずる差ありき。抑も當時の職たるや族長の任ずる所にして世々其職を襲ひ所謂封建制の濫觴をなせり。天皇頗る心を農事に用ゐ諸功臣をして民庶を率ゐて肥土を諸方に探らしめ、西は南海道の諸國より東は東海道の東僻に及べり。中央政治機關の完備に就くに從ひ忽ち一種の植民開拓事業を起して土地の收容に勉めたるを見る可し。此に於て四方開拓の歩を進め蓊鬱たる森林を開きて田畑と化する毎に諸功臣を封じ皇化漸く遍きに及ばんとせり。しかも當時にありては眞に朝廷の如何なるものなるかを知り、拱手甘んじて其治を受けしものは帝都の四方數郡の地に過ぎざりき。

崇神天皇に至り神武創業より十代を經四百八十年を閲しぬ。しかも遠隔の地未だ王化に霑はざるもの多かりしかば、所謂四道將軍を北陸、東海、西海、丹波に遣はし大に地方の經營に勉め初めて民戸を調し長幼の序、男女の差に從ひて調役を課せり。弓弭調、手末調とは卽ち是れなり。これより先き三韓の本邦と交通せるもの久しかりしと雖も、直接に朝廷と交通せるは實に崇神の末世に創まる。而して其交通の影響は少々にあらず。崇神垂仁の朝、盛に池溝を開き灌漑を便して殖田に勉められしが如きは確かに其一なり。

垂仁天皇に至りてはよく先帝の意を嗣ぎて田村王に命じて荒田を興復する事二萬餘頃、新田を開發する事實に六十萬頃、又箕野科野古志及び道奥常陸胸刺尾張等の地に於て得る所の田數凡て三百一萬餘所、西筑に開墾せる田地九十萬所なりと報ぜらるゝに至りては當時の事情恰も米國の來りて門戸を敲けるより痲醉しつゝありし舊日本が急に立ちて俄然として百度文明の域に進みしが如く支那及び朝鮮の文化が遠く本邦沿岸に影響し來り日本が之れによりて警醒せられたるを見る可し。五十瓊敷命の如きは皇子の身を以て農事の爲めに辛苦經營し遂に薩南の

地に蔑ぜらるゝに至る。當時又農工の業漸く相分れ農業は工業によりて蔑せられし事甚だ饒多なりき。

景行の朝に至り支那朝鮮の影響を蒙る事益々多く、九州は殊に之れと相接近せるが故に交通頻繁にして相互相移住し彼の文を以て此の野を補ひ、九州土着の民は次第に其力量を恃み海外の後援に驕りて大和朝廷を忘却せんとするに至る。此の如くして多く外國の文明を知らざる本邦の中部に先づ之れを移したる大和朝廷は、急に膨脹的勢力を發現するに至りたり。

仲哀天皇に至り神功皇一代の雄資を以て帝に勸めて九州に親征せしめ、尋で自ら朝鮮の南方を征服して歸る。是れ一面に於て日本が公然其門戸を開きて大陸文明の輸入を請ひしものにして、羅馬が其力征に於て希臘を壓倒して屬邦となせしにも係らず、文化に於ては希臘の壓倒する所となりしと酷だ似たるものあり。當時又朝鮮の民俘虜として移民として來るもの甚だ多く、驛路の開通は漸く其緒に就き園池の制亦備り、績織の業大に進みて農業は一段の發達をなし改良をなしたりき。

加之、當時に於て根本的に諸制度に變更を與へし者あり。卽ち支那典籍の輸入是れなり。先之我邦亦倫序の備はれるものなきにあらざりしもそは單に本能的のものにして君臣の關係と父子の關係とは多くの差異なく國家と家族とは多くの逕庭なかりし事なれば統御隷屬の法なるものも單純を極め、强力なるものは治者となり微弱なるものは被治者となりしに過ぎず。故に其課税の法等往々にして苛酷なるものありしが如し。仁德天皇の立ちて租を免ずる事三年民の富むは卽ち朕の富むなりと云ひしを見れば、偶々當時の農民が困弊の境に沈淪せしと儒教思想が治者の胸中に滃渤し來れるを知るに足る可し。而して後代に至り農民が星を戴いて出で月を踏で歸り粒々辛苦して耕耘に從事しつゝしかも粗衣と薄食に安じ一種人民の下級に位す可き職業として人も認め自らも信ずるに至りしものは、實に治者が儒教思想の所謂可使民依之不可知之と云へるが如き方針を取り、農民が閑散靜肅の生活

をなし、安分知足の儒教主義を取りしもの其原因の一をなせるは疑ふ可らず。本邦農政を考ふるに際し、支那典籍の輸入を輕視す可らざる所以なり。

履中天皇より宣化天皇に至るの間は歴史は其大勢の推移に於て寧ろ平板なる歩調を取り、其間に於て注意す可き事項は、朝鮮漸く離反の意を醸せしと、王權が極端の增長をなして農業が大打擊を被りし事と、族長の信を皇室に挾み威を朝廷に振ふもの漸く起りし事と、從つて所謂賤民と稱する奴隷の階級の漸く劃然として發達せし事と、安閑天皇の朝、筑紫、豐國、火國、播磨、備後、婀娜、阿波、紀伊、丹波、近江、尾張、上毛野、駿河の諸國に一個若しくは數個の屯倉を置きて天領となし御料の地漸く民田と相錯雜するに至り、又國造縣主等各自所有の領地に設置する所の屯倉より屯倉稅を徵收して以て皇室の料に充てしを記せば足らん。

既にして欽明天皇の時印度の佛敎は支那朝鮮を通じ遠く東漸して遂に日本に入れり、嚮に支那の典籍により地上の倫序を敎へられたる國民は更に佛敎によりて天外の道義を敎へられたり。それのみならず爾後佛敎が植民と開拓に對し異常の效力を奏せしは爭ふ可らざる事實なり。

推古天皇に至り聖德太子深く支那の典籍と印度の佛典に通じ政治の樞地に立ちて事を取るに至りしが故に、朝廷の規模は俄然として變革し、初めて禮節あり粉飾ある百僚を見るに至れり。而して憲法十七條は此時に成れるものにして今日よりしてこれを見れば一個朝臣の道德敎に過ぎずと雖も、嘗て政經を有せざりし朝臣は轉た其完美に眩ぜるものありしなる可し。而して其中農業に關係ある條目は、

第十二條　國司國造勿斂百姓、國靡二君、民無兩主、率土兆民、以王爲主、所任官司、皆是王臣、何敢與公賦斂百姓。

第十三條　使民以時、古之良典、故冬月有間、以可使民、從春至秋、農桑之節、不可使民、其不農何食、不桑何服。

以て其大體を窺ふに足る可し。

租庸調の制は前述せし如く、崇神天皇の時、弓弭調手末調を收めしめし事を記すれども、大化以前の稅法は甚だ漠然として其詳細を知る可らずと雖も、學者が零細なる材料より集成せる一斑を擧ぐれば、

大化以前の稅法（白雉の稅法と異る事なし　町段の差あるのみ）

田積	面積	穫稻	舂米	租稻	舂米
一歩	高麗尺方六尺 當曲尺方七尺二寸	成斤二把 今三百二十匁	大升一升 今五合八勺四四		
一代	五歩	一束（下把） 一六〇〇匁	五升 今二九合二二	三分	、一五勺
五十代	二五〇歩一段	五〇束 八〇〇〇〇匁	二五斗 今一四六一合	一束五把 今四三合八三	七、五〇勺
五百代	二五〇〇歩一町	五〇〇束 八〇〇〇〇〇匁	二五〇斗 今一四六一〇合	一五束 今四三八合三	七五、〇〇勺

穫米十五斛より七斗五升を輸すれば三公九十七民に該當すれども之れは上田の穫實なるを以て、中下田と平均する時は多少稅率を高む可しと雖も、殆ど其輕きに驚く可し。しかも是れ多くは其領主の收め取る所にして朝廷の財政は專ら諸種の貢調と課役とより成れるが如し。今是等の貢調と課役と及び田租とを加ふれば必ずや尠からざる重荷を農民に負擔せしものと思惟せらる。欽明の朝田部を脫籍して課役を免れんとするものありしを見、又聖德太子が憲法十二條の如き文字を挿みしによりて推知し得可し。

第二節　第二期（孝德より桓武まで）

一國の要路に立ちて紀綱を擅にせし大臣大連等の權族は佛敎によりて導火せられたる新舊思想の大火爐の中に投ぜられて其痕を止めざるに至りぬ。かくて日本の歷史は此一大鴻溝を置くに至る。孝德天皇の大化革新これなり、神武の卽位を去る實に一千三百年なりとす。

孝德天皇の卽位するや藤原鎌足中大兄皇子と共に族長の官位を世々にして政權を掌握するの弊を止め人により て官を授くるの法を定め國號を日本と稱し年號を大化と稱し天皇と人民との間に蟠りつゝありし族閥の障壁を除きて天皇親ら政を掌るに至り、國體頓に變じて玆に鞏固なる日本帝國は現出せり。

大化二年正月始めて改新の詔を宣して四大事を告す、曰く

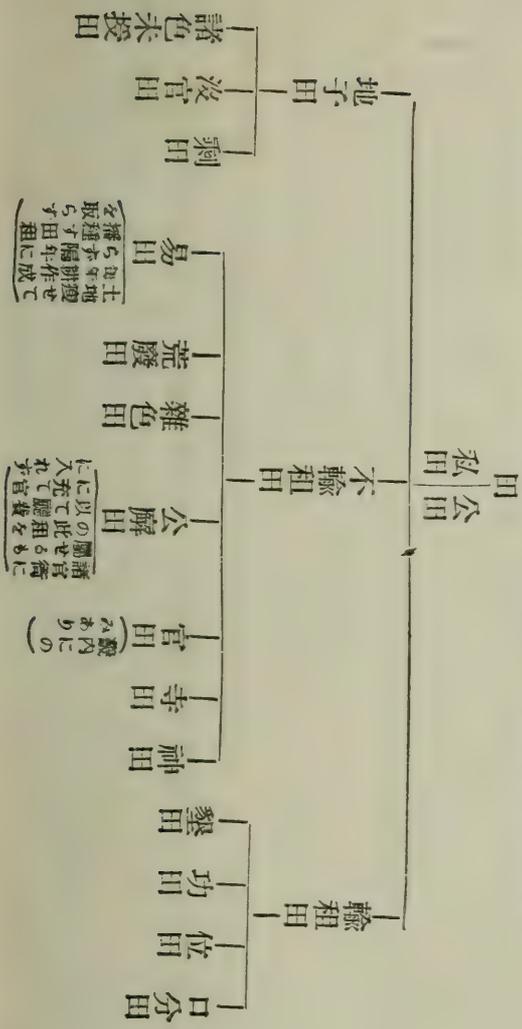
其一　歷朝置かれし子代の民處々の屯倉別・臣連・伴造・國造・村首等の所有する部曲田莊を罷めて悉く收公して公民公地となし大夫以上には食封官人百姓には布帛を賜ふ。

其二　畿內の境界を定め京師を修め京師は坊毎に長を置き四坊に令を置きて戶口を按檢し奸非を督察せしむ竝に其地の時務に堪へたる者を簡び用ゐしむ。郡をば三等に分ち五十戶を一里とし四十里を大郡三十里以下四里以上を中郡三里を小郡とし國造の中を選びて郡司とし大領小領主政主帳の四部官を置く。諸國の要所に關塞・斥候・防人を置き諸道には驛馬傳馬を置きて鈴契傳符を以て官使の往來に便にす。

其三　田制を改定して戶籍斗帳により班田收授の法を立つ。田制は田長三十步廣さ十二步を一段とし十段を町となす。其租は町毎に租稻二十二束を徵す、凡そ百分三の率たり。男女生まれて六歲なれば口分田を班給し身亡すれば官に收む。貧富の差等を制するなり。

其四　賦役の制を改めて田調・戶別調・調副物及び庸役の法を定む。田調は絹絁絲綿の類土地の產物を徵す、田一町に絹一丈の率たり。戶別調は戶毎に布一丈二尺。調副物は魚鹽の類を收む、亦土產に隨ふなり。

庸は布若くは米を收む、雜庸は官長に馬を輸し兵士は刀甲弓矢幡鼓を輸す。仕丁は五十戶每に一人を取りて諸司に充て、采女は郡領以上の姉妹子女を貢せしむ。

要之大化の改新は天皇親ら率先して、子代名代諸所の屯倉等を廢して御料の地を悉く國有に歸し、嘗て民庶間に跋扈して收斂苛酷停む事なかりし豪族臣連等が有する部曲莊園等を全廢して悉くこれを國に收め、以て土地國有の大方針を定められ、同時に國郡を檢校して一種の政治區劃を定め、當時邦內一萬三千餘里（卽ち六十五萬餘戶一戶の人口を五人として計算すれば三百廿五萬人）六百餘郡六十餘國に及べりと云ふ。又根本的に田制を改革し唐制に倣うて班田收授の法を設け、男子には二段女子には其三分二（此分配法は全然正確に行はれざりしが如しと雖も少くとも一般に此法に則れり）を給し、六年每に戶籍を改め造りて收授をなせり。而して當時の田類を示せば

大化に制定せられし租法を示せば（大寶の制亦同じ）

面積	穫稲	舂米	租稲	舂米
一歩 高麗尺五尺 當曲尺方六尺	不成斤二把 二百三十匁餘	減大升一升 當京升四一八撮		
一段 三六〇歩	七二束	三六斗	二束二把	一一升
一町 三六〇〇歩	七二〇束	三六〇斗	二二束	一一〇升

卽ち穫米三十六斛に對し租米一斛一斗を輸するが故に殆ど百分三强の租に該當す而して田租を以て地方の經濟を立て、地子田公營田の收租を以て京師の經濟を立てしものなり。延曆の輿地圖によれば中古の田積は一町より上中下平均して百束の穫稻あるものとせば二億四千三百二十五萬八百六十束を得可しとあれば、殆ど二十四萬餘町歩ありしなる可し。此他官田を私借して納むる地子は收穫の十分二にして陸田は段毎に租粟三升の割なりき。

大化の革新は此の如くして成れりと雖も、しかも舊弊はこれを一朝にして撲滅し新制を布く事難きが故に地方に行はんとする農政の如きも明文の如く施行せられしや否やは疑問なり。しかも此革新は土地制度に取りては偉大なる變遷にして其制度の繁雜なる當時の不完全なる行政法を以て到底圓滿に持續する事能はざりしも其施設の大膽なるは驚異するに足ると云ふ可し。天智を經天武に至りて初立の制度は多少の改竄を經たるも亦多少の鞏固を來しぬ。しかも天武の叛は門閥を恃み位動を矜るものに對するに賤民土兵を以てするものなりしかば、其勝利に歸するや所謂土豪なるもの所在に起り數村若くは數郡の地を併せて相割據するの素地を作るに至り、大化の制は既に業に一方より壞亂の緒に就きたり。而して奈良朝の末代卽ち天平寶字の頃に至りては「七道の巡察使復奏

して國司の公平の政をなすもの一人もなし」と云ふに至れり。派遣せらるゝ所の國司は膏腴の地を占領するもの多く細民に貸附す可き租稻を私用し、或は官物を己れの有としたりしかば、京官となるを願はずして外任を望むもの甚多かりき。

かくて文武の大寶律令（令十三篇律十二篇令の中農業に關係ある篇は戸、田、賦役、考課、倉庫、厩牧の諸篇なり）によりて大化の法は細則を得て大に完備に就きしが、そは端なく聖武天皇の破壞する所となりぬ。先之土地國有の弊漸く起り地方に派遣せられて牧民の職にあるもの往々にして收斂し往々にして怠慢し毫も民苦を顧みざるもの多きに及びぬ。加之持統が佛法を敬尊したると支那文明の輸入と共に建築の華、服裝の美を喜ぶ風を馴致し聖武に至りては殆ど佛法に惑溺し租調を收むる事漸く繁く、しかも衣食を裕にして直接生產に係りなき僧尼等を度する事極めて多く、莊嚴華麗なる寺院を建立する事亦數を知らず。加之當時僅かに四百五十八萬四千九十三人の人口を以て異常なる多額の朝官の俸給用度を負擔せしかば、從つて國有甚だ窒乏し小民の流離するもの甚だ多く、租調は益ゝ給せざるに至りしかば屢ゝ收稅事務の怠慢を禁じ朝集使等を戒飭し國司をして濟民の術を盡さしめたれども滔々として破壞に陷れる土地制度は遂に挽回す可くもあらず。卽ち貸稅の法を布き僅かに彌縫の策を講じたるも亦好結果を收むる能はず。遂に新たに地を開墾せるものにはこれを與ふるの制を起し親王一品は五百町を限とし諸臣は二位に四百町以下殺減して初位以下百姓に至るまで一人十町を限とし、又外官にありては郡司は大領小領に三十町、主政主帳に十町を限としこれより多くを兼倂するものは其餘を公に還さしむるの制限を附したるも、此の如き姑息の策は到底嚴守さる可きにあらず、土地國有の大制は隱然此に廢り、莊園私領の萠芽漸く開かんとす。

孝德天皇によりて立てられたる大化の制は天智天武に至りて小成し文武に至りて大成せしが、其の大成せられ

しと共に藤原氏の權勢は皇室と國民との間を隔離し文武に次で藤原氏の出なる二人の女皇拱手して成を仰ぐのみなりしかば、大政の紀綱は忽ちにして藤原氏に歸し、聖武孝謙の失政を以てして大化以前に等しき閥族の風遂に成り農政上にも前述の如き種々弊害を生じて國家人民は當さに大革新を渇望するの機運に逼りぬ。

第三節　第三期（桓武より安德まで）

此時に當り桓武位に即き雄偉の資を以て一代の風潮を革新せんとし、先づ地を山城に相して此に京師を移して莊嚴なる首府を起し斷々乎として改革の緒を開けり。其重なるものを擧ぐれば

一、僧侶の跋扈を禁ぜんとしたるにあり。

當時寺院の勢力漸く增大し殊に貴族間に其感化を及ぼせしかば、彼等は寺院を建て供養をなすを以て無上の報恩となし、夥多なる是等の費用は皆農家より調せしめられたり。故に農民の疲弊は從つて甚しく彼等は此苛酷なる租稅を免れんが爲めに或は其土地を寺院に寄附すると稱するあり。或は寺院より沒收せらるゝあり。爲めに浮浪の民を生じ租を收めざる徒を生じ山賊海賊の類、隊をなして起るに至れり。此に於て先づ名を貸稻に託して小民土地を兼併するを禁ぜり。

二、京官、皇族、地方官、豪族等の跋扈を抑壓せんとしたるにあり。

*是等の階級に屬するものは天皇と國民との間に立ち私恣放縱度なく、地方官は京官と相結託し、豪族は地方官と相結びて小民の膏血を搾る事のみを務めたりしかば、地方に土着し上官の壓制を被り官吏たるよりは寧ろ小民の總代人たる郡司をして牧民の事を司らしめ郡司を通じて直ちに天皇に隷屬せしめんとせり。

*……民の資る所は農桑これ切なり比者諸國司等厥の政僻のこと多くして撫道の方に乖ける事を愧づ唯侵漁の

未だ巧みならざるを恐る或は廣く林野を占めて蒼生の便要を奪ひ或は多く田園を營みて黔黎の產業を妨ぐ百姓の凋弊職として此これに由れり云々。桓武紀

三、聖武以來の制なる墾田の法も初めは多額の稅を徵し小民をして土着せしめんとする目的なりしならんも、其流弊や土地の兼併を來し貧富の差を甚くし豪族の發生と奴隷の增加を來すに至れり。依てこれを防遏して其弊なからしめんことを勉めたり。

四、出擧

の弊も亦夙に顯はれたり。卽ち春期に貸附して秋期に收めしむるは一見農家に取りて甚だ便益なる法の如きが故に支那に於ても青苗の法として實施せられたる事あるも、蘇軾が所謂「錢を以て民に貸せば吏緣りて姦を爲さん。錢民の手に入れば良民と雖も妄用を免れず其錢を納るゝに及びては富民と雖も違限を免れず。鞭箠必ず用ふれば州縣煩に堪へず」と云へる如く、年の不登なる時の如きは秋穫に至りても返濟する事能はず、殊に寺社豪族等は其返濟の道なきを知るや、其土地を奪ひ其人を奴隷とするが如き事往々にしてこれありしかば、小民は自ら浮浪し全國其弊に堪へざるに至れり。此に於て其出擧の利を低落し私擧の禁を明かにせり。

桓武天皇が農政に對し此大刷新を行ひしは甚だ多とすべしと雖も、如何せん出擧の法の如きは先代農業の不振なるより一時の彌縫策として用ゐたるもの、又墾田の法も大化革新の大主眼たる土地國有主義と全く相納れざる姑息手段なるが故に如何に改善するも是等の法を殘存せば弊の從て生ずるは當然の理なるべし。

同時に此時代に於て本論に最も親密の關係ある可き一現象は暗々裡に世潮の下に湧けり、卽ち東國に於ける武人の發達これなり。由來東方の民は西方の民が夙に支那朝鮮の文化を受け文明の域に進みしと共に巧緻となり纎弱となりしに反して木强膽大、優に武力の巨人として存せしかば、蘇我氏の壯士となり太宰府の防人となり天武の

軍隊となり、又歴代蝦夷を征するの軍に從ひて、益々戰闘に習ひしかば今は既に徒らに中央政府の頤使に戰奴として生死せんには餘りに强大なるものとなりぬ。しかも其間に於て京師との交通の爲めに略々海內の形勢に通じ、殊に京師にある機慧なる公卿等は阪東武士の前途に囑望して其豪族等と婚を通じ好を結ぶもの多かりしかば、南人の敢て深く畏るゝに足らざるを知り、皇室の出なる源平二氏の東國に勢力を扶植する事堅きに迨びて天下の形勢は既に業に一變するの萠芽を作れり。

嵯峨天皇に至りて國司郡司等の濫行甚しく收斂を頻りにして桓武より僅かに四十年に過ぎざるに其租稅殆ど二倍するに至れり。此に於て農民等は其體面を維持するの自重心だに亡失し自ら奴隸として租稅公役を逃れんとするもの續々として生じ公賤の別破壞に終るに庶幾からんとせり。

かくて淳和を經て仁明に至るに從ひ藤原氏は漸く其勢力を府の中外に定め、門閥の弊は大化以前と毫も異る事なきに至り、加ふるに上流社會の奢侈は大に長じたりしかば從つて租を徵する事重く、地方亦これによりて疲弊し農民に至りては洵に言語に堪へたるものありき。相模大住郡の大領壬生廣主窮民に代りて私稻一萬六千束を納めしに其仁政を望みて郡內に移り來れる民五千三百五十人に及びしと云ふを見て推知する事を得可し。

淸和を經て藤原氏の權力愈々重く、陽成に迨んで其極に達せり。佐藤信淵は其農政本論に於て莊園の起原を其時代なりとし說をなして曰く

「陽成天皇に至り意外に讌樂放蕩に耽り給ふを附け込み、宗室諸王勳舊貴臣等皆共に相議り分土の封祿を願ひ得可きは實に此時なりとて何れも皆その謀に同意し……讌飮の度毎に頻に勸めて分土の封を懇望しければ……其土地を分つと云ふ事をなさずして唯山林市街村里田園を賜るの趣にて始めて莊園を賜る事とはなれるなり」

と云へり。こは莊園の起原を述べたるものとしては甚だ不完全なりとすと雖も、當時民部卿藤原冬緒が二事を奏したる其一に、「前略京戸の女は事外國に異り蠶桑の勞を知らず、都て杵臼の役無し。加之其用に當る所を云ふに最も微少たり。名はこれ口分なれども實は身潤にあらず、況んや亦公卿の子女、王侯の妻妾此尺土を得れども其れ何の益かあらん云々」と云へるを見、又、「宇多醍醐の朝以後は其弊甚だしくなり、奸猾の民權貴の莊に集り、威權を挾で庄側の民田を侵し三四十町を領して賦稅を輸さゞるものあり。或は田地をば寄進せりと詐り、宅舍をば賣與せりと號して課役を遁れ、國吏も其詐りなるを知れども權貴を憚りて禁ずる事なかりしを見れば、當時より莊園なるもの漸く多く而して莊園內に於ける設備漸次備りて國衙と拮抗するに至れるを知るに足るなり。

光孝天皇は庸主にして爲す所なく、宇多天皇は守成の德ありしも其氣鋒に於て、到底基經の門地に於て才能に於て卓越せるを摧く能はずして成をこれに受けたるのみ。醍醐に至りては藤原時平氣銳にして才を負ひ清和の時諸司に分つに田園を以てし其收入によりて衣食するの制を定めたり。田園の種類甚だ多く神田、寺田、布薩戒田、放生田、勅旨田、公廨田、御巫田、采女田、射田、建兒田、學校田、諸衞射田、左右馬寮田、飼戶田、勸學田、典藥寮田、節婦田、易田、膂力田、婦女田、惸獨田、船瀨功德田、造船瀨料田、賜急田等の免租田國領の間に錯綜して起り來るの弊を矯めんとして、班田を實行して課戶を多くし、皇親王臣の百姓の土地を購入すと稱し、百姓と結託して租を收めざるを致すを禁ずる等の事をなせしも、滔々たる流弊は遂に挽回す可くもあらざりき。

朱雀天皇の時、將門純友の叛あり。朝廷狼狽して辛く之れを鎭壓せしも空乏せる國庫は愈々空乏し、如何ともする能はず。租稅のみにても一躍して七公三民となり租稅以外の徵發亦これに適へりと云ふ。（二千五百年史）しかも其委細は缺如して知る可らず。

かくて後三條天皇の卽位に至るまで朝廷の農政施設に於て殊に著しきものあるを見ず。唯藤原氏の專權愈々其

勢を逞くし道長に至り其榮華と腐敗に於て極點に達したると寺院が盜賊を防ぐ爲め武備をなすの必要を感じ武備をなしてよりこれを以て私慾を滿すの具となし、朝威を犯し小民を苦めて土地の兼併を行ふに汲々たりしと、東國に於ける武士の實力漸く强大となり、前九年の役以來源氏は深く其根孽を東國に扶植し武人の心を收攬して他日飛躍の素を作りし三事ありしのみ。後三條天皇は英主なり、天皇の期する所は既に衰運に向へる藤原氏を抑制し藤原氏の華奢の爲めに破壞し盡されたる地方制度の改革をなし一般經濟の刷新を計らんとするにありき。

當時天下大半不輸の地たりしかば延久元年令して寬德二年以後の新設に係る莊園は一切停廢し其以前のものと雖も劵契の曖昧なるものはこれを停めしめ、二年に至り絹布の法を定め、四年に至りて估價法斗升の法を定む。後世の所謂延久の宣旨升なるものこれなり。又消極的方針としては諸國の御廚の贄、後院の御贄を停め節儉以て衆を率ゐしかば稍ゝ積弊を挽回し得たるも根柢を有せざる表面の政策は既に用をなさず、天皇が刻苦精勵せる五年の治も時平の改革と共に全く効を見ずして停みにき。

これより以後白河に至りて一代の華侈殊に甚しく國力一層の疲弊を來し、佛教に惑溺せるにより益ゝ寺院の專橫を來し、地方には源平の諸族起り世は禍亂を破裂せしめんには十分の時世なりしが、偶ゝ近衞天皇の時皇室の中爭位の事あり、此に於て竊に禍亂の機を待てる源平の諸臣乘じて事を起し保元の亂は日本開闢以來最醜の爭鬪として僅かに其幕を閉づるや、平氏の亂從て起り、世は遂に武斷的實力に於て勝れ且つ京畿に於ける開明優美の風に慣れたる平氏の左右する所となり、一門の公卿十六人殿上人三十四人諸國の受領衞府諸司は六十餘人、郡國を領する事三十餘國、武門權を乘るの濫觴此に成りぬ。

而して寺門の暴戾は僅かに平氏の力によりて鎭壓せられしも莊園の私領の弊農民の困憊は未だ救濟せられず平氏の亡ぶるに及び此大問題は鎌倉幕府の解釋を待つ可く殘されたり。

今此章を閉づるに當り前述の諸時代に於ける租稅變遷の一班を明かにせんが爲め表を以て左にこれを比較す。

白雉稅法（大化以前の稅法と同じきが故に略す）

大寶稅法

面積	穫稻	舂米	租稻	舂米
一歩 高麗尺五尺 當曲尺方六尺	不成斤二把 今二百二十夕餘	減大升一升 京升四合一勺八撮		
一段 三六〇歩	七二束	三六斗	二束二把	一一升
一町 三六〇〇歩	七二〇束	三六石	二二束	一一斗

慶雲稅法

面積	穫稻	舂米	租稻	舂米
一歩 高麗尺五尺 當曲尺方六尺	不成斤二把 今二百二十夕餘	減大升一升 京升四合一勺八撮		
一段 三六〇歩	七二束	三六斗	一束五把	七五合
一町 三六〇〇歩	七二〇束	三六〇斗	一五束	七五〇合

和銅租法

面積	穫稻	舂米	租稻	舂米
一歩 和銅大尺方六尺 曲尺方六尺	成斤一把三分八厘 餘即不成斤二把 今二百二十匁	大升六合九勺四撮 即減大升一升 京升四合一勺八撮		
一段 三六〇歩	五〇束	二五斗	一束五把	七五合
一町 三六〇〇歩	五〇〇束	二五〇斗	一五束	七五〇合

貞觀畿內租法

面積	穫稻	舂米	租稻	舂米
一歩 和銅大尺方六尺 當曲尺方六尺	成斤一把三分八厘 餘今二百二十匁餘	大升六合九勺四撮 餘當京升四合一勺 八撮		
一段 三六〇歩	五〇束	二五斗	三束	一五升
一町 三六〇〇歩	五〇〇束	二五〇斗	三〇束	一五〇升

長保以後の租法 用量長保量即宣旨升當京升九合六勺四撮餘

一歩 大尺方六尺 曲尺方六尺　一段三百六十歩　一町三千六百歩

田種	穫稲	舂米	租穀	舂米
上田（一段）	五〇束	一石五六二	一五升	七五合
中田（一段）	四〇束	一石二四九	一五升	七五合
下田（一段）	三〇束	、九三七	一五升	七五合
下々田（一段）	一五束	、四六八	一五升	七五合

第三章　鎌倉幕府初代に於ける農政

第一節　前提

第一項　當時に於ける政權の推移

平清盛の出でて政權を握るや其の辛辣の手段を振ひ寺院を强壓してこれを屛息せしめんとし、公卿の私領地を多く公沒して其一門に與へ農民より收斂する事頗る嚴酷にして、而して京師は日々華奢遊宴を事とせしかば新光明を仰ぎ得たりとなせし日本國民は平氏に於て藤原氏の奢侈驕慢に加ふるに武斷的の專制力を擅にする懼る可き一强族を見たり。此に於て公卿先づ嫉視し寺門反目し全國の平民は此王臣的性情を有する武臣を戴くを以て榮とせざるに至りき。此機に乘じ政權推移の警鐘は先づ源賴政の敲く所となり、木曾義仲これに應じ冷頭重愼なる源賴朝最もよく上下の輿論を代表して立ち、遂に兵馬の權を收め更に治民の法をも握るに至りぬ。しかも玆に最も

奇異なる現象となす可きは頼朝は始めより此大成功を來す可しとは信ぜざりし事これなり。其關東に根據を定めしは啻に其地が譜代恩顧の士を有する爲めのみならず又其位置全國の中心に位し、東北の發達し來れる當時にありては玆に中央政府を構ふるの必要ありしのみならず、又公卿等と京師に混住して互に嫉妬怨恨を買ふの愚に陷らざらんとしたりしが爲めのみならず、實に西南に其根據を扶植せる平氏の爾く衰運に向へるを信ずる能はずして能ふ可くんば關東に割據して平氏と共に天下を二分せんとせしによるなり。頼朝己れを救ひたる池の尼の子頼盛に書を致して前日救命の恩を謝し且つ朝廷に上書して亂を企つるにあらず、朝廷若し平氏を捨てずんば相和して再び仕ふる昔の如くするも可なりと云へるを看て是を知る可し。其の平氏を滅亡せしめて後も尙竊に武權を掌握せば、其意を滿すに足るとなせるが如し。後鳥羽天皇文治二年院宮貴所以下の權門領の事を朝廷より下問せらるゝや頼朝これに答へて「(前略)武士の横領不當に於ては善惡最仰下さる可し然らば御尋に從ひ所行の旨に任せ其誡を加へん此外の事等(即ち民事の意)少々相交るは仔細を知らず計ひ沙汰する能はずと雖も今度に於ては仰せの旨に任せ大略下文をなし進上す凡て此の如き事自今以後は攝政等に仰せ合さしめ給ひ記錄所に下し御成敗ある可きなり(後略)」と曰へり。以て見る可し。しかも大江廣元を失ひ三好康信を失ひし朝廷は事局の難き事ある毎に鎌倉幕府に諮詢せしかば治民の事も遂に武士の左右する所となりにき。

此の如くして大政の紀綱は悉く武門に歸しぬ。東夷として公卿に辱められし東人は遂に實權に於て勝利を得、武斷的にしてしかも民主的なる行政は嘗て豫想だもせられざりし鎌倉の地より布かれぬ。是實に日本歷史の大變革なり。實力あるもの天下を左右す可してふ思想は此時より明かに深く功名心に富める豪傑等の心中に刻まれたり。而して最もこれを感じたる頼朝の岳父北條時政は、其老練なるに於て周到なるに於て大膽なるに於て寧ろ頼朝の上にあり。唯其門閥の相如かざるのみ。しかも頼朝が實力的政治の端を開きてより彼の舞臺は開始せられ、

彼は賴朝の股肱大江廣元三好康信等を以て己れの股肱となし、巧慧にしてしかも近眼なる梶原景時等を以て己れの走狗となし、武臣の馴致し難きものを盡して遂に自家を以て執權を世にし、主人公なる賴朝の子孫は手を拱ける傀儡たるに過ぎざるに至れり。かくて政權は遂に陪臣の手に落ちしも世はこれによりて些少の動搖をなせしのみ。以て如何に一般の思想が變化せるかを知るに足る。時政に次ぐに沈重にして譎傑なる義時あり。南人が北人に對する最後の打擊なりし承久の亂を鎭壓してより根蔕愈ゝ堅くこれに次ぐに謹厚にして誠實なる泰時あり。鎌倉幕府の基礎遂に動かず時賴に至りては農政の施設全きに至りぬ。

此に論ぜんとする鎌倉幕府初代とは賴朝より時賴に至る六十年左右の間を稱せるものなりとす。

第二項　鎌倉幕府の官制

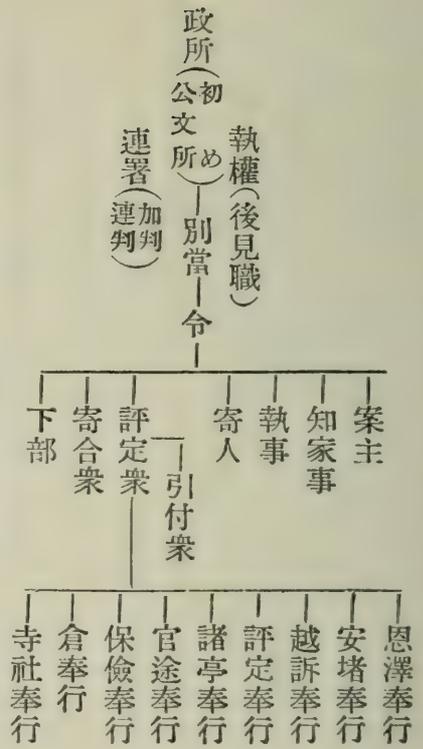
京師には賴朝奏して右大臣藤原兼實內大臣藤原實定等賴朝に傾倒せる公卿十人を議奏官とし、朝政を參決し、大事は必ず武臣と議して施行せらるゝ事となり、征夷大將軍獨り天下の權を握り、朝官は空名を擁するに過ぎざりしかば玆には其委曲を盡すの必要なしと信ず。故に此項に於ては鎌倉幕府の官制を概說せんとす。

鎌倉幕府の官制は其法令と共に至て簡素なりき。繁文縟禮を事とせる藤原氏の施設は既に業に民人を倦ましめたるを察したればなり。

鎌倉幕府爲政の機關を大別して三とす。政所（初め公文所と稱す）侍所問註所是なり。左に表を以て說明せんとす。

鎌倉幕府中央機關

（一）立法行政部

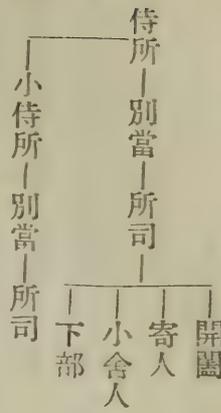
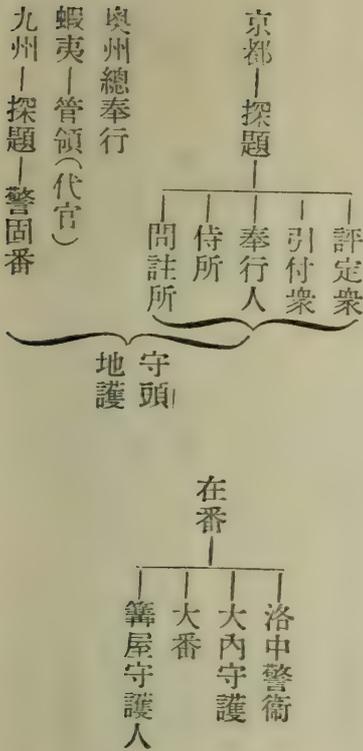
- 執權（後見職）
- 政所（初め公文所）—別當—令
  - 案主
  - 知家事
  - 執事
  - 寄人
  - 評定衆
    - 引付衆
    - 恩澤奉行
    - 安堵奉行
    - 越訴奉行
    - 評定奉行
    - 諸亭奉行
    - 官途奉行
    - 保儉奉行
    - 倉奉行
    - 寺社奉行
  - 寄合衆
  - 下部
- 連署（加判連判）

別當は長官〇令は次官なり〇執權連署は諸政を總攬し連署は連判を公文に加ふ〇案主は土地人民の事を領す〇知家事は錢穀俸給の制度を掌る〇執事は國用經費の事を司る〇寄人は公務を行ひ雜事を監す評定衆を置くに及び其中より拔擢せり〇下部は雜役に供する卑職なり〇評定衆は執權と共に政所に列し政治を議す〇寄合衆は執權及び評定衆と共に國政を議するもの〇引付衆は評定衆補助の職なり評定衆の子弟を以てこれに補せり〇奉行人は評定衆より臨時に設置する事多し。

（二）司法部

- 問註所—執事
  - 寄人
  - 賦別奉行
  - 問註奉行

執事は長官にして司法の權を總攬し政務評定の席にも列す〇寄人は雜務を行ひ訴訟人の語を註す〇此他賦別越

訴等の奉行あり、賦別奉行は人民の訴訟を受け月日と奉行の姓名とを記し五方引付及び當局の奉行に分賦し處分せしむる事を掌る、越訴は其名の示すが如し。

(三)武備部

別當は長官なり○所司は次官なり○開闔は文案記錄等の事を司る○寄人は書記なり一に右筆と稱す○小舍人は驅使に供す○下部は小舍人の助役なる可し。

第三項　鎌倉幕府が解釋すべかりし農政問題

其一　貴族寺社務力の抑壓

平清盛の强硬政略は痛く寺社の暴戾を懲し貴族兼併の弊を抑へしと雖も寺社は依然として其勢力を維持して一方に雄を稱したりき。平氏の義仲を討て却て敗るゝや辭を低うして誓書を延暦寺に奉り、「(前略)若し佛神の助にあらずんばいかで兇徒の勝に乘ずるを鎭めん熟〻臣等が曩祖を思へば宜しく本願の餘裔と謂ふ可し自今以後藤原氏の春日社を氏神とし興福寺を氏寺となせるが如くに平氏は日吉社を氏神とし延暦寺を氏寺とし山門の喜を以て一門の喜とし社家の憤を以て一家の憤とせん願くは七社の神明擁護を垂れ給へ願くは三塔の衆徒合力せしめよ」(六代勝平記)と云ふに至る大和全國は寺院の爲めに公税を收むる事能はずして北條氏に及べる如きは如何に寺院が政權を蔑視したるかを知るに足る。地方に建設せられたる大寺小院亦各私莊を有し奸譎なる農民はこれと結託して其所有地を寺院に寄附すと稱し寺院に僅少の報酬をなして朝廷に收む可き租税を免れんとしたるが如きは、佛國に於て一七二〇年以降、路易十四世より十六世まで僧侶貴族が廣漠なる土地を所有して其收入を壟斷せると酷似せるものありき。これ幕府が農政を振興するに際して苦慮せる所なり。

遊惰なる貴族も農政を紊亂せる一種の階級なり彼等は其始め職田功田賜田等によりて其欲を滿足しつゝありしが聖武の朝墾田の事を許して以來頻りに其私領を廣むるに汲々し農民と結託し農民の所有地を莊園なりと稱して互に私領を營むの計に忙はしく後代に及びては京官は其奢侈によりて到底給度し難かりしかば、年給の方を起し毎年家人等を官に請うて諸國の介掾目史生等に任じて其公廨料を取り地方所得の蔭に隱れて其體面を失せざらん事を庶幾するに至れり。これ實に國司郡司の暴戾と共に必ず解決せざる可らざる大問題なりき。

其二　戸籍及び田積の調査

孝德天皇の朝、戸籍簿を造りて以來天智天皇に至りて再び調製し、これを庚午年籍と稱し、爾後六年每に一新し以て班田收授の便に供し租稅課不課の員數を調査せんとし、田積も亦每年諸國司より大帳司・稅帳使・調帳使・朝集使を朝廷に遣はして田積の增減と出納の報告をなさしめたりしが、地方豪族の勃興と中央政府の怠慢とによりて其制遂に亂れ國司等良田を私領して荒廢せる瘠薄なる地を百姓に與へ輸租地子田の目を減じて私慾を擅にするが如き事多かりき。天平神護年中、吉備眞備・備中・下道・邇磨の鄕を檢して課丁千四百人あるを註したるに、貞觀年中藤原保則國司となりてこれを檢するに及びて課丁七十人に減退し、延喜の年藤原公利國司たるに及び天平神護より僅かに百二十年ならざるに一鄕の中一人の課丁を見ざりしと云へるが如き、浮浪の徒を生じて民人の離亂せるを示すと共に戸籍調査の如何に散漫なりしかを知るに足る可し。

其三　租　稅

前述の如く大化に制定せられし稅法は七變し和銅に至りて再び大化前の制に還り爾後些少の變革なきにあらざりしも依然として藤原氏の末世に至れり。しかもこれ表面上の事のみ朝廷が自由に租調を徵し得たりし地が全國の三分の一にも若かざりし當時にありては朝臣豪族及び僧侶の擅に收斂し殆ど常識を以て謂ふ所の稅率は以て標準とする能はざる程に至りしならん。保元年中にありては租率は公民各半にして其上絹絁調布等は孝德天皇御世の制度より二倍になれりと佐藤信淵氏曰へり。今孝德天皇の時に於ける絹絁調布の額を見るに

「舊賦役を罷めて田の調を行ふ凡そ絹絁絲綿は幷に鄕土の出す所に從ひ田一町に絹一丈、四町に匹をなせ長さは四丈廣さは二尺半、絁は二丈、二町にて疋をなせ長さ廣さは絹に同じ、布は四丈長さ廣さ幷に絹絁に同じ一町にて端をなせ又戸別の調を收むる一戸に貲布（さよみつぬの）一丈二尺なり、又調の副物を出さしむ。鹽と貲と鄕土の出す所に從

ふ」（孝德記）

とあり假に此額を二倍すれば

種類	調種	割付面積	長さ	廣さ
絹	田の調	一町歩に付き	二丈	五尺
絁			四丈	五尺
布			八丈	五尺
貲布	戸別の調		二丈四尺	

となる可し。粗收入の一半を租税として徵收せられ、加之此の如き調を出さゞる可らず。而して當時の夫役に至りては其委曲を知る可らずと雖も戰亂の際とて屢ゝ徵發せられて農閑だに休息の暇なかりしにはあらざるか。鎌倉幕府は税率を均一にすると共に其税額を制定せざる可らざりき。

其四　土地制度の處分

これ鎌倉幕府が最も困難を感じたる可き問題なり。抑ゝ當時の土地は四個の勢力によりて分割して支配せられたり。一は朝廷にして其地を國領と稱し補任せらるゝ官吏を國司郡司と云ふ。二は朝臣、三は武人、四は僧侶にして其地を莊園と稱しこれが支配をなせるものを領家と稱し代り治むるものを莊司と云へり。而して是等の土地は互に犬牙錯雜して相犯し易く命令一規なり難かりき。源義朝の如きは東海十五ケ國を管領し安倍氏の如きは奥羽の全土を領し、平氏に至りては知行する所三十ケ國莊園五百餘所田園は其數を知らずと云ひ、而して中古定む

る所の國郡鄕里の制は王政衰へてより莊と云ひ保と云ひ名と云ふもの各所に散布して全く破壞せられ大小亂雜せり。是に於て豪民勢家は私に郡名を立てたるもの諸國に多し。常陸關郡笠間郡近江勢多郡伊豆北條郡肥後米良郡五家郡の如きはこれなり。土地所有の制度全く壞亂して毫も統一なかりしを見る可し。これを收容して一定の法制の下に律せん事は亦鎌倉幕府が解釋す可き農政上の一大問題なりしなり。

其五　農民の救治

此問題は前述せる諸制度改革の成功と共に自然に解釋せらる可き問題なる可しと雖も、長日月の間戰亂の爲めに疲弊困憊を極めたる農民等は日常の生活に於て著しき悲境に沈淪せるものありき。鎌倉幕府はこれに向つて種種救治の方策を講ぜしが如し。唯日本に於て從來編述されし歷史は概ね事實の表面に委しくして裏面に疎に、現象を描くに密にして其源由を探るに薄きが故に、其記載の事實は皮相的なる政治史多く國民一般の生活の狀態思想の變遷等は甚だ徵し難きものあり。從てこれに對する爲政者の施設の如何も其記載粗笨に流れ易しとなす。幸に玆にこれを論ずるに方り多くの誤謬なからん事を庶幾せずんばあらず。

以上は鎌倉幕府が解釋す可かりし農政問題の最も重要なるものとす。例言にも明記せるが如く論者の云ふ所の農政とは單に政府が法令によりて施設せるもののみを指すにあらざるが故に、民間に於てなされたる施設をも亦併せて此に論ぜんとするものなり。

第二節　鎌倉幕府の農政細論

第一項　鎌倉幕府の農政機關

前提に於て鎌倉幕府の官制を擧げ略〻當時の政治機關が如何に運轉せらるゝかを示したり。今玆に農政に關係

ある官廳及び官名を擧げ當時の農政機關が如何に運轉せられしかを述べんと欲す。

第一款　政所

政所は前述せし如く鎌倉本府に於て首腦の位置に坐し行政と立法の權を握り、農政に對しては領地貢納の事勘定計算の事を司る案主なる職あり、土地人民貢賦の事錢穀出納の事を領す。政所は實に內閣大藏農工商及び內外務を兼ねたるものにして案主は大藏及び農工商務を司れるものなり。

又奉行人なるものあり評定衆より臨時に兼任するものにして其中農政に關係あるものを擧ぐれば、

安堵奉行　家人或は神社佛寺等の領地を襲ぎ或は下附する時公劵を與ふるを掌る。

藍奉行　藍作の監察をなさしめしものにして作物奬勵の爲め又は作物に對する農業警察の爲め、此の如き奉行を置きしは史上に載せられたるものこれのみなりと雖も、思ふに當時此の如き種類の奉行は決して尠からざりしならんと察せらる。

倉奉行　諸國より貢し來る錢穀の事を掌るもの。倉なる字によりて當時官倉の鎌倉に設置されつゝありしを推察するに足ると雖も、其詳細に至りては遂に知る可らず。

此他鎌倉本府に於ては問註所あり。專ら土地所有の事等に附きて裁斷をなし、當時にありては農政の施設上極めて緊要なる作用をなせりと雖も、直接農政上に關係あるものにあらざるが故に此には細說せざる可し。

第二款　守護

守護と次款に述ぶ可き地頭とは共に地方農政官の代表者なり。

守護とは追捕使の名の一變せるものなり。今追捕使の起源を考るに延暦年中諸國の軍團を廢し兵士を停められてより各國検非違使健兒(こんでい)等の設けあれども以て不逞の徒を鎭壓するに足らず。仍(よつ)て諸國に追捕使を置かれ其始めは臨時の職にして所在の叛亂等の餘燼を鎭めんが爲め起りしものなりしが、後これを平時にも置きて警備檢斷をなさしむるに至れり。而して其中一國を統ぶるものを特に總追捕使と稱したり。天慶の頃より押領使なるものあり後には追捕使と同じく國內なる暴行不逞の徒を平肅する職となれり。是等は莊園の漸く盛大となり豪民にして其附隷せる下民の多數を率ゐ武士の形狀をなせるものゝ中殊に門閥あり衆望あるものを選み補したるものゝ如し。而して追捕使は自ら世襲となり深く根柢を其地方に占めて一部の民心を收攬せしものありしなり。

文治元年賴朝大江廣元の議に從ひ平氏の殘黨を治するを以て名とし諸國の國衙に追捕使を置けり。而して守護の稱は元暦元年二月賴朝、其臣梶原景時、土肥實平に命じ使を遣はして播磨美作三備の諸國を守護せしめたるに濫觴せるが如きも兩稱は其後暫く混用せられたり。

守護の職責とする所は大番を催促し、謀反殺害人を檢し、盜賊の追捕罪人の決罰を掌り、凡そ軍陣には國內の地頭家人を催し百姓を驅率して事に從ふにあり(東鑑)。始めは國中の雜務をも沙汰したりしが、貢稅收租の事に至りては全く干涉する事を禁ぜられしも屢ゝ其禁を犯して國領を掠奪し擅に其貢租を私するが如き事ありしかば、貞永式目の編纂さるゝに及びては斷然大番催促謀反殺害卽ち大犯三條を治定する權のみを授けられたり。故に一見守護は幕府の農政とは何等の關涉もなき官職なるが如きも守護の國領に配布せられ國衙の勢力を殺ぎて其農民を左右するの權を幕府に收むる事なかりせば到底幕府の基礎を鞏固にし財源を豐富ならしむる事を得ざりしなり。

守護は始め一國に一人補せらるゝを以て通例とせしも半國數郡のものあり、數國に亙れるものあり、北條時政の七ヶ國の守護を兼ね、佐々木定綱の近江の守護職を以て長門石見兩國の守護を兼ね、島津左衛門尉忠文は大隅薩

摩國守護職たるが如き、又大和國は初より守護地頭を置かず興福寺の大乘院一乘院の管下に置かれしが如きを見て知る可し。守護は皆世襲にして罪科あるにあらざれば改補せざるの制なり（東鑑）。而して國内に地頭の闕職ある時は守護これを兼攝する事あり。故に守護人は居館居城等を構へ一國の兵賦を沙汰し國衙に對して守護所と稱したり。又守護の闕國もありしが如し。文永年中蒙古の來襲せし時肥後國は守護人を缺きたるが爲め其國の大名菊池以下皆少貳覺惠の指命を受けて防戰したりしが、弘安の時には秋田城次郎盛宗肥後國の守護職として下向せしが故に、其國の大名家人等は皆盛宗の命令に服して防戰せしによりて知る事を得可し。

守護代、又代と稱するものあり。其起原判然せざるものあれども要するに鎌倉幕府の極めて初代には起れるものにあらざる可し。守護に代りて事務を掌るは其字の示す所の如し。其守護の族人若くは家宰を以て其職に居らしむ（東鑑、長門守護次第、東寺文書、太平記）。又小守護代と稱するものあり。守護代の部屬を以てこれを補し守護代に代りて事を行ふ故に又代と云ひ、又代官と云ふ（若狹守護次第、長門守護次第）。亦臨時に守護職の使命を奉じて田園を檢察し貢税を催督し盜賊を捕へ非違を禁ずる等の事を司る。（新式目、花營三代記）

守護は鎌倉の家人を以てこれを補したり。其俸給は委しく之れを知るに由なしと雖も頼朝が北條時政をして奏せしめ、「行長義經逃竄して輙く搜捕し難し。若し聞くに從て兵を發せば郡國虚耗し其費貲られず。請ふ臣をして諸國に守護を置き莊園に地頭を置かしめ所在に就て擒獲せば勞せずして定行せん。（中略）其兵糧の如きは五畿山陽山陰南海西海二十六ヶ國莊公を論ぜず、段別に米五升を課してこれに充たしめん」（源平盛衰記、東鑑）と云へるに依りて見ば所謂毎段五升の兵糧米の中より給與したるが如きも該兵糧米は全く地頭の得分となるものなりき。今富名領主次第によれば島津忠久の弟兵衛忠季を若狹國の守護職に補せし時、當國今富名を守護領として賜はりし事あるを見れば自餘の諸國も其例に從ひ所管の廣狹により相當の領地を給與せるもの丶如し。前述せる守護所とは即

ち其守護領中に設けられたるものにはあらざるか。

第三款　地　頭

王綱漸く廢弛し莊園諸國に增殖し私田各所に倍蓰するに當り、莊園を有するものを領主又は領家と云ひ莊園の貢稅を收むるものを地頭と云へり。しかもこれ皆領主の私に設くる所にして未だ定名ありしにあらず。故に下司公文目代等と併稱したりき（河内小松緣記）。平氏國柄を握るに及び其私領の地に地頭職を置きて收稅の事を掌らしむ（東鑑、長門本平家物語）。其名稱唐制に出でたりと云へり（農政座右）。平氏西海に沒落せし時院宣によりて行家を四國の地頭に補し義經を九州の地頭に補せり。賴朝これを口實とし守護を置くと同時に全國の公田莊保に地頭を設けたり。仍て賴朝を呼んで總地頭と稱するに至れり。

地頭の職責は軍籍徵集の事を司る。事故あれば守護の令を俟ち總領に從つて兵役に供し又京都鎌倉の大番を勤む（東鑑、志賀文書、源平盛衰記、貞永式目）。地頭の所管に屬する地域は守護と等しく數ケ國に亙るものあり一國のものあり數郡一郡等定規あるにあらず。而して地頭に補せらるゝものは敢て御家人に限るにあらず。僧侶あり商賈あり（延曆元年これを停む）婦人さへありたるが如し。

地頭或は其地に赴かず人を遣はしてこれに代らしむるを地頭代と云ひ又眼代と云ふ（東鑑明日抄）。承久の變亂に際し地頭の官軍に投ぜるものは其職を褫てこれを有功者に授けて新補地頭と稱す。又舊地を領し重ねて新職を帶ぶるものを本新兼帶と云ふ（東鑑沙汰未練書）。而して本新兼帶たるものは先づ鎌倉幕府の御家人となりて後許さるゝなり。

地頭は每段五升の兵糧米を得分とせるの外、給田ありしは將軍執權次第及び長門本平家物語に見ゆと雖も、其地積の如きは知り難し。貞應二年に至りて公私田園十町每に免田一町を給し一段每に米五升を加徵して新補の得

分とせり。これを折中法と云ふ。以て一般に於ける地頭の俸給を概察するを得んか。

以上守護地頭の二職何れも純粹の農政官とは稱す可らず。これ往時官制の簡素なりし時代にありては何れの國にありても免る可らざる所にして殊に農業と軍備を以て一國經營の基礎となせる鎌倉幕府が、地方官に治民の權と兵備の權とを併せ秉らしめしは當然の結果と云はざる可らず。

守護地頭の下にありて其職を分擔せしもの必ずやありたる可しと雖も、今悉く其詳細を知るに由なし。百姓職と云へるものあり。東寺百合文書に

(裏書下知狀案)

太田庄内末武百姓職事

先百姓等兩方共有其科然者依爲當庄之便宜宛賜快深之處中原氏女〇〇叙川云々事實者甚以狼藉也其科彌不淺早任先度下文快深致勸農以下沙汰所當公事任百姓等之例不令懈怠之由可被下知庄家宜存其旨之條如件

文永十一年二月二十六日 (花押)

と云へるによりて知る可し。此他此の如き官職必ずや存在せしなる可しと雖も其如何なる階級に屬し如何なる職を司れるものなるかは察するに由なし。他日精査の上に讓る。

第二項 土地制度に對する政策

土地制度に對する政策は鎌倉が農政を講ずるに當り極力意を用ゐし所にして、足利德川の覇府亦其餘影を受けたるもの多しとなす。今玆に款を別ちて順次に其始末を述べんと欲す。

第一款　土地の收容

土地所有權の推移及び地積の廣狹は一朝一夕にして形成せらるゝものにあらず。何れの國に於ても必ずや長日月に亙る歷史的變革を經たるものならざるはなし。ジド氏は土地所有の狀態の發達を六期に區分して論ぜり。曰く

第一期　土地所有權の未だ發生せざりし時代にして、土地の面積甚だ多く、而して耕作法は不完全を極めしかば生產力減退すれば、これを改良する事なくして他に移轉せり。

第二期　土地財產權の一時的なりし時代にして、人口漸く稠密に赴き人民は一定の土地に定住するの風を生じたるも未だ土地を分割して絕對的に其所有權を承認するに至らず、土地は悉く社會の有に屬し唯或時期を定めて分配し暫次これを耕耘し以て分配の公平を期せり。

第三期　土地の財產權は永久に或る家族全體に歸せし時代にして、土地の所有者大に判明するに至れり。但し家長と雖もこれを賣買處分する事を得ず。何となれば土地は未だ其家族の私有財產にあらずして依然として社會の有なりしが故なり。

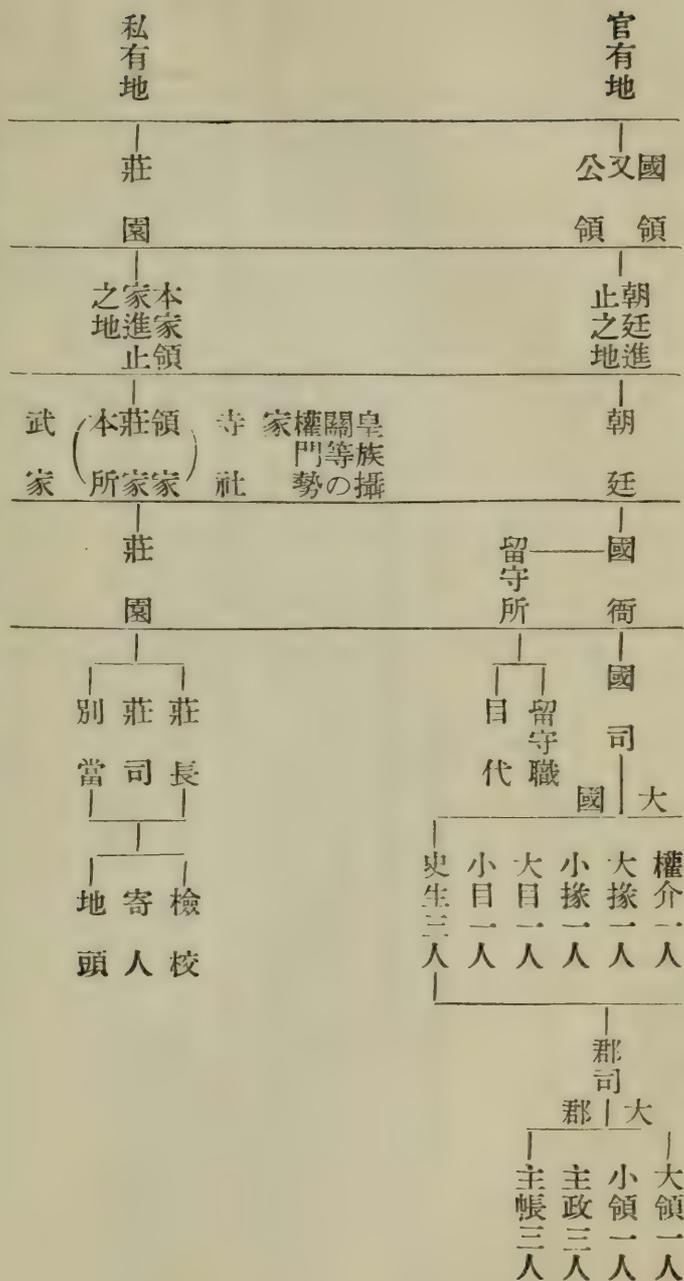
第四期　征服時代(封建時代)にして、他の豪强なる種族征服に勝ち自ら耕さずして其土地の所有權を有し被征服者は小作人としてこれを耕し征服者に對し賦役若くは小作料を收む。

第五期　地主制度時代にして、自由平等主義の發達と共に封建制度は漸く廢止せられ地主が土地を所有し小作料を收めしむるは征服者としてにあらずして所有者として爾かするに至れり。然れども普通の所有權と土地所有權との間には尙ほ幾多の區別存したり。

第六期　現今多くの國に於ては未だ此時期に達せずと雖も更に一階の進步をなす時は土地所有權と他の所有權

との間に毫も區別なくこれを處分し得るに至る時代にして、一八八六年發布の濠洲トーレン法の如きはこれ。看る可し其所有權の變遷は如何に複雜なるかを。故にこれが改革をなすは實に一朝一夕の事にあらず根柢堅くして容易に拔き難きものありて存す。獨逸の如きも土地制度の積弊漸く甚しきを見るや種々の方法によりて其矯正策を講じ或は莊園法(Hofrecht u. Hofgerecht)を發布し開放律を發布し農民移住法及び農民土地買得法(Aussiedelungs und Rentengutsgesetzgebung) を發布して其改良を圖らんとし一八〇七年十月九日及び一八一一年九月十一日スタキン及びハーデンベルグの制定せる法令によりて僅かに改革の目的を達し得るに至れるを見て、其容易ならざる事業なるを知るに足る。

孝德天皇の朝設立せられたる班田收授法は其當時すら完全に實施せられざりしに加へ、末代に至りては其法令に牴觸せる土地私有の法令出でて、しかも大化の制意を其儘に保存するが如き奇怪なる狀態をなせしかば、藤原氏の末世に至りては土地制度は頹然として亂雜し、殆ど收容するに堪へざらんとせり。當時に於ける土地所有の狀況はジド氏の所謂第三期と第四期との間に位せしものにして殊に其土地配分の複雜なる日本史上多く類例を見ざる所なる可しと信ず。鎌倉幕府は第三期の土地制度を破壞して第四期のものとなさんとせるものなり。此に當時に於ける過大農地(Ratifundia)所有者の區別と、其土地に對する施設の大體を示さんが爲め左に表を以てこれを明かにす。

地種	地名	資格	所有者	取扱所	取扱者
					守　一人 權守一人 介　一人

即ち土地は四個の勢力によりて分割せられたるを知る可し。

一、朝廷

二、權門勢家

三、社寺

四、武家

これなり。鎌倉幕府以前に於ける各地積は容易に知り易からずと雖も、平氏(武家の大部分)のみが有せし地域三十ケ國に及べりと云ひ、國領の地は全國の三分の一にも及ばざりしと云へるより推すに、(頼家の病篤きに當り時政政子と謀り、頼朝の遺囑なりと稱し頼家の職を解き關東二十八ケ國の地頭竝に總守護職を其子一幡に讓り、弟千幡に關西三十八ケ國の地頭職を讓らんとせる事あるより日本全國を六十六國とする時は)

朝　廷　二十二國

權門勢家 }
社　寺 } 八國

武　家 { 平氏　三十國
其餘の氏族(假に平氏の有せる土地の十分二とし)　六國

是固(もと)より大略の數に過ぎざれば果して正鵠を得たるや否やを知らず雖も、幸に一般の趨勢を察するに足らんか。鎌倉幕府は是等の土地を收容せんが爲め先づ平氏(武家)を殲滅して土地農民に對し最も强大なりし勢力を打破し、其土地を沒收して悉くこれを幕府に隷屬せしめ、其御家人なるものを地頭として任補して、其租税夫役は全く其左右する所となりぬ。旣にこれによりて幕府の基礎を鞏固にせんには十分なり。かくて頼朝は武家の有する土地を全く收容せんとし義經を隱匿せるを名として北兵十七萬騎を有せる豪族藤原泰衡を攻めてこれを滅し、東北の地は此一豪族の滅亡と共に凡て幕府の配下に屬隷するに至れり。

此に於て幕府は武家に次で土地に對して勢力ある朝廷の國領を收容するの方策を講じ遂に大江廣元の議を用ゐ朝廷に請うて曰く

(前略)請ふ臣をして諸國に守護を置き莊園に地頭を置かしめ所在に就て擒獲せば勞せずして定行せん。(中略)

其兵粮の如きは五畿山陽山陰南海西海二十六ヶ國の莊公を論ぜず、段別に米五升を課してこれに充たしめん。此の如くにして國領なる國毎に守護を補し守護所を置き國衙と相併んで事を取らしめしが農民は自ら强大なる權力を有する守護に侫附し、朝廷に貢す可き租税はこれを輸さゞるも幕府に收む可き兵粮米は謹んで怠らざるに至り朝廷の威權は自ら減退し國衙は遂に有名無實のものとなれり。

平氏は嘗て京師に在りて貴族と衝突し加ふるに貴族を壓伏して許す所なかりしかば、痛く倨傲なる貴族の怨恨を買ひ又力を極めて寺院を窮迫せしかば寺院亦頗る平氏に慊焉たり。平氏の勢力後年に至りて衰頽するや先づ立ちて平氏に寇せんとせしものは武人にあらず農民にあらずして實に貴族と寺院となりき。これ鎌倉幕府に取りては遠からざる殷鑑なり。此に於て武家と朝廷とに對し最も强硬なる手段に出でし幕府は土地農民に多くの勢力を有せざる貴族寺院に對しては極めて寛大なる處置をなせり。貴族の變亂の爲めに其莊園を失へるものあればこれを檢考して還し與へ適宜の官職と適宜の生計を得せしめて其姑息なる欲望を滿足せしめ、寺院に對しても全く平氏の處置と反對に出で多くの神社佛閣に領地を寄附し社寺の造營ある毎に莫大の金額を寄進せり。東大寺のみに費す所銅七十三萬九千五百六十斤、黄金一萬四百三十六兩、水銀五萬八千六百三十兩、白蠟一萬二千六百八十斤、金箔十五萬枚、炭一萬六千七百五十六石なりしが如き、又大和全國は一乘院大乘院の領田として兵粮米を徴收せざりしに依りて見る可し。

此に於て土地の收容は略ゝ完きに至りしかば大化以來其制のみを存して全く其實なかりし班田收授の法を全廢し、土地の私有と賣買とを許し農民にありても此制に從ふを得せしむるに至れり。これ固より時勢の然らしむる所にして現今の非土地國有論者が云ふ所の土地國有に妨害なる種々の事情は既に絡纒して拔き難かりしに依りしなる可し。これをも鎌倉幕府の功績に歸するは侫するに庶幾からん。

第二款　土地の種類及び拓殖

當時存在せし土地の種類は略ゝこれを前章に盡したれば、今更めて說くの要なしと雖も、玆に鎌倉幕府設立以來新たに附せられたる土地の名稱あり。此にこれを列擧して少しくこれが解釋を試みんとす。

其一　長講堂御料

長講堂とは法華長講彌陀三昧堂の略なり。故に又三昧堂と稱す可し。彌陀を以て本尊とし長日法華經を講讀するものなるが故に信仰の家には各第に設置されたるものなりと雖も、後世に其名を遺せる長講堂御料とは後白河法皇の御所なる六條殿の長講堂を指すものなり。

長講堂御料の汎く知らるゝに至りしは文永九年頃なれども、既に建久の頃より行はれたるが如し。抑も長講堂御料とは舊歷代の天皇孝養の爲め長講、八講、供花等を執行するに必要なる料田なり。長講御供米は當時長講斗と呼べる特別の量器を以て量り一定の料田より一定の米量を進むるものなり。古今要覽に左の文あり。

進上

能米二十石者　長講斗定

右件米者事成熟之後不日可令進上之狀如件

建久捌年四月三日

神宮預　祐　圓

此の如く御供米若干量を進むるの契約にて御料の名義を拜藏し依りて幕府の徵稅を脫せんと謀れるものなる事

を知らる可し、北條氏に至りては御料は遂に尾張國稻木莊（良峯氏系圖）、丹波國弓削莊（閏朝要記曆應四年七月十五日院宣）、丹後國曾我部莊（吾妻鏡嘉禎四年十一月十一日の條）、但馬國七美莊（岩崎氏所藏文書嘉元二年十月十二日院宣）、山城國伏見莊（椿葉集）、筑前國志賀島莊（前田氏所藏文書觀應二年六月十九日足利義詮狀）を始め、全國に汎布し遂に百八十莊の多きに及べりと云へり。これ實に驚異す可き事實なり。而して初め長講堂に土地を寄進し依りて以て幕府に收む可き租稅を免んとせしは郡司高光なるものにして、尾張丹羽郡榎本鄉稻木莊を寄進し（後白河在世中）たり。これを發起せし所以決して帝室に忠節を盡す志ありたるにあらず、又佛教を渴仰せるの餘に出でたるものにあらずして些少の寄進米を獻納し幕府の租役を免れ領主職を世襲して資產を鞏固にせんとせしが爲めのみ。元來鎌倉幕府は寺院神社に對しては前述の如く至て寬大の處置をなせしかば、此長講堂御料の事先例をなしてより人民の寺社に其土地を寄進するもの漸く多く建曆三年詔して

諸國吏が國領を神社佛寺に寄進するを停止すべき事。聞く諸國吏、或は身の祈と稱し、或は人語を得て國領の公田を以て神社佛寺に寄進し且其寄進たるや當時奉寄の志のみにあらず、永代免許の字を載す。新司之れを停めんと欲すれば則ち本所頻りに愁緒を結ぶの源たり。當任も亦これに充てば後代定めて錐を立つるの地を殘さざるか、吏途の法條良に術を失ひ、聖斷の處裁煩ひあり、其の不治の謂、職として斯れに由る。勅免を帶びざるの地に於ては宜しく國領たらしむ可く兼て又自今以後永く停止に從つて更に然らしむる事勿れ

と云ふに至る此狀態は啻に國領のみに止らず、鎌倉幕府に屬するの地も亦然りき。此の如くし中古時代に於ける所謂隱田の形跡を再發し寺院はこれによりて北條氏の末葉に至るまで儼然として一個の勢力を維持するの端を開き、獨逸英國等に於て戰國時代に最盛に行はれたる現象と同一の現象を呈するに至れり。

長講堂御料は日本農政史上緊要なる一事件にして空しく看過す可らざるものなり。

其二　御家人の所領

鎌倉幕府の平氏の莊園を收容するや有功の將士に地を賜與して其領地となせり。これ鎌倉幕府に至りてより初めて發生せる一種の土地なり。其中又數種あり。

(一)本領　沙汰未練書に本領者爲開發領主代々武家御下文所領田畠等事賜又云私領云々とあり。即ち世襲の領地にして三大罪を犯すにあらざれば除かず。

(二)恩賞地　沙汰未練書に御恩地者依代々將軍家奉分充給所領等事也云々とあり。功勞ありて幕府より增與せられたるものなり。

(三)新恩地　とは恩賞地にして本領に准ぜられたるものを云ふ。

(四)加恩地　とは倘神戶に加納あるが如く恩賞地の他に加へ賜はる領地にして終身供與するものと年を限りて給するものとの別あり。期滿ちて收め還すを闕所と稱す。

是等は皆賣買を禁斷せられたる土地にして其給與の地積に至りては判然たらずと雖も武藏相模安房上下總上野常陸伊豆甲斐信濃等は貞永式目に關東御分の國とあり是等の御家人の所領たる可かりしならんか。しかも後代に至りて守護地頭が廣大なる私領地を有し遂に北條氏を斃し(新田氏)、天下を統一する(足利氏)に至れるが如きは此賜領地によりて基礎を作りしにはあらずして、守護は領家の地を掠め地頭は莊園の地を奪ひ、又次に述べんとする所の名田を多く所有したるに依るものなりと信ず。

其三　名田

名田の起源に就ては歷史家の中にも倘疑問として遺れり。多くは鎌倉幕府以來のものゝ如く論ずれども土肥經

平の湯土問答には往古皇子皇女に賜ひし所の邑里を名代の田と稱し、其代字は後世の學者其名を記念せんが爲めに名の代りに設けたる田と云ふ如く解釋すれども然らず、代は田積を示すものにして世移るに從ひ代を以て田積を測る事遂に止みしかば代字を除きて名田と稱するに至れるものなりとある由なれども附會の說に近きが如し。假令附會の說ならざるも鎌倉幕府時代に通稱せし所の名田は中古の所謂名代の田とは全く異れる性質を有するものなり。故に倭訓栞莊園考等に云へる如く、東鑑文治三年四月二十九日の條に重安名田とあるを以て古書に記載せられたる權輿とするを妥當なりとするが如しと雖も、名田より生ぜる名稱なる大名小名名主等の稱呼の其以前より使用せられたるを見れば其實際に存在せしは確かに文治以前なりしに似たり。しかも名田の發達の最顯著なりしは鎌倉幕府以後なりしを以て玆に併せ說かんとするなり。

名田とは空閑の地荒廢の地等を開墾してこれを私田となし、これに開墾者の姓名若しくは官名を附して呼べる所の田を稱するものにして三餘叢談に「名田と云ふは俗に草分と云へるに同じ」とあるが如し、現今にても地方に屢〻見る所の何助新田何兵衞新田等のあるは其遺制を承けたるものなる可し。此私田は他より一切干涉を受くる事なし。但し買得の田畑なりとも名田なれば亦同じく然りしなる可し。これ戰亂の餘農民離散して荒廢の田多かりしかば一は農民を定住せしめんが爲め一は肥沃の地を無益に放棄せざらんが爲め幕府の取りし政策なりし事は東鑑に、

正治元年己亥賴家の命ずる所に從つて兵庫頭廣元之れを奉行し東國の地頭に仰せ行はしむる趣は近年兵亂打續き庶民手足を措くに處なし、之れによりて農桑の營みを怠り田畑多く荒蕪に及べり。今既に天下太平の時に至り百姓安堵の地に棲宅す。今に於ては要水便宜の處に新田を開作す可し云々

と云へるによりて知る可し當時永平、松永、弘拔、粥安富、武久、高垣、安清、國守（出雲）福正（河内）大丸

(美濃)、富成、綾垣(並に豊後)佐古(筑前)安垣(豊前)等の名田續々書中に載せらるゝを見る。而して名田を多く有せるものを大名と稱し少しく有せるものを小名と稱し領主代として其土地を支配するものを名主と稱し、後世封建割據の基をなせり。而して名田を多く有せるものはこれを小農に貸與し其耕作をなさしめ、初めは數年にして其期限となせしも遂には永小作とせしものあり。爾來數百年名田は鞏固なる土豪又は武人の世襲財產なりき。

土地の開墾及び改良に關しては史籍の徵す可きもの甚だ尠きを憾む。而してこれ恐くは史籍の徵す可きものなきのみならず當時幕府に於て土地の改良及び開墾に關しては自ら進んでこれをなせしが如き事は殆どなく、唯時時農民を催促してこれに從事するを勸めたるのみなりしが如し。幕府が疲弊し或は窮迫せる農民に對して屢々法令を發して其の去就を定めたる事あり。而して庶民耕作せざる間更に公私に益なし。賴朝仍て浪人を招き据ゑこれを開發せしめ乃貢に備ふ可きの旨、其所の地頭等に命ぜりと東鑑にあるが如きは其一例にして、寶治五年八月には下總國下河邊莊の堤防を修築したる外多く見る可きものなし。

而して唯一事此に注意す可きは、幕府が盛に武藏野の開拓に意を注ぎて頗る成績を擧げたる事これなり。元來藤原氏の京師にありて政權を掌握せる時代にありては關東八州の沃野も恰も德川時代に於ける蝦夷地の如き關係に過ぎずしてこれを開拓して必ず沃野となし得可きを知るも注入する資本及び勞力に對して遂に躊躇せざるを得ざりしなる可し。醍醐帝の延喜年間に於ては豊饒なる武藏野も一個の放畜場に過ぎず、駿河相模等の牧と併せて「諸國の牧」と定められ、武藏國には檜前馬牧、神崎牛牧の二牧ありて每年繁殖馬十匹を貢し七年每に蘇(蘇とは練乳の類にして牛乳大一斗を煎じて蘇大一升を得ると云へり)二十壺を貢するを例とせしが、賴朝に至り府を鎌倉に開くや武藏國は忽如として樞要の地域となり Margin of Cultivation は急轉直下の勢を以て擴張し來り、野草渺茫たり

し武藏野は開拓の事業着々として歩を進むるに至れり。建久五年賴朝命じて武藏太田莊（埼玉郡にあり）の堤防を修築せしめ灌漑排水に便じ承元元年三月に至りては實朝地頭を督して該國の平原を開拓す可き方針を取らしめ、（東鑑）、延應に至りては、太夫尉泰綱に水田開發の事を命じ、仁治二年水田を開かしめんが爲めに上多摩河の水を灌漑するを便とし柏間左衞門尉多賀谷兵衞尉を奉行となして其工事に着手せしめ、榑沼の堤大破するや左近道然石原經景等を奉行となし百姓を徵發して修築をなさしめし等、大に力を盡せるの跡を見るなり。建久より仁治に至るまで凡そ四十年なり。

第三款　田積の調査及び租稅

其一　田積の調査

中古の初めにありては大帳使、稅帳使、調帳使即ち四度の使なるものありて各所の國衙に置き、每年戶籍田積を調査し租稅の出納を精算して地方及び中央行政機關の連絡を圓滑にせんことを勉めしも、年を經るに從ひ其制自ら壞れ、四度の使の名目は存するも毫も實行せらるゝ事なくして鎌倉幕府に及べり。鎌倉幕府は長き變亂の後を受けて農民の離散し田畑の所有主も判然たらざるもの多き間に處して田積の調査を爲さんとす。其難事たる知る可し。

賴朝北藤原泰衡を征せる後其田積を知らんとし陸奥出羽兩國省帳田文以下の文書を求めしに平泉館の火災と共に燒失し去れり。時に奥州の住人豐前介實俊竝に弟橘藤王實昌故實を知れる由を申進せるが故に直にこれに其調査を命ぜしに二人地圖を作りて注進し、諸郡の劵契鄕里の田畑を辨定し漏すもの三箇所の外は更に犯失なかりしかば賴朝殊にこれを感ぜりと云へり。當時兵燹の爲に諸國田籍登記簿の湮滅に歸したる概ね此類なりき。而して

農民等は田積の甚、曖昧なるに乘じ、「荒地不作と稱し年貢正税を減少」（東鑑）し、守護地頭の貧なるものは「賦斂を重くし……劇しく公役を繁くす曖剩へ暴虐の目代は年貢を責るが故に（田積の判然せざるものありしが故に）價を半にして雜具を賣り資材なきものは倍息の利金を借り或は田宅を壞ち子女を販ぎこれを以て償ふ。若し辨濟すること能はざれば妻子を捕へて裸にし荊の中に伏さしめ農夫を縛りては跣にして氷を履ましめ或は牢屋に繫で水食を止め或は井池に浸して寒風に侵さしめ何れにも定めたる限りの正税を肯はしむ」（東鑑、北條九代記）と云ふに至りては積弊も亦甚しとなす。

東鑑承元四年の條に曰く

三月實朝武藏國の田文を造り國務の條々更に之れを定む。當國は故右大將家の初め一圓に朝恩として國務せしむる所なり。仍て建久七年國検を遂げらるゝと雖も未だ目錄の沙汰に及ばざりき。

此に云ふ所の田文とは卽ち田積を登錄する所のものにして其起原は令集解田令の註に

古記云預校勘造簿謂造田文也。

とあり之れ史籍に田文の文字ある嚆矢なる可く、これにより鎌倉幕府以前より既に存在せしものなることを知る可しと雖も、鎌倉幕府は新たに田積を調査するに當り此文字を襲用せるものなり。而して又太田文と稱するものあり。これ鎌倉幕府に至りて作爲せられたる文字なりとす。戸籍考に

頼朝の子實朝の時に諸國の太田文を作る事見えて今に弘安八年但馬太田文又嘉元四年常陸田文の殘れるは卽ち古の戸籍に依りて造れる田文の遺制なる可し云々。

と云ふものこれなり。桃谷問答（田中元勝著、肥後國熊本區坪井水烏貫之藏本）に

次に田所と云ふは管内田代の町丈歩員數經界を檢校する事を掌るものにて東鑑などに太田文と云ふもの見え

たるは、此田所どもが其處の田代の員數經界を委しく註したる文書を田文と云ひ、其國中の田文どもを國衙(國衙は多少疑ふ可し)に取集めて一に合せて大帳册としたるを太田文とは云へるなる可し。

と云へるによりて見る時は一莊一保等の田積を調査せるものを單に田文と稱し、之れを一國に集成せるを太田文と云へるなる可し。當時田文調成甚だ困難にして、容易に進達せられざりしは左の催促狀を見て知る可し。

(第一例) 閥閲錄　內藤次郎左衞門藏

當國田文事神社佛寺庄公領等云田畠員數云領主之交名分明可註申之由文永九年十月二十日關東御教書案如此幷質劵賣買所之名寫□分限之領主交名可註申之旨去年八月三日同被下御教書候所詮任被下之旨云彼云此早速可被註申候仍執達如件

文永十一年正月八日　　源　御判

長田卿地頭殿

(第二例) 閥閲錄

諸國田文事爲支配公事被召置之處令云々。安藝國文書早速可令調進且神社佛寺庄公領等云田畑員數云領主之交名分明可被註申者也依仰執達如件

文永九年十月二十日　　相模守判

左京大夫判

武田五郎次郎殿

北條泰時の執權となるや精勵治を謀り遂に日本全國の太田文を完成し土地制度の基礎漸く成れり。凡そ鎌倉幕府の諸制北條泰時北條時賴に至りて初めて完成せられしを見る可し。

當時の耕作地積は到底知る可らざるも日蓮上人の書に依れば八十八萬五千五百六十町歩餘なりと云へり。而して庄園と國領との比較は建久中

國名	國領	莊園	總計
日向	二五町餘	七九七〇町餘	八〇六〇町餘
大隅	二五〇	六七六七	七〇一七
薩摩	二一〇	三七九〇	四〇〇〇

（注意）日向には、六十八町の設官田あり上の表中總計にはこれを加へたり。

九州は東方の武家によりて支配せらるゝに反し、權門社寺の勢力依然として旺盛なりしかば、これを以て全國の平均數となさんことは到底不可能の事に屬すれども今不幸にして東方諸國の田積如何を探出する能はざるが故に茲に半面の事實のみ掲げて他日の考覈に供せり。

其二　租税

文治元年頼朝公領莊園共に兵粮米として段別五升を課せり。田租を乃貢又は物成と云ひ又乃米能米とも書けり。雜種の賦役には國役、段錢、段米、棟別、夫役、夫錢、鄕錢、倉役、酒屋役、日錢、口錢等の稱あり。（國役とは一國全體より出すべき租にして段米は一段に付きての租、棟別は戸税、夫役夫錢は庸、鄕錢は其關係せる鄕村より取る税、倉役は質屋の營業税、目錢口錢は米租運搬の際減少する額を補足する租。）租は米にて收むるを分米、公米、上分米と云ひ其額を代と云ふ。後世石代、斗代の起原なり。錢にて收むるを分錢と云ふ。

一町頭又は一段頭と云へることとあり。皆其面積の十分の一を指すものなり。又太、半、小と云へることゝあり。

太とは一段（多くは段に對して用ふ）の三分の二即ち二百四十歩、半とは一段の二分の一即ち百八十歩、小とは一段の三分の一即ち百二十歩を稱するものなり。

今文治元年頼朝の課せし田租を示せば

田品	穫米（石斗升）	租米（升）	兵粮米（升）
上田一段	一、五六二	七五	五
中田一段	一、二四九	七五	五
下田一段	九二七	七五	五
下々田一段	四六八	七五	五
平均	一、〇五四	七五	五

即ち一段の穫米一石零五升四合餘に對する一斗二升五合なるが故に輸する所の租米は、收穫高の十分一厘強なり。荻野氏は其日本財政史に於て若し地子田の法にすれば兵粮米併せて七公三民に至るものなりとこれ餘りに多きに過ぎざるか。思ふに保元平治の際朝規全く紊亂して亂雜なる徵租をなしたるが故に判然たる額を知り難しと雖も七公三民より甚しかりしとは思惟する能はず。然るに文治に至り租法を定むるに當りて農民等其過重なるを病み領家等の愁訴ありしが故に文治二年三月二十一日諸國兵粮米催事於今者可停止之由被宣下（東鑑）との宣下ありしが故に其租率の苛酷なりしが如く考へらるれども其苛酷なりしは事實なりとするも鎌倉幕府時代を通じて然りしにあらず、そは表面上兵粮米の徵發を禁止せるに依然として之を輸せしめたるにも係らず承久の亂の時の如

きは泰時等義時の命を奉じて鎌倉を發足するや單騎にして進むも道にして相從ふもの十九萬騎に至れるを見ば如何に武人が鎌倉幕府を謳歌せしのみならず、地方の豪農小民等も亦鎌倉の治を喜びしを知るに足る。これ決して平生苛酷を以て臨める政府の收受し得可き効果にあらず。固より當時の租制は決して輕少なりしとは云ふ可らず農政本論には五公五民なりしとし地方凡例錄には四公六民なりとす共の據る處を悉す能はざるも今一段の穫米古法の上田一石五斗六升餘中田一石二斗四升餘下田九斗二升餘として所謂年貢米を算すれば、上中下田何れも四公六民、五公五民の間にありと云はざる可らず。

後堀河天皇貞永元年（文治元年の租制を定めてより四十五年）貞永式目發布せられ諸制大に改革せらるゝところあり、花園天皇文保二年東寺領丹波國年貢請文に上中下田の租法を載するあり、此法或は貞永式目制定の時定る所にはあらざるか。

花園天皇文保二年六月十四日東寺領丹波國大山莊一井谷百姓等年貢請文

合八町一段三十代

内

上田	三町三段	段別	七斗五升
中田	三町二段	段別	五斗五升
下田	一町六段三十代	段別	四斗五升

右御領者以下地被切進寺用足之時段別一色石代旨被定之畢雖然損亡之時就中入子細被下使之間云地下云御寺非莫共煩仍任百姓申請被定上中下斗代也然者於向後者不依旱風水之損亡自元爲京庫納之上者每年十一月可令運上寺庫者也更寄事於左右雖爲一塵不可致未進懈怠云々（東寺百合文書）

これに依つて鎌倉幕府の租額を表を以て示せば

鎌倉幕府初代租法用量宣旨升

一歩 大尺方六尺 即曲尺方三尺　一段 三百六十歩　一町 三千六百歩

田品	地積	穫米	租米	租率
上田	一段	一五六二合	七五〇升	十分の四分八厘
中田	一段	一二四九	五七〇	十分の四分五厘
下田	一段	九二七	四五〇	十分の四分八厘

尙、此に横井時敬、幸田思成兩氏の調査に係る古代よりの正租率を掲げて參考に供す。

(時代)		幸田思成	横井時敬
大化	收穫高の	百分の三強	百分の四強
白雉	同	百分の三	百分の三
慶雲	同	百分の二強	百分の二強
和銅	同	百分の三	百分の三
貞觀	同(平均)	百分の六	百分の五強
長保	同(同)	百分の七	百分の四十八強
鎌倉	同(同)	百分の四十八	百分の四十八強
文祿	同		百分の六十七強

貞享	同	百分の五十
明治	（改正前）	百分の二十四
明治	（改正後）	百分の二十二

此時代にありては陸田にも亦課税せるものにして、大略水田の租の三分の二に當れり。而して年貢は敢て米錢のみに限るにあらず土地の産物を以て貢進することあり。東鑑に伊豆國の乃貢供御甘苔十合と云へるが如き、藤原氏が毎年馬及び金を貢せしが如きは其例となす可きか。

調は定額のものは廢止せられたり。租額の鎌倉時代に至りては急に突然上騰せしが如きも調の廢せられたるを思ひ來れば極めて亂暴なる課賦にあらざりしを知る可し。

第四款　土地の賣買讓與（繼承法）及び質入

其一　賣買

土地及び財産の賣買は何人を問はずこれを許可せる事は前述の如し。但し幕府の御家人は本領地、新恩地、加恩苗字地、恩賞地の中御恩地の賣買を固く停止せられ、若し違犯するものあるときは賣人買人共に罪科に處せられたり（貞永式目。四十八條）而して私領と雖も武家は平民に賣買するを禁ぜり。（新編追加）

（注意）此記載中には貞永式目の新編追加の如きを加へたり。此中には編者の云ふ所の鎌倉幕府初代以後に發布せられたる法令なきにあらざるもこれ多くは鎌倉幕府初代以後に成文律となりたるものにして、其以前にありても不文律として施行せしめたりと信ずるが故にこれを取れり。

凡そ土地の賣買には必ず地頭に具申して其公認を受け、且つ證文（賣渡證書）を作るを要す（新編追加）これを沽却状、

放券又は沽券とも稱す。證文には賣人、口入人、買人連判する事あり。其文例の一を左に掲ぐ。

（東寺百合文書）

賣渡

合肆拾文私領一所事口四丈三尺奧九丈三尺

在六角北油小路西六角西

右件地者源貞重相傳私領也而依有要用直錢參拾貫安倍友淸限永代可令賣渡實也且相具本公券併別當宣明法勘定問註記等渡與狀如件

建保四年八月八日

地頭此具申を受くればこれを政所に傳へ政所直接にこれを受くれば政所より下知狀を買人に給與す。其文例は左の如し。

出雲國熊谷上下鄕號東西事

相副御判以下數通證文等估券分明之上者永任買得相傳旨可被全領知之由所被仰下也仍執達如件

明應九年十二月二十九日

散　位　花押

備中守　花押

三刀屋刑部丞殿

此の如くして政所は其國の守護若しくは地頭に牒するに該事務の落着を以てし、守護地頭は其命を奉じて其土地所有權の推轉せるを確實にす。政所より守護地頭に送る文例は左の如し。

出雲國熊谷上下鄕號東方西方事

相副御判以下數通の證文就令矢島春松同中務入道靜榮沽却三刀屋刑部丞忠扶買得相傳之條既被成御下知之上者於自然之儀者可致存知其段之由被仰出也仍執達如件

明應九年十二月二十九日

行房花押

長秀花押

尼子民部少輔殿

右に示せる文例は悉く武家が其私有地を賣買するときの手續にして一般人民のものは此に共例を發見するに由なしと雖も、敢て差異ある事なかりしなるべし。但し小地積の移動も必ず政府を經ざるべからざりしやは疑問なるべし。思ふに一定の地積以下に於ては守護若くは地頭に於てこれが處置をなしたるにあらざるか。然らざれば遠隔の地方にあるのもゝ如きにありては到底其繁に堪へざるものあるべきなり。

土地賣買の事官にて承認し政所の下知狀を得ればこれを沽却安堵と稱し問註所にて裁許す。

以上は不動の中、土地に關する賣買の手續なりとす。

其二　讓與

讓與は當時に於て和與と稱せり。父祖の和與と他人の和與との別あり。父祖の和與中には土地繼承の事含まる財産の相續は中古の如く分配法によるものにして讓與者の任意なれど御家人の所領に至りては中古の如く豫め其制を立てず、幕府の斟酌(しんしゃく)によりて分ち充つるものなりき貞永式目第二十七條。これ大地積を有せる御家人の死去せる上

きはこれを多くの遺子に分配し以て其の威力を割くが如き政略に基きて故らに劃然と規定せざるものなるべし。

現今地方によりて何分一村と云ふが如きあり。數子に分配せしを證するものなり。

分配に與るものは嫡子、庶子、女子、妻、妾、兄弟、叔姪、孫、外孫等にして其區域廣し。配分するものなきときは別御計と稱して神社佛寺等に寄附す。財主は一旦讓與の後意に滿たざるときは返却することを得、これを「悔い還し」と稱す。其分配の比率は中古に比し嫡子の得分漸く多額に赴き幕府は屢ゝ禁制せるにも係はらず、遂に後代の所謂惣領相續法(嫡子其家の遺產を全然相續して他に及さゞるもの)を馴致するに至れり。

他人和與とは兄弟親類に讓與するものなり。但し恩給の領地は非親族の他人に讓與するを禁ぜられたり。

和與には讓狀なるものありて證左となす、文例左の如し。

第一例　(嚴島文書)　父祖和與の例

讓渡相傳私領事

在安藝國高田郡內三田風平豐島鯨原甲立船木

副渡調度文書等

右件七箇鄉者景弘之相傳私領地也而散位佐伯景信朝臣依爲嫡子相副調度文書等所讓渡也委旨見本公驗幷手次文書等敢不可有他妨仍爲向後證文所讓渡之狀如件

壽永元年三月　日

從四位下安藝守佐伯朝臣　花押

第二例　(宗像文書)　他人和與の例

筑前國宗像東鄉內曲村地頭職並公文職千葉前常陸介平胤連依爲重代相傳之本領手國之證文相副舍弟宗果上座

讓與所實也國子々孫々不可致違亂仍爲後日讓狀如件

應安二年八月十八日

千葉前常陸介平胤連 花押

土地の讓與には必ず官の認許を受けざるべからず。官承諾すれば相續安堵の御判を給ふこれを又繼目の判形と稱す文例左の如し。

（和翰集要）

大倉兵部一跡之事任讓狀與奪之旨令裁許畢者早守先例領掌不可有相違之狀如件

年號月日

名乘判

此手續をなせるものを和與地安堵と稱し引付方に於てこれを裁許す。若し相續安堵の御判なくんば讓與の後紛雜を生じて上裁を請ふも幕府は一切其の責に任ぜざるものとす。（沙汰未陳書）

其三 質入

當時貸借の對物信用によりしは當然の事なり。而して其對物信用の物件は一は證書面（質券と稱せり）に其の何なるかを明記して物件に代へてこれを貸主に交附し、一は物件其物を貸主に交附して金錢米穀を借るの例なりき。前者を入質と稱す。土地奴婢の類を此法に依りて抵當とせられ、後者を見質と稱し、運搬し易き動產の類は大抵此法によりて抵當とせられたるが如し。而して貸主を錢主と云ひ借人を物主と云へり。當時の套語なり。

御家人にありては私領地は前述の如く賣買すること又質入をなすことを得たりしも御恩地は賣買することを得

ず質入は許されたり。利息(當時利平と稱せり)に就ては判然せざるも通常の貸借に於ける利子を示せば

負物(負債に同じ)　出擧(貸付け)の利子

出擧稻　四百八十日を過ぐるとも一倍の利子に過ぐることを許さず

出擧錢　一年半倍の利に過ぐることを得ず

出擧稻出擧錢共に利子を重利法によりて積算することを許さず

卽ち出擧稻は一箇月六分の利に相當し出擧錢は一箇月殆ど四分の利に相當せり。質入の利子も亦一箇月四五分の間にありしなる可し。

第三項　農民に對する政策

何處の歷史に徵するも農業の元始は甚だ漠然として正鵠を得難きもの多し。これ農業なる職業の極めて古き歷史を有せるを示すものにして、何れの國民を問はず僅かに漂泊的時代を通過して一定の住居を求むるに至り、稍安堵の域に達すれば農業は直ちに發達し地方的生活なるもの起り、一定の境土を有して所謂 Territory の發生を見、尋で漸く國家的組織に移るも農業は依然として樞要の部分を占め文運開發の源因をなせるは何れの國に於ても等しく經過せる所にして、農業は實に人民多數の職業として又人に一定の住居を供するの點に於て國家的組織の淵源をなせるは明瞭なる事實なり。歐洲の所々に存在するが如く一市の中に國をなせるが如き特殊なる地にありては例外なりと雖も、現今列在せる各國に於て農民の他の職業者に比して最大多數を占め居るは明かにして、今後農民の比較的人口は漸次減少するの傾向あるも亦明かなりと雖も、過去に於て農民が社會の下層に雌伏すべきものとして卑下せられたるにも係はらず儼然として多大の勢を維持したりしは勿論なり。此に於て往時に於て

政府の人民に對する施設は多く農民を基礎とせるものありき。鎌倉幕府亦此例に漏るゝ能はず。

第一款　鎌倉幕府初代農民の狀態

鎌倉幕府初代の農民が戰亂の後を承けて疲弊に陷り浮浪の徒を生じ奴隷の人を出すに至りしの狀は少しく前述せし所なるが、當時鎌倉幕府が荒廢の地を得る每に人をこれに移住せしめて開墾に從事せしめ、又在鎌倉商人の員數を制限し、農民の都會に移り住みて商を營むもの若し此の制限人員を超過するときは威力を以て其業を停め再び農民に復歸せしめしが如きは、如何に當時の農民が堵に安んぜず又農事を有利なる職業となさずして都會に出でて僥倖の利を得んとしたるかの狀を想像するに足るべし。當時に於ける農業經營の狀態は委しくこれを知るに由なしと雖も、上古に於て木鑁、金鉔、布具志（鉔の類）等單純なる農具を以て粗放なる經營をなせし時代は既に往過したるものゝ如く、水力を利用して水車を廻轉せしむることを知り、地上に横へて乾燥せし穀類は稲機と稱して木を構へて造れる器具に掛けて乾燥するに至り、黍、稷、稗、麥、大小豆、胡麻、綿、茶等普通作物より工藝作物に至るまで多く備はり、水田は最も盛んに行はれたるが如し。然れども農民生活の狀態は其程度甚だ低かりしなる可し。當時武人の家屋さへ質素を極めたるものにして大名の家にありても主は廂に臥し、郎等は中門の中に寢ね、下部は厩の床に横はりしが如き狀態なりしかば、農民の家屋の粗造なりしは察知するに足るべし。當時既に蠟燭のありしにも係はらず農民は油焔黟しき魚油を燃きて明を取りたりと云へり。食物は寧樂時代にありて麥を播種することを奬勵し凶荒に支給したれども人民これを喜ばざりしが、此時代に至りて農民は麥飯を以て飢を凌ぐ事となれり。無住法師の歌に

さらずとも愛するよしにいひなして世を渡るべき粥と麥飯

と云へるもの是れなり。食事は當時武人等二食の風を遵守したれば農民も亦然りしか。

當時農業の經營上尤も注意すべきは牧畜なる可し。殊に相模武藏上下總等嘗て有名なりし牧場區域が俄然として繁華なる市郊となりてよりは牧場區域は漸次北漸して奥羽諸國に移れるものゝ如し。賴朝の有せし名馬は奥羽の產にして又藤原泰衡等が年々朝廷に貢馬せるによりても知る事を得べし。然れども牧牛は漸次衰退せるものありしが如し。蓋し當時戰亂の際軍馬の需要頓に增加し齋藤別當實盛が維盛の問に應じて關東武士を評するや人々五六馬を蓄へ山谷に馳すること平地の如しと云へるが如く、武士は各少くも四五頭の馬を蓄へしなる可く、自ら牧馬の盛大を見るに至り、又一は當時禪宗の國内に傳播せらるゝに及びて淡味を取り肉食を避くるの風漸く俗をなし、遂に牧牛の衰退を來せるにあらざるか。

中古族長の發達と共に其起源を發したる賤民即ち奴隸、其後依然として社會の一階級を造り、賣買讓與すら行はれたるが如し。農民等の租を地頭等に納むる能はざるや地頭は其妻女奴婢及び田畑に至るまで悉くこれを沒收して其人を悉く其奴隸となせるが如き暴戾をなせり。又農民は出擧稻出擧錢の質として奴婢の類を質劵に書入したるが如きは畢竟奴隸の賣買をなせるに異ならず。

此の如くにして鎌倉幕府の最も初代に於ては農民は新に補せられたる守護地頭等の專橫なる壓制の下にありて疲弊の上に疲弊を加へ、地方制度擾亂の徵既に萠さんとせるが、幸にして泰時の出づるに及び、大に改革する所ありて遂に事なきを得たり。

第二款　民法大意戶籍調査其他の施設

戶主　此時代に於ても嫡子を嗣子と定め之れを家督又は惣領と稱し、一家の督長にして庶子以下の進退の權を

有し財産を惣領するが故なり。（東鑑）

繼嗣　若し嫡子なければ庶子若くは甥を以て嗣子とすることを得。父母あるときは其意志に出で歿後ならば家宰親族の議定による。

質入　典質には入質と見質の二種あることを土地の制度を論ぜる時述べたり。入質とは物件を貸主に交附せずして質券上に其物件を記入するものにして土地奴婢の類は、此入質法によりて典質となされたるものなり。奴婢が質中に生める子は奴婢受出したるときは主人の進退に任ず。初め幕府は奴婢を賣買するの惡風を禁ぜしが、建長六年以後は奴婢の質入をも禁斷せり。（新編追加）

質入物を預りて之れを盜せられたるときは土倉預りの辨償たり。

財産の分配は亦主人の任意なりしも土地惣領法の漸次行はるゝに至りて他の財産も悉く嗣子に讓るの風遂に馴致せられしが如し。

戸籍調査も亦戰亂の餘弊を受けて全く亂雜に陷り、殆んど收拾すべからざるに至りしも、實朝の全國に令して太田文の調製をなさしめてより泰時に至りてこれを大成せるの間にありて戸籍も亦同時に調査せられたるは疑ふべからざる事實なりとす。編者は茲に農民人口を調査せる報文を探出すること能はずと雖も京師の大番をなさんが爲め土地の面積に比例して兵士を徴集せる時の報告書を得たり、斯の如き報告書は大番兵士に限らずして他の職業者の上にも必ずや行はれたる事ならんと信ず。今原文の儘之れを左に揭げん。

（和田文書）

和泉國御家人就大番勤仕自十月十四日至于同十七日大梗守護兵士支配事

合

分限惣田數上方二百十三町漆段三百步

但二町五反別兵士一人定除八田周防次郎左衞門尉分限之彼注文未出之

向佐渡入道　四十六町五反　兵士十八人

大島新右衞門　二十三町十一反　兵士九人

和田修理　十七町九反　兵士七人

菱木左衞門尉　八町六反　兵士六人

上條左衞門尉　十五町　兵士一人

池田兵衞判官代　四町　兵士一人

石津左衞門尉　五町　兵士一人

橫山右衞門入道　三町七反　兵士一人

取石大進法橋　八町　兵士三人

高石兵衞尉　七町二反半　兵士三人

池田上村左衞門尉　四町　兵士一人

信太右衞門尉　七町五反　兵士三人

信太左衞門尉　二町　兵士一人

若松右衞門尉　十一町九反　兵士五人

陶器左衞門尉　二十一町一反　兵士八人

箕形熊石丸　三町　兵士一人

壗穴左衛門尉 五町一反 兵士二人

右此大楼守護之由奉行書下如此仍此兵士等今月十三日以前令参着中御門大宮籌屋随當番衆支配可令祗勤之狀如件

文永九年十月六日

中原俊

守護

當國上方御家人御中

北條泰時の執權となりて大政に與るや彼の廉直にして公平、剛毅にして慈心ある性情は、よく當時の難局に處して之れを收容する事を得たりき。彼先づ朝廷に請ひて天下の逋負を免じたり。卽ち寛喜年間には諸國飢饉ありて百姓困難せしかば米九千石を貧民に與へ又關西の地租を免じたる事あり。又伊豆北條の民不作に困しみしときの如きは貸租をなし秋に至りて尙返却の道なかりしに農民の前に其の證文を燒き捨て米噌を與へたることあり、又屢〻守護地頭を戒飭して暴政をなさゞらしめんことを勸めたり。是れより先賴朝、賴家、實朝の時の如きは地方官と中央政府との連絡甚だ不完全なりしかば守護人地頭人等の私曲も多く政府に聞ゆることなく、地方到る所に小暴王を生じて猥りに農民を檢束したるは明かにして後堀河天皇貞永元年七月執權北條泰時、時房等式目を定めて

諸國の地頭が年貢所當を抑留すること。

右者年貢を抑留するの由本所に訴訟ありと。卽ち結解を遂げ勘定を請ふべし。地頭がこれを犯し用ふるの條若し逃るゝの所なくば員數に任せこれを辨償すべし。但し小分たるに於ては早速に沙汰を致すべし。過分に至るものは三箇年中に辨償すべし。猶此旨に背き難澁せしむるものは所職を變易せらるべし。

と云へるが如きは當時の農民に取りて實に旱天の雲霓の如きものありしならん。

交通機關の設備の如きは勿論不完全なりしに相違なきも、此時代に於ては普通道路には多少力を致せるものありしが如し。恰も羅馬が經濟上の見地よりも軍備上の目的より道路を整備して當今に至るまで普通道路の模典なるが如く、鎌倉幕府も亦其威權を保持するに必要なる軍隊の移動を迅速にせんが爲めに道路修築の必要ありしなるべし。文治年間頼朝驛路の法を定め上洛の使者雜色等をして伊豆駿河以西近江に至るまで權門莊々の所を論せず、其傳馬を乘用し其糧食を使はしめたり、又雜色足立淸經に命じて鎌倉京都間の路次驛屋渡船の事を管理せしめ、駿河以西沿道諸國の守護人に命じて夜行番衆を置き、交番して旅人を警固せしめ、又處々に新驛を增し置き、其路次各驛をして鎌倉京師往復の早馬及び將軍荷物の送夫を管せしめたり。其後建保年中に又諸國關津の地頭に命じて渡船を備へ以て行旅の煩憂を除かしめ、且つ其船賃及び用途は皆料田の收稻を以て之れに充てしめたり。又北條泰時に至りては殊に京師及び鎌倉の交通に留意し本野ケ原の一望渺茫として迷ひ易きを見るや、直ちに道側に柳樹を植ゑしめて行旅の便に供せり。當時京師鎌倉間に飛脚は十四日間を費して往復し通常の旅人は大抵二十七八日を要したり。斯の如くして交通は漸次便宜に向ひたれども旅人は猶糧を運びて夜に入れば野宿せざる可らざる場合多かりき。

承久の亂平ぎたる後、諸國郡鄕莊保新補の地頭諸務の事五丁修卒の法を定む(東鑑)。此詳細を悉すを得ば趣味ある地方制度の行はれしを見得可しと思惟すれども、今其仔細を知り難きを憾む。但し五丁とは丁男五人の謂なる可く、平時は其五人互に相扶助監督し、戰時には一伍をなして事に從ひしものにあらざるか。徳川時代に行はれたる五人組の制度と全く關係なきか、是等は尙研鑽を遂げ併せて識者の教を待たんとす。

此に鎌倉幕府が農民に對する施設の中大書して其功を稱せざる可らざるものあり、何ぞや、奴隷の開放を實行

せんとせし事是れなり。思ふに奴隷の發達は決して新しき事にあらず。鎌倉幕府以前の農夫を概論せし時にも述べし如く、武內大伴等の豪族漸く其威權を振ふに至りて地方に領地を作り農民を頤使せし傾あり。既に發達し來れるものにして大寶律令制定の頃に至りては私奴婢(宮戶陵戶官奴婢は然らず)は賣買せられて死活の權を握られたり。正倉院の古文書中には彼等奴隷が馬牛と公に轉賣せられたる證劵の殘れるものあり。讀む者をして我邦も亦此事ありしかを思うて戰慄せしむるなり。

美濃國司解　申進上交易賤事

合陸人 奴三 婢三

價稻肆千玖伯束 二人充各一千束 一人七百束 二人各八百束 一人六百束

奴小勝 年三十四 左目下黑子　價稻一千束

右山縣大郡戶主直大庭之賤

奴豐麻呂 年二十二 左頰疵　價稻一千束

右武義郡揖可郷戶主武義造宮廬之賤

奴益爲 年十五 左目下黑子　價稻柒伯束

右加義郡山郷戶主連稻實之賤

婢乎久須利賣 年二十二 左目後黑子　價稻捌伯束

右厚見郡草田郷戶主物部足麻呂之賤

婢古都賣 年二十 右頰黑子　價稻捌伯束

右惠奈郡繪下郷戶主縣主足口縣主息守之賤

婢椋賣年十五　左頰斑又黒子　價稻陸伯束
右可兒郡驛家鄕戸主守部麻呂之賤
云々

と云へるもの見る可し。奴隷の生ぜし原因は第一配殁、第二負債、第三歸化に出でたりき。勿論鎌倉幕府以前にありても時に法令を下し其待遇の殘酷ならざる可きを諭し其賣買を禁ぜるが如き事なきにあらざりしと雖も、鎌倉幕府の如く眞面目に此事の矯正をなせしものは未だ之れあらざるなり。蓋し鎌倉幕府以前に於ける政治機關は總て奴隷なる一階級を造出せる貴族によりてなされたるが故に奴隷に對して自ら冷淡なるは其所なり。反之北條氏は所謂陪臣と稱せられて農民と僅かに擇ぶ所ありし一階級なりき。故に其執權となりて政務に參するや彼等は農民殊に貧弱なる農民に對して嘗て貴族等が全く有する能はざりし濕き同情を抱き得たりしなり。當時賤民とは農奴の如き一種の階級を造り(別に長吏と稱して德川時代に於ける××非人の如き一團ありしも)自由に轉賣せられしかば、堀河天皇嘉祿元年宣旨を以て嚴禁せられたり。

一、可令搦禁勾引人竝賣買人輩事

右嘉祿元年十月二十九日宣旨狀偁略人之罪私誘之科章條差□所恰不輕、兩事之禁、相犯之輩、時俗積習今未懲戒、慥仰京畿諸國所部官司等可令搦進彼輩、知而不糺同罪者。

其他四條天皇の延應元年には宣旨を以てし、仁治元年には幕府の下知にて之れを禁制し、賣買せしものは關東に召下し被賣者は見受次第に其身を放免す可き由、路次關々に揭示せられぬ。

又伏見天皇延應三年には幕府令して

一、可禁制人賣事

右様人商専其業輩多以有之云々可停止之違犯之輩者可捺火印於其面矣

と云へり。卽ち奴隷賣買の大罪を犯せるものは其面に烙印して復た世人に見ゆる能はざるの恥辱を與へて之れを懲らしめしものなり。又奴婢の質入等にも禁制を附したるは之れを前章に說けり。

勿論時世の一般に進歩せざる當時にありて幕府が力を盡して其防遏を務めしも陋弊容易に拔く可らずして德川氏に至れりと雖も、其弊を認めて其矯正策を斷行す。論者は鎌倉幕府の此文明的なる措置に對して洵に感謝の念なき能はず。露國の農奴が解放されしは僅かに近代にあらずや、亞米利加の自由國にして奴隷の全く跡を絕ちしは僅かに四十年に滿たざる過去にあらずや。嗚呼鎌倉幕府が獨り超然として日本歷史に一大新紀元を開けりと驚歎せらるゝもの、實に所以ありと云ふ可し。

第三款　（附錄）民間に設けられたる農業制度

未だ組合事業なく（或は僅かに發生の端緒にありしや）金融機關なく、農會制度なく、農事敎育は勿論之れなき當時に於て、人民間に農業に對して特殊の制度の存在せざりしは固より其所なり。論者は僅かに蒐集し得たる材料中より二三を揭出して此節を結ばんとす。

其一　は農業者と商業者との關係にして地方の生產物を樞要の港灣等に出せる時其價格の支拂に替錢と稱し現今の所謂爲替制度の單純なるものをなし居たりき。是れ一方に於ては商業の方法漸く改良せられ海上の運輸の便を知るに至りて此事の起れる事なる可し。

其二　は僧侶の農業に對する功績なり。元來寺院其者は農業に取りては寧ろ弊害ある結果を與へしも、僧侶の中には屢ゝ偉大の功績を殘せるものあり。弘法大師が四方を遍歷して到る處に橋梁を通じ道路を修めたる如きは

如何に當時の農業を補益したるかを知る可し。鎌倉時代にありても僧榮西は入唐して茶を得て歸り、栂尾明惠上人亦之れを受けて栽培し書を著して茶の效用を普く知らしめしが如き、良觀上人は鎌倉の極樂寺にありて專心救民の事に從事せり、或は療病院を造り又は馬療屋を造り、常に自ら之れに臨みて其治療に力を盡せるが如きは其例なり。

又當時農民等相集合して知識を交換し交情を溫むるの機會少き時にありては地方の祭禮は之れに與りて最も有力なりしものゝ如し。故に自然の結果として當時地方何れにも祭禮は盛に行はれしが如し。每年三月十五日に八幡の齋會ありて、「五月二十四日の夕さり方には二十三日の小夜かけて愛宕の火影へ村民松明をともしておどろおどろしう參り集る」と云ふが如き皆是れなり。

第四項　農政上より見たる貞永式目

東鑑の記者貞永式目を評して曰く、是れ卽ち淡海公の律令に比す可きか、彼は海內の龜鑑たり、是れは關東の鴻寶なりと、所以ありと謂ふ可し。貞永式目は實に日本の政治家の腦裡より編出されたる法典中最も簡明にしてしかも剴切に而して最も時代の精神に適切なるものたらずんばあらず。厩戶皇子が編成せる憲法十七條なるもの文字の典雅なる所言の高妙なる思ふに當時の朝臣をして驚異と嘆美の眼を以て之れを拜讀せしめしならん。しかも之れ單に支那に於ける繁雜なる法令の模倣に過ぎず。學殖あり虛譽を喜ぶ朝臣は或は之れを以て額に手して相慶喜したる可しと雖も、多數國民間に橫溢しつゝありし時代の精神は遂に之れを容るゝに由なかりき。故に憲法十七條は殆ど一片の空文として了りぬ。鎌足等制定する所の律令は憲法十七條に比して甚だ秩序あり達識あるものなりき。其體裁を支那に仰ぎてしかも之れに墨まず卓然として立つ所あり、大に日本化されたるものありて存しき。

しかも其の規定する所は餘りに繁雜に餘りに細密なりしかば、當時に於けるが如き不完全なる行政機關は到底之を圓滑に運轉するに足らずして、其規定の過半は又空文として投棄せられぬ。是れ然し法典編纂者の罪にあらず。當時に於て日本國民は未だ純然たる日本國民にあらざりき。彼等の内に混在せる種々なる異分子は未だ到底融和すること能はずして其の抱懷せし思想も數多の隔壁によりて離絶せられたるものありしが故なり。しかも頼朝の起りて兵馬の權を秉り、併せて治民の柄を握るや、嘗て比類なかりし思想の大攪拌は起りぬ。從來賤民として社會に處し、京師に政權を握れる貴族は全然一種特殊なる階級なりとせし平民等の中には、東國に偏在せる武士が天下を掌握するを見て民主的思想は勃然として起り我も人なり彼も人なりと云へる念慮は日本全國に瀰蔓せり。是れ日本國民の區々なる思想が一大熔爐の中に投ぜられたるの時なり。而して北條泰時は日本に於て新に統一せられたる思想の代表者なりき。其式目の成るや京師に消息して「この式目を造られ候事は何をか本悅として被註載之由人さだめて謗難を加候事歟誠にさせる本文にすがりたる事は候はねども道理の推す所を被記候者也、時勢の要求に應じて編纂せる者に候也との意に解し得べし」と云へり。貞永式目が文字に於て通俗に組織に於て單略なるにも係はらず、靡然として一世を動かし戰國時代法制の基礎となり、遠く德川氏所制の法令に感化せしもの豈偶然ならんや。

貞永式目は實に斯の如く偉大なる感化を後代の政治史に寄與せりと雖も、該式目は決して之れを法律として天下に分布したるにあらず。唯將軍に於て日本總追捕使として諸國の守護職の上に立ち天下の刑罰を總督すると、總地頭として本補新補の地頭の上に立ち其の支配する所の土地に對し訴訟を裁判するとの爲めに、設くる所の役員卽ち評定衆の自ら私曲を避け公平に就く爲めに立てたる起請の條々なり。故にこは單に鎌倉幕府が御家人に對する契約の如きものにしてしかも其の主とする所は行政事務の圓滑を期せしめんとするよりも司法事務の失墜な

からんことを規定せるにあり。故に一に御成敗式目と云ふ所以なり。而して本來の性質に於て該式目の行はるべき範圍は單に幕府裁判權の及ぶ所に止まるのみ。卽ち人に就て云へば守護地頭其他其支配の下にあるもの。土地に就て云へば莊園私領恩地なり。

該式目は貞永元年北條泰時連署時房と共に總裁して編纂せるものにして、八月八日草案初めて成り、同月十日式條施行の命を發せり。五十一條より成り、記載する所の事項を大體に分類すれば、

(一)寺院神社に對する處置　是れ式目の開卷第一に記さるゝ所にして鎌倉幕府が是等の勢に對して尊敬の意を表したるを見る可し。

(二)諸國守護地頭に關する規定　守護地頭の國領及び莊園に對する處置の方法と及び國司領家との交涉等に關する規定と人民卽ち農民を治定するの方針とを示せるもの。

(三)安堵の條々　御家人が所有せる私有地及び恩地の條件を記載せるもの。

(四)身分の條々　御家人の官職に關する規定。

(五)論訴檢斷　是れ式目中大部分を占め居るものにして備さに訴訟判決の法を規定し以て御家人及び農民の權利と義務とを明かにせり。

斯くの如く式目は其の範圍狹きものなりしにも係はらず、幕府の施政以外に立つ可き京官國司等も中古以來の律令朝廷に行はれし事甚だ微弱なりしかば、遂に凡ての判決を公平なる幕府の司法官に仰ぐに至り、貞永式目は日本全國の法律となれり。

貞永式目本來の性質は上述の如し。而して此法令は鎌倉幕府が取りし農政の施設に如何なる關係を有せるか。前にも云へるが如く貞永式目は行政事業を進め地方制度を整備し農業の改良を計り工商業の發達を促す等積極

的方針を規定せるものは一も之れあるなく、單に司法及び警察事務の方針を定めて消極的に官吏の貪慾を防遏し、農民の發達をなさしめんとせしに過ぎず。人は多く貞永式目の著名なるを知れるが故に、其中には鎌倉幕府が殊に重要視したる農民に對する法令の如きは極めて完全なるものあらんと想像すべしと雖も、眞相は實に案外にして一の土地整理法なり一の農業機關に關する規定あるなく、唯土地賣買讓與に對する一般普通の法令あるのみ。農業が貞永式目によりて多大の影響を蒙りたりとは少しくこれを窺ふ人の首肯する能はざる所なり。

しかも鎌倉幕府の初代にありては最も農業上に混亂を來せるものは土地所有權の甚だ曖昧なりし事なり。蓋し保元平治より平氏滅亡に至るまでの間に於ける長年月の變亂は痛く地方の安寧を攪動し民人の堵に安んずる能はずして流離浮浪するもの多く、加之地方に散在せる强力者は此機に乘じて近方の掠奪に忙はしく濫りに他人の土地を以て己れの有となし呑噬これ事とせしかば、鎌倉幕府の基礎漸く鞏固ならんとするや、永く訴ふる所なかりし農民及び貧弱なる領主等は續々として幕府の裁斷を乞はんが爲めに來れり。此に於て幕府の政治機關は自ら司法部に重きを置くの必要を見るに至りて、これに多くの力を用ゐしかば、司法事務（律令制定の當時にありては司法事務中就中刑事の發達せるを見しが此時に於ては民事の發達著しかりしを見て知るべし）は次第に發達し、遂に貞永式目の制定に至りて其傾向が遂に文學上に顯はるゝに至りしものなり。即ち鎌倉幕府が司法事務を以て農民の安寧と進歩を保持せんとせしは自動的に出でたるものにあらずして、實に受動的なりしなり。換言すれば鎌倉幕府は當時の農民の狀態と意向とに逼られて斯くの如き法律を制定するに至りしものなり。故にこれ當時の農民が暗々裡に渴望せし所なりしが故に、式目の出でて所定の要領の續々實施せらるゝや、地方の人民は聲を同じうしてこれを謳歌せしものなり。

故に貞永式目は能く當時の時勢に適應し且つ司法の正確を期せし點に於ては間然する所なかりしと雖も、これ

を以てのみ長く安んずべきにあらざりき。必ずや他日一歩を進めて消極より積極に移り小政策より大政策に移り農業を進歩せしめて生産を興すの道を講ぜざるべからざりき。是れ實に必至の勢にして獨逸に於てフレデリック大王の農業に對する同情ある施設によりて農民が寺院豪族等の酷薄なる羈絆より逸脫して隷屬者（Knechtschaft）の境遇より普通農民となりしより、近代に至りて地頭制度（Grundherrlichkeitverfassung）又解け、國家の農民に對する施設は漸く消極より積極に移り或は金融機關、組合、農會、交通機關、農事教育等の設備續々として起り初めて、根柢より農業の面目を一新し、米國英國等と相駢馳して毫も劣る所なきに至れるが如きは、其の好例と云はざるべからず。鎌倉幕府も亦貞永元年所定の一條のみによりては到底完全ならざるを見たりしかば、爾後其用ある每に式條を追加しこれを式目追加と稱して貞永式目を補足せんとせり。然れども泰時時賴以下の執權にして能く泰時の如く時勢の要求を洞察し得るものなく、依然として司法を以て其の本領となし農民等が積極的方針を渴望せるにも係はらず毫も悟る所なかりしかば法令愈〻出でて愈〻効を見る事尠なく加之儀文漸く整ひて法を執るの人其當を得ず尤も公平無私を要する司法事務の間に不潔の分子加はりしかば地方の制度鎌倉幕府初代と同一なる形勢を追へるに過ぎず。農業の進歩も農民の發達も舊によりて變ずる事なく沈滯せる民心の中には漸く睽反の氣を起し鎌倉幕府以外に一層農民を高地位に導き得る或ものを求めて遂に之れを奈何ともする事能はざるに至れり。

第四章　附　言

以上論述し來れる所は僅に鎌倉幕府時代農政の一班に過ぎず。これを以て玆に結論を搆出するは餘りに輕率なる所行なり。論者は唯當時に行はれたる農政上の事實を可成忠實に記述して他日完成の料に供せんとしたるのみ。

凡そ農史を研究するの要は是によりて現今若くは將來に施行せらる可き農政問題の那邊にあり又如何に解釋すべきかを知るにあり。是を知らんと欲すれば單に一時代の農史を研究したるのみを以て決して滿足す可きにあらず。又單に一國の農史を研究したるのみにて決して滿足す可きにあらず。論者不肖と雖も必ずや此意を服膺せん。

論者は唯如上の研究によりて日本の農業は太古以來鎌倉幕府に至るまでに於て姑息なる進歩をなせりと云ふの誤謬に陷らざる可きを信ぜり。蓋し大化の革新は其主義に於て農業上の大改革なりしは勿論なりしも、惜哉其主義に適ふ可き施設の宜しきを得ざりしが爲めに未だ全く行はれざるに既に中道に廢するの悲運に陷れり。鎌倉幕府は其實行に於て着々其歩武を進め聊かも浮華空飾の事なく爲す所として殆ど果さゞるなかりしと雖も不幸にして當時の施設には所謂百年千年の大計と稱す可きものなく、唯消極の手段によりて農業の位置を可成固くし高くせんとしたるのみ。故に其の最も重きを置きし所は栽培治定の整備にあり人民に對し公平にして仁惠ある處置は國民の安寧を繫ぐ一の鐵鎖なりき。故に治定の法亂れて民勢亦亂れ農業從つて衰頽し破綻しぬ。而して德川氏の極めて消極的なる極めて守成的なる政治も亦農業に偉大なる改革を與へ得たりとは思惟する能はずとすれば、日本の農業には太古以來未だ一回だも其方向を明かに回轉せるが如き改革行はれざるなり。宜なり。現今の農民が所謂水呑百姓として社會の下層に沈淪せしめられ、アイルランドの農民等と比較せらるゝの悲境にある事や。農業の局に當るものは宜しく本邦農業本來の性質に着眼し深く現今の農業の狀態の由て來る所を考察し先見と實行とを併せ有する根本的改革を斷行するにあらずんば、到底今日の農業の積弊を救ひ得る事能はずして、復た大化の跡、鎌倉幕府の轍を踏むにあるなからんか。

鎌倉幕府の農政を攻究するに當り、結末に來りて感じ得たる所を記して卷尾に附す。

（一九〇一年七月、札幌農學校卒業論文）

獨旅短信

此書を生が宛名人壬生馬君に獻す　　轍鮒生

特信　明治三十六年五月二十七日 於麹町區自邸

明治三十四年十二月一日兵隊と相成候處、不幸にして其中旬より痔疾に犯され、衞戍病院の客と相成候が、年立歸る三十五年一月十四日フト思立ち候事有之、病の聊か癒えたるを幸に伊豆沿岸の膝栗毛を試み申候。日々の見聞を覺束なくも鉛筆にて端書に認め、旅間少暇を得る毎に投じ候が積りて十一信に及び申候。固より旅の事なれば耻の書き捨て、其儘紙屑籠に蟄居せしむ可き者には御座候得共、取り出して一覽を與ふるに、さすが其の當時の回想の料(れう)とも相成り、出來そこなひし兒の兎角に可愛ゆき道理をも酌(く)み知られて、親馬鹿の詈(そしり)を此の冊子に殘さんとまでの決心を致し候。匆々。

轍鮒生

第一信　十四日午前十一時 小田原人車鐵道に乘らんとして

朝稍〻暗きに家を出で恙(つゝが)なく七時二十分の汽車に乘申候。切符口にて久慈氏の家族に遇ひ申候。大森を出づる時雲表を纒へる富士の、旭光に醉ひて紅なるを見、入營の後四日目と覺え申候初めて西方の門を出で〻青山墓地に引率されし時、正しく彼方に仰ぎて「自由」「莊嚴」の現示なりとの感最深かりし其の儘の姿を想起してなつかしく候ひき。地圖を披きつ〻國府津に着せるを忘れ驚き降申候。酒匂邊の景色中々美しく冬枯の疎林箱根諸山の

赭色、富士の淡紫色、何れも面白き配合にて候ひき。小田原の町は祭禮に賑ひ居り申候。汽車中にて讀みしフォックス傳より會心の一語を左に、

「若輩は徒事に趨（はし）り老輩は地に赴くを見るならん」。匆々。

第二信　十四日午後一時半　於吉濱

人車鐵道に搖られ〳〵て唯今漸く當所に着仕候。横に臥したるが如き細長き幾戸の漁屋、打寄する浪の音、曾遊の儘をなつかしく御座候。來路の景物中々に面白き所多く候得共、人車の野蠻的にして小規模なるには驚き申候。小田原發車早々あぶなく一人の老人をひき殺す所にて御座候ひき。途次早川を渡候。阿佛尼の所謂「鹽木流るゝ」と詠じ候處に御座候得共、今は小なる溝の如くに御座候。酒匂川を渡る時多くの木材を流しつゝあるを見申候、早川を出でゝ暫く、石の採掘を致居申候、所謂伊豆の根府川石に御座候べし。石橋にて佐奈田の神社なる標石を見申候、當年の勇者が憤死の跡眼に見ゆる樣に御座候。

第三信　十四日午後二時半　於石橋

石橋は頼朝の起りて敗れし所、是を見ても彼の最初の事業が割合に小規模なりしを知る事に御座候。彼が日本總追捕使の野心を起せしは遙かに後年の事と存申候。「英雄起所山河好」とは申候得共此近傍の地形は眞に憐れなる者に御座候。然し海上遙か眞鶴崎を望み顧みて東の方遠く總房の青螺に眼を轉ずる時は、彼が輕舟に乘じ、僅

僅十二人と共に逃れし有樣思ひ浮べられて感慨深く候。土肥實平の戲曲的傳說さへ念頭に湧き申候。田家の垣根など冬枯れたる枝に大根を懸けて乾したるは一段の野趣に御座候。蜜柑樹に果の殘居候は綺麗に御座候。麥も二三寸靑み居申候。是から徒步して熱海に入るべく候、日稍〻かたむき、風冷かに候。程近き初島の影少しおぼろ。匆々。

第四信　十四日午後五時十五分前
於熱海郵便局

二時間と十五分にて五哩半の道を步み申候。脛の前方多少疲勞し候得共、さしたる事は無之、痔の方も先づ大丈夫らしく候間、御休神願上候、吉濱にて人車に捨てられ、（寧是を捨て）悠々然たる獨旅中々に面白く、景色よき所に來れば立止りて脚下千尺の所より起り來る濤聲に耳を傾け申候。途中二度萬歲に遇ひ、（山里は萬歲遲し梅の花の句思出され候）門松を積上げてこれに火を點じ小兒等共周圍にありて已等に一歲を齎したる記念物を懽笑しつゝ眺むるを屢〻見申候。伊豆山に增田君の去年ありし事を思ひ、伊豆山神社に父上と獵に來りし昔を思ひ、伊豆山と熱海との間に於て學習院の發火演習ありし時、斥候長として斷崖より落ちし失策を思出し申候。熱海には燈ともり居申候。匆々。

第五信　十五日午後三時二十分
於海運丸上

大分永らく御無沙汰申上候、昨夜郵便局を辭し野村氏を訪ひし時の一同の驚きは十分御推察可被下候。直に二

階に招ぜられ種々おもてなしに與り申候。萬千さん、驥さん、濤さん、百合さん皆御元氣、種々懇話の末阪口屋の湯に入り、いつぞや池の中に陥りし當時を想起して失笑禁じ難く、おかひこぐるみにて就寢仕候。御土産も確かに差上申候、しまちやんの御手紙も亦。

昨日の紀行中申漏したる所を可補申候。伊豆山の少し手前にて三人の少女が蜜柑採集の歸りなりしを追越申候。其すれちがひの時彼等が申候言葉は「わたし等其處になつてる蜜柑一つ取り得ないよ、おツかなくツて」と云ふにて候ひき。

江ノ浦の少し先きにある見事なる松樹は、嘗て父上が白鷹をうち給ひしにて記憶新たなるものに候。

熱海より出し候畫はがき二枚、吉濱熱海間の實況に御座候。匆々。

第六信　十五日午後四時十分前 於海運丸上

今日は朝早く畫はがきを描き、湯に入り濤さん百合さんと共に梅園に至申候、老母様着よとて生の眼には役者でも着相な、立派な着物被下、如何に辭退しても効能なく泣き度なり申候。梅園にて鬼ごつこ致候。梅は四分通の開き方。

十二時野村氏を辭し候、小兒等生の去るをいやがりこまり申候。實に可愛ゆく候。

魚見崎に續く山脈を登るに氣息の切れる事夥しく、脈搏は百二十五六に至申候。漸くにして上多賀まで辿り着き候、濱に瀕せる村落なれども漁業は致不居候由、大根の名所なりと聞及申候。茲にて畫を一枚致候。

二時十分前網代に着申候。足の疲勞と明日の困難とを思ひめぐらし、脆くも船と決心致して海運丸に乘候次第

に御座候。今日雲なきにあらざれども先づ天氣、風は少しあり候。家の軒にアイヌが用ゐる祭木樣のものを認め申候。東海道に跋扈し後大和民族の爲めに追はれたるアイヌが此に至りて其風俗を遺せるにあらざるか。匆々。

第七信　十五日午後八時半 於伊東ます屋

四時半船より上りて伊東の地を踏み申候、此處は地下六尺を掘候得者何處にも溫泉を見出申候由にて、先天的の溫泉地と申すべきか。南、西、北の三面には東雲山、小川山、古城山等の諸山天を摩して聳え、東面は海に濱して、近く初島の積翠を望み得可く候、地勢は熱海の如く跼蹐せずして餘程廣く水田など澤山見受け申候。繁華熱海には及ばず候得共、風俗の痛く腐敗せるは直ちに看取する事を得申候、所在に淫聲を耳にし候。足を引ずりて山田屋と申すに至候處、物の見事にはねつけられ、已むなく鞄をぶらつかせて水田の模樣など見、はねつけられし御蔭にて地勢も少しは餘計に見申候。點燈の頃漸く此宿に入る事を得入浴し夕食して一先づ安心仕候。

此地最賑ふは七八月の交の由、海水浴の便あればに候べし、浴客は書生多き由に御座候。

先便賴朝の事申上置候。伊豆は到底賴朝を論ずべき所に御座候、序に今少し可申上候。

彼が伊豆に崛起せし節は天下をどうするかうすると云ふが如き野心は勿論無之、庶幾くは關東の一地方に割據して獨立の豪傑たらんと思ひ立ち候位のものと存ぜられ候。

第八信　十五日午後九時五分 於伊東ます屋

賴朝の特長中の特長は殆ど怯懦に近からんとする沈重に御座候。此の如き賴朝が淸盛尙ほ生存し平氏の權は衰へたりとも其威は尙ほ天下を震駭するに堪へたる當時に於て、曠世の望は殆ど出でがたかりしやに被存候。畢竟彼の特色は彼自身を誤解せるにて其の石橋山に敗れ海路遙々安房に入るや地方の豪族長く亂に渴したる者源氏の長者を見出でたる機會を利せんとして翕然として集り來りしは是れ寧ろ彼に取りて僥倖とや可申候。若し東國に亂を望むの氣なくば賴朝の首或は淸盛の墓前にありたるべく候。さりながら賴朝は自ら誤解せる程小なる人物には無御座候、彼は府を鎌倉に創きし迄彼を利用せんとしたる幾多の豪族に手痛き沈重の態度を示し申候。是れ彼が東方の民心を寧ろ豪傑の心を收め得たる第一因に御座候。彼は不知不識此經驗を得て自ら誤解せるを悟り、其野望は急に膨大し、當時にありては一家の領たるに適せず、天下の幕府たるに適せる鎌倉を其根據に選び申候次第かと存候。

賴朝は沈重を以て起り候、然し彼は其怯懦に近き沈重を以て其家を絕滅せしめ候。秀吉は放膽を以て起り候、而して其亂雜に近き放膽を以て其家を絕滅せしめ候。反對の性質に對する同一の結果興味深くは候はずや。

第九信　十五日午後九時二十五分 於伊東ます屋

遮莫賴朝の沈重は歷史上の大貢獻には無御座候、彼の大貢獻は泰時時賴等の平民的政治家を有する北條氏をして天下を節度せしめしに歸し可申候。如何にしても平氏如き者の支配者たる日本には北條氏は起り難く候。賴朝が東國に據り公卿等の專有なりし政權を悉く其手に收め是をソツクリ北條氏に渡せるが故に日本の平民は始めて人間らしく相成りしにて候。これは賴朝の期待せし所にては勿論可無之候得共、結果は爾く相成申候。生は玆

に至て深厚なる攝理の存在を認めずんばあらず候。

以上は思ひ出したる儘の雜記、當るも八卦當らぬも八卦に御座候。伊豆に來りて最も目に立つ現象は其植物が半熱帶に屬すべき者に傾ける事に御座候。冬季搖落せずして其葉の厚き若くは羊齒類の多き其證に御座候。つい近くには富士山ありて寒帶の植物を生ぜしめ、茲には既に溫帶以上の植物を生ずるは面白き事にて植物學者は富士より伊豆を經七島を經小笠原島に遊ぶ事によりて少からざる分類學上の知識を得可くやと存申候。

火山石層の見事なる標本は網代より船にて伊東に向ふ時幾干も來らざる海岸の斷崖に見られ申候、凡て此國の土に青きあり赤きあり白きあるは火山質の證にや。匆々。

第十信　十六日午後十二時半　於平岩窪一茶屋

今朝洗面なしつゝありしに不圖湯殿にて岩倉具明に出遇申候、家從と犬とを御供に逗留せる由にて、檐下には兎が三羽さがつて居申候。

今日は亦珍しき計りの快晴と相成り勇氣を百倍して桝屋を出申候、道は小川澤山と古城山の峽なる柏峠に通居候にて羊腸たる小逕登るに從て人跡を絕ち遂に閑々たる太古の境に入申候、山は凡て赭禿（しやとく）處々松樹のうづくまるが如く青きを見、下には溪河潺湲（せんくわん）小瀑の水を集めて海に朝するの聲を聞き申候、アヲヂにや候べきチと云ふ銳き聲して枯叢の間に囀り居候が殊に山色にふさはしく候。汗を拭き〳〵（野村氏より惠與相成候蜜柑途中にて兒童に遺し候が殘りてありし二つを命とありがたがりて）上る事一時間峠の絕頂にトンネルありトンネルを出づれば頹然たる白屋あり。茲は實に伊豆の脊髓を爲せる分水嶺にてこれよりの水は凡て余と共に西方に流れ下るにて候。

此邊の軒には凡て「村內規約節儉」との札有之候質朴思ひやられ候。
八幡にて富士の頭部のみを見、リップ・ヴアン・ウヰンクルでも住み相な閑古なる村を經て此些々たる村店に入り申候。頰赤くして健氣なる老婆あり、生の爲めに油揚を燒きて茶漬を調じ吳申候、伊東より玆まで五時間の道程の由、生は三時間（此處に至る迄半分も不休）にて來候事稍ゝ昨日の弱點を補得可申や。匆々。

第十一信　十六日午後九時　於修善寺菊屋

平岩窪なる茶店の老婆より親切に道を敎へられ、十一時半同所を發し狩野川の一支流に沿うて、其河が形成したる山間の平原を傳ひ申候、河の兩岸には茅屋參差して鬱樹其間に交り西北には例の赭禿の山脈の間に時々富嶽の美しき姿を眺め十步に二十步に變り行く飽かざる眺めに疲勞を忘れて立野に出で淸冽例なき一道の河を橫り、再短く緩き山道を上下致候得ば、眼下に修善寺村を望み申候。抑も伊豆國は地形よく伊太利半島に似たりと申すべきか、山脈は東に偏して、國背を走り、東方は風光優美ならざる代りにサブライムに、西方はサブライムならざる代りに優美なり。一概には申しがたく候得共人の容貌東の方都びて美しく候共原因は思ひ當らず候。東方より西方に移れば北海道より內地に移りし樣に御座候。
宿に着き候て直ちに修禪寺と賴家の墓とを訪ひ申候。前者は弘法大師の開基の由、彼のエネルギーにはいつもながら驚かれ候次第、賴家の墓は元祿年中に建てられたる者にして、これによりて當時を想像せんことは出來不申候。鎌倉の壽福寺にも尼御前の墓と共に賴家のが有之候樣心覺致居候が何れが眞にや。宿に歸申候得ば湯地氏の家族散步より歸り來られ候皆々元氣に候。再び信曆氏と範賴の墓を訪ひ申候これは亦見るに餘りに憐れに御座

候。尙申上度事は山々御座候得共端書なく相成申候間筆を止め候。前便申上候アイヌの遺物ならんとの祭具は鹿兒島にも有之ケズリカケと申候由湯地氏申され候。匆々。

別信　十八日夜　於麻布兵營

かくて十七日には韮山に父上が舊師なりし江川氏の跡を弔ひ、六百年來の建築、日本に始めて造られし反射爐を見て後歸途に就かんと、夢さへ樂しく寢に就き申候處、夜一時軍隊より歸れとの電報に接し、眼をまはさぬ計りに舞もどり申候、かくて再び兵隊と相成候。匆々。

（明治三十六年五月二十七日淨寫）

北歐文學が與ふる教訓　（未定稿）

第一章　藝術は教訓を與へ得るや

第一節　花

自然科學者は、其の精緻なる研究の結果を綜合して謂ふ、進化學の原理も、生理學の法則も、女性が男性に比して優位を占むるを否定する能はず。女性は自然の寵兒なりき、自然は是に賦與するに、其の種屬が有し得る比較的高級の形態と機態とを以てせり。此の不均衡は男性が女性に對する反逆的活動の源頭となれり。女性が自然の懷にありて甘夢を貪りつゝある間に、男性は木を伐り土を穿ち、獸を狩り魚を漁り、日によりて骨を太くし、雪によりて毛を澤かにし、遂に女性を強ひて、其の伴侶其の儕輩たらしめたりと。

實に先づ智慧を求めしはイヴなりき、腕と額とに汗せしはアダムなりき。

而して見よ、今もアダムの末裔野に立てり。彼等は彼を農夫と呼ぶ。地の上に活けるものゝ中、自然に對して最初の反逆を企て、今も抗爭苦闘を續けつゝあるものは彼なり。

假りの一株の林檎樹を取りて、農夫がこれに加ふる殘虐を見よ。

春神其の淺綠の毛氈に坐し、新しき影を地に創り、淡紅融くるが如き稚蕾を枝頭に揭ぐれば、農夫過たず來り

て樹下に立つ。其の右手には剪刀を有てり。

破蕾の時に至れば、彼屢ゝ遠きを望みて、雲に風の色あるを妬み、花開けば、空に雨の氣あるを惡む。これ花を思ふが故にはあらず、果實を思へばなり。果實を得んが爲めには、毒粉ある蝶、刺針ある蜂皆彼の友なり。彼は蜂蝶を誘ふが爲めの故に、花瓣の紅なるを尤めず。しかも一たび其の花餘りに大にして餘りに美ならんか、彼が殘虐なる手に怠慢はあらざるなり。果實の値を害へばなり。

雄蕋花粉を散じて枝頭を辭する頃となれば、彼は再び空を仰がず、雲を望まず、逕に落花を踏みて、麥の延びたるに培ふべく、隴畝の彼方に去り行くなり。

林檎の實の稍杏の程なる頃より、彼は再び風と雨とに心忙はしかるべし。暇ある每に木蔭に倚り立ち、葉裏より透し視て打ち笑むは、夏の日にきび／＼と輝ける果實の多ければなり。奴隷商が鎖に繫がれし黑兒の、恙なく長ずるを樂み見る目指の鋭きに似たらずや。

梨の瓣にあらず、杏の蕋にあらず、櫻の蕚にあらず、林檎の花は林檎の花なり。根の地汁を吸ひ始めたるを逸早く感ずる者は彼女、傷痍を癒すべく樹脂の流れ出づるを認むる者は彼女、東山の晴霞漸く濃くして、結霜の薄れ行くを樂む者は彼女、三宿の夜每に北にかたぶきて、遂に現はれずなるを喜ぶ者は彼女、笑まんとする春の唇に紅を點ずる者は彼女、笑ひし春の皎齒となるものは彼女、鍵なり、胞なり、前額なり、東明なり。

されどこれ農夫と何の係はりあらんや。再び我をして云はしめよ、農夫の求むる者は果實なり。

原は黃に、山紅らみ、物の影紫となる時、果園の隅に山の如く積み集めらるゝは、嬰兒の頰の如き林檎なり。一部は市に出で、一部は窖室に入り、一部は林檎酒となり、最後の一部は羊と空の鳥とこれを喰ふ。農夫は暫く自然との苦鬪を休め、妻子と爐火の紅きに親む。かくて彼の夢に入るは、夢にふさはしき林檎の花にあらず、嬰

兒の頬の如き其の實なり。
此の如くして蕾によりて始まりたる一期の歴史は終る。
歴史の一期も此の如くして終るなり。

第二節　藝術は教訓を與へ得るや

華を拈じて微笑せし人猶ほあり、迦葉と農夫とは遂に同情の人たるを得ざるか。かの人生に眞率誠實なりし中歐の詩人をして、藝術は遊戯のみと云はしめたる哲學は、一點批判の餘地なき完全の眞理なりや。

トルストイの所謂懶惰なる少數者の友なる藝術家は即ち顰蹙して曰はん、此の如く論ぜんとするは、これ一般倫理學派者流が据ゑたる窠臼を襲ふに過ぎず。藝術屈辱の時代や久しかりき。始むるに宗教の奴隸たるを以てし、倫理道徳主義の偏狹なる羈絆を被り、哲學的形式の冷刻なる縲紲に惱み、遂には藝術自らが創設したる殺命の規矩に苦み、今に迨びて尚ほ殘孽の抜き難きものあるは何ぞや。何ぞや、曰く、獨歩自立の資あるものを屈壓するの結果のみ。偏頗なる同情を我に強ひて、普遍の眼をふさぎ、徹底の肘を掣し、想像の翼を撓め、創成の力を制き、尚且つ其の制作の完全を望まんとするに到つては、自ら云ふ所を知らざるの責も亦大なりと云はざる可らず。テムペストの主人公をして萬能神祕の靈書を海中に投ぜしむるを致せし、シエクスピヤ晩年の時勢は、サボナ・ローラを火に投ぜし時勢に勝りて呪はるべきなり。人は藝術を求むる所以のものを知らず。信仰を得んとするものは教壇に到れ、智慧を得んとする者は科學に到れ、美に醉はんとする者は自然に到れ、獨り唯藝術を味はんとするものは藝術の壇前に立て、他の一切の渴望は我が醫し得る所にあらずと。

實に花は農夫の爲めに開かず、蜂蝶の爲めに開かず、將た果實の爲めにも開かず、花は開かざる可らざるが故

に開き、花自らの爲めに開くなる可し。花とならずんば花の心を知る事能はず、其の樂しみと悲しみとは花自らだに知らざる計り、幽かにして推し難きものなる可し。さるを、玆に農夫あり。林檎の花を指し、此の花わが爲めに開き、わが爲めに香ひ、わが爲めに散る、而してわが爲めにのみなりと云はゞ、これを瀆聖の惡語となすに於て、我亦かの一派の藝術家に後るゝ者にあらず。我はわが自由と獨立とを渴望する故に、他の自由と獨立とに絕對の尊敬を捧ぐ。其の形而の上下を問ふべきにあらざるなり。我は藝術の獨立を主張す、藝術獨立の可能性を信ず。獨立せる藝術のみが、始めて人生に貢獻し得べきをも信ず。約言すれば、我は藝術卽藝術主義の全體を信ず。

されど、わが彼の一派の藝術家に問はんとするは此の點にあらず。藝術は、獨立せる藝術は、果して敎訓を與へ得ざるや、これなり。

林檎の花の開落するや――花の見地に立たば――花自身の爲めに外ならざる可し。されど、彼女は徹頭徹尾自然の感化の下にあり、又彼女は徹頭徹尾自然の感化の下にある事を忘れざるなり。農夫一び其の束縛を忽諸にせんか、彼女は猛然として昔ありし自然の姿に歸り、其の產む所の果實肉部を減少し、核子は生產力を增大すべし。春の光によるにあらざれば彼女の紅瓣は綻びず、春の風によるにあらざれば彼女の黃粉は飛ばず、夏の氣によりてのみ彼女の雄蘂は謝し、秋の日によりてのみ彼女の子實は熟す。林檎の花の開落するや洵に此の如し。彼女を絕對的に左右し得るもの、自然を除きて他にある事なし、一つだにある事なし。大なるかな、其の不羈獨往の姿。

嬰兒の頰の如き林檎に心奪はれたる農夫も、此の一大事を看過し去る事能はざるなり。林檎の花の開く時、彼は嘗て世に活きたる凡ての懷疑者の頭腦を以てするとも、春の來れるを拒み能はざるなり。花は過たず農夫に冬の逝けるを敎ふ。

教訓を與へ得ざる藝術家をして、再び藝術即藝術主義の神聖を高叫するの驕慢を敢てせしむる事勿れ。寧ろ彼等をして退いて花に至り、花が自然の要求に對する態度の如何に眞率なるかを再考三思せしめよ。自然と人生とに忠實なる藝術にして、人生に貢獻し得る所唯快感のみと云はんは、自然と人生とに不忠實なる藝術にして、人生に貢獻し得る所唯教訓のみと云はんの矛盾に勝れる矛盾なり。希臘が波斯の壓迫を受けて國土存亡の危機を經たりし時、愛國の志士が暇なき干戈の隙に、眼を曝せしものはホーマーなりき。羅馬大帝國の光威が、默示の如く伊太利の青年に臨みし時、彼等が劍に先ちて塵拂ひしはダンテなりき。コッスートを牢獄に勵ませしはシェクスピヤなりき。クロポトキンを煩悶より救ひしはゲーテなりき。暫く汝の推理を捨てよ。事實は事實なり、否む可けんや。

藝術の獨立を主張す、甚だ可なり。しかも彼のこれを主張する藝術家に、果して敢然として眞理と相面して逡巡がざる邁往の態度ありや。彼等は國家の權威の前に道を避けざりしや、彼等は偶像の下に腰を折らざりしや、自家の弱點に衣着せざりしや、思潮回旋の先驅となりしや。彼等の筆は彼等が眞に感受せし所のものを乘せて走りしや。彼等の低き讀者に見ゆる前、彼等の熱涙によりて濕ひしや。

我は日本現時の藝術家が首尾相率ゐて此の如しと云ふの匆卒なるを信ずるに努めん。されど請ふ、公衆が藝術なるものを解釋する態度に見よ。懶惰無賴なる若干青年男女を除き、藝術の神聖を狂呼する槃大なる藝術家に耳を假すもの果して幾人かありや。彼等は再び狂呼して、これ藝術の罪にあらず、公衆が盲して聾せるの罪なりと云はん。或は然らん、或は然らざらん。されど、我は我が藝術家が果して公衆に向つて此の語を爲し得るの實力ありや否やを疑ふを禁ずる能はざる者なり。善き藝術とは、公衆が有せざる超自然的感情を表現する者を稱するにはあらずして、彼等が幾度か感受して親炙せる事深きにも係はらず、嘗て適當なる形式に嵌入し得ざりし感情

を、明確に表現する者を稱するなりとは、トルストイが藝術の眞價を論じたる結語なり。換言すれば、藝術は一個の忠實なる鑛夫の如し。黄金白銀共に地下暗黑裡にありて呻吟す。金は金自らを知らんとし、銀は銀自らを知らんとすればなり。鑛夫卽ち勞役してこれを地外に致す。金は始めて金の語を語り、銀は始めて銀の歌を謠ふ。金と銀と此の鑛夫に對して無感無識なる事を得んや。眞正なる藝術の特質此の如くにして、公衆より攻撃をも感謝をも喚起し得ずと云ふを得るか。藝術家が曖昧なる自家庇護の臆說に隱れて、其の責を免れんとするの陋を休めざれば、斯の事の未來や知るべきのみ。

これを成すの道如何。一事あり。若しこれを缺かば、凡ての他の一切も遂に半個の藝術家を造る事能はざる可し。一事とは何ぞや、鋭敏電火の如き感觸の力これなり。我は某博士の如く、五外國語を究めざれば藝術家たる能はずと云ふ事能はず。バンヤンとバーンズとホヰットマンとを讀める者は、直ちに此の說の方便的なるを知ればなり。我は亦某々の如く、深く國民個性に薰染するにあらざれば藝術家たる能はずと云ふ事能はず。より大なる藝術のより世界的たる事實を知るものは、直ちに其の說の矛盾を認め得ればなり。而して唯一事藝術家に缺く可からざる者は大なる感觸の力なり。少くとも彼の心臟は、人生其の者の脈と等しく相搏たざる可らず。彼の頭腦は世界に於ける最大最新の頭腦が考ふると同じき態度もて考へざる可からず。哲學が一切の科學的硏究に共通せる結果の上に築く如く、藝術は自然と人生の普遍なる基礎の上に立たざる可らず。彼の鋭敏なる感觸が一度變じて同情となる時、天の權威も、地の脅迫も、積世の傳說も、現代の習俗も、これを動かすに於て寸毫の力あらざるに至りて、藝術家の藝術家たる所以卽ち完きに庶幾し。彼と人生とは胎兒の母に於けるが如し。其の連鎖は生血を見る事によりてのみ絕つを得べし。彼と自然とは潮の月に於けるが如し。海の脈搏は月の毀たるゝ時に止む。ホヰットマン嘗て自己を觀じて歌へる長詩の結末に叫んで曰く、

Camerads! this is no book;
Who touches this, touches a man;
(Is it night? Are we here alone?)
It is I you hold, and who holds you,
I spring from the pages into your arms—decease calls me forth!

(Song of Parting.)

嗚呼藝術家克く此の如くにして、其の生める藝術獨り生命なきの理あらんや。其の藝術生命ありて、他の生命と接觸し感應せざるの理あらんや。他の生命と接觸し感應してこれに何者をか教へ得ざるの理あらんや。マッジニーの所謂「實働する叫喚（crying deed）」は、即ち藝術家が人生より攝取し、人生に貢獻し、人生を誘掖すべき唯一最高の手段ならざる可らず。藝術家とは、目的なき宇宙を考ふる人にあらず、目的ある世界を夢みる人なり。

藝術は、眞正なる藝術は、然り眞正なる藝術のみ人生に教訓を與へ得るなり。

我は藝術家に求むる所此の如く嚴なると共に、亦讀者に向つて數言を費やすの要を感ず。我等社會の多數はかの農夫の如し。我等が期待の大部を求むれば、即ち實質的生産なり。我等が求むる所は思想にあらずして實行なり、推理にあらずして定義なり、倫理にあらずして道徳なり、敎理にあらずして信仰なり、筆にあらずして鐵槌なり、絃にあらずして汽笛なり。而して我亦其の爾かあらざる可からざるを思ふ。

我は農夫が其の妻と子とを養はんが爲めに、自然と戰ひて木を伐り草を覆すに見て、堅實尊貴なる人生を感ぜざる能はず。我は農夫が非審美的なるを呪ふべき所以を知らず。寧ろ彼等が時に十德を着、床屋の店頭に會して、俳諧に時間を浪費するを悲しむ者なり。されど若し茲に林檎の花の白日の下に開けるを見て、春の來れるを拒む

の農夫ありとせば、我は彼を指して愚かなる農夫と云ふの外を知らず。彼は事實を無みするの不遜によりて、彼が翹望しつゝある果實の成熟に、適當の所置を與ふるを怠らんとするものなればなり。

農夫をして俳諧に勝りて妻子を好愛せしめよ、投機に勝りて實働を尊重せしめよ。林檎の花は此の如き農夫の庭に美しかるべきなり。

黃雲垂れて日落つる頃、スコットランドの山野を旅するの人、往々にして敝衣の農夫が、高きに立ち、帽を脫して斜陽と相對し、彼に尊貴なる勞働を與へ、其の家族に溫かきパンを與へたる、恒星の一日の離別を惜めるを見ると云へり。我は此の如き農夫あるを知りて、共處にバーンズの歌ありしを怪しまず。カーライルをして其の天分に於てシラーよりも高かりし（カーライルが一八二八、九月二十五日ゲーテに與へたる書）と驚嘆せしめたるバーンズは、此の如き農夫の間に生まれ、此の如き農夫によりて讀まるべかりしなり。

農夫よ、汝の實利的觀念これを許さずんば、汝は花に感謝の意なくして春を逝かしむるも可なり。唯花の開けりてふ否む可らざる事實を記せよ、而して花が與ふる教訓の凡てに、耳を假すべき用意と器度を有せよ。自然は到底無限的に汝よりも大なり。汝若し此の戒愼すべき事實に心せずば、汝の收穫は汝の妻子に餓を與へ、汝に悔恨を齎らすに已む可ければなり。

「我は詩人なり、されど作詩するが故に詩人なるにはあらず、人事に關する一切は亦我に關はるが故のみ」とビョルンソンは云へり。

第二章　如何にして北歐文學は產れしや

第一節　質疑すべき現代の文明

瑰偉莊嚴なる大流、忽如として危崖に懸り、倒まに落つる事百千丈、水巖陰に入りて色殊に藍く、激沫の勢鋭くして近づき易からず。歐洲史の大河に棹すの人、此の大瀑の頂に船を捨て、更に之を其の麓に艤し、溶々たる平野の間に出づるに及び、顧みて則ち曰く、上世と近世との間に暗黑の世あり、船を行る可からずと。

此の如くにして暗黑時代の眞相は、研究の方法なき一長時期として殘されたり。人誰か「暗黑時代」の語を耳にして、一種の悲感に撲たれざる。當時全世界を包含したりし羅馬大帝國の威嚴は頽然として地に落ち、入寇屢々東方より至りて生民塗炭の苦相尋ぎ、希臘の均衡ある文明、羅馬の壯偉なる制度は共に過去の一夢となり、智見は僧院の暗窖に隱れ、勞働は干戈の蠻行に費やされたるを思うては、落日孤杖、蕭條たる枯原に立ちて、風の空しく過ぐるを望むの嘆なからざらんや。

然れども此の慘憺たる假面の下に、同じく慘憺たる眞相の潛めるや然らざるやは容易に定め難き問題なり。近時歐洲の文明批評家にして、大膽にも此の暗黑なる迷宮に向ひ、其の研究の步武を進むるもの漸く多く、文明の意義に動搖を與ふべき事實の出で來らんとするを見て、我は眞理の現成の爲めに額手するを禁ずる能はざる者なり。

文明、文明とは餘りに耳慣れたる語ならずや。人此の語を聞けば則ち點頭して其の全意義を解せる者の如し。我等は所謂文明の床に生れ、文明の搖籃に眠り、文明の思想を學び、文明の業に老い、文明の墓に逝く。生れて人語を解するは卽ち文明を解するなり。されど是れ眞に文明を解せるが故か解せざるが故か。舊慣と稱する魔女あり。魅せられたるものゝ眼は彼女に於て絕對眞理の體現と見るの外を知らずと云へり。懼るべきにあらずや。

請ひ問ふ、今の歷史家と、倫理學者と、宗教家とが稱する文明と野蠻との區別は、果して錯誤なき解釋なりや、今日の所謂文明と稱せらるゝ者は果して人類進步の正路を拾ひつゝありや。誰かよく是れを知る。荆棘に終るべき岐路に入れるにあらずや。誰かよく是れを知る。昔者希臘の民、其の殿堂を「知らざる神」に獻げ、偶ゝポーロが透徹なる反問の犧牲となりぬ。今の人則ち「知らざる」文明の指導に盲從して、遂に誰の笑ふ所とならんとするや。我嘗てカーライルが如何に文明なる語を解釋せるかを知らんとして、少しく其の書を涉獵し、彼が多くの場合に於て、文明（civilization）なる語に代ふるに進步（progress）なる語を用ゐるを知り得たり。其の高邁奇矯の性、「文明」てふ尊貴なる語が曲解、誤解、惡解せられて、其の眞意義を沒了したるを憤れるに依る事なからんや。

假りに汝の健康を檢して、是れを汝の父若しくは祖父のそれと較べ見よ。博物館に入りて汝の父祖が用ゐたりてふ鐵甲を檢し見よ、汝は其處に戰慄すべき事實の潛在せるを認む可し。我等の健康は今日の所謂文明の進步と明確なる逆比例を爲して退步しつゝあり。千人の中一人病めば、則ち九百九十九人の眉顰む。千人の中千人等しく病めば、千人相會して健康の祝杯を擧げ以て大懽を極む。悉く病めるが故に悉く病みつゝあるに思ひ到らざるなり。今日の文明組織は民衆を拉して、日は一日よりも肉體的に不健康ならしめつゝあり。極端なる分業的組織、激甚なる衣食問題、盲目なる活動の福音、雜然たる都市の音響と色彩とは、文明の民をして擧げて神經衰弱を憂へしむるに十分なり。是れ今の所謂文明なる者を疑ふべき第一點なり。史家常に一國衰退の豫象を說明して、權力の集注、貧富の懸隔、其の度甚しきに至るにありと云へり。希臘季代の自由民と奴隸との境遇、羅馬末葉の治者と被治者との關係に着目せる者は、何人も其の眞理なるを拒む能はざる可し。獨り怪しむ、今の世第二十世紀の劈頭、歐洲に極端なる帝國主義發達し、米洲に大規模なる資本集注主義勃起し、其の非其の弊既に業に堪ふ可

らざる者あるにも拘はらず、人は其の非を口にしつゝ而も唯々として是れに盲附し、之れを擁取し、國家の强、自家の富を致すが爲めには、歴史が的確に與へつゝある殷鑑に對して全く風馬牛なるの一事なり。是れ今の所謂文明なる者を疑ふべき第二點なり。人若し市を過ぎりて、腐敗を防止すべき石炭酸の臭に遇はゞ、彼は首を回らして病院の近く立てるを見出だし得べし。倫理道德を講ずるの聲高く、法治裁決の義公かなるが故に、人は堯舜の世に住めりと思ふべきにあらず。人類學者が殆んど總ての社會狀態にある人類を研究し、所謂野蠻人と稱せらるゝ階級の中に、最も健全なる體軀と、堅固なる倫常と、整然たる規律とを有する者あるを認めたる事屢々なり。米國政府がアメリカ印度人の部落に巡査駐在所を設置せんとせし時、印度人は是れを斥け、「我等は我等自身の主なり。我等は他が權威もて我等に制裁と勵告とを與ふるを要せず」と云ひ、而して實際に於て、部落の自治は殆んど完全の度に達せる事實は——玆に殊に注意を要するは、野蠻人をして急轉直下の墮落を爲さしむる者は文明人其の者なる事なり——何等の痛棒を所謂文明人に値するぞ。人は此の事實を退けて云ふ、文明の進歩は良非善惡の差をして益々大ならしむ、是れ佛人の所謂「文明は警察制度の發達と共に發達」する者にして、唯一の治安策は法律の嚴正なる施行にありと。然れども思へ、眞正の文明は良非善惡の差をして益々大ならしめずば已まずと云へるは、如何なる前提の上に据ゑられたる結論ぞ。人は今日の文明が、益々個人的良心の威嚴を蹂躪し、單に法律的制裁の下に、姑息なる統治を續けつゝあるを見て、而も其の根蔕に矛盾あらざるやを問はんとせず。是れ今の所謂文明なるものを疑ふべき第三點なり。

消極的とは、今日の文明のアルフアにしてオメガなり。彼女は疵傷を醫するに巧みにして、身體を健康ならしむる事を知らず。彼女は富の分配に心を用ゐて、生產の根源を窮めんとせず。彼女は少數の安寧を計らんが爲めに多數の苦痛を意とするに暇あらず。彼女は個性的尊嚴の萎靡せるを救はんが爲めに、膏藥的の法律を以てす。

ジェームス・ヒントンをして「現社會の組織を顚覆すとは、倒立する三角塔を安定の位置に復するの謂なり」と叫ばしめたるも亦宜ならずや。若し從來の歴史を辿りて、人類に福祉を與へし事、今日に過ぐるの時紀(ジエネレーション)なくんば則ち已む、若し幸にして之あるを知らば、人類の一員として我等は何を爲すべきや。來るべき時紀の父母として我等は何を爲すべきや。耳ある者はそを北歐の一角に傾けよ。既存の文明がソドム、ゴモラの如くならん時近きにありとは云ふべからじ。されど誰か又其の遼遠なる未來にあるを言明して憚らざるを得る者ぞ。佛國革命の叫喚はルヰ第十五世が「未だし未だし」と云ひたる聲の反響に過ぎざりしなり。

所謂今日の文明が何の時に起源せるかを考察せる學者少からず。例へばエドワード・カーペンターが社會的階級が所有物の多寡によつて決定せられ、閥族政府（class government）の設立せられたる時となせる其の一なり。レウヰス・モルガンが文字の發見と共に記載的歴史及明文律の編纂せられし時にありとなせる其の二なり。エンゲルが商業的機能の發達せる時に重きを置けるが如き其の三なり。其の說固より區々にして歸一なく稍茫漠たるの嫌ひなきにあらずと雖も、試みに是れを綜合して過去の歴史に照準すれば、我等は末代の羅馬帝國に於て最も的確なる實例を發見し得可し。極端なる閥族政府と嚴整なる法律とは彼女の產なり。農業衰退して漸く步武を商業に讓りしも亦此の時紀にあり。嘗てボストンの一儒、途に伊太利の勞働者が流汗淋漓、鍬を秉つて手足の勞働に從へるを見、大息詩を賦して曰く、「嗚呼此の流離の勞働者、群を爲して南歐花多きの地を辭し、異鄕の土に立ちて日に勞營す。痛ましきかな。而して更に痛ましきかな、見よ彼等に古人の面影あり。シーザーの額(ひたひ)持てる彼はかゞみて石を拾ひつゝあり。ケトーの眼もてる彼は懶(ものう)げに眠りつゝあり。ヴァージルの頭持てる彼は怒馬をなだむるに困じつゝあり。シセロの唇持てる彼は惡罵を叫ぶの外を知らず。嗚呼、嗟夫、匆忙時は逝く。古羅馬の跡安(いづ)くにありや」と。何ぞ知らん、十五世紀の遠きに亡びたる大帝國の暗影依然として我等を蔽ひ、我等が其の遺民の

無爲を憐れむ間に、彼は我等の餘りに盲從的なる背頭を憐れみつゝあるを。

大帝國の暗影とは何ぞや、質疑すべき現代の文明とは何ぞや。我等はそを貎むるの前、極めて別種の文明を產したる暗黑時代の眞相を學ぶの要あるなり。

（歸朝後、札幌時代）

凡てのものは悉く壞れる

凡てのものは悉く壞れる。是が地球を支配する「運命」の下す宣告である。「凡てのものは悉く壞れる」、此單純な、低い抑揚もなにもない音調の上を、自分の生活はトレモロをなして流れ行くのである。

凡てのものは悉く壞れる。「凡てのもの」と云ふのは、實驗科學が假定する、或る不消不磨の物質をも含むか、或は形而上學が主張する、不變不滅の或る觀念の對象をも含むか、そんな事は自分は關知しない。又關知する限りでもない。科學者や、哲學者の取り扱つて居るものゝ中には、地球の存在する限りと云はず、永劫無窮に壞れずに殘るものがあるかも知れない。我等が今日、科學、哲學の存在を許す限り、其主張に敬意を拂ふのがあたりまへだとすれば、あるかもしれないと云ふ代りに、どうもあるらしいと云つて置く方が、いゝやうにも思はれるが、同時に如何に科學哲學の存在を許せばとて、必ずあると云ひ切つてしまふ事はどうしても出來ない事である以上、假定や、假說は、到底疑問の中にもてあつかはるべきもので、如何にもなまぬるい、果敢ないものである。地球の存在する限り、壞れずに殘るものがあるかも知れない。又ないかも知れない。此のあるとも判然せず、無いとも確定せぬ假定の上に、自分の生活、卽ち自分が、今日此所で、此個性の全能を以て享けつゝある此生活を、安じて託する事は試みても出來ない事である。假說は知識の寵兒ではあるが、生活の愛人とはなり得ぬ。生活は知識の媒介を以て、其寵兒なる假定を美しいものと見る事はあつても、血をすゝつて二世を契る程の執着は持つ事は出來ないのである。

自分の眼が見、耳が聞く處に於て、壞れずに續くものとしては何があらう。凡てのものは悉く壞れるのである。

發生と破壞の目まぐるしい連續、搖籃と墓とを索ぐあわたゞしい生活行爲、記憶と忘却との間にさまよふ泡のやうな名聞、頽れんがために高まる思潮の波、枯れてゆく淚、乾いてしまふ笑ひ、さう云ふものが自分の內郭と外郭とを取り圍んで居る。今更に驚いて不朽を摸索しても其處には何物もないのである。何故か知らないが、自分には不朽に向つてあへぐ Aspiration がある。それだから、不朽はあるものと云ふ樣に、身のまはりも顧みずに思ひなして來た。其思ひなしがふとした機會で破れた時、底の知れぬ斷崕は、すぐ端に立つて居る自身を見出してゾツとした。首を切られながら、頭の禿げるのを心配して居た人のやうな、滑稽な、皮肉な、而して慘酷な悔恨の心が、自分を恥ぢしめたり怒らしめたりせずにはやまなかつた。

自分は何一つ手に入つた專門と云ふ者を持つて居ない。執着力がない故かも知れない。頭が惡く、隨つて油が乘らない故かもしれない。充實と云ふ事の尊さを知らない故かもしれない。最も早道な、當世の處生法に暗い故かも知れない。生活が或る程度まで保障されて居ると云ふ心の姑息が、させる業かもしれない。然し自身では、以上の原因だけで專門家となれなかつたのではないと思つて居る。自分には專門家となるべき隨分多くの機會が與へられた。自然科學も、其宏大な影の一部分を自身の上に投げた。宗敎は一時自分にとつては生命其物であつた。自分は又歷史が與ふる哲學と云ふ樣な者に、興味を持つた事もある。然し今から過去を見ると自分は其內の何れにも執着が續いて居ない。殊に宗敎と別れた時の事を思へば、自分の生涯はあすこであぶなく切斷せられる處であつた、と云ふ感じを持たずには居られない。自分はこんなに何時迄も身の定まらないで居た事を恥づべき事だと思つて居た。一事に沒頭して他の萬事を他界の事でゞもある樣に、顧みない學者の態度を考へて見る度に、又一事業に熱中して、獅子の如く猛進する事業家の行路を思ふ度に、腑甲斐ない奴が玆に一人居ると自分の孤影を弔つた。

然し考へて見ると、そんな風に思ふのは、克己とか、自責とか云ふ大層な道義的の觀念が、先入的に自分の心を盲にして居たからだ。自分は、自分を鞭つて蔑む前に、も少し同情を持つて、自分と云ふものを眺めて見るべきであつたのだ。若し同情が、批評的態度の第一要件であるならば——而して自分はさうだと信ずるが——自己解剖に於ても、同情が必要であるべき筈ではないか、同情をもつて自己を見る、是れは自分にとつては小さな發見ではなかつた。儒教的道德にはぐくまれた自分にとつては、決して小さな發見ではなかつた。而して新たな眼を開いて、自己と其周圍とをながめ廻して見た。

物心を覺えるとすぐ、自分は外界の刺戟に對して反應した、と同時に反抗して居る。父母の教訓の中にも、小學校の教育の中にも、自分は反抗すべき何者をか見出して居た。不平があつた。不滿足があつた。中學にゆく年頃になつては、夫れが更に增進して行く斗りだつた。自分の眼の前には、五倫五常の整然たる倫理的概念が展べられて、事物の眞を發見するのに一番近道な、科學の基礎智識も敎へられた。人の守るべき道と知るべき道は嚙んでふくめられるやうに自分に傳へられた。

自分が若し人であるならば、どうしてこれに興味と尊敬とを持たずに居られやうか。假令腕白であつても、鼻垂らしであつても、人である以上は、人として一番大切な事は、食ふことでも寢ることでも、ちやんとやつて行つて居るのだから、それよりも更に大切な事は、當然深い注意をもつて迎へる筈であるのに、事實は全く反對であつた。

自分は其頃、そんなに鼻つたらしでもなく、腕白でもなく、寧ろ素直で、理の當然な事なら其まゝ受け入れる位の、少年であつた。又理解力も人後に落つる程遲鈍ではなかつた積りである。敎師が云ふ所は注意を拂つて聞いてさへ居れば、決して理解の出來ない事でもなく、又決して理窟に外れた事でもない、と云ふ丈けはよく判つ

で居た。唯自分にとつて、當惑を極めた事は、かくして受け入れた知識が、自分に何等の興味を與へない事であつた。こんな興味のないものでも、やがて一層進歩した修養をする時には、必要なものとなるであらうと云ふ、おぼろげな期待と、くだらない習慣的な惰力とによつて自分は中學時代の生活を續けて居たのである。

（年代不明、ノートより）

松蟲

有島安子

はしがき

故有島安子は神尾光臣の第二女にして明治二十二年六月十七日東京本郷區に生れ、軍職にある父に從ひて少時地方に出でゝ諸所に轉住し、後東京に移り住みて東京女學館に學び、明治三十九年卒業して更に同館專修科に入りしが、在學中、明治四十二年三月余に嫁して北海道札幌なる余が任地に赴き、六年間險惡なる北邊の氣候と戰ひ、知己少なき境遇に處して專心家政の事に從ひ他を顧みず、健康亦沮まるゝ所なりしが、大正三年九月突如肋膜肺炎に犯され、十一月醫師の勸誘に從ひ家を擧げて東京に歸り、爾後鎌倉平塚等にありて專心靜養に盡したるも、病勢漸く革り、五年八月二日朝靜かに世を去れり。越えて七日青山墓地内先考の墓側に葬られたり、行年二十有八。遺兒三人、行光、敏行、行三、五歲、四歲、三歲。

このさゝやかなる集は故人が病苦の間に書き殘したる斷簡の殆んど凡てにして、錄する所悉く私事に亙り人に示すべきものにあらざるに似たれど美醜共に蔽はず敢て上梓したり。是れ生前故人の爲めに眷顧を垂れ同情を寄せられし方々が閑餘一讀して、不幸短命なりし故人が幼稚ながら渾身の眞面目もて煩悶し、苦心し、正しからんとし、愛せんとしたる跡を看取し給はゞ、その眷顧その同情の或は徒爾にあらざりしを喜び給ふ事もあらんと思へばなり。故人はその夫と同じく才德悉く人後にありしも、性純眞にして人の愛に感ずるの情は激しかりき。この書を机下に呈する所以は聊か故人の謝意を幇けんとするにあるのみ。事に溺れて醜きを忘るゝものとなし給はずんば幸なり。

大正五年八月十八日秋風の日輕井澤の孤屋に籠りて　　有島武郎

病床雜記

○

今年は行光の凶年と見える。

お正月の元日早々發熱肺炎にかゝり、それからも足のおできとか百日咳とかと絶えずどこかに故障があつたけれどもいつも元氣よくして日ましに賢くなつて行くと祖父母様も云はれる。八月になつて鎌倉の家には神尾の父母　も行かれ治さんも來て、にぎやかになつたので、パヽは四五日御用事で上京せられたそのお留守に、一日三人で子供が遊んで居て行と敏とがおもちやの取り合ひをして、敏はまけたため、行の頭を提灯で打つて深さ骨膜に達し二針も縫つた程の怪我をさせたと云ふ。しかし勇敢な兄さんは泣きもせずなほ遊びを續けて居たと云ふ。そして醫師の許で手術を受ける間も、少しも泣かなかつたとて神尾のおぢいさまはいたく感心せられた。それから絲をぬく時も泣かなかつたが、その時逆睫毛が三本生へて居たといふのでそれもぬいて頂いた。夫れから上京したら蟲齒が出來て居たのに氣がつき、この頃は齒醫者に通つて居ると云ふ。別に痛がりもせず、エンヂンをかけられると僕の口の中を自動車が通つたよと云つたといふ。こんなに色々いやな眼にばかり逢つてゐながら、いつも勇ましく療治を受けてゐると思ふと可哀そうにもなるし又十倍も可愛ゆくなつて堪へられない。病床にあつてこうした可愛いゝ勇ましい様子や又色々賢い話を聞くと、ほんとうに抱き上げて可愛がつてやりたくなるが、いつ私は治れる事か。あゝ五つの小さなお兄さん、私の一番大事な子供よ。行坊の勇ましいのにくらべても私は氣長に養生して一日も早く全快し、三人の子供達と暮さねばならぬ。

病床一年の思出

春

かなしき夢のみを殘して我が病臥の一年は過ぎ去らんとす。

あはれ我が母君と脊の君とに伴はれこの城廓に入りにしはつい先頃のことの如くに思はるゝものを。げに月日は流るゝ水の如くに早きかな。思へばその日よ、七里ケ濱の海靑う、眞白き富士のうらゝと晴れて、松原わたる風の音さへ冬の眞中とは思ひ得ぬ暖かさなりしよ。

鎌倉の假住居出立たんと年老い給へる姑君に別れ言聞こえまゐらせんとせし折ははしたなくも涙流れて言葉さへ出でざりしを、姑君の子等の上露案じますな、武郎も我等もあればいかにともして育てん程に、養生をこそ專一としてとく歸り來ませと涙の中にも雄々しく云ひ給ひしを、心弱き我れはいらへも得せず、聲をのみて泣き居たるを、我が母上の傍へより共に涙流し給へるに一入悲しうなりつ。外には生馬の君の早や行き給ふ時なりと高く呼び給ふに皆立ち上りたり。

市の端れにて我れを送らんと行光、敏行、曉ちやんは來りぬ。元日の朝まだきよりにはかに發熱して肺炎に犯され病床に暮せし行光のいまだ足立たで婢女の脊に負はれて居たるもかなしかりき。行三の初誕生二十日ばかり過ぎてやう〳〵一足二足獨り歩きする愛らしき盛りとなれるは來らざりき。後にて聞けば行く我れの幼きこの子に心引かれて憂ひの雲の心にあふれ雨ともならば猶更らにつらからんとて折から避寒に來給ひし信子の君の許につかはされしなりとぞ。子等は母の今日よりは人々と袂分ちて又いつの日に遇ふべき事のありやなしやも知らぬ

げに、我が乘る自動車の大きとて喜び笑めるが又なく哀れに悲しかりつれど、泣かじと心に誓へる身の事もなげに笑みて別れぬ。さはれもし人々おはし給はざりせば聲のかぎりに泣きしなるべし。

病室は痛く心に叶へり。こゝは世の常の夫れとは異り部屋四間ばかりに廣く淸げなる湯殿と小さき厨つきたる南向きなる一個建てなり。東は五六間を隔てゝ一段と高き砂丘の上に同じ程の家あり。西は四五間の隔りにて面會謝絶の札張りたる家あり。前後は土地一帶に低く繁茂れる松の林にしてそが間三四十坪ばかりなる桃の林のあれど冬枯れの枝淋しかりき。我が床は南向きたる八疊にしつらへあり。隣りの八疊は客人の飲食せさせ給ふ室に備へつ。僅かの荷は程なく片づきて、冬の日脚のいと短くて、早や四時となりければ、母君脊の君は歸り給ふなりけり。さらばと脊の君のの給ひし時我れを哀れみ給ふ御心の強くやおはしけむ我が面をだに見給はざりき。玄關におり立ち給ひし時我れは床の中より母君に何やらむざれ言云ひしが今は忘れつ、たゞ高らかに笑ひ給へる御聲のみ耳に殘りて。

車の音の遠のくをきゝてほと吐息はもれぬ。あゝ是れよりぞ看護婦とたゞ二人きりなる我が淋しき病院の生活は始りたるなれ。

その夜の夢は冷く悲しかりしが翌日より心輕うなりしを覺えぬ。年改りたるその日より行光の熱出づる病日毎に重り行きける時、我れも亦思ひなやみの爲めか熱高くなりて八度を越ゆる事日毎なりき。七草過ぐる頃東京より佐々木博士やう〳〵に來り見舞ひ給ひつ。とく平塚なる病院に來ませとのみにて歸り給ひしが一日を越へて土地の醫師の君の來ませる折我が病の如何なるかを問ひまゐらせぬ。醫師の君は面くもらせて肺の方いさゝか痛め給へるやう博士の君の給ひきと云ひ給ひぬ。されど〳〵その時よ、わが胸はふるはざりき。こは我が肋膜痛めし時より三ケ月の間常に思ひ煩ひ疑ひゐし事なりければならむ。醫師の君は眼をふせてこの病さまで恐るべきにあら

ず醫藥の進步は不治と云はれしこの病をも醫す程になりたれば力落し給ひそ。ましてや君のはさして重きにあらざればとの給ひぬ。我れは疾く覺悟せし所なりければ悲しくも思はず。數月を尼寺に籠る心地にて心身の修養につとめ申すべしとほゝゑめば、さなり病み給ふは後々のよきいましめとも修養ともなり給はん。かの地にあり給はん間は書に親しみ給へ。强き人の傳記など讀み給はん事こそ願はしけれ、小說の類ひはよろしかるまじと敎へ給ひぬ。この醫師の君も同じ病に犯され給ひ五年をこの海岸に過ごし給ひしと聞けど、よく肥へてかゝる事のあり給ひしとも見えず。さればこそ我れに對しても情の厚くおはしますなり。

げに此時の我が心こそは、いと强きものなりけれ。幼かりし頃、いと强く忍ぶ心の深かりしと、ばあやの常に人に誇りしが年重ねては却てかゝる心の何處にか姿を消して弱き女となりけむやう思ひなりしが、その心我れに返り來にけむ、强くなりて今や我れは戰ひの門出ぞ、生くるか死ぬるか我れは知らず、恐るべきこの病魔との一騎打ちには、博士をはじめ醫師の君達の助太刀と、知れる限りのかた〴〵の暖き情の盾と、必ず勝たんと誓へる我が精神の信仰にて勝利の幸を得む。よしや我れ敗るゝとも、そは天命の如何ともなし得べからぬことなれば、悲しむ事あらじとぞ思ひぬ。されど、たらちね脊の君は、我れをいとほしと思ひ給ひ、我れはまたしか思ひ給ふ御心の程を思ひまゐらせ、又は幼き子等の上を忍びてはさすがに淚流るゝ時もありしが、知れるかた〴〵の見舞ひに來り給ふを見るにつけ、恐ろしき病のかゝる方々にも及び、我れと同じき苦しみにあひ給ふ事などあらんは堪へがたくて、とく〳〵と急ぎて此所に來りしなれば、一日八回の檢溫さへ、三十七度を越ゆることは稀れになりぬ。

かくして二月は事なく過ごしゝが鎌倉に子等と共に住ひ給へる脊の君はいたくやつれ給ひぬ。さもあり給はめ。東西さへわきまへぬ三人の幼兒の世話と病みたる妻とをかゝへ給へる上に猶はらから友垣又は敎へ子の上につき

ても案じ給ふ事ありたればなり。(中略)かゝる貴き夫持ちたる我れは幸なり。さるに我れは夫にふさはしからぬ妻なりき。おぼろ夜のうす暗き世界にありて晴れたる美しき白日を知らずみめ醜く心不具にして家をおさむべき術に疎く、子等育つる道に暗く、我がふむべき眞の道をだに思ひ惑へる程にして我れながら腑甲斐なき身をさいなむ取り柄なきものなるに脊の君その我れをだに捨て給はでこよなく愛で給ふなりけり。若きより世をば淋しと思ひ、世をばいつはりの火車にて、この車の上に居つゝ熱からぬ顔してつくり笑まひするを人とは云ふならめなどとかこちし身も、この君によりてこそ眞の世を垣間見、人の情の厚きを知りぬ。人の世の人の凡ての我れを捨つるとも君のみは我れを捨て給ふまじ。限り知られぬその愛を思ふ時、いと小さきこの身だにいたづらにはなし難き心地して、愛のむくいに我れは世に人らしきものとなりて脊の君と子等によき妻よき母よと敬はれん日の來よとばかり心を研かばやと思ひ定めぬ。こゝに來りてよりは何一つ自らなす事もなく王妃の如く人にかしづかるるこの身こそ自由ならざれ、終日の時の凡ては自由なる我心のものなり。されば今こそはよき修養の時ならめ。さなり／＼この病こそは神の我れを憐れみ給ひし恵みの一つなれば、脊の君はしめたらちねはらから我が子等にはすまずと思へど我れをば研きて病いえん日生れ變りて世に出づる事によりて限り知られぬ御恩返しの一端ともならんとその頃の我れは思ひしなり。さなり脊の君の强き愛と病ひの苦痛は幾年月を眠りし我が心をばかくして呼びさましたるなり。

(中略)

やがて冷き病院にも暖き春の女神は御手垂れ給ひ、細りし我が身のちと肉付きて體量のいくばくをか增し來り、人々は皆喜び給ひつ。脊の君はわが病癒りたる間に一まづ札幌の家かたづけにとて出立ち給ひぬ。都は春の空ののどかなるに陸奥の花卷など雪の花まく御寒さとし聞けば、北のはて如何ばかり御荷作りなど御寒くおはし給ふら

めと鶯の聲を聞くにも春風の暖きにつけても御上のみ思ひ暮せしに、一月ほどにて健かなる御姿に接しまゐらせし我が喜びは强かりしが、その頃より我れは胃を損ねつ、暖き頃にしあれば、庭のそゞろ歩き許し給はらばと願ひし心通ひてか夫れも叶ひ、晴れたる日には松の綠茂れる中を白衣の人と共にそゞろ歩きするに至りぬ。院長の君は痛く草花を愛で給ひ、溫室、花園、菜園など作り樂しみ給へば、一週に二度づゝ訪れ給ふ折は朝とくよりかれこれと御手入れせさせ給ふが故、花園はさして廣しとにはあらねど、じんちやうじの高き香の人の心をそゝり行くを初めとし綠深き松の木の間の濃き紅の桃の花、あるは彼岸櫻の匂こぼるゝ、木の下かげにぼけの愛らしく咲きたる、白薔薇紅薔薇の王女の如くにほひ笑みたる、あるは四季櫻ちり行く頃をゆかりの色の花あやめ池のみぎはに咲き出でたる、または山吹の風情やさしくほころびたる、栩もあふるゝ藤浪のゆかりの人の足をとゞめ山邊のつゝぢ色とりどりにきほへるなどいづれもめでたからぬはあらず。げに自然の力の尊き事かな。雨晴れの御空にかゝる美しき虹の色を黑き土より生れ出でゝ咲く草木の花の上にながめ、風吹かばそゝり立つ大木小木の枝をまぢへ葉づれの音たてゝさゝやくや何ならん。或は小鳥の高く低く枝より枝に飛びかひちゝと戲れ遊べる、又は軒の雨水やさしき歌をうたふに似たるが枕にひゞく遠音の浪のひゞきに通ふもうれし。こゝに來りてより友もなき身にしあれば、散り來る花の一ひらにも小さき羽蟲の一つにも友の如き心地せられて、物として我が愛のそゝがれぬはなかりき。殊にしのゝめの空、東の方より紅の色ひろごりゆきて、紫の夜のかつぎまだぬぎやらぬ松原もれて朝の日我が世照す時にこそ病癒えたる心地のして、大なる力は小さき心に滿ちあふるゝ。あゝ太陽、太陽こそは我れを勵まし慰めあるは鞕ちあるは又涙を笑みに解きてぞ散らす、我れにこよなき友にぞありける。

夏

（この以下缺文）

○

一度はこんな醜いきたない自分のからだでも子供達やあなたや御兩親樣のものゝやうに思つて、一心に養生も致しまして強くなつて是非なほしませうと過去も未來ものぞかずに現在にばかり住つて努力致しましたけれども天命には勝てません。今はたゞ其時々を好きな事を思ひ好きな事をして暮して居ます。肉體は土となるとも靈魂は亡びずにあなたや子供達を守るでせう。丈夫にもなれないでこうして生きながらお世話樣になりますより、死して皆樣をお守りする事の出來る方がうれしう御座います。そう思ひますと死が樂しみで御座います。一日も早く樂しくなれる事を望んで居ります。

二月九日

あゝ淋しい夜です事。たゞ淋しい〳〵といふより外に言葉のないほど淋しい夜です。あゝこの淋しさを誰が味ふことが出來やう、私と一緒に!!! 早く〳〵樂しいあの世に行つてしまいたい。そこでも私は幸ひに暮されませう。

○

入日が殘(のこ)んの光をあのこんもりした松林の頂きになげかけて夕風が淋しく木々を亘る頃には知らず識らず見まいと思つてゐる過去未來を覗いてしまふ事があります。そして何とも云ひやうのない淋しさがひし〳〵と身に逼つて――こんな淋しさは病氣前まで曾て味つた事がないものです――深い〳〵底の底まで落ちこんだやうな心地がいたします。あゝ十六ケ月餘と云ふものこうした一人の淋しい暮しの中にこう云ふ淋しさ苦しさを味つて來ま

した。何時まで私はこうして臥たたなりに暮さなければならないのでせう。この後何時まで？　こう思ふ時私は悲しくなり又一番淋しくなります。

運命は私をなぶつて〳〵いぢめぬいた揚句死の谷に落さうとして居るのではないでせうか。私は死の谷は今はもう恐れません。たゞこのなぶられる苦しみが堪へがたいのです。けれど一寸先きは暗です。五分後の自分の運命一分後の運命さへわからないのですもの。やつぱり凡てを此いたづらものゝ運命にまかせて置くより仕方がありません。私の運命？　どんな運命が私を待つて居るでありませう??

二月十六日夕

○

私はやつぱり僞善者だつた。病氣になつてから十六ケ月餘りといふもの私の心は何といつても淋しいつらいものであつた。そして樂しみとか愉快とかいふ事は一つもなかつた。はかなさに悲しさに泣く事もあつた。それを負けぬ氣の私の心はいつも強く見られたいばつかりに人前ではいつもにこ〳〵と笑つたり、笑談を云つて騒いで見たり、偉そうな事を云つて强がつて見たりして居た。大うそつき者!!　けれど今の私は僞善者ではありません。ほんとうに心から悲しくもなく恐ろしくもなく上べに見える通りの私です。これでこそ私はほんとうにうれしいのです。ほんとうに私になれたのです。

二月十七日晝

○

まだ行光の生れない頃或日〇〇さんが來られて御一緒に食事をした時〇〇さんが
「細君と云ふものはこんなにいゝものならなぜもつと早く貰はなかつたらうと君は思つたかい」
と不遠慮にも仰有つた。
「細君の前でそんな事聞く人があるものかね。そりやいゝ事もあり惡い事もありさ。先生も大分煩悶したんだよ」
と夫は云はれたら
「そうかな」
と二人でお笑ひになつてしまつた。私はほんとうに恥しさと悲しさで泣きたくなつてしまつた。數年後又同じ問を獨身の方からしてほしい。その時夫は
「細君は中々いゝものさ。君も早く結婚し給へ」
と仰有るやうに私はなりたい。それは私の心がけ一つ。必ずそう云はれるものにならうと、おぼつかないやうな望を以て努力してはゐる私だがもう今ではその努力も無駄であらう。「死」といふ一つの者が眼の前に私を待つて居るばかりだものを。

〇

長い間深き眠りに落ちて居た私の心は安子安子と呼び給ふなつかしい聲と、マヽと呼ぶ愛らしの聲とによつてやう／＼目ざめかゝつて居る。うれしい事である。

夫のものとなつた私は凡て自由にせよと云はれた。自由にと云はれると私は責任を感ぜずには居られなかつたが、愚かな私はおぼろげな行手の光を目あてにふら／＼と呑氣な日暮しをして居たのに、夫は私を叱る事は愚か、

いやな顏一つ見せた事はなかつた。

ある年の夏生馬君が札幌に來られた折柄、都で心安くして居た友も亦札幌に來られて、一夜共に私の家で食事をされた。食後私は紅茶を入れて持つて行かうと立上る拍子につりランプに頭をぶつけてランプは音と共に疊に燃えついた。私はすぐ女中に次の間の赤子を抱いて逃げるやうにと命じたが、火事にはなるまいと思つた。その音にお座敷から三人走せつけられた時、書生は女中部屋から蒲團を取出してかぶせて消した。ホツと一同安心してお客樣はお座敷にもどられ、私は紅茶を入れなほして出た。夫は何のさわぎが今すぐ前に起つたかも知らないやうにこゝろよく話してゐる。かんしやくもちの人ならば客の前もかまわずに妻を叱るであらう。けれども夫は「怪我もせずによかつたね」とほゝゑんだゞけで、客の歸つた後も何のお言葉もなかつた。生馬さんは翌日「兄さんはほんとに怒らない方ですね。姉さんは叱られた事はないでせうね」と云はれた。

あゝ全く私は叱られた事はなかつた。私がどんなにそゝうした時でも何時も唯笑つて居らるゝばかりか、家政の事食物の事についてさへ、たゞの一言も不平をきかなかつた。夫の友達で實によく家政の事より食物の事まで自身奧樣に敎へもし、おかげんまで見てあげる程によく世話をやいて奧樣をよく敎育していらつしやる方がある。そして細君を敎育するのは、夫の義務だと云つて居られる。奧樣も勿論賢い方故どんどん上達して、家の改造など工夫して居られるのに反し、夫は何とも云はぬ。世話をやいて下さいと云ふと、僕には分らないこれで滿足だと答へられるばかり。愚かな智慧をひとりしぼつて、とぼとぼ歩いて行く私は幸ひなのか不幸なのかわからなかつた。

私の同窓の友で嫁して後も學生時代と變りなく所々に出歩いてゐる人があつた。而してその人の云ふには「私の夫程いゝ夫はない。どこへでも行きたいと云へば行けと許し、したいと云へばさせるし、何一つ反對した事は

なかつた。而して二人さしむかひの時には口をきく事はなかつた。珍らしい人よ」と語つて居た。その友は實はその夫が愛するどころか非常にきらつてゐたので、一ケ月ばかりしてかなしい運命になつたと聞いた事などを思ひ出して、私は怪しみさへした。

少しも叱られない自分は物足りなくなつてきて、叱つて下さいと願つたら夫は笑つて叱ると云つた。けれども實にたまな事で又常に精神上の事ばかりであつた。が叱られて見るとあんまりいゝ心地のものではなかつた、勿論うれしいとは思ふ事ばかりであつたが。遂にはこんなに愛する人が怒つて居るかと思ふとかなしくなつて泣く事ばかりとなつた。そして無口な口下手な私は口許まで出てゐるお詫びの言葉を出す事が出來ないで、涙を流してあはれな顔をして居た。夫はもう叱らない、安子は怒るから駄目だと終にはほんとに怒つてしまふこともあつた。

ある時くだらぬ事で人を恨みさん〴〵惡口をついた。夫はだまつて聞いてゐたが「何をそんなに怒るのか。いまにそんな事を云つた事がかなしかつたと思ふ時が來るよ」と靜かに云つて笑つてゐた。私は唯だまつた。「そんな時がほんとにあるか知らん」と心でつぶやいて居た。

その時が來たのである。私の心は今さめやうとしてゐるのである。そして叱る事をしなかつた夫の心をつく〴〵了解する事が出來た。もし夫が私の心を自由でなく束縛してゐたなら伸びやうとした芽を一々つまみ切られて、私は今日まだ目をさまそうとはしなかつたかも知れませんばかりか、小さな自分はます〳〵小さくなつたかも知れません。あゝ夫の心は終に私の心をよびさましてくれました。感謝と後悔と努力とは頭の中でこんがらかつてゐます。

○

あなたはこんな私のやうな不束者をよくも〳〵こんなに愛して下さいます。あなたのやうな方を夫にした事でさへ私にとつてはこの上ないうれしい〳〵事で御座いますのに、その立派な方から愛されて居るので御座いますものうれしいにはちがひ御座いません。けれどもそれは丁度大人が小兒を愛すると同じでたゞ可愛がるいとしがるといふのみでその中に敬愛すると云ふ事はないやうに、私はあなたから敬はれた事はないと思つて居ります。又敬はれる筈が御座いません。全く私のやうな無智の女が人から敬はれるなんて事のあらう譯が御座りません。でも心の中ではどうかしても少し賢い女になつてあなたや子供達に敬はれ度いと夫れが私の何よりの望みで御座いました。

札幌で病院から退院した夜ストーブの前で

「私は是れから奥樣になりますよ」

としかと申上げてしまひました。

「けれど今の世に云ふ奥樣では御座いません」

と申しましたら

「夫れでは今まで何だつた」

と仰有いました。

「おかみさん位の所でしたね」

と申して笑ひましたらあなたもほゝゑまれながら

「ついこの間むやみに自分の理想や主義は云はないものだといつたくせに」とおからかいになりましたね。

あの頃はほんとうに私はいゝ眞實の意味での奥樣お母樣になりたいと思ひ必ずそうなつてあなたや子供達から敬はれる時があるやうにしやうと心に誓ひました。けれども今はもうその望みさへ捨てなければならないので御座います。たゞ私が今までこう云ふ心を持て苦しみながら鞭ちながら努力して居た事だけは信じて下さいませ。あなた方から敬れる日も來ない内死んでしまふ事はほんとに〳〵口惜しい事で御座いますが仕方が御座いません。

二月十八日夕

○

あゝ淋しい〳〵何と云ふ淋しさでせう。世の中に私が今味つてゐるこの淋しさと同じ淋しさを味つてくれる人があるでせうか。人間といふものは皆「一人ぼつち」だから誰れも味つて下さる人はないでせう。あゝ淋しい。何といふ淋しさでせう。いけない〳〵やつぱり私は生に執着して居る。死を恐れて居るのです。だからこんなに淋しいのでせう。やつぱり私は僞善者だつた。

今悲しみと淋しさと恐ろしさは頭の中で渦卷となつてまわつて居ます。もうとても生きる見込みはないと思つて居るその心の下からかすかながら「熱もそう高くはなし、食事も可なり出來るものを」と云ふ望みと執着とが常にちよい〳〵頭をもたげて來ます。而して熱でも少し餘計に高くなつたり食事が進まなくなつたりするといよ〳〵近づいたのかと恐ろしい心になります。もしほんとうに生に執着がなく死を恐れないのなら、どんな事があらうとも淋しくも恐ろしくもない筈です。あゝ私はいけない、やつぱり駄目です。

けれど人間は誰でも死を恐れ生に執着するものでせう、愈〻もう生がないと云ふ宣言を受け死を覺悟する迄は。ですから急病で一時に死ぬ人は却つて仕合せです。私はもうとうから覺悟はして居ます。いざと云ふ場合決して取り亂すやうな事はしますまいけれども、そのいざと云ふ時迄の間、萬々が一と云ふかすかな望を、つまり執着をもつてゐます。そうしてその望が兎角覺悟を動かしたがります。時々覺悟は負かされます。そうして動かされ乍ら一方では又覺悟の方を勝たさなければいけない、遂には勝つやうになると思ふから私は淋しがつたり苦しんだりする樣になるのです。ですからいつその事もう望のない覺悟の時が一時に來てしまふ方が却つていゝかも知れませんけれども。でこう思ふ時私は自殺を思はずには居られません。自殺と云ふ恐ろしい一事によりて凡ての苦痛からのがれるのは幸ではないでせうか。これ程私の心は苦しいのです。それは執着と覺悟との爭の爲めです。

二月十九日夕

〇

春は來ました。天にも地にも人々の心の上にも春は來ました。けれど、けれど、私には私ばかりには來てくれません。ほんとに私はまゝつ子なのではないでせうか。病氣は相變らず進みこそしましたが決して決して怠りません。けれど今ではもう自殺は思ひとゞまりました。どんな苦しみにも打勝つて天命のあらん限り養生をして少しでも丈夫になると云ふ事が何よりも正しい眞實の事であり何よりも幸な事だと考へたからです。年老い給へる御兩親、さびしい親切な夫、かわいゝ大事な子供達の爲めに私は生きなければなりません。私の體ではないのです。こんなやくざな身體でも皆樣のものと思へば尊いやうな氣もします。大事にしなければなりませぬ。

三　月　九　日

私は生きなければなりません。どんなにしても快くなつてあなたや子供達ともう一度一緒に暮さなければなりません。あゝ私は生きたいのです。なほりたいのです。如何して自殺など云ふ愚な考をこの闇中に起したのでせう。自分ながら恥しい程馬鹿でした。こゝへ來てから丸一年と六ケ月と云ふもの色々の苦しみを致しました。そうして猶この先どの位苦しまなければならないか知れません。自分自身が苦しむばかりではなく、まわりの皆様にどの位御厄介をかけるか知れないのです。けれど今私はそんな事をかまつては居られません。どんな犧牲を拂つてもどんな苦しみを受けてもあなたや子供達の爲めに生きられる方がよろしいのです。私自身の爲めではありません本統に。あなたと子供達の爲めに私のやうな者でも生きる事が必要なのです。そうして私がなほれば私の苦しみ皆様の御迷惑御厄介はすべて十分埋めあはされると思ひます。

　私のやうな小さな心の不具者がそんなにしてまであなたや子供達の爲めになほらなければならないなんて自惚れにも程がある。まだ／＼立派な女は世間にいくらでもあるのだから、私が死んだつてたいして私の云ふ程の事はない。こうしてぐず／＼長病ひをして居るよりは死んでしまふ方がまわりの方の爲めにも自身の爲めにも却てよいではないかと思ふ方もあるかも知れません。私自身でもそう思ふ時がありました。けれどあなたを一番よく理解しあなたに偉大なお仕事をおさせ申したいと願ふのは私が世界中一番だと思ひます。それから又子供達をも理解し立派に教育し眞に子供達の爲めを思ふのはあなたと私とが一番だと思ひます。ですけれどあなたは御自身の大きなお仕事がおありになりますから、そう／＼幼い子供につききつて教育してゐらつしやる事はむづかしう御座います。で私が必要なのです。

（中略）

私のやうな取柄なしの不具者をあなたは「人」として取扱つて下さいました。而して自由を下さいました。つまり私を深く愛し信じてゐらつしやるからです。自分を與へていたゞいては私も無責任にはして居られませんでした。どうかして少しは人間に近づきたいと思ひあせつたか知れませんでした。がもと〳〵愚な私はなか〳〵目ざめませんでした。それをあなたは氣長がに私がどんな過ちをした時でもお叱りにもならなくてたゞ〳〵導いて下さいました。でも私はまだ〳〵かたわ者でした。あなたに相應したものにはなれずとも、せめては人らしい者になれるやうにと神樣が私をこうして病氣におさせになつたかとも思はれますし、又不相應に幸過ぎる私を惡魔がねたんでこんなに長く苦しめて居るのかとも思ひますし、又御兩親樣や弟妹がたがあゝしていつも幸に暮してゐらつしやるものゝ人でおありになる以上やつぱり多少罪を持つてゐらつしやりませう、その方々の罪を嫁で娘で姉で居ながら是れまで何一つ盡さなかつた罰として惡魔が私に私自身の罪と共におはせたのかとも思はれます。もしそうならばほんとに夫れは當然な事だと思ひ、而してこの苦しさを喜んで堪へませう。兎に角私はこの永い間の苦しみによつて眼をぼんやりと開きかけて居る赤坊の自分を育てなければなりません、たとへ死ぬにしても、生きるにしても。而して早く快くなつてお氣の毒なあなたと可哀そうな子供の爲めに歸らなければなりません。あゝ本統に自分の惡い罪の爲めにあなた方にこうお氣の毒な思ばかりおさせ申してすまない事です。とにかくよく養生をして早く快くなりませう天命で死ぬのならそれはもう決して悲しみもせずあきらめるばかりですが。

（中略）

あなたは御自身の眞實の生活に飛び入らずに遠慮してゐらつしやるのです。あまり人の爲めばかりを思ひ過ぎなさる。親孝行の美しいあなたの御性質がそれを躊躇させてゐるのです。私はあなたのその御心を思ふ毎に泣きま

す。それから私の病氣、是れが又どんなにあなたのお通り路をお邪魔しお煩はせしてゐるかもよく知つてゐます。あゝ早くよくならなければなりません。あなたの子供等も亦立派なものになるでせう。偉人に聖人に育てるのが私の役目です。あゝそう思ふ時、私はほんとうになほり度くて〳〵涙を流し心の底の底から祈らずには居られません。どんなにしてもなほりませう。私自身の爲になどゝは夢にも願ひは致しません。忍耐と勇氣と一心を持して早く病氣から逃れなければなりません。あゝ神樣どうぞなほして下さい……。

三月二十七日

○

自分は強くなつて自分を育てゝ行かなければならないのだと思ひながらも自分が可哀そうになつてしまふ事がある。何と云ふ意氣地なしなのであらう。同じ長病ひでも傳染しない病氣であつたらどんなに仕合せであらう。可愛いゝ子供達や戀しい夫や慈愛深い御兩親や兄弟姉妹達と別れ、たゞ一人この淋しい病院の一軒家にうらゝかな日も雨の日も風の夜も變つた人を見るでもなく、用の事より外は話をするでもなく、痛む胸を抱いて熱ある身を滿一年と三ケ月と云ふもの床の中で暮してしまつた。その間にどんなに多くの心の苦しみを受けた事であらう。よくもこの小さな弱いからだで堪えられたとさへ思ふ程である。人々は樂しそうに大聲で笑つたり、にぎやかに話したり、好きな所を好きに歩くのに、庭にすら出られずにまだこうして居る私をほんとに私は可哀さうに思はずには居られない　夫れも病氣が少しづゝでもよくなつて居るのなら、まだ其所に樂しみがあるけれども、私はよくはならないで、少しづゝ進んで行つてゐるのである。それをまわりの方々はよくなつて居ると思つて喜んで下さるのが又どんなに〳〵私を苦しめて居るか知れないのに、そうしてもう時々は苦しみにとても堪えられない

とさへ思ふ事もある。何と云ふ可哀そうな私でせう。

けれど又一方には弱い〳〵こんな事でどうしやう。病氣が惡くなつて行かうと、そんな事をくよ〳〵せずに强くなつて忍耐と勇氣を持つて戰ひながら自分を育てゝ行かなければならないのだ。まだ生れたばかりの私は眼さへろくに開かないではないか。腐つて行く體は育てられなくとも、せめて心だけでも人なみの世界に住へるやうになりたい。あゝ勇氣と忍耐とによりてと囁く聲がするのです。こうして私は自分を哀れむ心と鞭つ心の中にまよひながら暮して居るのです。ですから大變强い時と大變弱い時があります。どうぞ常に〳〵强くあるやう人々の凡てによりて鞭たれたいと思ひます。自分の運命に從ひながら自分を育てゝ行かなければなりません。

三月二十七日風强く暖かき夜

○

あゝ淋しいほんとうに今日は淋しい。私は去年は隨分熱など高い時でもそんなに淋しいとは思はなかつた。而して死と云ふやうな事を考へたつてそんなに淋しいとは思はなかつたのに、この頃はどうしてこう淋しいのか知らむ。ほんとうに今年になつてからへんに氣が弱くなつたやうに思ふ。私の心はこの一年あまりの戰につかれ切つてしまつた爲めに今ではこうなのであらう。そうして無暗に子供達の上のみ思ひ出されてしかたがない。あの小さな子供達を遠い札幌から東京まで幾度も〳〵つれて往復した時の苦しかつた旅行も今では樂しい思出となり、子供達の可愛いい言葉や樣子が色々と思ひ出されて、一年あまり見ない中どんなになつたかと見たく、またどんな心で居るだらう、母を思ひ出して居るか知らん。あのマヽと呼んでくれた可愛いゝ聲をあゝほんとうに長く私は聞かない。もう一生聞く事も出來ないかも知れない。そう思ふと罪のない小さな子達の行末の不幸の程が

思はれて、知らず／＼涙がこぼれてしまふ。何と云つても病中私を一番悲しましめ苦しましめたのは三人の幼い子達であつた。ほんとうに可哀そうな子達が夫れも知らずに暮して居るのだ。ほんとうに可哀さうな子供達よ。もうマヽのあはれな命も一ケ月位しか持ちはすまいがそれも知らずに暮して居るのだ。マヽが死んでもパヽがお出でになる上は心配はないけれど、たゞ母の愛を知らない不幸を可哀そうに思つて私は泣くのだ。でも皆立派な人にならふ。母は死んでも魂は三人の上を常に／＼守つて立派な幸なものにしなければやまない。

あゝ三人の聲が姿が私の眼さきにちら／＼する。淋しい／＼日はもう暮れて行くのだ。

四月二日夕ぐれ

○

今日旦那様と生馬様とがお出になつた。行光は今日から幼稚園に入園して、今朝おとなしくパヽとみよに連られて行つたと云ふ。あの小さな心の中にも人知れず不安をもつて出がけには大分あやしい様子であつたとか。行にとつて今日はほんとうにたいした大仕事でもするやうな、そうしてほんとうに一生にたゞ一度の日なのだからほんとにそう不安なのも無理はないと思はれた。どうして居るか知らん。歸宅をどんなに樂んで居ることだらう。そうしてどんな話を持ち歸るであらう。あゝ私は夫れを見たい聞きたい。それなのに旦那様はこうして此所にゐらしつてしまはれたのだから、行が歸宅したつてどんなに張合なく淋しく思ふか知れない。せめて誰れか外に家の人でも居ればまだしもだが、今はどなたも外に居られるし、可哀そうに折角樂んで歸つて來ても、どんなに／＼淋しからう。明日から行くのがいやになりはしないかとさへ思はれて私は腹立たしくなつてしまつた。ほんとにあのパヽとして何と云ふ今日は落度な事をなさつたのだらう。私は口惜しく思つた。

四月五日

○

あゝ心地が惡い。先には八度位の熱があつても是程苦しいとは思はなかつたが、この頃はほんとに苦しい。頭は重いし體中だるくつてたいぎで、熱が下つてもやつぱり起きて食事さへする元氣もなく、食事は進まず、咽喉ばかり渇いてほんとうに弱つてしまつた。昨日も先生が今度は大變弱りましたね、元氣がありませんね、など云はれたがほんとうにどうしてこんなに弱つてしまつたのか知らん。是れでは私の命もあと一ケ月はおぼつかない樣な氣がして、さすがに子供達に逢ひたい。今世のお名殘りに一眼でもなど云ふ心も起らないではないけれど、私はどんな事をしても逢ふまい。折角マヽを忘れてゐるものを、今この衰へ果てたマヽを見たなら小さな心にもマヽの影が深く〳〵刻まれてあはれな思出といふものを持つやうにならう。あゝ夫れがほんとうに可哀そうで堪らないから私は逢ふまい。過去の可哀いゝ子供達を思出して見るより外に道はない。それで滿足して私は死なう。けれど〳〵それはどんなに私を泣かせる事か知れない。

四月九日

○

この淋しさに堪へられなくなつた。而して恐ろしくなつてしまつた。病氣が惡くなるにつけ、ます〳〵私は苦しくて、自分を苦しみながら救ふ爲めに夫や子供達をさへ忘れてしまふ日が來はしまいかと思ふと恐ろしくなる。あゝこの苦しみなやみを少しでも思はない爲めにもつと賑やかな所へ移りたいと思ふ。そうしてお友達でもほし

いと思ふ。兄弟姉妹は多くあつても丈夫であるため、私のこの苦しみはわかるまいけれど、世界中に私と同じにこの苦しみを味へる人は一人もない筈であるこの世に「私」と云ふものは一人よりないのだもの、そう思ふとほんとに〳〵淋しくなる。私に一番近いもの、一番私の心に似たものは夫ばかり、あゝ夫ばかりが私のたのみ、私を一番よく知つてゐて下さるのだ。が夫はそう常に私の所にばかりお出でになる事も出來ないから、他に私に同情して私の心を少しでもくんで下さる方をお友達にほしいと思ふ。夫れにはやつぱり苦しみなやみを持つた方がいゝにちがいないから私はやはり御病人か夫れとも世を悟りきつた尼さんがいゝと思ふ。かう云ふ人々によつて慰められ、はげまされ、又は罪ない話をしてゐる事はどんなに私の神經を和らげ悲しみを減ずるか知れない。而しても少し人聲でも、せめて人の足音でも聞えるやうな所に移りたい。

四月十八日夜靜か

○

夕飯を終へてから三重吉氏の「珊瑚樹」を讀んで居たが、それにもあきてかるく眼を閉ぢて見た、——と——、まあ何と云ふ靜かな事であらう。浪の音も松風の音も、夜毎にたゝくお寺の太鼓のひゞきさへ聞えずにたゞしんしんと更けて居る中にチクタクと時計の音がかすかに〳〵。何と云ふ靜けさか。死と云ふものはこんなに靜かに清げであらうと思ふと私のからだはすーつと深い底の方に落ちこんで行くやうな心持ちがする。いかに靜かな病院でもこんなに音のない時は今までにありはしない。甘い百合のかほりが靜かにたゞよつて來る。あれは今日パパから頂いた床の白百合だ。

私はこう云ふ晩にこうして靜かに死の國に送られたい。だが一たい何時かしらむ。壯滿時ではあるまいか。私

はいつか眠つたのではなかつたかとふと時計を見ればまだ宵の七時である。
夕方から音もせず降り出したきり雨はまだ靜かに〳〵降つてゐやうか。雁がないて行つた。
　四月二十五日ぬか雨の夜

○

あした來てなく庭の小鳥よ
　めでたき囀りわれも覺えて
日毎まねする淋しき折々
　あゝ二年の○○しひとやに（二字不明）
とらはれ人のわれにうれしき
　友よ愛する小鳥よ汝は
汝とわかれていつの日我れは
　いづち行くらむあはれ小鳥よ

○

庭に落ちて居たと云つて看護婦が一羽の雀の亡骸（なきがら）をつかんで來た。何時どうして死んだものか知らないがあはれに羽根が折れてもうかたくなつてゐた。きつとこの屋根に巢くつて居る雀の一つにちがいない。毎日〳〵何の苦勞も知らないやうに、朝早くから庭におりて囀づり、晝は二羽の親雀がかわり〴〵に飛んで行つては何か運ん

で歸つて來ると、家根の中では子雀がぴよ〳〵いつてなきさわいでゐたのを、去年の今頃私はお天氣のいゝ日には、庭に椅子を出してそれに臥ながら、このかわいゝ小鳥の生活をどんなに〳〵おもしろくながめ暮した事であつたらう。それから一年間床につききつて私はもう見る事は出來なかつたけれども、その聲を聞いてこの淋しいなやみの然し美しいひとやの中にどんなに慰められて居たか知れなかつた。そうして私はまだ少しもよくはならないけれども、あまりに長いこゝのわびしい生活にあきて近く移らうとして居るけれど、たゞこの二年朝夕に淋しい私の友だつた家根の雀と別れる事はほんとに淋しいやうに思はれてゐたそのやさき、こうして可愛いゝ友の一つがあはれな姿になつたのを私はほんとに悲しく思つた。父か母か子雀か、どれかは知るよしもないけれど、あとに殘つたものどもはやつぱり淋しく思ふであらうか。そう思ふと庭に飛んで來てなく雀がこの死を悲んで居るやうにさへ思はれる。今日は曇つて寒くもあるから私は出られないから、看護婦にこの小さななきがらをお庭の隅に葬らせて大きな石碑を立てゝお花を供へさせた。

お天氣がよくなつて私が出られる日が來たなら一番さきにこのお墓のまはりに垣根をこしらへてやり度い。そうして墓標に。

わが愛でし友なる小鳥の御魂よ
永久に安かれ

とかいて……。

四月二十七日の夕

○

永い間私を守つて居てくれたこの病室ともう一週間もたゝない中に別れる事になつた。あゝこの家こそは私の爲めにどんなに〳〵深い思出での種となるであらう。ほんとうにこゝに來て一年と四ケ月の間一日として安き日とてはなく人前にこそは元氣にして居ても、一人の時のみじめな私の淚も呪ひも悶えの夜晝の凡ても知つてゐるのだ。あゝ此所に來たその時には必ず治つて——必ず向上進步した立派な者になつていつの日にかは歸られやうと心に樂しみ且つは誓つて居たのだつたに、今の私はこの永の年月をたゞいたづらに恐れと苦しみの中にばかり過してしまつて、何の進步向上もなく病も進みこそすれ怠る事なく、このまゝに悲しい淋しい思のみを殘してこゝを別れて行くのであらう。そうしてその後にはじまる生活はどんなであらう？　やつぱりこゝに居た時と同じ事を思ひ廻はし同じやうに寢たなりに夫と子等を戀ひわびながら淋しい中に暮すのではないだらうか。それとも病氣がもつと惡くなつて、たゞ死の谷に落ちるのか、または少しはよくなつて外步きでもできるやうになれるであらうか、どうなる事かと考へると何だか自分の未來を案ずると云ふよりも他人の事でも思ふやうだ。どうならうと少しも構はない、たゞ運命のなすまゝになつて行くより仕方がないと思はれて、おもしろい劇曲でも見るやうな心地がする。何だつてこう自分に冷淡になつてしまふか、ほんとにこの頃私はひどく自分をつめたくあしらつて居る。そうしてこの病んで居るのはほんとうの私自身ではなくて、過去の幸福だつた私はまたそのまゝに幸福でどこかに樂しく暮してゐるのではないかとさへ思はれる。あまりに過去とかけはなれて不幸な現在の私を自分とは思へないで、罪惡と云ふ一つの物のやうにさへ思はれる。眞實の幸な私は何處に居るのか、よしや老病死も何の苦にもならぬ天の御園に居るのでもかまはない、早く私はその私の所に歸つて行きたいのです。こゝと離れて新たな家に移つたらほんとの私に歸れるかも知れない。あゝ運命は私をどう導くでせうか。

四月二十八日

○

寢られない夜など今まで自分が逢つて來た色々の人々の顔など思ひ浮べて見るときたいにどの顔にも何とはなしに淋しい影があるやうに思はれる。美しいのにも醜いのにも老いたるも若きも、そうして幼い小供の顔にさへ悲しみといふものゝ影が漂つて居るかのやうに思はれる。自分がこうして病んで居るためこんなに思はれるのかも知れないが、凡ての人は心の中に「淋しさ」を持つて居るからではないか知らん。そうして凡ての人が可哀相になつてしまつて、誰れをでも、ことに哀れな弱い貧しい小さいものほど可愛がつてやりたくなる。(下略)

四月三十日

○

小石を打つけるやうな音をさせてはげしい雨は雨戸を打つ。うすら暗い十疊に一人寢ながら銀の小瓶にさした床の白百合を見て居ると何とも云へずいゝ心地がする。靜かに音もなく降る軟かい雨もしつとりと心が落付いていゝものであるが、又こうした激しい大雨もどんなに氣がせい〳〵していゝかしれない。朝からこう激しく少しの小休みもなく荒れてゐて何時晴れそうにも思はれないこの雨はほんとに嬉しく思はれる。海はさぞ潮鳴りが高い事であらう。

私は極にばかり住つてゐる人間らしい。そうして極から極を飛びまはる事が好きと見える。人前にこそにこやかに快活ならん氣である私のかげの一人はどんなに常に淋しいか知れない。唯一人で居るか大勢で賑やかに居るかゞ好き、なまじいの友を持つより一人が好き、餘計な話をするよりも默つて居るのがいゝやうで、好きなものは

しんから好き、嫌ひなものはしんからきらひ、と云つた風で、ほんとによくない事と思ふが性分でしかたがない。私の心も今日のやうに嵐の事があるかと思ふと、すぐそのあとから春雨のやうな情深いやさしい心が出て來る。こう云ふ私は常に自分自身をさへ世の常ならずあはれがつて愛するか、又なみはづれににくむか、どちらかで居る。そうしてこの半死半生のにえきらない今の我身をどんなに齒がゆくにくゝ思つてゐるか知れない。この嵐のやうに病氣が惡くあれまわつてあの世の地獄に落ちてしまふか、晴れてこの世の天國に歸られるか、ほんとに早くどうにかなつてほしい。あゝこの世の天國こそ私の望む所なのです。

死にたいの生きたいのと云ふ（以下缺文）

○

私のまわりの方々は私がこうして永い間毎日〳〵熱がある身で暮して居るのを苦しからうとほんとうに考へて居て下さるのであらうか。何だかそうは思へない。丈夫の人がもし七度五六分の熱でもあると可なり苦しいと思ふであらう。が私は一つは慣れてゐる故もあらうけれども七度八九分、八度を越える時でも、お人でもあれば笑ひながら元氣に話す。それを御覽になる人には熱の高いのを御存じでありながら大變よくなつた〳〵と云はれる。私が少し苦しいのを抑へてお愛相をしてゐるとはお氣がつかないから勿論苦しからうなどゝは思つても下さらないと見える。こうして一年半も私は毎日熱ある身で暮してしまつた。そうしてこの頃もそうよくはないのに皆樣はよくなつた〳〵と云つて喜んで居られる。熱があると云へばそんな熱はすぐとれると云はれる。又どうしてそう熱が出るのだらうなどゝ冷やかな事を云はれる。病氣が惡ければこそ熱が出るのを、よくなつたと信じて居ら

れる方々にはほんとの事が少しもわからないと見える。たまにお出になつて御覽になるのだから無理ではないかも知れないけれども、もと〳〵この病氣は顔色だつてそう惡くない事も多いのだものを。

惡いのによくなつたと云つてそう信じて喜んで下さるのは、よいのを惡く思ひ過て案じて下さるより皆様の爲めによろこばしいけれども、私にとつては淋しい事だ。死ぬる日が來ても私が元氣そうにさへしてゐたならよくなつた〳〵と云はれるかも知れない。自分の身は自分と醫師が一番よく知つてゐるのだ。何につけても人間といふものは孤獨の淋しさを感ぜずには居られない。

五月十六日

〇

あなたに手紙を差上度いと思ひましても手紙を書けばきつと此頃の私の心持が現はれませう。それは私にとつては何でもない事で御座いますがあなたや皆様には悲しい事と存じますので、こんなに終始私の事を案じて居て下さる上に、猶お悲しめ申すのが私には堪へられない苦しみです。そんなら一人でたゞ思つて居ればよさそうなもので御座いますけれどもそれも何んだか淋しいものであなたに手紙を差上げる代りにこゝに認めて置きます。私が死んで後御覽になりませう。けれど決して悲んで下さいますな私の爲めには。跡に殘られたあなたや子供達御兩親様の爲めに泣いて下さい。

死がしのびやかに近づいて參ります。私にはそのひゞきを聞く事が出來ます、あなたには聞こえないと仰しやいましても。私は自身の爲に悲しみません。できる丈の手あてをして頂いてそれでいけないのならほんとの天命で御座います。人の力でどうする事も出來ない此天命に泣くより外しかたが御座いません。あなたは私が失望し

過ぎてゐると仰いますが私はそうは思ひません。皆様にはお氣の毒で御座いますがもういけません。副院長は肺は痛むものでないと仰しやいましたけれども私はそう思ひません。此頃の私はせきでもすれば兩方の肺の全部が痛みます。せきは多く痰も多くどうしても治れる見込は御座いません。それに腰が冷えたり食事が進まなかつたりして。今の處ではまだ肉も可なりついて居ますし、熱もひどく高いと申す程でも御座いませんし血色もさして惡くは御座いません（この病氣は血色はあてになりませんけれども）が少しづゝ進んで行つてゐるのが私にはよくわかります。どうしたつて全快は出來ません。いつかは死が參ります。而してその死がもう近づいてるのを私は知つて居ります。その年月の間をこんな何一つとりゑのないふつゝか者をよくも愛して下さいました。導いて下さいました。ほんとに心の底の底から私は難有いともうれしいとももつたいないとも思つて居ります。あなたのやうな美しい尊い方を夫に持つたと云ふ事が短い生涯の中の唯一つのほこりで御座います。この誇りの爲めに私は淋しい中にもよろこんで死ぬ事が出來るので御座います。私は生れてから今まで何一つい〻事を致しませんでした。人の形と生れながら人らしい事は何もしなかつたやうで御座います。夫れが淋しく悲しいのです。たゞ三人の子供を殘す事是れだけが人間並の事であつたかも知れません。けれど是は却て罪であつたかも知れません。

其上年老い給へる御兩親様を御世話申さなければならない娘の身でありながら、只の一度も御兩親様の御世話を致した事はなく、却て何から何まで御世話になり通し、殊に病氣になつてからは子供達まで御厄介になつて居りますのですもの、私はほんとうに是が何より心苦しい事で御座います。夫からあなたに對しても決して良妻でもなく賢妻でもなく却てあなたの御邪魔ばかりして居た樣で御座います。殊に子供達に對しては罪深い母親で御座います。子供達の事を思ふ時に丈け私はこんないやな母親でも生きて居て遣りたいと思はずには居られません。けれど今はしかたがありません。こういふ事と知つて居るならもつと〳〵子供達によくして置きたかつたなど〻

今更愚痴が出ますのもやつぱり弱い女心でありましよう。夫から弟妹方にも御世話様になつたばかりで何んの御役に立たなかつた事を御詫び申ます。

神尾の御兩親にも申譯が御座りませんが、今はもうどうする事も出來ません。只々知れる限りの方々に御禮と御詑びとを山々繰り返し申上げる外は御座いません。

私は死を少しも恐れません。こうして筆を執つて居ましても涙さへ浮びません。人らしい事をしないで死ぬといふ事が殘念で御座いますけれど、死其物は悲しくも恐ろしくも何んとも御座いません。こんなにひどくなつてしまつてはどうせ全治しないのですから生きて居るのは名のみで、只ぶら〳〵して居て人様にも御迷惑をかけ、自身も氣がね心配をして暮すより死ぬ方がすべての爲めによくはないかと思ひます。全快して生きられるならこんな嬉しい事は御座いませんけれども。今はもうそんな事は願はれもしない事となつてしまひました。

此十日ばかり私の心は死といふ事ばかり思ひつゞけました。そうして今では死を思ふ事は樂しみの様になりました、戀人の上でも思ふ様に死ばかりを思つてゐます。

平塚停車場は大山にでも行く乘合馬車でも御座いませうか時々ラツパの音が聞えます。このラツパの音をきく事はほんとに、悲しい事で御座いました。いつも鹽原の昔を思ひ出しますので。あゝあの頃は何といふ樂しい時で御座いましたでせう。私はおてんばの、でも至ておぼこ娘で、毎日御一緒に遊び歩いて瀧に行つたり花を摘むだり致しましたね。歸途は同じ馬車で七草の美しい初秋の奈須野ケ原を通りました事などほんとに忘れる事が出來ません。今こんな運命が待つてゐやうとは夢にも知らず、自分程幸ひな者はないと喜んで居りましたものを。人の運命はわからないもので御座います。あの時のラツパとこゝのラツパと同じやうに聞えて私の心は知らず〳〵過去に行つてしまひます。も一度快くなつてあの景色をあなたと一緒に眺めたいと思つては昨年の秋頃は涙をこ

ぼして居ました。それに又札幌で暮した樂しかつた六年間、あなたや子供達と一緒に町に買物に行つたり、中島公園に遊んだり、又は皆なで一緒にお話をしたり、食事をしたり樂しかつた時を思ふと、泣かずには居られません。けれどももうそんな望も絶えた今では樂しかつた過去に住つて、淋しい現在を見ても悲しくもなくなつてしまひました。今は唯死ぬ瞬間の苦しみが少しでも少ない事をのみ願ふて居ます。何と云ふあはれな望みで御座いましやう。誰れでも死と云ふものを感じた時自分の過去をふり返つて見るもので御座いましやう。私の過去はほんとに幸の一字でうづまつてゐます。何の苦も悲しみも冷さも知らずに過して來た私は、御兩親、あなた、弟妹子供等のあたゝかい情の中にいだかれながら死んで行くので御座いますもの、生涯私は幸で御座います。私の爲めに泣かないで下さいまし。たゞ人らしい事をしないで死んだといふ事を氣の毒に思つて下されば夫れで澤山で御座います。

それから私はあなたの御成功を見ないで死ぬのが殘念で御座いますけれども、必ず御成功遊ばす事と信じて居ります。凡ての事に打勝つて御成功遊ばして下さい。あなたに對しての唯一の御願で御座います。

それから皆樣に御願ひ申して置きたい事は三人の子供達の事で御座います。弱い私の子供達だからやつぱり身弱であらうなどゝ云ふ考へは決して〳〵どなたもお持ち下さいますな。ほんとうにいつも申上ます事ですが、人の精神の力は恐ろしいもので御座います。私に似ず父親に似て三人の子等は丈夫だと云ふ事を御信じ下さいまし。全く醫師も子供達の體格はおほめになつてゐられるので御座いますからきつと皆丈夫でいゝ子に育ちます。そうかと云つて丈夫にまかせあまりほうたらかして病氣などの時手おくれなどはさせないやうにして頂かねばなりません。あゝ私の一念は三人の子供達を立派な丈夫な人にしないではおきません。必ず立派に致します。

死ぬ時は誰れにも知られずに一人で靜かに死にたいと思ひます。最後の苦しみの樣を人樣から見られる事は一

入の苦しみで御座います。それから、死ぬ前に親子兄弟に遇ふのが普通で御座いますが、私はどなたにもお目にかゝりたくありません。子供達には猶更らあいたく御座いません。死骸はこゝで火葬にして骨として東京にお持ち下さいませ。

子供達には私の死と云ふ事を知らせないやうにして頂き度いと思ひます。お葬式などには參列させないで下さい。小さい清い子供心に死とか御葬式とかいふ悲しみを殘させる事はほんとに可哀相で又悪い事で御座います。ほんとにどうぞ知らさないやうに、御葬式の日などには何處かへ遊びにやつて下さい。女中達にも皆んな云ひつけて決して私の死を知らせては下さいますな必ず〳〵。大きくなつて知る時が參りませう。それまでは病氣と云ふ事にして置いて下さい。

私のものは凡て賣拂つて下さいまし。そうしてそれで御兩親様に何か求めてあげて下さい私と云ふ者の記念に、どうせ大した程には御座いませんけれども。あの頂いたダイヤモンドの指環はあなたのネクタイピンに遊ばして私の形見として下さいませ。他に私の形見などどなたもほしいとは思召ませんでせうし、私も亦病氣が病氣故差上るのは好みません。

ほんとにこんな病氣で若死しやうとは思ひもかけない事で御座いました。あとにお殘りになるあなたと子供達の爲めに私は涙を惜しみません。

この頃の私の心は美しう御座います。こう云ふ時にこそエデンの園が見られるので御座いましやう。

召し給ふ星のまたゝく遠方に
いざわれ行かむ人と別れて

大正五年二月八日夜

松　蟲

終焉略記

八月一日。重く曇りて時々雨。

午後五時常の如く平塚に着く。前島氏同伴。病の漸く重れるは期したれども、至り見れば今日は呼吸著しく困難に陥りて、恰も醫師宮寺氏病床にあり。病患に對する注射の後、應急の注射二筒を施して余を屋外に招き、病勢險惡なるを警む。三兒を見えしむべきか否かを問ふ。見えしむるは或は却て危險なりと。余暗然たり。直ちに筆硯に走り狀を內外兩親に告ぐ。家親は輕井澤にあり。外父は鎌倉圓覺寺に籠れり。注射後惡熱を訴へ盜汗淋漓而も檢溫器は僅か三十七度三分を示すのみ。瘦腕を挈げ自ら團扇を乗つて煽ぐ。人助けんとすれば峻拒せり。苦覺惡睡、團扇屢々手より落つ。吸氣不足齁鮐の喘くが如し。見るに堪へず。前島氏鮮麗なる花束を遺し病者を見ずして歸り去る。

夜八時自らガラス管を取つて米汁、茶汁各一椀を啜り好味なりきと云ふ。病苦前の如し。而かも苦熱を訴ふるの外語斷えて他に及ばず。一事を專念するもの丶如し。

初更余獨り屋外を步す。唧蟲嘈々急雨の如し。跫音を聞き忽ち復た鳴かず。寂寥急に心を襲ふを覺ふ。天暗し、地亦暗し。獨り暗中に立ち暗中に色を識らんと努む。黄と紫とを得たり。

床側にあつて夜を守らんとすれば却けて曰く「君眠らずんばわが眠亦成り難し、願くば寢に就け」と。この語遂に最終の語となりぬ。余故らに床上に横はりたれども夢に入る能はず。眼を側めて見る。呼吸依然困難にして團扇或は動き或は落つ。「苦しきや」と問ふ能はず、且つ「少しく快きや」とだに問ふ能はず。短夜曉なる事遲し。

八月二日。曇。蒸暑。

天明惡寒を訴ふる事甚しく醫師を迎へん事を請ふ。即ち直ちに人を走す。頃刻ならずして宮寺氏來り、應急の注射をなし、再び余を屋外に麾て曰く危篤なりと。余の心、風死して空曇りたる海の如きを覺ふ。尋で看護婦長來り酸素吸入を施さんとす。莞爾として之れを迎へたり。是れその最後の微笑なり。

七時半頃余の手を把れるその手氷の如く冷えたり。看護婦に脈を探らしむ。既になしと云ふ。驚きて直ちに醫師を迎へしむ。今まで堅く閉ぢたりし眼を見開き、何物をか凝視するもの丶如し。瞬きせざるが故に試みに手を翳せども瞋がず。更らに耳に口してその名を呼ぶ。同じく應ぜず。既にしてその眼漸く閉ぢ、口微かに喘ぐ事三度、寂眠永へにして幽魂復た反らざりき。時に八時。死前一語を言はず又一事を問はず。余茫然たる事須臾。忽ち生時の語を想ひ起し遺稿を覔めて之れを獲たり。中に二月八日書する所の遺言狀あり。是れによつて向後死者の爲めになすべきの事全く定る。

内外兩親其他弟妹等急を聞き前後して集る。共に相憐れむの情屋に滿つ。輕井澤なる生馬に打電し二兒の爲めに暫く山を下らん事を求む。遺志によつて三兒を山上にとゞめ、母の死を知らざらしめんとするなり。

この夜入棺。しま子死顏に粉黛す。花を以てその周圍を飾れば宛ら假りに眠れるもの丶ごとし。人皆云ふ美相なりと。蒸暑甚し。戸障を徹して通夜す。夜氣水の如く流れ燭火頻りに搖らぐ。中夜獨り歩して遠く海濱に至り試に死者の名を低稱す。應ふるものあるがごとし。

八月三日。寒暑晴曇共に辨へず。

日中家人知己出入奔走。この夜棺を火葬場に送り火葬に附す。棺を釘する前奥村氏恰かも來り美花を贈らる。棺上に安んず。外父死顏を熟視し手もて之れを搖り、嘆じて曰く「遂に眠れるにはあらざるなり」と。夜暗く道幽かなり。歸途車上に顧れば荼毘の煙斜に擧り、火藥工場の灯影點々指呼の間にあるを見るのみ。

八月四日。朝雨。後晴る。

朝遺骨を火葬場に拾ふ。老父亦與る。雨急かに至る。昨日の形骸一壺の粉骨となり了んぬ。午下遺骨を抱て新橋停車場に着き家に入る。故人家を離れてより一年八閲月、顧望日夜なりしが、今にして死して再び歸れるなり。黒布もて蔽へる壇上に遺骨を安んじ、その下に蹲るや涙潸然として下りとゞめ難し。

八月七日。半晴半曇。

遺骨を青山祭場に移し弔花の堆き間に置く。故人花を愛しき。破顔微笑せんか。家母稍恙ありて式に列せず、會する者家父、外父母、弟妹及び故舊知己の士女約七十人。七時擧式。理學博士宮部金吾氏特に式を司り詩篇第二十三篇及び哥林多前書第十三章を誦讀し、訃を聞き病を侵して信州より歸れる牧師田島進氏故人の爲めに情理を盡して語り、余の請を甘諾し、我孫子より來れる柳かね子夫人ケルビイニのアヹ・マリイヤ及び讃美歌第七を獨唱す。式を行るものは皆故人に對して愛眷の情厚き人々なり。快心禁ぜず。

八時より一般會葬者靈前に告別の禮を執らる。燒香に代へたる睡蓮花卓上に堆きを得たり。

十時遺骨を先考の墓側に葬る。この日立秋に先んずる正に一日。家に歸れば家齋條として空しきが如し。

故人の爲めに藥石を薦め仁術を盡せしは札幌にありて石原博士、佐山の兩氏、鎌倉にありて武久氏、平塚にありて佐々木、古賀兩博士、永野、宮寺其他の諸氏。遺族の深く感銘する所なり。

弟妹故舊の故人に對する誠意に至つては謝するに辭なし。唯涙あるのみ。

「死よ、爾の刺安くにありや」

武　郎　記

昭和四年八月五日印刷
昭和四年八月十日發行

非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　植木製本所

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番